

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 30

平成25年度発掘調査報告

(第2分冊)

玉 縄 城 跡

上 杉 定 正 邸 跡

新 善 光 寺 跡

若宮大路周辺遺跡群

米 町 遺 跡

田楽辻子周辺遺跡

平成26年3月

鎌倉市教育委員会



米町遺跡（大町二丁目 2311 番 5）第 3 面出土 アワビ集積状況



田楽辻子周辺遺跡（浄明寺二丁目 569 番 10）2 面全景（南から）

ご あ い さ つ

近年、鎌倉の街では古い家屋や店舗の建て替えが相次いでいます。その中で、埋蔵文化財に影響のある工事も多くなっています。このため、個人専用住宅等の建設に際しては、昭和59年度から国・県の補助を受けて鎌倉市教育委員会が調査主体となって発掘調査の実施にあたってまいりました。

先人の遺産である文化財を守ることは、現在に生きる我々の責務であり、市内のおよそ6割の地域が埋蔵文化財包蔵地となっている本市の場合、特に市民の皆様のご理解とご協力なくしては、埋蔵文化財の保存や発掘調査の実施が困難であることは言うまでもありません。

本書は平成17、18、20、21、24年度に国・県の補助を受けて鎌倉市教育委員会が実施した個人専用住宅等の建築に伴う発掘調査の記録として13ヶ所の調査成果を掲載しています。

調査の実施にあたり埋蔵文化財に対する深い御理解をいただくとともに、調査の期間中、物心両面にわたり多大なご協力をいただきました事業者・工事関係者の皆様に心からお礼を申し上げます。

平成26年3月31日
鎌倉市教育委員会

例 言

- 1 本書は平成25年度の国庫補助事業埋蔵文化財緊急調査に係る発掘調査報告書である。
- 2 本書所収の調査地点は別図のとおりである。また掲載分冊については、第1分冊に掲載した表のとおりである。
- 3 現地調査及び出土資料の整理は、鎌倉市教育委員会文化財課が実施した。
- 4 出土遺物及び調査に関する図面及び写真等は、鎌倉市教育委員会文化財課が保管している。
- 5 各調査の成果は、それぞれの報告を参照されたい。

総目次

(第2分冊)

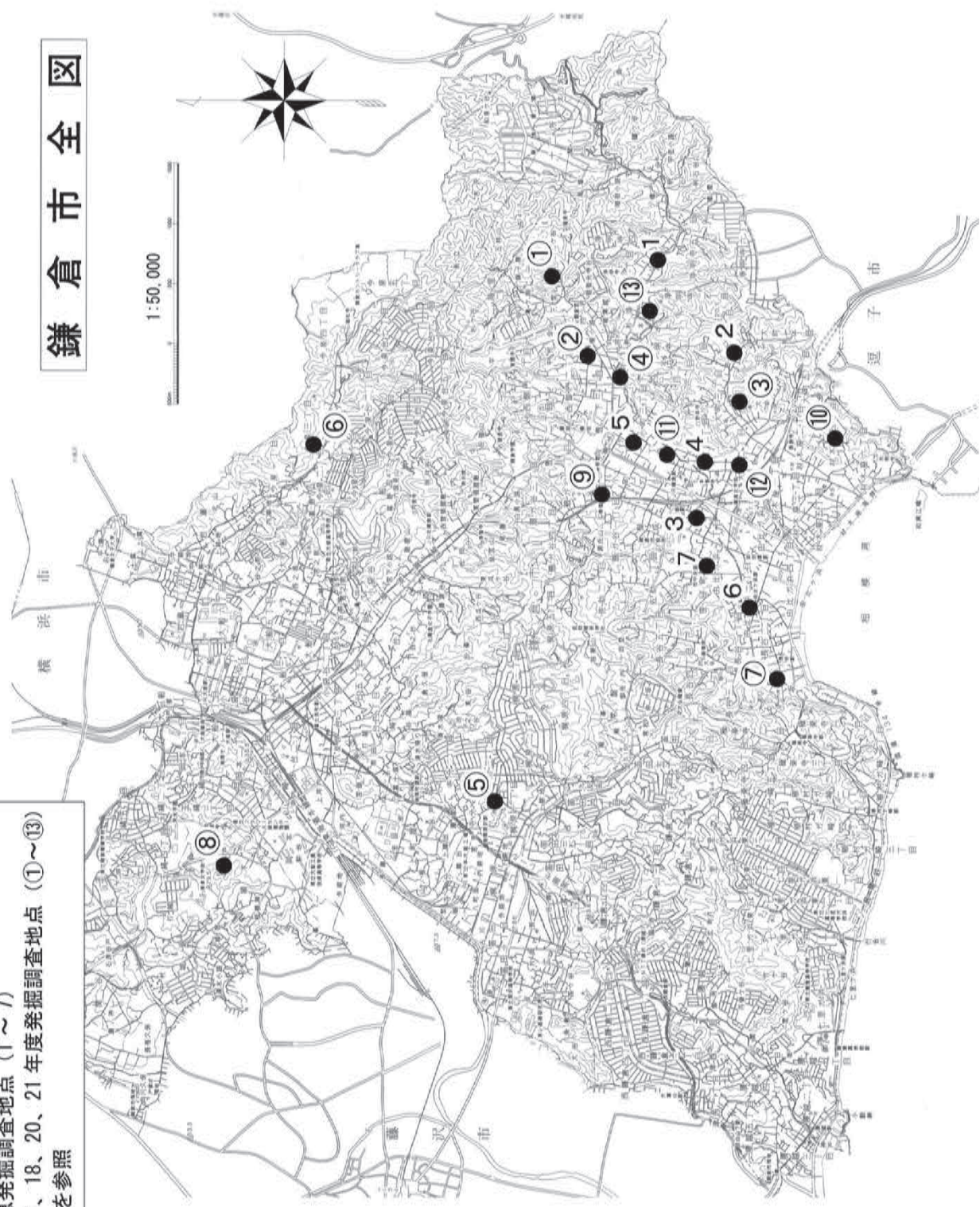
ごあいさつ	I
例言	II
目次	III
8 玉縄城跡 (No.63) 植木字植谷戸 192 番 4 外地点	
第一章 調査地点の歴史的環境	4
第二章 調査の経過と土層	11
第三章 検出された遺構と遺物	12
第四章 まとめ	12
9 上杉定正邸跡 (No.188) 扇ガ谷二丁目 195 番 2	
第一章 遺跡概観	25
第二章 調査の概要	31
第三章 検出遺構と出土遺物	39
第四章 まとめ	74
10 新善光寺跡 (No.279) 材木座四丁目 579 番 4 地点	
第一章 遺跡の概観	107
第二章 調査の概要	113
第三章 検出遺構と出土遺物	118
第四章 まとめ	130
11 若宮大路周辺遺跡群 (No.242) 小町二丁目 364 番 17	
第一章 遺跡の位置と歴史的環境	149
第二章 調査の方法と経過	152
第三章 基本土層	153
第四章 発見された遺構と遺物	154
第五章 調査成果のまとめ	172
12 米町遺跡 (No.245) 大町二丁目 2311 番 5	
第一章 遺跡の位置と歴史的環境	185
第二章 調査の方法と経過	187
第三章 基本土層	188
第四章 発見された遺構と遺物	192
第五章 調査成果のまとめ	213

13 田楽辻子周辺遺跡 (No.33) 浄明寺二丁目 569 番 10

第一章	調査地点の概観	267
第二章	調査の概要	276
第三章	検出された遺構と出土遺物	281
第四章	まとめ	339

平成25年度の緊急発掘調査地点(1～7)
 本書掲載の平成17、18、20、21年度発掘調査地点(①～⑬)
 ※遺跡名は一覧表を参照

鎌倉市全図



玉縄城跡 (No. 63)

植木字植谷戸 192 番 4 外地点

例 言

1. 本報は玉縄城跡、植木字植谷戸192番4外(206番・5、207番1他)地点における個人住宅建設に伴う埋蔵文化財の緊急発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が、平成20年(2008)4月14日～同年5月16日にかけて実施したもので調査面積は76㎡である。
3. 調査の体制は以下の通りである。

発掘調査

調査担当者 福田 誠 鈴木弘太(鎌倉市教育委員会文化財課嘱託)

調査員 本城 裕 梶岡溪音 鍛冶屋勝二 松原康子

作業員 浅香文保 佐野吉男 田口康雄 渡辺輝彦(社団法人鎌倉市シルバー人材センター)

資料整理作業

調査担当者 福田 誠(鎌倉市教育委員会文化財課嘱託)

調査員 石元道子 森谷十実(鎌倉市文化財課臨時的任用職員)

4. 現地での遺構写真撮影及び資料整理時の遺物写真撮影は福田が行った。
5. 出土品、及び記録図面・写真等の資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。
6. 本遺跡の略号は「TNJ0801」である。

目次

本文目次

第一章 調査地点の歴史的環境	4
第二章 調査の経過と土層	11
第1節 調査の経過	
第2節 土層	
第三章 検出された遺構と遺物	12
第1節 I・II区、第1面の遺構と遺物	
第2節 II区、第2面の遺構と遺物	
第四章 まとめ	12
遺物観察表	

挿図目次

図1 調査地点位置図	4	図5 全測図と遺構のエレベーション	10
図2 調査地点と周辺の遺跡	5	図6 出土遺物	14
図3 調査区の位置とグリッド設定	8	図7 落ち込みの位置と七曲坂	15
図4 I区・II区の調査区壁の土層	9		

図版目次

図版1 出土遺物1	16	図版3 遺構1	18
図版2 出土遺物2	17	図版4 遺構2	19

鎌倉市全図

1 : 50,000



図1 調査地点位置図

第一章 調査地点の歴史的環境

位置と歴史的環境

調査地は鎌倉市植木字植谷戸207番1他2筆に所在する。JR大船駅西方に位置する山崎跨線橋から北に延びる県道阿久和・鎌倉線、龍宝寺隧道の200 m先、玉縄城七曲坂の出口に位置している。

周囲は玉縄城本丸から東に延びる2筋の尾根が作る幅約50 m、奥行き200 m程の小さな谷戸の地形で、玉縄城太鼓櫓脇から東側に向かってくる七曲坂が中央に位置する。調査地はこの谷戸の出口部、玉縄城中心部から見て南東方向に位置している。

遺跡名にある玉縄城の城郭範囲は、字城廻・字植木の範囲と関谷・打越谷・植木谷・相模陣に囲まれた丘陵になる。本丸は城山と呼ばれる丘陵中央部方形の土塁で囲まれた部分と考えられ、現在清泉女学院校地となっている。本丸を囲む土塁の東側、標高80 mの一段高くなっているところを諏訪壇と呼び、かつて城の鎮守諏訪神社があった。

「御厩曲輪」「太鼓やぐら」「えんしょうぐら」「ふくろもち曲輪」「円光寺曲輪」「くいちがい曲輪」「お花畑」「花見堂曲輪」「出丸」「まりけ場曲輪」等の名が残されている。

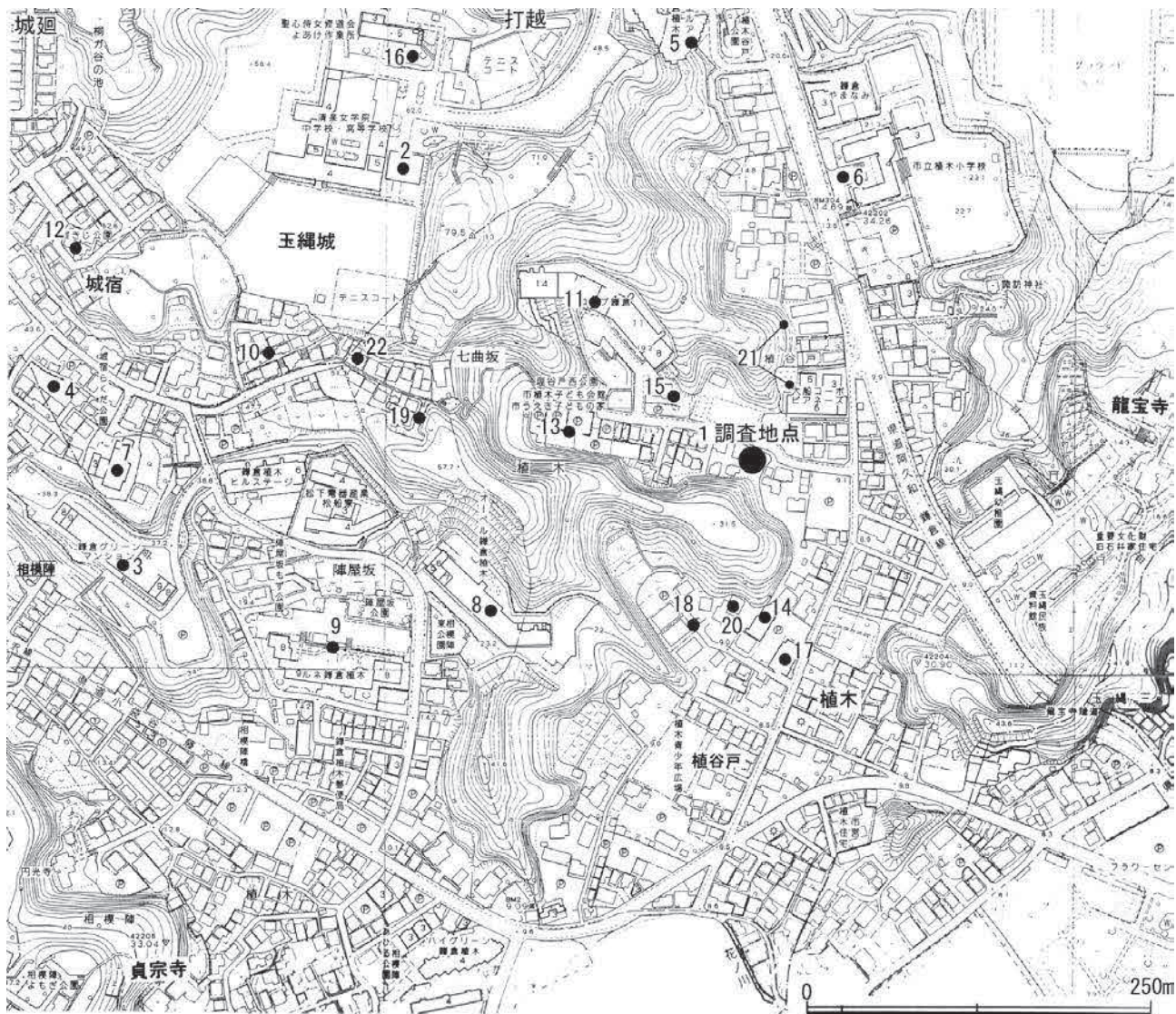


図2 調査地点と周囲の遺跡

遺跡名	地番	発掘年	報告書名	
1	玉縄跡(No.69)	鎌倉市植木字植谷戸192番4外他2筆	2008年4月	本報「玉縄城跡」(2014年3月)
2	〃	鎌倉市城郷字打越200番1	1979年7月	未報告(清泉女学院図書館用地)
3	〃	鎌倉市植木字相模陣436番1	1978年10月	未報告・トレンチ調査 植木ノイツ(グリーンマンション)用地
4	〃	鎌倉市城郷字宿屋467番	1980年6月	『鎌倉考古』No.2(1980年7月)、No.4(1980年11月)
5	〃	鎌倉市城郷字打越185番	1次1980年3月・2次1981年3月	『鎌倉考古学研究所調査報告第3集』「相模玉縄城-城郷字打越185番地点の発掘調査」(1980年5月)
7	〃	鎌倉市植木字植谷戸1番	1983年11月	神奈川県埋蔵文化財調査報告28(1984年3月)
9	〃	鎌倉市城郷字宿屋340番1	1987年5月	神奈川県埋蔵文化財調査報告31-未掲載分(1989年3月)
10	〃	鎌倉市植木字相模陣374番外	1987年7月	神奈川県埋蔵文化財調査報告31(1989年3月)『玉縄城発掘調査報告書』植木字相模陣374番地地点(1984年3月)
11	〃	鎌倉市植木字相模陣370番	1989年8月	神奈川県埋蔵文化財調査報告39(1991年3月)
12	〃	鎌倉市城郷字打越328番1外	1988年9月	神奈川県埋蔵文化財調査報告43(2000年12月)『東国歴史考古学研究所紀要第1集』(1988年2月)
18	〃	鎌倉市植木字植谷戸6番1外	1988年3月	神奈川県埋蔵文化財調査報告43(2000年12月)『東国歴史考古学研究所紀要第3号』(1989年)
19	〃	鎌倉市城郷字宿屋357番2・15	1989年7月	神奈川県埋蔵文化財調査報告43(2000年12月)『玉縄城発掘調査報告書』(2000年8月)
21	〃	鎌倉市植木字植谷戸213番外	2000年2月	神奈川県埋蔵文化財調査報告43(2000年12月)
22	〃	鎌倉市植木173番1他4筆	2000年5月	神奈川県埋蔵文化財調査報告44(2002年1月)
24	〃	鎌倉市植木字植谷戸70番1外	2001年5月	神奈川県埋蔵文化財調査報告45(2003年3月)『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書20-1』「玉縄城跡」(2004年3月)
25	〃	鎌倉市城郷字打越200番	2001年6月	神奈川県埋蔵文化財調査報告45(2003年3月)
26	〃	鎌倉市植木字植谷戸78番2外5筆	2001年8月	神奈川県埋蔵文化財調査報告45(2003年3月)
28	〃	鎌倉市植木字植谷戸193番の一部	2001年9月	神奈川県埋蔵文化財調査報告45(2003年3月)『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書20-1』「玉縄城跡」(2004年3月)
29	〃	鎌倉市植木字相模陣425番3外	2002年7月	神奈川県埋蔵文化財調査報告46(2004年3月)『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書21-2』「玉縄城跡」(2005年3月)
32	〃	鎌倉市植木字植谷戸188番	2005年2月	神奈川県埋蔵文化財調査報告51(2007年3月)『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書23』「玉縄城跡」(2013年3月)
33	〃	鎌倉市植木43番1外	2007年5月	神奈川県埋蔵文化財調査報告54(2009年2月)『かながわ考古学財団調査報告230』「植谷戸やくら群」(2009年10月)
34	〃	鎌倉市植木字植谷戸48番6	2007年9月	神奈川県埋蔵文化財調査報告54(2009年2月)

図2 調査地点と周辺の遺跡

本丸は城山と呼ばれる方形の土塁(約120m四方)で囲まれた部分。現在清泉女学院校地となっている。

小田原城の北条宗家は初代北条長氏(北条早雲) - 2代氏綱 - 3代氏康 - 4代氏政 - 5代氏直と存続するが、天正18年(1590年)4月、豊臣秀吉により小田原城が包囲され、7月5日、氏直は城を出て将兵の助命を乞い降伏した。4代氏政と弟氏照は7月11日に切腹。13日に秀吉が小田原城に入り、北条氏の旧領関東を徳川家康に与えた。5代氏直は家康の娘婿(督姫)だった為、助命され北条宗家は河内狭山藩主として幕末まで続くことになる。

墓所は、寛文12年(1672)に北条氏規の子孫で狭山藩北条家5代当主氏治によって、北条早雲の命日に当たる8月15日に建立された供養塔が箱根町金湯山早雲寺の境内にある。

小田原北条宗家に対して玉縄城主は玉縄北条家と呼ばれた。

・初代城主、氏時(? ~ 1531. 1542)

早雲の子。氏綱の弟。「玉縄殿」とも、没年は享禄4年(1531)「二伝寺位牌」と天文11年(1542)「北条系図」の二つある。開基の寺は二伝寺・円光寺・日蓮宗久成寺くじょうじがある。

・2代、為昌ためまさ(1520 ~ 1542)

氏綱の子。「快元僧都記」に頻繁に登場。鶴岡八幡宮再興に係る。城主の時期は享禄4年(1531) ~ 天文11年(1542)

・3代、綱成(1515 ~ 87)

為昌の養子。黄絹に「八幡」と印した背旗を用いていたことから「地黄八幡」と呼ばれる。開基の寺は大長寺・龍宝寺・天獄院・慈眼寺。城主の時期は天文11年(1542)頃 ~ 元龜3年(1572)

・4代、氏繁(1536 ~ 78)

綱成の子。永禄4年(1561)上杉景虎に攻められるが、不在の城主綱成に代わりこれを防戦した。城主の時期は元龜3年(1572) ~ 元龜6年(1578)

・5代、氏舜うじきよ(15?? ~ 15??)

氏繁の子。氏勝の兄。生没年不詳。城主の時期は元龜6年(1578) ~ 天正8年(1580)頃か。

・6代、氏勝(1559 ~ 1611) 氏繁の子

天正8年(1580) ~ 10年(1582)頃に家督を継承か。最後の城主。

天正18年(1590)4月21日、開城。この後、助命され家康に従い下総岩富1万石の藩主となる。城主の時期は天正8・10年頃 ~ 天正18年(1590)4月21日。氏重(氏勝の養子)は2代岩富藩主の時に下野富田に転封。大坂冬の陣では東軍に属し、岡崎城守備。伏見城番、後に遠江久野、下総関宿、駿河田中を経て掛川3万石を領する。男子がいいため無嗣断絶。氏重の義兄・北条繁広(氏勝の実弟でその養子)の家系が旗本として存続した。

玉縄城の変遷

永正9年(1512)10月北条早雲(伊勢新九郎長氏)が、三浦義同よしあつ(道寸)への備えのため築城。(寛永水野家譜)

永正15年(1518)三浦氏への援軍、江戸城の上杉修理大夫朝興ともおきと戦い打ち破る。(北条五代記)

大永6年(1526)12月15日氏時は、安房の里見実堯さねたかの鎌倉乱入を戸部川で防戦。(玉縄首塚碑銘)

この戦いに参戦した大船の甘粕氏・渡内の福原氏の子孫が文政8年(1825)に建立。戦死者35人の首を葬り首塚を築いた。

天文10年(1541)氏康、家督を継ぐ。翌年、建長寺・円覚寺・東慶寺らの所領安堵・公事免除。

天文17年(1548)12月氏康、荏柄社再興のため関所を寄進し関銭をこれに充てる。

永禄4年(1561)3月上杉景虎に小田原城と共に攻められるが防戦。(異本小田原記)

永禄12年(1569)武田信玄の小田原攻めの時に玉縄城出城大谷氏の砦陥落。(小田原記他)

天正17年(1589)10月豊臣秀吉の小田原攻め。北条氏勝は山中城の援軍に赴くが、山中城の陥落に伴い玉縄城に戻り籠城。(関八州古戦録)

天正18年(1590)4月21日城主北条氏勝、徳川家康の大將本多忠勝に降伏、開城。(関八州古戦録)この後、水野織部正忠守が預かり守備。(寛永水野家譜)

近世の玉縄

元和5年(1619)廃城。(円光寺伝)この後、松平正綱が玉縄領を預かり、城南の地に陣屋を建てる。(新編相模国風土記)鎌倉郡の所領は、渡内村・関谷村・岡本村・植木村・城廻村・山谷新田で、いずれも玉縄に近接していた。

慶安元年(1648)6月正綱の没後、正綱の子正信が継ぐ。

元禄3年(1690)4月正信隠居、正久が継ぐ。

元禄11年(1698)3月正久、三河吉良へ領地替え、更に同16年に上総大多喜へ領地替えとなり、玉縄を去る。これに伴い玉縄藩は廃され天領となる。

正徳元年(1711)植木村と城廻村の一部が新井白石の知行200石となる。

享保11年(1726)龍宝寺境内の石窟には白石の石碑がある。室鳩巢の撰文(相模風土記)だが現在、碑文は風化して読めない。

寛政4年(1792)老中松平定信は、相模・伊豆等の海浜警備に伴い玉縄城の再興を計画するが実現していない。

周辺の神社仏閣と文化財

首塚 里見氏の玉縄城攻撃に際し、城を守るために戦死した、渡内福原氏、大船甘粕氏の一族35名の首を埋葬した塚。毎年8/19に塚供養と川施餓鬼が行われ灯籠流しが柏尾川(戸部川)で行われている。

龍宝寺 北条綱成創建。氏勝が天正3年(1575)に現在の地に移す。綱成、氏繁、氏勝の位牌を安置。背後の山腹に墓所。

旧石井家住宅(龍宝寺境内) 元禄期に建てられた農家を移築したもので国の重要文化財に指定されている。石井家は後北条氏に属した地侍。後北条氏滅亡後帰農し、関谷村の名主を代々務めた。

玉縄民俗資料館(龍宝寺境内) 2011年1月、「玉縄ふるさと館」としてリニューアルオープン。旧石井家住宅に隣接し、旧石井家や周辺の旧家に残されていた家具や農具を集め展示。玉縄城に関する遺物や資料、縄文時代の遺物を展示。

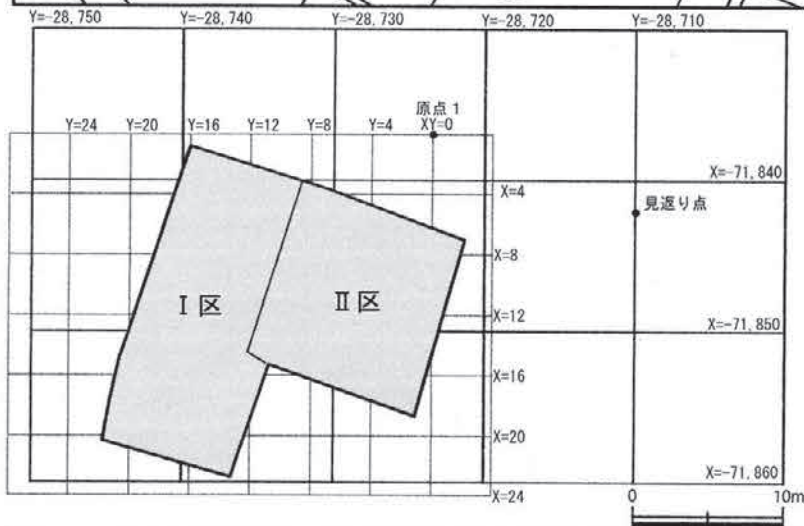
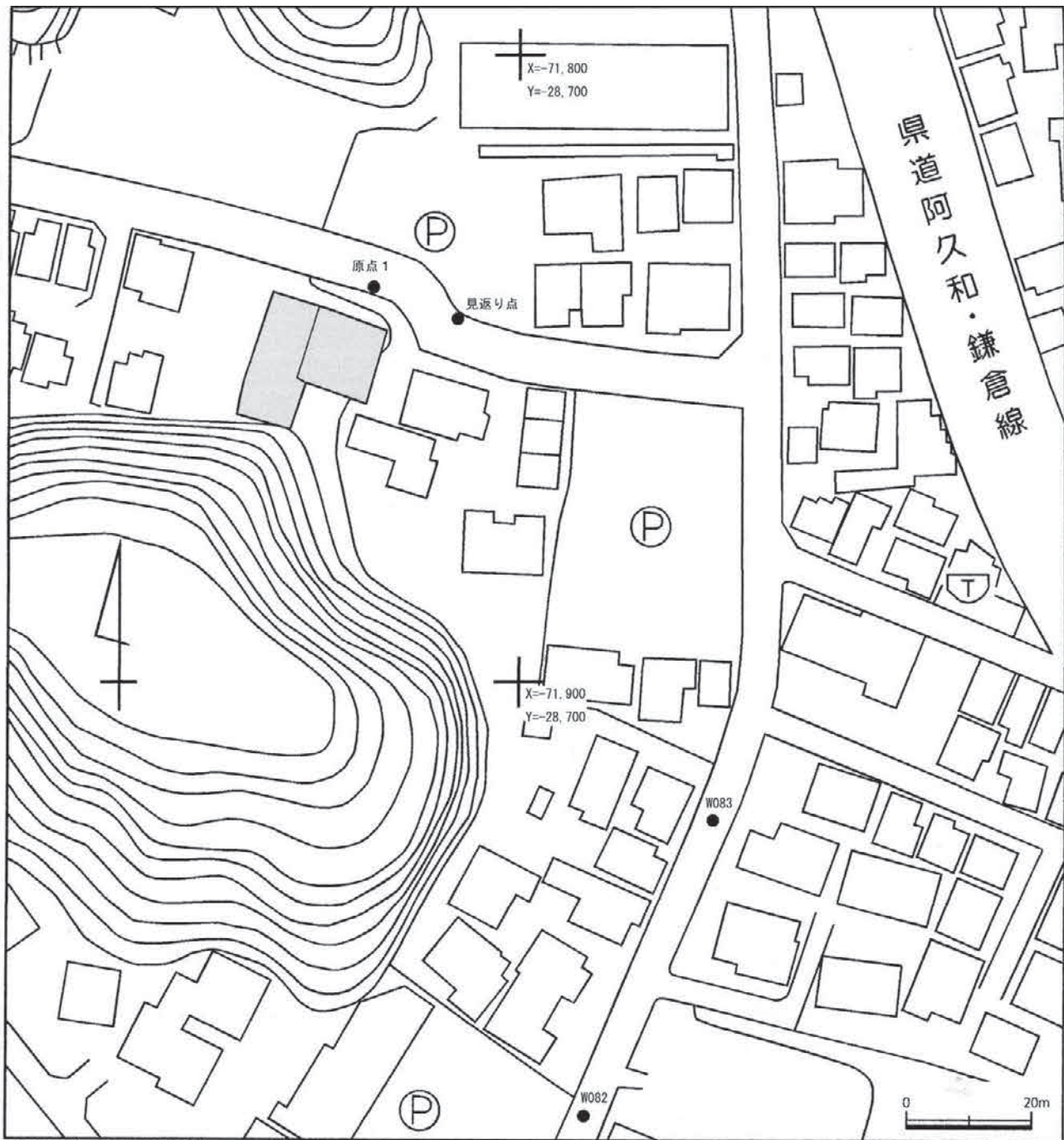
諏訪神社 かつては本丸諏訪壇にあった城の鎮守。廃城後移されている。

七曲坂 玉縄城東方の通路。植谷戸の一角。入口部分に長屋門(小坂邸)。坂を登り切った右手が「太鼓櫓」左手が「えんしょうぐら」えんしょうとは火薬の焰硝がなまったとも云われている。

相模陣(陣屋坂) 江戸になってから通された道。

久成寺坂(ふわん坂) 周囲に平場が見られる。

久成寺 足利11代将軍義澄に仕えた梅田秀長が永正17年(1520)屋敷を寄進。境内には長尾城跡(戸塚区長尾台)から移された長尾景弘、定景、景茂の供養塔がある。定景は実朝を暗殺した公暁を討ち、宝治合戦(1247)では、定景の子景茂が三浦泰村に付き命運を共にした。長尾景虎(上杉謙信)の祖。



四級基準点W082
 $X = -71969.0737$ $Y = -28689.2504$

四級基準点W083
 $X = -71922.0081$ $Y = -28668.7473$

原点1
 $X = -71836.9636$ $Y = -28723.4716$
 $L = 10.011\text{m}$

見返り点
 $X = -71842.0784$ $Y = -28709.9674$
 $L = 9.757\text{m}$

レベル
 三級基準点BM304 $L = 14.688\text{m}$

世界測地系[エリア9]

図3 調査区の位置とグリッド設定

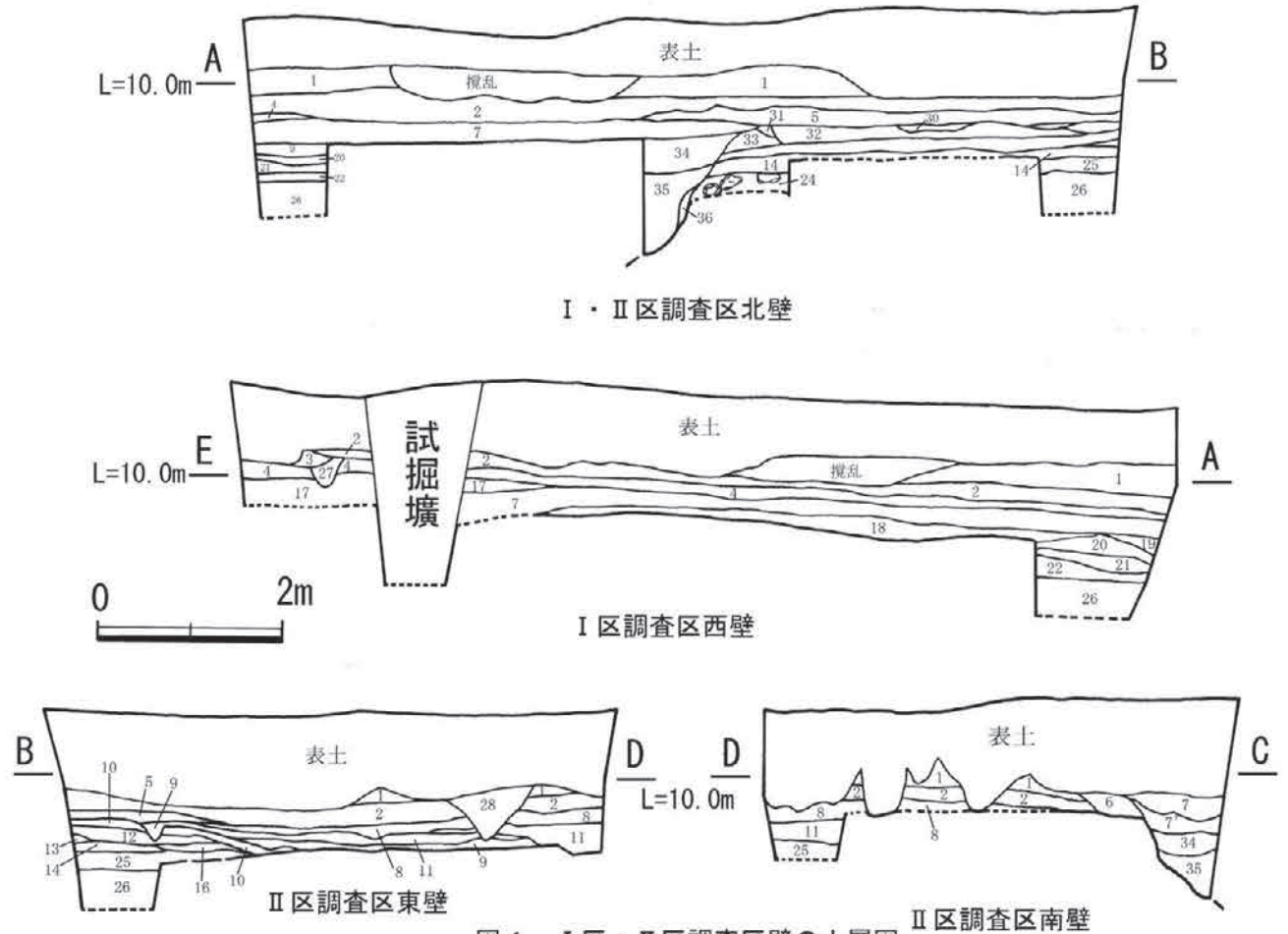


図4 I区・II区調査区壁の土層図

- | | |
|----------------------------|-----------------------------|
| 1. 茶灰色砂質土層 | 18. 暗青灰色弱粘質土層 |
| 2. 茶灰色砂質土層 1より砂が多い | 19. 青灰色粘質土層 |
| 3. 淡茶灰色砂質土層 1~3cm大の土丹を多く含む | 20. 青灰色砂質土層 |
| 4. 茶灰色弱粘質土層 | 21. 暗灰色弱粘質土層 |
| 5. 淡茶褐色粘質土層 土丹粒・砂を含む | 22. 青灰色粗砂土層 |
| 6. 淡茶灰色粘質土層 | 23. 淡茶灰色弱粘質土層 腐植土が多く混じる |
| 7. 茶褐色粘質土層 土丹粒を含む | 24. 黒灰色粘質土層 人頭大の土丹を多く含む |
| 7'. 茶褐色粘質土層 | 25. 暗青灰色粘質土層 土丹粒・茶褐色粘質土含む |
| 8. 黄褐色砂質土層 1cm大の土丹粒多く含む | 26. 黒灰色土層 中世地山 |
| 9. 茶灰色粘質土層 | 27. 茶灰色弱粘質土 pit1覆土 |
| 10. 暗灰色粘質土層 | 28. 茶灰色弱粘質土 pit2覆土 |
| 11. 青灰色粘質土層 | 29. 灰褐色砂質土 溝2の覆土 |
| 12. 明茶灰色粘質土層 | 30. 茶褐色粘質土層 粒の粗い土丹粒を含む溝3覆土 |
| 13. 茶褐色粘質土層 炭化物・木片含む | 31. 茶褐色粘質土層 溝3覆土 |
| 14. 暗灰色粘質土層 | 32. 黒灰色~暗茶灰色粘質土層 溝3覆土 |
| 15. 灰褐色粘質土層 | 34. 青灰色弱粘質土層 落ち込み埋め戻しの精良土 |
| 16. 明茶灰色粘質土層 | 35. 暗茶灰色弱粘質土層 落ち込み内堆積土 |
| 17. 暗青灰色粘質土層 少し炭が混じる | 36. 暗茶灰色弱粘質土層 落ち込み内堆積土 土丹含む |

図4 I区・II区の調査区壁の土層

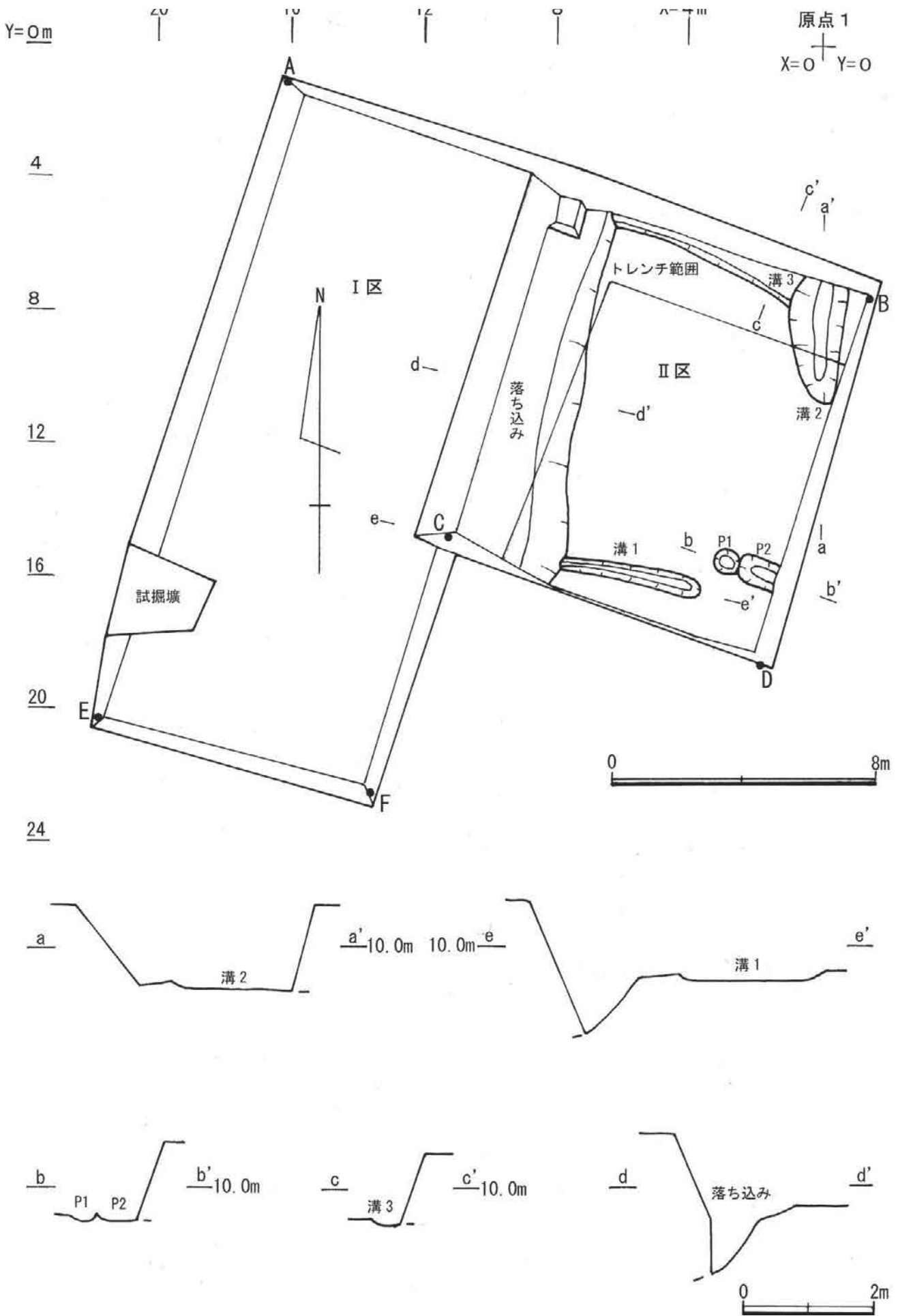


図5 全測図と遺構のエレベーション

第二章 調査の経過と土層

第1節 調査の経過

調査に先行して、鎌倉市教育委員会によって行われた試掘調査の結果を基に、本調査は専用住宅建設によって掘削、削平が行われる敷地内の建物建築部分の76㎡に対して行われた。

掘り上げた土は場内処理するため、調査地をⅠ区(40㎡)・Ⅱ区(36㎡)に分けて調査を行った。

表土層は、遺構埋没深度まで重機を使用して掘り下げることとし、掘削作業には調査員が立ち会い、重機が掘り下げる深さと掘削時に出土する遺物に対処した。

測量は鎌倉市4級基準点(日本測地系)W082(X=-71969.0081 Y=-28689.2504)、W083(X=-71922.0081 Y=28668.7473)を用いた後、世界測地系座標変換Web版(TKY2JGD)を用いて世界測地系に変換し用いた。水準は、鎌倉市3級基準点B M 304(L=14.688 m)から移動した仮B M (10.011 m)を使用した。

以下、調査日誌の抜粋。

4月14日 調査開始。Ⅰ区表土掘削立ち会い。

15日 機材搬入。

17日 調査区内にトレンチを設定、第1面を検出確認。

23日 測量原点及びレベル移動。

第1面の精査を行い、遺構が検出されなかったため地形測量を行う。

25日 第1面の全景写真撮影。

Ⅰ区北壁・西壁の土層断面作図と写真撮影。

30日 Ⅰ区埋め戻し。Ⅱ区表土掘削立ち会い。

5月1日 Ⅱ区調査開始。調査区壁を精査。

7日 降雨のために壁が崩れる。復旧、排水作業。

第1面精査。検出遺構の掘り下げと平面図作成。

8日 Ⅱ区東壁と北壁沿いにトレンチを設定、下層の精査を行う。

Ⅱ区北西隅で落ち込みを検出する。

9日 検出した落ち込みの掘り下げ。

Ⅱ区北壁・東壁のセクション作図・写真撮影。

12日 落ち込みを完掘。全景写真撮影。

落ち込みの平面図作図。南壁のセクション作図。

台風に備え養生をする。

15日 台風の風雨のためⅡ区西壁が崩落する。

落ち込み内の崩落土の除去。平面図作図。

16日 撤収準備。

20日 機材搬出。調査を終了する。

第2節 土層

現地表から遺構面までの間(約100～120cm)はすべて近代の造成による盛土。市道に接している北側と南側部分は道路面とほぼ同じ深さで遺構面(第1面)を検出した。

ベースとなる基盤層は黒灰色土層。この中世の基盤層から遺物は出土していない。

調査により明らかにされた第1・2面は、土丹粒混じりの茶灰色砂質土・茶灰色弱粘質土・茶褐色粘質土である。

Ⅱ区2面から掘り込まれた落ち込み内の土は、柔らかい暗茶灰色弱粘質土から成り、青灰色弱粘質土で埋め戻されていた。

第三章 検出された遺構と遺物

第1節 I・Ⅱ区、第1面の遺構と遺物（図5・図6）

検出した遺構と遺物

遺構は確認されなかった。検出した第1面は茶灰色砂質土からなり、北壁と西壁のセクションで確認すると、1面から掘り込まれた攪乱が確認された。

I・Ⅱ区1面から、瀬戸鉄釉天目茶碗、捏鉢、常滑甕、砥石（図6-1～11、17、18）が出土している。

第2節 Ⅱ区、第2面の遺構と遺物（図5、図6）

検出した遺構と遺物

a. 柱穴1・2（図6-12）

第2面では2穴の柱穴を検出した。検出した柱穴の深さが比較的浅く、規格性が見いだせない。柱穴2から灰釉瀬戸折腰皿（古瀬戸後期第Ⅲ期、15世紀第2四半期）が出土。

b. 溝1・2・3

溝1は、Ⅱ区の南壁に沿って東西方向に検出した長さ220cm、幅30cm程の遺構である。

溝2は、Ⅱ区の東壁に沿って南北方向に検出した長さ200cm、幅80cm程の遺構である。溝3を切っている。

溝3は、Ⅱ区の北壁に沿って東西方向に検出した長さ600cm。幅約20～40cmの溝で落ち込みと溝2に接している。溝1とは約10m離れているがほぼ並行している。関わりがあるか詳細は不明。

溝1・3から、小片のため図示していないが、轆轤成形のかわらけ大がそれぞれ1点ずつ出土している。

c. 落ち込み

Ⅱ区の西壁に沿って南北に延びる遺構である。Ⅰ区に跨がっていると考えられるが、Ⅰ区では基礎工事の掘削深度を越えるため掘り下げていない。検出できた幅120～140cm、最深部は地表から250cm、南北に長さ約12m分を検出した。Ⅱ区の西辺とほぼ平行に掘り込まれ、谷入口平坦部と谷内を区画した溝や濠とも考えられる。Ⅱ区の西辺とほぼ平行に掘り込まれ、谷入口平坦部と谷内を区画した溝とも考えられるが、委細不明。また落ち込み内の堆積土は、柔らかい暗茶灰色弱粘質土から成ることから、緩やかな水流もしくは停滞した水溜まり（濠や池）といったものが考えられる。現況から水を流した時にどちらに流れるかは不明である。

轆轤成形のかわらけ（図6-13～15）と、漆器碗（図6-16）が出土している。

第四章 まとめ

発掘調査地は、玉縄城から見て南東方向、城山と呼ばれる方形の土塁（約120m四方）に囲まれた玉縄城本丸大手から、東側に下る七曲坂の下、東西方向に延びる谷戸の出口に位置している。東側正面には玉縄城主3代綱成創建、6代氏勝が天正3年（1575）に現在の地に移した龍宝寺がある。

遺物観察表及び出土遺物点数

観察表(図6・図版1、2)

遺構名		No.	遺物名	口径	底径	器高	備考
1区 1面	掘削中	1	瀬戸 天目茶碗	-	(4.4)	-	内外面鉄釉 体部外面下部は篋削り
		2	瀬戸 天目茶碗	-	-	-	内外面鉄釉
		3	瀬戸 碗	-	(4.2)	-	灰白色の釉外面下部と高台は篋削り
		4	瀬戸 瓶子か	-	-	-	外面灰釉
		5	瀬戸・美濃 搦鉢	-	-	-	口縁部小片
		6	瀬戸 搦鉢	-	-	-	口縁部小片
		7	常滑 甕	-	-	-	体部片
		8	常滑 甕	-	-	-	体部片
		9	肥前 皿	-	-	-	白色釉に鉄絵
		10	土製品	-	-	-	土器質 小片のため器形不明
		11	砥石	残長 8.1	残幅 3.3	厚さ 1.3	中砥 暗灰色
2区 2面	P 2	12	瀬戸 灰釉小皿	(12.0)	-	-	灰釉ツケガケ 瀬戸折腰皿 (古瀬戸後期第Ⅲ期、15世紀第2四半期)
	落ち込み 北西隅深掘り	13	かわらけ 小	-	(3.8)	-	轆轤成形
	おち込み	14	かわらけ 大	-	-	-	轆轤成形 体部片
	おち込み 北西隅深掘り	15	かわらけ 大	-	(8.0)	-	轆轤成形 底部片
	おち込み 北西隅深掘り	16	漆器 椀	-	(5.4)	-	外面黒色漆 内面赤色漆 高台 変形著しい
2区 1面	掘削中	17	瀬戸・美濃 搦鉢	-	(15.8)	-	鉄釉 轆轤輪積み成形 底部糸切痕 3.9cm幅に9本の卸目
		18	肥前 染付碗	-	-	-	高台部から体部にかけて染付の条線

出土遺物点数

出土地	遺物No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	合計
種別	種類											欠番			
かわらけ	ロクロ大	9							1	1			16	2	29
	ロクロ小		2												2
	白かわらけ												1	1	2
国産陶器	瀬戸	4		1				1					1		7
	常滑	4					2								6
	擦り常滑	1													1
	その他	2													2
土製品	その他	1					2	1			1			1	6
瓦質製品	瓦					1	1								2
石製品	砥石	1													1
	硯					1									1
	その他	1												2	3
漆製品	椀						1								1
木製品	その他												1		1
自然遺物	人骨										1				1
近世遺物	肥前	3			2	1	3								9
合計		26	2	1	2	3	9	2	1	1	2	0	19	6	74

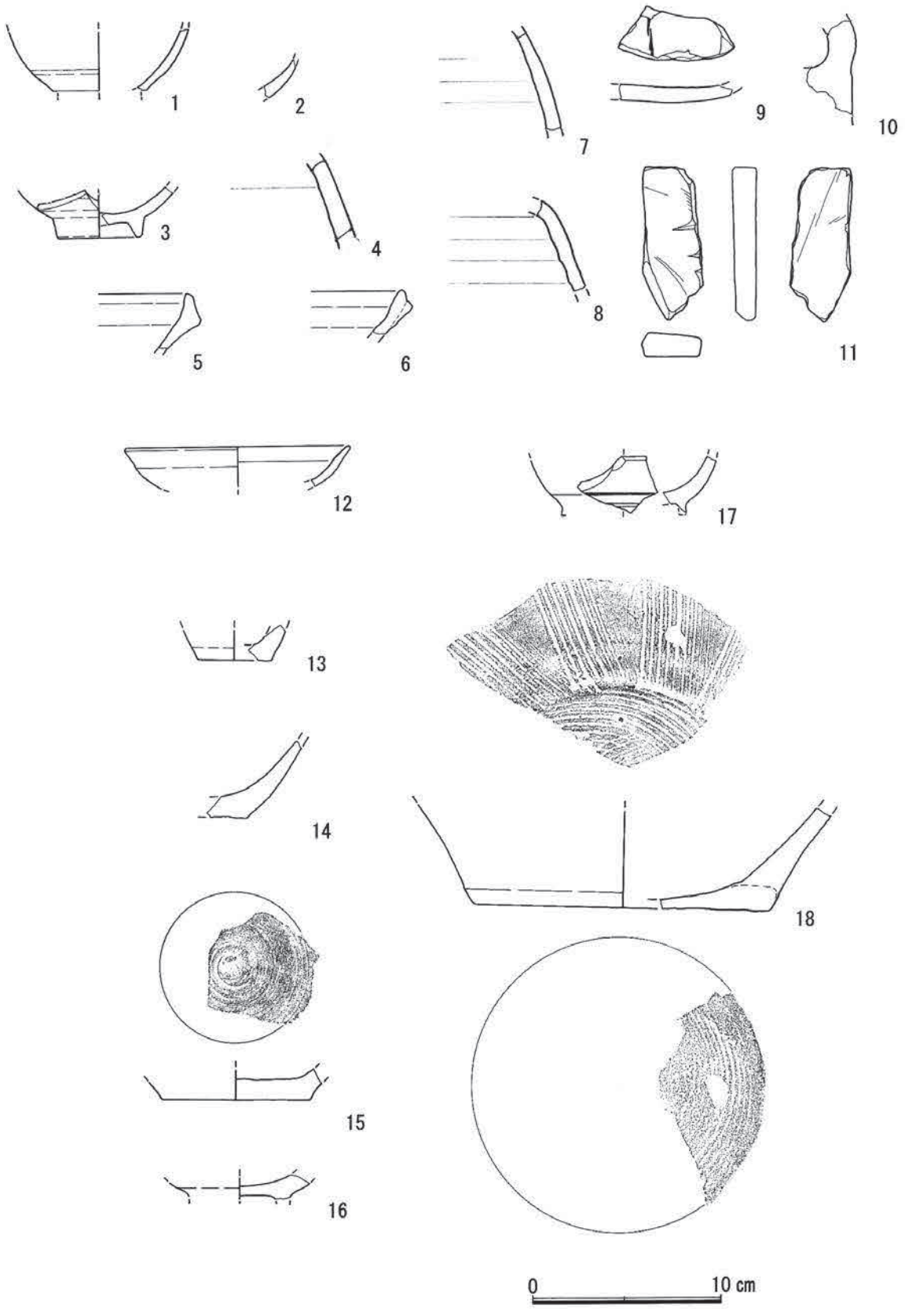


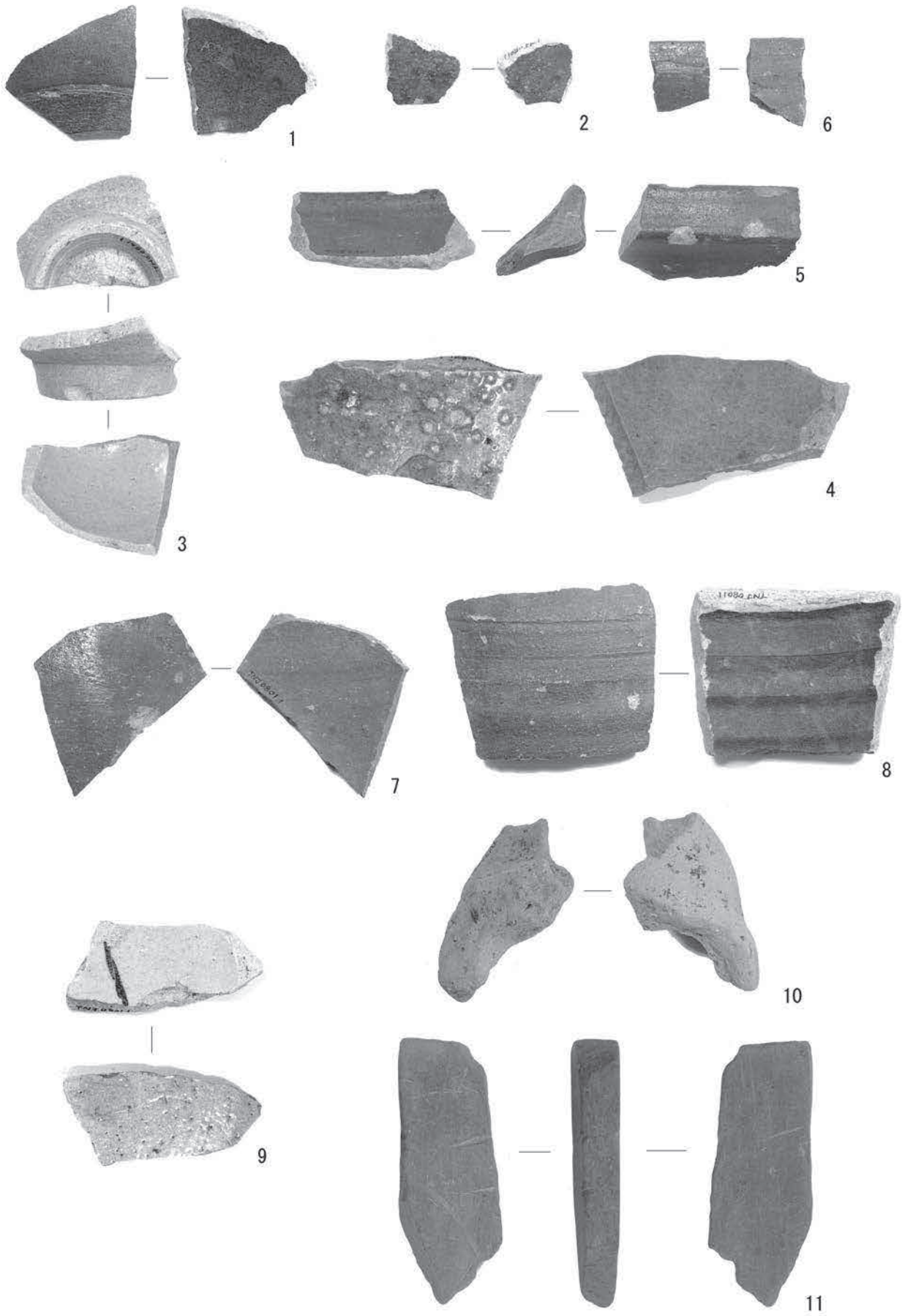
图6 出土遺物

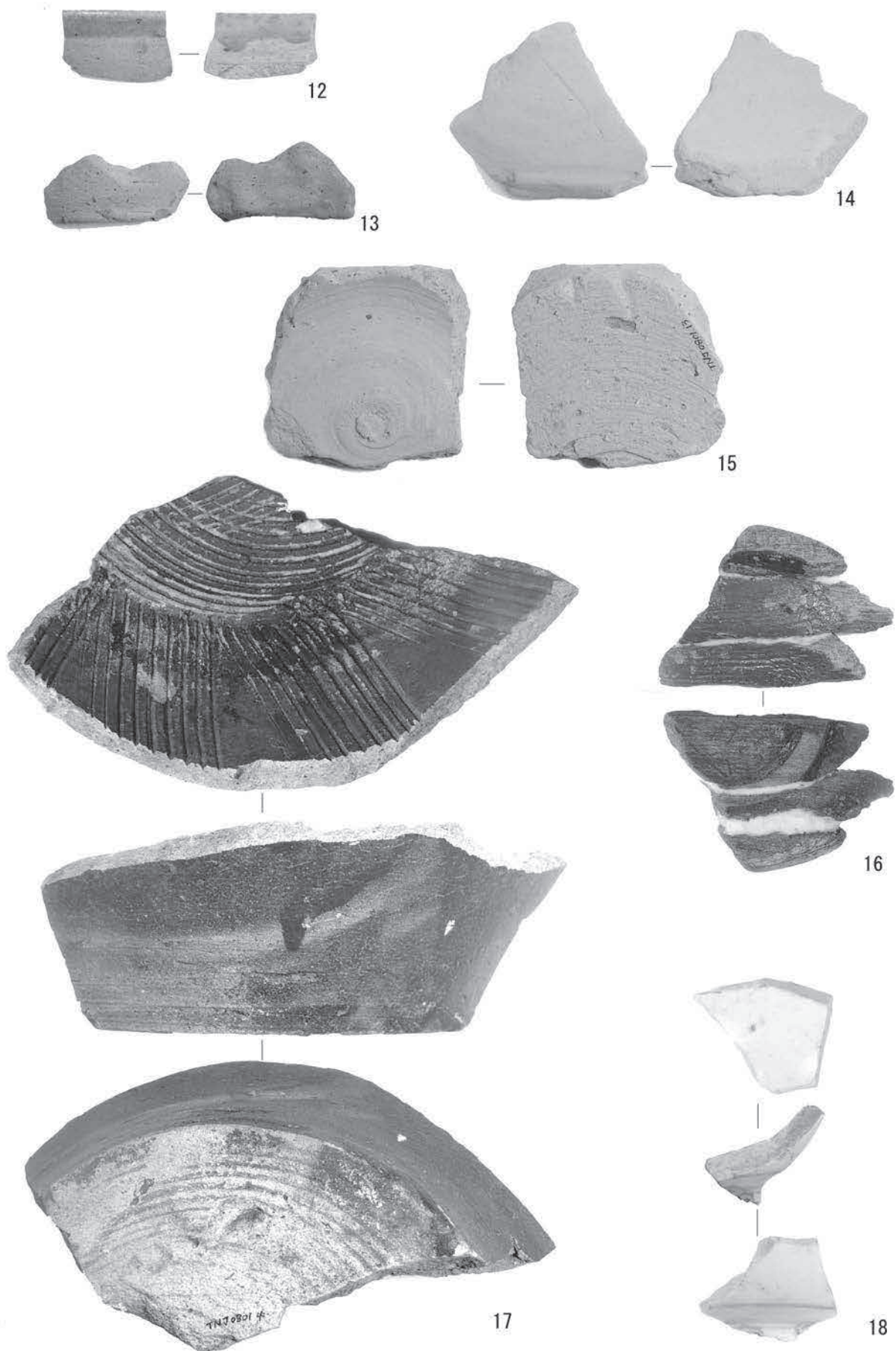
今回の調査で注目すべき遺構は、2区で確認した落ち込みである。確認した長さは東西12m、幅120～140cm以上、遺構面からの深さ120cm以上の推定断面V字形の遺構である。1区が掘削深度の制限があるために調査することが出来なかったが、形状は薬研状の溝か濠になる遺構である。

調査地点は七曲坂に至る谷戸の入口、北と南に尾根が張り出している。確認した落ち込みは、ちょうどそれぞれの尾根の先端部を結ぶように一直線に延びていると思われる。これが七曲坂を経て城の大手に至る道筋の防御に関わる濠等の遺構ならば、玉縄城防御に重要な位置を占めていたと考えられる。七曲殿とも称された北条氏繁の室が住んだとも云われ(『風土記稿』)、『市史考古編』219頁には防御の推論が提示され興味深い。掘削の時期は不明だが、埋土(土層34)に精良土を用い、土層中から遺物が出土しないことは、短期間に埋め戻された結果と見るができる。落ち込みが埋め立てられた時期は、元和5年(1619)、廃城(円光寺伝)により玉縄城が機能を失った頃と考えられる。



図7 落ち込みの位置と七曲坂





図版3



1. 調査地から七曲坂を望む（東から）



2. I区西壁（東から）



3. I区全景（東から）



4. I区北西隅トレンチ（東から）



5. 谷入口北側の尾根先端部（南から）



6. I区1面全景（南から）



1. II区2面落ち込み北壁セクション
(南から)



5. II区2面南壁(北から)



2. II区2面落ち込み(南から)



6. II区2面全景(北から)



3. II区2面北壁と落ち込みトレンチ(南から)



4. II区2面全景(南から)



7. II区2面落ち込み南壁セクション
(北から)

上杉定正邸跡 (No.188)

扇ガ谷二丁目 195 番 2

例 言

1. 本報は、「上杉定正邸跡(No.188)」内、扇ガ谷二丁目195番2における、埋蔵文化財発掘調査の報告である。
2. 発掘調査は、国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。調査期間は平成21(2009)年2月13日～同年4月10日にかけて行い、調査面積は24㎡を対象とした。
3. 発掘調査体制は以下の通りである。
調査担当者：山口正紀(鎌倉市文化財課臨時的任用職員)
調 査 員：伊丹まどか・小野夏菜・須佐仁和・榎岡ケイト・本城 裕(鎌倉市文化財課臨時的任用職員)
作 業 員：赤坂 進・牛島道夫・佐野吉男・平尾 幹(社団法人鎌倉市シルバー人材センター)
4. 現地での写真撮影は山口・須佐が行った。
5. 本報作成にあたっての資料整理参加者及び分担は以下の通りである。
整理参加者：山口・岡田慶子・平井里永子・須佐直子(鎌倉市文化財課臨時的任用職員)、
松吉大樹(特定非営利活動法人鎌倉考古学研究所)
遺物洗浄・注記：埋蔵文化財発掘調査支援協同組合
遺物接合・分類：山口・岡田・平井 遺物実測：岡田・須佐・山口 遺物図版作成：岡田・山口
遺構図版・観察表・写真図版作成・遺物写真撮影：山口
原稿執筆：第1章―第2節 松吉大樹 第1章―第1・3節、第2章～第4章 山口 編集：山口
6. 本報告に係わる出土品及び記録図面・写真等の資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。
7. 本調査に係る出土品の注記は、遺跡名を「US0822」と略記した。
8. 本報告書の遺構・遺物挿図、表の指示は次の通りである。
挿図縮尺 各図に縮尺を表記している。
遺構図版 水糸高は海拔・標高値を示す。
遺物図版 釉薬の範囲は・ - ・ - ・で示す。また、遺物にみられる油煤痕は黒く塗りつぶし表現している。
遺物観察表 ()は復元数値、[]は遺存数値を示す。
写真図版 出土遺物は基本約1/2、大きさにより1/1、1/3に縮小している。
9. 本報記載の「泥岩」は凝灰質泥岩、「伊豆石」は安山岩を示す。
10. 整理段階において、遺物の分類及び編年は以下の論文を参考にした。
瀬戸：藤澤良祐 2008『中世瀬戸窯の研究』高志書院
常滑：愛知県 2012『愛知県史別編窯業3 中世・近世常滑系』
火鉢：河野眞知郎 1993「中世鎌倉火鉢考―東国との関連において―」
『考古論叢 神奈河 第2集』神奈川考古学会
11. 現地調査から本報作成に至るまで、以下の諸氏、諸機関に御教示・御協力を賜った。記して感謝の意を表します。(順不同、敬称略)
大三輪龍哉・古田土俊一(浄光明寺)、宇都洋平(藤沢市教育委員会)、高橋慎一郎(東京大学史料編纂所)、長澤保嵩・田畑衣里((株)齊藤建設)、太田美知子、岡田優子、押木弘巳、汐見一夫、原廣志、馬淵和雄(鎌倉市教育委員会)、宮田 眞・滝澤晶子((株)博通)、鍋島昌代((財)かながわ考古学財団)、(社)鎌倉市シルバー人材センター

目次

本文目次

第一章	遺跡概観	25
第1節	遺跡の位置と地形	
第2節	歴史的環境	
第3節	周辺遺跡の調査成果	
第二章	調査の概要	31
第1節	調査の経緯と経過	
第2節	調査における測量方法	
第3節	堆積土層	
第三章	検出遺構と出土遺物	39
第1節	1面の遺構と遺物	
第2節	2面の遺構と遺物	
第3節	3面の遺構と遺物	
第4節	4 a・b面の遺構と遺物	
第5節	5面の遺構と遺物	
第6節	6面の遺構と遺物	
第7節	7面の遺構と遺物	
第8節	8面の遺構と遺物	
第9節	8面下トレンチの遺物	
第四章	まとめ	74

挿図目次

図1 調査地点と周辺遺跡	26	図24 5面各遺構	55
図2 調査区と建築範囲	31	図25 5面各遺構出土遺物	56
図3 国土座標位置図	32	図26 5面遺構外出土遺物	57
図4 国土座標とグリッド配置図	33	図27 6面全測図	58
図5 調査区土層堆積図	35	図28 6面方形土坑1	59
図6 1面全測図	39	図29 6面土坑・柱穴	60
図7 試掘坑出土遺物	40	図30 6面各遺構外出土遺物	60
図8 1面溝2・遺構外出土遺物	40	図31 6面遺構外出土遺物	61
図9 2面全測図	41	図32 7面全測図	63
図10 2面道路状遺構、溝1・2	42	図33 7面溝1～3	63
図11 3面全測図	43	図34 7面P3・5	64
図12 3面溝1	44	図35 7面溝1出土遺物	65
図13 3面土坑・柱穴	44	図36 7面各遺構出土遺物	66
図14 3面各遺構・遺構外出土遺物	46	図37 7面木器層中出土遺物(1)	66
図15 4a面全測図	47	図38 7面木器層中出土遺物(2)	67
図16 4a面土坑	48	図39 8面全測図	69
図17 4b面全測図	50	図40 8面各遺構	69
図18 4b面溝1	50	図41 8面各遺構出土遺物	70
図19 4b面土坑2	51	図42 8面遺構外出土遺物	70
図20 4a・b面各遺構出土遺物	52	図43 8面下トレンチ	71
図21 4a・b面遺構外出土遺物	53	図44 8面下トレンチ出土遺物(1)	72
図22 5面全測図	54	図45 8面下トレンチ出土遺物(2)	73
図23 5面方形土坑1・2・4	55		

表 目 次

表 1 周辺の遺跡名称	30	表 10 遺物観察表(1)	77
表 2 1面遺構計測表	40	表 11 遺物観察表(2)	78
表 3 3面遺構計測表	45	表 12 遺物観察表(3)	79
表 4 4a面遺構計測表	49	表 13 遺物観察表(4)	80
表 5 4b面遺構計測表	51	表 14 遺物観察表(5)	81
表 6 5面遺構計測表	57	表 15 遺物観察表(6)	82
表 7 6面遺構計測表	62	表 16 遺物観察表(7)	83
表 8 7面遺構計測表	68	表 17 遺物観察表(8)	84
表 9 8面遺構計測表	71	表 18 層位別出土遺物一覧表	85

図 版 目 次

図版 1	86	6.7面全景東側(南から)	
1. 調査地点近景(英勝寺方面から)		図版 6	91
2. 調査地点敷地裏(西から)		1. 7面全景(南東から)	
3. 1面全景(東から)		2. 7面北側全景(東から)	
4. 1面全景(西から)		3. 7面溝1(南から)	
5. 1面溝1南北土層堆積状況(東から)		4. 7面溝1杭列(東から)	
6. 1面溝2南北土層堆積状況(東から)		5. 7面溝2・3(東から)	
7. 道路状遺構の西方面(東から)		6. 7面溝3(西から)	
図版 2	87	図版 7	92
1. 2面全景(東から)		1. 7面溝2(西から)	
2. 2面道路状遺構(西から)		2. 7面溝2杭列(南から)	
3. 3面全景(東から)		3. 7面P5出土かわらけ(東から)	
4. 3面全景(西から)		4. 8面全景(東から)	
5. 3面溝1(東から)		5. 8面全景(西から)	
6. 3面溝1土層堆積状況(東から)		6. 8面西部遺構検出状況(南から)	
7. 3面土坑5内出土墨書木札(南から)		図版 8	93
図版 3	88	1. 8面下トレンチ(北から)	
1. 4a面全景(東から)		2. 調査区東壁土層堆積状況(西から)	
2. 4a面全景(西から)		3. 調査区南壁土層堆積状況(北から)	
3. 4b面全景(東から)		4. 調査区西壁土層堆積状況(東から)	
4. 4b面全景(西から)		図版 9	94
5. 4b面溝1(東から)		試掘坑、1・3面出土遺物	
6. 4b面溝1(西から)		図版 10	95
図版 4	89	4a・b面出土遺物	
1. 5面全景(東から)		図版 11	96
2. 5面方形土坑1・2(東から)		4b・5面出土遺物	
3. 5面方形土坑3(東から)		図版 12	97
4. 5面南側部分(東から)		5・6面出土遺物	
5. 5面囲炉裏1(北から)		図版 13	98
6. 5面囲炉裏1(西から)		6・7面出土遺物	
7. 5面囲炉裏1東側壁板(西から)		図版 14	99
8. 5面囲炉裏1内出土 火葬骨を含むかわらけ(北から)		7面出土遺物	
図版 5	90	図版 15	100
1. 6面全景(東から)		7・8面出土遺物	
2. 6面全景(西から)		図版 16	101
3. 6面方形土坑1(北から)		8面・8面下トレンチ出土遺物	
4. 6面方形土坑1内出土 犬頭骨		図版 17	102
5. 7面全景南側(東から)		8面下トレンチ出土遺物・自然遺物	

第一章 遺跡概観

第1節 遺跡の位置と地形

本遺跡名称である「上杉定正邸跡」は、神奈川県遺跡台帳鎌倉市No.188に登録されている。寿福寺辺りから北側を扇ガ谷といい、現在の大字名となっている。谷戸を形成する丘陵の間には小谷戸が樹枝状に入り組んでおり、泉ヶ谷、藤ヶ谷、御前ヶ谷、智岸寺ヶ谷、勝縁寺ヶ谷、法泉寺ヶ谷、清涼寺ヶ谷、会下ヶ谷、梅ヶ谷、山王堂ヶ谷などの名称が残っている。扇ガ谷入口は標高13m前後であり、岩船地藏付近は標高14mと比高差はない低地となっており、周囲の丘陵頂部は標高60m前後となっている。現在までに各支谷は切岸等によってその拡がりをみせる。また、中央を縦断するようにJR横須賀線が通っており、線路沿いに源氏山を源流とする扇川が流れている。扇ガ谷には武蔵大路という道が通っていて西の仮粧坂と東に亀ヶ谷坂という切通しと繋がっている。寿福寺前を通る今小路と八幡宮方面から東西に延びる窟小路にも繋がっており、鎌倉との往来を要する道であったことは違いない。本調査地点は、JR鎌倉駅より北に600mほどの位置、扇ガ谷入口付近、扇ガ谷二丁目195番2に所在する。

第2節 歴史的環境

本調査地点は、JR横須賀線寿福寺踏切の東側（護国寺側）にあり、眼前には扇川が流れ、「扇谷」と呼称される地域に位置している。その地名は、『新編相模国風土記稿』によれば飯盛山の麓にある「扇ノ井」に由来するとあるが、『吾妻鏡』には「左典既之亀谷御旧跡」などとあるように、「亀谷」が総称で「扇谷」の名はみられない（註1）。また『新編鎌倉志』では当地の位置を「亀谷坂を越て、南の方、西北は海蔵寺、東南は華光院、上杉定政の旧宅、英勝寺の地を扇谷と云、亀谷の内なり」とある。『吾妻鏡』には見られないが、元徳元年(1329)以前に書かれたものと考えられている金沢貞顕の書状には「去夜亥刻計ニ、扇谷の右馬権助家時門前より火いてき候て、亀谷の少路へやけ出候て、土左入道宿所やけ候て、浄光明寺西頬までやけて候」とあることから、鎌倉期には「扇谷」という地名が称されていたことが分かっている（註2）。また、この記事に記載されている「右馬権助家時」などの人名が『浄光明寺敷地絵図』にも同様に載っていることから、少なくとも鎌倉末期から南北朝期にかけての「扇谷」は浄光明寺周辺の地域を指すことが考えられよう（註3）。他に『太平記』巻十「鎌倉兵火事付長崎父子武勇事」に「天狗堂ト扇ガ谷ニ軍有ト覚テ」とあり、新田義貞が鎌倉に攻め込んだ際に当地で合戦があったことや、同じく巻十「亀寿殿令落信濃事付左近大夫偽落奥州事」には「相模守殿ノ妾二位殿ノ御局ノ扇ノ谷ニ御坐ケル処へ参リタリケレバ」と見え、北条高時の妾である二位殿の居所が当地にあり、諏訪盛高が高時の子亀寿を抱いて信濃へ落ちていったことが記されていることから、北条得宗家にとっても縁のある地域であった（註4）。近世の編纂物であるが『南山巡狩録』には、文和元年(1352)閏二月、新田義貞の子義宗・義興兄弟らが上野に挙兵し鎌倉に進行した際、これに与同した石塔義慶・三浦高通らが、「鎌倉の扇ヶ谷」に寄合い、相談した話を伝えている例がある（註5）。都市鎌倉の中からその外に繋がる武蔵大路・今小路が地域内を通っていることから、北側の境界に位置する重要な地域であったとの意識が強かったのかもしれない。

本遺跡名称である「上杉定正邸跡」は、本調査地点近くにある大正十一年(1922)三月に鎌倉青年団によって建てられた『扇谷上杉管領屋敷跡』の碑文があり、これらは恐らく先述した『新編鎌倉志』の記事に基づいていると思われる。上杉氏は藤原氏勸修寺の流れで、重房が丹波国何鹿郡上杉荘（現京都府綾部市上杉）を領したことから上杉氏を名乗ると伝える。重房は建長四年(1252)四月に宗尊親王に従って



図1 調査地点と周辺遺跡

鎌倉に下向。重房の娘は足利頼氏に、重房の孫娘(清子)は足利貞氏にそれぞれ嫁ぐなど源姓足利氏との姻戚関係を結ぶことによって、南北朝から室町を通じ繁栄していくようになった(註6)。足利氏による京都・鎌倉の二頭体制下において、関東管領として鎌倉公方を扶け執政していくようになると、鎌倉公方と京都將軍の抗争に、関東管領職を巡る上杉氏一門の争いが絡み、上杉氏一門はそれぞれ、山内・犬懸・宅間・疋鼻・小山田など名乗り分家していく。扇谷上杉氏もその一つである(註7)。扇谷上杉氏の成立は、上杉持朝の三十三回忌に際して作られた法語である「広感院殿旭嶺大禪定門三十三回忌陞座」(註8)に、上杉顕定について「其家号扇谷」とあり、また『上杉系図』(註9)でも「扇谷」と注記されていることから、扇谷上杉を号するようになるのは、上杉顕定からと考えられる。上杉顕定は、永和六年(1380)四月に30歳で死去しているが、逆算すると観応二年の生まれと推定できる。応安三年(1370)に「扇谷建徳寺」を建立しているが詳細については不明。『鎌倉大草紙』には「上杉弾正少弼氏定扇谷より出向て爰を先途と防戦ける」とあり、上杉禅秀の乱に際して、顕定の子である上杉氏定が当地から出陣し化粧坂で戦っていることから、氏定の頃には屋敷は存在していたのであろう(註10)。氏定は海蔵寺の開基としても伝えられ、永享の乱では氏定の子である上杉持朝の臣、海老名上野介が「扇谷海蔵寺」で自害している(註11)。上杉定正以前からの「扇谷」と上杉氏の関係が伺われよう。上杉定正は家臣の太田道灌らの尽力によって江戸城・河越城などを増改築するなど、扇谷上杉の家名を高めるが、すでに鎌倉公方も古河へ移っていたので、基本的な拠点は相模国糟屋(現神奈川県伊勢原市)にあったようである。しかし『梅花無尽蔵』(註12)によると、文明十八年(1486)十月廿三日に禅僧万里集九が上杉定正に招かれ江戸城から鎌倉に入り「雪下・扇谷」に来ていることから、まだ鎌倉にも屋敷地は存在していたと推測される。

「扇谷」地域は他に、「権現堂福禅寺」などの寺院も存在していたようであるが、詳細については不明である(註13)。東京都目黒区にある円融寺木造仁王立像には「仏所相州鎌倉扇谷住権大僧都大蔵法眼作之訖」という永禄二年七月付の墨書銘があり、仏像製作の工房が存在していた(註14)。『快元僧都記』天文五年(1536)三月一日条には「神宮寺扇谷内匠助造之」と見え、また同八年(1539)十月条にも「従去月廿八日、扇谷今小路番匠主計助、荒神之宮修補之」とあることから、「番匠」などの建築工の存在も確認できる(註15)。鎌倉極楽寺蔵の木造観尊座像には、明暦二年(1656)六月廿四日の日付が書かれた修理銘札が納入されており、「仏師扇谷住摩尼多 靱負法橋守延 奉修覆者也」とある(註16)。また鎌倉円応寺にある、木造初江王座像にも木札墨書が納入されているが、こちらは「天和三年(1683)四月日再興」として「仏工鎌倉扇谷住後藤勘弥」の名が見えることから、近世に至っても「扇谷」では仏師が活躍していた(註17)。

「扇谷」の名は鎌倉期以降、史料上に多く散見されるが、地域定義の広さなどにより、その具体的な場所を比定することがなかなか出来ないのが現状である。ゆえに本調査地点のような発掘調査に伴う情報が、大いに重要となってくることは言うまでもない。

【註】

(註1) 『吾妻鏡』治承四年十月七日条。

(註2) 「(元徳元年ヵ)十一月十一日付 崇顕金沢貞顕書状」(「金沢文庫文書」『鎌倉遺文』30775号文書)。

(註3) 大三輪龍彦編『浄光明寺敷地絵図の研究』(新人物往来社、2005)。

(註4) 後藤丹治・釜田喜三郎校注『太平記一』(日本古典文学大系34、岩波書店、1960)。

(註5) 『改定史籍集覧』(通記類 第4、臨川書店、1983)。

(註6) 上杉氏についての研究は、渡辺世祐『関東中心 足利時代之研究』(改定版、新人物往来社、1995。初版雄山閣、

1926)など枚挙に暇がない。

(註7) 扇谷上杉氏についての研究は枚挙に暇がないが、湯山学『関東上杉氏の研究』(湯山学中世史論集1、岩田書院、2009)。

黒田基樹編『扇谷上杉氏』(シリーズ・中世関東武士の研究 第五巻、戎光祥出版、2012)に詳しい。

(註8) 「玉隠和尚語録」(『北区史 資料編古代中世2』三編五二号)。

(註9) 『続群書類従』(第六輯下 系図部)。

(註10) 『改定史籍集覧』(通記類 第5、臨川書店、1983)。

(註11) 「永享記」(『続群書類従』第二十輯上)。

(註12) 玉村竹二編『五山文学新集』(第六巻、東京大学出版会、1972)

(註13) 「武州文書」(『神奈川県史資料編3下』6435号文書)。

(註14) 「円融寺」『東京都の地名』(日本歴史地名大系13、平凡社、2002)。

(註15) 『群書類従』(第二十五輯 雑部)。

(註16) 「木造叡尊座像願文」(『鎌倉遺文』51833号文書)。

(註17) 「木造初江王座像願文」(『鎌倉遺文』51489号文書)。

第3節 周辺遺跡の調査成果

本遺跡名称にもある上杉定正邸跡(No.188)内の調査は、本地点が初めてとなる。多くの小谷戸を含む扇ガ谷内での発掘調査はあまり実施されていないが、現在までに極めて良好な遺跡が確認されていることが明らかになっている。扇ガ谷内には多くの廃寺や歴史が資料として残っており、それらを由来とする遺跡名称が付けられている。図1-No.101華光院跡やぐらは本調査地点の裏手にあり、平成11年にやぐら調査が実施されている。「三界」と墨書されたかわらけなどが出土しており、14世紀末～15世紀前半頃と報告されている。扇ガ谷内の平地部ではNo.194武蔵大路周辺遺跡やNo.182法泉寺跡などの発掘調査が見られる。

No.194武蔵大路周辺遺跡-1地点では、14世紀代を通して二時期の遺構群が確認され、礎石建物、溝、池状遺構など北と南側を分けて寺院と町屋の生活域が発見されている。2地点では13世紀後半以降に建てられた基壇建物が検出されており、寺院関連施設もしくは屋敷地の一画に建てられた要素があり、近世面までの土地利用の変化がみられる。3地点では、13世紀後半～15世紀前半に亘る5期の遺構群が確認され、基壇、建物跡、塀、道路状遺構、溝など様々な遺構が検出され、2地点と同様に寺院の境内或いはその周縁に展開する町屋的な生活域のような成果が得られている。5地点では現在の扇川に近接する位置で、中世後半期の切石による扇川の護岸もしくは屋敷の石垣と道路跡、中世前半期の板壁建物等が発見されている。やや丘陵上に立地するNo.182法泉寺跡-1地点では13世紀半ば～14世紀後半の5期に亘る遺構面が確認され、谷戸開発による地業による流れが指摘されている。西隣の2地点では切石を積んだ石積み遺構が現在の道路と並行して発見されている。さらに、西に奥深く入ったNo.183清涼寺跡-1地点でも4時期に亘る造り替えが確認されている。切石を6段積みした溝や道路が発見され、それらの廃絶後の様相も含め、13世紀後半～15世紀代の遺物が出土している。No.299海蔵寺旧境内遺跡-1地点では、14世紀中頃～後半に比定される泥岩を用いた石積遺構が検出されており、寺院跡と指摘されている。このように、扇ガ谷内では切石を使った遺構が多くみられ、現在の扇川に関係しつつ、主に寺院関連の遺跡が残る土地ということが明らかになってきている。

<調査地点一覧概要>

図1には神奈川県遺跡台帳に登録されている遺跡名称を番号のみ表記した。対応する名称は以下に表記する。調査地点番号は、その遺跡内における調査年月の古い順から番号を付し、そのため図の範囲外にある地点番号が欠如している場合や同一番号が重複している。また、発掘調査を対象としているため、確認(試掘)調査を含めていないことを前提とした。

華光院跡やぐら群 (No.101)

1：2000年12月調査。汐見一夫・田畑衣理 2003「華光院跡やぐら群 (No.101) 扇ガ谷二丁目191番地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書19 平成14年度発掘調査報告』鎌倉市教育委員会

法泉寺跡 (No.182)

1：2004年7月調査。伊丹まどか 2008「法泉寺跡 (No.182) 扇ガ谷四丁目518番12地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書24 平成19年度発掘調査報告』鎌倉市教育委員会

2：2010年3月調査。未報告一扇ガ谷四丁目518番8

清涼寺跡 (No.183)

1：2005年7月調査。伊丹まどか 2012「清涼寺跡 (No.183) 扇ヶ谷4-556-4外」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書28 平成23年度発掘調査報告(第2分冊)』鎌倉市教育委員会

2：2012年11月調査。未報告一扇ガ谷四丁目570番1

亀谷山王堂跡 (No.185)

1：2000年12月調査。伊丹まどか・石元道子・川又隆央 2002「亀谷山王堂跡 (No.185) 扇ガ谷四丁目327番5地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書18 平成13年度発掘調査報告(第2分冊)』鎌倉市教育委員会

智岸寺跡 (No.186)

1：1988年3月調査。未報告一扇ガ谷四丁目380番1

多宝寺跡 (No.187)

1：1970年3月調査。松尾宣方 1976『多宝律寺遺跡発掘調査報告書』鎌倉市教育委員会 - 扇ガ谷二丁目268番3地点

2：1974年3月調査。松尾宣方 1983「16. 多宝律寺跡」『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報I』鎌倉市教育委員会 - 扇ガ谷二丁目268番3地点

3：1977年3月調査。三上次男ほか 1977『多宝律寺遺跡第7次発掘調査報告書』多宝律寺遺跡発掘調査団・鎌倉市教育委員会 - 扇ガ谷二丁目268番3地点

4：1989年8月調査。菊川英政 1998『多宝寺跡一扇ヶ谷2丁目250番1・4地点一』多宝寺跡発掘調査団

5：1991年7月調査。菊川英政 1993「5. 多宝寺跡 (No.187) 扇ヶ谷二丁目250番6外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書9 平成4年度発掘調査報告(第3分冊)』鎌倉市教育委員会

6：2001年1月調査。汐見一夫 2003「多宝寺跡 (No.187) 扇ヶ谷二丁目238番7地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書19 平成14年度発掘調査報告』鎌倉市教育委員会

武蔵大路周辺遺跡 (No.194)

1：1989年1月調査。大河内勉 2000「一扇ヶ谷二丁目382番1地点一」『武蔵大路周辺遺跡発掘調査報告書』武蔵大路周辺遺跡発掘調査団

2：2000年3月調査。宗臺秀明・宗臺富貴子 2001「武蔵大路周辺遺跡 (No.194) 扇ガ谷三丁目397地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書17 平成12年度発掘調査報告(第2分冊)』鎌倉市教育委員会

3：2000年8月調査。瀬田哲夫 2002「武蔵大路周辺遺跡 (No.194) 扇ガ谷二丁目298番イ」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調

査報告書18 平成13年度発掘調査報告(第1分冊)』鎌倉市教育委員会

4 : 2004年3月調査。滝沢晶子 2005『武蔵大路周辺遺跡発掘調査報告書』株式会社 博通

5 : 2012年5月調査。未報告一扇ガ谷二丁目297番1 齋木秀雄 2013「武蔵大路周辺遺跡の発掘調査」『第23回鎌倉市遺跡調査・研究発表会 発表要旨』特定非営利活動法人鎌倉考古学研究所・鎌倉教育委員会

浄光明寺旧境内遺跡 (No.206)

1 : 1987年6月調査。未報告一扇ガ谷二丁目12番1

海蔵寺旧境内遺跡 (No.299)

1 : 1998年3月調査。野本賢二・岡陽一郎 2000「海蔵寺旧境内遺跡 (No.299) 扇ガ谷四丁目632番3地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書16 平成11年度発掘調査報告(第1分冊)』鎌倉市教育委員会

寿福寺旧境内遺跡 (No.371)

1 : 2008年7月調査。山口正紀 2010「鎌倉・英勝寺山門基壇改修工事に伴う出土遺物」『かまくら考古 第4号』特定非営利活動法人鎌倉考古学研究所

表1 周辺の遺跡名称(神奈川県遺跡台帳)

N0.	遺跡名称	N0.	遺跡名称	N0.	遺跡名称	N0.	遺跡名称
87	鎌倉城	113	化粧坂下やぐら	181	勝緑寺跡	201	今小路西遺跡
100	松源寺谷やぐら群	115	真光寺跡やぐら群	189	華光院跡	202	いわや堂遺跡
102	いわや堂やぐら	116	清涼寺谷やぐら群	190	東林寺跡	204	松岩寺跡
106	智岸寺やぐら群	118	無量寺谷やぐら群	191	松源寺跡	256	巨福呂坂周辺遺跡
108	浄光明寺やぐら群	119	法性寺谷やぐら	195	興善寺跡	278	北条時房・顕時邸跡
109	清水谷やぐら	171	尾藤景綱邸跡	196	無量寺跡	295	無量寺谷南やぐら
110	勝緑寺やぐら群	174	安国寺跡	197	法性寺跡	330	尾藤谷やぐら群
111	法泉寺谷やぐら群	175	保寧寺跡	198	清水寺跡	374	宝蓮寺跡
						397	建長寺旧境内遺跡

第二章 調査の概要

第1節 調査の経緯と経過

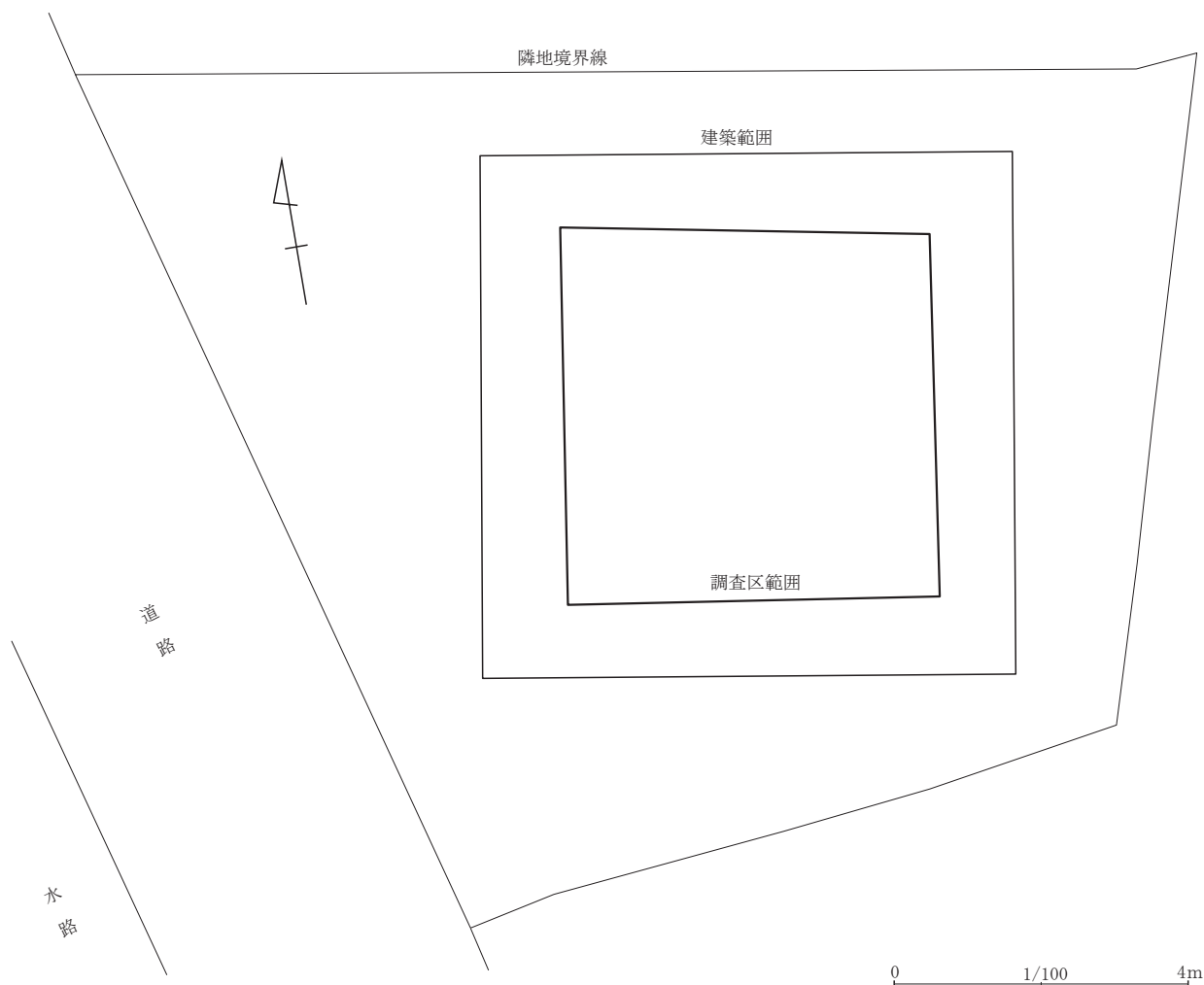


図2 調査区と建築範囲

本調査は、個人専用住宅建設に伴う柱状改良工事を原因とし、事前の記録保存を目的として鎌倉市教育委員会が実施した。建設計画では、49㎡の建築範囲内に地表下4.5mまで柱状改良工事を行う申請があり、平成20年9月17日に遺跡確認（試掘）調査を建築予定範囲内6㎡を対象に鎌倉市教育委員会が実施した。その結果、地表下54～180cmまでに3時期以上の遺構面を確認したため、事前の記録保存の必要があると判断し、発掘調査の実施に至った。調査区は鎌倉市教育委員会文化財課の判断で隣地境界線から安全な距離をとり、建築範囲内25㎡を対象として設定した（図2）。

平成21年2月13日に担当者立会いの下、重機による表土掘削を行い、確認調査の結果を参考に地表下50cmほどで中世遺構面を確認した。その後、湧水などの影響による危険性などを踏まえ、人力による作業で調査を進行し、測量・写真撮影などの記録保存を行った。また、掘削残土は敷地内で処理していたが、5面調査途中で以降の残土量や地表からの深さを想定した結果、調査範囲を狭めていき、平成21年4月10日に現地での全調査工程を終了した。

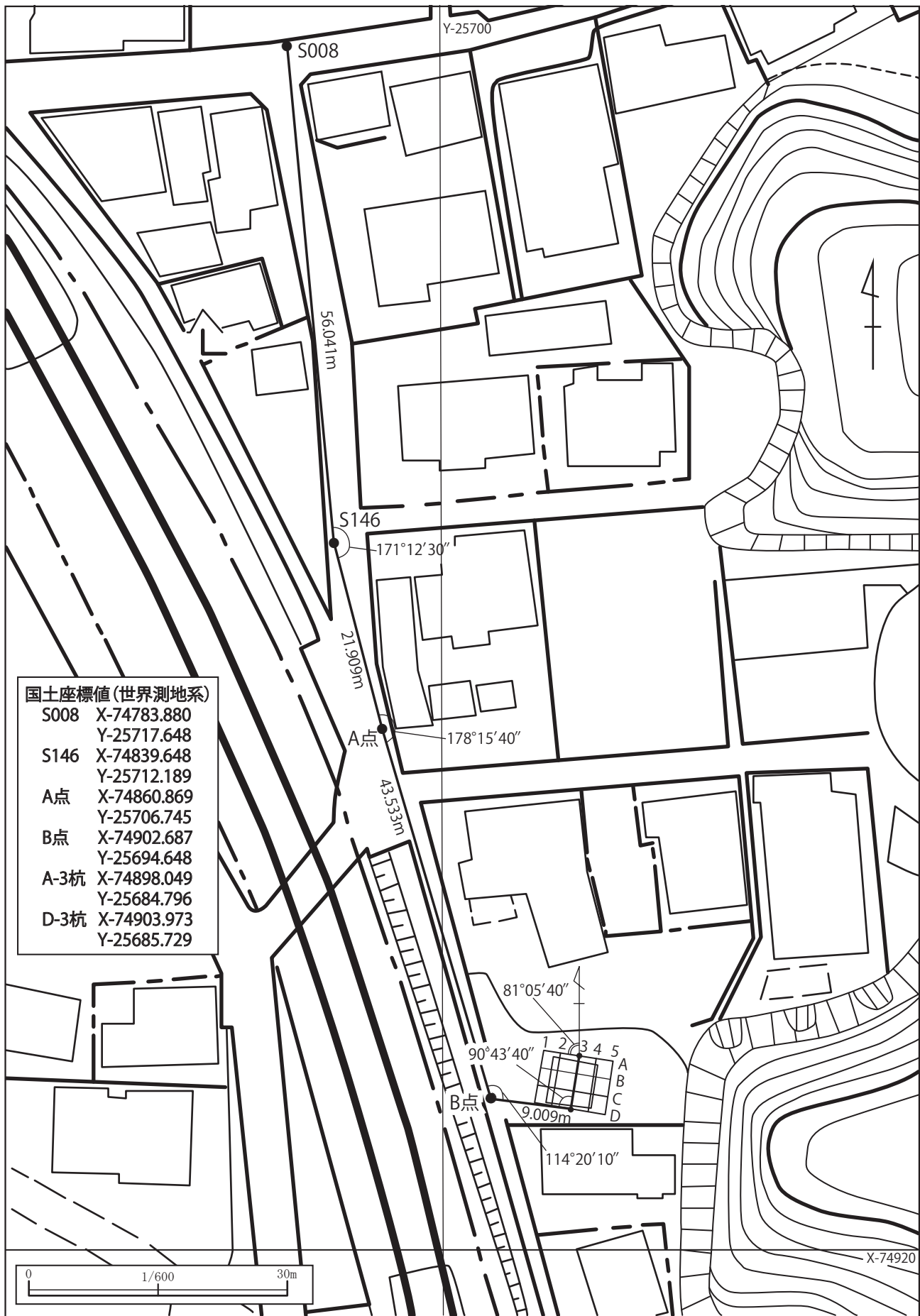


图3 国土座標位置图

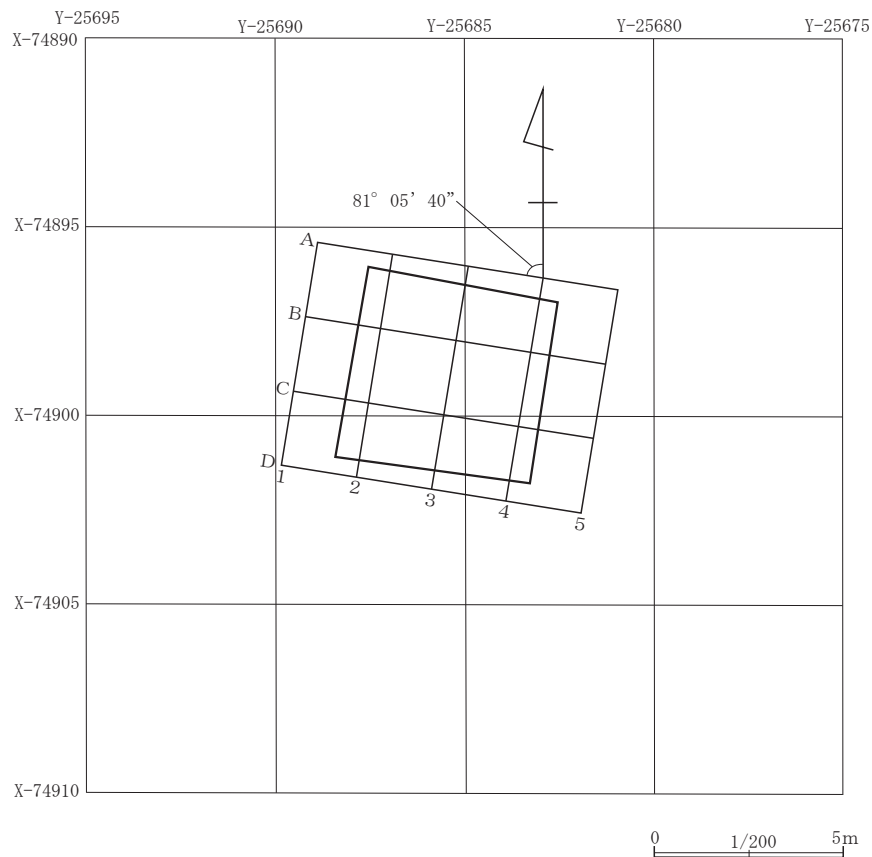


図4 国土座標とグリッド配置図

以下、作業経過を抜粋した。

- 2月13日(金) 重機による表土掘削。
- 2月16日(月) 機材搬入。
- 2月17日(火) 調査区に測量用の任意グリッドを設定。鎌倉市三級基準点及び4級基準点より標高値と国土座標値を測量杭に移動。
- 2月19日(木) 1面全景・個別写真撮影。全測図実測。
- 2月24日(火) 2面全景・個別写真撮影。全測図実測。
- 3月5日(木) 3面全景・個別写真撮影。全測図実測。
- 3月11日(水) 4a面全景・個別写真撮影。全測図実測。
- 3月13日(金) 4b面全景・個別写真撮影。全測図実測。
- 3月19日(木) 5面全景・個別写真撮影。全測図実測。
- 3月26日(木) 6面全景・個別写真撮影。全測図実測。
- 4月1日(水) 7面全景・個別写真撮影。全測図実測。
- 4月2日(木) 7面溝1の延長を確認するため北壁部分にトレンチ掘削実施。
- 4月6日(月) 8面全景・個別写真撮影。全測図実測。東・西・南壁の土層堆積写真撮影。調査区南西部を深掘り。
- 4月7日(火) 8面下トレンチ写真撮影。全測図実測。東・西・南壁の土層堆積実測。
- 4月8日(水) 東・西・南壁の土層堆積実測。
- 4月10日(金) 現地調査終了。機材撤収。

第2節 調査における測量方法

本発掘調査における測量は、調査区に沿った任意の2m方眼軸を設けたため、国土座標上の方眼軸とは不一致である。測量開始に先行して調査区南にD-3杭、北にA-3杭を調査測量基準点として設定した(図3)。調査地西側を南北に走る道路に設置してある鎌倉市4級基準点S008とS146を用いて、調査測量基準点に国土座標上の数値を移動した。南北軸線には北方からアルファベットA～D、東西軸線には西方から算用数字の1～5を付してグリッド設定を行った。グリッド東西軸線は真北からN-81°05'40"-Wの傾きを測る。

国土座標値は、現地調査時において日本測地系(座標系AREA9)を用いて測量を行った。整理作業段階において国土地理院ホームページに設置されている座標変換ソフト『web版TKY2JGD』により世界測地系第IX系の座標数値へ変換したものを図3に記し、調査区・任意グリッドと国土座標軸の詳しい位置関係は図4に示した。標高値は、調査地点より南に400mほどの位置、鎌倉市扇ガ谷一丁目71-4番地先に設置してある鎌倉市三級基準点No.53213=標高8.378mを基に移設した。なお、図1・3で提示した地図は鎌倉市が所有する都市基本計画図(2004年発行)を使用している。

第3節 堆積土層

調査区東・西・南壁の土層観察を行い、図5に示した。調査段階での現地表は標高12.20mを測り、表土とした現代の盛土が10cm、厚い部分で30cmほど堆積していた。1面確認まで表土と中世遺物包含層が40～60cm堆積しており、その下に22～36層の多様な土壌によって構成される1面が広がる。北側は道路状遺構の堆積層であり、やや弱い部分もあるが全体に泥岩を固めて構築された弱粘質土層である。2面は道路状遺構以外の堆積層が粘質土になり、主に37層が広がっていた。64～70層の上面が3面となり、北西部にやや強く版築された層が広がるのを確認した。4b面は74～76・78～82層などの複数の堆積層から構成され、それらの直上に72層などが部分的に広がって地業されているのが4a面となる。両面は10cmほどの間隔がある。南側は3面溝1に削平されているので両面とも遺構の拡がりなど詳細は不明である。5面は95層とした暗青灰色泥岩層が調査区内に拡がりをみせる。5面より10cmほど掘り下げると101層である30～50cm大の泥岩を多量に含む暗青灰色泥岩層が堆積していた。101層を中心とするその上面が6面になる。101層は最大70cmの厚さを確認し、6面以下より東・南壁に沿って調査区を縮小した中で、101層を除去すると102層とする木器層が調査区範囲内で確認できた。102層は木端・木片が主体で、木製品も多量に含む黒褐色粘質土である。その102層が10cmほどの厚さで7面である104層の直上に堆積していた。7面を構成する104層は、泥岩粒少量、炭化物・貝砂・かわらけ粒を僅かに含む暗茶褐色粘質土で、中世基盤層の直上に堆積する。8面は泥岩粒を微量に含む107層である中世基盤層上にある。以下、調査区南東部のトレンチにより土層を観察した結果、奈良・平安時代の遺物を含む土層を確認した。109層から中世以前の層位であり、111・112は砂質土となり、地表下3.3m、標高9.00mで112層である混入物の含まない灰褐色砂質土までの堆積を確認した。

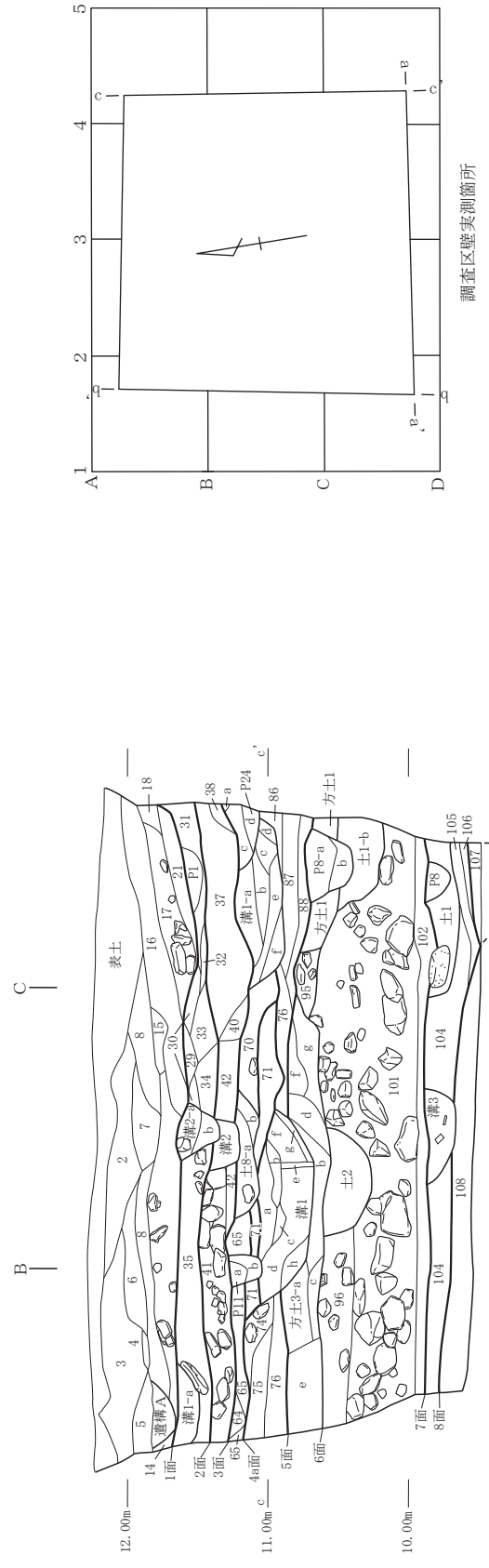
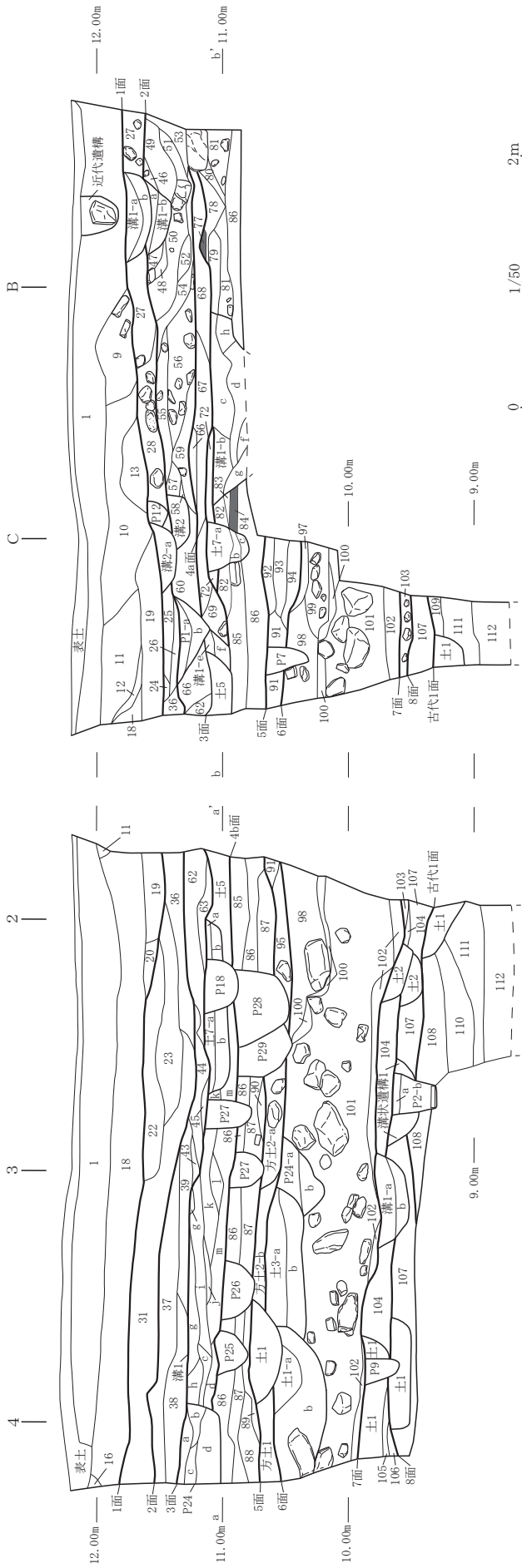


図5 調査区土層堆積図

土層説明 (図5)

1. 茶褐色土: 泥岩 (20cm) 含み、泥岩粒多量。縮まり若干あり。
2. 茶褐色土: 泥岩 (7~10cm) 多く、泥岩粒少量。縮まりややあり。
3. 茶褐色土: 泥岩粒多く、かわらけ粒少量。縮まり若干あり。
4. 茶褐色土: 泥岩粒少量。縮まりややあり。
5. 茶褐色土: 泥岩 (1~3cm)・泥岩粒中量、かわらけ片少量。縮まりややあり。
6. 茶褐色土: 泥岩 (5~7cm) 多く、炭化物少量。縮まりややあり。
7. 茶褐色土: 泥岩 (5cm) 含み、泥岩粒中量、かわらけ粒少量。縮まり若干あり。
8. 茶褐色土: 泥岩粒中量、かわらけ粒微量。縮まりややあり。
9. 茶褐色土: 泥岩 (10~20cm)・泥岩粒多量、かわらけ粒微量。縮まりあり。
10. 茶褐色土: 泥岩粒多く、かわらけ粒少量。縮まりややあり。
11. 茶褐色土: 泥岩粒多い。縮まりあり。
12. 茶褐色土: 泥岩粒中量、炭化物少量。縮まりなし。
13. 茶褐色弱粘質土: 泥岩 (1~3cm)・泥岩粒少量、炭化物微量。縮まりなし。
14. 茶褐色土: 泥岩 (5~15cm) 多量。縮まりあり。
15. 茶褐色土: 泥岩粒・かわらけ粒少量。縮まり若干あり。
16. 茶褐色土: 泥岩粒多量、かわらけ中量、縮まりややあり。
17. 茶褐色土: 泥岩 (10~20cm)・泥岩粒多量。縮まりあり。
18. 茶褐色土: 泥岩粒中量、かわらけ粒微量。縮まりややあり。
19. 茶褐色弱粘質土: 泥岩粒・炭化物中量、かわらけ粒少量。縮まり若干あり。
20. 茶褐色弱粘質土: 泥岩 (3~5cm)・泥岩粒多量、小石少量。縮まりあり。
21. 茶褐色土: 泥岩粒・炭化物少量。縮まりなし。
22. 茶褐色弱粘質土: 泥岩粒・炭化物少量、かわらけ粒微量、粗砂多く、縮まり若干あり。
23. 茶褐色粘質土: 泥岩粒少量、炭化物中量、粗砂わずかに含み、縮まりややあり。
24. 暗褐色弱粘質土: 泥岩粒少量、小石微量、縮まりややあり。
25. 暗褐色弱粘質土: 泥岩層。泥岩 (5~7cm)・泥岩粒多量、小石少量。縮まりあり。
26. 暗褐色弱粘質土: 泥岩粒中量、かわらけ粒少量。縮まりなし。
27. 暗褐色弱粘質土: 泥岩 (5~10cm)・泥岩粒多く、かわらけ粒少量。縮まりあり。
28. 茶褐色弱粘質土: 泥岩 (15~20cm)・泥岩粒多量、炭化物・かわらけ粒少量、小石微量。縮まり若干あり。
29. 茶褐色土: 泥岩粒少量、炭化物・かわらけ粒わずかに含む。縮まり若干あり。
30. 暗褐色弱粘質土: 泥岩 (1cm)・泥岩粒中量、かわらけ粒少量。縮まりややあり。
31. 茶灰色粘質土: 泥岩粒・炭化物少量。縮まりややあり。
32. 暗褐色粘質土: 泥岩粒少量、炭化物・かわらけ粒微量。縮まり若干あり。
33. 茶褐色弱粘質土: 泥岩粒中量、炭化物・かわらけ粒少量。縮まりややあり。
34. 茶褐色弱粘質土: 泥岩粒多く、泥岩 (1~3cm) 少量、かわらけ粒わずかに含む。縮まり若干あり。
35. 茶褐色弱粘質土: 泥岩粒多量、炭化物・かわらけ粒少量。縮まり若干あり。
36. 茶灰色粘質土: 炭化物中量、泥岩粒・かわらけ粒微量。粘性強く、縮まりややあり。
37. 黄茶褐色粘質土: 泥岩 (3cm)・泥岩粒中量、炭化物多量、かわらけ片粒少量。縮まりなし。
38. 黄茶褐色粘質土: 泥岩粒・炭化物中量、かわらけ粒・褐鉄粒少量。縮まり若干あり。
39. 茶灰色粘質土: 泥岩粒・炭化物多く、黄茶褐色粘土ブロック多量。縮まり若干あり。
40. 暗褐色弱粘質土: 泥岩 (1cm)・泥岩粒多く、かわらけ片・炭化物少量。縮まり若干あり。
41. 茶褐色弱粘質土: 泥岩 (15~20cm)・泥岩粒多量、炭化物・かわらけ粒微量。縮まりややあり。
42. 暗褐色弱粘質土: 泥岩粒中量、かわらけ粒少量。縮まりややあり。
43. 茶灰色粘質土: 泥岩粒・かわらけ粒少量。縮まり若干あり。
44. 茶灰色粘質土: 泥岩粒・炭化物多く、かわらけ片少量、縮まりあり。
45. 暗褐色粘質土: 泥岩粒少量、炭化物・かわらけ粒微量。縮まりなし。
46. 暗褐色弱粘質土: 泥岩粒少量。縮まりなし。
47. 暗褐色粘質土: 泥岩粒少量。縮まりややあり。
48. 暗褐色粘質土: 泥岩 (15cm) 含み、泥岩粒少量。粘性非常に強い。縮まりややあり。
49. 暗褐色弱粘質土: 泥岩 (5~10cm) 多量。縮まりややあり。
50. 暗褐色弱粘質土: 泥岩 (10~20cm) 多く、泥岩粒多量。縮まりあり。
51. 暗褐色弱粘質土: 泥岩粒多く、縮まりあり。
52. 暗褐色粘質土: 泥岩粒・炭化物少量。縮まりなし。
53. 暗褐色弱粘質土: 泥岩 (10cm)・泥岩粒多量。縮まりあり。
54. 暗茶褐色粘質土: 泥岩粒少量。縮まりややあり。
55. 暗褐色弱粘質土: 泥岩粒少量。縮まりなし。
56. 茶褐色弱粘質土: 泥岩 (10~15cm)・泥岩粒多量、粗砂多い。縮まりややあり。
57. 暗褐色弱粘質土: 泥岩粒少量、炭化物ごく微量。縮まりなし。
58. 暗褐色弱粘質土: 泥岩粒・炭化物微量。縮まりなし。
59. 暗褐色粘質土: 泥岩粒中量、炭化物多く、かわらけ粒少量、暗褐色粘土ブロック多く混じる。縮まり若干あり。
60. 茶褐色弱粘質土: 泥岩粒多く、炭化物少量、かわらけ片微量、細砂利多く混じる。縮まりややあり。
61. 青灰色弱粘質土: 泥岩粒・炭化物中量、かわらけ粒少量。縮まり若干あり。
62. 茶褐色粘質土: 木片若干含む。縮まりなし。
63. 茶褐色粘質土: 泥岩粒少量、炭化物多量。縮まりなし。
64. 暗青灰色粘質土: 泥岩粒・炭化物多量、細砂利少量。縮まりなし。
65. 暗褐色弱粘質土: 泥岩 (1cm)・泥岩粒多く、かわらけ片・炭化物少量。縮まり若干あり。
66. 暗褐色粘質土: 泥岩粒・炭化物・木片微量。粘性強く、縮まりややあり。
67. 暗褐色弱粘質土: 泥岩 (1~5cm)・泥岩粒多く、炭化物・かわらけ粒少量。縮まりあり。
68. 暗褐色弱粘質土: 泥岩 (3cm)・泥岩粒・炭化物多く、かわらけ片粒微量、細砂少量。縮まりややあり。
69. 暗褐色砂質土: 泥岩粒多く、かわらけ粒微量。縮まりややあり。
70. 茶褐色弱粘質土: 泥岩 (13cm) 含み、泥岩粒中量、かわらけ片少量。縮まりあり。
71. 暗褐色粘土: 泥岩粒微量、炭化物少量。縮まりなし。
72. 暗褐色粘質土: 泥岩粒中量、炭化物少量。縮まりあり。
73. 暗褐色弱粘質土: 泥岩 (3cm)・泥岩粒少量、炭化物微量。縮まりややあり。
74. 暗青灰色粘質土: 泥岩 (10~15cm) 含み、泥岩粒少量、細砂利多量。縮まりなし。

75. 暗青灰色粘質土：泥岩粒・細砂利多量、かわらけ粒少量、縮まりなし。
76. 暗茶褐色粘質土：泥岩（5～10cm）・泥岩粒中量、かわらけ片・木片少量、粗砂多く含む。縮まりなし。
77. 炭化物層
78. 暗褐色粘質土：泥岩粒・炭化物多量。縮まりなし。
79. 暗褐色弱粘質土：泥岩（5～7cm）多量。縮まりあり。
80. 暗褐色弱粘質土：泥岩（5～7cm）中量。縮まり若干あり。
81. 暗褐色弱粘質土：泥岩（7～10cm）中量、泥岩粒多く、炭化物少量。縮まりなし。
82. 暗褐色弱粘質土：泥岩（10～15cm）・泥岩粒多く、炭化物・かわらけ粒少量。縮まり若干あり。
83. 暗褐色弱粘質土：泥岩粒多く、炭化物・かわらけ粒少量。縮まり若干あり。
84. 炭化物層
85. 暗褐色弱粘質土：泥岩（1～3cm）・泥岩粒多量、炭化物微量。縮まりあり。
86. 暗茶褐色粘質土：泥岩（3～5cm）・泥岩粒多く、炭化物少量、粗砂若干含む。縮まりあり。
87. 暗青灰色弱粘質土：泥岩（1～5cm）・泥岩粒多量、かわらけ粒少量、炭化物わずかに含む。縮まりあり。
88. 暗茶褐色粘質土：泥岩（3～5cm）・泥岩粒中量。縮まりややあり。
89. 暗茶褐色粘質土：泥岩粒少量、炭化物・かわらけ粒・木片微量。縮まりあり。
90. 暗青灰色砂質土：泥岩粒・貝砂多く、木端少量。粘性あり。縮まりややあり。
91. 暗茶褐色粘質土：泥岩粒・木端少量。縮まりなし。
92. 暗青灰色砂質土：泥岩（3～5cm）・泥岩粒多量。粘性若干あり。縮まりあり。
93. 暗青灰色砂質土：泥岩（5～7cm）多量。縮まりあり。
94. 暗茶褐色粘質土：泥岩粒少量。粘性強く、縮まり非常に強い。
95. 暗青灰色泥岩層：泥岩（5～10cm）中量、炭化物微量。縮まりあり。
96. 暗青灰色粘質土：泥岩（10～30cm）多量。縮まりあり。
97. 暗青灰色泥岩層：泥岩（3～5cm）・粗砂多量に混じる。縮まりあり。
98. 暗青灰色泥岩層：泥岩（5～15cm）多量、暗茶褐色粘土ブロック多く混じる。縮まりあり。
99. 暗青灰色粘質土：泥岩（5～15cm）多く、木端微量。縮まりややあり。
100. 暗茶褐色粘質土：泥岩粒少量。縮まりややあり。
101. 青灰色泥岩層：泥岩（30～50cm）多量。縮まり若干あり。
102. 黒褐色粘質土：泥岩粒・貝片少量、木端・木片・木製品多量。縮まりあり。
103. 黒褐色粘質土：泥岩（7～10cm）・泥岩粒少量、木片・木端多量。縮まりなし。
104. 暗茶褐色粘質土：泥岩粒少量、炭化物・貝砂・かわらけ粒わずかに含む。縮まり非常に強い。
105. 黒褐色粘質土：泥岩粒微量。縮まりあり。
106. 青灰色粘質土：泥岩粒多量、粗砂少量。縮まり若干あり。
107. 黒褐色粘質土：泥岩粒微量。縮まり若干あり。
108. 灰褐色粘質土：泥岩粒少量。縮まりあり。
109. 黒褐色粘質土：泥岩粒少量。縮まりあり。
110. 灰褐色粘質土：泥岩粒少量。縮まり非常に強い。
111. 灰褐色砂質土：黒褐色粘土ブロック多く混じる。縮まり非常に強い。
112. 灰褐色砂質土：混入物なし。粘性・縮まり共にあり。

遺構土層説明（図5）

- 近代遺構. 茶褐色土：泥岩（20cm）含み、泥岩粒多量。縮まり若干あり。
- 遺構A. 茶褐色弱粘質土：泥岩粒中量、炭化物微量。縮まりなし。
- 1面溝1-a. 茶褐色弱粘質土：泥岩粒・炭化物微量。縮まり若干あり。
- 1面溝1-b. 暗褐色粘質土：泥岩粒中量、炭化物・かわらけ片粒少量。縮まりなし。
- 1面溝2-a. 茶褐色弱粘質土：泥岩粒中量、かわらけ粒少量、小石微量。縮まりややあり。
- 1面溝2-b. 茶褐色弱粘質土：泥岩粒中量、かわらけ粒少量、砂利ごく微量。縮まりなし。
- 1面P 12. 茶褐色弱粘質土：泥岩粒中量、かわらけ粒少量、縮まりややあり。
- 2面溝1-a. 茶褐色弱粘質土：泥岩粒・炭化物微量。縮まり若干あり。
- 2面溝1-b. 暗褐色粘質土：泥岩粒中量、炭化物・かわらけ片粒少量。縮まりなし。
- 2面溝2. 茶褐色粘質土：泥岩粒・かわらけ片少量、粗砂多く含む。縮まりなし。
- 2面P 1-a. 暗褐色弱粘質土：泥岩（1cm）・泥岩粒中量、炭化物・かわらけ粒少量、粗砂多く、縮まり若干あり。
- 2面P 1-b. 茶灰色粘質土：泥岩粒少量、炭化物多く含む。粘性強く、縮まりややあり。
- 3面溝1-a. 暗褐色粘質土：泥岩粒・木端少量。縮まりややあり。
- 3面溝1-b. 暗褐色粘質土：泥岩粒少量、木端・かわらけ粒中量、細砂多く含む。縮まりなし。
- 3面溝1-c. 暗褐色粘質土：泥岩粒・炭化物少量、粗砂多量。縮まりなし。
- 3面溝1-d. 暗褐色粘質土：泥岩（1～3cm）少量、木端混じる。縮まりややあり。
- 3面溝1-e. 暗褐色粘質土：泥岩粒少量、炭化物中量、粗砂多く、縮まりなし。
- 3面溝1-f. 暗褐色粘質土：泥岩粒少量、泥岩（3cm）微量。縮まり若干あり。
- 3面溝1-g. 茶褐色粘土：混入物なし。縮まりなし。
- 3面溝1-h. 茶灰色粘質土：泥岩粒・炭化物・黄茶褐色砂ブロック少量。縮まり若干あり。
- 3面溝1-i. 茶灰色粘質土：泥岩（3～5cm）・かわらけ片少量、泥岩粒・炭化物・黄茶褐色砂ブロック多く含む。縮まり若干あり。
- 3面溝1-j. 暗褐色粘質土：泥岩（1～3cm）・かわらけ片少量。縮まりややあり。
- 3面溝1-k. 暗褐色粘質土：泥岩（3cm）・泥岩粒・かわらけ粒少量、炭化物多く、細砂多量。縮まりややあり。
- 3面溝1-l. 暗褐色粘質土：泥岩（7cm）含み、かわらけ片粒中量、炭化物多く、木片少量。縮まりややあり。
- 3面溝1-m. 暗褐色弱粘質土：泥岩（1～3cm）・泥岩粒多量、炭化物微量。縮まりあり。
- 3面土坑5. 暗褐色粘質土：泥岩粒少量、炭化物中量、粗砂多く、縮まりなし。
- 3面土坑7-a. 暗褐色粘質土：泥岩粒微量、炭化物・木端多く、縮まり若干あり。
- 3面土坑7-b. 暗褐色粘質土：泥岩粒少量、木片・炭化物微量、粗砂多量。縮まりなし。

- 3面土坑8-a. 暗褐色弱粘質土:泥岩(5~13cm)少量、泥岩粒中量、かわらけ粒微量。縮まりややあり。
- 3面土坑8-b. 暗褐色弱粘質土:泥岩粒・木片少量、炭化物微量。縮まりややあり。
- 3面P11-a. 暗褐色弱粘質土:泥岩粒・かわらけ片少量、木端わずかに含む。縮まりなし。
- 3面P11-b. 暗褐色粘質土:泥岩粒・小石・茶褐色粘土ブロック少量。縮まりなし。
- 3面P18. 暗褐色粘質土:泥岩粒多く、かわらけ粒・粗砂少量。縮まりなし。
- 3面P24-a. 茶灰色粘質土:泥岩粒少量、炭化物・黄茶褐色粘土ブロック多く含む。縮まりなし。
- 3面P24-b. 茶灰色粘質土:泥岩粒・炭化物・かわらけ粒少量。縮まりなし。
- 3面P24-c. 茶灰色粘質土:泥岩粒・かわらけ粒少量、炭化物中量、細砂多量。縮まりややあり。
- 3面P24-d. 茶褐色粘質土:泥岩粒・炭化物少量。縮まりなし。
- 3面P27. 暗褐色粘質土:泥岩粒・かわらけ片粒少量、粗砂多く、木端・小石微量。縮まりなし。
- 4a面土坑7-a. 暗褐色粘質土:泥岩粒中量、かわらけ片粒多く、縮まりなし。
- 4a面土坑7-b. 暗褐色粘質土:泥岩粒・木片少量、炭化物・かわらけ片多く、玉石多量。縮まりなし。
- 4a面土坑7-c. 暗褐色粘質土:泥岩粒少量、炭化物多量、木端微量。縮まりなし。
- 4b面溝1-a. 暗褐色粘質土:泥岩粒多量、粗砂多く、木片少量。縮まりなし。
- 4b面溝1-b. 暗褐色粘質土:泥岩粒・炭化物・かわらけ粒・木片少量。縮まりなし。
- 4b面溝1-c. 暗褐色粘質土:泥岩(3cm)・泥岩粒中量、細砂多量、かわらけ粒少量。縮まりなし。
- 4b面溝1-d. 暗褐色粘質土:泥岩粒中量、木片・木端少量、細砂多量。縮まりなし。
- 4b面溝1-e. 暗褐色粘質土:泥岩粒多量。板材の痕跡。
- 4b面溝1-f. 暗褐色粘質土:泥岩粒少量、粗砂多量。縮まり若干あり。
- 4b面溝1-g. 暗褐色粘質土:泥岩粒・炭化物・かわらけ片少量、細砂多く含む。縮まりややあり。
- 4b面溝1-h. 暗褐色粘質土:泥岩(10~20cm)・泥岩粒多量、炭化物少量。縮まりあり。
- 4b面P25. 暗褐色弱粘質土:泥岩(3~5cm)・泥岩粒多量、炭化物少量。縮まり若干あり。
- 4b面P26. 暗褐色弱粘質土:泥岩(3~5cm)・泥岩粒多量、かわらけ粒少量、炭化物わずかに含む、縮まりあり。
- 4b面P27. 暗褐色粘質土:泥岩粒中量、炭化物多量、粗砂多く、かわらけ粒微量。縮まりなし。
- 4b面P28. 暗褐色粘質土:泥岩粒・木片・細砂利少量、炭化物多量。縮まりなし。
- 4b面P29. 暗褐色粘質土:泥岩(7~10cm)・泥岩粒多く、炭化物中量、木端少量。縮まりなし。
- 5面方形土坑1. 暗茶褐色粘質土:泥岩(5cm)・小石少量、泥岩粒多く、粗砂多量。縮まりややあり。
- 5面方形土坑2-a. 暗青灰色粘質土:泥岩粒少量、炭化物多く、木片含む。縮まりなし。
- 5面方形土坑2-b. 暗茶褐色粘質土:泥岩(3~5cm)・泥岩粒少量、木片・木端多量、茶褐色粘土ブロック多く混じる。縮まりなし。
- 5面方形土坑3-a. 暗茶褐色粘質土:泥岩(3~5cm)・泥岩粒中量。縮まり若干あり。
- 5面方形土坑3-b. 暗茶褐色粘質土:泥岩(1~3cm)少量、貝粒中量、木端わずかに含む。縮まりなし。
- 5面方形土坑3-c. 暗茶褐色粘質土:泥岩粒少量。縮まり若干あり。
- 5面方形土坑3-d. 暗茶褐色粘質土:泥岩粒少量、木片・木端多く、茶褐色粘土ブロック多量。縮まりなし。
- 5面方形土坑3-e. 暗青灰色砂質土:泥岩粒多量、小石・炭化物少量。縮まりややあり。
- 5面方形土坑3-f. 暗茶褐色粘質土:泥岩(1~5cm)・泥岩粒多く、炭化物少量。縮まりあり。
- 5面方形土坑3-g. 暗茶褐色粘質土:泥岩粒中量、炭化物多く、縮まり若干あり。
- 5面土坑1. 暗茶褐色粘質土:泥岩(3~7cm)・泥岩粒多量、木片少量。縮まりなし。
- 5面P7. 暗茶褐色粘質土:泥岩(5~10cm)多量、炭化物少量。縮まりなし。
- 5面P8-a. 明茶褐色粘質土:炭化物・木片多く含む。縮まりなし。
- 5面P8-b. 暗茶褐色粘質土:泥岩粒少量、木端わずかに含む。縮まりややあり。
- 6面土坑1-a. 暗青灰色粘質土:泥岩(1~3cm)・泥岩粒中量、かわらけ粒少量。縮まりなし。
- 6面土坑1-b. 暗青灰色粘質土:泥岩(5~10cm)・泥岩粒多く、かわらけ片わずかに含む。縮まり若干あり。
- 6面土坑2. 暗茶褐色粘質土:貝粒多量。縮まりなし。
- 6面土坑3-a. 暗青灰色粘質土:泥岩(3~5cm)少量、泥岩粒中量、粗砂多量。縮まりややあり。
- 6面土坑3-b. 暗茶褐色粘質土:泥岩(7~10cm)少量、泥岩粒多く、かわらけ粒微量。縮まりややあり。
- 6面P24-a. 暗茶褐色粘質土:泥岩粒・かわらけ片・細砂少量、炭化物多量。縮まりなし。
- 6面P24-b. 暗茶褐色粘質土:泥岩粒・かわらけ片少量、細砂多量。縮まり若干あり。
- 7面溝1-a. 暗茶褐色粘質土:泥岩粒少量、貝片・かわらけ粒・粗砂・木片多量。縮まりなし。
- 7面溝1-b. 暗茶褐色粘質土:泥岩(3~5cm)・泥岩粒少量、木片・木端多量、茶褐色粘土ブロック多く混じる。縮まりなし。
- 7面溝3. 暗茶褐色粘質土:木片・貝片多く、泥岩粒少量。縮まりなし。
- 7面土坑1. 灰褐色粘質土:泥岩粒少量、炭化物微量。縮まりなし。
- 7面土坑2. 暗茶褐色粘質土:泥岩粒・炭化物・木端少量。縮まりなし。
- 7面P8. 黒褐色粘質土:泥岩粒・貝砂・炭化物少量。縮まりなし。
- 7面P9. 暗茶褐色粘質土:炭化物・かわらけ片少量。縮まり非常に弱い。
- 8面溝状遺構1. 黒褐色粘質土:泥岩粒・貝砂少量、炭化物・木端・木片中量、細砂若干含む。縮まりなし。
- 8面土坑1. 黒褐色粘質土:泥岩粒中量、炭化物・木片少量。縮まりなし。
- 8面土坑2. 黒褐色粘質土:泥岩粒・細砂・炭化物少量。縮まり若干あり。
- 8面P2-a. 青灰色砂質土:炭化物中量、貝砂・木端少量。粘性あり。縮まりなし。
- 8面P2-b. 黒褐色粘質土:泥岩粒少量、細砂多量。縮まりなし。
- 古代1面土坑1. 黒褐色粘質土:泥岩粒・貝片・かわらけ粒微量。縮まり若干あり。

第三章 検出遺構と出土遺物

本調査では9時期に亘る遺構面と古代の遺物を確認した。遺構総数は道路状遺構2、溝9条、溝状遺構1条、囲炉裏1基、方形土坑5基、土坑35基、ピット111基を検出した。

本報中において、遺構に付した名称は調査時に便宜的に付したもので、遺構の新旧関係などに関するものではない。また、図示できなかつた遺物は認知できる範囲の個体数で、それ以外は破片数を一個体とする形で、層位と遺構(各面一括)の出土箇所を分けて表18にまとめた。なお、各遺構の説明にあたっては図示できる出土遺物がある遺構を優先し、そのほかの遺構については概略として、各節中に表示した。

第1節 1面の遺構と遺物

地表面より40～60cm掘り下げ、標高11.70～11.50mの位置に泥岩版築層が広がる遺構面である。道路状遺構1基、溝2条、土坑2基、ピット11基を検出した(図7)。調査区中央から北側にかけて東西方向の道路状遺構と溝2条を確認している。南側では疎らに炭化物が混じり広がる範囲と、土坑・ピットが掘り込まれている状況である。

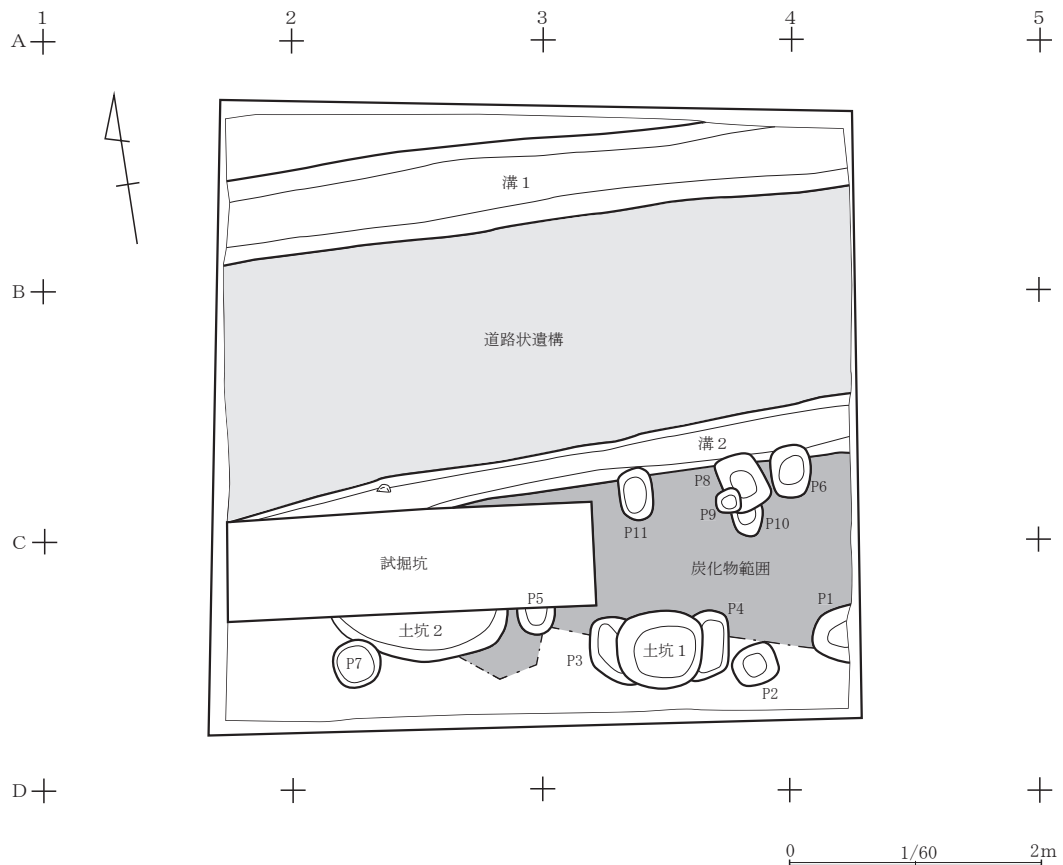


図6 1面全測図

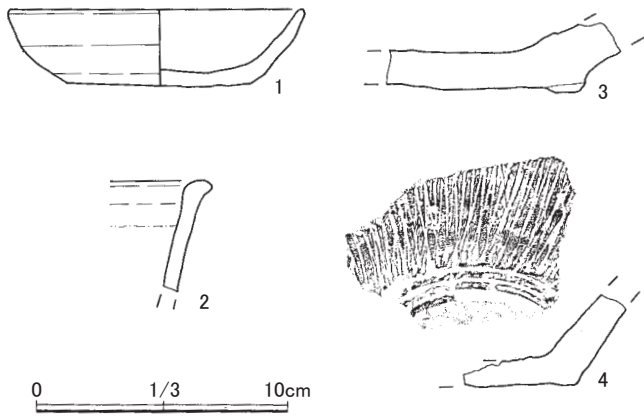


図7 試掘坑出土遺物

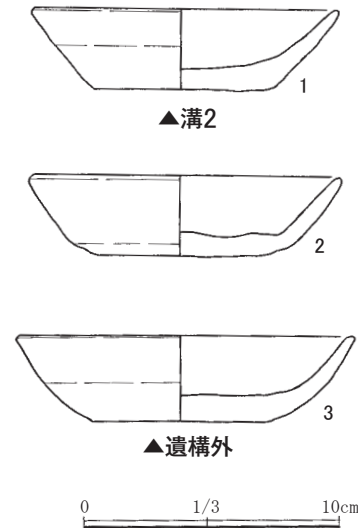


図8 1面溝2・遺構外出土遺物

表2 1面遺構計測表

遺構名	平面形	検出標高(m)	底面標高(m)	規模(cm)			備考/重複関係など
				長径	短径	深さ	
土坑1	隅丸方形	11.56	11.33	60	67	23	-
土坑2	不明	11.52	11.37	38	150	15	試掘坑により削平
P1	不明	11.59	11.51	44	26	8	調査区外に拡がる
P2	方形	11.58	11.48	29	36	10	-
P3	不明	11.53	11.45	57	22	8	土坑1により削平
P4	不明	11.56	11.47	54	21	9	土坑1により削平
P5	不明	11.52	11.37	23	23	15	試掘坑により削平
P6	不整円形	11.50	11.36	42	33	14	溝2を削平
P7	円形	11.48	11.38	38	38	10	土坑2を削平
P8	方形	11.47	11.37	46	34	10	P9により削平
P9	円形	11.50	11.43	21	19	7	P8を削平
P10	不明	11.52	11.43	25	20	9	P8により削平
P11	不整円形	11.52	11.48	41	27	4	溝2を削平

道路状遺構(図7、図版1)

Cラインから北側、東西は調査区外に拡がり、両脇に溝を伴う状況で検出した。主軸方位はN-90°-Wと真北に直交している。確認できた規模は、長さ500×幅164~198cm、検出標高は上面で北側11.65m前後、南側では11.55m前後、南側に向かいやや傾斜がある。図5-27・28・35層などの、5~20cm大の泥岩を主体に版築されており、土塁の基礎部分の可能性も考えられる。出土遺物は上面までが中世遺物包含層であったが、確認はできなかった。

溝1・2(図7、図版1)

両遺構は道路状遺構の北側に接して並行する。主軸方位は道路遺構と同じで、溝1の掘り方の規模は、長さ500×幅49~58×底面幅30~44×深さは10~15cmである。検出標高は11.65m、底面標高は11.44~11.59mで東から西に向かい緩く傾斜する。覆土は2層に分けられ、茶褐色弱粘質土が主体である。図示できる遺物は認められなかった。

溝2は道路状遺構の南側で検出した。溝1と同じの主軸方位である。西端部は試掘坑に削平されているが、土層観察から延長がわかっている。また、ピット6・8・11にも削平を受けている。掘り方の規模は、長さ500×幅29～47cm×底面幅15～28×深さ15～20cmである。検出標高は11.52～11.60m、底面標高は11.37～11.45mで溝1と同様に西に向かい緩い傾斜をもつ。覆土は2層で、茶褐色弱粘質土中に砂利や小石を含む。出土遺物は、轆轤かわらけ1点を図示した。

試掘坑・1面遺構外出土遺物(図6・8、表10、図版9)

試掘坑出土遺物は、一度埋め戻された中に含まれていた遺物である。合計33点とやや多い傾向があるが、試掘坑範囲外の遺物も混じっている可能性はある。1はかわらけ中皿の完形品、2は近代の瀬戸系植木鉢、3は常滑甕の底部片、4は内底部に周回する3条以上の播目がある備前系播鉢である。

1面遺構外は表土直下から1面上面までに出土した遺物を一括した。かわらけ、瀬戸、常滑、火鉢、銅銭など総数164点を数えた。いずれも小破片により図示し得るに至らなかったため、かわらけ大皿2点を図示した。

第2節 2面の遺構と遺物

1面より10cmほど掘り下げた段階で、道路状遺構の直下に同様の泥岩版築面を検出したため、これを2面として捉えた。調査・確認作業を行い、地表下70～80cm、標高11.50m付近で検出した(図9)。2面までの掘り下げ段階中に出土した遺物は確認できなかった。また、当面に至るまで北・東壁から湧水を確認したため、試掘坑に流れるよう三方に水抜き側溝を設定した。

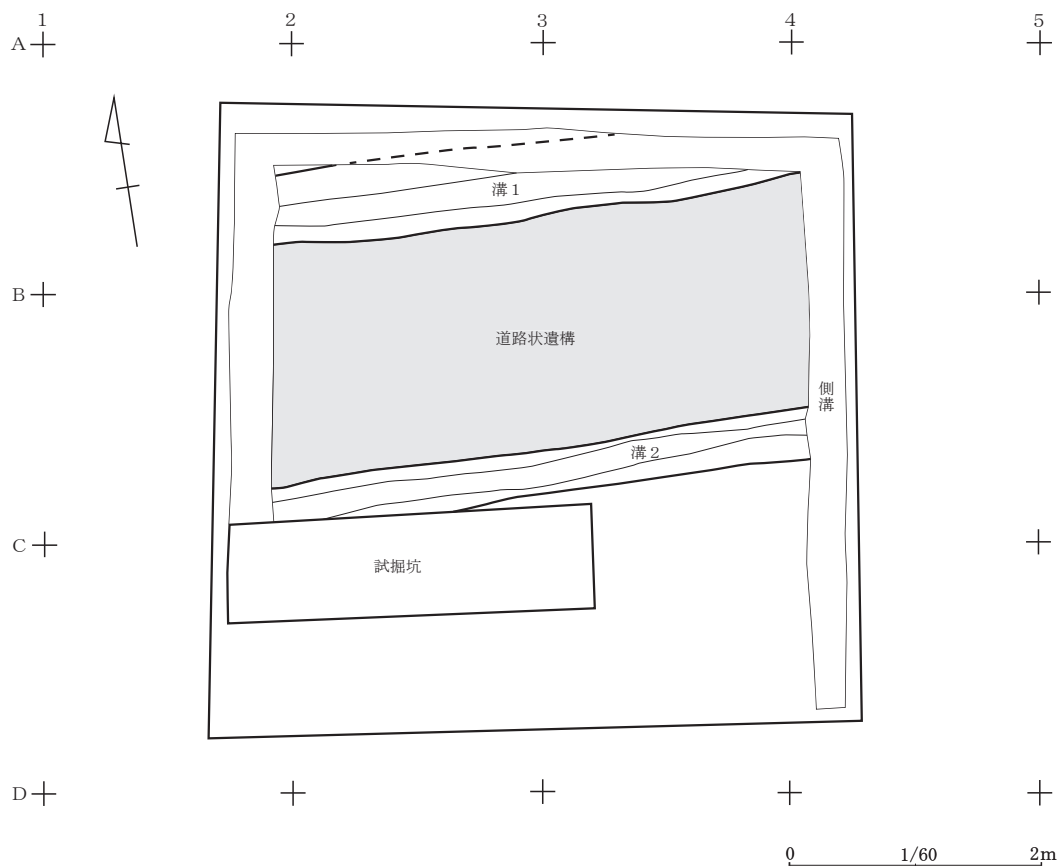
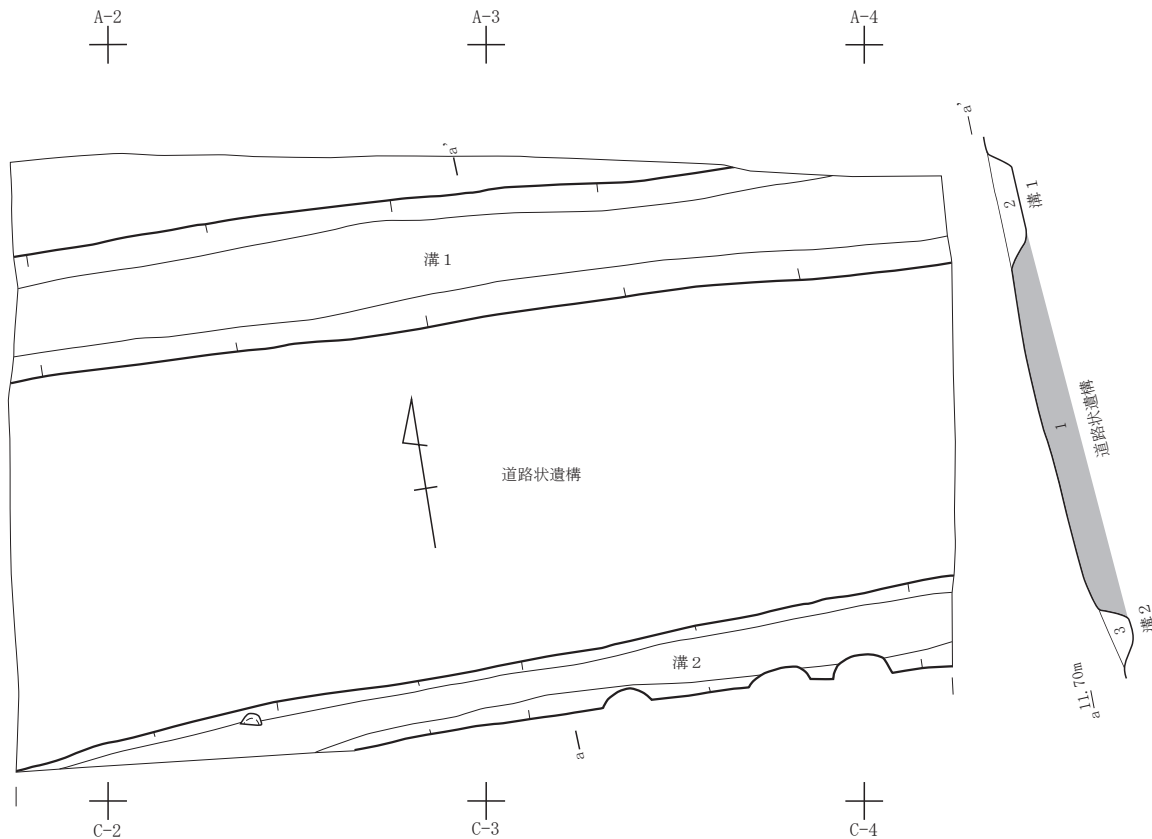


図9 2面全測図



- 道路状遺構 1. 茶褐色弱粘質土：泥岩（15～20cm）・泥岩粒多量、炭化物・かわらけ粒微量、縮まりあり。
 溝1 2. 茶褐色弱粘質土：泥岩（3～5cm）中量、炭化物・かわらけ粒少量、やや粗砂含み、縮まりなし
 溝2 3. 茶褐色粘質土：泥岩粒少量、炭化物・かわらけ粒微量、縮まりなし

0 1/40 2m

図10 2面道路状遺構、溝1・2

道路状遺構 (図9・10)

Cラインから北側、東西は側溝により削平したが、調査区外に拡がる状況で検出した。両脇に溝を伴うことも上面の道路状遺構と同様である。確認できた規模は、長さ425×幅175～180cm、全体に標高11.50mと平坦で溝際はやや傾斜がある。主軸方位も1面道路状遺構と変わらずN-90°-Wである。当遺構は溝も含め、1面時よりも全体的に30cmほど北に位置する。図5-41層が主体で構築されている。出土遺物は、かわらけ大皿3点が出土しているが、いずれも小破片のため図示し得るには至らなかった。溝1・2 (図9・10)

両遺構ともに上面で検出した同様の遺構である。溝1は道路状遺構の北側に接して並行する。掘り方の規模は、長さ450×幅55～60×底面幅20×深さは9～15cmである。検出標高は11.55m、底面標高11.40m前後である。断面形は浅鉢形で底部平坦に掘られている。覆土は2層に分けられ、茶褐色弱粘質土と暗褐色粘質土が堆積する。出土遺物は、かわらけ大皿2点が出土しているが、小破片のため図示し得るには至らなかった。

溝2は道路状遺構の南側で検出し、西部は試掘坑に削平されている。掘り方の規模は、長さ432×幅34～40×底面幅10～20×深さは13～20cmである。検出標高は11.40～11.50m、底面標高は11.22～11.35mで西に向かい僅かに傾斜をもつ。断面形はU字状で、溝1に比べ、細く深く掘られている様相であり、道路状遺構の傾斜から推察すると水捌け要素が強かったと思われる。覆土は粗砂を多く含む茶褐色粘質土が堆積している状況であった。出土遺物は、かわらけ、常滑甕片などが出土しているが小破片のため、図示不可能であった。

第3節 3面の遺構と遺物

地表下約100cm、標高11.20 m付近に泥岩版築された比較的良好な遺構面に、溝1条、土坑7基、ピット27基を発見した。南側には溝が土坑等に削平されているため、少なくとも当遺構面は二時期の遺構が確認できた(図11)。

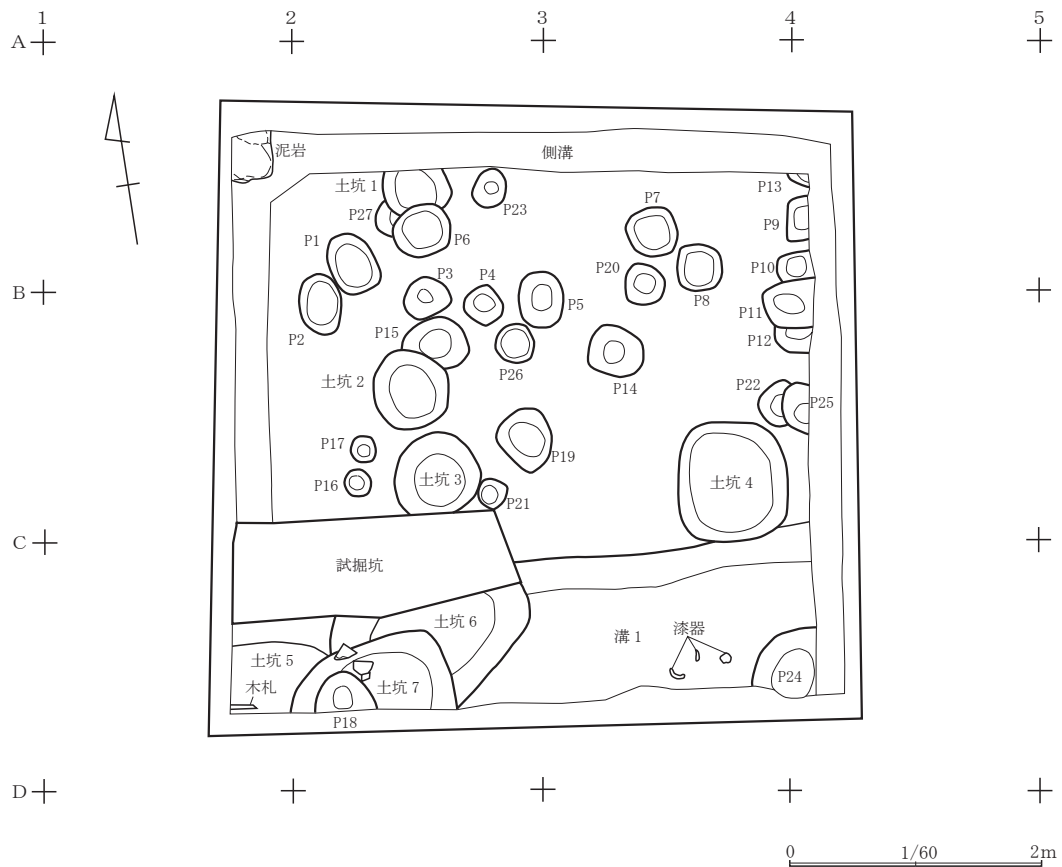


図11 3面全測図

溝1(図11・12・14、表10、図版2・9)

調査区南側、Cライン以南で検出した。南側の掘り込み部分は南東部で僅かに確認できたが、試掘坑、土坑5・6・7、ピット18・24による削平や大部分が調査区外に拡がることから詳細は不明瞭である。主軸方位はN-88°-Wと真北に直交した東西方向に掘られている。確認できた規模の掘り方は、長さ404×幅140以上×底面幅76~88×深さは40cmである。検出標高は11.20 m、底面標高は10.80 m前後で平坦に掘られている。覆土は図12に示した土層状況であり、木片や木端を含む暗褐色粘質土などが堆積していた。出土遺物は、轆轤かわらけの出土が多かったが小破片ばかりで図示し得るには至らなかった。1は外面に蓮弁文を施す青磁折縁鉢、2は褐釉壺、3は基石(白)、4は元豊通寶、5・6は漆器椀、7は漆器皿、6・7共に内外面に朱漆の手描き文様が施されてあるが文様の詳細は不明である。

土坑4(図13・14、表10、図版9)

B-4グリッド南西側で検出した。溝1を僅かに削平している。規模は長径104×短径89×深さ13cmである。平面形状は方形、断面形浅鉢状を呈し、検出標高11.20 m、底面標高11.07 mである。覆土は20cm大の泥岩と泥岩粒を少量、粗砂多く含む暗褐色粘質土が堆積していた。出土遺物は、8が常滑壺の口縁~頸部片を図示した。

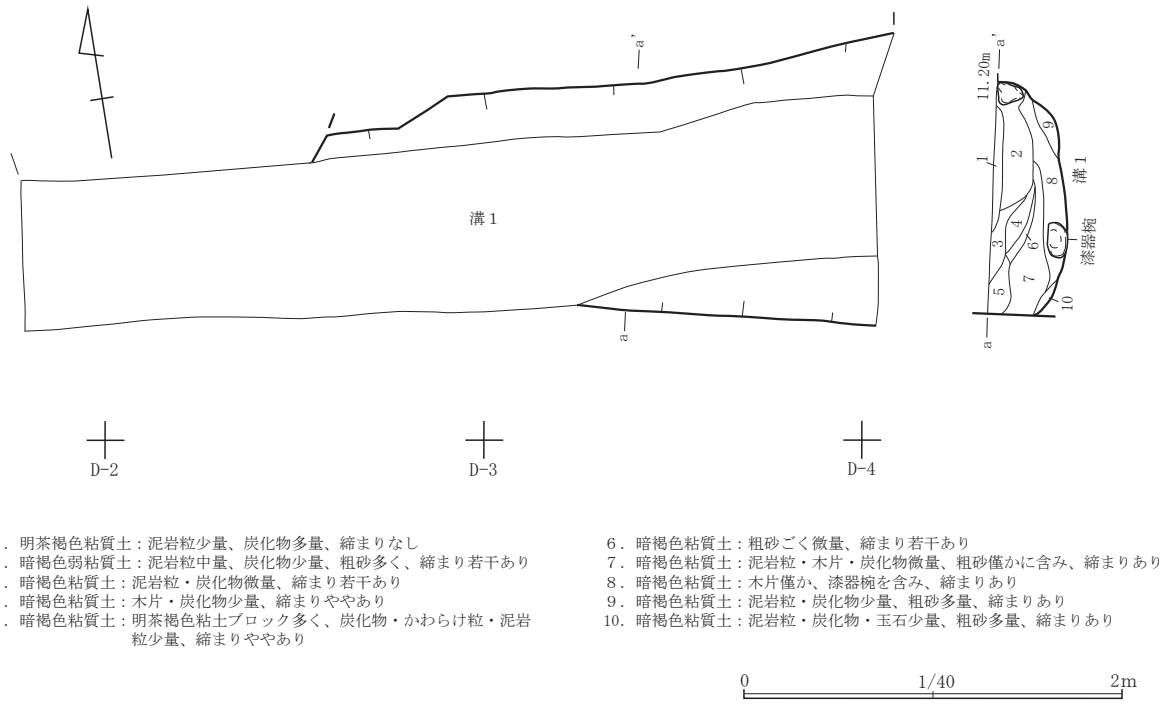


図12 3面溝1

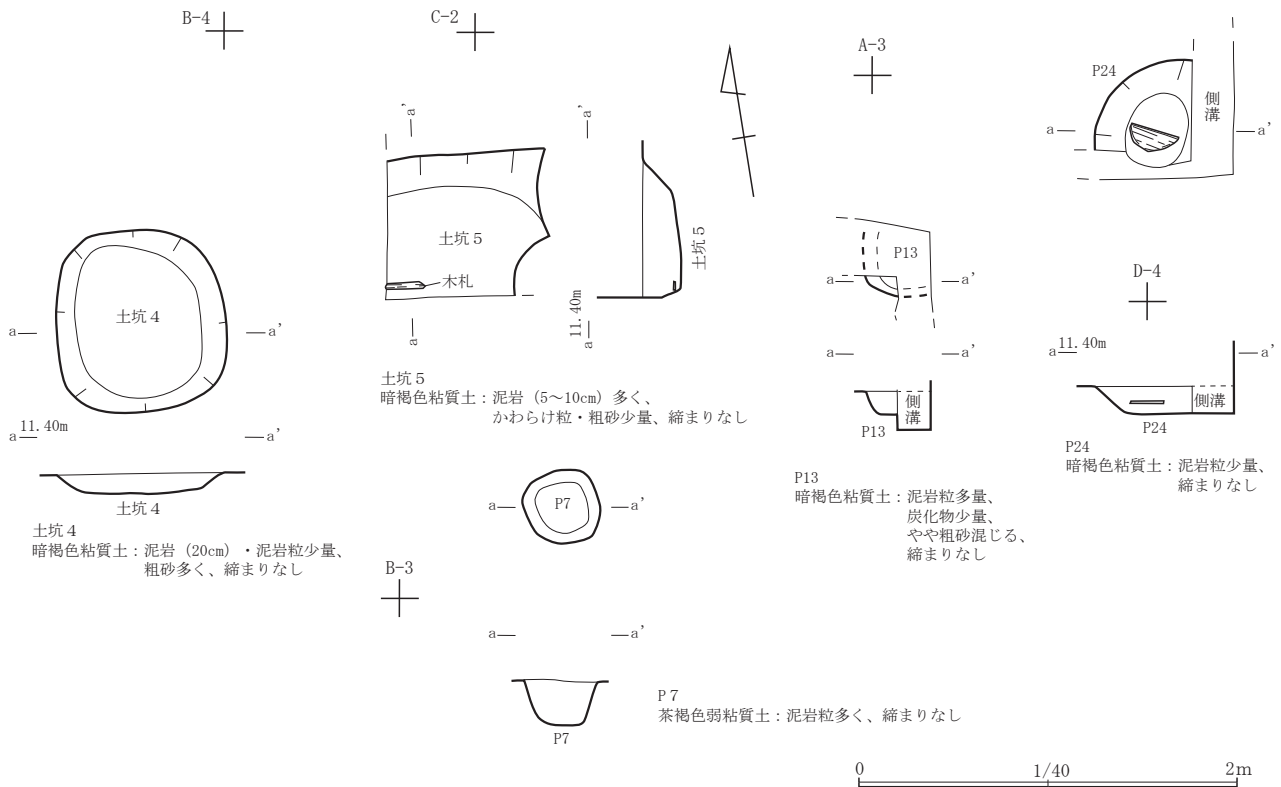


図13 3面土坑・柱穴

表3 3面遺構計測表

遺構名	平面形	検出標高(m)	底面標高(m)	規模(cm)			備考/重複関係など
				長径	短径	深さ	
土坑1	不明	11.17	11.03	52	(29)	14	P6により削平
土坑2	不整円形	11.16	11.03	65	60	13	P15を削平
土坑3	不整円形	11.19	11.01	70	58	18	試掘坑により削平
P1	楕円形	11.16	11.05	49	38	11	-
P2	楕円形	11.16	11.06	48	34	10	-
P3	不整形	11.18	10.94	37	31	24	-
P4	円形	11.19	10.94	31	28	20	-
P5	楕円形	11.22	10.93	45	36	29	-
P6	不整円形	11.16	11.02	46	40	14	土坑1・P23を削平
P8	不整形	11.18	11.05	37	35	13	-
P9	不明	11.20	11.10	35	(17)	10	側溝により削平
P10	不明	11.20	11.00	(28)	(21)	20	側溝により削平
P11	不明	11.22	11.01	(40)	35	21	側溝により削平
P12	不明	11.23	11.12	(31)	(19)	11	側溝により削平
P14	不整形	11.22	11.05	44	38	17	-
P15	不明	11.18	10.95	51	(36)	23	土坑2により削平
P16	円形	11.16	10.99	21	21	17	-
P17	円形	11.18	11.05	20	20	13	-
P18	不明	11.17	10.84	49	(28)	33	土坑7を削平
P19	不整形	11.21	11.09	51	41	12	-
P20	不整形	11.18	11.06	34	33	12	-
P21	不整形	11.19	11.15	27	22	4	-
P22	不明	11.23	11.08	37	(20)	15	P25により削平
P23	不整円形	11.21	11.09	32	25	12	-
P25	不明	11.25	11.14	39	(22)	11	側溝により削平
P26	不整円形	11.21	10.97	31	30	24	-
P27	不明	11.15	10.99	(27)	(21)	16	-

土坑5 (図13・14、表10、図版2・9)

C-2グリッド南側で検出した。土坑6・7、ピット18により削平され、調査区外に展開すると思われ、全体像は不明である。確認できた規模は、長径(84)×短径(75)×深さ26cmである。平面・断面形状は不明、検出標高11.15m、底面標高10.89mである。覆土は5～10cm大の泥岩多く、かわらけ粒・粗砂少量含む暗褐色粘質土の堆積を観察した。出土遺物は、9が両面に墨書された木札を図示した。当資料に関しては、第四章にて後述する。

ピット7 (図13・14、表10、図版9)

B-3～4グリッド北側で検出した。規模は、長径41×短径39×深さ23cmである。平面形状は不整円形、断面形状はU字状、検出標高11.17m、底面標高10.94mである。覆土は泥岩粒多く含む茶褐色弱粘質土である。出土遺物は、10の轆轤かわらけ大皿のみ図示した。

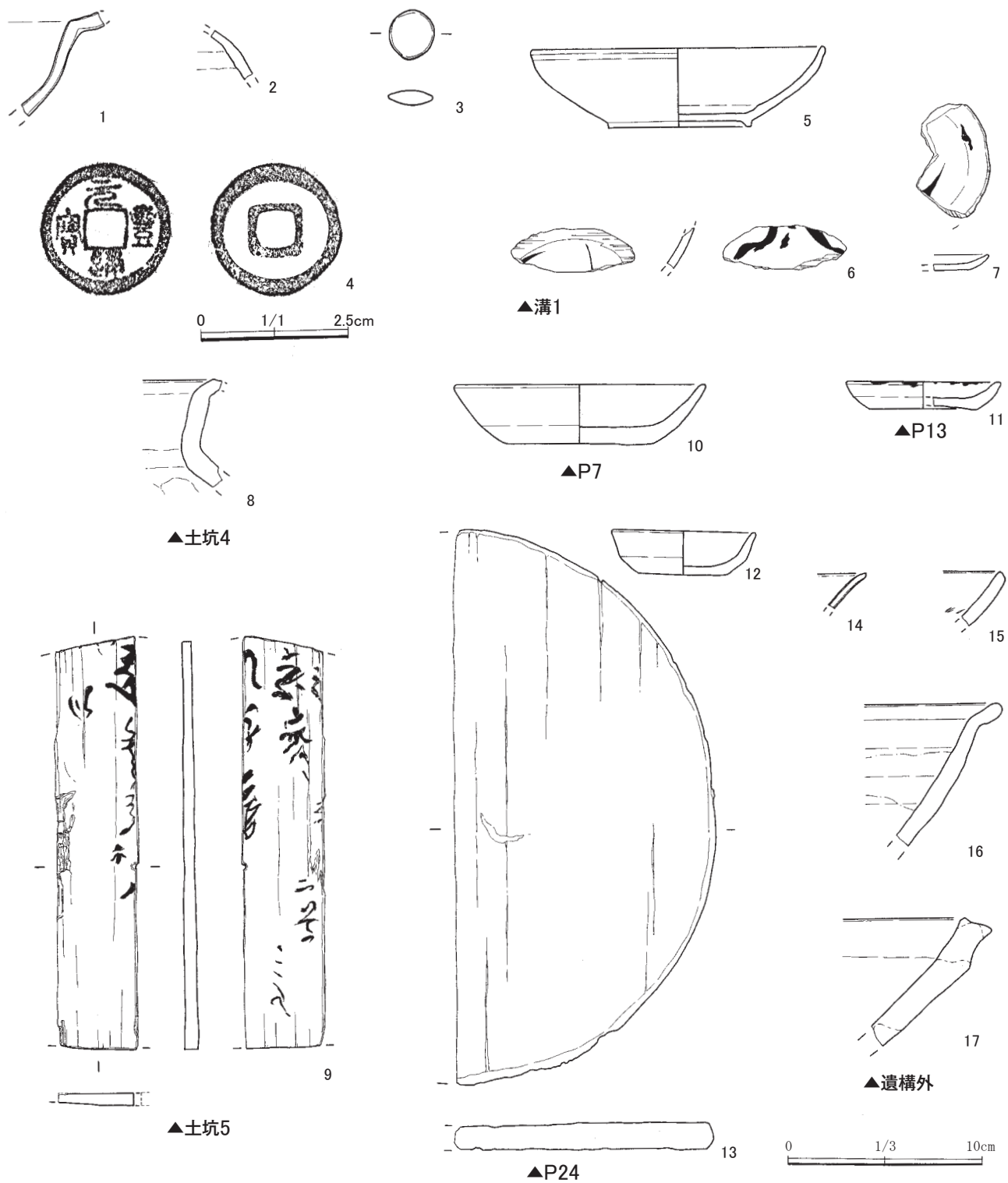


図14 3面各遺構・遺構外出土遺物

ピット13 (図13・14、表10、図版9)

調査区北東隅、A-3グリッドの南側で検出した。側溝により削平してしまい、南西部僅かな範囲を確認した。確認できた規模は、長径(16)×短径(10)×深さ15cmである。検出標高11.23m、底面標高11.08mである。覆土は泥岩粒多量、炭化物少量、やや粗砂混じる暗褐色粘質土が堆積していた。出土遺物は、11の轆轤かわらけ小皿のみ図示した。

ピット24 (図13・14、表10、図版9)

調査区南東隅、D-4グリッドの北側で検出した。側溝により削平してしているが、溝1より新しい。確認できた規模は、長径56×短径(52)×深さ19cmである。検出標高11.26cm、底面11.07cmである。覆土は泥岩粒少量含む暗褐色粘質土で、曲物の底板1/2程が廃棄されていた。出土遺物は、12が轆轤かわらけ小皿、13は曲物の底板を図示した。

3面遺構外出土遺物 (図14、表10、図版9)

2面から掘り下げ3面検出までに出土した遺物を図示した。総数468点中、轆轤かわらけ大皿が9割近くを占める。図示できた遺物は、14が白磁口はげ皿の口縁部小片、15は瀬戸おろし皿の口縁部小片、16は瀬戸折縁深皿の口縁～胴部片、17は常滑片口鉢Ⅱ類の口縁～胴部片である。

第4節 4a・b面の遺構と遺物

当面から地下水の影響か全体に青味がかかった様相になる。当面では基盤となる4b面があり、その廃絶後、部分的に地業を行っており、その遺構確認面を4a面(図15)、基盤層を4b面(図17)とした。前者は地表下約120cm、標高11.00m、後者は標高10.85m付近で確認した。4a面には試掘坑北側一部に炭層の拡がりを確認した。4a面の発見した遺構は土坑7基、ピット27基である。4b面は溝1条、溝状土坑1基、土坑4基、ピット8基を発見した。

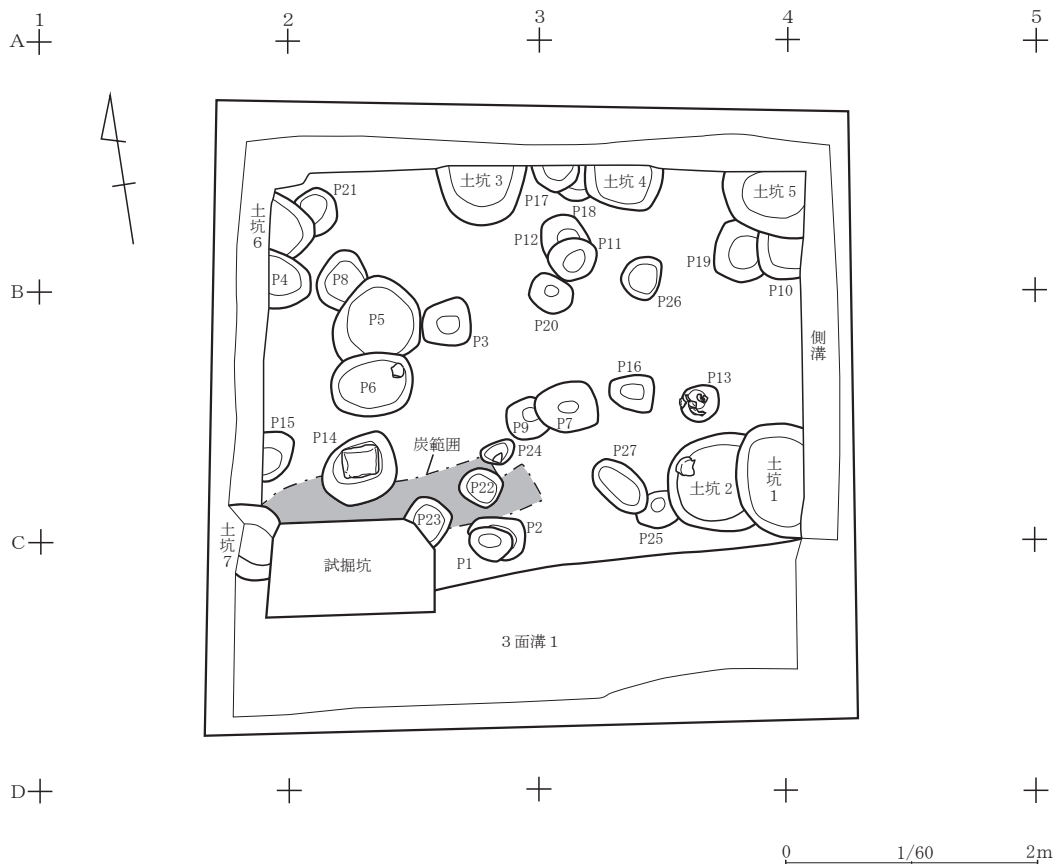


図15 4a面全測図

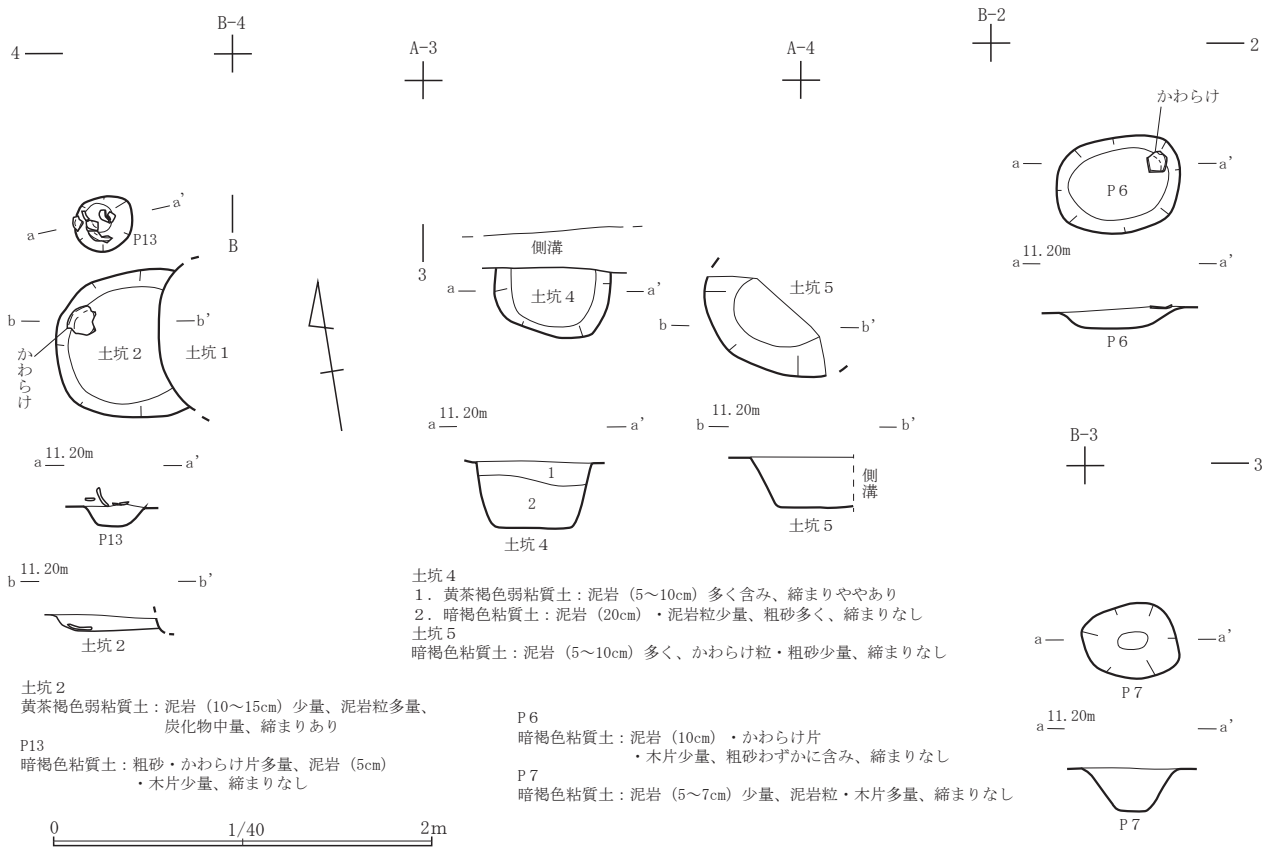


図16 4a面土坑

4a面土坑2 (図15・16・20、表10、図版10)

B-4グリッドから南西の位置で検出した。土坑1により削平されている。確認できた規模は、長径77×短径(55)×深さ5cmである。検出標高11.00m、底面標高10.95mである。覆土は黄茶褐色弱粘質土の堆積を確認しており、出土遺物は、1の轆轤かわらけ大皿を1点、図示した。

4a面土坑4 (図15・16・20、表10、図版10)

A-3グリッドから南東の位置、側溝により削平してしまっている。確認できた規模は、長径(61)×短径(33)×深さ12cmである。検出標高11.01m、底面標高10.89mである。覆土は2層に分けられ、粗砂多く含む暗褐色粘質土と5～10cm大の泥岩を含む黄茶褐色弱粘質土の堆積を観察した。出土遺物は、2の轆轤かわらけ、1点のみ図示した。

4a面ピット6 (図15・16・20、表10、図版10)

B-2グリッド南東の位置で検出した。北側のピット5を削平している状況である。規模は、長径55cm×短径50×深さ14cmである。平面形状は楕円形、断面浅皿状を呈す。検出標高は10.99m、底面標高は10.85mである。覆土は泥岩やかかわらけ片、木片を少量含む縮まりのない暗褐色粘質土が堆積しており、上面にかかわらけが廃棄されていた。出土遺物は、3の轆轤かわらけ大皿のみ図示した。

4a面ピット7 (図15・16・20、表10、図版10)

B-3グリッド南東、ピット9を削平している状況で検出した。規模は、長径50×短径42×深さ20cmである。平面形状は不整形、断面すり鉢状を呈す。検出標高は10.97m、底面標高は10.77mである。覆土は5～7cm大の泥岩少量と泥岩粒・木片を多量に含む暗褐色粘質土が堆積していた。出土遺物は、4の朱漆で内面に植物文が描かれた漆器の皿のみである。

表4 4a面遺構計測表

遺構名	平面形	検出標高(m)	底面標高(m)	規模(cm)			備考/重複関係など
				長径	短径	深さ	
土坑1	長円形	11.05	10.96	91	(54)	9	側溝により削平
土坑3	不明	11.02	10.96	(73)	(48)	6	側溝により削平
土坑5	不明	11.03	10.77	(67)	(39)	26	側溝により削平
土坑6	不明	11.01	10.92	(41)	(37)	9	P4により削平
土坑7	不明	10.92	10.73	(59)	(24)	19	試掘坑により削平
P1	不整形	10.94	10.82	35	26	12	P2を削平
P2	不整形	10.97	10.89	46	(43)	8	P1により削平
P3	隅丸方形	10.98	10.84	48	40	14	—
P4	不明	11.01	10.91	47	(34)	10	側溝により削平
P5	不整形	11.01	10.91	71	(61)	10	P6により削平
P8	不整形	11.01	10.93	49	(42)	8	P5により削平
P9	不整形円形	10.97	10.82	34	(25)	15	P7により削平
P10	不明	11.02	10.96	36	33	6	土坑5により削平
P11	不整形円形	11.02	10.86	38	37	16	P12を削平
P12	不明	11.02	10.84	35	(19)	18	P11により削平
P14	不整形	10.94	10.84	58	51	10	30×24×17cmの泥岩含む
P15	不明	10.93	10.81	39	28	12	側溝により削平
P16	隅丸方形	10.99	10.85	36	27	14	—
P17	不明	11.02	10.89	(37)	(22)	13	側溝により削平
P18	不明	11.01	10.83	(28)	(26)	18	土坑4・P17により削平
P19	不整形円形	11.04	10.95	49	(36)	9	土坑5・P10により削平
P20	長円形	10.99	10.88	34	28	11	—
P21	不整形円形	11.03	10.95	35	24	8	土坑6により削平
P22	隅丸方形	10.95	10.91	35	31	4	—
P23	方形	10.95	10.91	35	(26)	4	試掘坑により削平
P24	隅丸三角形	10.97	10.91	29	18	6	—
P25	長円形	11.00	10.76	33	28	24	—
P26	不整形	11.00	10.95	35	34	5	—
P27	楕円形	11.00	10.93	53	31	7	—

4a面ピット13(図15・16・20、表10、図版10)

B-4グリッドから南西の位置、土坑2の北側に隣接する。規模は長径31×短径30×深さ11cmである。平面形状は円形、断面すり鉢状を呈す。検出標高は11.00m、底面標高は10.89mである。覆土は粗砂多く、5cm大の泥岩と木片を少量含む暗褐色粘質土で上面に3個体ほどのかわらけが廃棄されていた。出土遺物は、5～7の轆轤かわらけ大皿、3点を図示した。

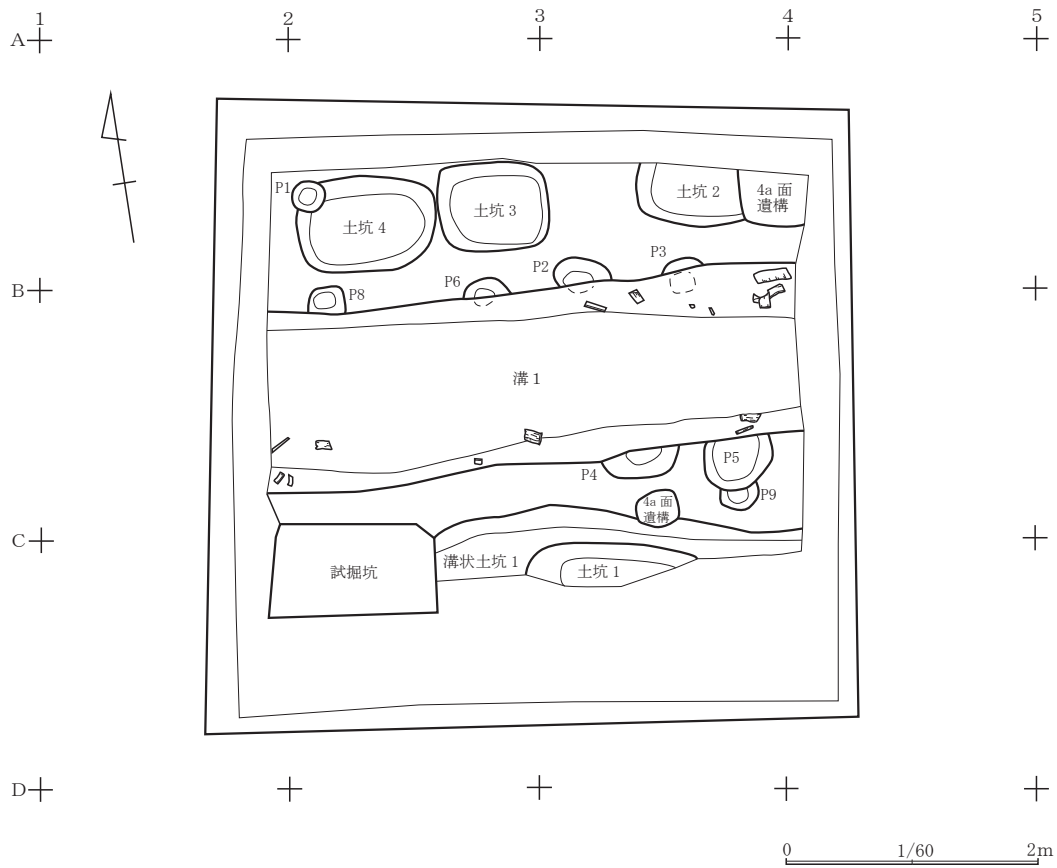
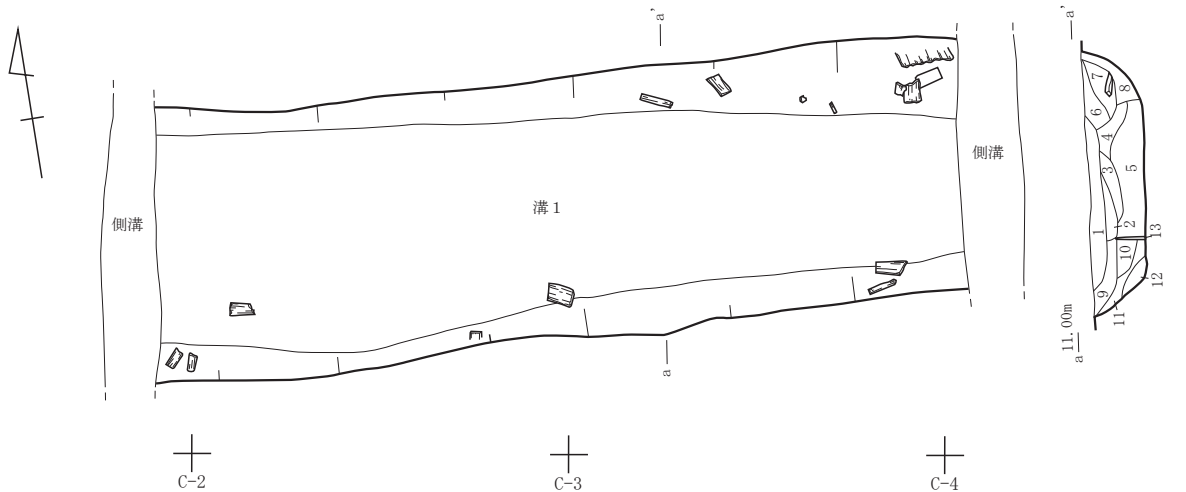


図 17 4b面全測図



溝 1

- | | |
|--|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 暗褐色粘質土：泥岩粒多量、粗砂多く、木片少量、縮まりなし 2. 暗褐色粘質土：泥岩粒少量、暗茶褐色粘土ブロック多く、砂利多量、縮まりなし 3. 暗褐色粘質土：泥岩（10cm）少量、炭化物微量、細砂多く、縮まりなし 4. 暗褐色粘質土：泥岩粒中量、暗茶褐色粘土ブロック少量、縮まりなし 5. 暗褐色粘質土：泥岩（5~7cm）・炭化物少量、泥岩粒多く、貝片微量、縮まりややあり 6. 暗褐色粘質土：泥岩（10~15cm）少量、泥岩粒中量、縮まりややあり | <ol style="list-style-type: none"> 7. 暗褐色粘質土：泥岩（5~7cm）中量、縮まりややあり 8. 暗茶褐色粘質土：泥岩粒中量、貝片微量、縮まりなし 9. 暗茶褐色粘質土：泥岩粒・木片少量、縮まりなし 10. 暗茶褐色粘質土：縮まりなし 11. 暗茶褐色粘質土：泥岩粒・木片微量、縮まりややあり 12. 暗褐色粘質土：泥岩粒多量、貝片・茶褐色粘土ブロック少量、縮まりあり 13. 暗褐色粘質土：泥岩粒多量、板材の痕跡 |
|--|---|

図 18 4b面溝 1

4a面遺構外出土遺物(図21、表11、図版10)

3面構成土から4a面上にかけて出土した遺物を図示した。図21-1は復元口径7.4cmを測る轆轤かわらけ小皿、2は復元口径11.6cmを測る轆轤かわらけ中皿、3は白磁口はげ皿の口縁部小片、4は青磁碗底部片、5は青白磁梅瓶、6は肩部に扇状の押印がある常滑甕、7は常滑甕の胴~底部片、8・9は常滑片口鉢Ⅰ類、10・11は常滑片口鉢Ⅱ類、12は滑石鍋の口縁部片である。

4b面溝1(図17・18・20、表10・11、図版3・10)

調査区中央、B～Cラインにかけて検出した。東・西部は調査区外に拡がり、周辺の遺構を削平している状況である。主軸方位はN-85°-Wと真北に直交する近い角度で掘られている。掘り方の規模は、長さ430×幅138～146×底面幅73～112×深さ33cmである。検出標高は10.95m、底面標高は10.62mで底部平坦に掘られている。覆土は図18に示した通り、13層観察した。土層の観察から、板材を用いた木組みの溝の可能性が考えられ、検出状況からも本遺構に使用されたであろう板材が所々残存していた。また、本来の溝幅は70cmほどであったと想定される。出土遺物は、検出作業中に上層、下層、裏込め北側、裏込め南側と分けて取り上げた。図20-8は轆轤かわらけ小皿、9は青磁折縁鉢、10は轆轤かわらけ小皿、11は青磁蓮弁文碗、12は中野編年6a～6b型式の口縁形態をもつ常滑甕、13は肩部に押印がある常滑甕、14は轆轤かわらけ小皿、15は常滑甕の口縁部、16は轆轤かわらけ小皿、17は褐釉双耳壺の胴部片、18は常滑片口鉢Ⅰ類、19は常滑甕口壺胴部片である。

4b面土坑2(図17・19・20、表11、図版10)

A-4グリッド南西の位置、4a面土坑5と側溝により削平された状況で検出したが、全体像は不明である。確認できた規模は、長径(82)×短径(50)×深さ17cmである。検出標高10.92m、底面標高は10.75mである。覆土は10～15cm大の泥岩や泥岩粒を含む黄茶褐色弱粘質土である。出土遺物は、図20-20・21の轆轤かわらけ大皿2点を図示した。

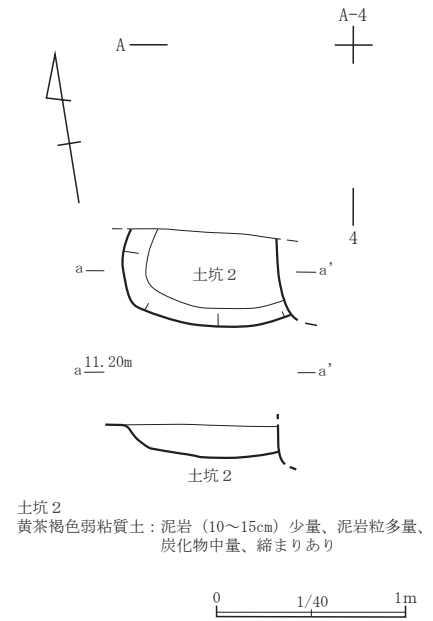


図19 4b面土坑2

表5 4b面遺構計測表

遺構名	平面形	検出標高(m)	底面標高(m)	規模(cm)			備考/重複関係など
				長径	短径	深さ	
溝状土坑1	不明	10.95	10.81	(296)	(18~48)	14	土坑1により削平
土坑1	不明	10.93	10.83	(39)	(38)	10	側溝により削平
土坑4	隅丸方形	10.92	10.78	111	76	14	P1により削平
P1	円形	10.95	10.86	27	26	9	土坑4を削平
P2	不明	10.94	10.75	(42)	(25)	19	溝1により削平
P3	不明	10.95	10.78	(35)	(22)	17	溝1により削平
P4	不明	10.94	10.55	63	(23)	39	溝1により削平
P5	不整形	10.93	10.83	55	(40)	10	溝1により削平
P6	不明	10.92	10.82	(38)	(19)	10	溝1により削平
P7	不整形円形	10.94	10.87	31	(20)	7	P5により削平
P8	方形	10.90	10.66	29	(21)	24	溝1により削平

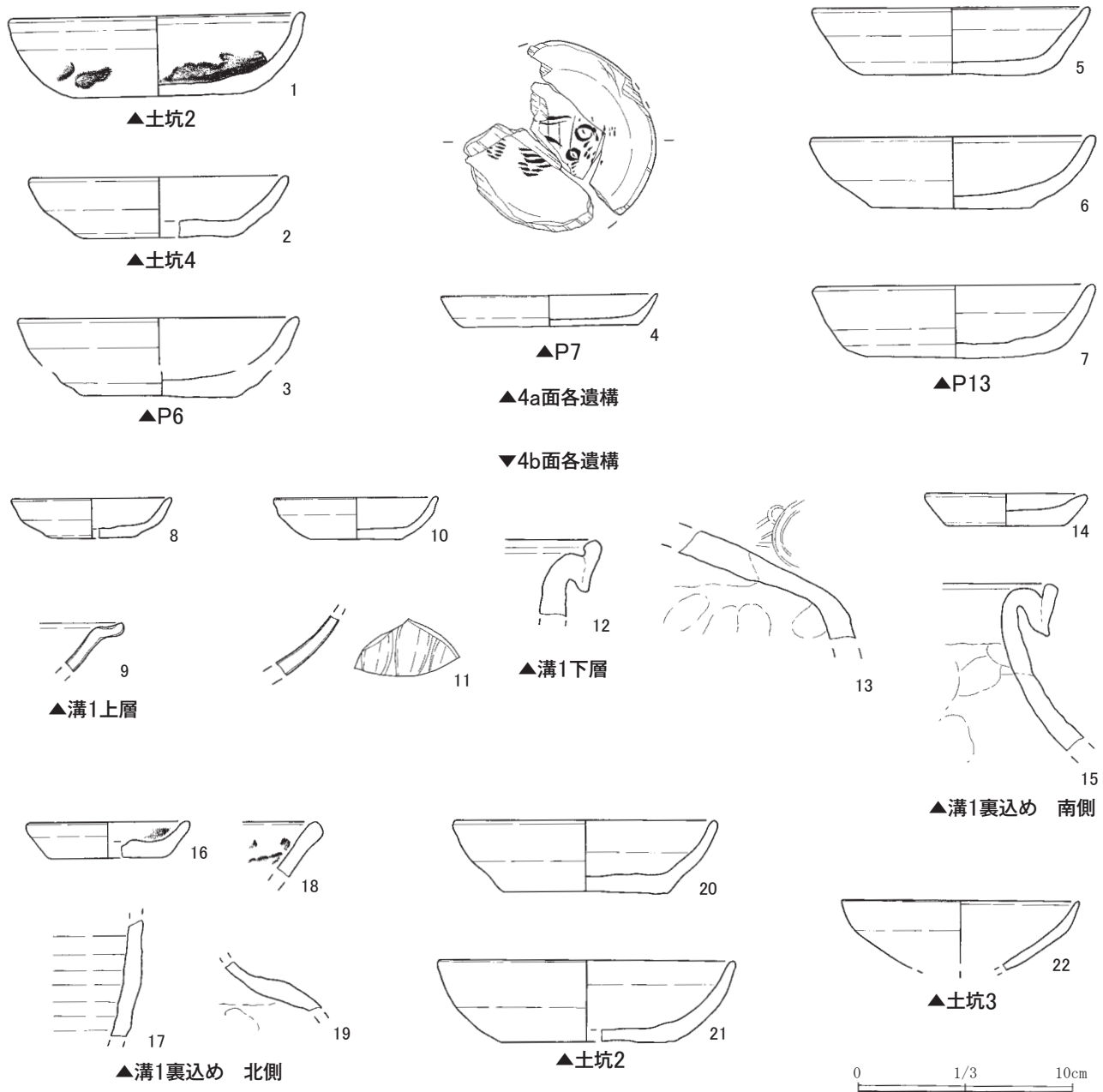


図20 4a・b面各遺構出土遺物

4b面土坑3 (図17・19・20、表11、図版10)

A-3グリッドより南の位置で検出した。規模は、長径88×71×深さ13cmである。平面形状は方形、断面形は皿状を呈す。検出標高は10.92m、底面標高は10.79mである。覆土は15～20cm大の泥岩中量、泥岩粒多量、褐色粘質土ブロック多く、粗砂僅かに含む暗褐色弱粘質土の堆積を観察した。出土遺物は、図20-22の吉備系土器口縁部片を図示した。

4b面遺構外出土遺物 (図21、表11、図版10・11)

4a面構成土中から出土した遺物、総数31点中7点を図21に図示した。13は瀬戸輪花型入子で、推定8弁になると思われる、内底部に墨痕が残る。文字なのかは不明である。14は中野編年6a型式の口縁形態に似る常滑甕、15は中野編年6b型式と思われる常滑甕、16は内面磨滅している常滑片口鉢1類、17は滑石鍋を転用したスタンプで両面に植物文が陰刻されている。18は両端丸味を帯び、円筒状に加工してある骨角製品だが、用途は不明である。栓として使用した可能性が考えられるが、その場合、水注の注口部などが想像できる。19は篆書で铸造された治平元寶である。

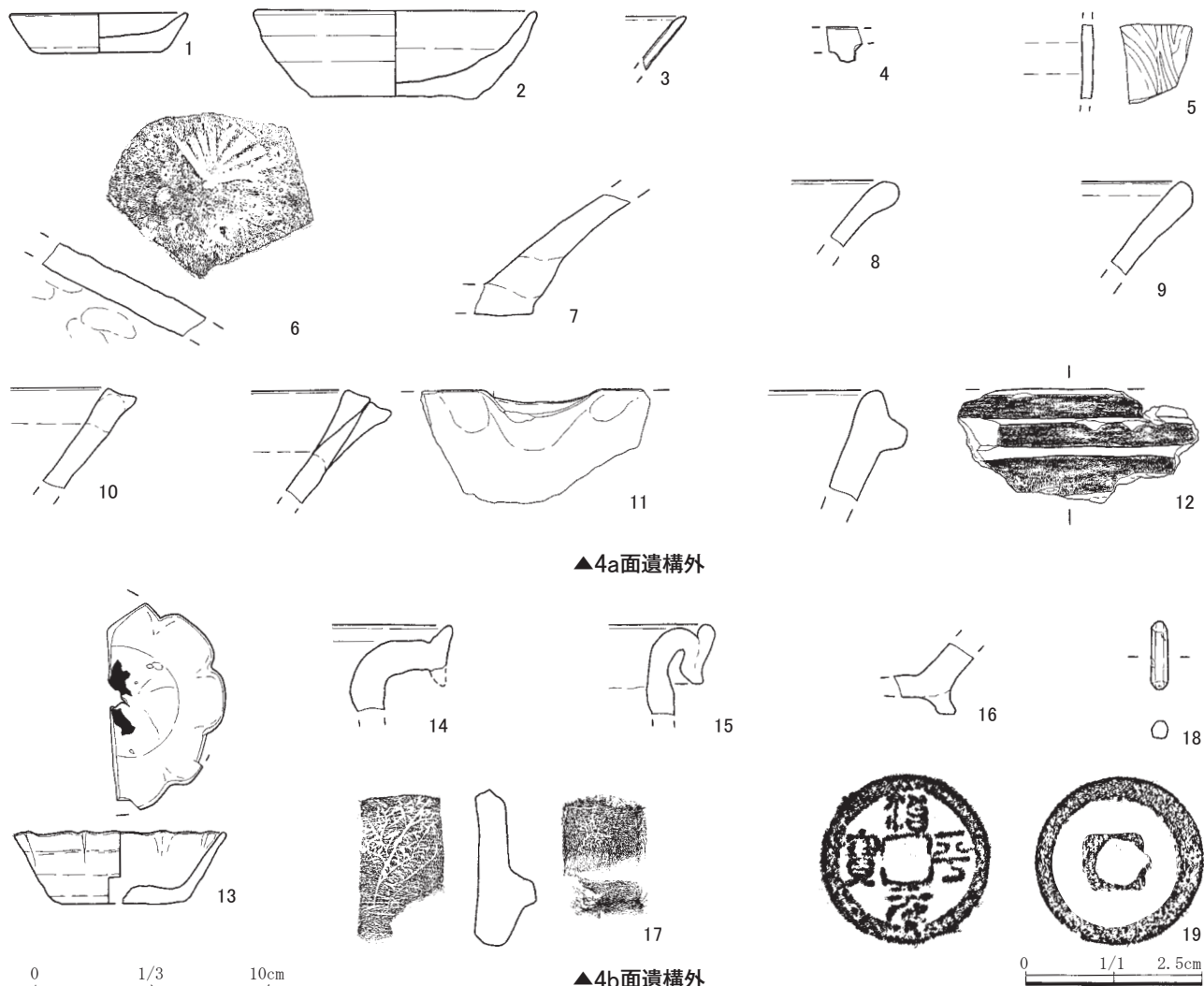


図21 4a・b面遺構外出土遺物

第5節 5面の遺構と遺物

地表下140cm、標高10.80～10.85m前後で確認した(図22)。当遺構面から残土置場の状況や今後の排出量を踏まえ、西側70cmを未調査部分として残した。また、中央部に上面で検出した溝で削平されているため、遺構の全体像は不明瞭に近い状況であった。発見した遺構は、方形土坑4基、囲炉裏1基、土坑2基、ピット6基である。

方形土坑1(図22・23・25、表11、図版11)

調査区南東隅、C-4グリッドで検出した。土坑1、ピット1・2に削平され、調査区外に拡がる。確認できた規模は、長径(112)×短径(110)×深さ22cmである。検出標高10.86m、底面標高10.64mである。覆土は2層に分けられ、暗褐色粘質土が堆積していた。図示した出土遺物は、1が内面朱漆で文様が描かれた漆器皿、2が内外面に鶯、梅花、木の枝のスタンプを組み合わせた文様をもつ漆器碗である。

方形土坑2(図22・23・25、表11・12、図版11)

調査区南側、C-3グリッド付近で検出した。試掘坑、側溝などの削平や調査区外への拡がりのため、全体の規模は不明瞭である。確認できた規模は、長径(235)×短径(96)×深さ21cmである。検出標高は10.82m、底面標高は10.61mである。覆土は3層に分けられ、方形土坑1と同様の暗褐色粘質土と暗灰色粘質土が堆積していた。出土遺物は、3が轆轤かわらけ小皿、4は轆轤かわらけ大皿、5は青磁蓮弁

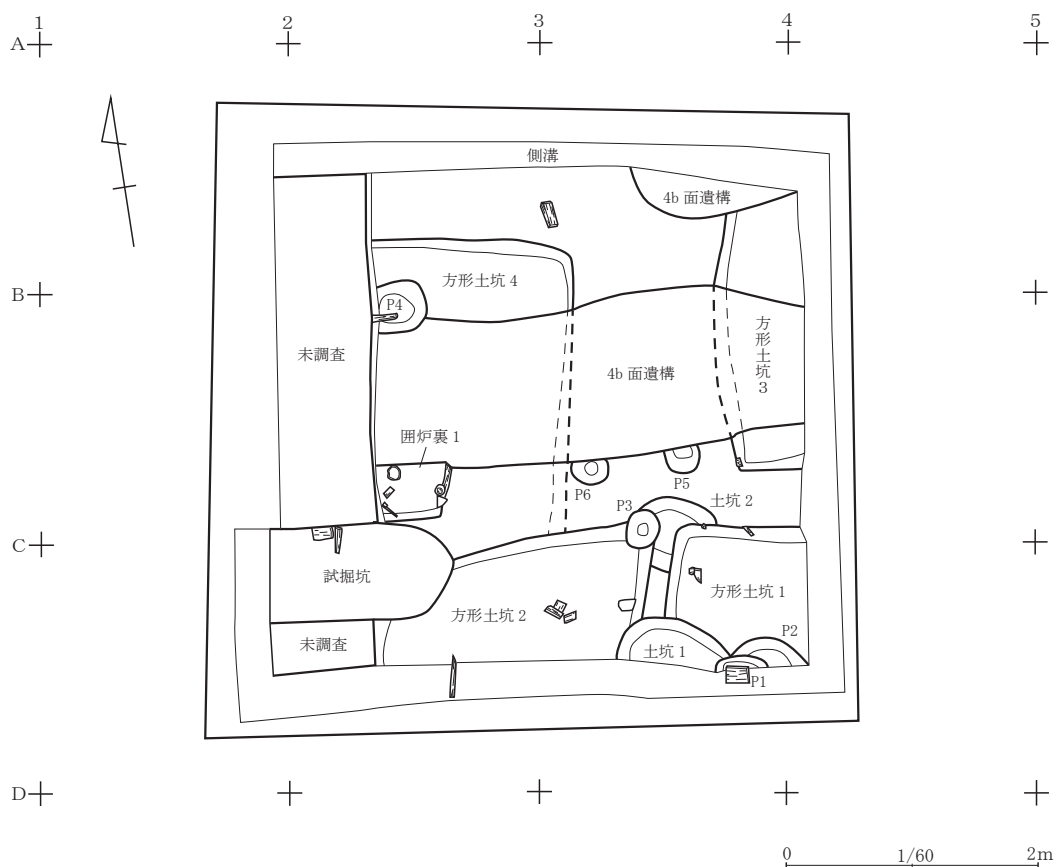


図22 5面全測図

文碗、6は中野編年7型式の口縁形態を呈す常滑甕、7は6b型式の常滑甕、8は6と同一個体の可能性がある常滑甕、9・10は常滑甕の底部片、11・12は常滑片口鉢I類の口縁部、13は開元通寶、14は元豊通寶などが図示できた。

方形土坑4 (図22・23・25、表12、図版11)

B-2グリッドの東、D-3グリッドの南側にあり、4b面溝1により半分以上が削平されていると思われる。南側にも同一遺構の延長と思われる落ち込みを検出したが範囲のみを確認した。確認できた規模は、長径(158)×短径(56~64)×深さ14cmである。検出標高は10.81m、底面標高は10.67mである。覆土は泥岩粒多量で粗砂多く含む暗褐色粘質土が堆積していた。出土遺物は、15・16の轆轤かわらけ小皿を図示した。

囲炉裏1 (図22・24・25、表12、図版11)

C-2~3グリッド間北側で検出した。北側は4b面溝1、東側は未調査部分に拡がっている様相である。確認できた規模は、長径(52)×短径(44)×深さ最大22cmである。検出標高は10.74~10.86m、底面標高は10.64mである。東側には長さ45cmの横板、その内側、当遺構の南東隅には高さ17cmの縦板が一部残存していた。覆土は3層に分けられた。最下層には暗褐色砂質土中に炭化物と灰が多量に含まれており、木組み状の痕跡と灰の堆積から囲炉裏とした。当遺構内の最上層中には完形の木製の枡や火葬骨を含むかわらけが出土しているが、どのような関係をもつ遺構なのかは想像し難いところである。出土遺物は、17・18が轆轤かわらけ小皿、19は内部に火葬骨を含む轆轤かわらけ中皿である。21は長い板状に孔が4箇所不均等な間隔で穿たれているが、両端部欠損している状態であり、用途不明の木製品である。

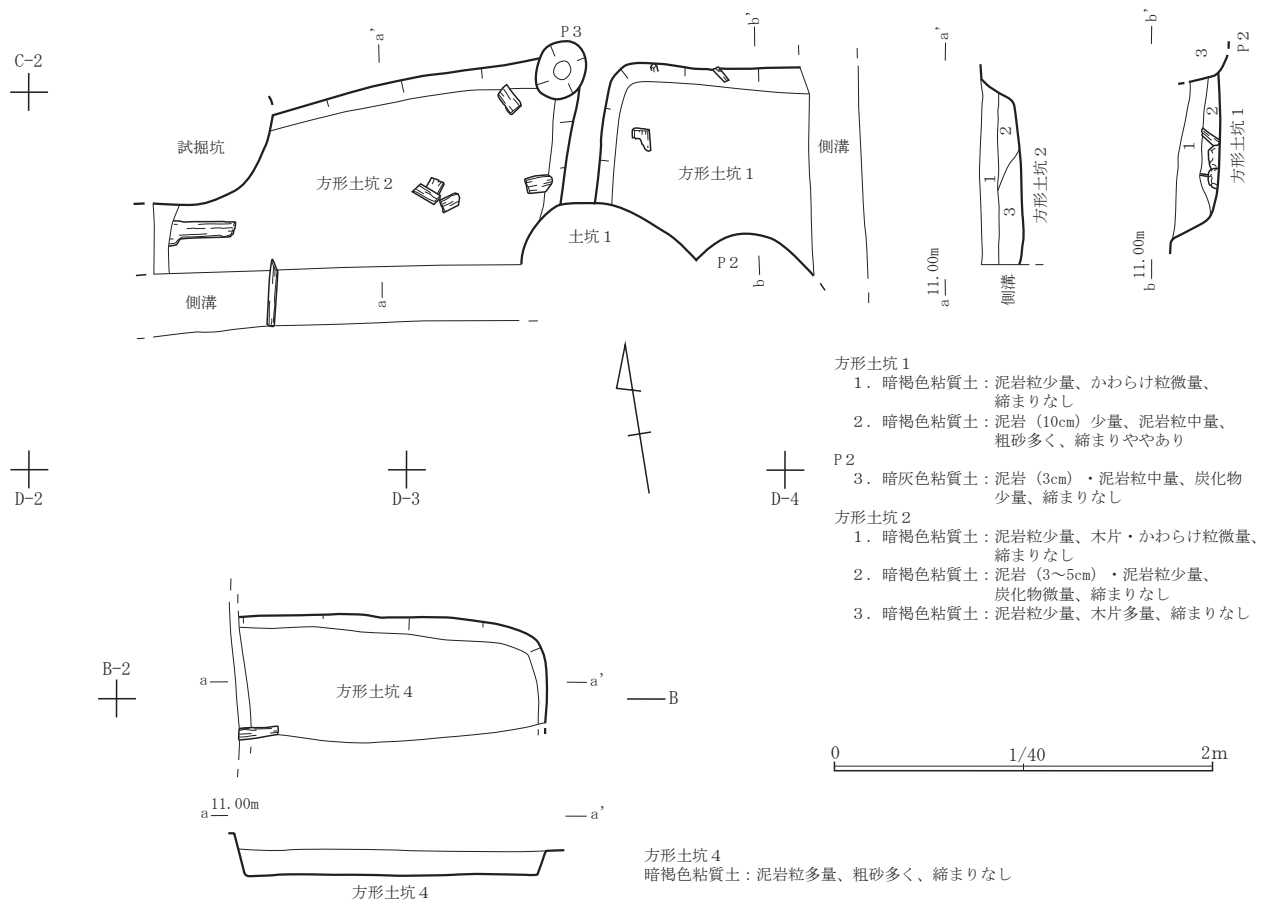


図23 5面方形土坑 1・2・4

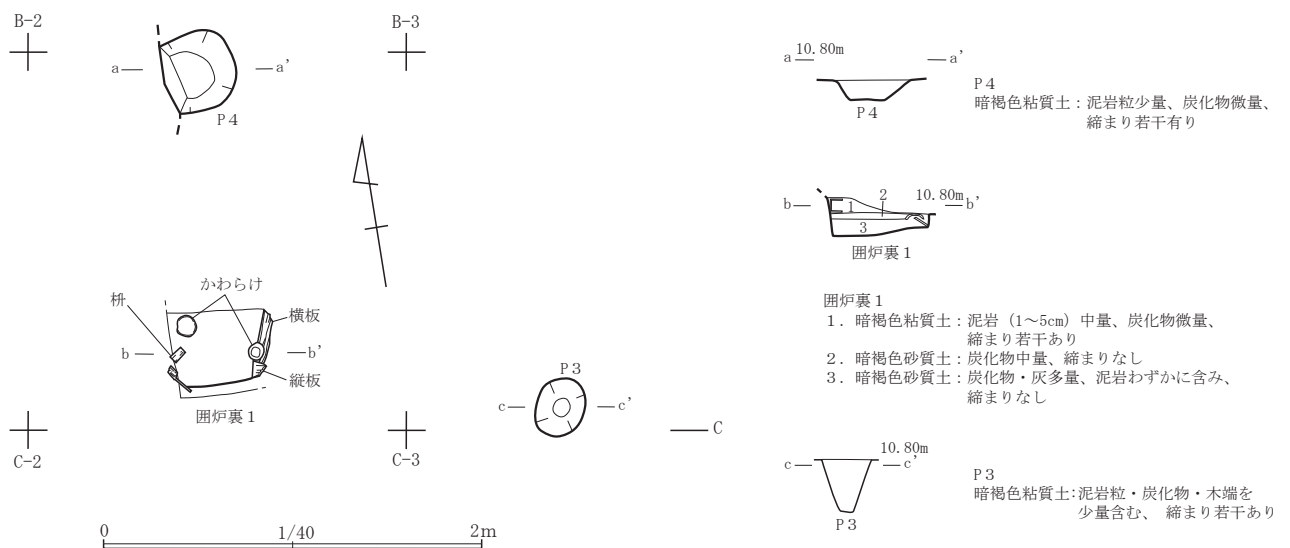
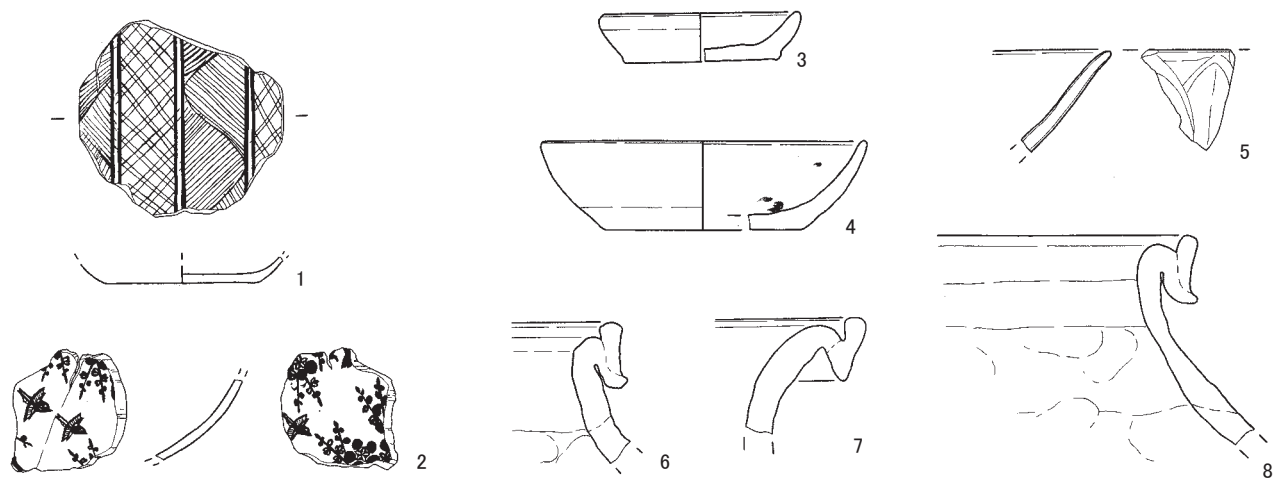
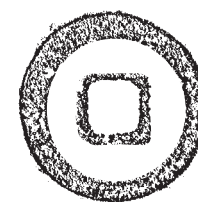
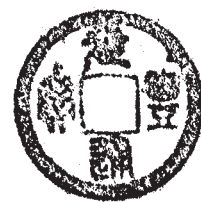
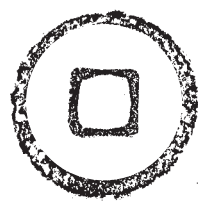
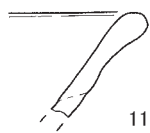
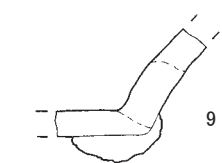


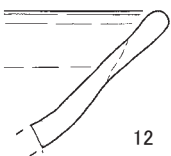
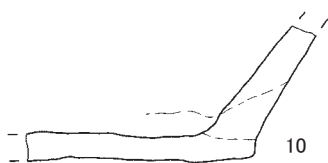
図24 5面各遺構



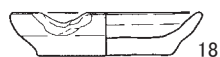
▲方形土坑1



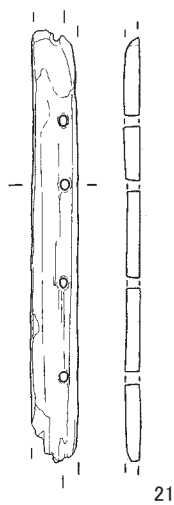
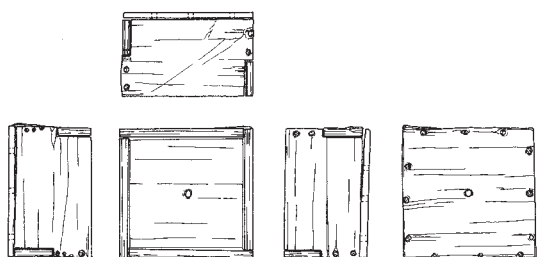
0 1/1 2.5cm



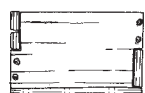
▲方形土坑2



▲方形土坑4



▲P3



▲圜炉裏1



▲P4

0 1/3 10cm

图25 5面各遺構出土遺物

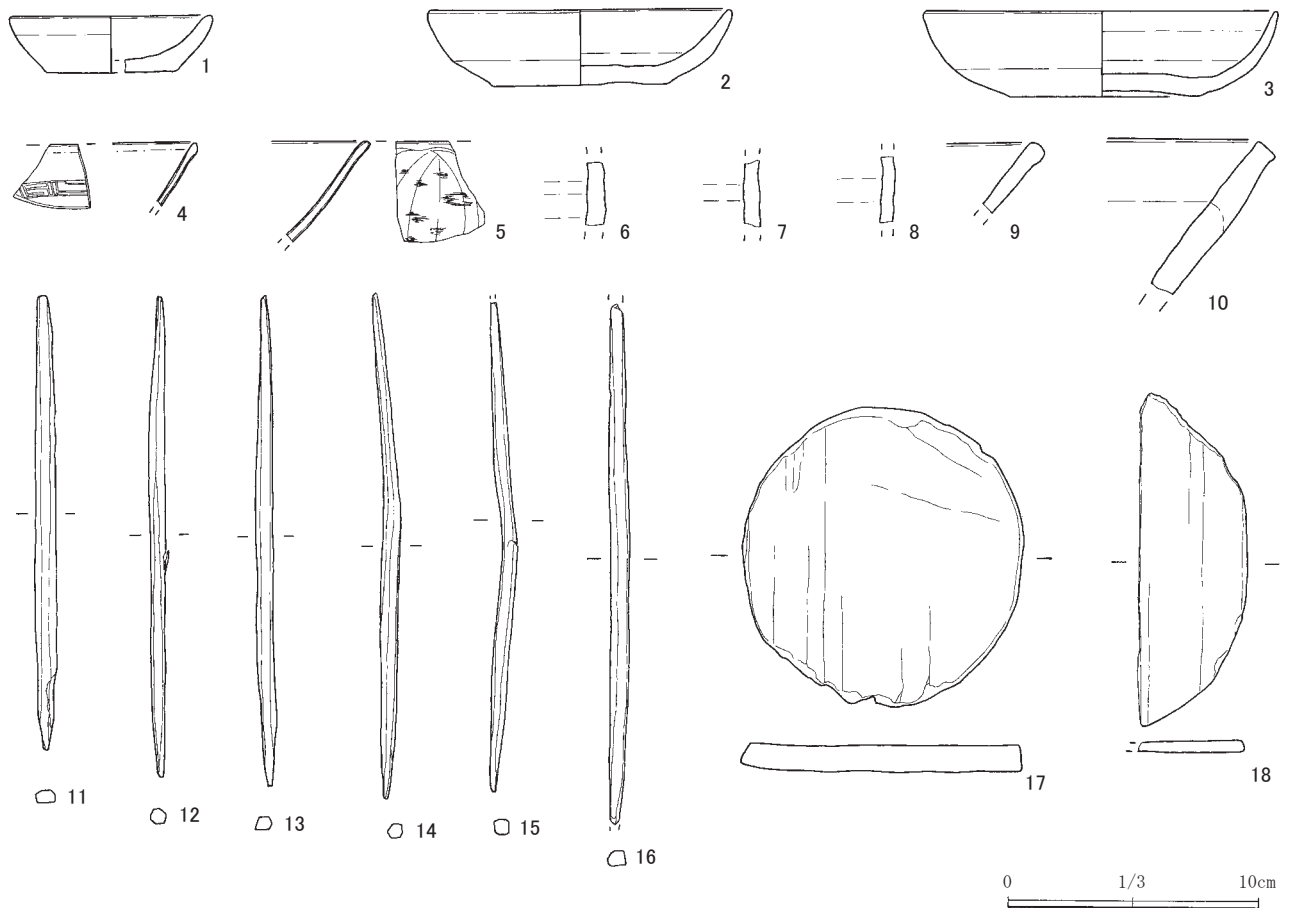


図26 5面遺構外出土遺物

表6 5面遺構計測表

遺構名	平面形	検出標高 (m)	底面標高 (m)	規模 (cm)			備考/重複関係など
				長径	短径	深さ	
方形土坑3	方形	10.87	10.68	(223)	(57~60)	19	側溝により削平
P1	不明	10.77	10.64	(42)	(21)	13	長17×幅12×厚3cmの礎板あり
P2	不明	10.64	10.62	(65)	(24)	2	P1により削平
P5	不明	10.77	10.63	27	24	14	4b面溝1により削平
P6	円形	10.77	10.63	29	24	14	—
土坑1	不明	10.75	10.57	(91)	(36)	18	P1により削平
土坑2	隅丸円形	10.79	10.66	69	59	13	—

20は木製の枘である。長方形の板材の両短辺対角に切り込みを入れ、方形に組み合わせて、組み合わせた部分と底面から木釘で固定している。長さ5.1×幅5.2×高さ3.3cmで内部の体積は60.75cm³を測る。一合枘の3分の1以下であり、中世期の枘の規格にはみられない。また、底板中央には釘で打ちつけたような穿孔がある。このことから祭祀や神事に使用された可能性も考えられるが、用途としては不明である。

ピット3 (図22・24・25、表12、図版11)

C-3グリッド東側、方形土坑2の北東隅を削平する状況で検出した。規模は、長径30×短径28×深さ30cmである。平面形状は不整円形、断面U字形、検出標高は10.83m、底面標高10.53mである。覆土は泥岩粒、炭化物、木端を少量含む暗褐色粘質土の堆積を観察した。出土遺物は、22の轆轤かわらけ中皿1点を図示した。

ピット4 (図22・24・25、表12、図版11)

B-2~3グリッドの間中央、方形土坑4を削平している状況で検出した。方形土坑4の掘削中に発見

したため、検出標高は低い位置である。また、未調査部分の土層堆積から新旧関係を決定した。確認した規模は、長径41×短径(30)×深さ9cmだが本来は20cmほどだろう。平面形は推定円形状、断面は鉢型を呈す。検出標高は10.68 m、底面標高は10.59 mである。覆土は、泥岩粒少量、炭化物微量を含む暗褐色粘質土が堆積していた。出土遺物は、23の内外面に煤が付着している轆轤かわらけ小皿1点のみ図示した。

5面遺構外出土遺物(図26、表12、図版11・12)

4面から5面検出時に出土した遺物、総数197点中18点を図示した。図26-1は轆轤かわらけ小皿、2は轆轤かわらけ中皿、3は轆轤かわらけ大皿、4は内面に文様のある白磁口はげ皿、5は青磁蓮弁文碗、6~8は褐釉壺の胴部片で、おそらく3点共に同一個体であろう。9は常滑片口鉢Ⅰ類、10は常滑片口鉢Ⅱ類、11~16は多角形状に削り加工した木製箸、17・18は曲物底板、共に柾目材を用いて端部を斜めに削り加工している。

第6節 6面の遺構と遺物

5面より20cmほど掘り下げた段階で粗雑な暗青灰色の泥岩版築を確認したので、これを6面として捉えた。地表下160cm、標高10.60 m付近の位置で確認し、ほぼ平坦な遺構面である(図27)。発見した遺構は方形土坑1基、土坑8基、ピット24基である

方形土坑1(図27・28、図版5)

調査区中央北側、B-2~3グリッド間の位置で検出した。西側は調査区外に展開する。確認した規模は、長径(164)×短径155×深さ最大45cmである。検出標高は10.60 m、底面標高は10.15~10.26 mである。覆土は6層を観察したが、2層に大別でき、上層に暗茶褐色粘質土、下層に暗灰色粘質土が堆積してい

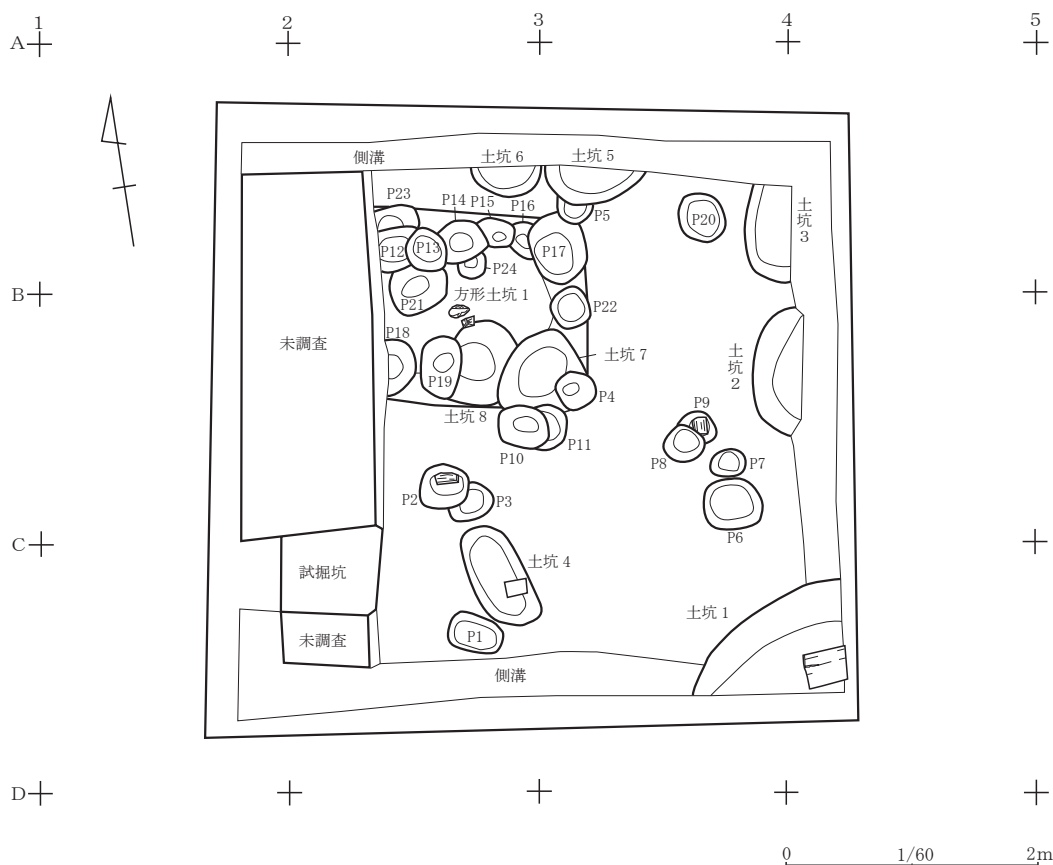


図27 6面全測図

るのを観察した。本遺構の内周には、土坑やピットが多数掘られている状況で、新旧関係ではピット23を除き、一番古い遺構である。特筆すべきは、確認範囲内の中央底面に犬頭骨が東向きで置かれ、さらに南隣には約8cm角の柱状木材がセットとなるような様相で置かれていたことである。どのような意図があるかは想像し難いが、「墓」のような性格をもつ可能性

も考えられるだろうか。出土遺物は、轆轤かわらけ大皿や常滑甕片が少量出土しているが、いずれも図示し得るには至らなかった。

土坑1 (図27・29・30、表12・13、図版12)

調査区南東隅、C-4グリッド南の位置で検出した。確認時には側溝により削平しており、大半は調査区外に展開しているため、全体は不明である。底面直上には組板状の木材が廃棄されていた。確認できた規模は、長径(127)×(79)×深さ35cmである。検出標高は10.57m、底面標高は10.22mである。覆土は3~5cm大の泥岩少量と泥岩粒中量、粗砂多量に含む締まりのない暗青灰色粘質土を観察した。出土遺物は、図30-1が口縁部に一部煤が付着している轆轤かわらけ大皿、2・3共に轆轤かわらけ大皿である。

土坑2 (図27・29・30、表13、図版12)

調査区中央東端、B-4グリッド南側で検出した、大半は側溝の削平や調査区外に展開すると思われる。確認できた規模は、長径(99)×短径(38)×深さ24cmである。検出標高は10.58m、底面標高は10.34mである。覆土は15~20cm大の泥岩を中量、貝砂や常滑片多く含む暗茶褐色粘質土が堆積していた。出土遺物は、4が轆轤かわらけ小皿、5が中野編年7型式の常滑甕、6は8型式の常滑甕、7は降灰多量で不鮮明だが、押印がある常滑甕の肩部片である。

ピット6 (図27・29・30、表13、図版12)

調査区南東部、C-4グリッドから北西の位置で検出した。規模は、長径47×短径41×深さ7cmである。平面形状は楕円形、断面浅皿型で、検出標高は10.60m、底面標高は10.53mである。覆土は泥岩粒少量、炭化物僅かに含む暗茶褐色粘質土が堆積していた。出土遺物は、常滑片口鉢I類1点のみ図示した。

ピット14 (図27・29・30、表13、図版12)

B-3グリッドより北西の位置で検出した。方形土坑1やピット15・23を削平しているが、ピット13により削平されている。確認した規模は、長径33×短径(32)×深さ21cmである。断面形はU字形、検出標高10.58m、底面標高10.37mである。覆土は泥岩粒多量、粗砂少量含む暗褐色粘質土を観察した。出土遺物は、9が青磁蓮弁文碗、10が褐釉壺の底部片である。

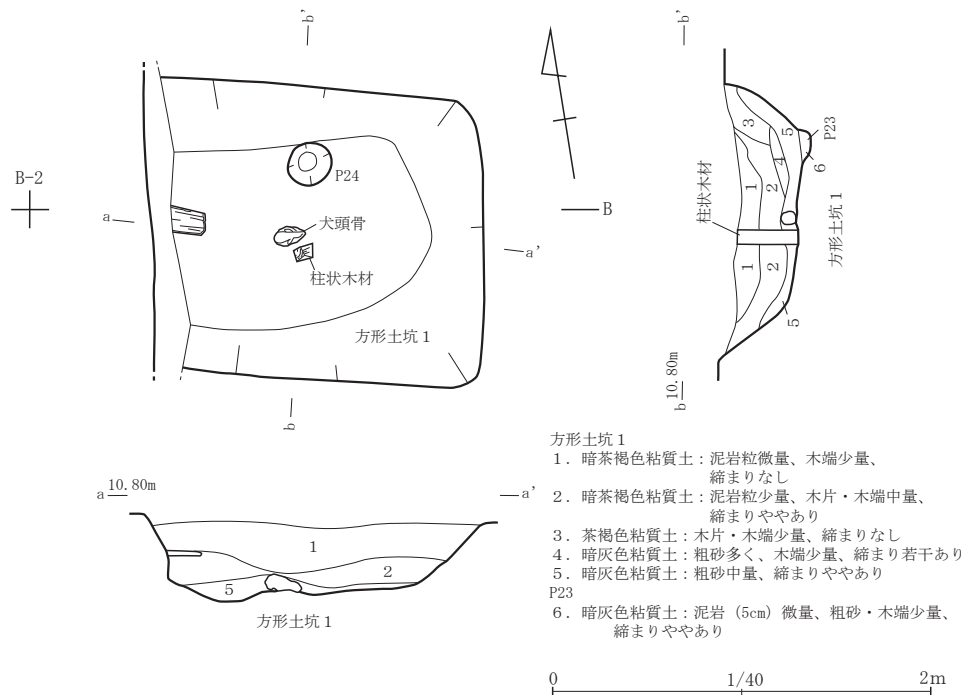


図28 6面方形土坑1

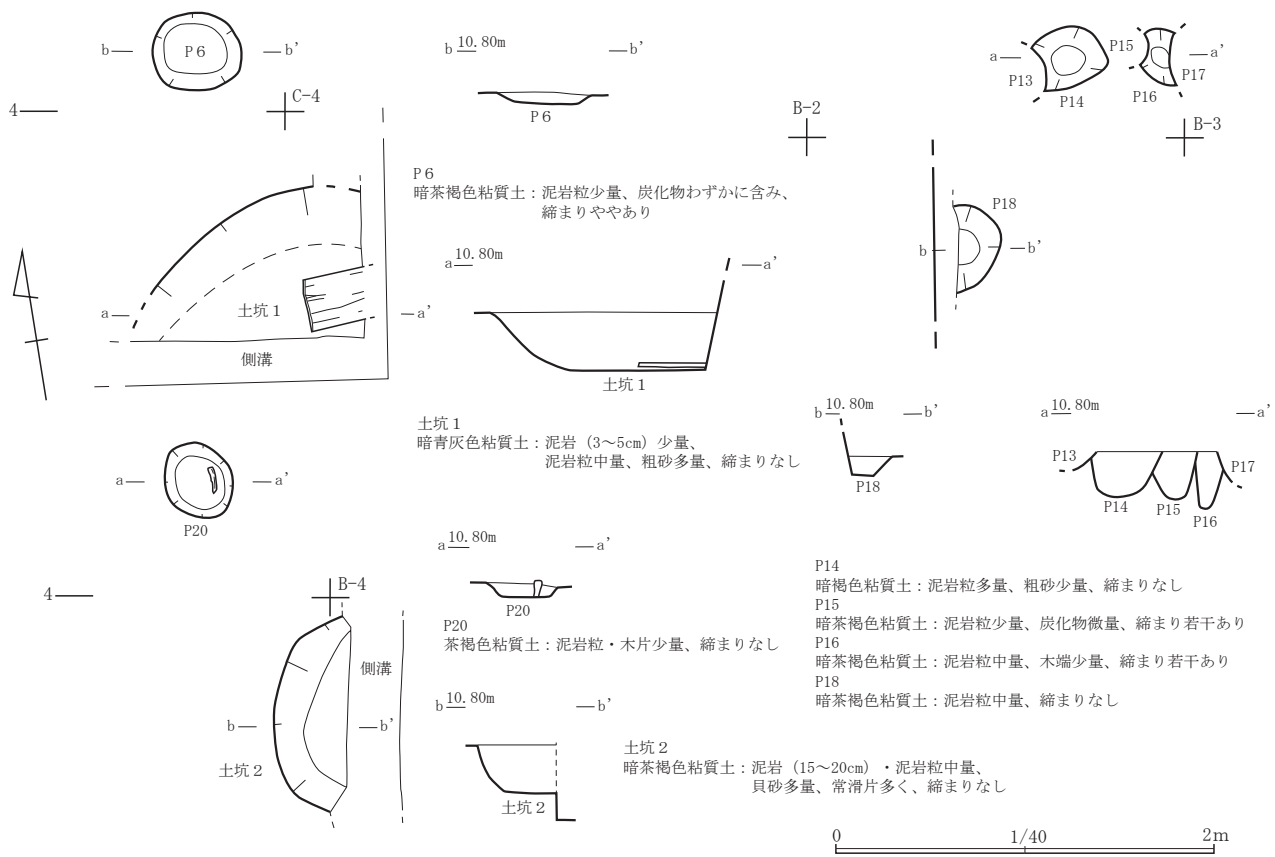


図29 6面土坑・柱穴

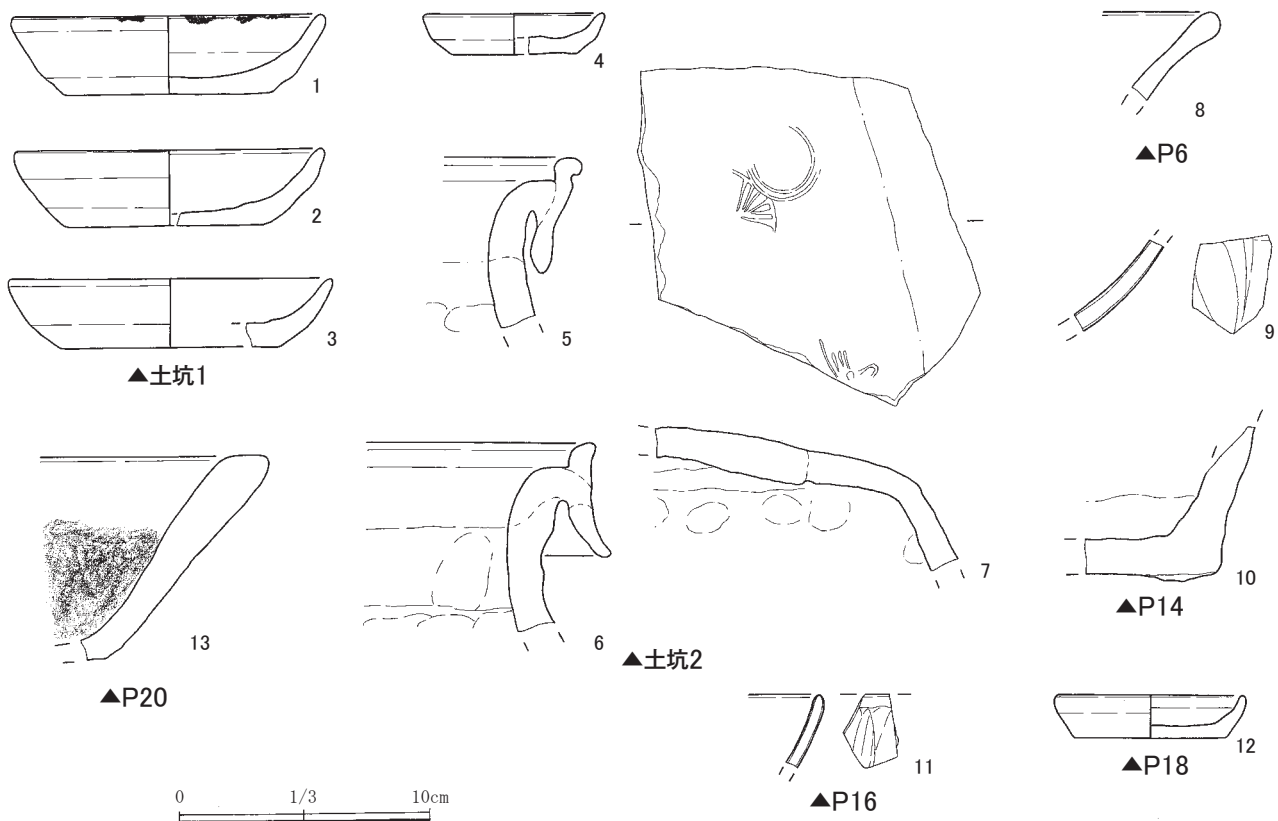


図30 6面各遺構外出土遺物

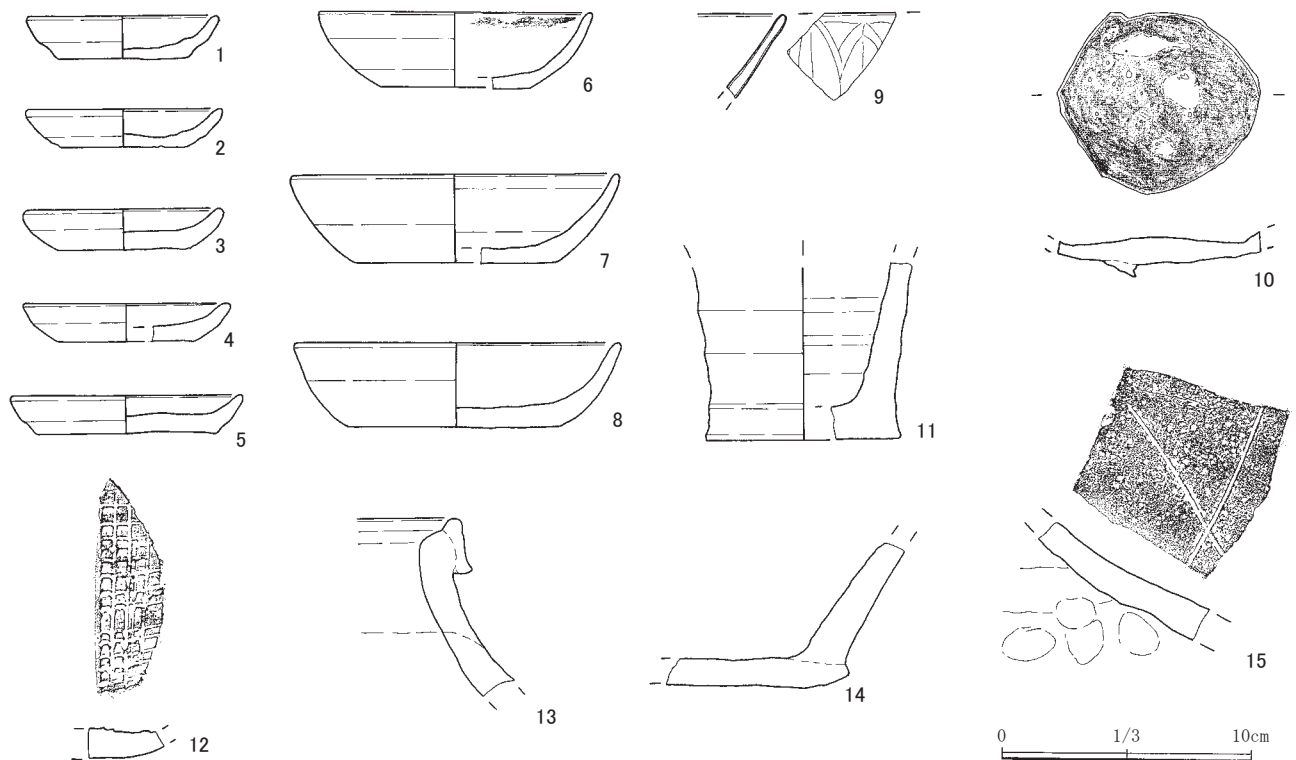


図31 6面遺構外出土遺物

ピット16 (図27・29・30、表13、図版12)

B-3グリッドより北側の位置で検出した。ピット15・17により東西を削平されている。確認した規模は、長径23×短径(23)×深さ25cmである。断面V字状を呈し、検出標高は10.60m、底面標高は10.35mである。覆土は泥岩粒中量、木端少量含む暗茶褐色粘質土が堆積していた。出土遺物は、11が青磁蓮弁文碗1点のみ図化できた。

ピット18 (図27・29・30、表13、図版12)

B-2グリッド東側に位置し、調査区外に展開する。方形土坑1を削平している。確認できた規模は、長径(45)×短径(24)×深さ12cmである。検出標高は10.60m、底面標高は10.48mである。覆土は泥岩粒中量含む暗茶褐色粘質土である。出土遺物は、12の轆轤かわらけ小皿1点のみ図化した。

ピット20 (図27・29・30、表13、図版12)

B-4グリッド北西の位置で検出した。規模は、長径41×短径37×深さ7cmである。平面形状は不整円形、断面浅皿型、検出標高は10.61m、底面標高は10.54mである。覆土は泥岩粒・木片少量含む茶褐色粘質土で堆積していた。出土遺物は、13が河野分類IB類に値すると思われる火鉢で、二次焼成により器壁などの状態が悪い。

6面遺構外出土遺物 (図31、表13、図版13)

5面以下6面検出までに出土した遺物を図31に15点図示した。自然遺物も含め、総数200点を数えた中で、轆轤かわらけ大皿と常滑甕片が比較的多く出土している結果であった。

1～4は轆轤かわらけ小皿、5は轆轤かわらけ中皿、6も中皿だが口縁部内面に煤が付着している。7・8は轆轤かわらけ大皿である。9は青磁蓮弁文碗、10は内底部全体に煤が付着している青白磁梅瓶、11は褐釉壺の底部片、12は瀬戸おろし皿、13は中野編年6a型式の形状をした常滑甕の口縁部片、14・15も常滑甕の底部、肩部片である。

表7 6面遺構計測表

遺構名	平面形	検出標高(m)	底面標高(m)	規模(cm)			備考/重複関係など
				長径	短径	深さ	
土坑3	不明	10.63	10.53	(75)	(37)	10	側溝により削平
土坑4	楕円形	10.56	10.46	89	44	10	長16×幅12×厚5cmの礎板あり
土坑5	不明	10.59	10.55	(81)	(32)	4	側溝により削平
土坑6	不明	10.63	10.58	(56)	(24)	5	側溝により削平
土坑7	不整形	10.57	10.31	74	64	26	P4・P10・P11により削平
土坑8	不整円形	10.58	10.35	70	(55)	23	土坑7・P19により削平
P1	隅丸長方形	10.56	10.45	44	27	11	—
P2	不整円形	10.56	10.35	40	35	21	長17×幅7×厚2.5cmの礎板あり
P3	長円形	10.56	10.46	35	(23)	10	P2により削平
P4	不整円形	10.58	10.35	32	30	23	土坑7を削平
P5	不明	10.59	10.57	28	14	2	土坑5により削平
P7	長円形	10.58	10.45	27	22	13	—
P8	不整円形	10.58	10.43	30	30	15	P9を削平
P9	不明	10.58	10.44	31	(15)	14	長11×幅11×厚3.5cmの礎板あり
P10	不整円形	10.57	10.36	44	33	21	土坑7・P11を削平
P11	不明	10.57	10.48	35	(15)	9	P10により削平
P12	不明	10.60	10.43	(33)	(20)	17	P13により削平
P13	不整円形	10.60	10.50	35	33	10	P12・P14・P21を削平
P15	長円形	10.60	10.35	23	(23)	25	P14により削平
P17	不整長円形	10.58	10.43	56	44	15	P5により削平
P19	楕円形	10.58	10.31	49	32	27	土坑8を削平
P21	不整円形	10.60	10.48	(48)	47	12	P12・P13により削平
P22	隅丸方形	10.56	10.40	31	31	16	—
P23	不明	10.60	10.45	(34)	(16)	15	P12により削平

第7節 7面の遺構と遺物

標高9.80m前後で検出した。6面構成土は30～50cm大の泥岩層が70cmほど堆積しており、残土置場の都合上、調査区内で処理せざるを得なかった。このため7面に至るまでは土層堆積状況を一連に観察する目的として、調査区東壁から90cm、南壁から110cm幅でトレンチ状に調査区を設定した。また、南側で南北に走る溝を検出したので、その延長を確認するため北壁にトレンチを掘るに至った。発見した遺構は溝3条、土坑3基、ピット7基である。

溝1 (図32・33・35、表13・14、図版6・13・14)

調査区南側中央、3ライン沿いの位置で検出した。南側で確認した結果、延長の確認と溝2との関係を明らかにするため、北壁側に確認トレンチを掘った。その結果、延長があることが分かり、溝2よりも新しい関係であることが確認できた。南側では5本の杭が西際に打たれており、横板を留める杭列をもつ溝の可能性が強かったが、確認範囲内では横板はみられず、廃絶時に抜かれてしまった様相である。また、主軸方位はN-11°50'-Eである。断面形は逆台形状を呈す。掘り方の規模は、長さ(387)×幅80～90×底面幅40～50×深さcmである。検出標高は9.81m、底面標高は北側で9.71m、南側で9.49mと南に

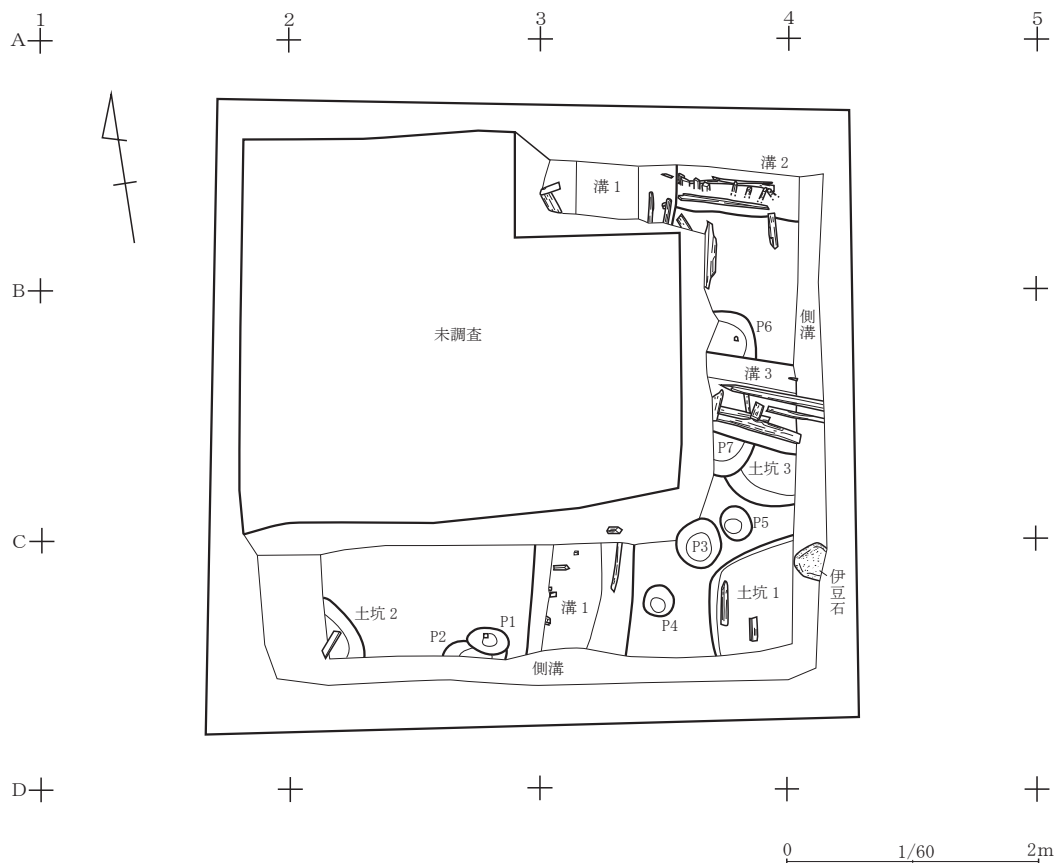


図32 7面全測図

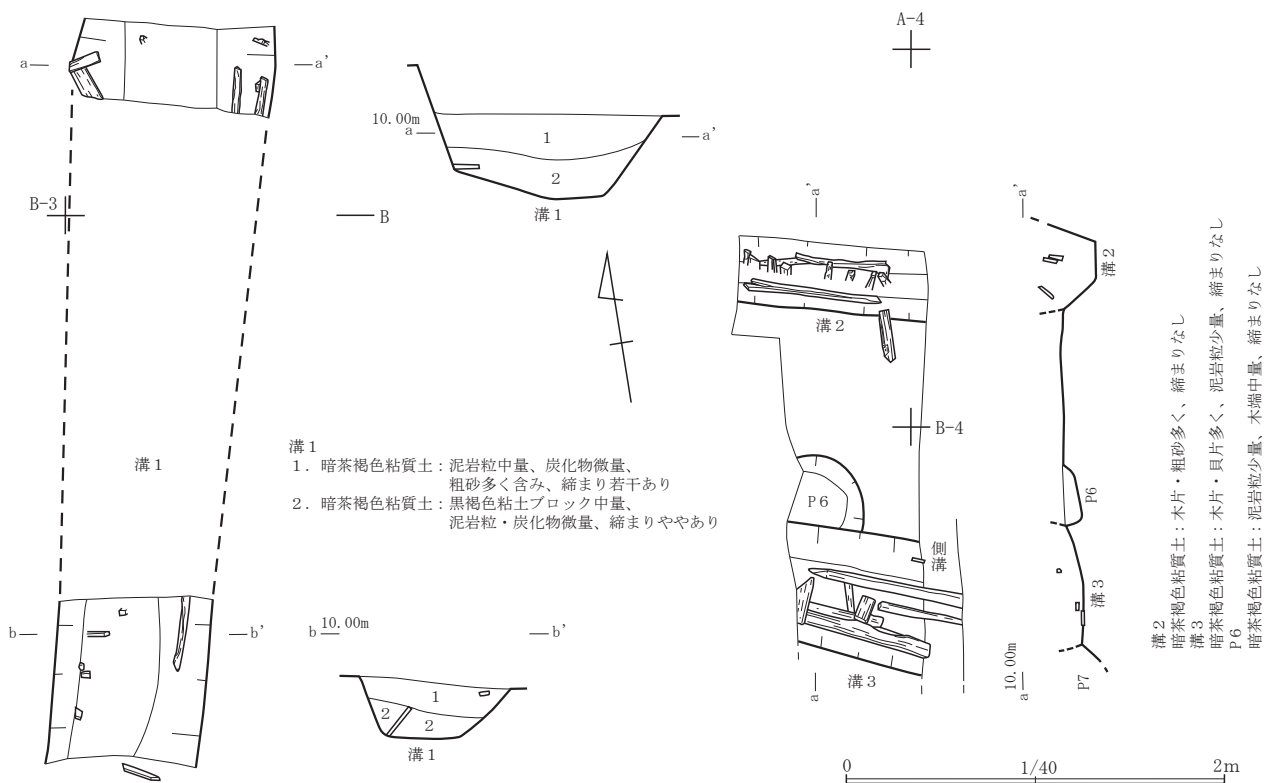


図33 7面溝1~3

向かい低くなっていく傾斜がみられた。残存している杭の頂部は標高9.60m前後で全て20cm以上の長さであった。覆土は上下2層に分けられ、暗茶褐色粘質土が堆積していた。出土遺物は、上層・下層に分け取り上げ、図35に図示した。上層出土遺物は、1～7が轆轤かわらけ小皿、8は轆轤かわらけ中皿、9は手捏ねかわらけ小皿、10・11は手捏ねかわらけ中皿、12は白かわらけの口縁部片、13は白磁口はげ皿、14は内面に蓮弁文が施される青磁蓮弁文碗、15は輪花の形状になると思われる瓦器皿、16・17は永福寺I期の平瓦である。下層出土遺物は、18～25が轆轤かわらけ小皿、26は轆轤かわらけ中皿、27は轆轤かわらけ大皿、28は平瓦、29は底面側面部分を削り加工してある打ち欠けかわらけ、30～32は木製箸である。

溝2 (図32・33・36、表14、図版6・7)

調査区北東隅、C-4グリッド南の位置で検出した。溝1に削平され、調査区外に展開し全体は不明である。杭は検出面より10～15cmほど高く突出して残っており、横板を留めている状況であった。北側に並列している状況であり、当初は北側杭列として捉えていた。しかし、北側で検出した横板は廃棄時に移動してしまっている可能性や南側の杭列は抜かれてしまっていたか、元から設置されていないこともあり、当遺構に対して北側の杭列ではなく、南側の杭列の可能性も考えられる。また、溝1とは直交せず、関係性は薄いと思われる。主軸方位は、N-78°-Wである。断面形は逆台形状を呈す。確認できた規模は、長さ109×幅(36)×底面幅(20)×深さ18cmである。検出標高は9.80m、底面標高は9.62mで底部平坦に掘られている。北側には杭が打たれており、各杭の頂部標高は9.95m前後で30cm以上の長さをもつ。出土遺物は、図36-1の轆轤かわらけ小皿1点を図示した。

溝3 (図32・33・36、表14、図版6・14)

調査区東部、B～C-4グリッド間中央で検出した。側溝に削平され、調査区外に展開し全体は不明である。先端を尖るように加工した杭状の木材、そのほかは横板状の木材が廃棄されている状況であった。溝1との関係性は不明である。主軸方位は、N-70°-Wである。断面形は浅皿形を呈す。確認できた掘り方の規模は、長さ(68)×幅70×底面幅36×深さ10cmである。検出標高は9.80m、底面標高は9.70mである。覆土は木片・粗砂を多く含む暗茶褐色粘質土が堆積していた。出土遺物は、2が轆轤かわらけ小皿、3は手捏ねかわらけ小皿、4はかわらけの側面を研磨して面取り加工してある加工品である。

ピット3 (図32・34・36、表14)

調査区南東部、C-4グリッド西側に位置する。規模は、長径41×短径37×深さ31cmである。平面形状は長円形、断面逆台形で、検出標高は9.79m、底面標高は9.48mである。覆土は泥岩粒少量、炭化物極微量含む暗茶褐色粘質土が堆積していた。出土遺物は、5の轆轤かわらけ小皿1点を図示した。

ピット5 (図32・34・36、表14・15、図版7・14)

調査区南東部、C-4グリッド西側に位置する。上面にはかわらけが5～6個体廃棄されている状況であった。規模は、長径27×短径27×深さ17cmである。平面形状は楕円形、断面逆台形で、検出標高は9.77m、底面標高は9.60mである。覆土は泥岩粒少量、炭化物と木端を極微量に含む暗灰色粘質土で

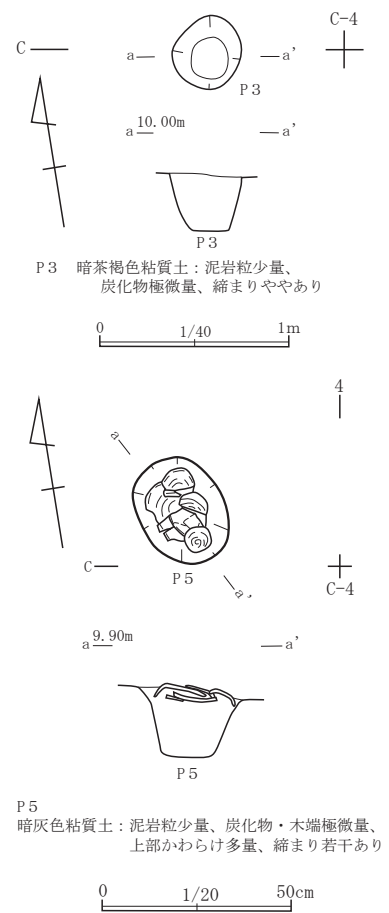
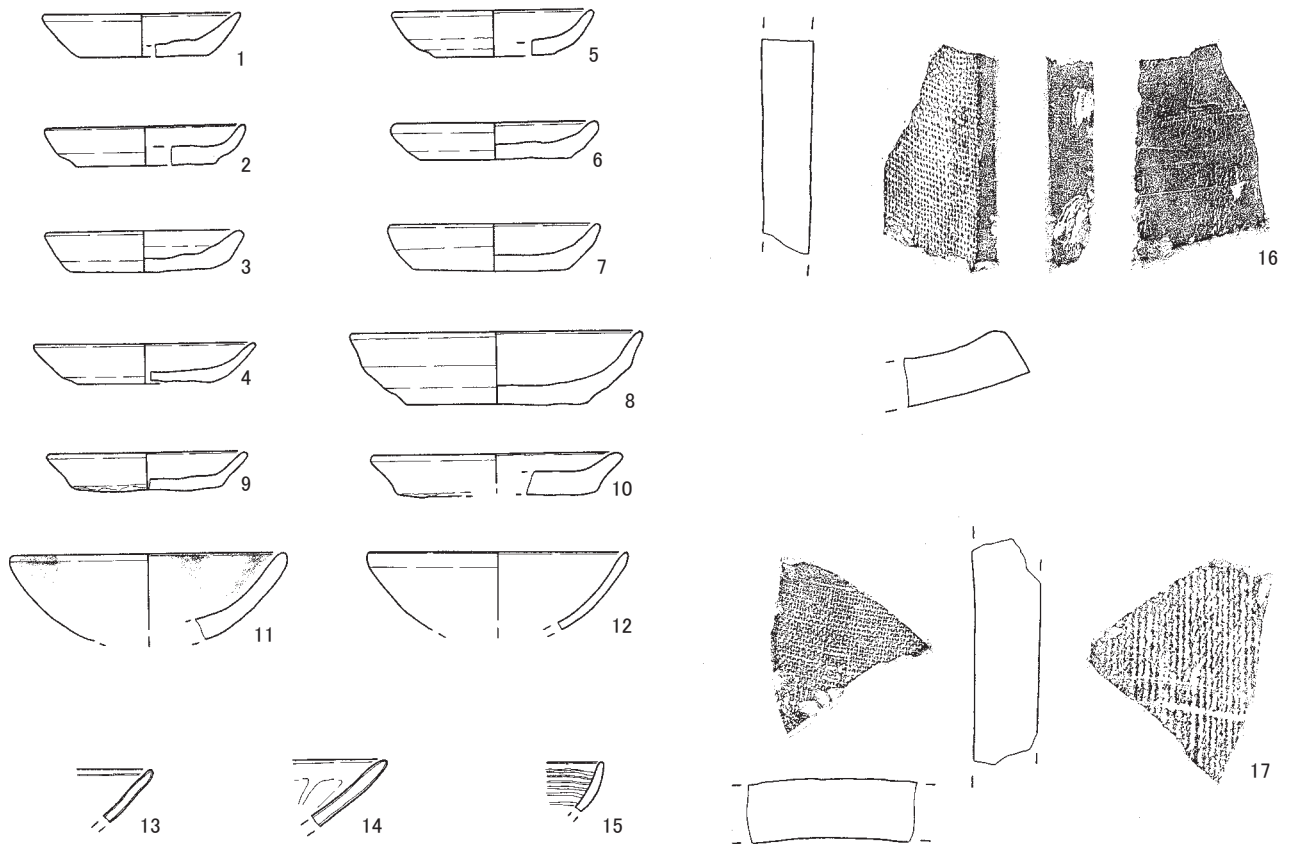
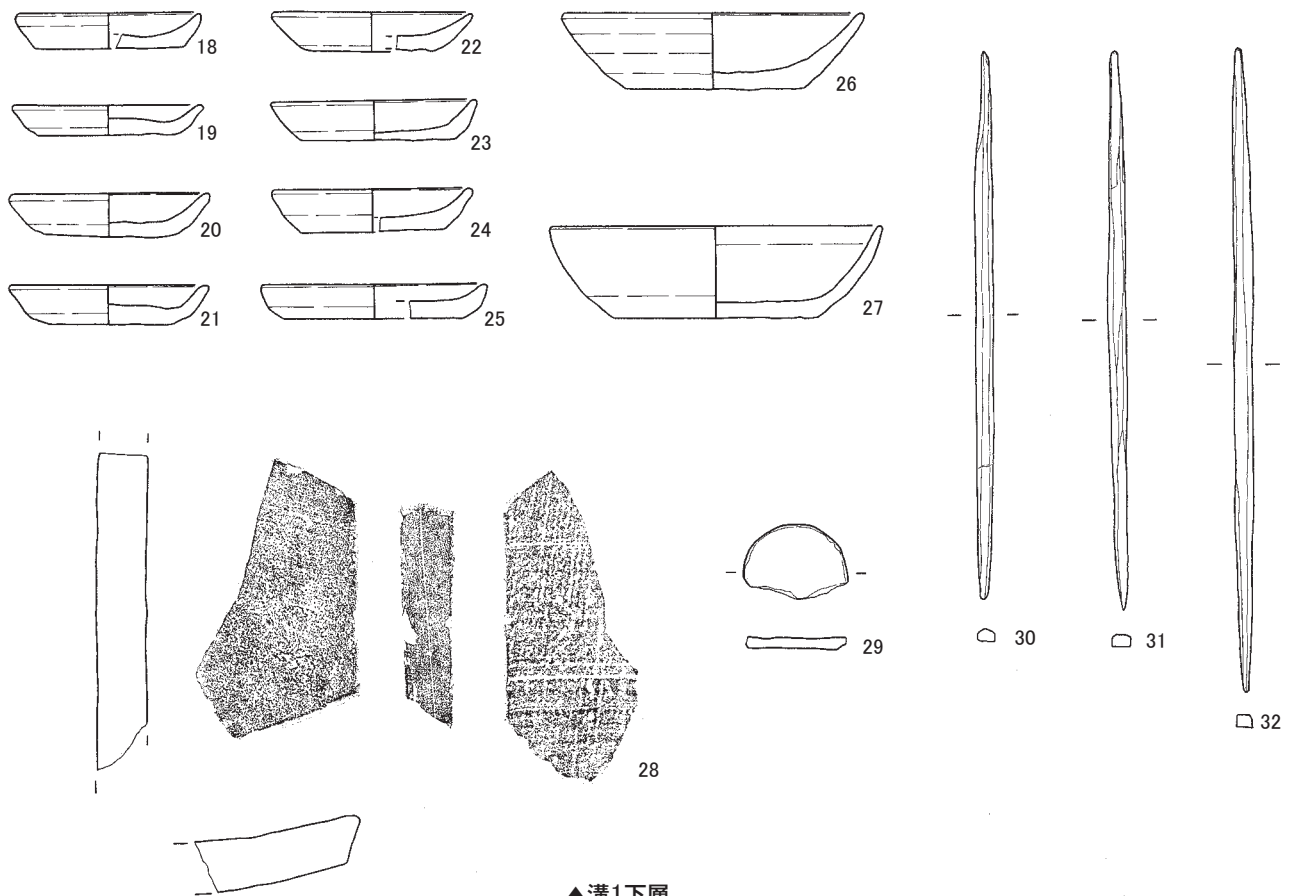


図34 7面P3・5



▲溝1上層



▲溝1下層

0 1/3 10cm

図35 7面溝1出土遺物

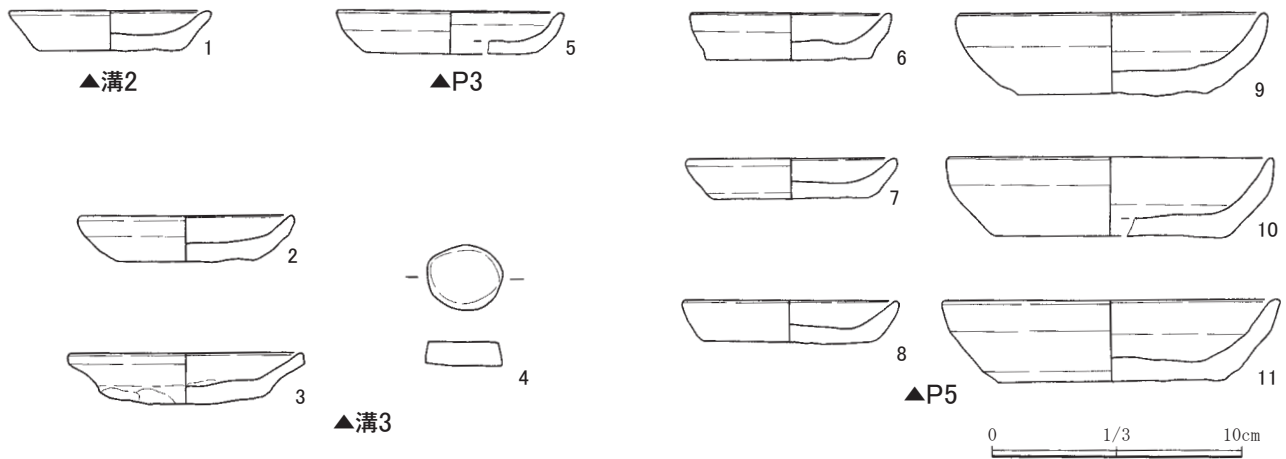


図36 7面各遺構出土遺物

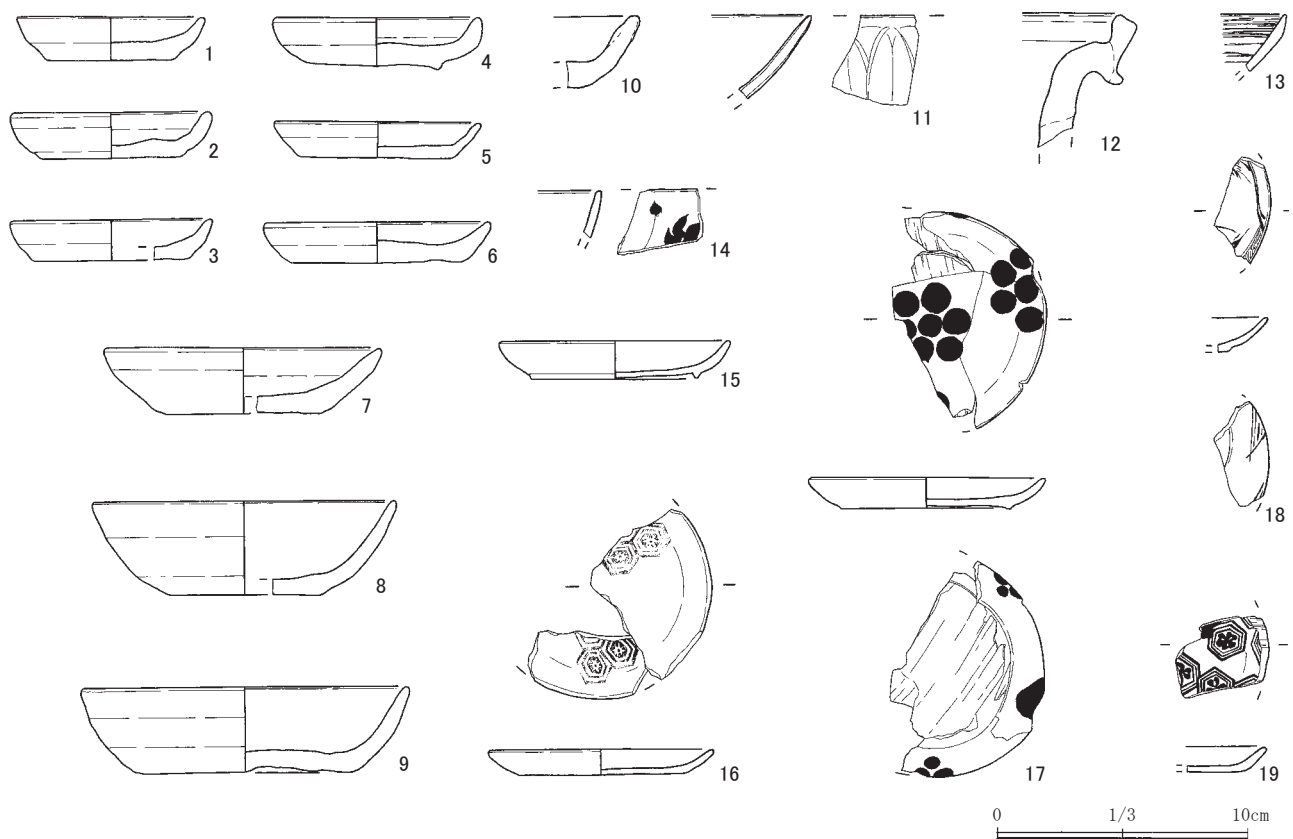


図37 7面木器層中出土遺物(1)

ある。出土遺物は、6～8が轆轤かわらけ小皿、9～11が轆轤かわらけ大皿を図示した。

7面木器層出土遺物(図37・38、表15・16、図版14・15)

6面から7面検出までの堆積層は30～50cm大の泥岩層であり、その層中からはかわらけや常滑片など極僅かの出土が認められたが図化し得るには至らなかった。泥岩層の直下、7面直上には全体に図5の102層である木器層が厚さ10～15cmほど堆積していた。本層中には多量の遺物が含まれており、これらを7面遺構外の出土遺物とし総数612点中46点を図化した。図37-1～6は轆轤かわらけ小皿、7・8は轆轤かわらけ中皿、9は轆轤かわらけ大皿、10はかわらけに熱で溶かされた不純物が付着しており「とりべ」として使用されたと思われる。11は青磁蓮弁文碗、12は中野編年6a型式の常滑甕口縁部、13は瓦器皿、14は外面に手描きの草花文を描く漆器椀、15は無文の漆器皿、16は亀甲文様のスタンプが捺

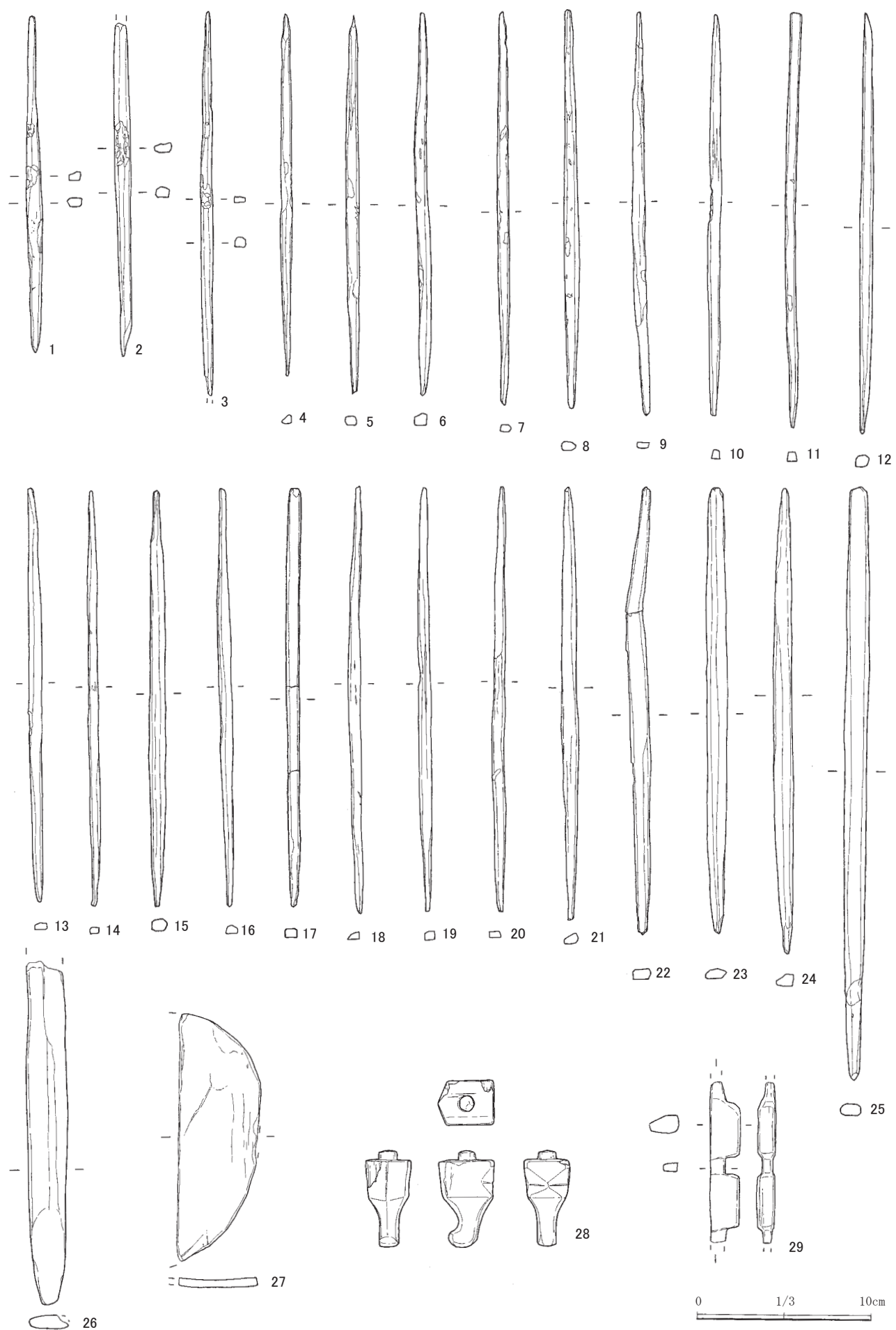


图38 7面木器層中出土遺物(2)

表8 7面遺構計測表

遺構名	平面形	検出標高(m)	底面標高(m)	規模(cm)			備考/重複関係など
				長径	短径	深さ	
土坑1	不明	9.78	9.70	(85)	(61)	8	側溝により削平
土坑2	不明	9.79	9.70	(51)	(28)	9	側溝により削平
土坑3	不明	9.80	9.68	(60)	(45)	12	P7により削平
P1	楕円形	9.78	9.66	32	21	12	P2を削平
P2	不明	9.78	9.55	(52)	(14)	23	P1により削平
P4	円形	9.75	9.53	24	23	22	—
P6	不明	9.79	9.69	(40)	(35)	10	溝3により削平
P7	不明	9.80	9.67	(37)	(35)	13	溝3により削平

されてある漆器皿、17は梅の花を描いた漆器皿、18は手描き文様不明の漆器皿、19は文様不明のスタンプが捺された漆器皿である。図38-1～21は木製箸である。1～3、10は一部に装飾のような加工がしてあり、何かの目印とする意図があるように思われる。22～25は木製の串と思われるが、もしくは菜箸の可能性も考えられる。26は先端部を篋状に加工してある篋状木製品、27は曲物の底板、28は黒漆を塗布してある膳脚、29は残存している中央部に凹状の加工がしてある用途不明木製品である。

第8節 8面の遺構と遺物

現地地表下240cm、標高9.60m、黒褐色粘質土の中世基盤層(図5-107層)で確認した遺構面である(図39)。7面ではL字状に調査区を設定したが、当遺構面ではさらに縮小し、南壁沿いの調査とした。発見した遺構は溝状遺構1基、土坑2基、ピット6基である。

溝状遺構1(図39・40・41、表16、図版7・15)

C-3グリッド西側の位置、南北に掘られていたが、7面溝1や周辺の遺構により削平が著しい。おそらく7面溝1の前身の溝と思われるが、確認範囲だけでは断定しづらいところである。確認できた規模は、長さ(84)×幅(90)×21cmである。検出標高は9.63m、底面標高は9.41mである。覆土は泥岩粒と貝砂、炭化物と木端・木片を少量含む黒褐色粘質土が堆積していた。出土遺物は、検出作業時に上・下層に分けて取り上げた。堆積土は前述したように1層だが、上・下層として図示した。上層は図41-1が轆轤かわらけ小皿、2は轆轤かわらけ大皿、3は手捏ねかわらけ中皿、4・5は手捏ねかわらけ大皿、6は同安窯青磁劃花文皿である。下層は、7が完形の長さ11.5cmの鉄釘、8は刀子の形状を模した形代と思われる木製品である。

土坑2(図39・40・41、表16、図版7・15)

調査区南西隅、C-2グリッド東側で検出した。西端部は水抜き側溝により削平してしまい、土層から復元した。新旧関係では、東側に位置する溝状遺構1とピット2を削平している。確認できた規模は、長径(125)×短径長(89)×深さ35cmである。検出標高は9.63m、底面標高は9.28mである。覆土は泥岩粒・貝砂・木片・木端少量、細砂多く含む黒褐色粘質土が堆積していた。上層には長さ35×幅9×厚さ3cmと長さ64×幅8×厚さ3cmの木材が含まれていた。出土遺物は、9が手捏ねかわらけ中皿、10は外底側面に切れ込みの痕跡がみられる手捏ねかわらけ、11は土師器坏の底部片だが、下層の遺物が混じっていた可能性が考えられる。

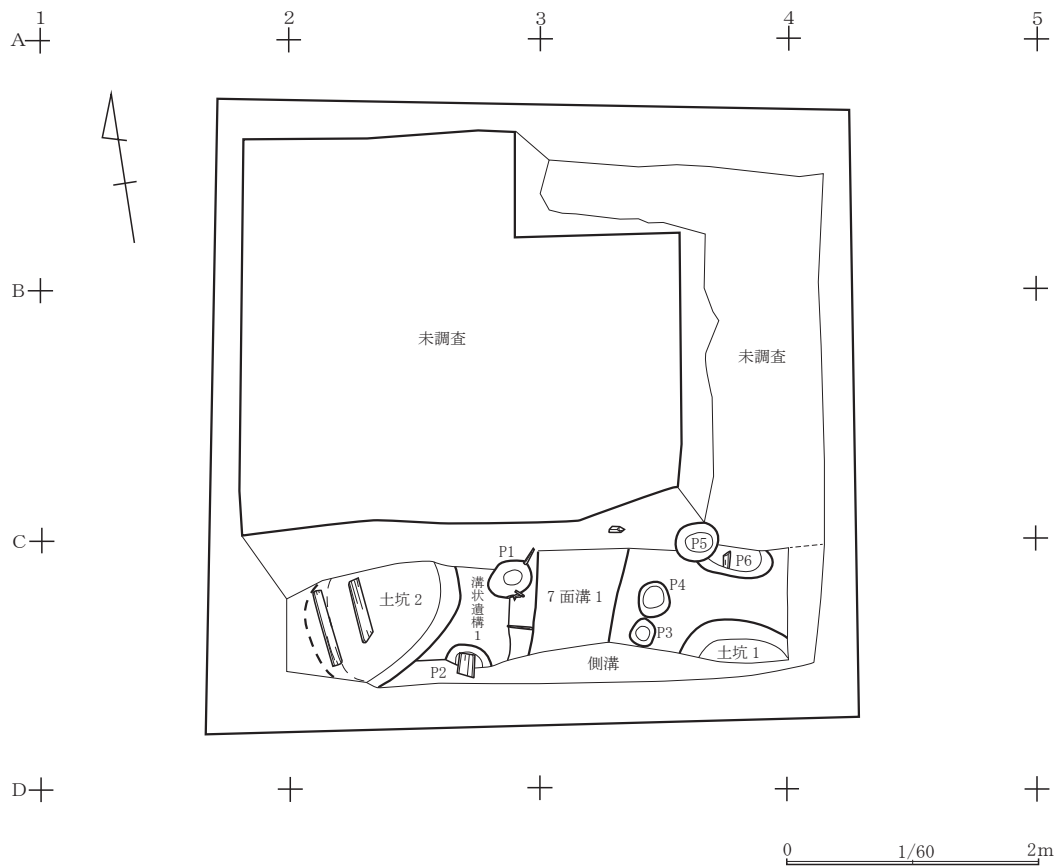


図39 8面全測図

8面遺構外出土遺物 (図42、表16、図版16)

7面より掘り下げ、当面検出までに出土した遺物は185点を数え、内20点を図42に図示した。当面から手捏ねかわらけの出土が目立つようになり、中には土師器や須恵器など中世以前の遺物も僅かに含まれている。1～11はかわらけで1・2は手捏ねかわらけ、3～8は轆轤かわらけ小皿、9は轆轤かわらけ中皿、10・11は轆轤かわらけ大皿である。12は青磁碗、13は常滑甕、14は永福寺I期の平瓦、15～18は木製箸、19は先端部篋状に削り加工をしている篋状木製品、20は須恵器甕である。

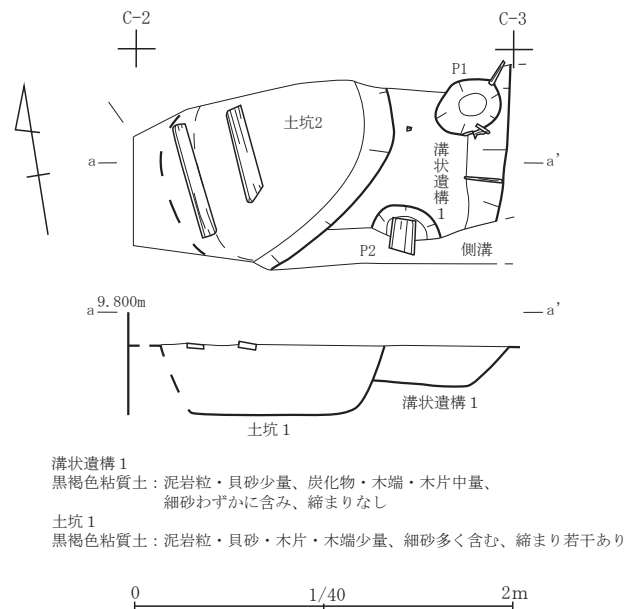


図40 8面各遺構

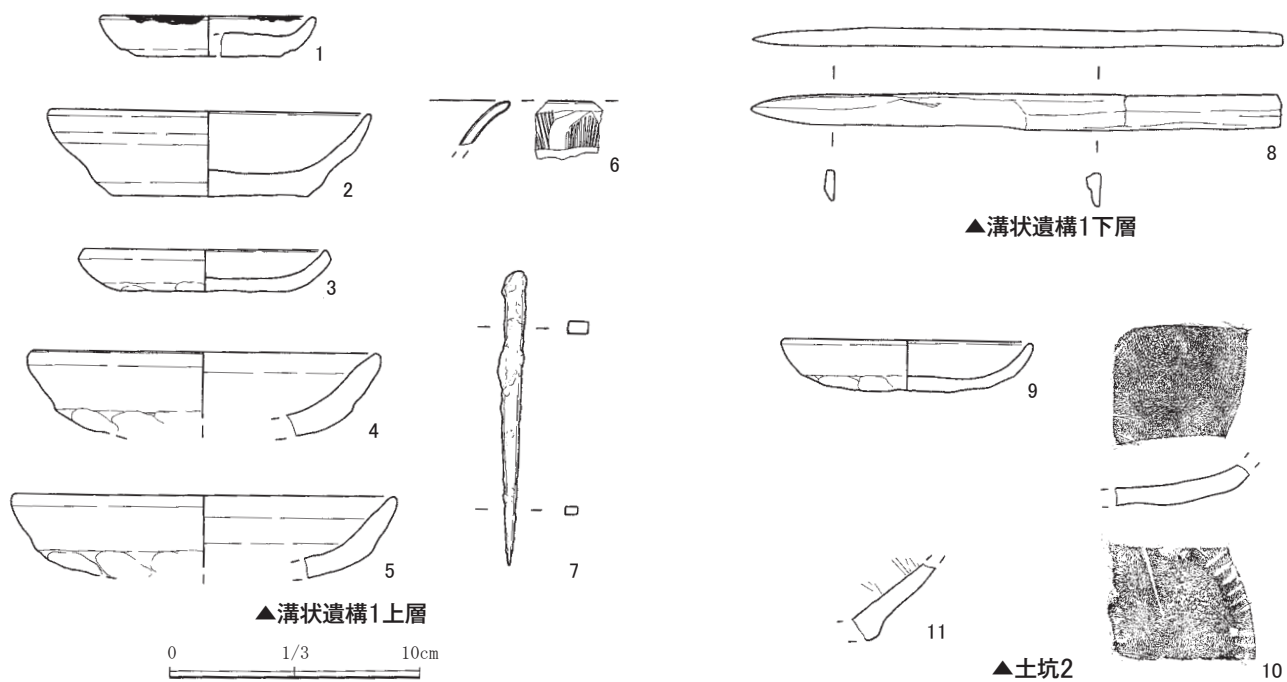


图41 8面各遺構出土遺物

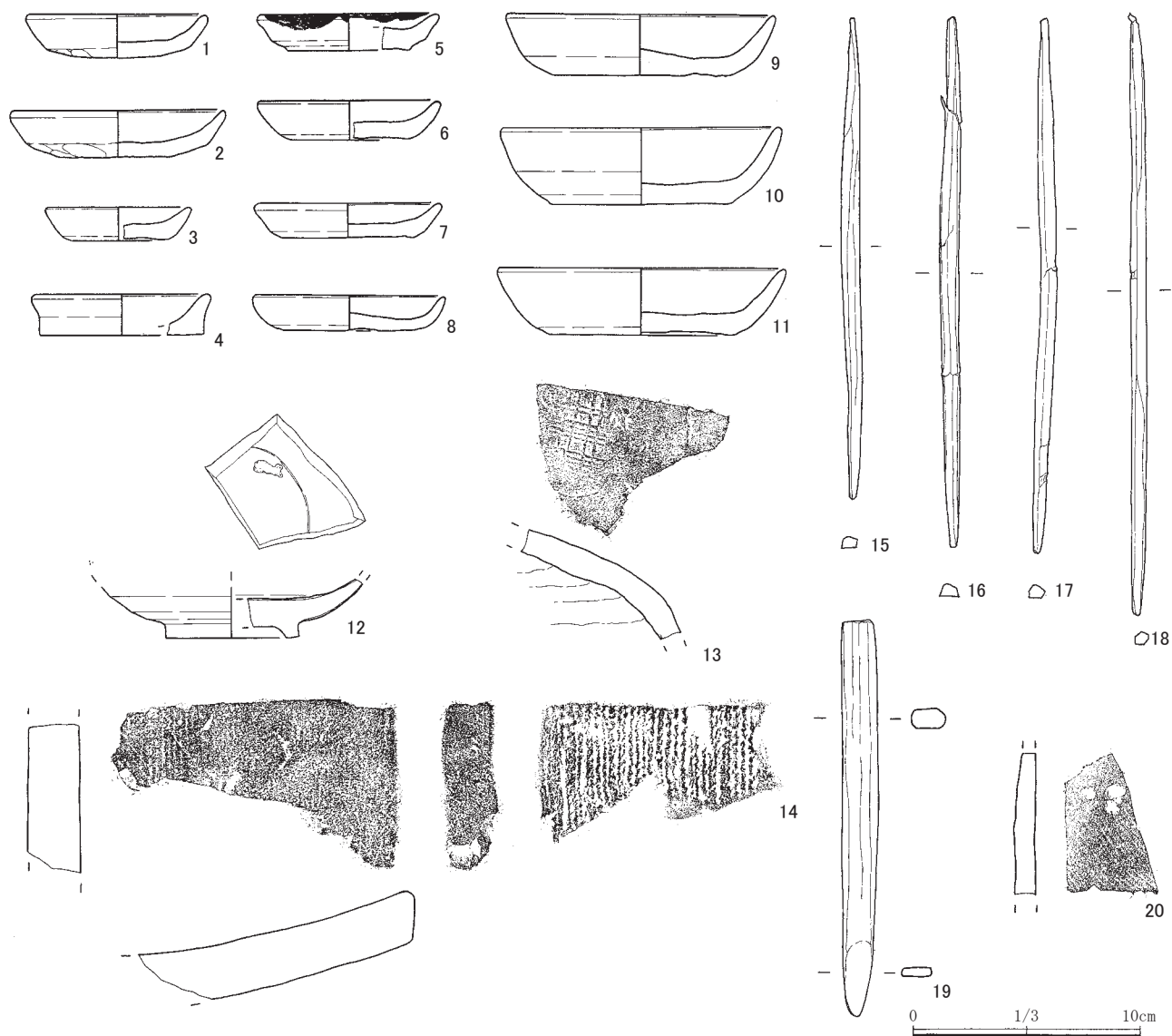


图42 8面遺構外出土遺物

表9 8面遺構計測表

遺構名	平面形	検出標高(m)	底面標高(m)	規模(cm)			備考/重複関係など
				長径	短径	深さ	
土坑1	不明	9.57	9.46	(86)	(35)	10	側溝により削平
P1	不整円形	9.50	9.29	35	27	21	溝状遺構1を削平
P2	不明	9.42	9.30	(36)	(25)	12	長13×幅19×厚3cmの礎板含む
P3	不整円形	9.61	9.50	24	20	11	—
P4	不整円形	9.60	9.45	29	26	15	—
P5	円形	9.78	9.47	34	31	31	P6を削平
P6	長円形	9.58	9.45	(48)	(24)	13	P5により削平

第9節 8面下トレンチの遺物

8面の調査を終了した時点で、掘削深度が地表から240cmほどの高さには達していたため、危険と判断された。試掘結果からも6面以下は確認していなかったため、下層に中世遺構面の有無を確認する目的のため調査区南西部にトレンチを設定した(図43)。8面遺構により検出標高から30～35cmは除去してしまっていたが、トレンチ周囲や内部からは中世遺物の出土は確認できず、8面が中世基盤層と判断した。

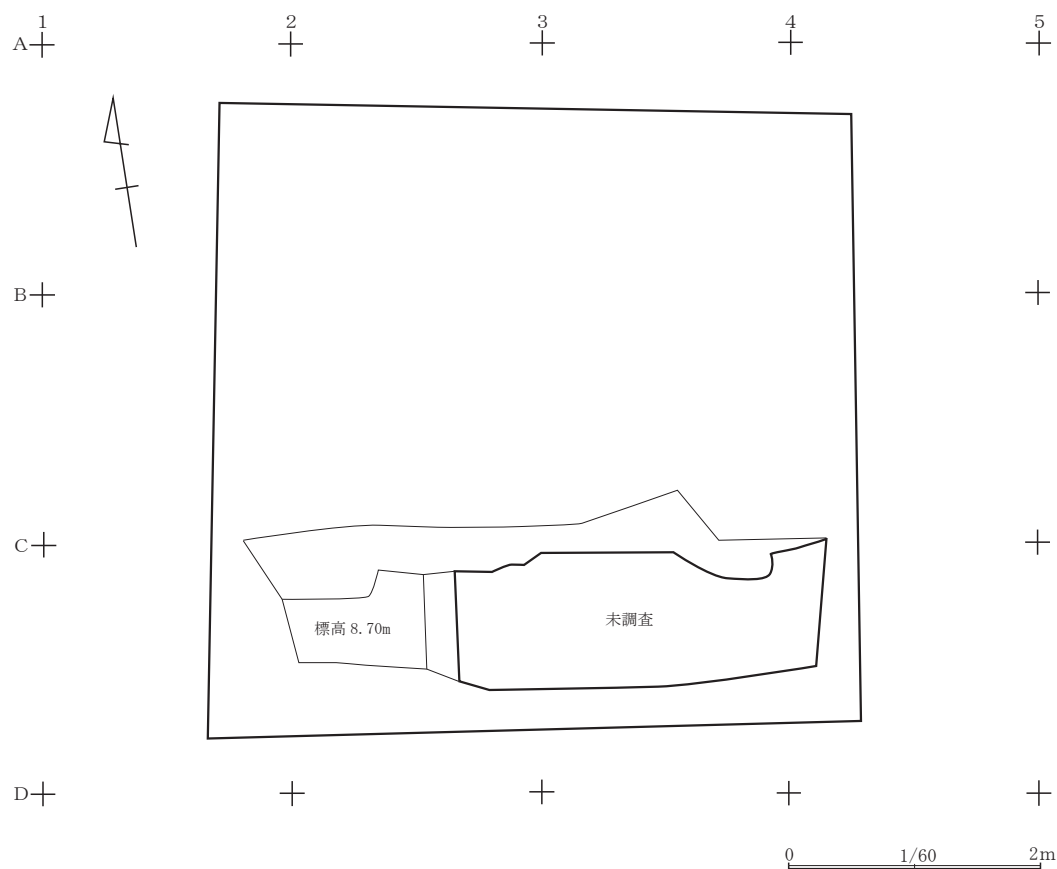


図43 8面下トレンチ

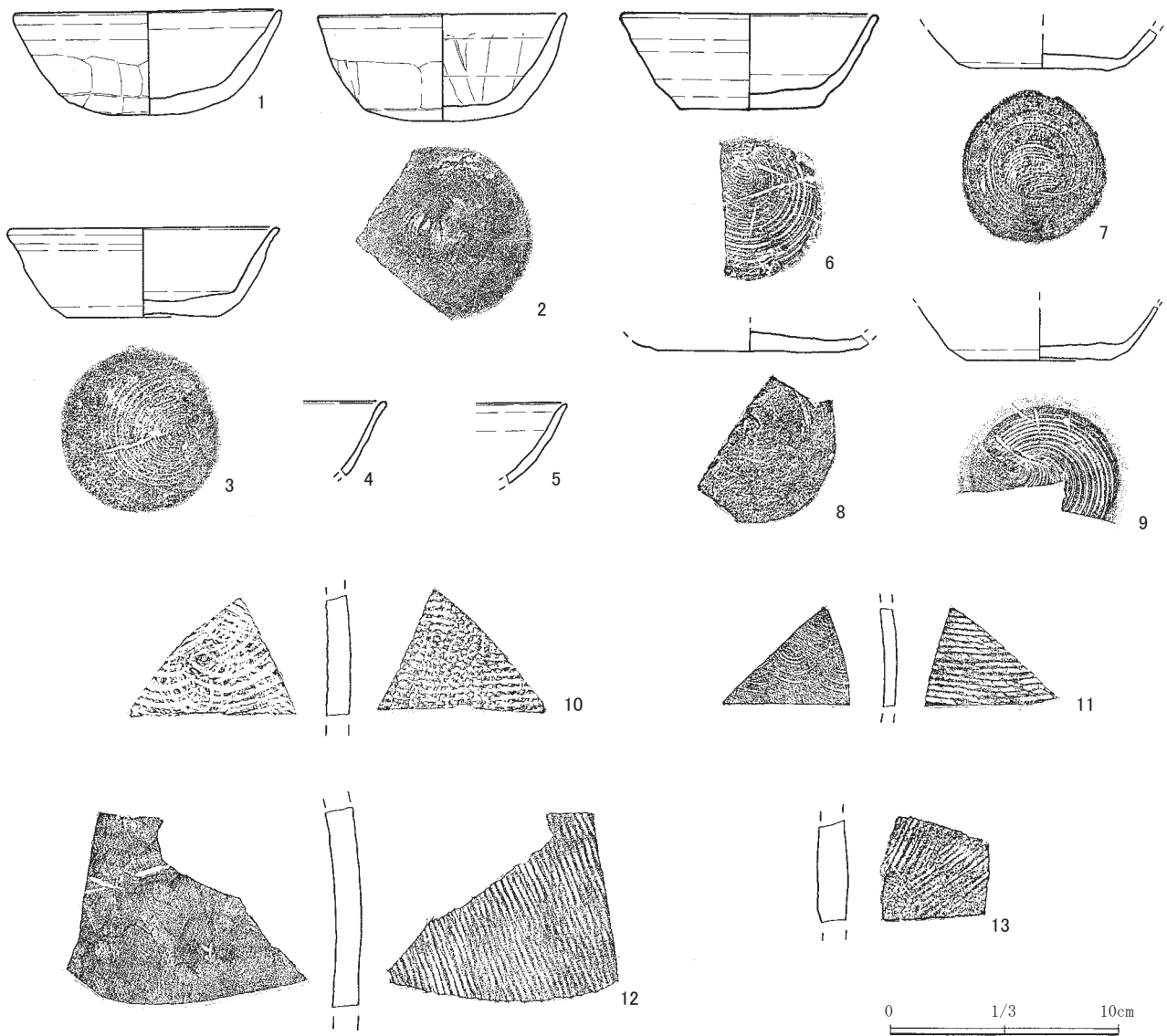


図44 8面下トレンチ出土遺物(1)

8面調査中にも中世以前の遺物が混じって出土していたので、標高8.70 mまで土層の確認を行った。8面直下の層位(図5-108・110層)から古代の遺物がまとまって出土した。古代の遺構面があったことは確実に、まとまった遺物の出土は何らかの遺構に関係すると思われたが、狭小な範囲と多量の湧水によって詳細は不明瞭になってしまい、以下、土層堆積の状況を観察した。

8面下トレンチ出土遺物(図44・45、表17、図版16・17)

出土した遺物は7～9世紀代の所産と考えられる。ほぼ同位置にまとまっており一括で出土したが、遺構内に含まれていたかは不明である。

図45-1・2は相模型の土師器坏、3は9世紀前半の所産で三浦半島が産地と思われる土師器坏、4～9は須恵器坏で4・5は南比企産と考えられる。10～13は須恵器甕である。図45-1は丸瓦、2～5は平瓦で、2は凸面に縦方位の叩き目がみられる小片、3・5は凸面縄目痕、4は斜方位の叩き目がみられる側端部片である。

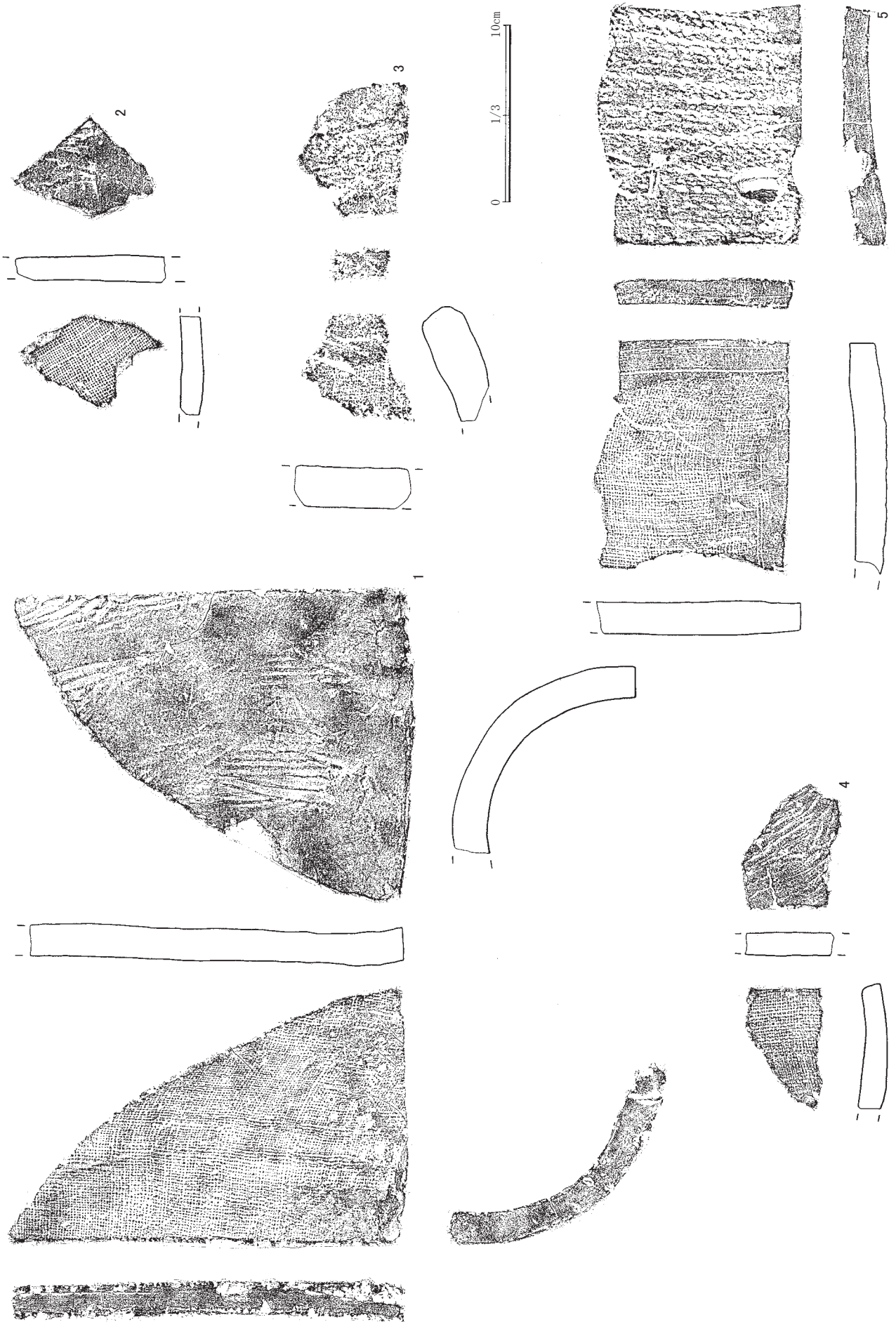


図45 8面下トレンチ出土遺物(2)

第四章 まとめ

本調査地点は、JR鎌倉駅の北600 mほどの位置、扇ガ谷二丁目195番2地点に所在する。扇ガ谷の開口部東端、現在の切岸された丘陵と扇川に挟まれた20 m内の平地に立地する。また、東側には切岸に掘られたやぐらが近接している。本地点では古代1面と中世8面を確認し、古代I期、中世VII期に分けられる。第3章では上層から下層に向かい検出した順に報告したが、ここでは各期古い順に整理しつつ、推測を兼ねながら考察していく。

古代I期：8面下トレンチ内で出土した遺物は古代に帰属する遺物であり、瓦、土師器、須恵器がほぼ一括で出土した。中世以前の土層堆積確認トレンチとして調査を行った関係から狭小な範囲としたため、当該期の遺構等は確認できなかった。出土した遺物は、相模型の土師器坏や南比企産の須恵坏など、8世紀後半～9世紀前半所産と考えられる。扇ガ谷地区において現時点では中世以前の遺物の出土は僅かである。この時期の様相は推測の域を出ないが、当地より南の今小路西遺跡付近には古代の郡衙があったとされ、JR鎌倉駅北西約250 mに位置する今小路西遺跡-御成町171番1外地点では、7世紀中葉～9世紀以降の古代面が検出されていることもあり、その関連として当地域にも拡がり及んでいたのではないかと考えている。

中世I期：8面が該当する。I期が途絶えた後に8面構築土である自然堆積上から始まり、これが中世基盤層になる。狭小な範囲の中、溝状遺構や土坑などの確認に終わり、全体像を把握するには至らなかった。さらに、上面に比べ遺物出土量も減る傾向がみてとれることは、本地点周辺の人々の動向に比定できるのであろう。年代については、本調査地点の中で8面は手捏ねかわらけの出土が顕著であり、轆轤かわらけの器厚はやや厚く、口縁部が丸味を呈す一群が出土している(註1)。また、鎌倉時代初期に出土傾向がある龍泉窯系青磁碗や同安窯青磁劃花文碗が出土していることから、13世紀前葉の年代が考えられる。

中世II期：7面に移行すると、調査区中央を南北に溝1が掘られる。この溝1がどういった区画を持っているか定かではないが、松谷寺跡-佐助一丁目516-1外4筆地点で確認されている木組み溝のように、おそらく尾根沿いに造られた溝の可能性もある。また、溝2・3と溝1の関係は、報文中で土層の新旧関係上、後者が新しいとしたが、溝1西部の状況を確認していないことから、溝1と溝2ないしは溝3は合流していたことも推察される。7面直上には大量の木器層が堆積しており、調査区外一帯に拡がっていたと思われる。主に木端や木片が混じっていることから、当時の廃棄場所か扇川の氾濫・洪水などにより溜まった層位なのではないかと考えている。

当面の遺構からは手捏ねかわらけの出土が減少する。さらに、轆轤かわらけの底径は幅が広くなり、器形はやや内湾し、器高も低いことから廃絶時期は上面との関係もあり、13世紀第中葉頃としたい。また、木器層中からのかかわらけは、7面の遺構から出土するタイプとは違う様相である。出土遺物は木製品が主体であったが、かわらけも多量に含まれ、出土量は表18の通り各期通して最多である。轆轤かわらけも薄手傾向と器形の湾曲がやや顕著になる。また、中皿の出現と、図示できなかったが手捏ねかわらけも出土しており、13世紀中～後半頃と思われる。

中世Ⅲ期：6面が該当する。7面木器層の上面には30～50cm大の泥岩層が70cm堆積している。この泥岩層中にはほぼ遺物の出土は認められなかった。また、地業した形跡とは考えられず、切岸ややぐらの造成時に排出した泥岩を調査地点一帯に地業したか、もしくは扇川の氾濫・洪水を治めるための治水工事として行ったか、憶測の域を出ないが僅かな可能性として提示したい。当該期では上述した泥岩層上に土坑・ピットを確認した。P2・P9には板が入っており、芯々距離約210cmで建物の柱間寸法に合う距離であったが、調査区内での建物の検出には至らなかった。年代は概ね13世紀後半としたい。

中世Ⅳ期：6面廃絶後、5面が構築され、土坑群が主体となる。方形土坑は掘り方も大きいが意図は不明である。扇ガ谷内には板壁建物が検出されており、掘り方の規模や深さなどから建物跡ではないかと思っている。その根拠は囲炉裏にある。囲炉裏は板壁建物に付属することが多い(註2)。武蔵大路周辺遺跡(図1-1・6地点)の調査でも板壁建物と囲炉裏が検出されている。本地点の囲炉裏は建物に付属していない状況で検出したが、おそらく方形土坑4内に含まれると思われる。そういった視点から考察すると、方形土坑の性格としては板壁建物の可能性も考慮しておかねばならない。遺物はやはり轆轤かわらけが最多であり、僅かに手捏ねかわらけが出土している。轆轤かわらけは全体的に薄手丸深タイプも含まれてくる。年代は鎌倉時代後期、13世紀後葉～14世紀前葉と考えている。

中世Ⅴ期：4a・b面が該当する。4b面の溝を埋めた後に4a面が成立する。当該期における4b面溝1の軸方位が後世にも引き継がれていくようである。本地点では当時期が一つの転換(移行)期になると考えられる。年代は、出土遺物の組成から14世紀前葉～中頃に比定できると思われる。

中世Ⅵ期：3面には調査区南部に東西溝が走る。Ⅴ期で確認した溝が時期を経てやや南側に移動している。この土地の区画に大幅な変化がないことがみてとれる。溝が廃棄され埋められた後に土坑などが掘られているため、少なくとも二時期に亘る遺構群がある。各遺構からの出土遺物には差異はなく、溝・土坑群と同時期の遺構は分けられなかった。出土遺物からは判断できる資料は乏しいが、Ⅴ・Ⅶ期との前後関係により年代は14世紀中頃としたい。

土坑5で出土した木札について

各方面から所見を頂いたので、ここで少し触れておきたい。墨書木札は上部斜めに削り落とし、形状は横長の五角形になると考えられる。ちょうど中央部分が縦に割れてしまっている。長さ20.9cm、残存幅4.0cm、厚さ0.5～0.7cmが残っている。両面に墨書があるが、文字の中心部分から半分が欠けており、両面共に解読が困難である状態である。今回、この資料を調査・整理中に所見してもらった結果、表側は「梵字(キリーク?)文和三年午八(月?)」の左半分ではないかという指摘があった。裏側は梵字がいくつかあるが、解読不能である。文和年間(1352～1355年)であるとしたら14世紀中頃に帰属するⅥ期の推定年代と重なってくる。また、中央付近に孔径0.4cmの釘穴の痕跡が見られることから、どこかに打ち付けていた可能性は高いがその用途は不明である。さらに、梵字が書かれていることから密教色が強いと思われるが、その真意も不明である。土地の歴史から上杉氏を連想させるが、推定年代から関係することは若干時期が合わないように思えるため、本資料についてはさらなる検討が必要であろう。

中世Ⅶ期：1・2面には二時期に亘る道路状遺構と溝を検出した。ほぼ同じ位置で造られており、おそらく道路状遺構を積み重ねたあとに1面が整地されたと思われ、成立から廃絶まで一連を通して継続した遺

構面であると考えられる。ただし、これらの遺構は東に延長すると5～6mほどで切岸に突き当たってしまう。山に沿うように道路もしくは通路のような主体となった道があったのかは明らかにされていないが、それに通じるやぐらへ続く道やあるいは土塁といった可能性も否定できないと思われる。出土遺物は図示不可能な小片の遺物ばかりで、年代比定しづらいところではあるが、概ね14世紀後半頃になる様相である。

以上、各期の様相について推察を交えて考察してみた。そこから浮かび上がった問題点を提示してみる。

一つはV～VII期で検出した溝と道路状遺構である。先述したように調査地点は東側に丘陵、西側には扇川に挟まれた約20mの範囲内にある。溝と道路状遺構を延長したとして最大20mになるが、現況をみてもその幅で納まるような遺構とは考えられない。現地調査中に踏査した結果、現在の扇川の流路は大幅に変わっている印象が強かった。おそらくJR横須賀線線路建設の影響によるものであろう。近い将来これに係わる調査の進展は希薄であると思われるが、今後注目したい点である。

次に、中世Ⅱ期の木器層について、氾濫・洪水による水害が13世紀中～後半頃に帰属するとしたとき、その時期に鎌倉内で吾妻鏡の文献資料から水害関係の記事をみると、いくつかの記録がみられる。「洪水」という名称に限った記事では、文暦2(1235)年、嘉禎3(1237)年、寛元2(1244)年、建長3(1251)年、建長8(1256)年、正応4(1291)年の各条に書かれている(註3)。本調査地点付近では扇川が現在とは違う流路であった可能性は、本調査地点の南側、JR横須賀線踏切脇の扇川底に残る方形の木組みや木杭が指摘できる。扇ガ谷内を流れる扇川が多くの寺院があったであろうこの地域でどのような事象と位置づけがあったかは推測の域を出ないが、災害による生活の変容もあると思われる。そのような観点も踏まえつつ、上述した点についてもこれからの発掘調査の成果と文献資料、多分野からの指摘により明らかになっていくことを期待したい。

文末ではありますが、墨書木札についてご教示して下さった大三輪龍哉氏、古田土俊一氏、高橋慎一朗氏には厚く感謝の意を表します。

【註】

1. 鎌倉でのかわらけ編年案は、河野眞知郎氏、馬淵和雄氏、宗臺秀明氏、田代郁夫氏などが提示してきた。ある程度の出土傾向はみてとれるものの、それぞれ年代比定に差異があり、確立している編年観ではない。したがって、ここではそれらを総合的に判断したうえで年代比定の参考にしているため、年代観に誤差がある。
2. 山口正紀 2012「都市鎌倉における困炉裏と建物－その機能と性格－」『第1期大三輪龍彦研究基金研究報告』特定非営利法人鎌倉考古学研究所
3. 2013年に鎌倉考古学研究所第3回シンポジウム「考古学からみた鎌倉の災害」発表資料集において、松吉大樹氏が鎌倉の災害記事を略年表としてまとめ、参考とした。また、「大雨」などの名称も出てくるが、洪水などの現象が起こったかは定かではないので、ここでは省略した。
松吉大樹 2013「災害略年表」『鎌倉考古学研究所 第3回シンポジウム「考古学からみた鎌倉の災害」－発表資料集－』特定非営利法人鎌倉考古学研究所

【引用・参考文献】

- 菊川英政ほか 2008「今小路西遺跡(No.201)発掘調査報告書－御成町171番1外地点－」株式会社 斉藤建設(文化財事業部)
- 斎木秀雄 2013「武蔵大路周辺遺跡の発掘調査」『第23回鎌倉市遺跡調査・研究発表会 発表要旨』特定非営利活動法人鎌倉考古学研究所・鎌倉教育委員会
- 宮田眞・滝澤晶子・安藤龍馬 2011「松谷寺跡(No.205)発掘調査報告書(神奈川県鎌倉市佐助一丁目516-1外4筆)」株式会社 斉藤建設・博通

表10 遺物観察表(1)

() = 復元値 [] = 遺存値

挿図 番号	出土面 ・遺構	種 別	遺存度	寸法 (cm)			観察項目 a:成形・整形 b:胎土・素地・材質 c:色調 d:釉調 e:焼成 f:備考
				口径	底径	器高	
7-1	試掘坑	かわらけ	完形	11.4	7.0	3.0	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 雲母 赤色粒多 海綿骨針 小石粒 やや粗胎 c.淡橙色 d.良好
7-2	試掘坑	瀬戸系 植木鉢	口縁部 ～胴部小片	—	—	[4.5]	a.轆轤 b.砂粒 白色粒 やや粗胎 d.淡白色不透明 内面口縁部下～外面施釉 d.良好 f.近代以降所産
7-3	試掘坑	常滑 甕	底部破片	—	—	2.7	a.轆轤み b.灰褐色 砂粒 白色粒 やや粗胎 c.灰黒色～橙褐色 d.良好
7-4	試掘坑	備前系 播鉢	底部片	—	—	[4.5]	a.内底部周回する3条以上の描目 内面胴部乱雑な描目 外底指ナデ痕 b.砂粒 白色粒 小石粒多 粗胎 c.茶褐色 d.良好 f.近代以降所産
8-1	1面溝2	かわらけ	口縁部1/5 ～底部1/2	(11.8)	(7.0)	3.2	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 雲母 赤色粒多 海綿骨針 小石粒 やや粗胎 c.淡橙色 d.良好
8-2	1面遺構外	かわらけ	口縁部4/5 ～底部完形	12.0	6.8	3.2	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c.黄褐色 d.良好
8-3	1面遺構外	かわらけ	口縁部1/10 ～底部完形	(13.0)	7.0	3.4	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c.橙色 d.やや良好 f.内底に指頭痕
14-1	3面溝1	青磁 蓮弁文折縁鉢	銅部小片	—	—	[4.8]	a.外面蓮弁文 b.灰色 精良緻密 d.灰緑色半透明 内外面施釉 釉層やや厚い e.良好
14-2	3面溝1	褐釉 壺	肩～胴部小片	—	—	[2.3]	b.灰黄色 砂粒 赤色粒 やや粗胎 粘質 d.褐色不透明 外面施釉 内面露胎 e.良好
14-3	3面溝1	基石 (白)	完形	径2.2 厚さ0.2～0.7			a.円形状 c.乳白色
14-4	3面溝1	銅銭	完形	外径2.25 内径1.85 孔径0.65 厚0.1			f.元豐通寶 北宋 1078年 篆書
14-5	3面溝1	漆器 椀	口縁部1/2 ～底部完形	15.0	7.3	4.4	f.内外面黒漆塗り 無文
14-6	3面溝1	漆器 椀	胴部片	—	—	[2.2]	f.内外面黒漆塗り 内外面に朱漆の手描き文様
14-7	3面溝1	漆器 皿	口縁部1/3 ～底部1/3	—	[2.0]	[0.8]	f.内外面黒漆塗り 内面に朱漆の手描き文様
14-8	3面土坑4	常滑 壺	口縁～頸部片	—	—	[5.4]	a.轆轤み b.暗灰色 砂粒 白色粒 小石粒 良胎 c.灰緑色～茶褐色 e.良好
14-9	3面土坑5	墨書木札	中央部片	長20.9 幅[4.0] 厚0.5～0.7 孔径0.4			f.表裏墨書あり、判読不明 中央に釘穴あり
14-10	3面P7	かわらけ	口縁部1/3 ～底部完形	(12.6)	7.5	3.0	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 良胎 c.淡橙色 e.良好 f.内面ほぼ全体に茶褐色の付着物
14-11	3面P13	かわらけ	口縁部1/2 ～底部1/2	(7.6)	(5.5)	1.4	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 小石粒 良胎 c.橙色 e.良好 f.灯明皿
14-12	3面P24	かわらけ	口縁部1/3 ～底部1/2	(7.3)	(4.6)	2.3	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 雲母 黒色粒 海綿骨針 良胎 c.黄灰色 e.良好
14-13	3面P24	木製品 曲物	円形部1/2	長28.3 幅[13.3] 厚1.2～1.4 推定直径28.0			f.椀材 容器の底板
14-14	3面遺構外	白磁 口はげ皿	口縁部小片	—	—	[1.8]	b.灰色 白色粒 精良緻密 d.灰緑色不透明 内外面施釉 口唇部露胎 e.良好
14-15	3面遺構外	瀬戸 おろし皿	口縁部小片	—	—	[2.8]	a.灰釉ハケ塗り 内底面格子状のヘラ描き b.灰白色 白色粒 良胎 d.灰緑色～淡褐色 e.良好
14-16	3面遺構外	瀬戸 折縁深皿	口縁部 ～胴部片	—	—	[7.1]	b.灰白色 砂粒 白色粒 良胎 d.灰緑色透明 e.良好 f.口縁部及び胴部所々釉が剥けている
14-17	3面遺構外	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部 ～胴部片	—	—	[6.5]	a.轆轤み b.赤褐色 砂粒 白色粒 黒色粒 やや粗胎 c.赤褐色～黄褐色 e.良好
20-1	4a面土坑2	かわらけ	口縁部1/5 ～底部完形	(13.4)	8.2	3.7	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 小石粒 粗胎 c.黄褐色～褐色 e.良好 f.内外面底部に煤付着
20-2	4a面土坑4	かわらけ	口縁部1/3 ～底部1/3	(11.7)	(7.0)	2.8	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 小石粒 粗胎 c.黄褐色 e.良好
20-3	4a面P6	かわらけ	口縁部1/5 ～底部完形	(12.8)	7.0	3.7	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 雲母 赤色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c.黄褐色 e.良好
20-4	4a面P7	漆器 皿	口縁部1/2 ～底部1/3	(10.0)	8.0	[1.5]	f.内外面黒漆塗り 内面に朱漆の手描き文様(草花か)
20-5	4a面P13	かわらけ	口縁～底部1/4	(12.5)	(8.0)	3.1	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c.橙色 e.良好
20-6	4a面P13	かわらけ	口縁部1/4 ～底部完形	13.0	7.4	3.3	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 雲母 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c.橙色 e.良好
20-7	4a面P13	かわらけ	口縁部3/2 ～底部完形	12.8	8.0	3.3	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 雲母 赤色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c.黄褐色 e.やや不良
20-8	4b面溝1上層	かわらけ	口縁部1/4 ～底部1/2	(7.2)	(4.0)	1.8	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 雲母 赤色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c.暗褐色 e.良好
20-9	4b面溝1上層	青磁 折縁鉢	口縁部2/3 ～底部完形	—	—	[2.2]	b.灰白色 精良緻密 d.青緑色半透明 内外面施釉 e.良好
20-10	4b面溝1下層	かわらけ	口縁部1/3 ～底部1/2	(7.4)	(4.2)	1.8	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c.黄褐色 e.良好 f.内面成形時についたと思われる傷有り
20-11	4b面溝1下層	青磁 蓮弁文碗	胴部小片	—	—	[2.5]	b.灰色 精良緻密 d.淡茶色透明 内外面施釉 e.良好

表11 遺物観察表(2)

() = 復元値 [] = 遺存値

挿図 番号	出土面 ・遺構	種 別	遺存度	寸法 (cm)			観察項目
				口径	底径	器高	
20-12	4b面溝1下層	常滑 甗	口縁部小片	縁帯幅2.4		[3.3]	a.輪積み b.暗灰色 砂粒 白色粒 小石粒 粗胎 c.黒褐色 e.良好 f.中野編年6a型式～6b型式
20-13	4b面溝1下層	常滑 甗	肩部片	—	—	[5.0]	a.輪積み 肩部にスタンプ b.暗灰色 白色粒 小石粒 粗胎 c.淡緑色～明褐色 e.良好
20-14	4b面溝1裏込め南側	かわらけ	口縁部1/5～底部1/2	(7.4)	(5.4)	1.5	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c.赤褐色～茶褐色 e.良好 f.二次焼成により変色
20-15	4b面溝1裏込め南側	常滑 甗	口縁部～肩部片	縁帯幅2.4～2.7		[7.8]	a.輪積み b.灰黄色 白色粒 赤色粒 小石粒 粗胎 d.外面自然釉降灰 灰緑色 e.良好
20-16	4b面溝1裏込め北側	かわらけ	口縁部1/4～底部1/4	(7.3)	(5.6)	1.7	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 雲母 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c.内面黒褐色 外面灰褐色 e.良好 f.二次焼成により変色
20-17	4b面溝1裏込め北側	褐釉 双耳壺	胴部片	—	—	[5.5]	b.灰黄色 砂粒 黒色粒 良胎 緻密 c.灰緑色 e.良好 f.二次焼成により釉剥離 内面露胎
20-18	4b面溝1裏込め北側	常滑 片口鉢Ⅰ類	口縁部小片	—	—	[2.6]	a.輪積み b.灰白色 砂粒 白色粒 小石粒 やや粗胎 e.良好 f.二次焼成により一部変色
20-19	4b面溝1裏込め北側	常滑 蔦口壺	胴部小片	—	—	[2.2]	a.輪積み 肩部外周に細い沈線 b.暗褐色 砂粒 白色粒 良胎 粘質 c.外面降灰暗褐色～灰濃緑色 内面黒褐色 e.良好
20-20	4b面土坑2	かわらけ	口縁部2/3～底部完形	(12.0)	7.5	2.3	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 雲母 赤色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c.黄褐色 e.良好
20-21	4b面土坑2	かわらけ	口縁部1/4～底部1/5	(13.5)	(8.0)	3.7	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c.黄褐色 e.良好
20-22	4b面土坑3	吉備系土器	口縁部1/4	(10.9)	—	[3.2]	b.砂質 白色粒 小石粒 赤色粒 良胎 c.灰色～淡黄白色 e.良好
21-1	4a面遺構外	かわらけ	口縁部1/2～底部1/2	(7.4)	(5.2)	1.6	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 小石粒 良胎 c.橙色～茶褐色 e.良好 f.二次焼成により変色
21-2	4a面遺構外	かわらけ	口縁部1/4～底部1/3	(11.6)	(7.0)	3.4	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c.黄褐色 e.良好
21-3	4a面遺構外	白磁 口はげ皿	口縁部小片	—	—	[2.1]	b.白色 黒色粒 精良緻密 d.灰白色半透明 e.良好 f.口縁部淡茶色～茶色の付着物
21-4	4a面遺構外	青磁 碗	底部小片	—	—	[1.4]	b.灰白色 精良緻密 d.暗灰緑色半透明 内外面施釉 釉層薄い e.良好 f.高台部露胎
21-5	4a面遺構外	青白磁 梅瓶	胴部小片	—	—	[2.9]	b.白色 黒色粒 精良緻密 d.淡灰緑色半透明 e.良好
21-6	4a面遺構外	常滑 甗	肩部片	—	—	[3.8]	a.輪積み 外面肩部扇状の押印 b.淡灰色～淡褐色 砂粒 白色粒 多 黒色粒 小石粒 粗胎 c.外面淡灰緑色 内面褐色 e.やや不良 焼成ムラあり f.外面自然釉付着
21-7	4a面遺構外	常滑 甗	胴部～底部片	—	—	[5.0]	a.輪積み b.淡褐色 砂粒 白色粒 黒色粒 石英粒 粗胎 c.内面赤褐色降灰多量 外面淡褐色 e.良好
21-8	4a面遺構外	常滑 片口鉢Ⅰ類	口縁部小片	—	—	[2.9]	a.輪積み b.灰白色 白色粒 小石粒 良胎 c.灰白色 e.良好
21-9	4a面遺構外	常滑 片口鉢Ⅰ類	口縁部小片	—	—	[4.0]	a.輪積み b.灰白色 砂粒 白色粒 黒色粒 小石粒 やや粗胎 c.明灰白色 e.良好 f.内面自然釉付着
21-10	4a面遺構外	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部小片	—	—	[4.3]	a.輪積み b.暗灰色 砂粒 白色粒 多 黒色粒 小石粒 粗胎 c.赤褐色 e.良好 f.内外面自然釉
21-11	4a面遺構外	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部片	—	—	[4.8]	a.輪積み b.赤褐色 白色粒 黒色粒 小石粒 粗胎 c.赤褐色 e.やや不良
21-12	4a面遺構外	滑石 鍋	口縁部片	—	—	[4.8]	c.銀灰～黒色 f.内面傷多 口縁部及び鐙の欠損部多 二次焼成の為全体が焼けている
21-13	4b面遺構外	瀬戸 輪花型入子	口縁部1/2～底部1/2	(9.0)	(5.6)	3.1	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 外底一部ヘラ削り b.灰色 黒色粒 良胎 c.明灰色 e.良好 f.内面淡緑色灰釉 内底面灰釉無し 内底面墨痕有り 推定8弁の輪花
21-14	4b面遺構外	常滑 甗	口縁部片	縁帯幅1.8		[3.5]	a.輪積み b.灰黒色 砂粒 白色粒 黒色粒 粗胎 c.赤褐色 e.良好 f.中野編年6a型式か
21-15	4b面遺構外	常滑 甗	口縁部小片	縁帯幅2.6		[3.8]	a.輪積み b.淡灰色～灰黄色 砂粒 白色粒 黒色粒 赤色粒 粗胎 c.灰褐色～淡緑褐色 e.良好 f.中野編年6b型式
21-16	4b面遺構外	常滑 片口鉢Ⅰ類	底部小片	—	—	[3.0]	a.輪積み 貼付高台 b.灰色 白色粒 黒色粒 小石 良胎 c.灰褐色 内面灰黒色(煤か) f.内面磨滅
21-17	4b面遺構外	滑石鍋転用スタンプ	一部欠損	長6.5 幅3.6 厚1.2～2.4			d.灰白色 f.滑石鍋転用 側面切りだし加工 両面に植物文を陰刻
21-18	4b面遺構外	骨角製用途不明品	完形	長2.9 幅0.7 厚0.7			a.円筒状に近いが表面僅かに角形に削り加工 研磨痕有り c.乳白色 f.両端部ともに面取り、丸く加工
21-19	4b面遺構外	銅銭	完形	外径2.4 内径2.0 孔径0.75 厚0.1			f.治平元寶 北宋1064年 篆書
25-1	5面方形土坑1	漆器 皿	底部1/3	—	6.0	[1.0]	f.内外面黒漆塗布 内面朱漆の手描きの文様
25-2	5面方形土坑1	漆器 椀	胴部片	—	—	[3.0]	f.内外面黒漆塗布 内外面朱漆による鶯、梅花、木の枝の三種類のスタンプ文様
25-3	5面方形土坑2	かわらけ	口縁～底部1/4	(7.7)	(6.0)	1.8	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 雲母 黒色粒 赤色粒 海綿骨針 小石粒 粗胎 c.灰白色～赤褐色 e.良好 f.二次焼成により変色
25-4	5面方形土坑2	かわらけ	口縁部1/4～底部1/4	(12.7)	(7.8)	3.5	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 雲母 白色粒 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c.黄褐色 e.良好 f.内面一部煤付着

表12 遺物観察表(3)

() = 復元値 [] = 遺存値

挿図番号	出土面・遺構	種別	遺存度	寸法(cm)			観察項目
				口径	底径	器高	
25-5	5面方形土坑2	青磁 蓮弁文碗	口縁部小片	—	—	[3.7]	b.灰白色 砂粒 精良緻密 d.灰緑色半透明 内外面施釉 e.良好
25-6	5面方形土坑2	常滑 甕	口縁部小片	縁帯幅2.7		[5.0]	a.輪積み b.灰橙色～淡橙色 白色粒 赤色粒 小石粒 粗胎 c.内面茶褐色 外面灰緑色～茶褐色 e.良好 f.中野編年7型式 図25-8と同一個体の可能性有り
25-7	5面方形土坑2	常滑 甕	口縁部小片	縁帯幅2.6		[4.4]	a.輪積み b.赤褐色 白色粒 小石粒 c.暗褐色 e.良好 f.中野編年6b型式
25-8	5面方形土坑2	常滑 甕	口縁部片	縁帯幅2.8		[8.3]	a.輪積み b.灰橙色～淡橙色 白色粒 赤色粒 小石粒 粗胎 c.内面茶褐色 外面灰緑色 e.良好 f.中野編年7形式 図25-6と同一個体の可能性有り
25-9	5面方形土坑2	常滑 甕	底部片	—	—	[4.2]	a.輪積み b.灰褐色 白色粒 小石粒 粗胎 c.灰茶褐色 e.良好 f.焼成時粘土塊の付着有り
25-10	5面方形土坑2	常滑 甕	底部片	—	—	[5.2]	a.輪積み b.暗褐色 砂粒 白色粒 黒色粒 粗胎 c.茶褐色 e.良好 f.内面自然釉付着
25-11	5面方形土坑2	常滑 片口鉢Ⅰ類	口縁部小片	—	—	[4.2]	a.輪積み b.灰白色 白色粒 小石粒 粗胎 c.灰白色 e.良好
25-12	5面方形土坑2	常滑 片口鉢Ⅰ類	口縁部片	—	—	[5.5]	a.輪積み b.灰色 白色粒 黒色粒 小石粒 粗胎 c.灰色～灰緑色 e.良好 f.内面自然釉付着
25-13	5面方形土坑2	銅銭	完形	外径2.5 内径2.15 孔径0.7 厚0.15			f.開元通寶 南唐 960年
25-14	5面方形土坑2	銅銭	完形	外径2.55 内径2.15 孔径0.7 厚0.1			f.元豐通寶 北宋 1078年 篆書
25-15	5面方形土坑4	かわらけ	口縁～底部1/5	(7.4)	(4.1)	2.2	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 雲母 白色粒 海綿骨針 粗胎 c.黄橙色 e.やや不良
25-16	5面方形土坑4	かわらけ	口縁～底部1/4	(7.6)	(5.0)	1.5	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 赤色粒 海綿骨針 粗胎 c.黄褐色 e.良好
25-17	5面圓炉裏1	かわらけ	口縁部1/2～底部完形	7.7	6.0	1.8	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 雲母 白色粒 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒粗胎 c.黄灰色 e.ややあまい
25-18	5面圓炉裏1	かわらけ	口縁部3/4～底部完形	7.4	5.4	1.7	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 雲母 黒色粒 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒粗胎 c.黄褐色 e.良好 f.口縁部注口状に欠け
25-19	5面圓炉裏1	かわらけ	口縁部2/3～底部完形	10.8	6.8	2.7	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 黒色粒 海綿骨針 良胎 c.赤褐色～淡橙色 e.良好 f.かわらけ内火葬骨含む
25-20	5面圓炉裏1	木製 枡	完形	長5.1 幅5.2 高3.3 板材厚0.3 孔径0.3 木釘径0.2			a.長方形の板材の両短辺対角に切り込みを入れ、方形に組み合わせ状態を木釘で固定 底板を木釘で打ち付ける 残存木釘底板12本、側板20本 底板中央に孔 f.長4.5cm×幅4.5cm×高3.0cm = 60.75cm ³
25-21	5面圓炉裏1	用途不明木製品	両端部欠損	長(17.2) 幅1.8 厚0.4～0.6 孔径0.4～0.5			f.板目材 表裏共仕上げ加工 縦長の中心部より側面寄りに4箇所不均等な間隔で孔が穿たれている 板目加工の為所々年輪の剥がれている箇所有り
25-22	5面P3	かわらけ	口縁部1/4～底部完形	(10.6)	6.4	3.0	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 雲母 赤色粒 多海綿骨針 小石粒 粗胎 c.淡褐色 e.良好
25-23	5面P4	かわらけ	完形	7.3	5.0	1.8	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 小石粒 粗胎 c.黄褐色 e.良好 f.内外面に煤付着
26-1	5面遺構外	かわらけ	口縁～底部1/4	(7.8)	(5.2)	2.2	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 赤色粒 粗胎 c.黄褐色～茶褐色 e.良好 f.二次焼成を受けているため損傷著しい
26-2	5面遺構外	かわらけ	口縁部1/5～底部完形	(11.7)	7.0	3.0	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 雲母 白色粒 赤色粒 海綿骨針 粗胎 c.黄褐色 e.良好
26-3	5面遺構外	かわらけ	口縁部1/8～底部完形	(13.8)	7.5	3.4	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 小石粒 泥岩粒粗胎 c.淡褐色 e.良好
26-4	5面遺構外	白磁 口はげ皿	口縁部小片	—	—	[2.5]	b.白色 精良緻密 d.灰白色半透明 内外面施釉 e.良好 f.内面に浮き文有り
26-5	5面遺構外	青磁 蓮弁文碗	口縁部小片	—	—	[4.0]	b.白色 砂粒 黒色粒 やや粗胎 d.淡灰緑色 内外面施釉 釉層薄
26-6	5面遺構外	褐釉 壺	胴部小片	—	—	[2.5]	b.暗褐色 白色粒 小石粒 良胎緻密 c.外面黒褐色 内面灰白色 e.良好
26-7	5面遺構外	褐釉 壺	胴部小片	—	—	[2.6]	b.茶褐色 白色粒 黒色粒 良胎緻密 c.外面褐色 内面灰白色 e.良好
26-8	5面遺構外	褐釉 壺	胴部小片	—	—	[2.5]	b.茶褐色 白色粒 黒色粒 良胎緻密 c.外面褐色 内面灰白色 e.良好
26-9	5面遺構外	常滑 片口鉢Ⅰ類	口縁部小片	—	—	[2.8]	a.輪積み b.灰白色 砂粒 白色粒 小石粒 粗胎 c.灰白色 e.良好
26-10	5面遺構外	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部片	—	—	[6.1]	a.輪積み b.灰褐色 砂粒 白色粒 小石粒 粗胎 c.灰褐色 e.良好
26-11	5面遺構外	木製 箸	完形	長18.0 幅0.8 厚0.5			a.多角形状に削り加工
26-12	5面遺構外	木製 箸	完形	長19.1 幅0.6 厚0.6			a.多角形状に削り加工
26-13	5面遺構外	木製 箸	完形	長19.5 幅0.7 厚0.5			a.多角形状に削り加工
26-14	5面遺構外	木製 箸	完形	長20.0 幅0.7 厚0.6			a.多角形状に削り加工
26-15	5面遺構外	木製 箸	上端部欠損	長[19.3] 幅0.6 厚0.6			a.多角形状に削り加工
26-16	5面遺構外	木製 箸	両端部欠損	長[20.5] 幅0.7 厚0.6			a.多角形状に削り加工
26-17	5面遺構外	木製 曲物	底板ほぼ完形	長12.0 幅11.0 厚1.0 径12.0			a.端部外周が薄く斜めに削り加工 断面形はやや台形に近い b.柘目材
26-18	5面遺構外	木製 曲物	底板残存度1/3	縦13.3 横[4.3] 厚0.4～0.5			a.端部の外周には斜めに削られた痕跡が残る b.柘目材
30-1	6面土坑1	かわらけ	口縁部1/3～底部完形	(12.1)	(8.4)	3.1	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 雲母 赤色粒 小石粒 粗胎 c.橙色 e.良好 f.口縁部一部煤付着

表13 遺物観察表(4)

() = 復元値 [] = 遺存値

挿図 番号	出土面 ・遺構	種 別	遺存度	寸法 (cm)			観察項目
				口径	底径	器高	
30-2	6面土坑1	かわらけ	口縁部2/3 ～底部1/3	(12.0)	(8.0)	3.0	a. 轆轤 外底糸切・板状圧痕 b. 砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c. 橙色 e. 良好
30-3	6面土坑1	かわらけ	口縁～底部1/4	(12.5)	(8.5)	2.7	a. 轆轤 外底糸切・板状圧痕 b. 砂粒 雲母 白色粒 黒色粒 海綿骨針 小石粒 粗胎 c. 黄橙色 e. 不良
30-4	6面土坑2	かわらけ	口縁部1/5 ～底部1/2	(6.9)	(4.8)	1.6	a. 轆轤 外底糸切・板状圧痕 b. 砂粒 雲母 赤色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c. 黄橙色 e. 不良
30-5	6面土坑2	常滑 甗	口縁部小片	緑帯幅4.7		[6.6]	a. 輪積み b. 灰色～茶褐色 白色粒多 黒色粒 小石粒 粗胎 c. 茶褐色 e. 良 好 f. 中野編年7型式
30-6	6面土坑2	常滑 甗	口縁部片	緑帯幅4.5		[7.5]	a. 輪積み b. 灰色～茶褐色 白色粒多 小石粒 粗胎 c. 深緑色～赤褐色 内面 茶褐色 e. 良好 f. 中野編年8型式
30-7	6面土坑2	常滑 甗	肩～胴部片	—	—	[8.4]	a. 輪積み b. 灰色～灰褐色 白色粒多 黒色粒 小石粒 粗胎 c. 茶色～茶褐色 自然釉部分暗緑色 e. 良好 f. 降灰多量により押印不鮮明
30-8	6面P6	常滑 片口鉢I類	口縁部小片	—	—	[3.5]	a. 輪積み b. 灰褐色 白色粒多 黒色粒 粗胎 c. 灰褐色 e. 良好
30-9	6面P14	青磁 蓮弁文碗	胴部小片	—	—	[3.6]	b. 淡黄白色 小石粒 細かな気泡 良胎 d. 黄茶色半透明 内外面施釉 e. 良好
30-10	6面P14	褐釉 壺	底部片	—	—	[5.8]	a. 輪積み b. 淡茶灰色 白色粒 赤色粒 黒色粒 小石粒 粗胎 d. 茶褐色不透明 釉ダレ黒褐色 内外面施釉 e. 良好 やや軟質
30-11	6面P16	青磁 蓮弁文碗	口縁部小片	—	—	[3.6]	b. 灰白色 黒色粒 精良緻密 d. 淡緑色半透明 内外面施釉 e. 良好
30-12	6面P18	かわらけ	口縁部1/2 ～底部2/3	(7.4)	(6.0)	1.7	a. 轆轤 外底糸切・板状圧痕 b. 砂粒 白色粒 黒色粒 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや多 粗胎 c. 橙色～橙褐色 e. 良好
30-13	6面P20	火鉢	口縁～胴部片	—	—	8.0	b. 茶褐色 e. 良好 f. 二次焼成を受けている為著しく状態が悪い 河野分類 I B類
31-1	6面遺構外	かわらけ	口縁～底部1/4	(7.4)	(5.1)	1.7	a. 轆轤 外底糸切・板状圧痕 b. 砂粒 雲母 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c. 黄橙色 e. 良好
31-2	6面遺構外	かわらけ	口縁～底部1/4	(7.6)	(5.0)	1.5	a. 轆轤 外底糸切・板状圧痕 b. 砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c. 黄橙色 e. 良好
31-3	6面遺構外	かわらけ	口縁～底部2/3	7.2	5.3	1.6	a. 轆轤 外底糸切・板状圧痕 b. 砂粒 雲母 赤色粒 小石粒 泥岩粒 粗胎 c. 黄 橙色 e. 良好
31-4	6面遺構外	かわらけ	口縁部1/5 ～底部1/4	(8.0)	(5.2)	1.5	a. 轆轤 外底糸切・板状圧痕 b. 砂粒 雲母 白色粒 海綿骨針 小石粒 粗胎 c. 茶褐色 e. 良好 f. 全体に二次焼成を受け、変色
31-5	6面遺構外	かわらけ	口縁～底部2/3	(9.0)	(7.0)	1.5	a. 轆轤 外底糸切・板状圧痕 b. 砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c. 黄橙色 e. 良好
31-6	6面遺構外	かわらけ	口縁部1/3 ～底部1/4	(10.6)	(5.8)	3.0	a. 轆轤 外底糸切・板状圧痕 b. 砂粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c. 黄橙色 e. 良好 やや硬質 f. 口縁部内面に煤付着
31-7	6面遺構外	かわらけ	口縁部1/3 ～底部1/4	(12.7)	(7.9)	3.5	a. 轆轤 外底糸切・板状圧痕 b. 砂粒 雲母 白色粒 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c. 黄橙色 e. 良好
31-8	6面遺構外	かわらけ	ほぼ完形	12.8	8.5	3.3	a. 轆轤 外底糸切・板状圧痕 b. 砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c. 明橙色 e. 良好
31-9	6面遺構外	青磁 蓮弁文碗	口縁部小片	—	—	[3.4]	b. 灰色 黒色粒 精良 d. 灰緑色半透明 内外面施釉 釉調薄い e. 良好
31-10	6面遺構外	青白磁 梅瓶	底部片	—	8.0	[1.1]	a. 轆轤 b. 灰白色 白色粒 精良緻密 d. 外底乳白色半透明 所々橙～褐色 e. 良好 f. 外底所々釉付着 内底部全体に煤付着
31-11	6面遺構外	褐釉 壺	底部片	—	(7.6)	[7.0]	b. 灰色～暗灰色 砂粒 白色粒 黒色粒 緻密 d. 外面青灰色 内面灰白色 e. 良 好 硬質 f. 二次焼成を受けたため釉の残り悪い
31-12	6面遺構外	瀬戸 おろし皿	底部片	—	—	[1.2]	a. 内底にへら状工具による格子描き b. 灰白色 白色粒 黒色粒 良胎 d. 灰 緑色透明 外面施釉 e. 良好 f. 内外面一部煤付着
31-13	6面遺構外	常滑 甗	口縁部小片	緑帯幅2.1		[7.0]	a. 輪積み b. 灰白色 砂粒 白色粒 黒色粒 粗胎 c. 赤褐色 e. 良好 f. 中野編 年6a型式
31-14	6面遺構外	常滑 甗	底部片	—	—	[5.7]	a. 輪積み 外面縦位へラ削り 外底砂目痕 b. 茶褐色 砂粒 白色粒 黒色粒 小石 粒 c. 茶褐色 e. 良好 f. 内面自然降灰
31-15	6面遺構外	常滑 甗	肩部	—	—	[4.7]	a. 輪積み b. 灰褐色 砂粒 白色粒多 小石粒 粗胎 e. 良好
35-1	7面溝1上層	かわらけ	口縁～底部1/4	(7.5)	(5.0)	1.5	a. 轆轤 外底糸切・板状圧痕 b. 砂粒 雲母 赤色粒 泥岩粒 粗胎 c. 黄橙色 e. やや不良
35-2	7面溝1上層	かわらけ	口縁～底部1/4	(7.8)	5.5	1.5	a. 轆轤 外底糸切・板状圧痕 b. 砂粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c. 灰黄色 e. ややあまい
35-3	7面溝1上層	かわらけ	完形	7.8	6.0	1.6	a. 轆轤 外底糸切・板状圧痕 見込みナゲ調整無し b. 砂粒 黒色粒 赤色粒 小 石粒 泥岩粒 粗胎 c. 茶褐色 e. 不良
35-4	7面溝1上層	かわらけ	口縁～底部1/4	(8.6)	(5.4)	1.6	a. 轆轤 外底糸切・板状圧痕 b. 砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 粗胎 c. 黄橙色 e. 良好 硬質
35-5	7面溝1上層	かわらけ	口縁～底部1/4	(7.8)	(4.6)	1.6	a. 轆轤 外底糸切・板状圧痕 b. 砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c. 淡橙色 e. 良好
35-6	7面溝1上層	かわらけ	口縁～底部2/3	(7.8)	(6.0)	1.4	a. 轆轤 外底糸切・板状圧痕 b. 砂粒 赤色粒 泥岩粒 海綿骨針 粗胎 c. 橙色 e. 良好
35-7	7面溝1上層	かわらけ	口縁部3/4 ～底部4/5	8.2	6.0	1.9	a. 轆轤 外底糸切・板状圧痕 b. 砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c. 黄橙色 e. 良好

表14 遺物観察表(5)

() = 復元値 [] = 遺存値

挿図 番号	出土面 ・遺構	種 別	遺存度	寸法 (cm)			観察項目 a:成形・整形 b:胎土・素地・材質 c:色調 d:釉調 e:焼成 f:備考
				口径	底径	器高	
35-8	7面溝1上層	かわらけ	口縁部1/5 ～底部完形	(11.4)	7.1	2.9	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 小石粒 泥岩粒 粗胎 c.橙色～茶褐色 e.良好
35-9	7面溝1上層	かわらけ	口縁部2/3 ～底部1/2	(7.8)	(4.0)～ (6.0)	1.5	a.手捏ね 外底指頭痕 b.砂粒 白色粒 赤色粒 良胎 c.橙色 e.良好
35-10	7面溝1上層	かわらけ	口縁～底部1/4	(9.7)	[(6.0)] ～(8.0)	1.6	a.手捏ね 外底指頭痕 b.砂粒 赤色粒 粗胎 c.黄橙色 e.良好
35-11	7面溝1上層	かわらけ	口縁部2/3	(11.8)	—	[3.4]	a.手捏ね 外底指頭痕 b.砂粒 白色粒 黒色粒 赤色粒 泥岩粒 粗胎 c.橙色 e.良好 硬質 f.内外面、口縁部～胴部煤付着
35-12	7面溝1上層	白かわらけ	口縁部1/4	(10.3)	—	[3.0]	b.砂粒 白色粒 黒色粒 粗胎 c.明白灰色 e.良好 やや軟質
35-13	7面溝1上層	白磁 口はげ皿	口縁部小片	—	—	[2.1]	b.灰白色 白色粒 精良緻密 d.内面灰白色 外面淡黄灰色 釉層薄い e.良好 f.焼成時の調整ミスか口縁部に釉が残っている
35-14	7面溝1上層	青磁 蓮弁文碗	口縁部小片	—	—	[2.7]	a.内面に蓮弁文 外面無文 d.灰白色 白色粒 精良緻密 釉層若干厚い e.良好 f.高台付き皿か内面蓮弁文
35-15	7面溝1上層	瓦器 皿	口縁部小片	—	—	[2.0]	b.灰白色 黒色粒 良胎 c.内外面共黒褐色 f.輪花皿か内面横方向に調整痕有り
35-16	7面溝1上層	平瓦	側端部小片	長[8.6] 幅[5.2] 厚1.9			a.凹面布目痕 凸面工具類で調整 側端部へラ削り b.灰緑色～灰褐色 白色粒 黒色粒 良胎 c.茶褐色 e.良好 f.丸瓦の可能性もあり 永福寺I期 水殿窯か
35-17	7面溝1上層	平瓦	小片	長[9.0] 幅[6.7] 厚2.5			a.凹面布目痕 凸面縷目痕 b.灰色 白色粒 黒色粒 小石粒 良胎 c.灰色～灰褐色 f.永福寺I期 水殿窯か
35-18	7面溝1下層	かわらけ	口縁～底部1/4	(7.2)	(5.9)	1.4	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 海綿骨針 小石粒 粗胎 c.灰黄色 e.ややあまい
35-19	7面溝1下層	かわらけ	口縁～底部1/4	(7.4)	(5.6)	1.2	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c.橙色 e.やや良好
35-20	7面溝1下層	かわらけ	口縁部4/5 ～底部完形	7.8	4.9	1.7	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 雲母 黒色粒 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c.黄橙色 e.良好
35-21	7面溝1下層	かわらけ	口縁部3/4 ～底部完形	7.8	0.5	1.6	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c.淡褐色 e.良好
35-22	7面溝1下層	かわらけ	口縁～底部1/4	(7.8)	(4.9)	1.5	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c.黄灰色 e.ややあまい
35-23	7面溝1下層	かわらけ	口縁部4/5 ～底部完形	8.0	6.1	1.6	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c.黄褐色 e.良好
35-24	7面溝1下層	かわらけ	口縁～底部1/3	(7.8)	(5.7)	1.7	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 雲母 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c.黄褐色 e.良好
35-25	7面溝1下層	かわらけ	口縁～底部1/4	(8.8)	(7.0)	1.5	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c.黄褐色 e.良好
35-26	7面溝1下層	かわらけ	口縁部1/2 ～底部4/5	(11.8)	7.0	3.0	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 小石粒 粗胎 c.黄褐色 e.やや良好
35-27	7面溝1下層	かわらけ	口縁部1/8 ～底部2/3	(13.0)	(8.0)	3.7	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 赤色粒 泥岩粒 良胎 c.橙色 e.良好 硬質
35-28	7面溝1下層	平瓦	側端部小片	長[13.0] 幅[6.1] 厚2.0			a.凹面離れ砂 糸切り痕 凸面縷目痕 側端部へラ削り b.灰色～茶褐色 白色粒 黒色粒 小石粒 良胎 c.茶褐色～褐色 e.良好
35-29	7面溝1下層	打ち欠きかわらけ	底部2/3	—	—	[0.5]	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 雲母 黒色粒 赤色粒 小石粒 良胎 c.橙色 e.良好 f.底部側面部分を加工
35-30	7面溝1下層	木製品 箸	完形	長22.0 幅0.7 厚0.5			a.やや楕円状に面取り加工
35-31	7面溝1下層	木製品 箸	完形	長22.3 幅0.7 厚0.5			a.多角形状に削り加工
35-32	7面溝1下層	木製品 箸	完形	長25.3 幅0.6 厚0.5			a.四角形状に削り加工
36-1	7面溝2	かわらけ	口縁～底部1/3	(7.8)	(5.8)	1.5	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 粗胎 c.灰黄色 e.良好
36-2	7面溝3	かわらけ	口縁部1/2 ～底部2/3	(8.4)	(5.6)	1.8	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒多 海綿骨針 小石粒 粗胎 c.灰黄色 e.ややあまい
36-3	7面溝3	かわらけ	口縁～底部2/3	(9.2)	[(3.4)] ～(7.0)	2.0	a.手捏ね 底部指頭痕 b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 粗胎 c.黄褐色 e.良好
36-4	7面溝3	かわらけ加工品	完形	縦2.6 横3.0 厚0.9			a.轆轤 外底糸切痕 b.砂粒 赤色粒 小石粒 粗胎 c.橙色 e.良好 f.側面研磨して面取り加工
36-5	7面P3	かわらけ	口縁～底部1/4	(8.8)	(6.8)	1.6	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c.淡褐色 e.良好
36-6	7面P5	かわらけ	口縁部2/3 ～底部完形	7.8	6.4	1.8	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 雲母 赤色粒 泥岩粒 小石粒 海綿骨針 粗胎 c.橙色 e.やや不良
36-7	7面P5	かわらけ	口縁～底部1/2	(8.3)	(6.1)	1.6	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 雲母 赤色粒 粗胎 c.橙色 e.良好
36-8	7面P5	かわらけ	口縁～底部3/4	8.2	7.0	1.6	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 雲母 黒色粒 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c.黄褐色 e.良好
36-9	7面P5	かわらけ	口縁～底部1/3	(12.0)	(7.3)	3.1	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 粗胎 c.濃褐色～茶褐色 e.やや不良

表15 遺物観察表(6)

() = 復元値 [] = 遺存値

挿図 番号	出土面 ・遺構	種 別	遺存度	寸法 (cm)			観察項目
				口径	底径	器高	
36-10	7面P5	かわらけ	口縁部1/4 ～底部1/2	(12.8)	(9.0)	3.1	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 雲母 黒色粒 赤色粒 海綿骨針 粗胎 c.橙色 e.やや不良
36-11	7面P5	かわらけ	口縁部1/10 ～底部4/5	(13.0)	8.9	[3.2]	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 黒色粒 赤色粒 海綿骨針 粗胎 c.灰黄 色 e.やや不良
37-1	7面 木器層中	かわらけ	口縁～底部1/4	(7.3)	(5.0)	1.7	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 雲母 泥岩粒 粗胎 c.黄灰色 e.良好
37-2	7面 木器層中	かわらけ	口縁部1/3 ～底部1/2	(7.6)	(5.4)	1.8	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 雲母 白色粒 赤色粒 海綿骨針 小石粒 粗胎 c.橙色 e.良好
37-3	7面 木器層中	かわらけ	口縁～底部1/4	(7.8)	(6.2)	1.6	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 雲母 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c.灰橙色 e.良好
37-4	7面 木器層中	かわらけ	完形	8.0	5.0	1.9	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 雲母 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c.灰黄色 e.良好 f.ゆがみ激しい
37-5	7面 木器層中	かわらけ	口縁部1/5 ～底部1/4	(7.9)	(6.0)	1.4	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 赤色粒 粗胎 c.黄橙色 e.良好 硬質
37-6	7面木器層中	かわらけ	口縁～底部1/3	(8.8)	(6.8)	1.6	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c.橙色 e.不良
37-7	7面木器層中	かわらけ	口縁～底部1/5	(10.7)	(6.0)	2.6	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 赤色粒 海綿骨針 粗胎 c.赤褐色 e.良好 やや硬質 f.二次焼成による変色
37-8	7面木器層中	かわらけ	口縁部1/5 ～底部1/3	(11.8)	(6.0)	3.7	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 雲母 黒色粒 赤色粒 粗胎 c.淡黄橙色 e.良好 硬質
37-9	7面木器層中	かわらけ	口縁部1/4 ～底部1/2	(12.7)	(8.2)	3.4	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 雲母 黒色粒 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c.灰橙色 e.良好
37-10	7面木器層中	とりべ	口縁部 ～胴部片	—	—	[2.8]	b.かわらけ質 c.茶褐色 f.轆轤かわらけの口縁部(特に内面にかけて)に 熱で溶かされた不純物が厚く付着している
37-11	7面木器層中	青磁 蓮弁文碗	口縁部片	—	—	[3.3]	b.灰白色 白色粒 黒色粒 緻密 d.灰緑色不透明 内外面施釉 釉層若干厚め e.良好 f.外面蓮弁文
37-12	7面木器層中	常滑 甕	口縁部小片	縁帯幅2.5		[5.3]	a.輪積み b.橙色～灰茶褐色 白色粒 黒色粒 小石粒 粗胎 c.自然釉黄緑色 内外面茶褐色 e.良好 f.中野編年6a型式
37-13	7面木器層中	瓦器 皿	口縁部小片	—	—	[2.3]	b.灰白色 黒色粒 良胎 c.黒灰色 e.良好
37-14	7面木器層中	漆器 椀	口縁部片	—	—	[1.9]	a.内外面黒漆塗布 f.外面朱漆の手描き草花文様
37-15	7面木器層中	漆器 皿	口縁部1/2 ～底部完形	9.2	6.8	1.5	a.削り出し高台 f.内外面黒漆塗布 無文
37-16	7面木器層中	漆器 皿	口縁部1/3 ～底部1/4	9.0	(6.5)	1.0	a.内外面黒漆塗布 f.内面亀甲文様の朱漆のスタンプ
37-17	7面木器層中	漆器 皿	口縁～底部1/2	(9.3)	(6.7)	[1.2]	a.内外面黒漆塗布 f.内外面朱漆の梅の花の手描き文様
37-18	7面木器層中	漆器 皿	口縁部片	—	—	[1.3]	a.内外面黒漆塗布 f.内外面朱漆の文様
37-19	7面木器層中	漆器 皿	口縁部片	—	—	[1.0]	a.内外面黒漆塗布 f.内面朱漆のスタンプ
38-1	7面木器層中	木製 箸	完形	長18.8 幅0.9 厚0.5			a.四角形状に削り加工 f.一部に装飾のような加工痕
38-2	7面木器層中	木製 箸	上端部欠損	長(18.5) 幅0.9 厚0.6			a.四角形状に削り加工 f.一部に装飾のような加工痕
38-3	7面木器層中	木製 箸	端部欠損	長(21.5) 幅0.7 厚0.6			a.四角形状に削り加工 f.一部に装飾のような加工痕
38-4	7面木器層中	木製 箸	完形	長20.2 幅0.5 厚0.5			a.台形状に削り加工
38-5	7面木器層中	木製 箸	完形	長21.2 幅0.5 厚0.7			a.楕円形状に削り加工
38-6	7面木器層中	木製 箸	完形	長21.3 幅0.7 厚0.7			a.四角形状に削り加工
38-7	7面木器層中	木製 箸	完形	長22.0 幅0.6 厚0.4			a.楕円形状に削り加工
38-8	7面木器層中	木製 箸	完形	長22.3 幅2.8 厚0.5			a.楕円形状に削り加工
38-9	7面木器層中	木製 箸	完形	長22.5 幅0.7 厚0.4			a.四角形状に削り加工
38-10	7面木器層中	木製 箸	完形	長22.5 幅0.5 厚0.5			a.台形状に削り加工 f.一部に装飾のような加工痕
38-11	7面木器層中	木製 箸	完形	長23.3 幅0.5 厚0.5			a.四角形状に削り加工 f.上端部垂直に切り落とされている
38-12	7面木器層中	木製 箸	完形	長23.6 幅0.8 厚0.6			a.多角形状に削り加工
38-13	7面木器層中	木製 箸	完形	長23.5 幅0.7 厚0.4			a.四角形状に削り加工
38-14	7面木器層中	木製 箸	完形	長23.6 幅0.6 厚0.4			a.四角形状に削り加工
38-15	7面木器層中	木製 箸	完形	長23.5 幅0.9 厚0.7			a.多角形状に削り加工
38-16	7面木器層中	木製 箸	完形	長23.8 幅0.7 厚0.5			a.多角形状に削り加工
38-17	7面木器層中	木製 箸	完形	長23.8 幅0.7 厚0.5			a.四角形状に削り加工 f.上端部切り落とされている
38-18	7面木器層中	木製 箸	完形	長24.3 幅0.6 厚0.5			a.三角形上に削り加工
38-19	7面木器層中	木製 箸	完形	長24.0 幅0.6 厚0.5			a.四角形状に削り加工
38-20	7面木器層中	木製 箸	完形	長24.2 幅0.7 厚0.4			a.四角形状に削り加工
38-21	7面木器層中	木製 箸	完形	長24.7 幅0.7 厚0.6			a.三角形上に削り加工
38-22	7面木器層中	木製 串	完形	長25.3 幅1.1 厚0.6			a.四角形状に削り加工 f.もしくは菜箸か
38-23	7面木器層中	木製 串	完形	長25.4 幅1.1 厚0.6			a.多角形状に削り加工 f.もしくは菜箸か

表16 遺物観察表(7)

() = 復元値 [] = 遺存値

挿図 番号	出土面 ・遺構	種 別	遺存度	寸法 (cm)			観察項目 a:成形・整形 b:胎土・素地・材質 c:色調 d:釉調 e:焼成 f:備考
				口径	底径	器高	
38-24	7面木器層中	木製 串	完形	長26.4 幅1.1 厚0.6			a.多角形状に削り加工 f.もしくは菜箸か
38-25	7面木器層中	木製 串	完形	長33.7 幅1.2 厚0.7			a.楕円形状に削り加工 f.もしくは菜箸か
38-26	7面木器層中	篋状木製品	端部欠損	長(19.5) 幅2.3 厚0.3～0.7			f.板目材 先端部篋状加工
38-27	7面木器層中	木製 曲物	残存度1/3	縦6.2 横(4.5) 厚0.4			f.板目材 底板
38-28	7面木器層中	木製 膳脚	ほぼ完形	長5.4 幅1.2～3.1 厚1.0～2.6			a.黒漆塗り 接合部は漆が塗られていない
38-29	7面木器層中	木製 用途不明品	両端部欠損	長(9.1) 幅0.6～1.0 厚0.5～1.0			f.格子状に組まれていたのか凹状の部分に圧迫痕
41-1	8面溝状遺構1 上層	かわらけ	口縁～底部1/2	(8.4)	(6.0)	1.5	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 雲母 白色粒 泥海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c.黄橙色 e.良好 f.灯明皿か
41-2	8面溝状遺構1 上層	かわらけ	口縁部2/3 ～底部完形	(12.6)	7.8	3.3	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c.橙色 e.やや不良
41-3	8面溝状遺構1 上層	かわらけ	口縁～底部1/4	(10.0)	[(6.7)] ～(8.1)	1.7	a.手捏ね 外底指頭痕 b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 やや粗胎 c.黄橙色 e.不良
41-4	8面溝状遺構1 上層	かわらけ	口縁～胴部2/3	(13.7)	(11.6)	[3.2]	a.手捏ね 外底指頭痕 b.砂粒 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c.灰黄色 e.不良
41-5	8面溝状遺構1 上層	かわらけ	口縁～胴部1/3	(15.0)	(13.3)	[3.2]	a.手捏ね 外底指頭痕 b.砂粒 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c.灰黄色 e.不良
41-6	8面溝状遺構1 上層	同安窯 青磁劃花文皿	口縁部小片	—	—	[1.8]	b.灰色 精良緻密 d.緑黄色透明 釉層薄い e.良好 f.外面に劃花文
41-7	8面溝状遺構1 上層	鉄釘	完形	長11.5 幅0.9 厚0.6			f.頭頂部丸味を帯び先端部非常に尖っている
41-8	8面溝状遺構1 下層	木製 形代か	完形	長20.9 幅1.3 厚0.6			f.刀形の形代か
41-9	8面土坑2	かわらけ	口縁～底部2/3	(9.8)	—	1.9	a.手捏ね 外底指頭痕 b.砂粒 雲母 黒色粒 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c.黄橙色 e.やや不良
41-10	8面土坑2	かわらけ	底部片	—	—	[1.8]	a.手捏ね 外底指頭痕 b.砂粒 海綿骨針 粗胎 c.暗橙色 e.良好 f.内底面 に布目痕 外底側面に切れ込み痕
41-11	8面土坑2	土師器 坏	底部片	—	—	[3.0]	b.砂粒 白色粒 小石粒 粗胎 c.橙色～淡灰黄色 e.不良
42-1	8面遺構外	かわらけ	口縁部1/5 ～底部1/4	(7.8)	[(3.0)] ～(6.2)	1.8	a.手捏ね 外底指頭痕 b.砂粒 白色粒 赤色粒 海綿骨針 粗胎 c.黄橙色 e.良好
42-2	8面遺構外	かわらけ	口縁～底部1/4	(9.2)	[(4.8)] ～(8.1)	2.0	a.手捏ね 外底指頭痕 b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 やや良胎 c.赤橙色 e.良好
42-3	8面遺構外	かわらけ	口縁～底部1/4	(6.2)	(4.4)	1.5	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 粗胎 c.明橙色 e.良好
42-4	8面遺構外	かわらけ	口縁部1/10 ～底部1/8	(7.6)	(7.2)	1.8	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 海綿骨針 粗胎 c.赤橙色 e.良好
42-5	8面遺構外	かわらけ	口縁～底部1/4	(7.8)	(5.5)	1.5	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c.黄橙色 e.やや不良 f.口縁部煤付着、灯明皿
42-6	8面遺構外	かわらけ	口縁部1/5 ～底部1/4	(7.7)	(5.2)	1.6	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c.黄橙 色 e.良好
42-7	8面遺構外	かわらけ	口縁～底部1/3	(7.9)	(5.7)	1.5	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 小石 粗 胎 c.黄橙色 e.やや不良
42-8	8面遺構外	かわらけ	口縁部1/2 ～底部2/3	(8.2)	(6.0)	1.5	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c.黄橙色 e.良好
42-9	8面遺構外	かわらけ	口縁部1/4 ～底部2/3	(11.5)	(7.5)	2.6	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 黒色粒 赤色粒 海綿骨針 粗胎 c.淡橙 色 e.良好
42-10	8面遺構外	かわらけ	口縁部1/4 ～底部完形	(12.0)	7.8	3.4	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 雲母 白色粒 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c.黄橙色 e.良好
42-11	8面遺構外	かわらけ	口縁部1/5 ～底部1/3	(12.4)	8.0	1.9	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 白色粒 赤色粒 海綿骨針 小石粒 泥岩粒 粗胎 c.灰橙色 e.良好
42-12	8面遺構外	青磁 碗	底部片	—	—	[2.5]	b.灰色 白色粒 黒色粒 精良 d.暗黄緑色透明 内外面施釉 釉層極薄い e.良好
42-13	8面遺構外	常滑 甕	肩部片	—	—	[4.8]	a.輪積み b.褐色 白色粒 黒色粒 良胎 c.褐色 e.良好
42-14	8面遺構外	平瓦	端部片	長[6.3] 幅[12.4] 厚2.3			a.凹面布目痕 凸面縄目痕 b.灰色～灰褐色 白色粒 黒色粒 良胎 c.灰茶褐 色 e.良好 f.永福寺I期 水殿窯か
42-15	8面遺構外	木製 箸	完形	長20.6 幅0.6 厚0.5			a.四角形状に削り加工
42-16	8面遺構外	木製 箸	完形	長22.8 幅0.8 厚0.6			a.台形状に削り加工
42-17	8面遺構外	木製 箸	完形	長22.8 幅0.8 厚0.6			a.多角形状に削り加工
42-18	8面遺構外	木製 箸	完形	長25.5 幅0.6 厚0.5			a.多角形状に削り加工
42-19	8面遺構外	篋状木製品	完形	長17.4 幅1.5 厚0.4～0.8			a.先端部篋状に削り加工
42-20	8面遺構外	須恵 甕	胴部片	—	—	[6.1]	b.灰色 白色粒 小石粒 良胎 c.灰色 e.良好 f.内面自然釉 外面櫛描文か

表17 遺物観察表(8)

() = 復元値 [] = 遺存値

挿図 番号	出土面 ・遺構	種 別	遺存度	寸法 (cm)			観察項目
				口径	底径	器高	
44-1	8面下トレンチ	土師器 坏	口縁部1/3 ～底部1/2	(11.8)	(6.0)	[4.2]	a.口縁部内外面横ナデ 体部～底部外面へラケズリ b.橙色 白色粒 黒色粒 多 小石粒 雲母 海綿骨針 粗胎 c.橙色 e.あまい f.相模型
44-2	8面下トレンチ	土師器 坏	口縁部1/4 ～底部1/3	(10.8)	7.0	4.5	a.口縁部内外面横ナデ 外面体部～底部へラケズリ b.黄橙色 赤色粒 黒色 粒 雲母 海綿骨針 粗胎 c.黄橙色 e.ややあまい f.相模型
44-3	8面下トレンチ	土師器 坏	口縁部1/3 ～底部完形	(11.8)	7.0	4.1	a.轆轤 外形糸切痕 b.淡橙色 砂粒 白色粒 黒色粒 小石粒 雲母 海綿骨針 粗 胎 c.淡橙色～橙色 e.良好 f.底部一部摩耗 9世紀前半期の三浦半島が 産地か
44-4	8面下トレンチ	須恵 坏	口縁部小片	—	—	[3.2]	b.茶褐色 白色粒 小石粒 石英 海綿骨針 良胎 c.口縁部褐色～赤褐色 体部茶 褐色 e.良好 f.口縁部自然釉 8世紀後半～9世紀前半期の南比企産
44-5	8面下トレンチ	須恵 坏	口縁部小片	—	—	[3.5]	b.灰色 砂粒 白色粒 黒色粒 小石粒 雲母 海綿骨針 良胎 c.灰黒色 e.良好 f. 8世紀後半～9世紀前半期の南比企産
44-6	8面下トレンチ	須恵 坏	口縁部1/5 ～底部1/3	(11.3)	(6.0)	3.9	a.轆轤 外底糸切痕 b.灰黒色 白色粒 黒色粒 小石粒 石英粒 海綿骨針 良胎 c.灰黒色 e.良好 f.口縁部～内面自然釉
44-7	8面下トレンチ	須恵 坏	底部完形	—	6.2	[1.4]	a.轆轤 外底糸切 底部直上回転へラケズリ b.白色粒 黒色粒 小石粒 海綿骨 針 良胎 c.灰色 e.良好 硬質
44-8	8面下トレンチ	須恵 坏	底部片	—	(8.0)	[0.7]	a.轆轤 外底糸切 b.灰色 白色粒 黒色粒 雲母 海綿骨針 良胎 c.灰色 e.良 好 硬質 f.底部摩耗
44-9	8面下トレンチ	須恵 坏	底部片	—	(6.4)	[2.2]	a.轆轤 外底糸切 底部直上外周回転へラケズリ b.淡茶色 白色粒 黒色粒 海 綿骨針多 良胎 硬質 c.淡茶色～灰色 e.ややあまい (胎土に焼ムラの変色 有り)
44-10	8面下トレンチ	須恵 甕	胴部片	—	—	—	a.灰色 内面同心円のあて具痕 外面縄目叩き b.灰青色 白色粒 小石粒 石英 良胎 c.灰色 e.良好 硬質
44-11	8面下トレンチ	須恵 甕	胴部片	—	—	—	a.灰色 内面同心円のあて具痕 外面平行叩き目 b.灰色 白色粒 石英 良胎 c.灰色 e.良好 硬質
44-12	8面下トレンチ	須恵 甕	胴部片	—	—	—	a.内面あて具痕 外面平行叩き目 b.灰淡褐色 白色粒 黒色粒 良胎 c.灰色 e.良好 硬質
44-13	8面下トレンチ	須恵 甕	胴部片	—	—	—	b.灰色 白色粒 黒色粒 小石粒 石英 良胎 c.内面灰色 外面黒褐色 e.良好 硬質
45-1	8面下トレンチ	丸瓦	残存度1/2	長[21.0] 幅[16.0] 厚1.5～2.0			a.桶巻き作り b.灰黒色 白色粒 黒色粒 小石粒 良胎 c.灰黒色 e.良好 f.側面部刃物で切り離れた痕有り 7世紀第4四半期頃
45-2	8面下トレンチ	平瓦	小片	長[8.0] 幅[5.5] 厚1.2			a.凹面布目痕 凸面縦方位の叩き目 b.淡茶色 白色粒 黒色粒 粗胎 c.灰白 色～淡茶色 e.あまい
45-3	8面下トレンチ	平瓦	側端部小片	長[6.7] 幅[6.5] 厚2.2～2.7			a.凹面布目痕 凸面縄目痕 側端部へラケズリ b.濃橙色 白色粒 黒色粒 小石 粒 粗胎 c.淡茶褐色 e.あまい
45-4	8面下トレンチ	平瓦	側端部小片	長[5.0] 幅[6.5] 厚1.3			a.凹面布目痕 凹面斜方位の叩き目 側端部へラケズリ b.灰色 白色粒 黒色 粒 小石粒 良胎 c.灰色 e.良好 硬質
45-5	8面下トレンチ	平瓦	側端部片	長[12.0] 幅[13.0] 厚1.4～1.9			a.凹面布目痕 凸面縄目痕 側端部へラケズリ b.灰色 白色粒 黒色粒 小石粒 良胎 c.灰色 e.良好 硬質

表 18 層位別出土遺物一覧表

種別	出土層位																合計		
	試掘坑	1面遺構	1面遺構外	2面遺構	3面遺構	3面遺構外	4a面遺構	4a面遺構外	4b面遺構	4b面遺構外	5面遺構	5面遺構外	6面遺構	6面遺構外	7面遺構	7面遺構外		8面遺構	8面遺構外
かわらけ	米切りかわらけ	大22 小1	大179 中1小27	大90 小62	大32 小4	大241 小15	大399 小26	大99 小16	大361 小50	大440 小37	大24 小3	大232 中1小48	大143 小16	大48 小11	大267 小148	大229 小83	大12 小38		3580
	手捏ねかわらけ											大2			大24 小11	大34 小20	大57 小39		249
	白かわらけ					2									1				
船載陶磁器	青磁					折縁鉢1 不明1			碗1	折縁碗1 碗1		碗1	碗1	鉢1碗1	碗1	碗1	碗2	碗1	16
	白磁								皿1			壺1碗1皿1	碗1		皿1	皿1			8
	青白磁								梅瓶1										2
	黄釉																		1
	褐釉											壺3	壺6	壺9	壺15	壺1			35
国産陶磁器	瀬戸	折縁鉢1		折縁皿1 不明1		袋物1												袋物1	10
	常滑	甃5	甃1	甃4磨1	甃3	甃21 壺1	甃8	甃21	甃21	甃58 壺1	甃2	甃89 壺1	甃18	甃30	甃2	甃12	甃5	甃5	363
	片口I類	1			1				4	5		7	3	10	1	1			36
	片口II類			2					2	2		1	1						9
	渥美								甃1							甃1			2
	備前	擂鉢1																	2
	龜山									甃1									1
	山茶碗																		7
	瓦	平瓦1	平瓦1															平瓦1	11
	土製品	瓦器																	
火鉢			1	1	1	2	1	1	2	1				1	1				13
その他					土錘1	不明1				吉備系1		吉備系1 コノス外-1			かわらけ				7
硯			1									3			転用品2				4
石製品	砥石										中1仕1	中1	中2						5
	滑石製品								鍋1 スツブ1										2
	その他																		2
	釘				1				1								1		2
金属製品	銭			1	1	1													4
	鉄滓			1															3
	漆製品																		14
木製品	加工木製品					箸3 菜箸1 木札1 曲物1 折敷1	箸1 碗1 曲物2	箸1 碗1 曲物1 折敷2 草履5	箸1	箸8 菜箸1 曲物1 折敷2 草履5	草履1	箸42 曲物2 草履5 折1 不明1	箸4 下駄1	箸2 曲物2 草履9 不明2	箸20 折敷1 注木1 草履4 糸具1 不明3	箸167 菜箸5 箸2 曲物1 折敷1 注木1 草履4 糸具1 不明3	箸9 箸1 箸1 下駄2 草履1	箸7 菜箸1 箸1 草履1	335
	骨	1			1				1	2	1	1	3	4	2	1			20
	貝		1			12					1	4	1	2	8	14		18	61
	種					2			3	3	1	2	1	1	1	19	9	1	40
	炭化物				1	1						2	1	2	2	1			11
中世以前遺物	土師器																		2
	須臾器																		37
	合計	43	212	164	45	315	468	131	451	571	31	454	197	124	505	612	135	185	47

図版1



▲1. 調査地点近景（英勝寺方面から）



▲2. 調査地点敷地裏（西から）



▲3. 1面全景（東から）



▲5. 1面溝1南北土層堆積状況（東から）



▲6. 1面溝2南北土層堆積状況（東から）



▲4. 1面全景（西から）



7. 道路状遺構の西方面（東から）▶



▲1. 2面全景（東から）



▲2. 2面道路状遺構（西から）



▲3. 3面全景（東から）



▲4. 3面全景（西から）



▲5. 3面溝1（東から）



▲6. 3面溝1土層堆積状況（東から）



▲7. 3面土坑5内出土墨書木札（南から）



▲ 1. 4a面全景（東から）



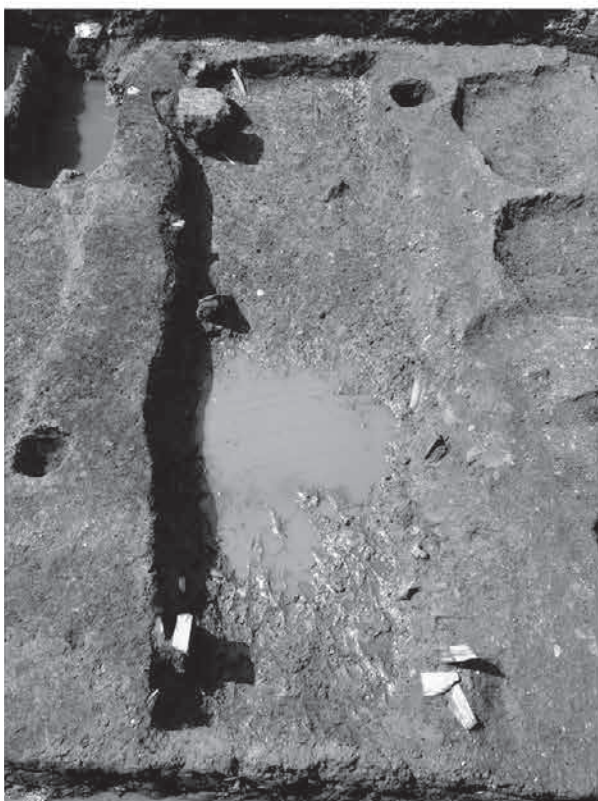
▲ 2. 4a面全景（西から）



▲ 3. 4b面全景（東から）



▲ 4. 4b面全景（西から）



▲ 5. 4b面溝1（東から）



▲ 6. 4b面溝1（西から）



▲1. 5面全景（東から）



▲2. 5面方形土坑1・2（東から）



4. 5面南側部分（東から）



▲3. 5面方形土坑3（東から）



▲7. 5面囲炉裏1東側壁板（西から）



▲5. 5面囲炉裏1（北から）



▲8. 5面囲炉裏1内出土
火葬骨を含むかわらけ（北から）



▲6. 5面囲炉裏1（西から）



▲1. 6面全景（東から）



▲3. 6面方形土坑1（北から）

▼2. 6面全景（西から）

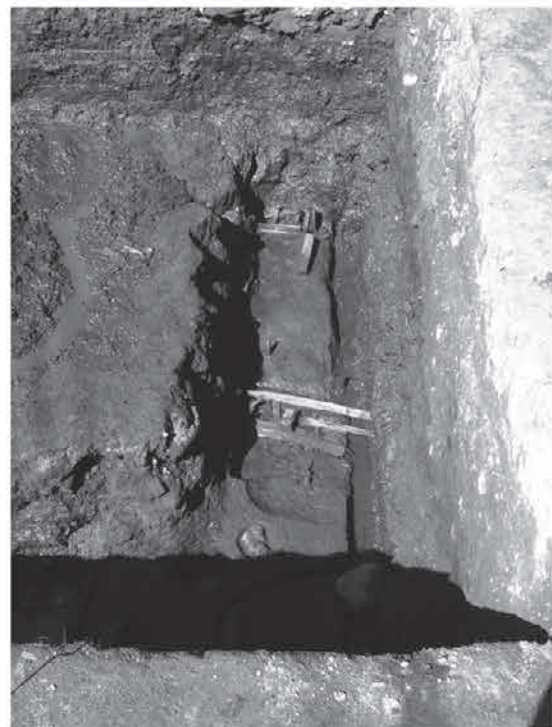


▲4. 6面方形土坑1内出土 犬頭骨

◀5. 7面全景南側（東から）



▶6. 7面全景東側（南から）





▲1. 7面全景（南東から）



▲2. 7面北側全景（東から）



▲3. 7面溝1（南から）



▲4. 7面溝1杭列（東から）



▲5. 7面溝2・3（東から）



▲6. 7面溝3（西から）



▲1. 7面溝2 (西から)



▲2. 7面溝2 杭列 (南から)



▲3. 7面P5出土かわらけ (東から)



▲5. 8面全景 (西から)



▲4. 8面全景 (東から)



▲6. 8面西部遺構検出状況 (南から)

1. 8面下トレンチ（北から）▶

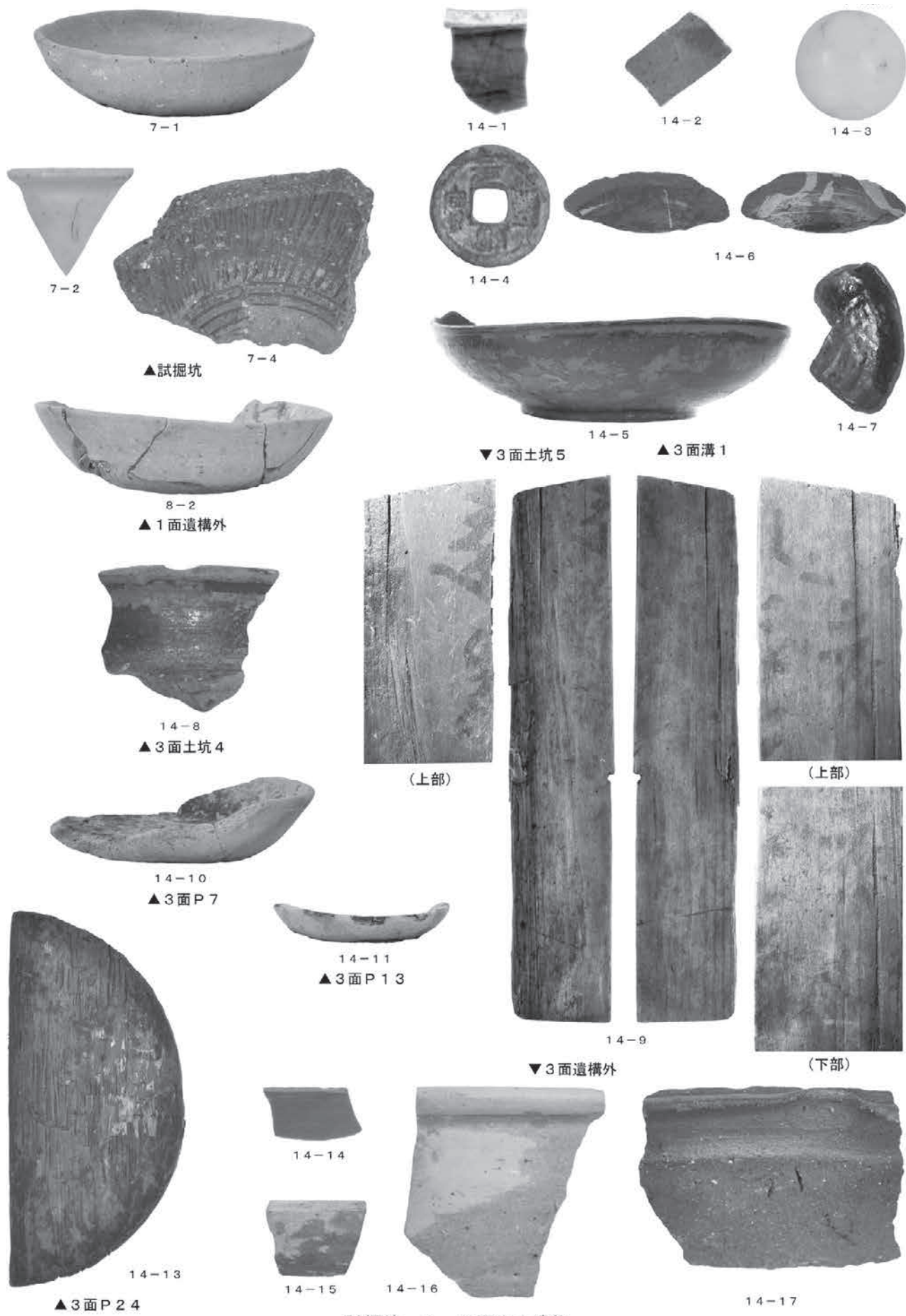


◀ 2. 調査区東壁土層堆積状況（西から）

3. 調査区南壁土層堆積状況（北から）▶



◀ 4. 調査区西壁土層堆積状況（東から）



試掘坑、1・3面出土遺物



20-1
▲4a面土坑2



20-3
▲4a面土坑4



20-6
▲4a面P6



20-4
▲4a面P7



20-9



20-11



20-12



20-13

▲4a面溝1下層



20-14



20-15

▲4a面溝1裏込め南側



20-17



20-18



20-19

▲4a面溝1裏込め北側



20-20

▲4b面土坑2



20-22

▲4b面土坑3

▼4a面遺構外



21-1



21-2



21-3



21-4



21-5



21-6



21-7

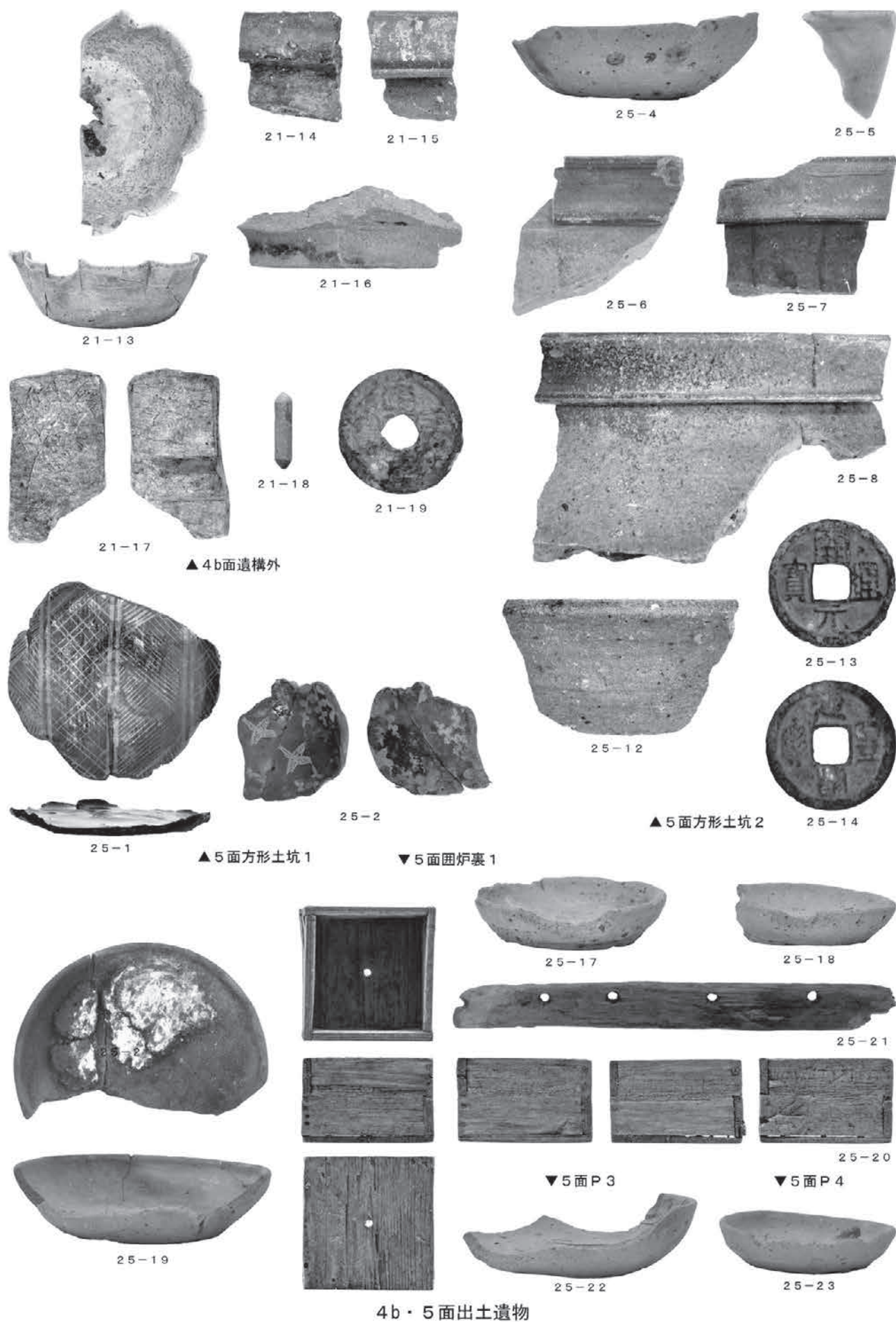


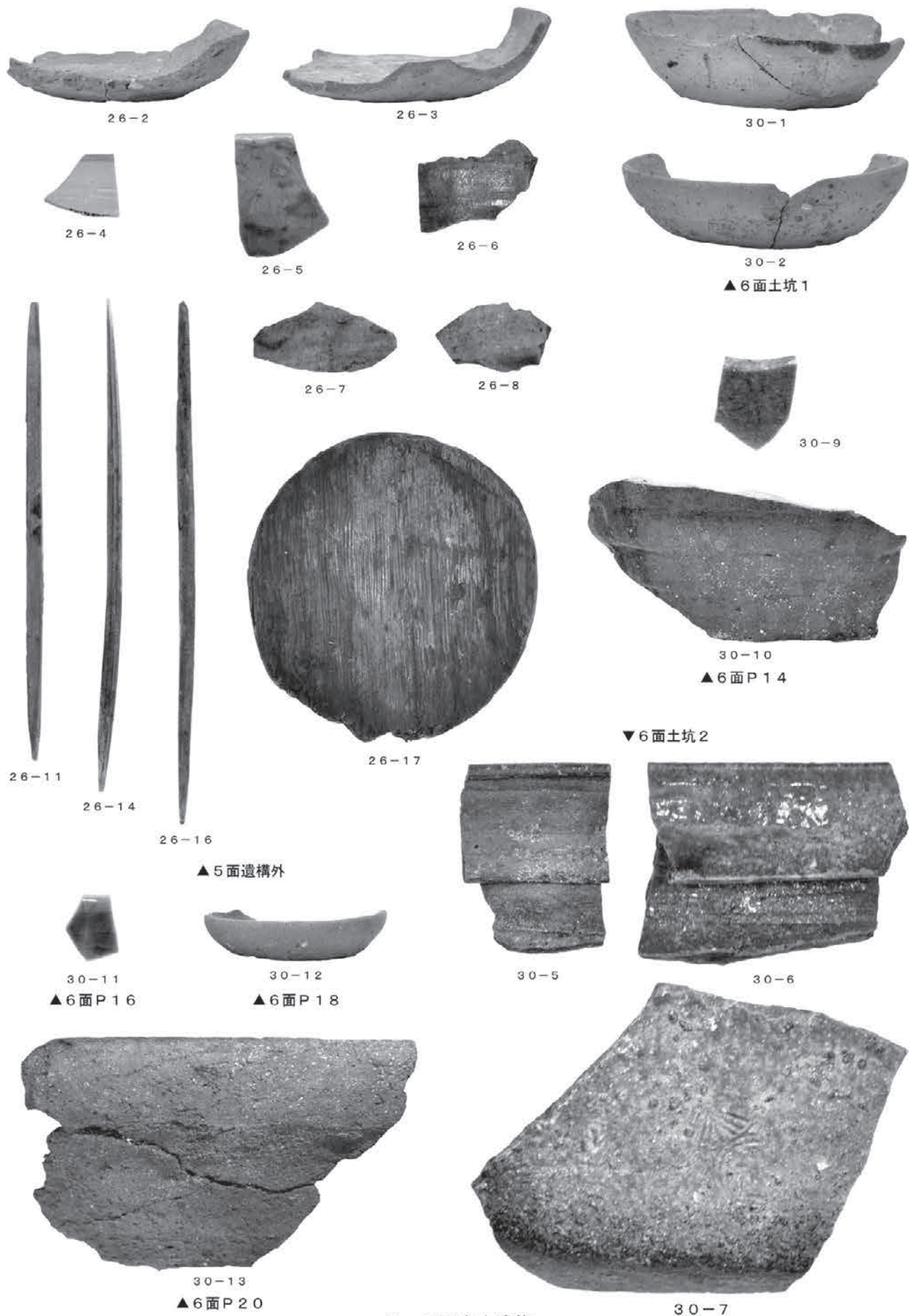
21-11

4a・b面出土遺物



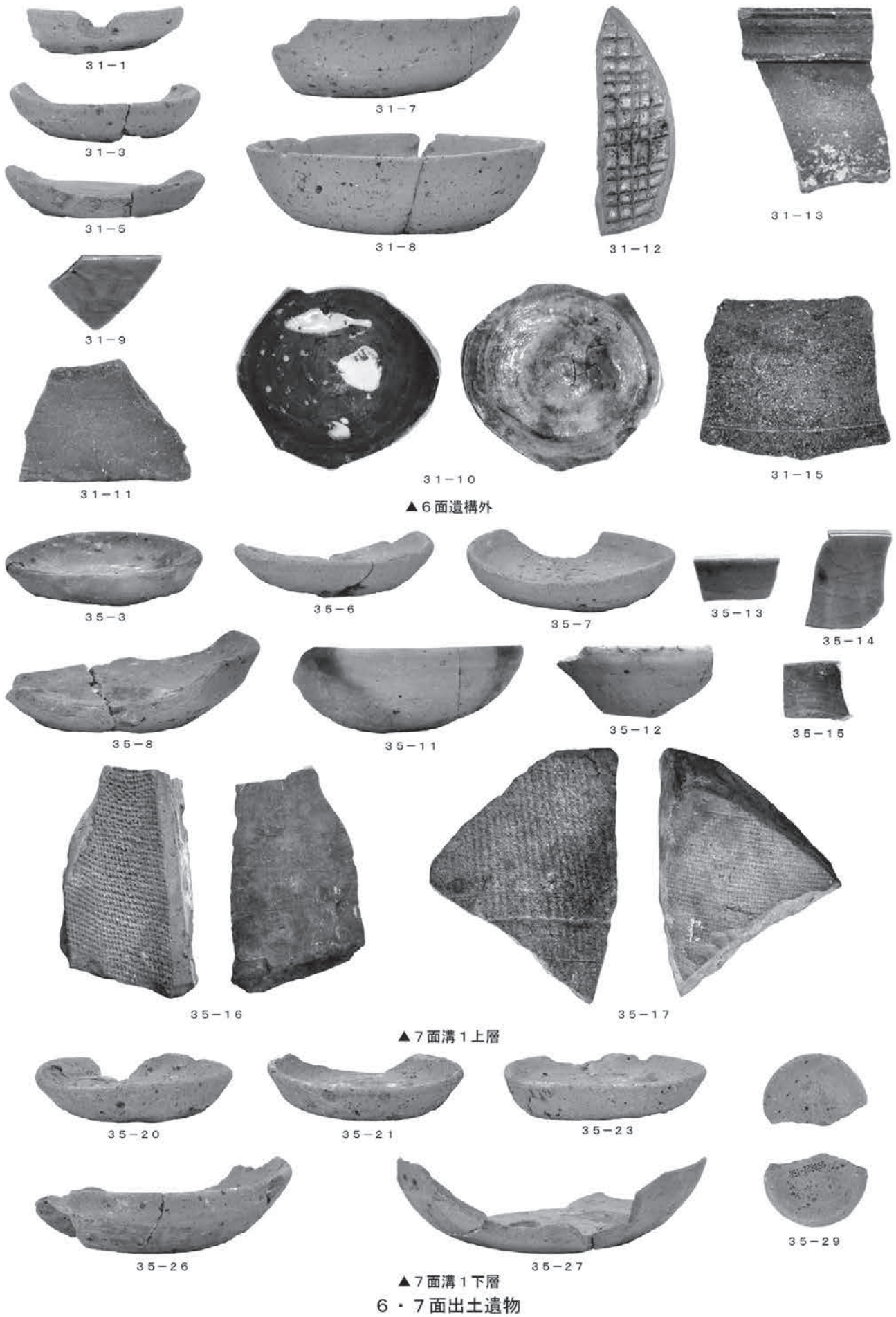
21-12

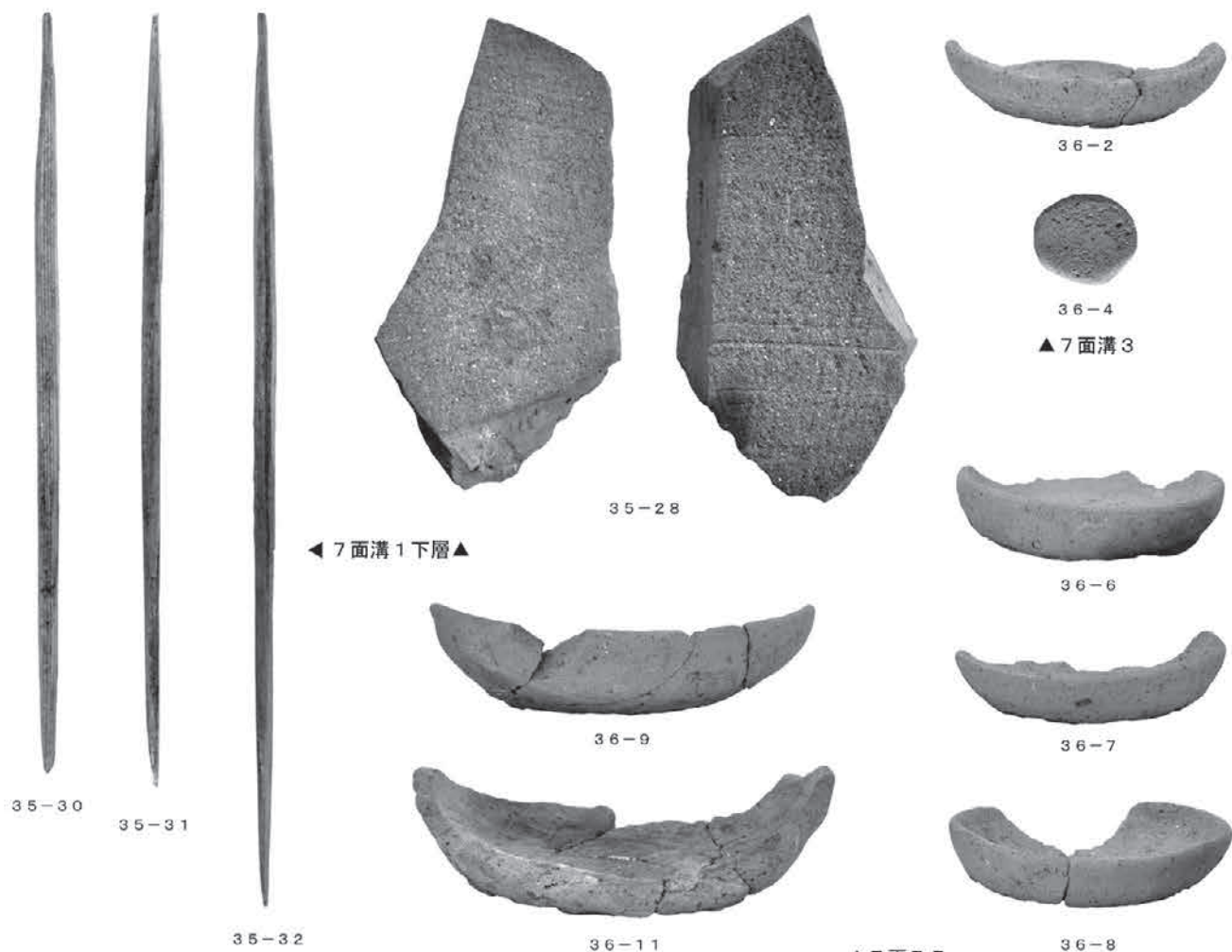




5・6面出土遺物

图版 13

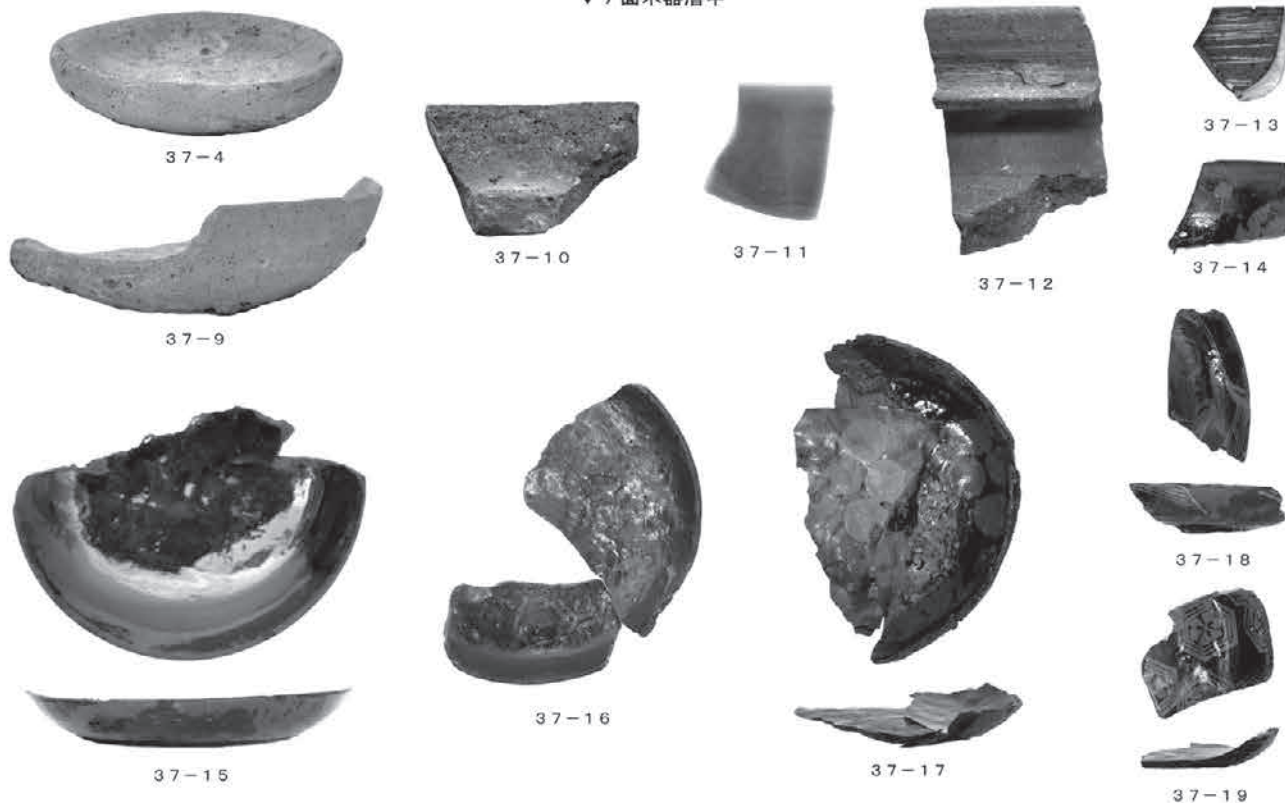




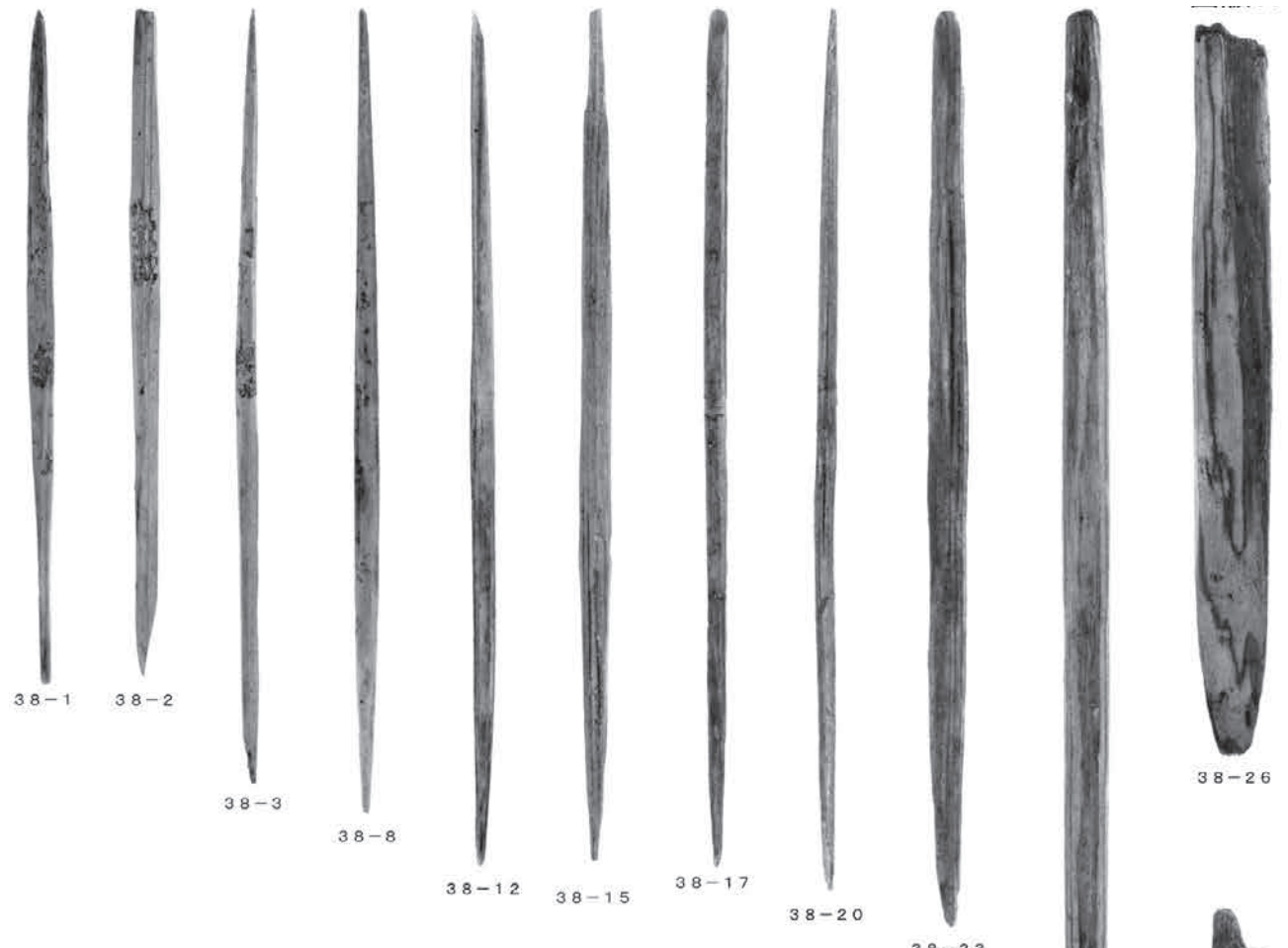
◀ 7面溝 1下層▲

▲7面P5

▼7面木器層中



7面出土遺物



▲7面木器層中▶



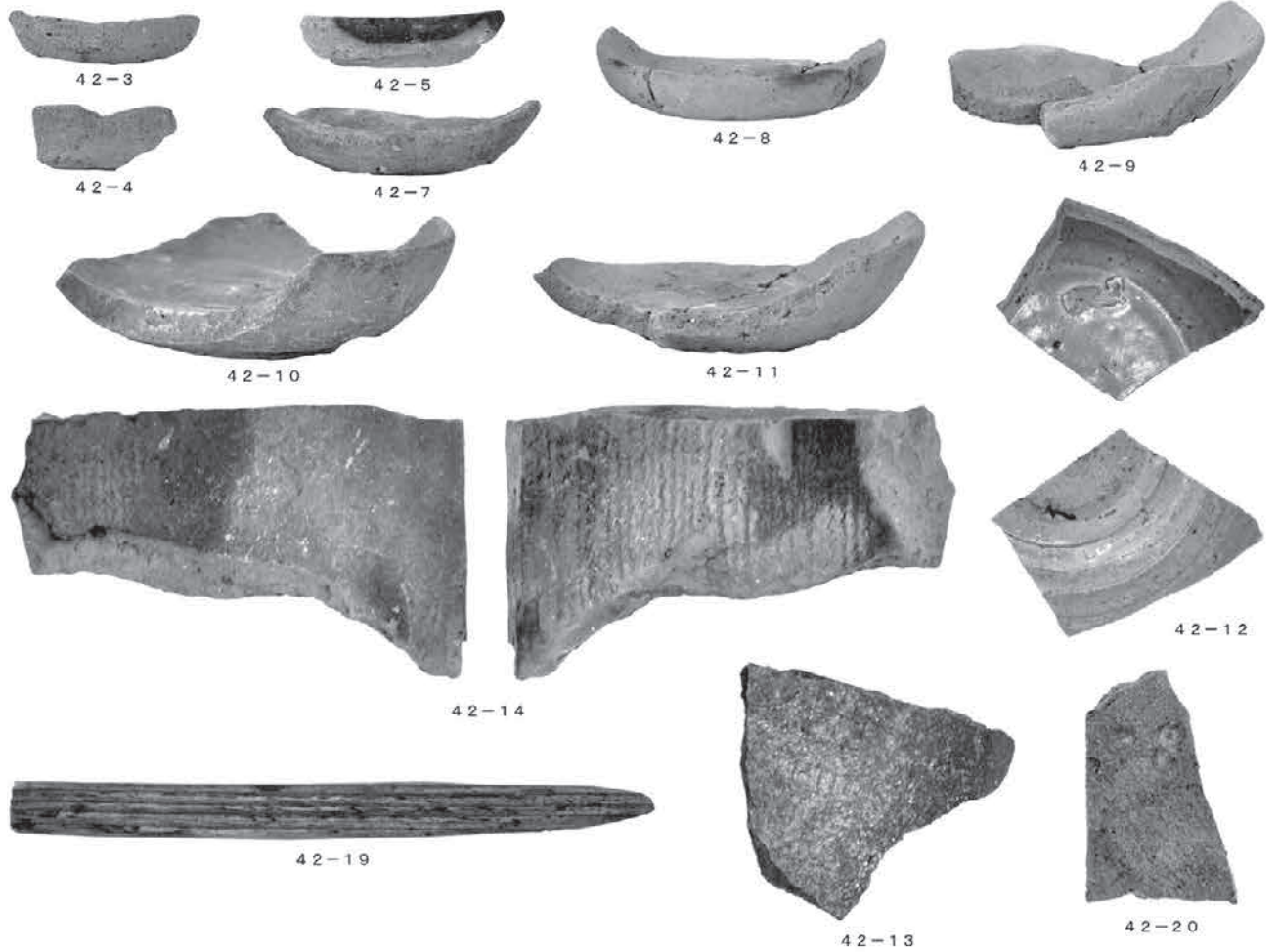
▲8面溝狀遺構1上層



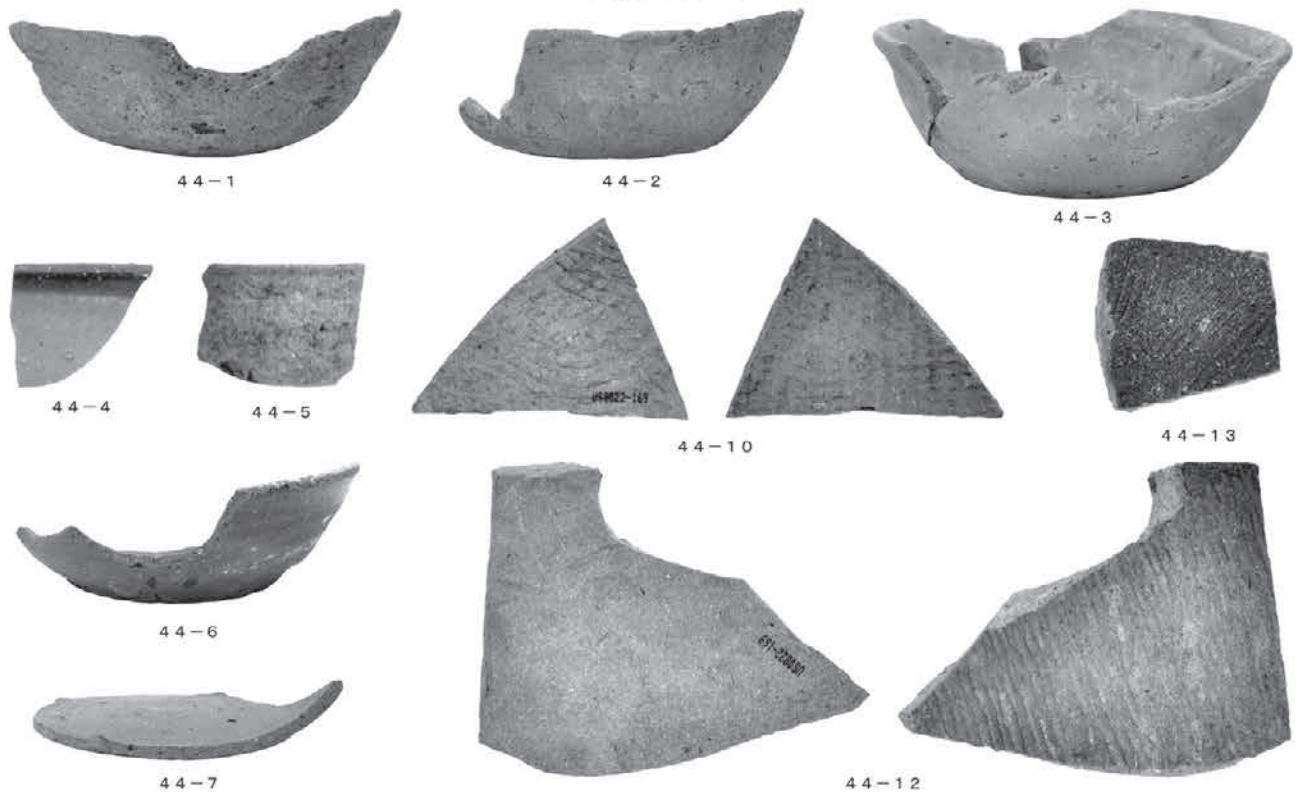
▲8面溝狀遺構1下層

▲8面土坑2

7・8面出土遺物



▲8面遺構外
 ▼8面下トレンチ



8面・8面下トレンチ出土遺物



45-1

45-2

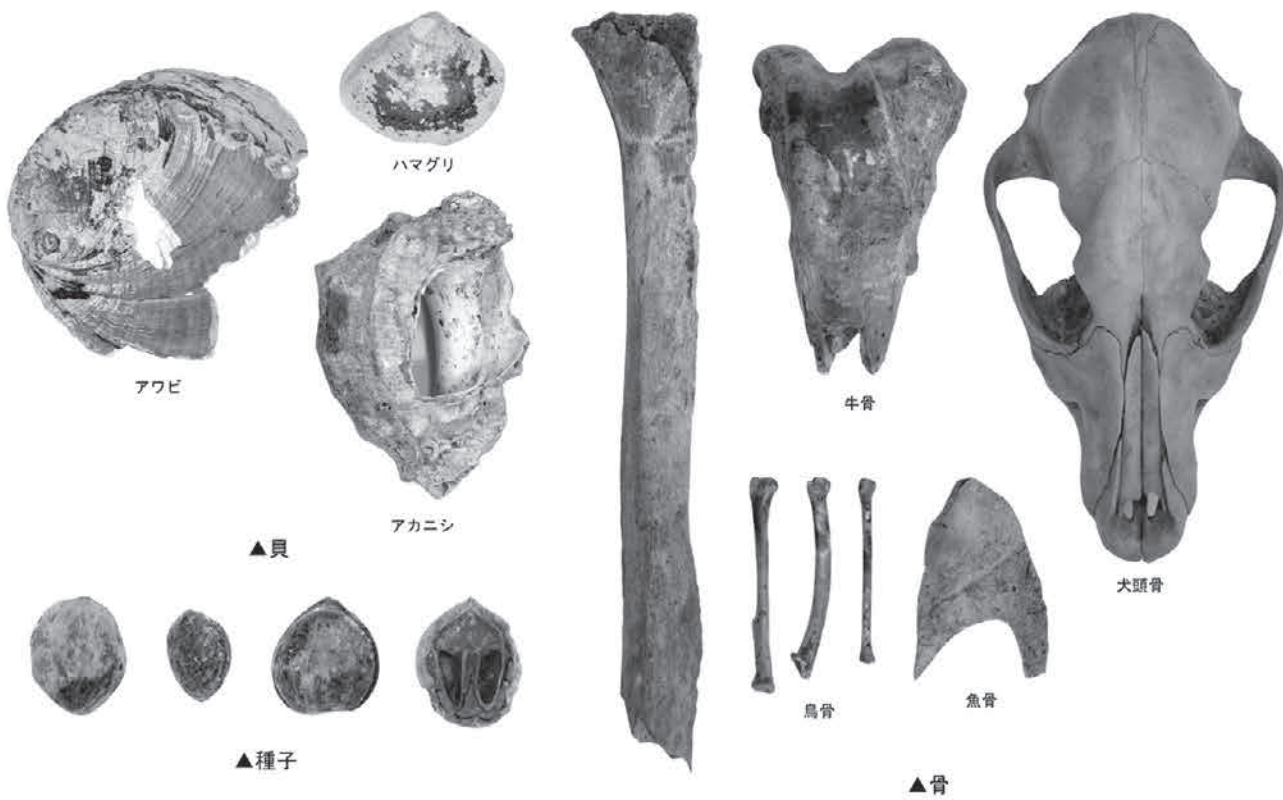


45-3



45-5

▲8面下トレンチ



アワビ

ハマグリ

アカニシ

▲貝

▲種子

牛骨

犬頭骨

鳥骨

魚骨

▲骨

8面下トレンチ出土遺物・自然遺物

新善光寺跡 (No.279)

材木座四丁目 579 番 4 地点

例 言

1. 本報は、「新善光寺跡(No.279)」内、材木座四丁目579番4における、埋蔵文化財発掘調査の報告である。
2. 発掘調査は、国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。調査期間は平成21(2009)年4月13日～同年6月5日にかけて行い、調査面積は約50㎡である。
3. 発掘調査体制は以下のとおりである。
調査担当者：山口正紀(鎌倉市文化財課臨時的任用職員)
調査員：小野夏菜・須佐仁和・柁岡ケイト・本城 裕(鎌倉市文化財課臨時的任用職員)
作業員：浅香文保・金丸義一・杉浦永章・鈴木啓之・田島道夫・根市真古人(社団法人鎌倉市シルバー人材センター)
4. 現地での写真撮影は山口・須佐が行った。
5. 本報作成にあたっての資料整理参加者及び分担は以下のとおりである。
整理参加者：山口・岡田慶子(鎌倉市文化財課臨時的任用職員)
遺物洗浄・注記：埋蔵文化財発掘調査支援協同組合
遺物接合・分類：山口 遺物実測：山口・岡田 遺物／遺構トレース・図版作成：山口
観察表・写真図版作成・遺物写真撮影・原稿執筆：山口
6. 本報告に係わる出土品及び記録図面・写真等の資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。
7. 本調査にかかる出土遺物の注記は「SZT0902」と略して記した。
8. 本報の凡例は以下のとおりである。
挿図縮尺 各図に縮尺を表記している。
遺構図版 水糸高は標高値を示す。
遺物図版 釉薬の範囲は・ - ・ - ・、加工・使用痕は←・→で範囲を示す。また、遺物にみられる煤痕は黒く塗りつぶし表現している。
遺物観察表 ()は復元数値、[]は遺存数値を示す。
写真図版 出土遺物は基本約1/2、大きさにより1/1、1/3に縮小している。
9. 本報記載の「泥岩」は凝灰質泥岩を示す。
10. 整理段階において、遺物の分類及び編年は以下の論文を参考にした。
瀬戸：藤澤良祐 2008『中世瀬戸窯の研究』高志書院
常滑：愛知県 2012『愛知県史別編窯業3 中世・近世常滑系』
火鉢：河野真知郎 1993「中世鎌倉火鉢考—東国との関連において—」『考古論叢 神奈河 第2集』
神奈川考古学会
11. 現地調査から本報作成に至るまで、以下の諸氏、諸機関に御教示・御協力を賜った。記して感謝の意を表したい。(順不同、敬称略)
伊丹まどか、汐見一夫、玉林美男、原 廣志、福田 誠、社団法人鎌倉市シルバー人材センター

目次

本文目次

第一章 遺跡の概観	107
第1節 遺跡の位置	
第2節 地理的・歴史的環境	
第3節 周辺遺跡の調査成果	
第二章 調査の概要	113
第1節 調査の経緯と経過	
第2節 調査における測量方法	
第3節 調査区内の堆積土層	
第三章 検出遺構と出土遺物	118
第1節 1面の遺構と遺物	
第2節 2面の遺構と遺物	
第3節 3面の遺構と遺物	
第4節 4面の遺構と遺物	
第5節 4面下の遺構と遺物	
第四章 まとめ	130

挿図目次

図1 調査地点と周辺遺跡	108	図10 3面全測図	123
図2 調査区と建築範囲	113	図11 3面遺構外出土遺物	124
図3 国土座標位置図	114	図12 4面全測図	125
図4 国土座標とグリッド配置図	115	図13 4面土坑・柱穴	126
図5 調査区壁土層堆積図	116	図14 4面土坑・柱穴出土遺物	126
図6 1面全測図	118	図15 4面遺構外出土遺物(1)	127
図7 2面全測図	120	図16 4面遺構外出土遺物(2)	128
図8 2面土坑・柱穴	120	図17 4面下遺構外出土遺物	129
図9 2面土坑・遺構外出土遺物	122	図18 遺構変遷図	131

表目次

表1 周辺の遺跡名称	110	表5 4面遺構計測表	126
表2 1面遺構計測表	119	表6 遺物観察表(1)	133
表3 2面遺構計測表	121	表7 遺物観察表(2)	134
表4 3面遺構計測表	123	表8 層位別出土遺物一覧表	135

図版目次

図版1	136	図版4	139
1. 1面全景(東から)		1. 調査区トレンチ1(南から)	
2. 1面全景(西から)		2. トレンチ1北壁土層堆積状況(南東から)	
3. 2面全景(東から)		3. 調査区東壁土層堆積状況(西から)	
4. 2面全景(西から)		4. 崩落状況(南東から)	
図版2	137	図版5	140
1. 2面遺構外出土球状金属製品		2・3面出土遺物	
2. 3面遺構外出土漆器椀		図版6	141
3. 3面遺構外出土差歯下駄		3・4面出土遺物	
4. 3面全景(東から)		図版7	142
5. 3面全景(西から)		4面遺構外出土遺物(1)	
図版3	138	図版8	143
1. 4面全景(東から)		4面遺構外出土遺物(2)	
2. 4面全景(北から)		図版9	144
3. 4面下遺構外出土硯		4面下出土遺物・自然遺物	
4. 4面下遺構外出土漆櫛			
5. 4面下遺構外出土漆器椀			

第一章 遺跡の概観

第1節 遺跡の位置

本調査地点は、神奈川県遺跡台帳に登録されている新善光寺跡（鎌倉市No.279遺跡）の範囲内、鎌倉市材木座四丁目579番4に所在する。平成25年度に刊行された鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書29（第2分冊）内の平成20年度に調査実施された材木座四丁目579番8地点の東隣に位置する。

材木座五丁目に所在する浄土宗寺院の九品寺から逗子市に至る道路より東、材木座六丁目に所在する浄土宗寺院光明寺の北側に「弁ヶ谷」という谷戸がある。小さな谷戸が三つに分かれており、それらを含めた範囲を弁ヶ谷と呼称している。遺跡名となっている「新善光寺跡」は谷戸内の中央支谷が範囲に指定されており、谷戸最奥の崖際は「新善光寺やぐら」として1987年に調査されている。

第2節 地理的・歴史的環境

本調査地点一帯は弁ヶ谷と呼称されており、『新編相模国風土記稿』に掲載される嘉暦二（1327）年十月五日の崇寿寺鐘銘に「飯嶼之良、鎌倉之巽、弁谷霊区」とあるのが初見である。『玉舟和尚鎌倉記』によると紅ヶ谷・雪ノ下ヶ谷・亀ヶ谷・花ヶ谷とともに鎌倉七谷の一つと伝えられている。

東国廻国をした聖護院門跡の准三后、道興大僧正は、文明18（1486）年6月から10カ月の旅について記した紀行文として翌年に『廻国雑記』を著している。その中に鎌倉を来訪したことも詠じられ、「べにが谷をとほりて、化はひ坂を越ゆとて、俳譜、顔にぬる紅が谷よりうつりきて早くも越ゆるけはひ坂かな」とあり、弁ヶ谷を紅ヶ谷と称していたこともうかがえる。谷戸の名称と由来にはいくつか説があり、後三条源氏伊豆田代氏の略系図である『田代略系図』には、春庵玉の注記に「鎌倉別谷、別ノ谷ハ千葉殿ノ敷地ナリ、介ノ唐名別駕ト云間、別ノ谷ト云」と記すとある。『新編鎌倉志』でも、この地に千葉介の館があり、「介」の唐名「別駕」に由来する説があげられているが、『鎌倉攬勝考』は、常陸介や上総介を称することが多かった佐竹氏の屋敷が近くにあったことが地名の由来としている。

谷戸内には新善光寺、崇寿寺、最宝寺という寺院が所在していたことが分かっている。本調査地点の遺跡名にもなっている新善光寺は、浄土教を中心とした四宗兼学を標榜した寺院であったと云われている。創建・開山は未詳で、開基は北条泰時と伝えられている。建久8（1197）年、源頼朝は信濃善光寺の再建慶讃に参詣した折り、善光寺如来のご分身を請来、これを北条時政が鎌倉の名越山荘に祀っていた。頼朝が落馬により急死した原因を善光寺如来と結びつける声があったことから、時政の後を受けた名越朝時が一堂を建立、新善光寺と称したとされている。現在では廃寺となっているが、現在の葉山町上山口に所在する不捨山撰取院新善光寺が当谷戸から移転してきたと伝えられており、もとは弁ヶ谷の奥で松ヶ谷の長勝寺の裏にあたる場所に新善光寺があったとされている。その移転した経緯は不明だが、『新編相模国風土記稿』によると、関東官領上杉房顕は三浦介高明と養子縁組して三浦の地に勢力の安定を計り、当時の住持であった密道和尚は、住吉城の三浦介に窮状を訴えがあり、「中興の僧密道、天正18（1590）年7月朔日に寂すとなれば其の世代なるべし」などから、密道和尚が没した時期に移転があったとしている。いくつかの文献資料にも新善光寺の記述は確認されており、『北条九代記』仁治3（1242）年6月15日条では、「新善光寺智導上人為知識奉観念仏」とあり、新善光寺智導上人が北条泰時への念仏を勤めている。また、「宗顕（金沢貞顕）書状」元徳元（1329）年12月3日条には「関東大仏造営料唐船事、明春可渡宋候之間、大勸進名越善光寺長老御使道妙房、年内可上洛候」とあり、当寺の住持が鎌倉大仏造営の大勸進となっていることもあり、善光寺信仰が盛んであった鎌倉時代には鎌倉の地において少な



図1 調査地点と周辺遺跡

からずとも影響があったのであろう。

崇寿寺は山号を金剛山、元亨元(1321)年に北条高時が開創し、開山は南山土雲である。臨済宗寺院で現在は廃寺となっている。五山・十刹に次ぐ格式の寺として「諸山」の称号を北条高時が与えており、当寺が最古と言われている。『鹿山略志』に「中古遭災、寺宇廃絶、今存旧趾、古文書及鐘銘等、存鹿山伝宗庵、」とあることから、応永三十一(1424)年までは存在が明らかになっている。

最宝寺については、享徳元(1452)年11月9日の「京極持清書下」に「鎌倉弁谷高御蔵最宝寺寺領等事」とあり、享徳の頃まで弁ヶ谷高御蔵に最宝寺があったことは確かであろう。寺伝では正慶二(1333)年の兵火で扇ガ谷にも最宝寺が移ったという。現在の横須賀市野比に兼帯所があり、小田原北条氏の真宗弾圧により野比に移り、寺地が継承されているとしている。大永元(1521)年に扇ガ谷の最宝寺は火災で焼失したと伝える。

先述したが、高御蔵というのは、北条氏が武蔵国の年貢を収納するために置いた「浜高御倉」とい、

現在でも「高御倉小路」など小字名が残っている。弁ヶ谷内にあったとされ、最宝寺が隣接していたとされることから谷戸の入口にあったのであろう。高橋氏は、「浜高御倉」を北条氏の管理する「幕府直轄領（関東御領）の倉庫群」としている（高橋1996）。

第3節 周辺遺跡の調査成果

新善光寺跡（No.279）内では2地点の発掘調査が実施されている。図1-1地点は谷戸奥の最上段に位置する。中世3面時に玉砂利面や瓦溜りが検出され、海拔23.15～22.90mの位置に岩盤と中世基盤層が同時期に検出されている。2地点では池状遺構を検出しているが、本調査地点と近接しており、詳細は第4章で触れるとする。先述した谷戸最奥部の新善光寺跡内やぐら（No.335）では、山裾の崖斜面をコの字状に掘り窪めた、上・中・下段の3時期に亘る遺構が検出されている。明德二（1391）年から応永二十四（1417）年間の銘文が刻されている宝篋印塔がいくつか出土しており、法華経が写経された多量の写経石や白磁四耳壺を伴う格式のある火葬礼式とされる火葬墓が発見されている。概ね14世紀中葉頃を中心としたやぐら群であると推定され、谷戸内にそれ相応の寺院があったことが窺える。

弁ヶ谷遺跡（No.249）内の1地点では13世紀末～15世紀代の中世6時期の遺構面が確認され、寺院的な様相をもつ。2・3地点の近隣調査では、13世紀前半～14世紀前半にかけて4期の遺構群が検出されている。4地点では13世紀中頃～15世紀頃の間、町屋空間の一面から寺院の一面に変化したのではないかと示唆される。5地点では井戸・石列・溝・土坑等が検出され、13世紀後半～15世紀代に亘り、5時期の生活面の中で寺院址の縁辺部であった可能性が報告されている。7地点では、鎌倉時代初期の溝・暗渠や豆腐川護岸、池などが検出され、寺院もしくは武家屋敷に伴う庭園の一角と考えられている遺構が検出された。その後、13世紀半ば～14世紀後半の3期に亘る掘立柱建物の検出もされている。

このように弁ヶ谷内の発掘調査成果から、13世紀前半～15世紀代の遺構群が確認されている。弁ヶ谷内は宗教空間として捉えることが文献等からも認識でき、鎌倉時代からあったとされる寺院は15世紀代には移転を含め全て廃寺となっている。15世紀代の遺跡が残存しているのは鎌倉遺跡群内でも薄く、貴重な資料であり、それまでに至る痕跡が残っている状況であることは調査成果からも少なからず明らかになってきている。

[引用・参考文献]

高橋慎一郎1996『中世の都市と武士』吉川弘文館

貫達人・川副武胤1980『鎌倉廃寺事典』有隣堂

原廣志、他1988『新善光寺跡内やぐら発掘調査報告書』新善光寺跡内やぐら発掘調査報告

福田誠2004「新善光寺跡（No.279）材木座四丁目573番1外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書20 平成15年度発掘調査報告（第2分冊）』鎌倉市教育委員会

1991『佐助ヶ谷遺跡内やぐら・弁ヶ谷遺跡内やぐら群・公方屋敷跡内やぐら・瑞泉寺周辺遺跡内やぐら』佐助ヶ谷遺跡内やぐら・弁ヶ谷遺跡内やぐら群・公方屋敷跡内やぐら・瑞泉寺周辺遺跡内やぐら発掘調査団

2012『材木座（光明寺・小坪周辺を除く）を学ぶ 資料集』特定非営利活動法人 鎌倉考古学研究所

<調査地点一覧概要>

図1には神奈川県遺跡台帳に登録されている遺跡名称を番号のみ表記した。対応する名称は以下に表記する。調査地点番号は、その遺跡内における調査年月の古い順から番号を付し、そのため図の範囲外にある地点番号が欠如している場合や同一番号が重複している。また、発掘調査を対象としているため、確認(試掘)調査を含めていないことを前提とした。

表1 周辺の遺跡名称

遺跡No.	遺跡名称	遺跡No.	遺跡名称	遺跡No.	遺跡名称
85	弁ヶ谷やぐら群	254	弁ヶ谷奥遺跡	313	長勝寺遺跡
87	鎌倉城	255	実相寺旧境内遺跡	314	能蔵寺跡
169	弁ヶ谷横穴	261	材木座町屋遺跡	316	光明寺旧境内遺跡
225	感応寺跡	279	新善光寺跡	335	新善光寺跡内やぐら
248	最宝寺跡	284	崇寿寺跡	380	長善寺やぐら群
249	弁ヶ谷遺跡	305	長勝寺やぐら	456	弁ヶ谷東やぐら群

弁ヶ谷やぐら群 (No.85)

- 1: 1986年8月調査。坂口滋皓ほか 1986『鎌倉市材木座4丁目弁ヶ谷やぐら群』相武考古学研究所
- 2: 1989年9月調査。継 実 1991「弁ヶ谷遺跡やぐら群 鎌倉市材木座4丁目594番」『平成元年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書』弁ヶ谷遺跡やぐら発掘調査団
- 3: 2000年2月調査。上田薫・依田亮一 2000「平成11年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策工事に伴う発掘調査」『かながわ考古学財団調査報告98 弁ヶ谷やぐら群』財団法人かながわ考古学財団

鎌倉城 (No.87)

- 1: 1998年11月調査。長谷川厚・大塚健一 1999「平成10年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策工事にともなう調査」『かながわ考古学財団調査報告74 鎌倉城 (No.87) 所在やぐら群』財団法人かながわ考古学財団

感応寺跡 (No.225)

1. 2002年11月調査。汐見一夫・小泉衣理 2005「感応寺跡 (No.225) 材木座六丁目722番1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書21 平成16年度発掘調査報告(第2分冊)』鎌倉市教育委員会

弁ヶ谷遺跡 (No.249)

- 1: 1999年6月調査。宮田眞・諸星真澄・滝沢晶子 2001「弁ヶ谷遺跡 (No.249) 材木座四丁目336番7地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書17 平成12年度発掘調査報告(第1分冊)』鎌倉市教育委員会
- 2: 2003年10月調査。馬淵和雄・鍛冶屋勝二・松原康子「弁ヶ谷遺跡 (No.249) 材木座六丁目643番5」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書25 平成20年度発掘調査報告(第1分冊)』鎌倉市教育委員会
- 3: 2003年10月調査。馬淵和雄・鍛冶屋勝二・松原康子「弁ヶ谷遺跡 (No.249) 材木座六丁目643番4」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書25 平成20年度発掘調査報告(第1分冊)』鎌倉市教育委員会
- 4: 2004年9月調査。降矢順子・齋木秀雄 2004「弁ヶ谷遺跡 (No.249) 材木座六丁目643番4」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書25 平成20年度発掘調査報告(第2分冊)』鎌倉市教育委員会
- 5: 2006年8月調査。宮田眞・森孝子 2007『弁ヶ谷遺跡発掘調査報告書』株式会社博通 一材木座四丁目332番1の一部外地点
- 6: 2009年2月調査。未報告一材木座二丁目599番8
- 7: 2009年6月調査。未報告一材木座六丁目640番2
根本志保 2010「弁ヶ谷遺跡 (No.249) の調査」『第20回 鎌倉市遺跡調査・研究発表会 発表要旨』

特定非営利活動法人 鎌倉考古学研究所

新善光寺跡 (No.279)

- 1 : 2002年1月調査。福田誠 2004「新善光寺跡 (No.279) 材木座四丁目573番1外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書20 平成15年度発掘調査報告 (第2分冊)』鎌倉市教育委員会
- 2 : 2008年8月調査。山口正紀・平井里永子 2013「新善光寺 (No.279) 材木座四丁目579番8地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書29 平成24年度発掘調査報告 (第2分冊)』鎌倉市教育委員会
- 3 : 本調査地点

材木座町屋遺跡 (No.261)

- 1 : 1988年9月調査。田代郁夫 1990「5. 材木座町屋遺跡 (No.261) 材木座四曲260番1外」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書6 平成元年度発掘調査報告』鎌倉市教育委員会
- 4 : 1995年6月調査。馬淵和雄 1997「材木座町屋遺跡 (No.261) 材木座三丁目364番1外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書13 平成8年度発掘調査報告 (第1分冊)』鎌倉市教育委員会
- 6 : 2000年1月調査。大河内勉・伊丹まどか・押木弘巳 2001「材木座町屋遺跡 (No.261) 材木座六丁目760番1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書17 平成12年度発掘調査報告 (第2分冊)』鎌倉市教育委員会
- 8 : 2000年11月調査。汐見一夫 2002「材木座町屋遺跡 (No.261) 材木座四丁目256番地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書18 平成13年度発掘調査報告 (第2分冊)』鎌倉市教育委員会
- 9 : 2002年8月調査。齋木秀雄・根本睦子 2005「材木座町屋遺跡 (No.261) 材木座六丁目647番10」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書21 平成16年度発掘調査報告 (第1分冊)』鎌倉市教育委員会
- 10 : 2002年8月調査。齋木秀雄・根本睦子 2005「材木座町屋遺跡 (No.261) 材木座六丁目647番15」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書21 平成16年度発掘調査報告 (第1分冊)』鎌倉市教育委員会
- 11 : 2002年10月調査。齋木秀雄・根本睦子 2005「材木座町屋遺跡 (No.261) 材木座六丁目647番8外」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書21 平成16年度発掘調査報告 (第1分冊)』鎌倉市教育委員会
- 12 : 2002年12月調査。齋木秀雄・根本睦子 2005「材木座町屋遺跡 (No.261) 材木座六丁目647番9」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書21 平成16年度発掘調査報告 (第1分冊)』鎌倉市教育委員会
- 22 : 2008年6月調査。未報告一材木座六丁目653番1他
- 24 : 2009年7月調査。未報告一材木座六丁目742番4外
- 26 : 2010年1月調査。未報告一材木座六丁目725番11

長勝寺やぐら (No.305)

1. 1984年07月調査。田代郁夫・玉林美男 1985『長勝寺遺跡(やぐら)発掘調査報告書 昭和59年度鎌倉市材木座地区内急傾斜地崩壊対策事業にともなう調査』長勝寺(やぐら)発掘調査団

長勝寺遺跡 (No.313)

- 1 : 1976年8月調査。大三輪龍彦・斉木秀雄ほか 1978『長勝寺遺跡 中世鎌倉の民衆生活を探る』長勝寺遺跡発掘調査団 一材木座二丁目2162番2地点

- 2 : 1997年6月調査。土屋浩美・宗臺富貴子 1999「長勝寺遺跡 (No.313) 材木座二丁目2168番3地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書15 平成10年度発掘調査報告 (第2分冊)』鎌倉市教育委員会

能蔵寺跡 (No.314)

- 1 : 1971年11月調査。松尾宣方 1983「2. 来迎寺北遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報 I』鎌倉市

教育委員会

- 2 : 1993年7月調査。馬淵和雄 1995『能蔵寺跡 材木座五所神社境内所在遺跡の発掘調査』能蔵寺跡発掘調査団・鎌倉市教育委員会 一材木座二丁目274番4地点
- 3 : 2001年1月調査。伊丹まどか・川又隆央 2003「能蔵寺跡 (No.314) 材木座二丁目297番地1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書19 平成14年度発掘調査報告』
- 4 : 2003年5月調査。原廣志 2007「能蔵寺跡 (No.314) 材木座四丁目274番2の一部地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書23 平成18年度発掘調査報告 (第1分冊)』鎌倉市教育委員会
- 5 : 2004年7月調査。齋木秀雄・降矢順子 2007「能蔵寺跡 (No.314) 材木座二丁目294番3外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書23 平成18年度発掘調査報告 (第2分冊)』
- 6 : 2006年8月調査。未報告一材木座二丁目293番2

光明寺旧境内遺跡 (No.316)

- 1 : 1977年12月調査。松尾宣方 1983「42.光明寺境内」『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報I』鎌倉市教育委員会 一材木座六丁目854番地点
- 2 : 1978年3月調査。松尾宣方 1983「48.光明寺裏遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報I』鎌倉市教育委員会 一材木座六丁目846番1地点
- 3 : 1978年11月調査。齋木秀雄・河野真知郎・手塚直樹 1980『光明寺裏遺跡 鎌倉市材木座所在北区立鎌倉学園用地内の中世遺跡発掘調査報告書』北区鎌倉学園内遺跡発掘調査団・東京都北区教育委員会 一材木座六丁目846番1地点
- 4 : 1984年10月調査。齋木秀雄 1986『浄土宗大本山天照山蓮華院光明寺 開山記主良忠上人700年遠忌記念事業に伴う埋蔵文化財の調査』光明寺境内遺跡発掘調査団
- 5 : 2003年5月調査。福田誠・鈴木絵美 2006「光明寺旧境内遺跡 (No.316) 材木座六丁目855番21外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書22 平成17年度発掘調査報告 (第2分冊)』鎌倉市教育委員会

新善光寺跡内やぐら (No.335)

- 1 : 1987年7月調査。原廣志・福田誠・田代郁夫 1988「昭和62年度鎌倉市材木座地区内急傾斜崩壊対策事業に伴う調査」『新善光寺跡内やぐら発掘調査報告書—中世墓の発掘調査—』新善光寺跡内やぐら発掘調査団

弁ヶ谷東やぐら群 (No.456)

- 1 : 1999年7月調査。鈴木庸一郎・木村吉行 2000「平成11年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策工事にもなる発掘調査」『かながわ考古学財団調査報告94 弁ヶ谷東やぐら群』財団法人かながわ考古学財団

第二章 調査の概要

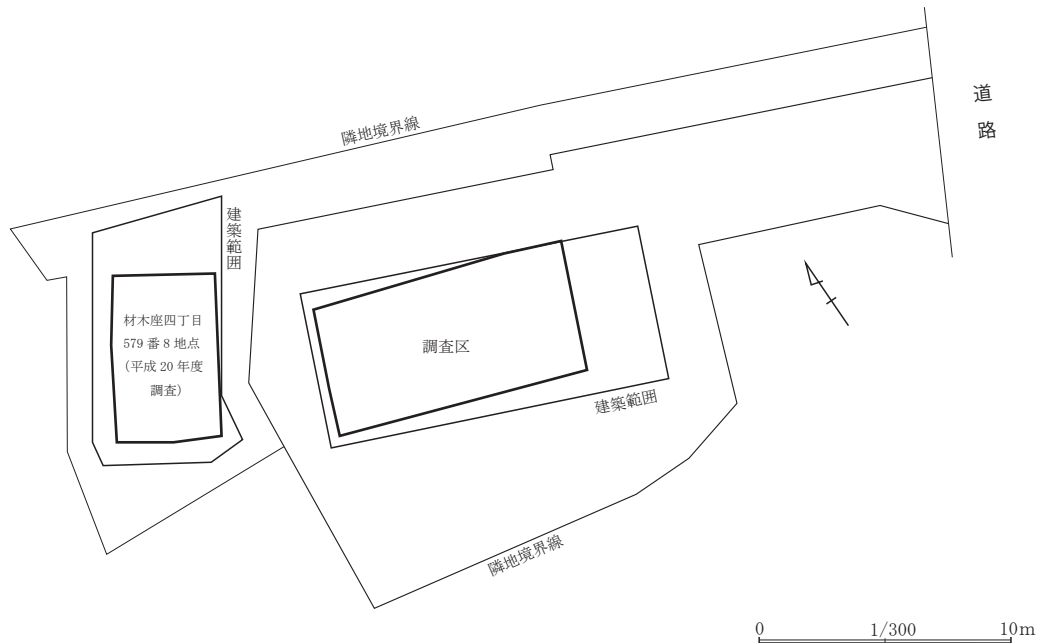


図2 調査区と建築範囲

第1節 調査の経緯と経過

本地点の発掘調査は、個人専用住宅建設における地盤の柱状改良工事を原因として、鎌倉市教育委員会が実施した。平成20年8月21日～同年9月12日にかけて、西側に近接する材木座四丁目579番8地点(図1-2地点)の発掘調査が実施された。その結果をもとに、同様の遺構面等が想定され、本調査実施の判断に至った。その後、文化財保護法第57条の2の届出手続きを行い、3月下旬に施工者との工程調整に続き、平成21年4月13日から現地での発掘調査を開始した。本来の建築面積は108㎡であるが、鎌倉市教育委員会文化財課の判断で隣地境界線から安全距離をとり、建築範囲内50㎡を調査区に設定した(図2)。掘削残土置き場は敷地内で処理し、現地終了時には遺物天箱6箱分の遺物が出土した。

4月13日に担当者立会いのもと、工事業者により重機2機による表土掘削を行い、2地点よりやや深く、地表下130cm前後で同様の遺構面を確認した。翌日より人力による作業で調査を進行し、その結果として、4時期の中世遺構面を確認し、測量・写真撮影などの記録保存を行った。表土掘削段階から多量の湧水が確認され、その影響で崩落の危険性に対処しながら調査を進行していたが、5面調査段階に大雨の影響で調査区北東部の弛んだ地盤が崩落してしまい、鎌倉市教育委員会文化財課と協議のもと、調査を停止した。後日、必要とされる記録を行い、工事業者により埋め戻しが行われ、調査終了した。

以下、作業経過を抜粋する。

- 4月13日(月) 現地調査開始。重機による表土掘削。
- 4月14日(火) 機材搬入。調査区周辺環境整備。
- 4月15日(木) 調査区周囲に測量グリッドを設定。鎌倉市三級基準点及び4級基準点より標高値と国土座標値を測量点に移動。



图3 国土座標位置图

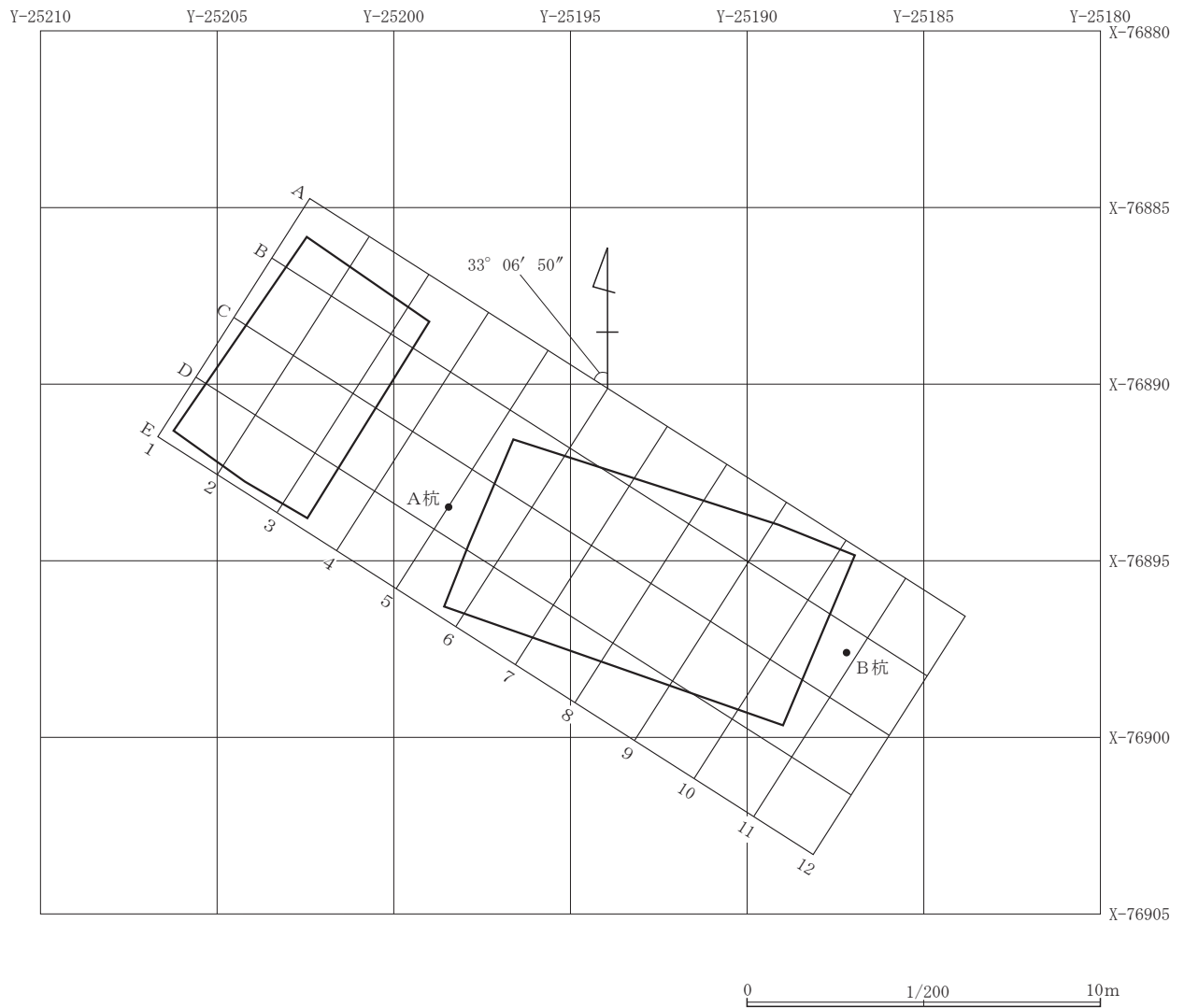
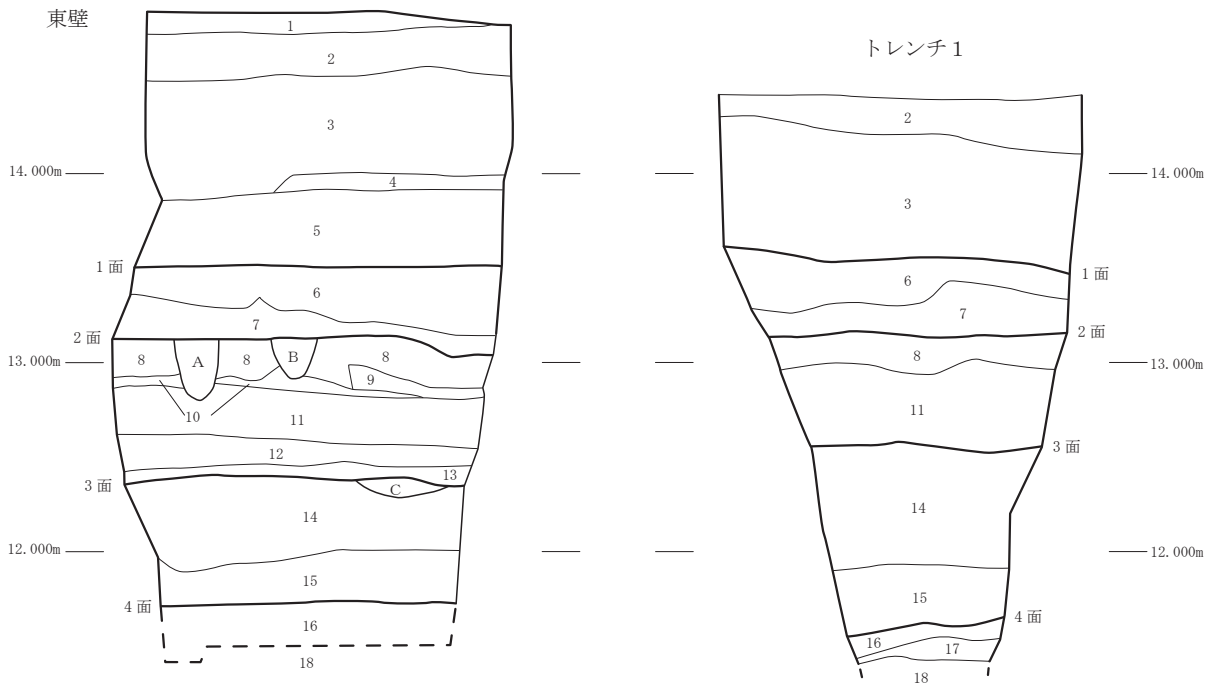


図4 国土座標とグリッド配置図

- 4月27日(月) 1面全景写真撮影。全測図実測。
- 5月12日(火) 2面全景・個別写真撮影。全測図実測。
- 5月25日(月) 3面全景写真撮影。全測図実測。
- 5月27日(水) 4面全景・個別写真撮影。全測図実測。
- 5月29日(金) 調査区北東部崩落。調査停止。
- 6月2日(火) 東壁土層堆積写真撮影及び実測。
- 6月3日(水) トレンチ1土層堆積写真撮影及び実測。撤収準備。
- 6月5日(金) 現地調査終了。機材撤収。工事業者による掘削残土埋め戻し。



土層注記

1. 茶色土：現代耕作土。
2. 明赤茶色土：近現代耕作土。
3. 茶褐色土：コンクリート片多数、近現代層。
4. 灰褐色粘質土：近現代層。
5. 褐色土：泥岩粒多量、近現代層。
6. 暗青灰色弱粘質土：泥岩（5～10cm）多量、縮まりなし
7. 暗青灰色粘質土：泥岩粒多く、縮まりややあり。
8. 暗青灰色粘質土：泥岩粒多く、細砂少量。縮まりあり
9. 暗灰色弱粘質土：泥岩粒少量。細砂多く、木片少量。縮まりややあり。

10. 茶褐色粘質土：木片・木端多く、縮まり若干あり。
11. 暗灰色粘土：泥岩粒微量。木端少量。縮まり若干あり。
12. 暗茶灰色粘土：泥岩（3～5cm）・貝粒少量。縮まりややあり。
13. 暗茶灰色粘質土：泥岩（3～7cm）中量。貝粒・木端少量。縮まりややあり。
14. 暗灰色粘土：泥岩粒微量。木端少量。縮まり若干あり。
15. 暗青灰色粘土：泥岩粒やや多く、縮まりあり。
16. 暗青灰色粘質土：泥岩（5～10cm）・泥岩粒多量。
茶褐色粘土ブロック多く、縮まりあり。
17. 暗灰色粘質土：泥岩粒多量。貝粒・細砂多く、茶褐色粘土ブロック中量。
縮まりあり。
18. 青灰色粘質土：泥岩（10～20cm）多量。縮まりあり。

遺構土層注記

- A. 暗青灰色弱粘質土：泥岩粒少量。炭化物微量。縮まりややあり。
- B. 暗青灰色弱粘質土：泥岩粒・木端少量。縮まりややあり。
- C. 暗灰色粘質土：泥岩（5cm）・貝粒少量。縮まりなし。

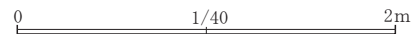


図5 調査区壁土層堆積図

第2節 調査における測量方法

調査を進めていく上での記録に用いる測量は、隣接する図1～2地点の調査に用いた任意の方眼軸の続きを利用した。そのため、国土座標上の方眼軸とは一致していない。測量軸の設定には先行して調査区西側にA杭、東側にB杭を設定した(図3)。調査地南側を東西に走る道路に設置してある鎌倉市4級基準点C001とC002を用いて、調査測量基準点にあたるA杭とB杭に国土座標上の数値を移動した。2地点と同軸・方眼グリッドを使用しているため、南北軸線は変わらず北方からアルファベットA～E、東西軸線には西方から算用数字の5～12を付け足してグリッド設定を行った。グリッド南北軸線は真北からN-33°06'50"-Wの傾きを測る。また、本報では便宜上、調査区の北東側を北、南西側を南とする。国土座標値は、現地調査時において日本測地系(座標系AREA9)を用いて測量を行った。後に整理作業段階において国土地理院ホームページに設置されている座標変換ソフト『web版TKY2JGD』により世界測地系第IX系の座標数値へ変換したものを図3に記し、調査地点と国土座標系の詳しい位置関係は図4に示した。標高値は、2地点調査時に調査地点近辺に移動してあるので、それらを使用し移設した。なお、提示した地図は鎌倉市が所有する都市基本計画図(2004年発行)を使用している。

第3節 調査区内の堆積土層

調査区東壁とトレンチ1の土層観察を行った(図5)。現地表は東壁で標高14.8 m前後、トレンチ1の方では14.4 mを測り、コンクリート片などを含む近・現代層(1～5層)が1面まで130cmほど堆積していた。標高13.4～13.6 mにかけて、6層とした厚さ15～30cmの泥岩を多量に含む青灰色弱粘質土とその直下に泥岩粒を多く含む7層の堆積があり、両方が1面を構成する堆積土であった。2面の標高は13.1 m前後を測る。8・11層は全体に拡がりが見えたが、東側のみに木片を含む9・10層が確認された。また、トレンチ1では同様の混入物を含み、類似する12・13層の堆積は確認できなかった。3面は12.3～12.5 mと東側に下る傾向がみえる。泥岩粒微量、木端少量を含む暗灰色粘土(14層)が40～70cm堆積し、3面の構成土となっている。その下に、30cmほどの堆積がみられた泥岩粒やや多く、締まりある暗青灰色粘質土(15層)を掘削後、4面を検出した。4面を構成する16層は5～10cm大の泥岩と泥岩粒を多量に含み、茶褐色粘土ブロックを多く含む層である。以下、17・18層の掘削を進行中、大規模に崩落してしまったため、中世基盤層までの堆積を確認できずに終えてしまった。

第三章 検出遺構と出土遺物

本調査では4期に亘る遺構面までを確認し、その中で土坑26基、柱穴54基を検出した。

本報では遺構に付した名称は調査時において便宜的に付したもので、遺構の新旧関係などに関するものではない。また、図示できなかった遺物は認知できる範囲の個体数で、それ以外は破片数を一個体とする形で、層位と遺構を一括し出土箇所を分けて表4にまとめた。なお、各遺構の説明にあたっては遺物が出土している遺構を優先し、そのほかの遺構については概略として、各節中表示した。

第1節 1面の遺構と遺物

地表面から厚さ80～130cmの近～現代の堆積土を除去すると、標高13.3～13.5mの高さに5～10cm大の泥岩を多量に含む暗青灰色弱粘質土が広がる1面を検出した(図6)。土坑15基、柱穴21口を検出したが、各遺構の深さは浅く、現代に至るまでに後世の攪乱により削平されている様相が想定できた。後述するが、2面の遺構では近世遺構を確認しているため、当遺構面は近世以降の年代となる。また、遺構からの出土遺物は確認できず、1面検出掘削時にかわらけ・火鉢が各1点ずつ出土した程度である。それらも、図示し得るには至らない小片であったため、ここでは特筆する遺構・遺物は省略させていただく。

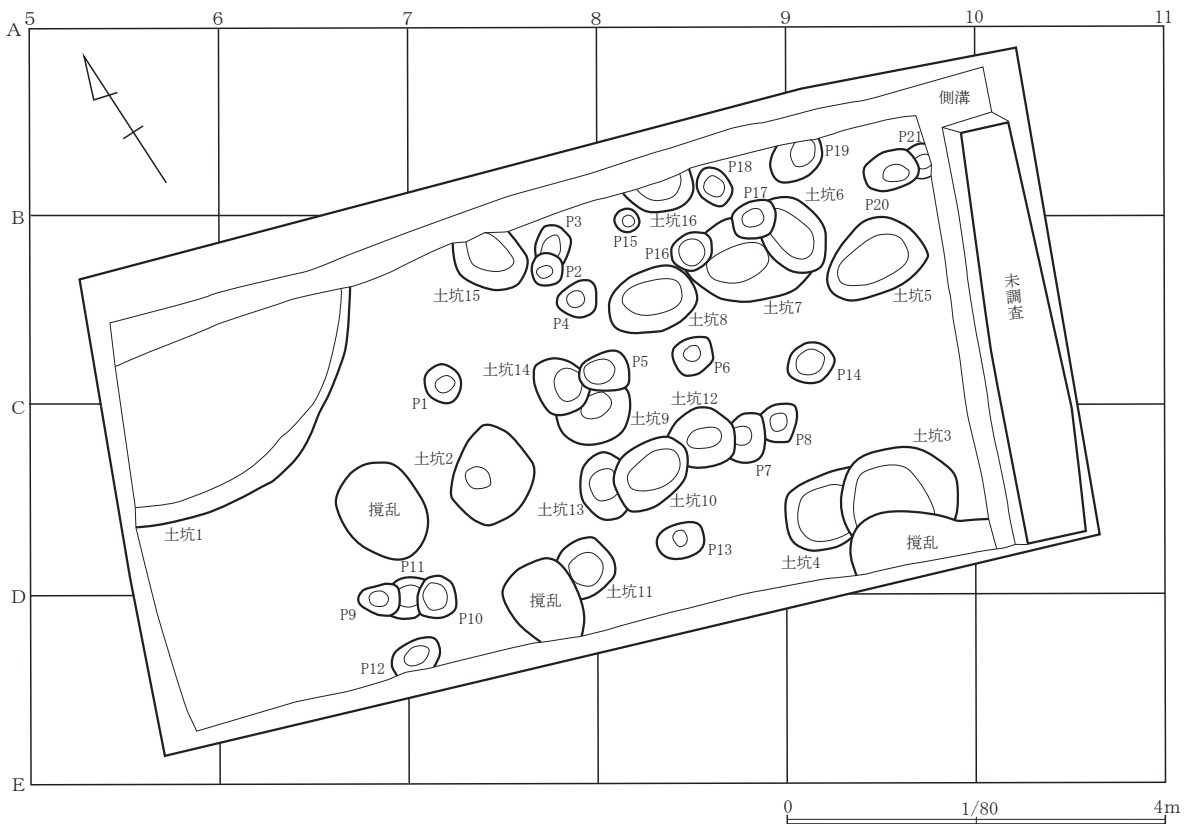


図6 1面全測図

表2 1面遺構計測表

遺構名	平面形	検出標高(m)	底面標高(m)	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	備考
土坑1	不明	13.36	13.02	243以上	180以上	34	調査区外に拡がる
土坑2	不整形	13.40	13.16	140	83	24	—
土坑3	不明	13.47	13.18	126	67以上	29	攪乱により削平
土坑4	不明	13.45	13.20	76	61	25	—
土坑5	不整形	13.52	13.36	110	74	16	—
土坑6	楕円形	13.52	13.32	89	64	20	—
土坑7	不明	13.48	13.24	96	82以上	24	P16・17、土坑6により削平
土坑8	楕円形	13.47	13.21	95	66	26	—
土坑9	不明	13.43	13.10	81	58	23	土坑14・P5により削平
土坑10	楕円形	13.43	13.29	89	63	14	—
土坑11	不整形	13.41	13.28	58	47以上	13	攪乱により削平
土坑12	楕円形	13.41	13.25	63	56以上	16	土坑10により削平
土坑13	楕円形	13.41	13.14	72	37以上	27	土坑10により削平
土坑14	不整形	13.40	13.21	65	54	19	P5により削平
土坑15	不明	13.42	13.17	76	62以上	25	—
P1	円形	13.40	13.28	42	37	12	—
P2	円形	13.41	13.20	36	35	21	—
P3	楕円形	13.41	13.28	36	33以上	13	P2により削平
P4	不整形	13.41	13.24	47	40	17	—
P5	隅丸方形	13.40	13.26	54	40	14	—
P6	隅丸方形	13.45	13.32	43	37	13	—
P7	不明	13.43	13.23	55	34以上	20	土坑12により削平
P8	不明	13.45	13.30	47以上	39	15	P7により削平
P9	不整形	13.31	13.10	45	31	21	—
P10	不整形	13.38	13.23	44	41	15	—
P11	不明	13.37	13.27	44	18以上	10	P9・10により削平
P12	不整形	13.37	13.19	55	32以上	18	調査区外に拡がる
P13	不整形	13.41	13.23	51	36	18	—
P14	円形	13.47	13.33	51	43	14	—
P15	円形	13.46	13.40	26	25	6	—
P16	円形	13.47	13.38	45	39	9	—
P17	円形	13.51	13.26	49	40	25	—
P18	楕円形	13.48	13.37	44	34	11	—
P19	不明	13.50	13.41	61	47	9	側溝により削平
P20	楕円形	13.52	13.34	59	41	18	—
P21	不明	13.49	13.41	37	14以上	8	P20により削平

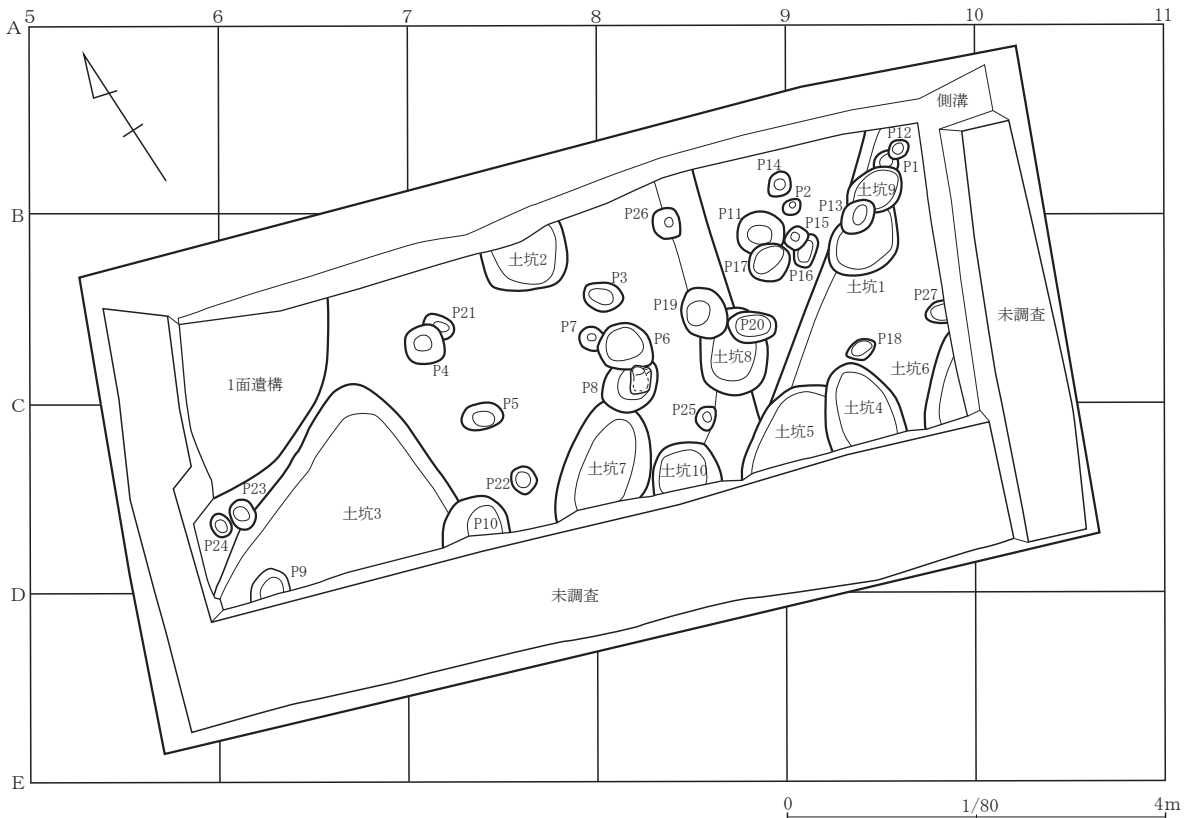


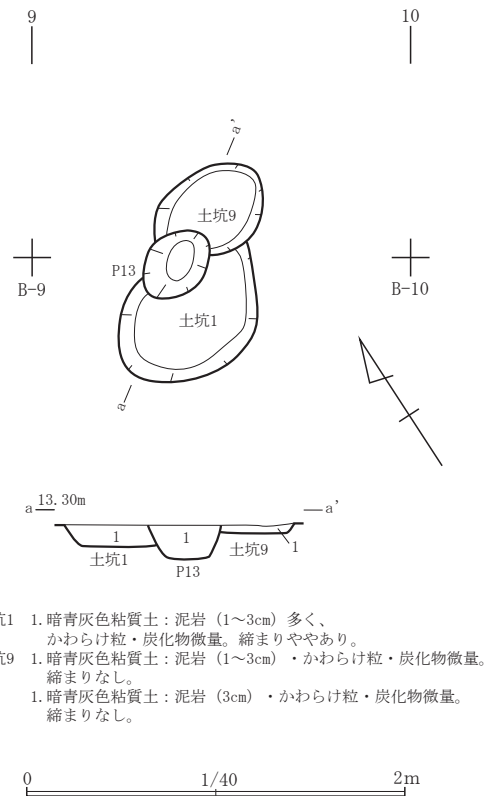
図7 2面全測図

第2節 2面の遺構と遺物

2面は1面を確認した標高から30～40cm下、標高13.10m付近で検出した(図7)。泥岩粒と細砂を含む暗青灰色粘質土(図5-8層)で地業された生活面が広がる。調査区東部には逆三角状の盛土(上面標高13.30m)があり、東西に向かい緩く傾斜が付く。東西の下端の標高は、東側では13.20m前後、西側は13.15m前後であり、この盛土の意図等は不明である。検出した遺構は、土坑10基、柱穴24基である。

土坑1(図8・9)

B-9～10グリッドの間に位置する。東部にある逆三角状の盛り土の斜面部分を削平して掘られている。北側は土坑9・P13により削平されており、形状は不明瞭である。検出時の標高は13.25m前後、底面標高は13.12m。規模は、長径88cm以上、短径71cm、深さ12cmである。覆土は1～3cm大の泥岩を多く、かわらけ粒・炭化物を微量に含む、暗青灰色粘質土の堆積がみられた。



- 土坑1 1. 暗青灰色粘質土：泥岩(1～3cm)多く、かわらけ粒・炭化物微量。縮まりややあり。
- 土坑9 1. 暗青灰色粘質土：泥岩(1～3cm)・かわらけ粒・炭化物微量。縮まりなし。
- P13 1. 暗青灰色粘質土：泥岩(3cm)・かわらけ粒・炭化物微量。縮まりなし。

図8 2面土坑・柱穴

表3 2面遺構計測表

遺構名	平面形	検出標高(m)	底面標高(m)	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	備考
土坑2	不明	13.17	12.98	92	58以上	19	側溝により削平
土坑3	不整形	13.18	13.01	251	192以上	17	P9・10により削平
土坑4	不明	13.23	13.18	85	83以上	5	調査区外に拡がる
土坑5	不明	13.22	13.11	132	82以上	11	土坑4により削平
土坑6	不明	13.22	13.07	90	50	15	調査区外に拡がる
土坑7	楕円形?	13.11	13.00	99以上	94	11	P8により削平
土坑8	不明	13.24	13.13	90	71	11	P19・20により削平
土坑9	楕円形	13.24	13.18	64	46	6	P13により削平
土坑10	不明	13.12	13.08	74	48以上	4	調査区外に拡がる
P1	不明	13.22	13.18	25	18以上	4	土坑9・P12により削平
P2	不整形	13.27	13.21	18	18	6	—
P3	楕円形	13.11	13.07	42	31	4	—
P4	円形	13.05	12.91	42	41	14	P21を削平
P5	円形	13.02	12.95	27	27	7	—
P6	不明	13.13	13.02	59	48	11	P7・8を削平
P7	円形	13.08	13.01	26	26	7	P6により削平
P8	円形	13.12	12.99	70	54以上	13	鎌倉石(20cm)含む
P9	不明	13.08	13.03	42	27以上	5	土坑3を削平
P10	不明	13.03	12.96	73	40以上	7	土坑3を削平
P11	円形	13.26	13.18	50	37以上	8	P17により削平
P12	楕円形	13.21	13.16	24	18	5	P1を削平
P13	楕円形	13.26	13.18	42	32	20	土坑1・9を削平
P14	不整形	13.28	13.22	28	24	6	—
P15	不整形	13.26	13.19	24	22	7	P15により削平
P16	楕円形	13.29	13.24	35	22	5	P16を削平
P17	不整形	13.27	13.20	44	41	7	P11を削平
P18	不整形	13.22	13.13	33	21	9	調査区外に拡がる
P19	不整形	13.26	13.10	55	47	16	—
P20	楕円形	13.25	13.19	51	34	6	—
P21	不整形	13.08	12.98	33	25以上	10	P4により削平
P22	円形	13.47	13.38	45	39	9	—
P23	不整形	13.18	13.09	32	26	9	土坑3を削平
P24	楕円形	13.18	13.10	26	20	8	—
P25	不整形	13.16	13.04	25	20	12	—
P26	不整形	13.15	13.02	33	27	13	—
P27	楕円形?	13.24	13.19	21以上	20	5	側溝により削平

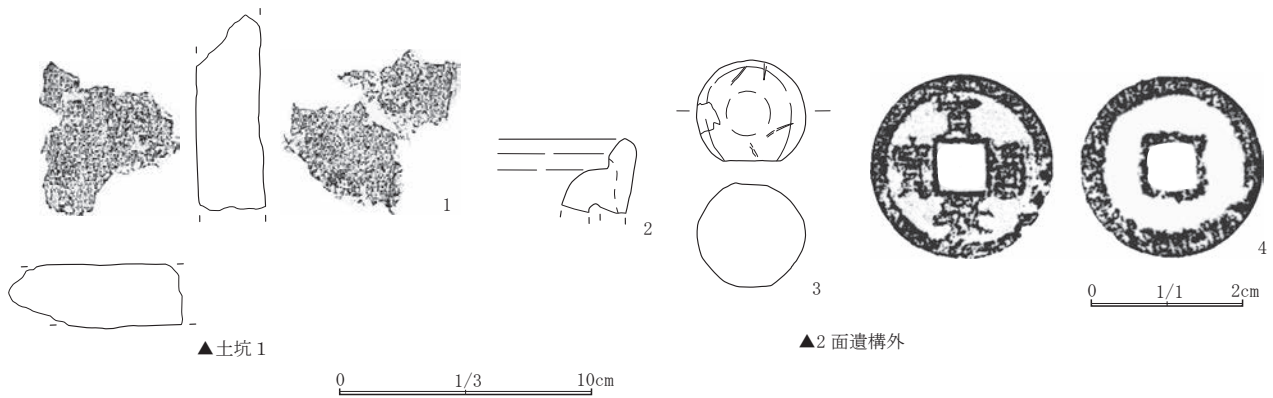


図9 2面土坑・遺構外出土遺物

出土遺物は、瀬戸おろし皿と平瓦が1点ずつ出土しているが、図示できたのは平瓦のみであった。

2面遺構外出土遺物(図9、図版5、表6)

1面下から当面検出までの掘削途中、2面構成土上に堆積する図5-6・7層中から出土した遺物、総数36点中3点を図9-2~3に示した。2は常滑窯甕の口縁部で縁帯下半部が欠損している。中野編年9型式、15世紀前半期の所産のものと思われる。3は用途不明の金属製品。一部平坦になっているが、全体に丸味をもつ。当遺物は、金属同定分析を鶴見大学に分析してもらっており、詳細は後述する。4は寛永通寶(古寛永)。2面検出までの掘削中に出土しているため、2面廃絶後からは江戸時代以降の年代と考えられる。

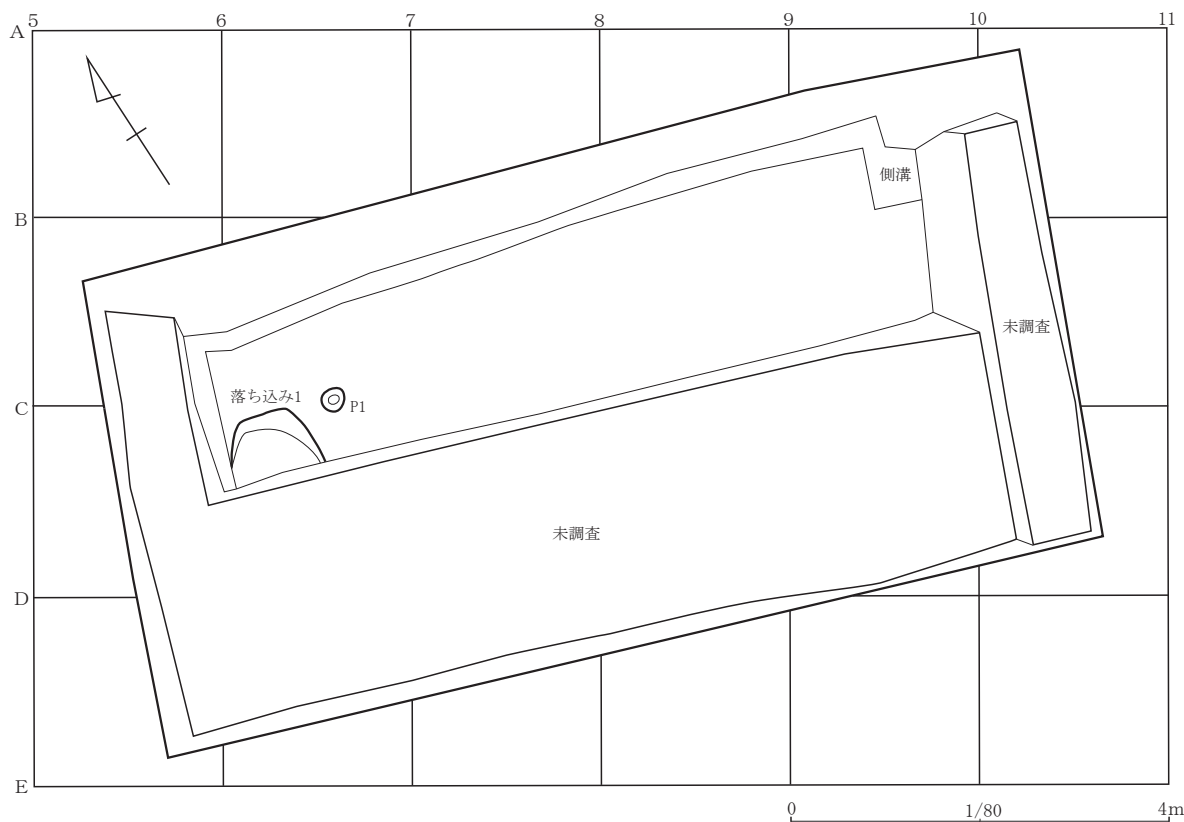


図10 3面全測図

第3節 3面の遺構と遺物

3面は2面から60～70cm掘り下げ、標高12.30～12.40mの高さで検出した。現地表から最大2.2mの深さに至ったため、調査区を大幅縮小し、北側半分に集中した。当遺構面は泥岩粒を僅か、木端を少量含む暗灰色粘土(図5-14層)が拡がり、地業としてはやや弱かったが、柱穴1基と落ち込みを確認したので遺構面として捉えた。柱穴からの出土遺物はなく、落ち込みから常滑窯甕小片1点が出土したが、図示し得るには至らなかった。

表4 3面遺構計測表

遺構名	平面形	検出標高(m)	底面標高(m)	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	備考
P1	不整円形	12.37	12.25	25	22	12	—
落ち込み1	—	12.33	12.27	96	65以上	6	調査区外に拡がる

3面遺構外出土遺物(図11、図版5・6、表6)

2面から3面検出時までの掘り下げ段階で出土した遺物(図5-8～13層中)を3面遺構外として一括した。当面に至るまで遺物の出土量は上面より多くなり、自然遺物も含め総数237点を数えた。図示した遺物は29点である。1～12は糸切りかわらけ、13は瀬戸窯碗で端反碗になる器形か、14は常滑甕、15は片口鉢Ⅱ類の口縁部片、16・17は常滑窯製品の破片を転用した磨耗陶片、18は備前窯播鉢、19は土錘、20は鳴滝・奥土産の仕上砥、21・22は丸瓦、23～26は平瓦、27は外面に紋章風の鶴を手描きした漆器椀、28・29は木製箸である。

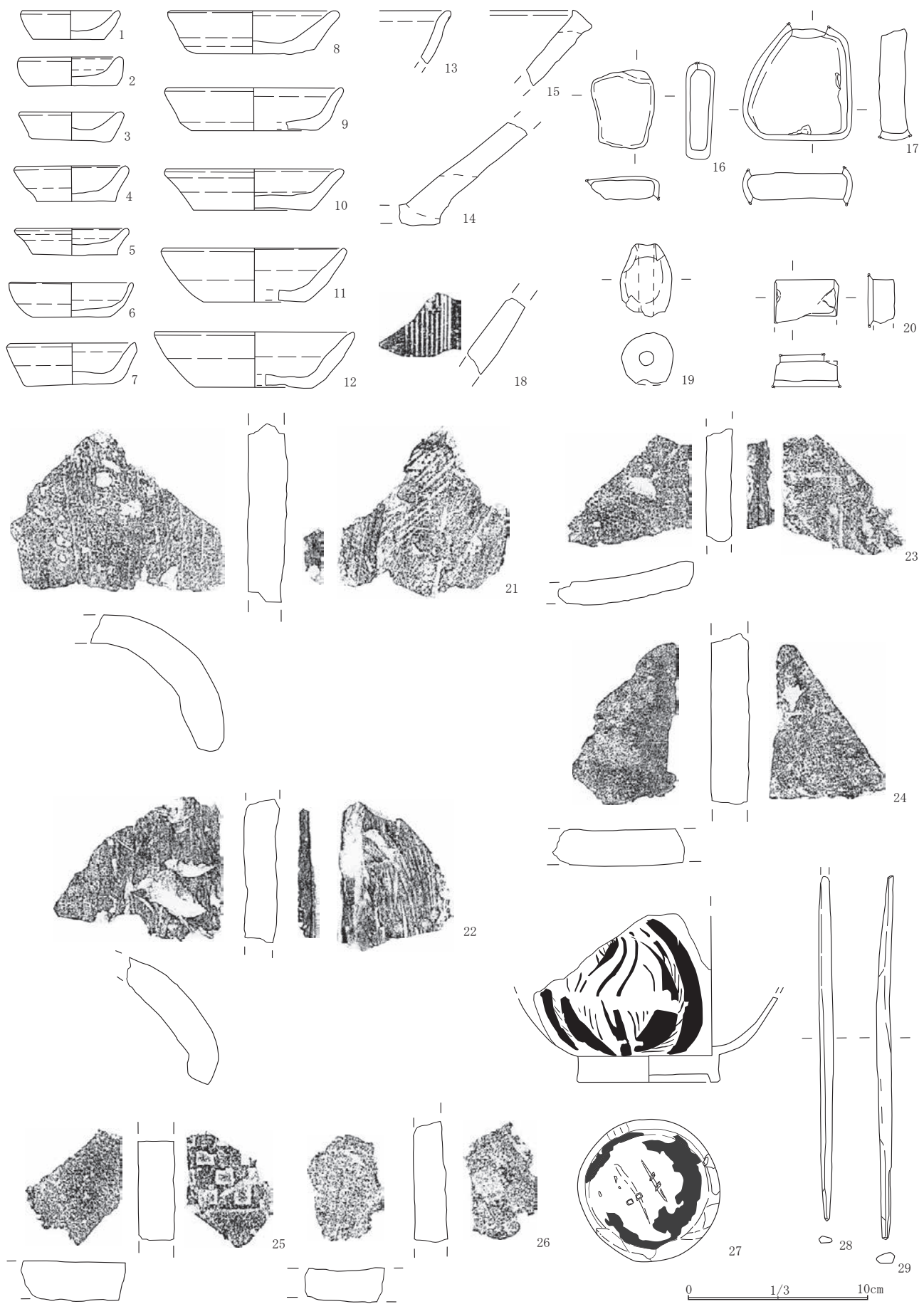


图11 3面遺構外出土遺物

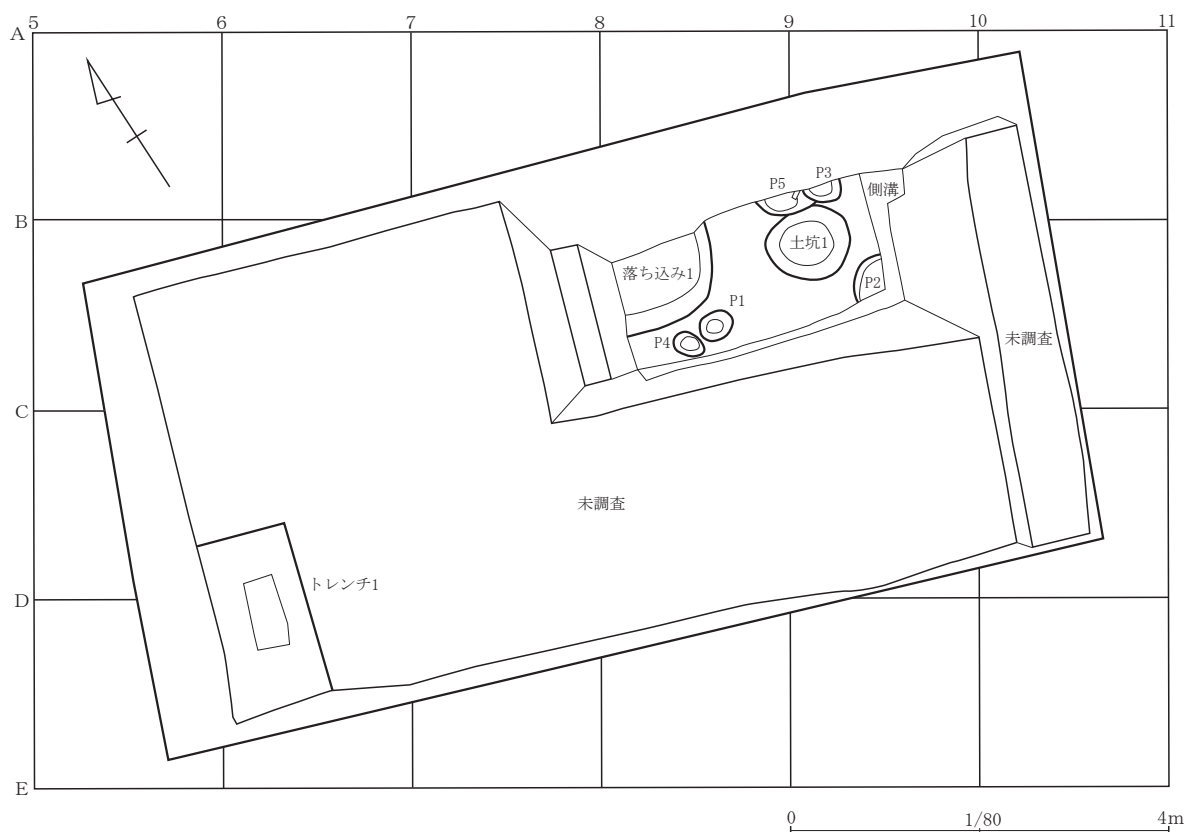


図12 4面全測図

第4節 4面の遺構と遺物

北東部をトレンチ状に設定し、地表下約3m、標高11.60m前後で検出した(図12)。5～10cm大の泥岩・泥岩粒多量、茶褐色粘土ブロックを多く含む締まりのある暗青灰色粘質土で地業された生活面である。検出した遺構は土坑1基、柱穴5基、落ち込み1基である。

また、対角の南西隅にトレンチ1として、標高11.40m付近まで掘り下げ、その結果、北東部と同様の堆積を確認した。出土した遺物は僅かであるが、各面の遺構外出土遺物として数えている。

土坑1 (図13・14、図版6、表6)

B-9グリッド付近で検出した。P5により北側を僅かに削平されている。検出標高は東側で11.74m、西側で11.60m、底面標高は11.48mである。平面形状は不整円形を呈し、規模は長軸91cm、短軸78cm、深さ22～26cmである。覆土は、1～3cm大の泥岩と炭化物を少量含む暗褐色粘質土が堆積していた。覆土中から、かわらけ小皿4点、褐釉壺1点、アサリ・バテイラが出土し、褐釉壺胴部小片を図示した。

P2 (図13・14、図版6、表6)

B-9グリッドの南東域で検出した。水抜き用の側溝で意図的に削平しつつも、調査区外に拡がっていると思われる。検出標高は11.74m、底面標高は11.64m。平面・断面共に形状は不明、確認した規模は、長軸37cm、短軸33cm、深さ10cmである。覆土は、泥岩粒・炭化物少量を含む暗褐色粘質土が堆積しており、開元通寶1点が出土している。

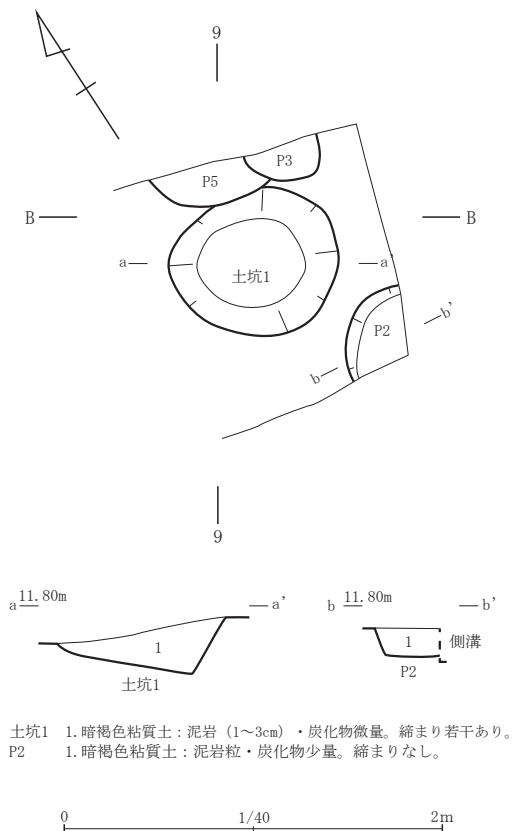


図13 4面土坑・柱穴

表5 4面遺構計測表

遺構名	平面形	検出標高(m)	底面標高(m)	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	備考
P 1	不整形	1 1. 6 3	1 1. 5 3	3 7	2 8	1 0	—
P 3	不明	1 1. 7 4	1 1. 6 3	4 0	2 0以上	1 1	P 5を削平
P 4	楕円形	1 1. 6 2	1 1. 5 3	3 5	2 3	9	調査区外に拡がる
P 5	不明	1 1. 6 4	1 1. 5 1	6 5以上	2 5以上	1 3	—
落ち込み1	不明	1 1. 5 9	1 1. 4 9	1 0 6以上	8 2以上	1 0	調査区外に拡がる

4面遺構外出土遺物 (図15・16、図版7・8、表6・7)

図5 - 14・15層より出土した遺物である。調査範囲が狭くなったにも関わらず、遺物出土量は各面を通して最多の296点を数える。かわらけ、常滑窯甕、木製箸、貝類の出土が目立つようになり、3面構成土である図5 - 14層中からの出土遺物が主体である。

図15の1～4は轆轤成形のかわらけ小皿、4は中皿、5は大皿、6は手捏ね成形のかわらけ大皿である。7は龍泉窯系青磁蓮弁文皿、8は瀬戸折縁深皿、9・10は常滑甕、前者は格子状の押印、後者は幾何学文の押印が捺してある。11～13は片口鉢、14は備前播鉢、15は菊花文スタンプの痕跡がある瓦質火鉢、16は滑石鍋を転用し、温石等に加工しようとしたと思われる底部片。17～20は平瓦である。図16の1～9は木製箸、10は非常に丁寧な作りをした差歯下駄、11は遊戯具か、12は対角に斜めに削り加工したトンボの羽で、西隣の調査地点でも類似品が出土している。

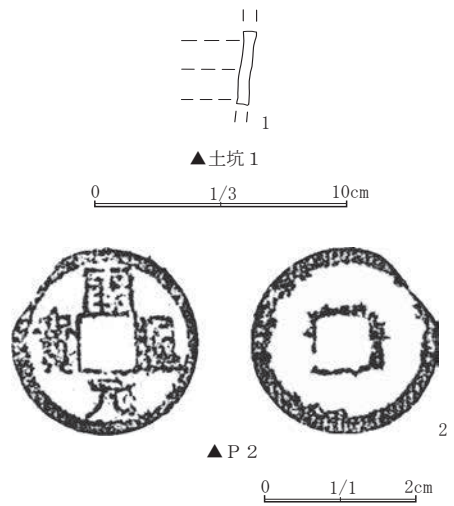


図14 4面土坑・柱穴出土遺物

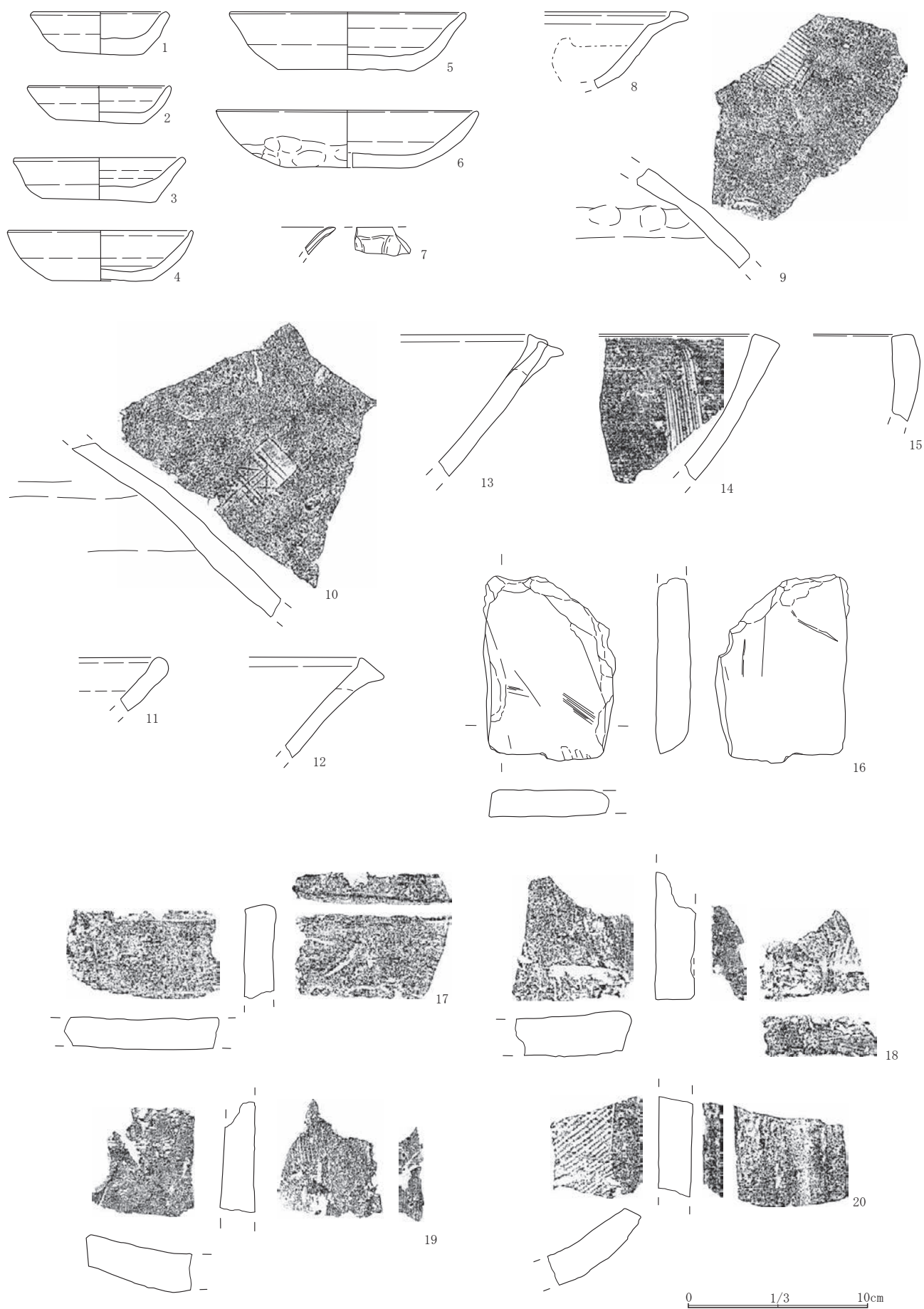


图15 4面遺構外出土遺物(1)

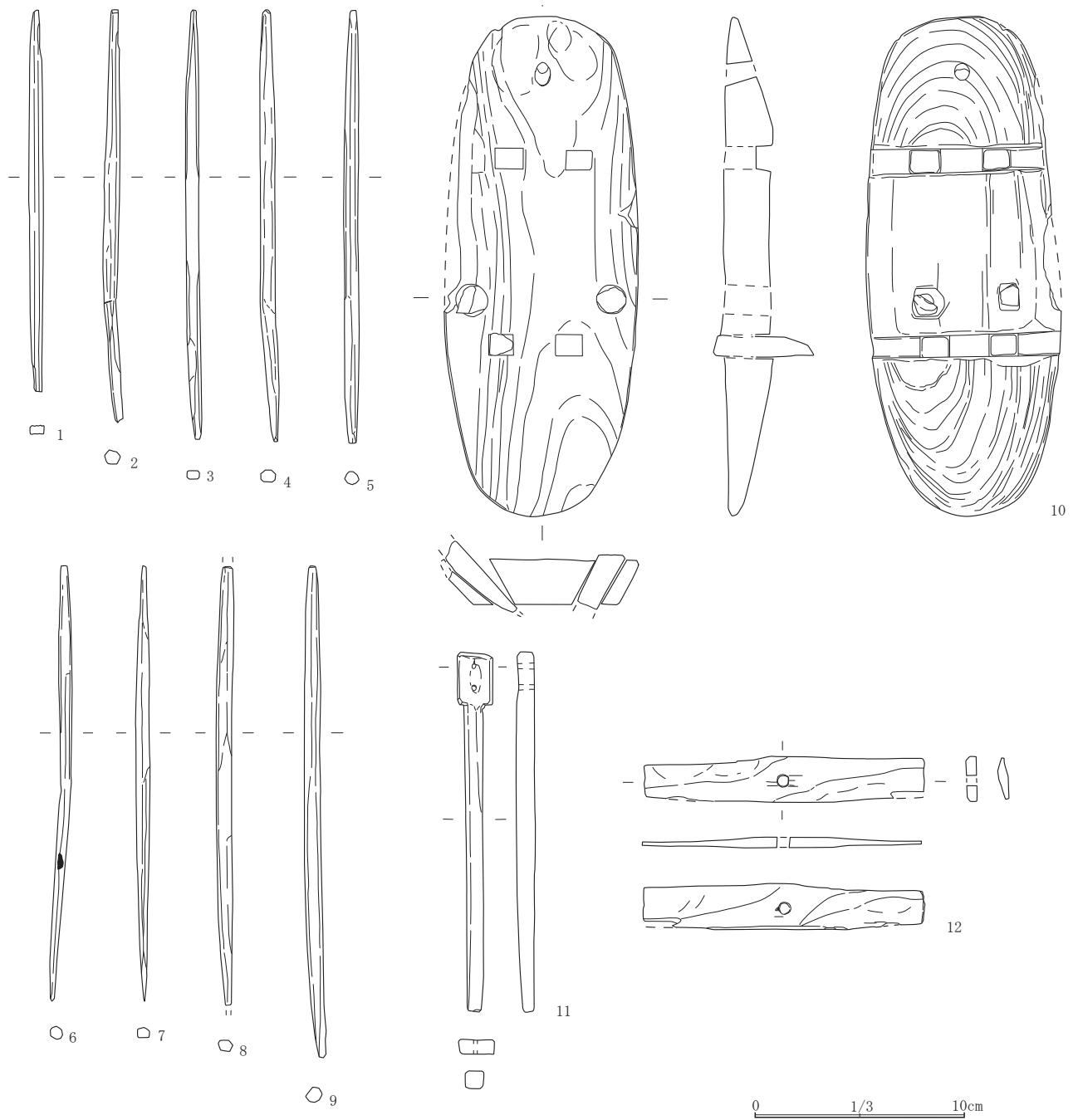


图16 4面遺構外出土遺物(2)

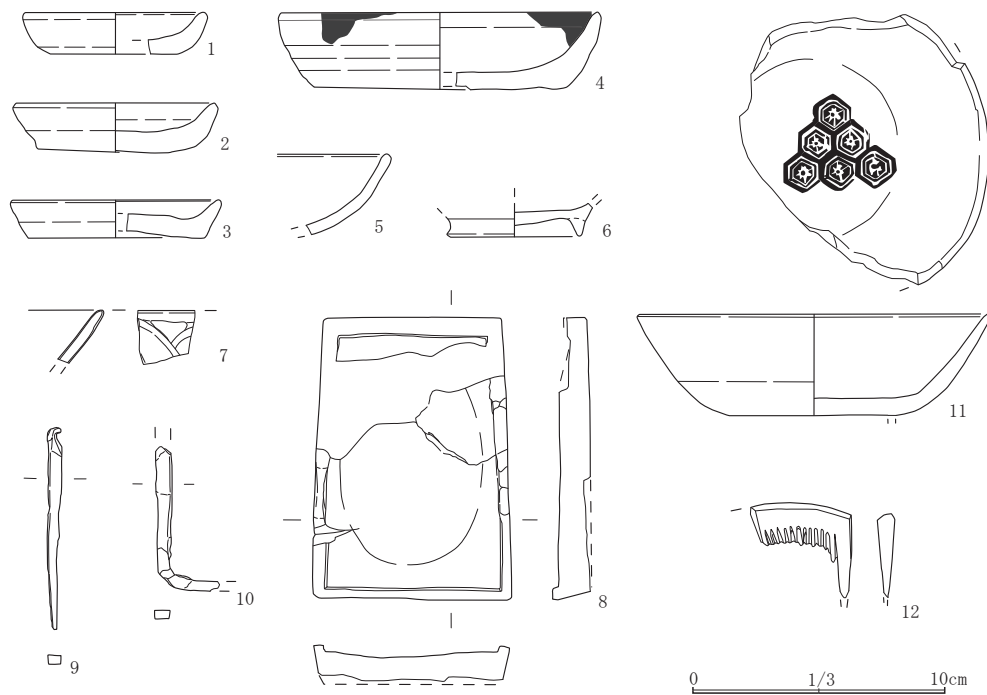


図17 4面下遺構外出土遺物

第5節 4面下の遺構と遺物

4面の調査終了後に、北壁側が崩落してしまったので調査をすることはできなかった。4面と同じ調査範囲で20cmほどの掘削した段階までに出土した遺物を図17に示した。総数149点、轆轤成形かわらけの出土が主体であった。

図17-1～3は轆轤成形のかわらけ小皿、4はかわらけ大皿、5・6は吉備系土器、7は龍泉窯系青磁蓮弁文碗、8は鳴滝産の硯、9・10は鉄製釘、11は内底面に亀甲と菊と思われる絵柄を組み合わせた文様スタンプを捺した漆器碗、12は黒漆を塗布した櫛である。

第四章 まとめ

本調査地点は、鎌倉市南東部、東に向かい広がる谷戸、弁ヶ谷内の中央支谷入口に位置する。当谷戸には廃寺の記録が多く、宗教的空間地であったことは文献や寺伝によって明らかになっている。第1章3節でも僅かながら述べたが、周辺の調査成果からも13世紀前半から15世紀代の寺院の性格をもつ痕跡が成果となっている。

本調査において1～4面までの4時期の遺構群の検出と調査区南西隅のトレンチ内で土層観察をしたが、多量の湧水により調査区壁の崩落が起こってしまった。その規模から調査続行が困難であったため、中世基盤層までの確認をすることはできなかったが、西隣の材木座四丁目579番8地点の調査成果を含め、本調査地点の成果を考察してみる(図18)。以下、図1の調査地点番号に倣い、材木座四丁目579番8地点を「2地点」、本調査地点である材木座四丁目579番4地点を「3地点」と略称する。

～Ⅰ期

2地点の報告(山口・平井2013)では調査結果から2面下トレンチ内で確認した堆積層をⅠ期とした。単純に比べると両地点とも標高は11.50～60mと近いが、3地点で確認した4面が2地点の堆積層と同時期の可能性は低いと考えられる。本調査地点では4面下より遺物が出土しており、2地点では確認できなかった古い時期の遺物であることから、層位に違いはあるものの同時期ないしはそれ以前である可能性が考えられる。また、4面より下層からの出土遺物と中世基盤層の未検出から、Ⅰ期以前の痕跡があることは明瞭であり、ここでは現状を優先して4面をⅠ期に含め捉えておく。

年代は4面遺構外から手捏ねかわらけの出土が認められ、3面出土のかわらけと比較すると器厚が薄くなり、やや丸みをもつ形状がみられる。備前播鉢も南北朝期の所産に相当すると思われ、年代比定をするのはやや困難であるが、概ね13世紀後半～14世紀前半頃の幅広い時期としたい。4面下遺構外からの遺物では、かわらけの器厚が厚く、形状は丸みを持つようになることから4面遺構外と比べてやや古くなっている様相や上面との関係から、13世紀後半と考えたい。

Ⅱ期

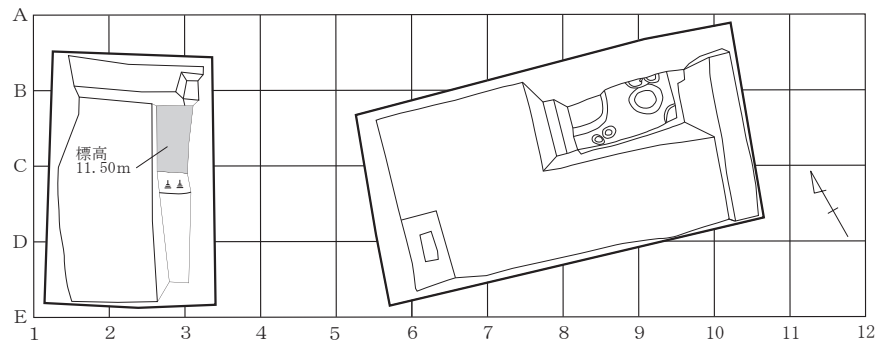
2地点では池状遺構が確認され、3地点ではその延長が期待されたが柱穴1基の確認となった。標高から池状遺構の底面部分と同一標高を測るが、3地点では2地点での泥岩版築層や池状遺構の下端ラインなども見えず、拡がりの状況は不明のままである。2面から3面までにかけての堆積層は図5-8～13層を確認しているが、8・11層を主体として調査区内に堆積している状況から、調査時の見解としては池状遺構の覆土を思わせるようであり、池状遺構の中の堆積ではないかと想定している。

年代については、3面遺構外から出土した遺物が、池状遺構出土遺物の様相と似ており、かわらけの器壁が直線的な形状になるため、15世紀代所産のかわらけに分類できると思われるが、やや内湾する形状のかわらけや永福寺Ⅲ期瓦などの出土が認められることから、概ね14世紀後半～15世紀前半頃と思われる。

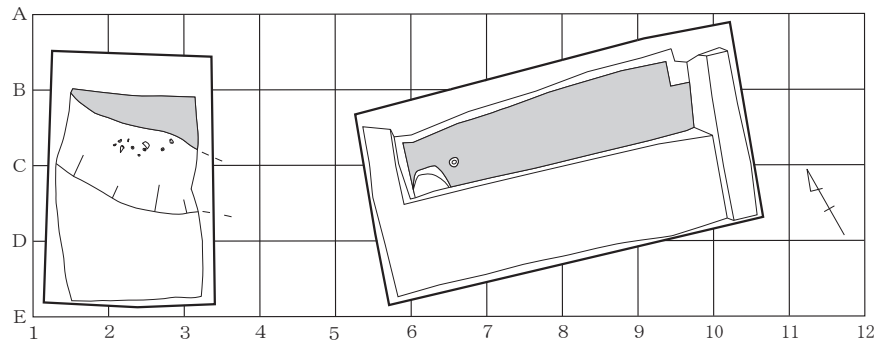
Ⅲ期

2地点の2b・a面、3地点の2面が該当する。図18には2a面だけを図示した。遺構自体の深さは浅く、出土遺物も僅かであることから2・3地点共に同様の遺構面が広がっている様相である。2地点での泥岩版築層の拡がり、トレンチ1からも堆積を確認できなかった。土坑から中野編年9型式(15世紀前半)の常滑窯甕口縁部が出土しており、2地点との関係を踏まえ、15世紀前半～中頃とする時期にある。2面遺構外からは寛永通寶が出土しているので、当期以降は近世以降になるため。中世遺構面での確認はⅢ期までとなる。

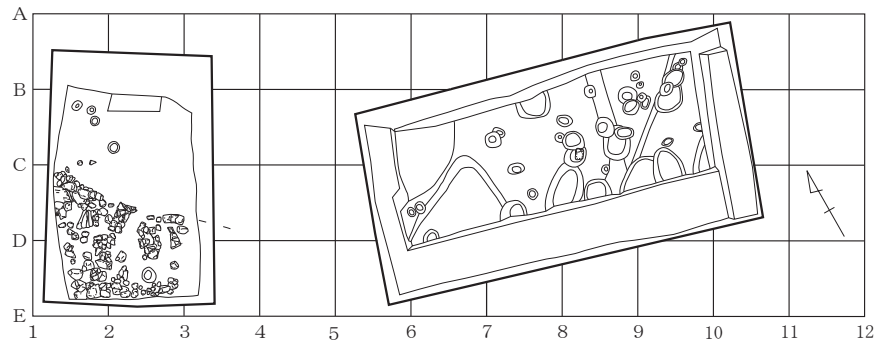
～I期 2地点(-) / 3地点(4面)



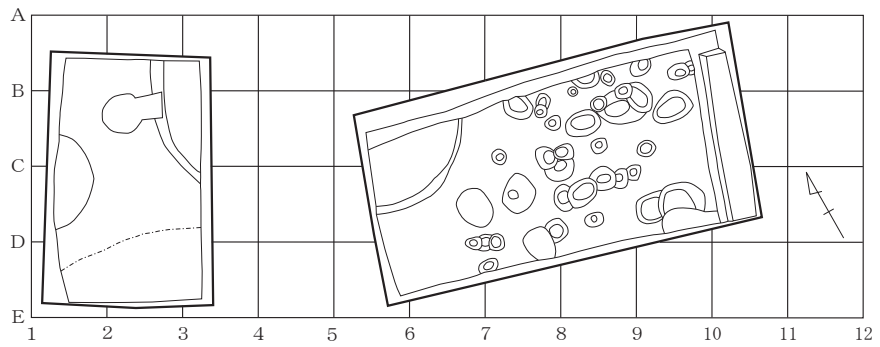
II期 2地点(2c面) / 3地点(3面)



III期 2地点(2a面) / 3地点(2面)



IV期 2地点(1面) / 3地点(1面)



0 1/200 10m

図18 遺構変遷図

Ⅳ期

両地点とも1面に相当し、2地点では出土遺物がないことから近世以降の遺構面の可能性を示した。前述したが、3地点での2面遺構外から寛永通寶が出土している。したがって、2面廃絶以降は近世期と考えられる。

先述した2面遺構外出土の金属製品についてだが、円形状を呈し、一部が平坦になっており、鑄造途中かと考えられる遺物である。層位的に近世以降の所産である可能性がある。鶴見大学文化財学科にて金属同定分析をしてもらった結果、鉛53.93%、スズ44.16%、鉄1.46%、銅0.44%の比率を持った金属であることが分かった。鉛とスズで合成された金属であるが、その用途は不明瞭のままである。

隣接した調査地点から、各遺構面の拡がりを確認できたが、その性格や時期に関する追求は困難であった。Ⅰ期(13世紀後半)以前の様相は未確認のままに終わってしまったが、その時期は弁ヶ谷内に存在することは近隣の調査地点からも成果として挙げられていることは明確である。現時点での弁ヶ谷内では14～15世紀代の遺跡が主体になる様相は文献資料と符号するように思われ、その中で2・3地点の池状遺構の在り方も寺域内の要素が強いのではないかと考えられる。

表6 遺物観察表(1)

() = 復元値 [] = 遺存値

挿図 番号	出土面・遺構	種別	遺存度	寸法(cm)			観察項目
				口径	底径	器高	
9-1	2面土坑1	平瓦	小片	長[7.7]幅[6.9]厚2.5			a.凹面模骨痕 凸面縦位叩き目 離れ砂付着 b.白灰色 砂粒 黒色粒 白色粒 小石 粗胎 c.凹面淡黄灰色 凸面灰黒色 e.良好
9-2	2面遺構外	常滑 甕	口縁部片	—	—	[2.9]	a.輪積み b.明灰白色 砂粒 白色粒 黒色粒 粗胎 c.暗褐色 e.良好 硬質 f.中野編年9型式か
9-3	2面遺構外	用途不明 球状金属製品	完形?	長4.0幅4.3厚4.1			f.底部?平坦 円形状 鑄造途中か
9-4	2面遺構外	銅銭	完形	外径2.46 内径2.15 孔径0.6厚0.11~0.13			f.寛永通寶 古寛永 万治二(1659)年以前鑄造
11-1	3面遺構外	かわらけ	完形	5.35	4.1	1.6	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 やや粗胎 c.橙色 e.良好
11-2	3面遺構外	かわらけ	完形	5.5	4.9	1.6	a.轆轤 外底糸切痕 b.砂粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c.黄橙色 e.良好
11-3	3面遺構外	かわらけ	完形	5.6	4.3	1.6	a.轆轤 外底糸切痕 b.砂粒 赤色粒 海綿骨針 やや粗胎 c.黄橙色 e.良好
11-4	3面遺構外	かわらけ	完形	6.0	4.3	2.0	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c.橙色 e.良好
11-5	3面遺構外	かわらけ	完形	6.15	4.7	1.5	a.轆轤 外底糸切痕 b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c.橙色 e.良好
11-6	3面遺構外	かわらけ	口縁部 一部欠損	6.7	4.2	1.9	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 雲母 赤色粒 やや粗胎 c.淡黄橙色 e.良好
11-7	3面遺構外	かわらけ	口縁~胴部 一部欠損	6.9	4.7	2.3	a.轆轤 外底糸切痕 b.砂粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c.淡橙色 e.良好
11-8	3面遺構外	かわらけ	完形	9.2	6.7	2.4	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 雲母 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c.淡橙色 e.良好
11-9	3面遺構外	かわらけ	口縁~底部1/4	(9.6)	(7.0)	2.4	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c.淡橙色 e.良好
11-10	3面遺構外	かわらけ	口縁~胴部1/3 底部完形	(9.6)	(6.4)	2.3	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c.黄橙色 e.良好
11-11	3面遺構外	かわらけ	口縁~底部1/4	(10.0)	(5.6)	3.0	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c.灰黄色 e.やや不良
11-12	3面遺構外	かわらけ	口縁~底部1/4	(11.0)	(6.6)	3.1	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.胎芯黑色 砂粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c.橙色 e.やや不良
11-13	3面遺構外	瀬戸 碗	口縁部小片	—	—	[3.0]	b.灰白色 黒色粒 良胎 d.灰緑色半透明 内外面施釉 e.良好 f.口縁部やや外傾している 端反碗か
11-14	3面遺構外	常滑 甕	底部片	—	—	[5.7]	a.輪積み 外底砂目痕 b.橙黄色 砂粒 白色粒・黒色粒多い 石英粒 小石 粗胎 c.暗褐色 e.良好
11-15	3面遺構外	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部小片	—	—	[4.2]	a.輪積み b.暗褐色 砂粒 白色粒 黒色粒 やや粗胎 c.暗赤褐色 e.良好
11-16	3面遺構外	常滑 転用磨耗陶片	完形	長4.5幅2.8~3.5厚1.0			b.灰褐色 砂粒 白色粒多い 小石 粗胎 c.灰色 e.良好 f.全面磨耗 片口鉢Ⅰ類を転用か
11-17	3面遺構外	常滑 転用磨耗陶片	完形	長5.9幅5.5厚1.4			b.灰~暗灰色 白色粒多い 小石 粗胎 c.褐色 e.良好 f.側端部磨耗
11-18	3面遺構外	備前 播鉢	胴部小片	—	—	[4.3]	a.内面10条の櫛描き状播り目 b.灰色 白色粒多い 黒色粒 粗胎 c.暗灰色 e.良好 f.内面磨減強い
11-19	3面遺構外	土錘	1/3欠損	長[3.1]幅2.8厚2.8			b.灰色 砂粒 雲母 気泡多い やや良胎 c.淡橙~灰色 e.良好
11-20	3面遺構外	砥石(仕上砥)	下部欠損	長[2.3]幅3.5厚1.2			a.端面整形加工による切断痕 c.淡白色 f.鳴滝・奥土産 表面使用による擦痕、磨滅している 裏面使用により荒い
11-21	3面遺構外	丸瓦	側端部片	長[10.0]幅[7.4]厚1.8~2.5			a.凸面縦位叩きを縦方向による指ナデ消し 凹面模骨痕 端部へラ削り b.白灰色 黒色粒多い 小石 粗胎 c.灰黒色 e.良好 f.永福寺Ⅲ期
11-22	3面遺構外	丸瓦	側端部片	長[8.1]幅[8.2]厚1.7			a.凸面縦位の叩き目 凹面模骨痕、縦方向による指ナデ消し 端部へラ削り b.淡灰黄色 砂粒 白色粒 黒色粒 小石 粗胎 c.灰黒色 e.良好
11-23	3面遺構外	平瓦	側端部片	長[6.3]幅[7.5]厚1.5			a.凹面離れ砂付着 凸面斜格子叩き目 端部へラ削り b.明灰色 白色粒多い 小石 粗胎 粘質 c.凹面灰褐色 凸面暗灰色 e.良好 硬質
11-24	3面遺構外	平瓦	広端部側片	長[9.6]幅[6.4]厚2.0			a.凹面布目痕 下部へラ削り 凸面横位のナデ 僅かに離れ砂付着 b.灰色 白色粒 気泡多い やや粗胎 c.灰~灰黒色 e.良好
11-25	3面遺構外	平瓦	側端部片	長[5.5]幅[5.7]厚2.0~2.2			a.凹面模骨痕 凸面市松文様の叩き目 端部へラ削り b.白灰色 黒色粒多い 小石 粗胎 c.明灰色 e.やや不良
11-26	3面遺構外	平瓦	小片	長[6.6]幅[4.8]厚1.5~1.9			a.凹面糸切?痕 凸面市松文様の叩き目 b.白灰色 黒色粒多い 小石 やや粗胎 c.明灰色 e.良好
11-27	3面遺構外	漆器 椀	胴部1/3 ~底部4/5	高台径7.6	[8.8]		a.削り出し輪高台 内面朱漆塗布 高台畳付木地露出 高台内黒漆が残る 外面黒漆地に朱漆で紋章風の鶴を手描き
11-28	3面遺構外	木製 箸	末端部欠損	長[19.2]幅0.8厚0.4			a.扁平な多角形状に削り加工
11-29	3面遺構外	木製 箸	完形	長20.3幅0.4~0.7厚0.6			a.扁平な多角形状に削り加工
14-1	4面土坑1	褐釉 壺	胴部小片	—	—	[2.9]	b.灰色 白色粒 黒色粒 やや粗胎 堅緻 d.褐色不透明 外面施釉 内面露胎 e.良好
14-2	4面P2	銅銭	完形	外径2.51 内径2.21 孔径0.68厚0.14			f.開元通寶 唐621年篆書
15-1	4面遺構外	かわらけ	完形	7.3	4.5	2.4	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c.淡黄橙色 e.良好
15-2	4面遺構外	かわらけ	完形	7.9	4.9	2.0	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c.橙色 e.良好
15-3	4面遺構外	かわらけ	口縁部1/2欠損	9.4	6.3	2.35	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c.淡黄橙色 e.良好
15-4	4面遺構外	かわらけ	口縁約1/2 ~底部完形	(10.2)	5.4	2.8	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c.淡橙色 e.良好
15-5	4面遺構外	かわらけ	口縁部 一部欠損	12.9	7.6	3.2	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c.橙色 e.良好

表7 遺物観察表(2)

() = 復元値 [] = 遺存値

挿図番号	出土面・遺構	種別	遺存度	寸法(cm)			観察項目
				口径	底径	器高	
							a:成形・整形 b:胎土・素地・材質 c:色調 d:釉調 e:焼成 f:備考
15-6	4面遺構外	かわらけ	口縁部1/4 ～底部1/5	(14.4)	(6.6～ 12.6)	3.2	a.手捏ね外底指頭痕 b.砂粒 泥岩粒 やや良胎 粘質 c.淡黄橙色 e.良好
15-7	4面遺構外	青磁 蓮弁文碗	口縁部小片	—	—	[1.5]	b.白灰色 精良堅緻 d.灰緑色不透明 f.外面蓮弁文
15-8	4面遺構外	瀬戸 折縁深皿	口縁～胴部1/5	—	—	[4.3]	b.黄白色 砂粒 良胎 d.暗黄色透明 内外面下部露胎 e.良好
15-9	4面遺構外	常滑 甕	肩部片	—	—	[3.0]	b.灰褐色 砂粒 白色粒 石英粒 小石粗胎 c.暗褐色 e.良好 f.外面幾何学文の押印
15-10	4面遺構外	常滑 甕	肩部片	—	—	[9.7]	b.暗灰色 白色粒 長石粒 小石粗胎 c.暗褐色 e.良好 f.外面幾何学文の押印
15-11	4面遺構外	常滑片口鉢Ⅰ類	口縁部小片	—	—	[3.0]	b.明灰色 白色粒 黒色粒 小石粗胎 粘質 c.明灰色 e.良好 f.内面口縁下弱い磨滅
15-12	4面遺構外	常滑片口鉢Ⅱ類	口縁部片	—	—	[5.6]	b.暗灰～茶褐色 白色粒 長石粒 小石粗胎 c.赤褐色 e.良好 f.内面口縁下弱い磨滅
15-13	4面遺構外	常滑片口鉢Ⅱ類	口縁部片	—	—	[7.9]	b.茶褐色 砂粒 白色粒 黒色粒 粗胎 c.暗褐色 e.良好 f.内面口縁下弱い磨滅
15-14	4面遺構外	備前 播鉢	口縁部片	—	—	[8.2]	a.内面10条の櫛描き状播り目 b.淡赤灰色 砂粒 白色粒 黒色粒 小石 やや粗胎 c.暗灰褐色 e.良好 硬質 f.内面非常に弱い磨滅
15-15	4面遺構外	瓦質 火鉢	口縁部小片	—	—	[4.8]	a.外面口縁下菊花文スタンプの痕跡あり b.明灰色 白色粒 黒色粒 やや粗胎 c.灰黒色 e.良好 f.内面下部焼けて器壁やや粗い 河野分類ⅣA類
15-16	4面遺構外	滑石鍋転用品	鍋底部	長[10.0]幅[6.3～7.2] 厚1.5～1.9			c.銀灰～灰黒色 f.温石に加工途中か
15-17	4面遺構外	平瓦	狭端部片	長[5.2]幅[8.2]厚1.6			a.凹面縦位のナデ凸面格子状の叩き目? 端部へラ削り b.明灰色 雲母 白色粒 黒色粒 小石粗胎 c.灰黒色 e.やや不良
15-18	4面遺構外	平瓦	広端部片	長[7.1]幅[6.4]厚2.2			a.凹面縦位のナデ凸面不明瞭 端部へラ削り b.明白色 白色粒 黒色粒 小石粗胎 c.灰黒色 e.やや不良
15-19	4面遺構外	平瓦	左側端部片	長[6.2]幅[5.9] 厚1.6～2.2			a.凹面縦位のナデ凸面離れ砂付着 端部へラ削り b.明灰色 白色粒 黒色粒粗胎 c.灰黒色 e.やや不良
15-20	4面遺構外	平瓦	側端部片	長[5.1]幅[5.2] 厚1.2～1.8			a.凹面糸切痕 端部側へラ削り 凸面縦位の叩き目 端部へラ削り b.白灰色 黒色粒 小石粗胎 c.明灰黒色 e.良好
16-1	4面遺構外	木製 箸	完形	長18.2幅0.4～0.7 厚0.4			a.四角形状に削り加工
16-2	4面遺構外	木製 箸	完形	長19.7幅0.4～0.7 厚0.7			a.多角形に削り加工
16-3	4面遺構外	木製 箸	完形	長20.5幅0.2～0.6 厚0.4			a.四角形状に削り加工 両端角張る
16-4	4面遺構外	木製 箸	完形	長20.6幅0.4～0.7 厚0.55			a.多角形に削り加工
16-5	4面遺構外	木製 箸	完形	長20.7幅0.3～0.7 厚0.6			a.多角形に削り加工
16-6	4面遺構外	木製 箸	完形	長20.8幅0.3～0.6 厚0.6			a.多角形に削り加工 先端やや尖り気味
16-7	4面遺構外	木製 箸	完形	長20.8幅0.2～0.6 厚0.5			a.多角形に削り加工 先端鋭く尖る
16-8	4面遺構外	木製 箸	両端部欠損	長[21.0]幅0.3～0.7 厚0.5			a.多角形に削り加工
16-9	4面遺構外	木製 箸	完形	長23.5幅0.4～0.75 厚0.7			a.多角形に削り加工
16-10	4面遺構外	木製 差歯下駄	台部側縁部所々欠損	長23.7幅9.0 厚0.5～2.2			a.断面舟型を呈し、非常に丁寧な作り 前縁は前端部に、後縁は内側に向かい穿孔される 裏面前後歯用の差し込み溝と四角形の穿孔あり b.板目材 f.前縁部指頭痕 横緒2ヶ所と後歯1ヶ所に楔残る
16-11	4面遺構外	用途不明木製品	完形?	長17.2幅0.8～1.7 厚0.7～0.85 孔径0.2			a.四角形状に全体を削り加工 上部穿孔2ヶ所あり 下部やや細くして棒状に削り加工 遊戯具か
16-12	4面遺構外	木製 トンポの羽	端部所々欠損	長13.4幅1.6～2.2 厚0.2～0.5 孔径0.5			a.全体薄く平坦に削り加工 中央に穿孔 端部四角に面取りし中央に切れ込み加工
17-1	4面下遺構外	かわらけ	口縁～底部1/4	(7.1)	(5.2)	1.65	a.轆轤 外底糸切痕 b.砂粒 雲母 泥岩粒 やや粗胎 c.淡黄橙色 e.良好
17-2	4面下遺構外	かわらけ	口縁部一部欠損	7.8	6.3	1.9	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 雲母 泥岩粒 粗胎 c.黄灰色 e.やや不良
17-3	4面下遺構外	かわらけ	口縁～底部1/4	(8.2)	(7.0)	1.5	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 雲母 赤色粒 泥岩粒 やや粗胎 c.淡黄灰色 e.やや不良
17-4	4面下遺構外	かわらけ	口縁部1/4～底部1/3	(12.6)	(10.0)	3.1	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 b.砂粒 雲母 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c.橙色 e.良好 f.内外面煤付着、燈明皿か
17-5	4面下遺構外	吉備系土器	口縁～胴部片	—	—	[3.2]	a.外面下部指頭痕 b.砂粒 小石粒 やや粗胎 粘質 c.淡黄白色 e.良好
17-6	4面下遺構外	吉備系土器	底部完形	—	5.1	[1.3]	a.貼付高台 b.灰色 砂粒 やや良胎 c.淡白色 e.良好 f.内底重ね焼き痕あり
17-7	4面下遺構外	青磁 蓮弁文碗	口縁部小片	—	—	[2.1]	b.灰色 黒色粒 精良堅緻 d.暗灰緑色透明 内外面薄い施釉 f.外面蓮弁文
17-8	4面下遺構外	硯	表裏面欠損	長11.2幅7.1～7.9 厚0.7～1.5			a.側・後端面やや内側に切断 全体を黒色処理 b.頁岩 高島石 c.灰黒色 f.生産は京都、彫手は赤間の職人(沙見一夫氏の御教示による)
17-9	4面下遺構外	鉄製 釘	完形	長8.0幅0.2～0.55 厚0.4			a.四角形状に鍛造 f.頭部叩かれ折れ曲がる
17-10	4面下遺構外	鉄製 釘	両端部欠損	長[5.7]幅0.5～0.7 厚0.35			a.四角形状に鍛造
17-11	4面下遺構外	漆器 椀	口縁部1/4～底部1/2	(13.8)	(6.8)	4.0	a.削り出し輪高台 高台部欠損 内外面黒漆塗布 内底面に朱漆で亀甲の中に菊?を組み合わせた文様をスタンプ f.スタンプ箇所、中心からややズレる
17-12	4面下遺構外	漆櫛	約1/2	長[3.7]幅[4.0] 厚0.25～0.7			a.全体に黒漆塗布

表8 層位別出土遺物一覧表

種別	出土層位		1面遺構外	2面遺構	2面遺構外	3面遺構	3面遺構外	4面遺構	4面遺構外	5面遺構外	合計
	かわらけ	糸切り	小1	大5 小22	大1 小11		大17 中38 小53	小6	大8 中58(燈2) 小27	大26 中31 小69	373
舶載陶磁器	白かわらけ						1			3	4
	青磁						碗1		碗1	碗1	3
	褐釉			壺1	壺1			壺1			3
国産陶磁器	瀬戸			銅皿1 不明1	皿1 花瓶1		碗1 皿2 折縁深皿4 花瓶1		碗1 折縁深皿1		14
	常滑			甗9	甗12 壺1	甗1	甗49 壺1 擦2	甗3	甗46 壺9	甗1 壺1	135
	常滑 片口鉢			I類1	II類2		II類12	I類1	I類1 II類3		20
	備前						播鉢1		播鉢1		2
	瓦			平1			平14 丸1		平6		22
土製品	火鉢			瓦質2	瓦質3		瓦質5		瓦質4		15
	その他						土錐1			吉備2 不明1	4
石製品	硯								赤間? 1	鳴滝1	2
	砥石				仕1		鳴滝1				2
	滑石製品								銅転用1		1
	銭				1			1			2
金属製品	その他				球状1						1
	漆器									椀1 皿1 櫛1	4
木製品	加工木製品						管5 曲物1		管35 下駄1 折敷3 草履1 トンボ1 円板1 不明1	管4 円板1	54
	骨						獣13		獣5		18
自然遺物	貝						ハマグリ1 バイ8 不明3	アサリ2 バテイラ1 ハマグリ1	アワビ1 ダンペイキサゴ1 ハマグリ6 バイ43 バテイラ1 ツメタガイ2 アカニシ4 サザエ21	バテイラ1 ハマグリ2 バイ1	99
	種子								松1	1	2
	合計			43	36	1	237	16	296	149	780



▲ 1. 1面全景 (東から)



▲ 2. 1面全景 (西から)



▲ 3. 2面全景 (東から)



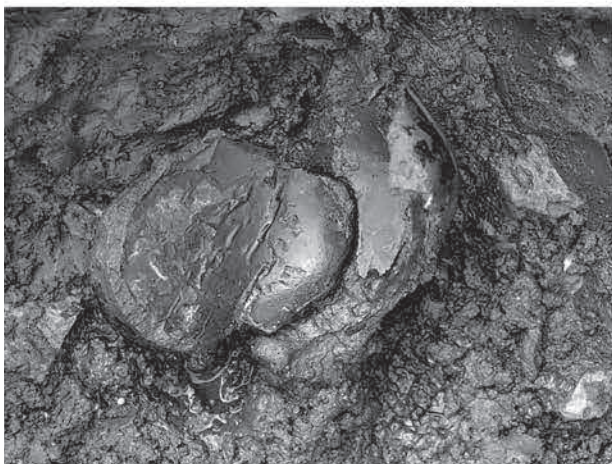
▲ 4. 2面全景 (西から)



▲ 1. 2面遺構外出土球状金属製品



▲ 3. 3面遺構外出土差齒下駄



◀ 2. 3面遺構外出土漆器椀



▲ 4. 3面全景 (東から)

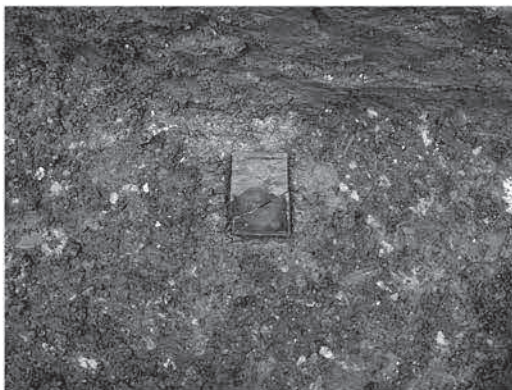


▲ 5. 3面全景 (西から)



▲ 1. 4面全景 (東から)

▼ 2. 4面全景 (北から)



▲ 3. 4面下遺構外出土硯



▲ 4. 4面下遺構外出土漆櫛



▲ 5. 4面下遺構外出土漆器椀



◀ 1. 調査区トレンチ1 (南から)



▲ 3. 調査区東壁土層堆積状況 (西から)



▲ 2. トレンチ1北壁土層堆積状況 (南東から)



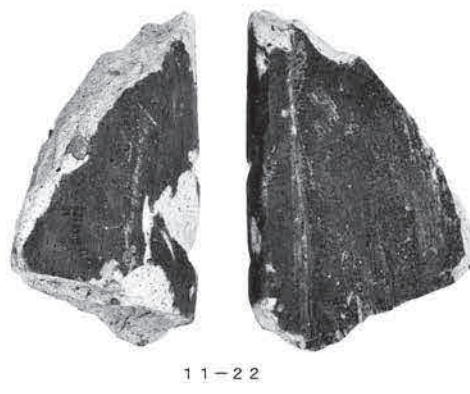
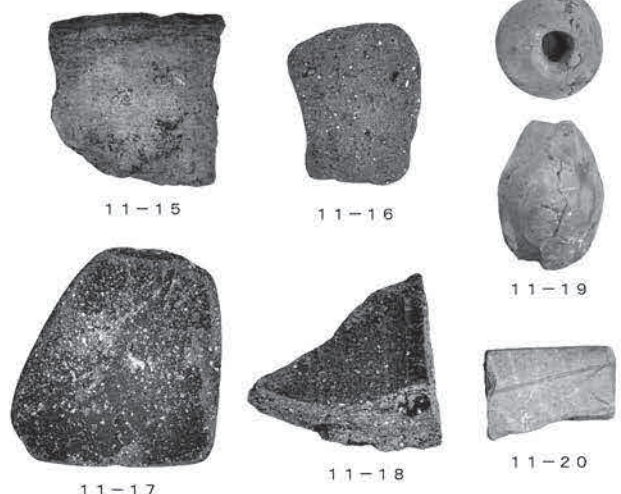
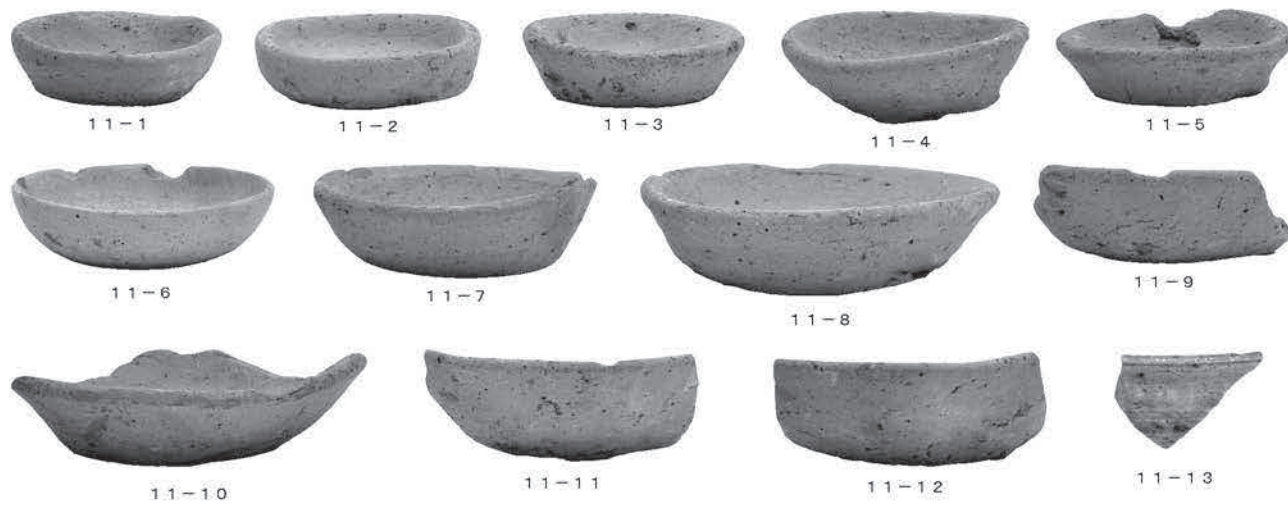
▲ 4. 崩落状況 (南東から)



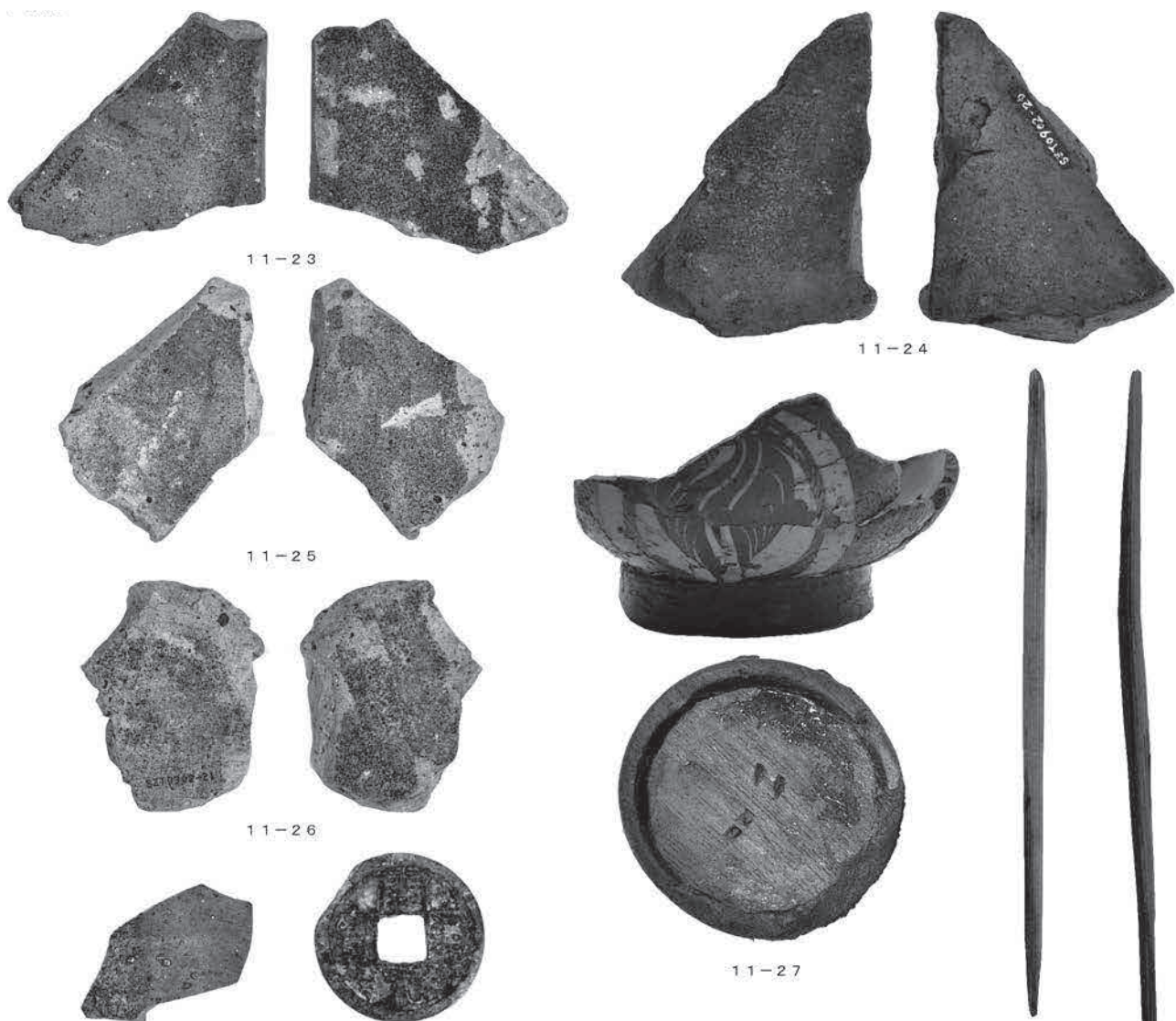
▲ 2面土坑 1

▲ 2面遺構外

▼ 3面遺構外



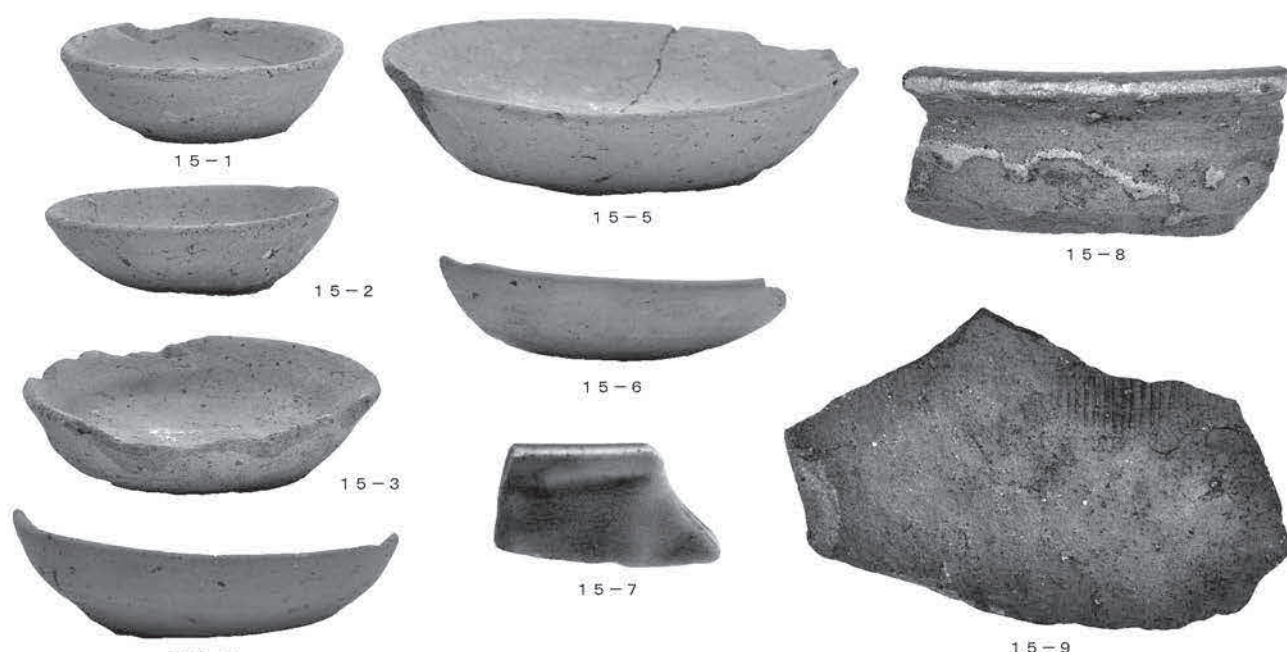
2・3面出土遺物



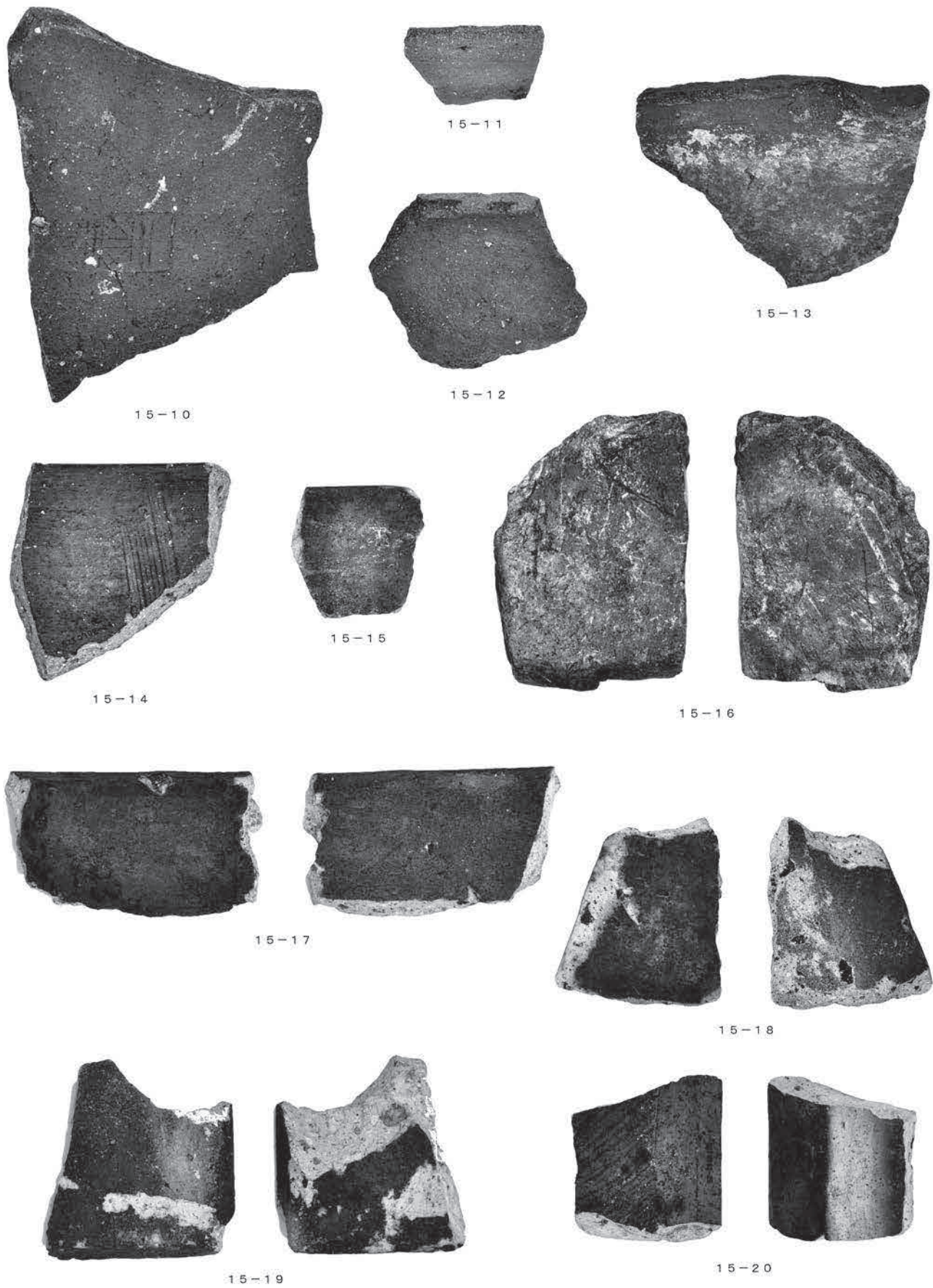
14-1
▲ 4面土坑 1

14-2
▲ 4面 P 2

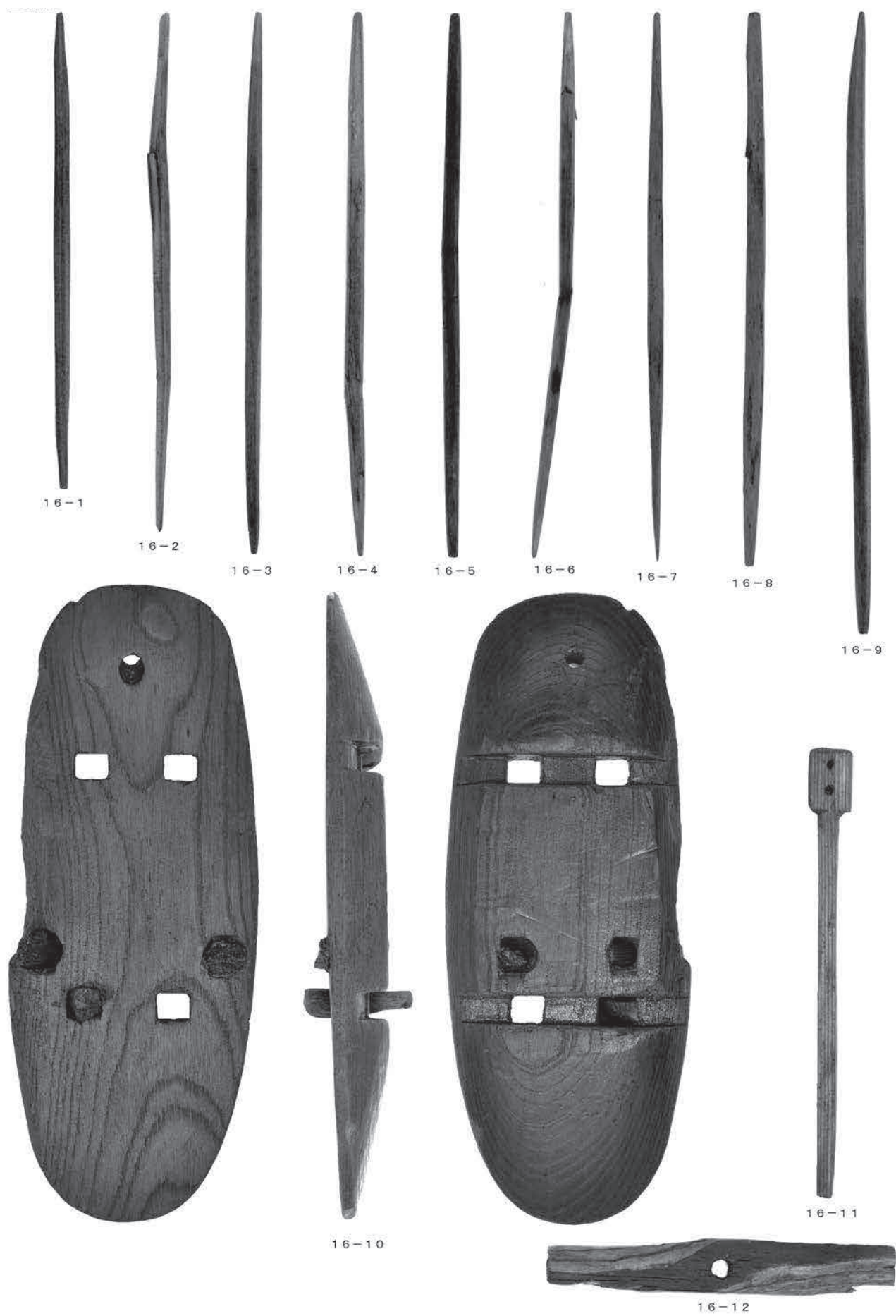
▲ 3面遺構外
▼ 4面遺構外



3 · 4面出土遺物

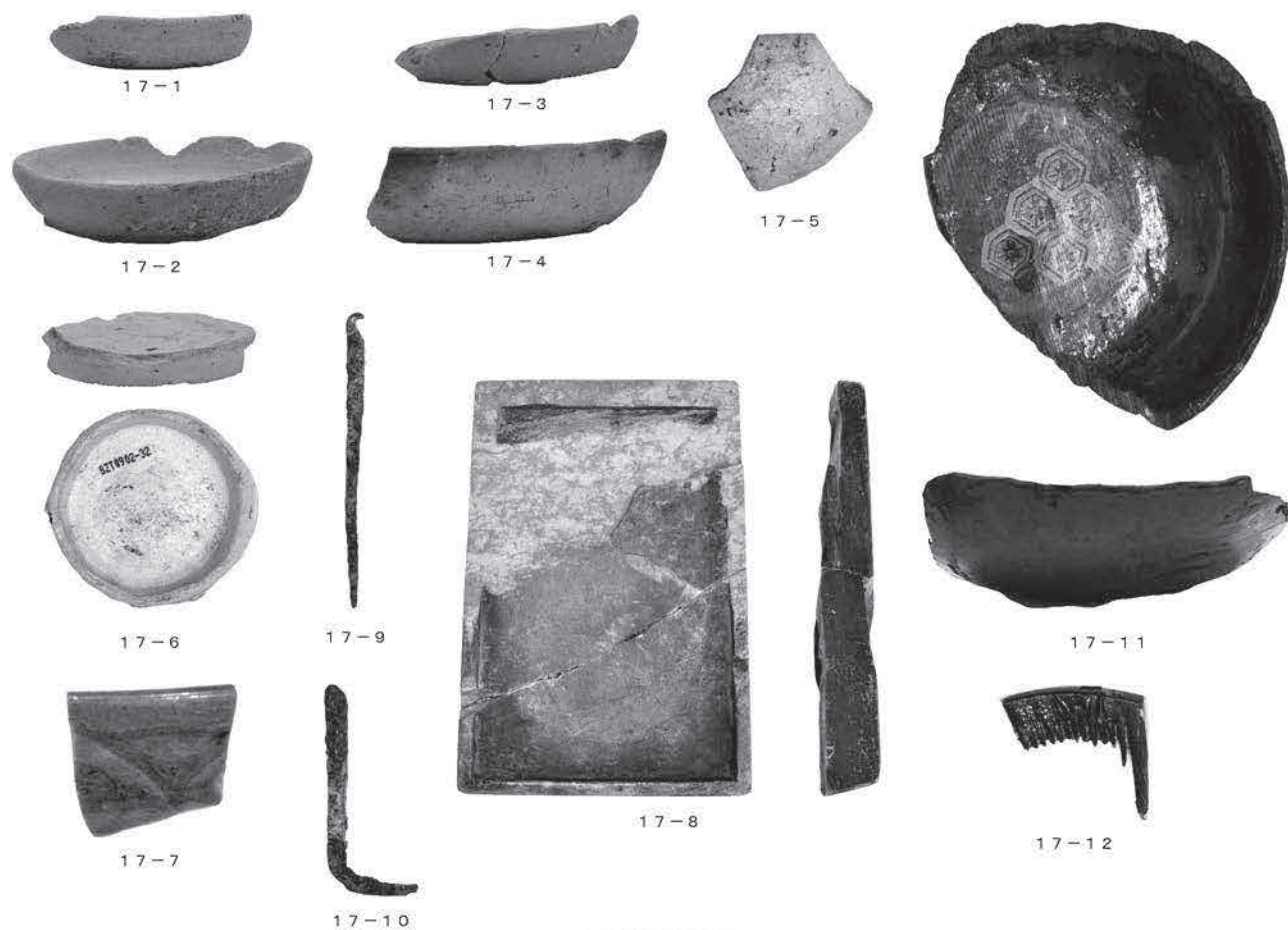


4面遺構外出土遺物(1)

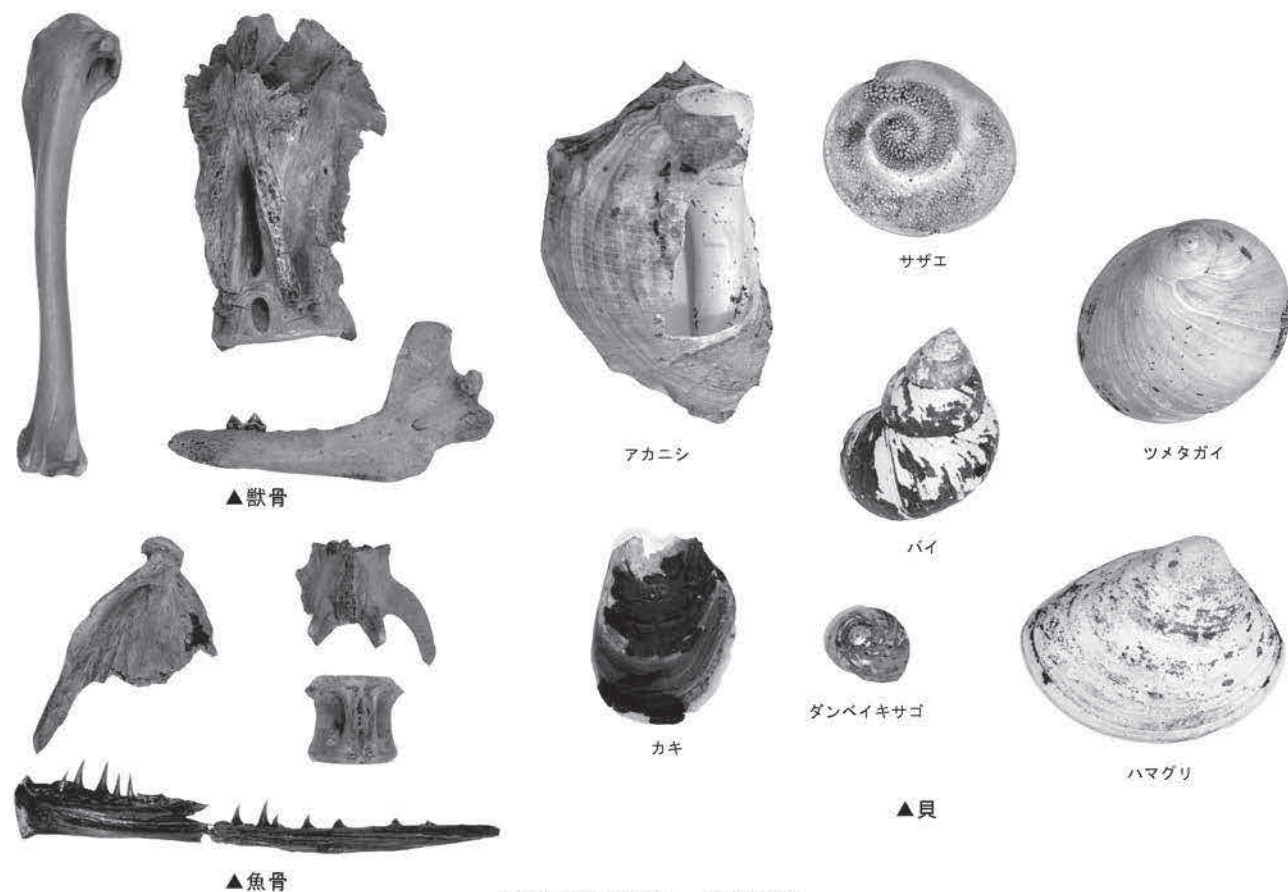


4面遺構外出土遺物(2)

図版9



▲4面下遺構外



4面下出土遺物・自然遺物

若宮大路周辺遺跡群 (No.242)

小町二丁目 364 番 17

例 言

1. 本報告は、鎌倉市小町二丁目364番17地点における個人専用住宅の建設に伴い実施した、若宮大路周辺遺跡群（神奈川県遺跡台帳－鎌倉市No.242）の緊急調査報告である。
2. 発掘調査は平成21年4月16日から同年6月1日にかけて、国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。調査面積は、39㎡である。
3. 発掘調査体制は、以下のとおりである。
調査担当者 三ッ橋正夫
調査員 岡田慶子、押木弘己
作業員 渡辺輝彦、佐藤美隆、大塚尚城、安藤宗幸、中村廣義
(公益社団法人 鎌倉市シルバー人材センター)
整理作業参加者 岡田、押木、菅野尚子、村松房代
4. 本報告では世界測地系（第IX系）の国家座標軸に基づく測量成果を掲げたが、平成23年3月11日以前の測量基準点を基に測量・作図したため、座標値は東日本大震災後の地殻変動に対応した補正值となっていない。
5. 本報告の執筆・編集は、押木が行った。
6. 本報告で使用した写真は、現地写真を三ッ橋と押木が、出土遺物を押木が撮影した。
7. 本調査に係わる出土遺物および各種記録類は、鎌倉市教育委員会が保管している。本調査地の略称は市教育委員会の統一基準に従って「WA0903」とし、出土品への注記その他に使用した。

目次

本文目次

第一章 遺跡の位置と歴史的環境	149
第二章 調査の方法と経過	152
第1節 調査に至る経緯	
第2節 調査の方法	
第3節 調査の経過	
第三章 基本土層	153
第四章 発見された遺構と遺物	154
第1節 検出遺構	
第2節 出土遺物	
第五章 調査成果のまとめ	172

挿図目次

図1 調査地の位置	149	図7 出土遺物①	160
図2 調査区配置図	152	図8 出土遺物②	160
図3 検出遺構平面図①	155	図9 出土遺物③	161
図4 検出遺構平面図②	156	図10 出土遺物④	162
図5 調査区壁断面図	157	図11 出土遺物⑤	163
図6 遺構断面図	159	図12 出土遺物⑥	164

表目次

表1 出土遺物計数・計量表	165	表2 出土遺物観察表	169
---------------------	-----	------------------	-----

図 版 目 次

図版 1	175	図版 3	177
1. I区1面 全景(南東から)		1. II区1面 溝1b完掘状況(北東から)	
2. I区1面 溝2(南西から)		2. II区1面 溝1b・1c土層断面(北東から)	
3. I区1面 土坑1断面(南西から)		3. II区1面 溝1c・中世基盤層土層断面 (北東から)	
4. I区1面 土坑1 完掘状況(南西から)		4. II区1面 遺構完掘後全景(東から)	
図版 2	176	5. II区1面 井戸1(南東から)	
1. II区1面 遺構確認状況(南西から)		6. II区1面 井戸1内 ウマ上顎骨出土状況 (東から)	
2. II区1面 溝1a土層断面(北東から)		図版 4	178
3. II区1面 溝1a完掘状況(北東から)		図版 5	179
4. II区1面 溝1a内 遺物出土状況(南から)		図版 6	180
5. II区1面 溝1b覆土中層 遺物出土状況 (南から)			
6. II区1面 溝1b完掘状況(北東から)			
7. II区1面 溝1b底面 板材検出状況 (西から)			

第一章 遺跡の位置と歴史的環境

若宮大路周辺遺跡群は鎌倉低地の中心部を占め、史跡若宮大路を挟んで東西に展開している。遺跡の南限は県道鎌倉・葉山線で、西は今小路に、東は滑川および小町大路（道路名はともに現在の通称）で限られている。細かな地形差はあるが、概ね滑川とその支流群の沖積作用によって形成された泥質平野に立地し、東西650 m、南北900 mほどの広がりを持つ。

今回の調査地は遺跡範囲の東側、小町大路の東辺に面しており、道路を挟んだ西側には妙隆寺が位置している。現地表の標高は約8.8 mで、東方100 mを南流する滑川(山裾)に向けて緩やかに上がっていく。

若宮大路は鶴岡八幡宮の参詣道であり、源頼朝が妻・政子の安産祈願を契機として寿永元年（1183）に整備されたという。将軍御所が大倉郷から宇津宮辻子の北側に（嘉禄元年＝1225）、次いで若宮大路東側に移転（嘉禎二年＝1236）して以降、若宮大路は政治・信仰上の両面で都市鎌倉を象徴する存在として位置付けられていく。

市街地に起因する開発件数の多さもあり、本遺跡群ではこれまでに130以上の地点で発掘調査が実施されている。小規模な調査が多く遺跡全体の性格を考えるには情報が断片的であるが、概ね「二ノ鳥居」以北では武家屋敷を窺わせる様相が強く、以南では竪穴建物（主に倉庫か）が多く展開する町屋の様相が色濃くなることが確認されている。若宮大路沿道の調査では大路の側溝が検出され、東西両側溝とも

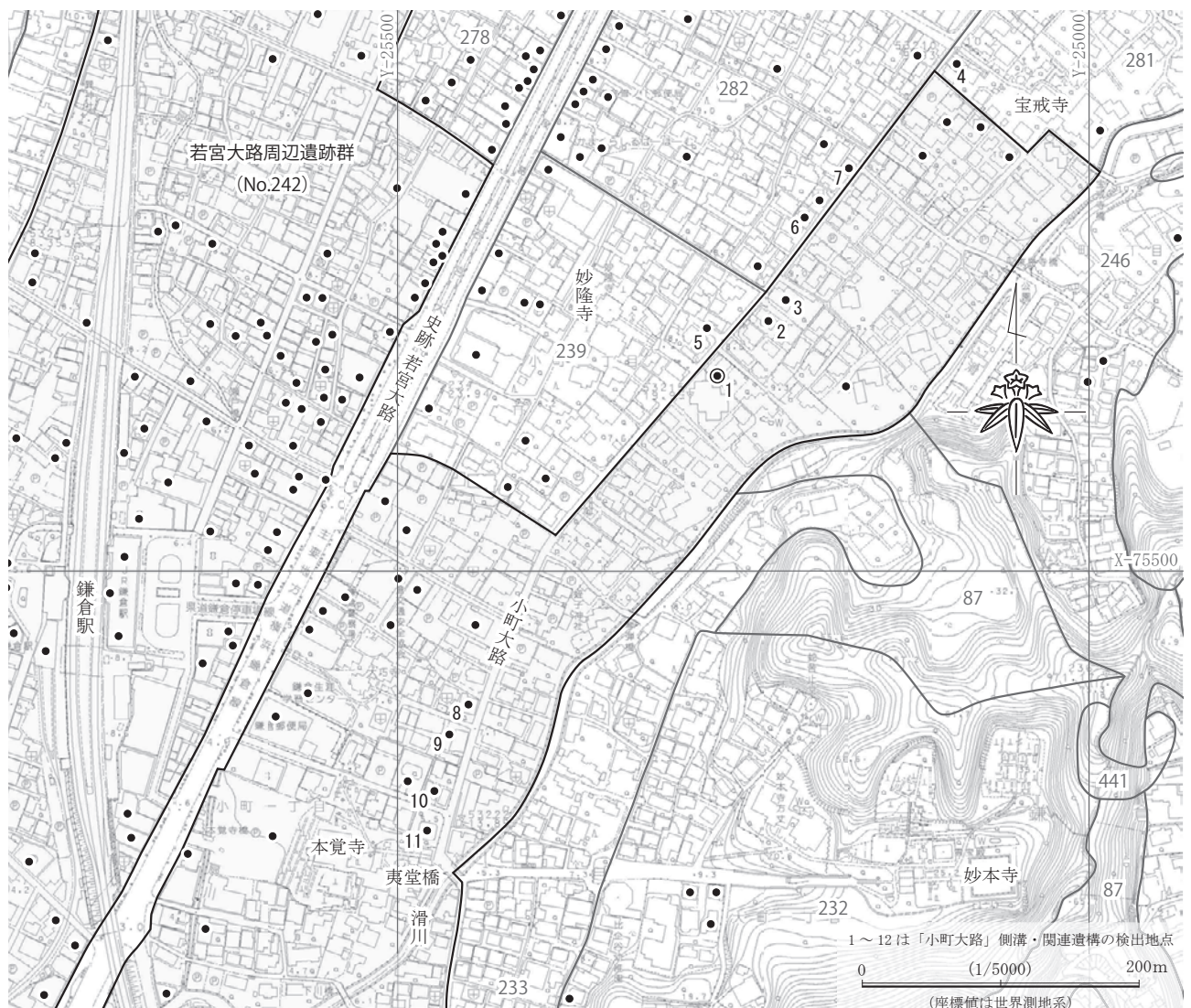


図1 調査地の位置

開削当初は素掘りであったものが木組み護岸をもつものへと構造変化することが確認されている。小町大路沿いでも複数の調査地点で中世の南北道路面やこれに伴う道路側溝が発見され、現在の小町大路が中世まで遡ることを明らかにした。このうち西側溝については初め素掘りであったものが木組み護岸、次いで凝灰岩切石積みまたは泥岩塊積みへの改変が把握されているが、今のところ東側溝での護岸施設検出例はない。素掘り段階の西側溝は非常に大規模で、幅や路面からの深さなど全体の規模や断面形は確認されていない。開削～存続時期を含めた実態の解明が期待される。

現行の小町大路は史料解釈によって「小町大路」または「町大路」という名称であったと考証され、後者の場合には本覚寺門前の夷堂橋以北と以南とで「小町大路」「大町大路」と呼び分けていた可能性も指摘されている。関連する研究事情については馬淵和雄氏の叙述に詳しいので参照されたいが(馬淵ほか2007)、歴史名称としての「小町大路」は未だ確定に至っていないのが実情といえる。

【図1に番号を掲載した調査地点と報告書等】

◆若宮大路周辺遺跡群 (No.242)

- 1.小町二丁目364番17(本地点)
- 2.小町二丁目402番5:「若宮大路周辺遺跡群」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書17(第1分冊)』所収
2001年 鎌倉市教育委員会
- 3.小町二丁目402番9外:「若宮大路周辺遺跡群」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書23(第2分冊)』所収
2007年 鎌倉市教育委員会
- 8.小町一丁目329番1:「若宮大路周辺遺跡群(No.242)の調査」『第23回 鎌倉市遺跡調査・研究発表会 発表要旨』
所収 2013年 特定非営利活動法人鎌倉考古学研究所・鎌倉市教育委員会
- 9.小町一丁目331番1:未報告
- 10.小町一丁目333番5:未報告
- 11.小町一丁目302番:「本覚寺境内」『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報I』所収 1983年 鎌倉市教育委員会

◆北条高時邸跡 (No.281)

- 4.小町三丁目426番3:「北条高時邸跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書12(第1分冊)』所収
1996年 鎌倉市教育委員会

◆宇津宮辻子幕府跡 (No.239)

- 5.小町二丁目374番1:「鎌倉市宇津宮辻子幕府跡」『第22回 神奈川県遺跡調査・研究発表会 発表要旨』所収
1998年 神奈川県考古学会・鎌倉市教育委員会

◆北条小町邸跡 (No.282)

- 6.雪ノ下一丁目432番2:「北条小町邸跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書5』所収 1989年 鎌倉市教育委員会
- 7.雪ノ下一丁目401番5外:「北条小町邸跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書19』所収
2005年 鎌倉市教育委員会

【引用・参考文献】

- 高柳光寿 1959『鎌倉市史 総説編』 鎌倉市
- 田代郁夫 1998「大町大路と小町大路—中世都市の中の「町」と「路」—」『湘南考古学同好会々報73』 湘南考古学同好会
- 馬淵和雄ほか 2007 「若宮大路周辺遺跡群 (No.242) 小町二丁目402番9ほか地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 23 (第2分冊)』 鎌倉市教育委員会

第二章 調査の方法と経過

第1節 調査に至る経緯

本発掘調査は、個人住宅の建設に伴う事前の記録保存を目的として、鎌倉市教育委員会が実施した。平成21年2月9日、届出に基づいて基礎工事の立会を行ったところ、当初の計画にはない鋼管杭が打ち込まれていたことを確認したため、急遽、工事用の重機で確認調査を実施した。この結果、地表下75～120cmで中世の整地層とみられる淡褐色土層が検出され、この上面ではピットが確認できた。同層中からは、かわらけや陶器の破片が出土し、これを取り除くと中世の基盤層である灰黒色粘質土層（基本土層のⅢ層、次章参照）が確認できた。現代の攪乱層は深いものの、全体として中世の遺構・遺物が良好に遺存していることを予測させる結果となった。

確認調査の内容を踏まえ、施工会社に基礎工事の中断を求めたうえで、建築部分について発掘調査を実施することとなった。およそ2ヶ月の調整期間を経て、平成21年4月16日に調査に着手した。

第2節 調査の方法

表土の除去は重機によって実施し、遺構面に近付いたところで人力での掘削に移行した。掘削に伴う残土置場を確保する必要から調査対象地は2分割し、先行して着手した東半部をⅠ区、西半部をⅡ区と呼称した。本報告でも、これに準じて記載を進める。確認調査の結果に基づき、表土・攪乱を除去したところを第1面としたが、Ⅱ区では攪乱が深く及んでいたため中世整地層の遺存状態は良好ではなく、概ねⅢ層の上面ないし層中で遺構確認に当たった。今回の調査では、対象区全体をⅢ層上まで掘り下げ、



図2 調査区配置図

I・II区とも部分的にサブトレンチを掘削して、下層の堆積状況について確認を行った。

測量に当たっては、調査区の形状に沿った形で任意の平面座標軸を設定し、主に光波測距儀を用いて平面図の作図に当たった。国家座標系との整合については市道上に設置された鎌倉市4級基準点「U099」と「U100」の2点間の関係から開放トラバースによる座標移動を行い、任意基準点および敷地境界杭の国家座標値を得る方法を採用した。現地調査の終了後、この成果に基づいて図上合成を行ったが、4級の成果簿が旧測地系に準じていたことから、本報告の作成に当たり世界測地系の座標値に表記を改めた。座標値の変換には、国土地理院が公開する座標変換ソフト「Web版TKY2JGD」を使用した。また、標高については、宝戒寺門前にある3級基準点「No.53210」から水準点移動を行い、任意の基準点に標高値を移して断面図その他の作図に利用した。

第3節 調査の経過

前述のとおり、本地点の調査は平成21年4月16日に開始した。重機によるI区の表土掘削を行い、翌日から測量方眼(グリッド)の設定や残土置場の整備を行った後、人力による遺構面の精査と調査区壁面の整形などに移行した。順次、確認できた遺構の掘削と調査区壁の断面観察を併行して進め、平面および断面の実測図作成と写真撮影を行った。これら一連の作業を終え、サブトレンチによる下層確認・記録を行った後、I区の埋め戻しとII区の表土掘削を5月11日に実施した。翌日から人力による攪乱掘削と遺構面の精査に着手し、I区と同様の手順で調査を進めた。サブトレンチの記録まで終えた5月27日に終了確認を行い、6月1日に調査器材の撤収を行って現地での調査工程を終了した。なお、施工会社との協議の結果、II区の埋め戻しについては調査工程には組み込まず、調査終了から間を置かず再開される基礎工事の際、行われることとなった。

第三章 基本土層

前章までに述べたように、本地点では表土・現代攪乱層が地表下120cmまで堆積し、中世基盤層(IV層)の近くまで削平が及んでいた。このため、中世の遺構面はIV層上面と上位のIII層中において、ほぼ1面が確認されたに過ぎない。この面上で、概ね中世3時期の遺構変遷を捉えることができた。III層以下の堆積については、部分的に設定したサブトレンチで確認した。

以下、本地点の基本層序について説明する。図5と併せて参照されたい。

- I. 褐色土 粘質土。表土・攪乱層。コンクリートブロックなどを含む。標高7.7～8.9 m。
- II. 黒褐色土 粘質土。白色微粒を少量含む。標高7.9～8.1 m。
- III. 淡褐色土 泥岩粒や炭化物粒を少量含む。中世の遺物包含層。上面を中世遺構面として捉えた。標高7.8～7.95 m。
- IV a. 灰黒色土 粒径1mm以下の白色粒を微量含む。粘性、締まり強い。標高7.7～8.0 m。
- IV b. 黒色土 灰黄色土が斑文状に混入する。粘性、締まり強い。標高7.55～7.8 m。
- IV c. 灰黒色土 粘性、締まり強い。標高7.45～7.6 m。
- IV d. 黒色土 粒径1mm以下の白色粒子を微量含む。締まり、粘性強い。標高7.25～7.5 m。
- V a. 暗黄灰色/暗青灰色砂 上半部が酸化により黄色に変色。粗砂粒、粒径5～10mmの泥岩粒を微量含む。標高7.0～7.25 m。
- V b. 青灰色砂 粗砂粒に粒径10～30mmの泥岩粒をやや多く含む。締まり弱い。標高7.0 m以下。

第四章 発見された遺構と遺物

第1節 検出遺構

本調査で検出された遺構は全て中世に属するもので、Ⅲ層以下では遺構・遺物とも発見されなかった。南北溝4条、井戸1基、土坑1基、ピット28基が検出され、南北3列、東西2列の柱穴列を復元することができた。

溝1a～1c：Ⅱ区の西端付近で検出された3条の南北溝で、切り合い関係から溝1c→1b→1aの順に開削されたことが確認できた。何れも南北の調査区外に続き、周辺の調査地ではこれらの延長部であろう溝が検出され、中世「小町大路」の側溝と考えられている。

溝1aは3条のうち、最も西に位置する。遺構の東岸が検出されたのみで、全体の幅は不明である。調査区壁の断面観察からは上場幅120cm、下場幅50cm以上の規模を持つことが確認されている。深さは最大で60cmを計測した。底面標高は検出された北端部で7.4m、南端部で7.35mを測り、緩やかに南へ下がる。立ち上がりの斜度は30°前後と緩く、痕跡も含めて護岸施設は確認できなかった。覆土は暗灰褐色の砂質土で、前段階の溝覆土と比べると色調が明るく夾雑物が少ない印象を持った。掘り方底面には細かな凹凸が目立ち、開削に伴う鋤等の掘削痕と考えられた。底面付近の覆土最下層からは、15世紀代のかわらけ小皿とウシの四肢骨が出土している(図版2-4)。東岸辺の軸方位は、N46°Eを指す。

掘り込み面が遺存していないため断定はできないが、断面観察からは先行する溝1bの廃絶後、溝状凹地を泥岩塊混じりの客土で埋め立てた後に開削されたと考えられる。凹地の段階も、道路側溝として一定の役割を果たしていたであろう。

溝1bは、溝1aの東、1cの西に位置する。調査区南壁の断面では、上場幅150cm以上、下場幅50cmを計測した。深さは100cmを測り、検出部の中央近くでは底面が南に25cmほど落ちる段差を確認した。落ち込み際では厚さ1cm、幅15cmの板材が直立して遺存しており、墨書文字は確認できなかったが、工事区割りの標榜であった可能性も考えられる。調査区の北壁と南壁では覆土様相が異なることから局所的浚渫や改修があったことも想定され、図14-7層を挟んで新旧2時期に区分できる可能性もある。底面の標高は、検出北端で6.9m、南端で6.6mを測る。7層下端を一時期(新段階)の底面と考えた場合、北端と南端の底面標高はともに6.9m強を測り、高低差は見出せない。底面からの立ち上がりは、調査区の南壁で西岸が80°、東岸が73°を測り、横断面は逆台形を呈する。この段階でも護岸の痕跡は見られなかった。検出北半部では、覆土4a層の上端部で完形の手づくねかわらけが平面的な広がりを見せていた(図版2-5・6)ことから、本遺構が廃絶した後、一時的に整地面が形成されていたことも考えられる。これらかわらけの様相から、13世紀中頃には埋没していた遺構と考えられる。中心軸はN38°Eを指す。

溝1cは3条の中で最も古く、また、最も東側で検出された。確認できたのは東岸のみで、調査区の南壁断面では上場幅120cm以上、下場幅30cm以上、深さ100cmまでを確認できた。前述したように、北半部では溝1bの埋没過程において削平を伴う整地がされたらしく、その影響もあって調査区の北壁断面では30cmほどの深さしか確認できなかった。東岸壁の立ち上がり斜度は40°で、横断面は逆台形であったと推察される。覆土は黒褐色ないし暗褐色の粘質土で、溝1と比較して夾雑物は少なかった。中心軸は、N44°Eを指す。

溝2はⅠ区の西側で検出された。概ね溝1と近似した主軸方向で、N39°Eを指す。南北とも調査区の外に続く。上場幅70～75cm、下場幅は40cm前後を測る。深さは調査区壁の断面で最大60cmを確認でき、底面標高は検出北端部で7.3m、南端部で7.2mを計測した。底面は平坦で断面は概ね逆台形を呈するが、

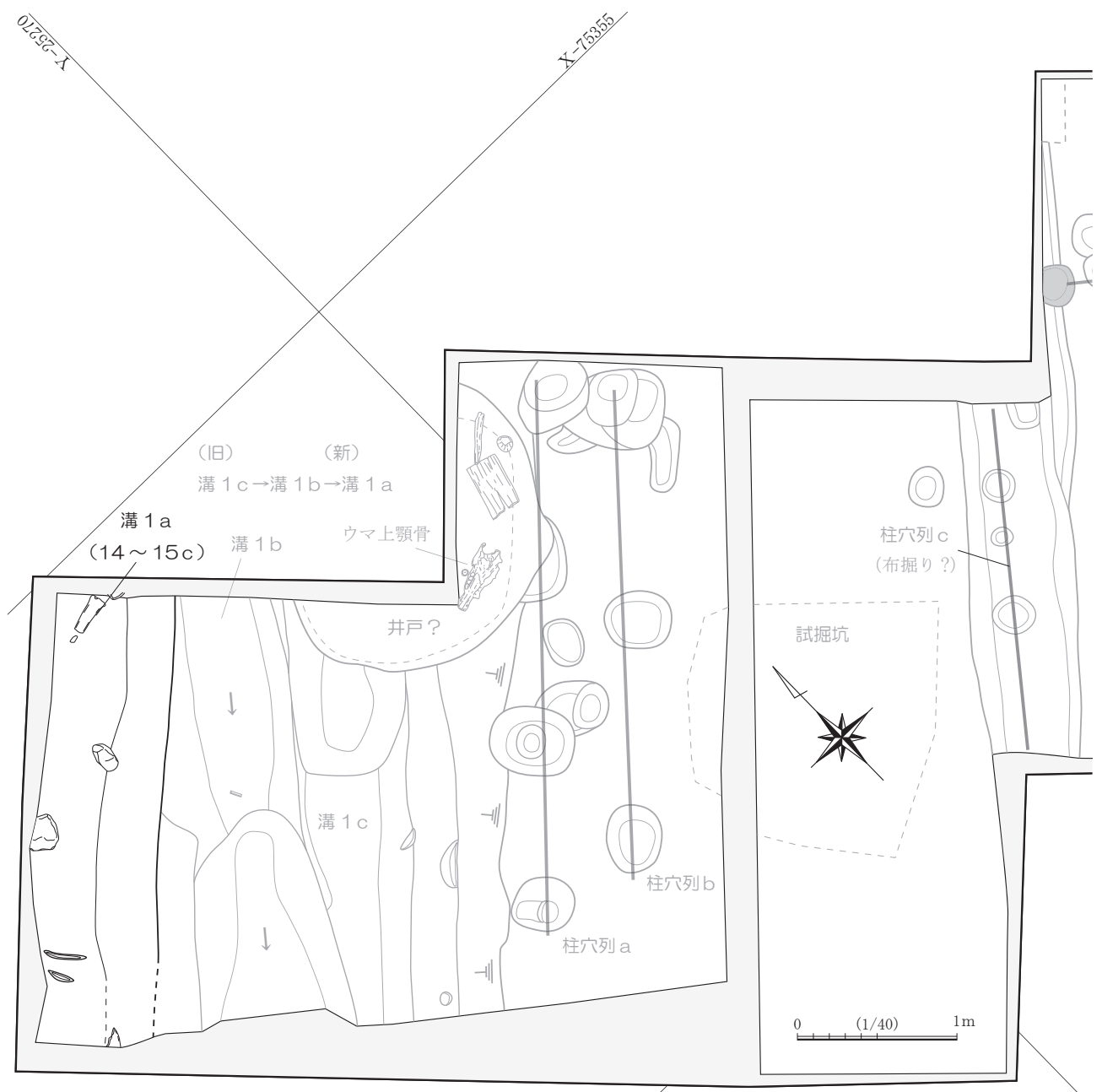


図3 検出遺構平面図①

検出北半部の東辺側には底面から30cmほど高いテラスが遺存していた。明確には捉えられなかったが、古段階の溝が存在していた可能性もある。底面には上場径15～30cm、深さ2～10cmのごく浅い小穴が検出された。柱痕は認識できなかったが、並びが良いことから布掘りの柱穴列としての可能性を示しておく(柱穴列c)。柱穴の間隔は、約80cmを測る。溝部分の覆土は粘質土を基調として5層に細別でき、レンズ状の堆積が認められた。

井戸1は、Ⅱ区の北壁際で検出された。調査区内では全外周の2/3程度が確認でき、長径190cm前後の平面規模となることが拮めた。溝1cに切られ、重複による新旧関係の上では、本地点の中世遺構の中で最も古い段階に位置付けられる。調査区の壁際でもあり、安全面に配慮して底面に達する前に掘削を断念した。確認レベルから90cm以上の深さを持ち、底面は標高6.8m以下にある。平面規模や確認深度、垂直となる落ち込み形状から井戸と推測したが、不確定要素を残す調査結果となった。覆土は腐植質の

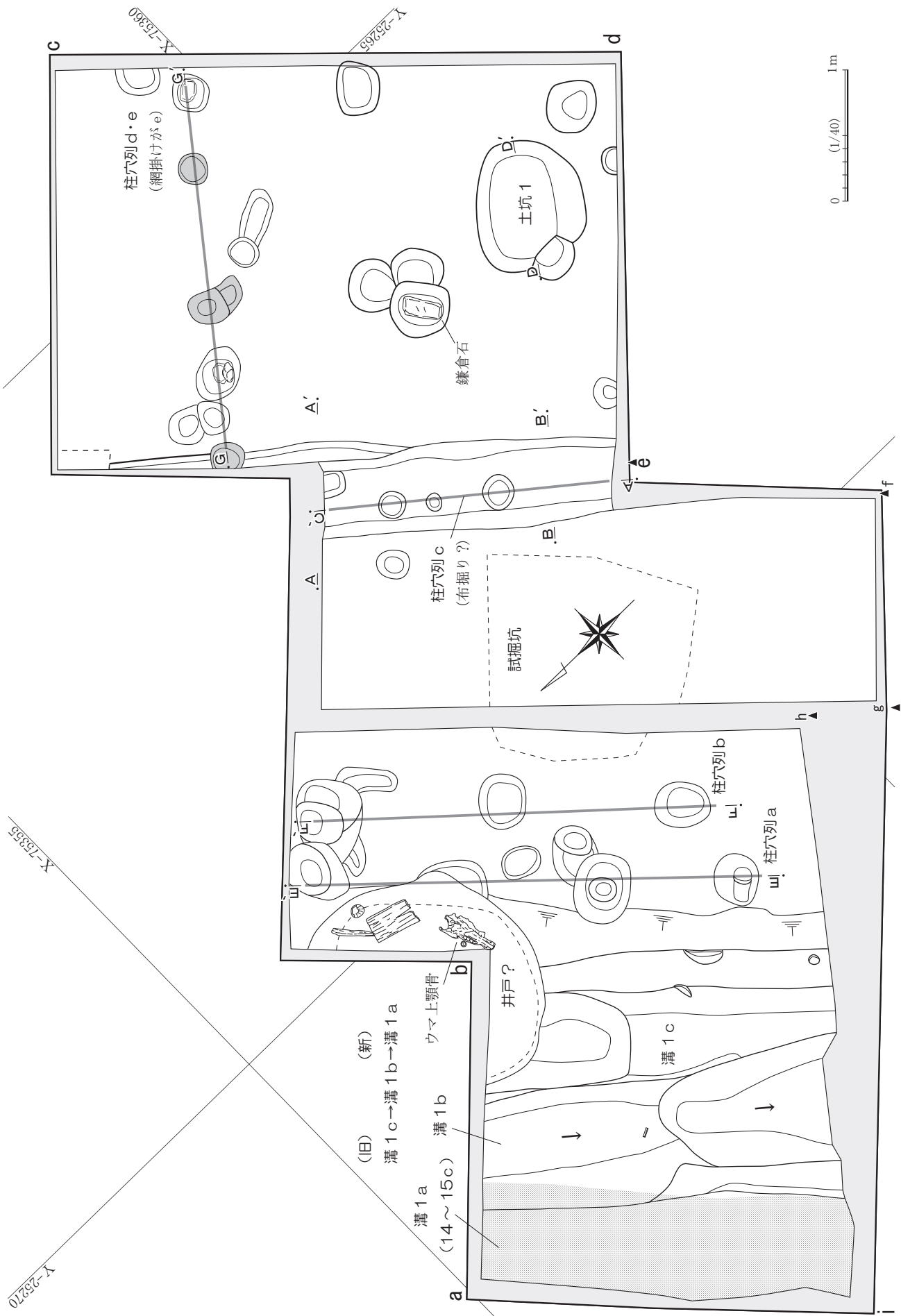
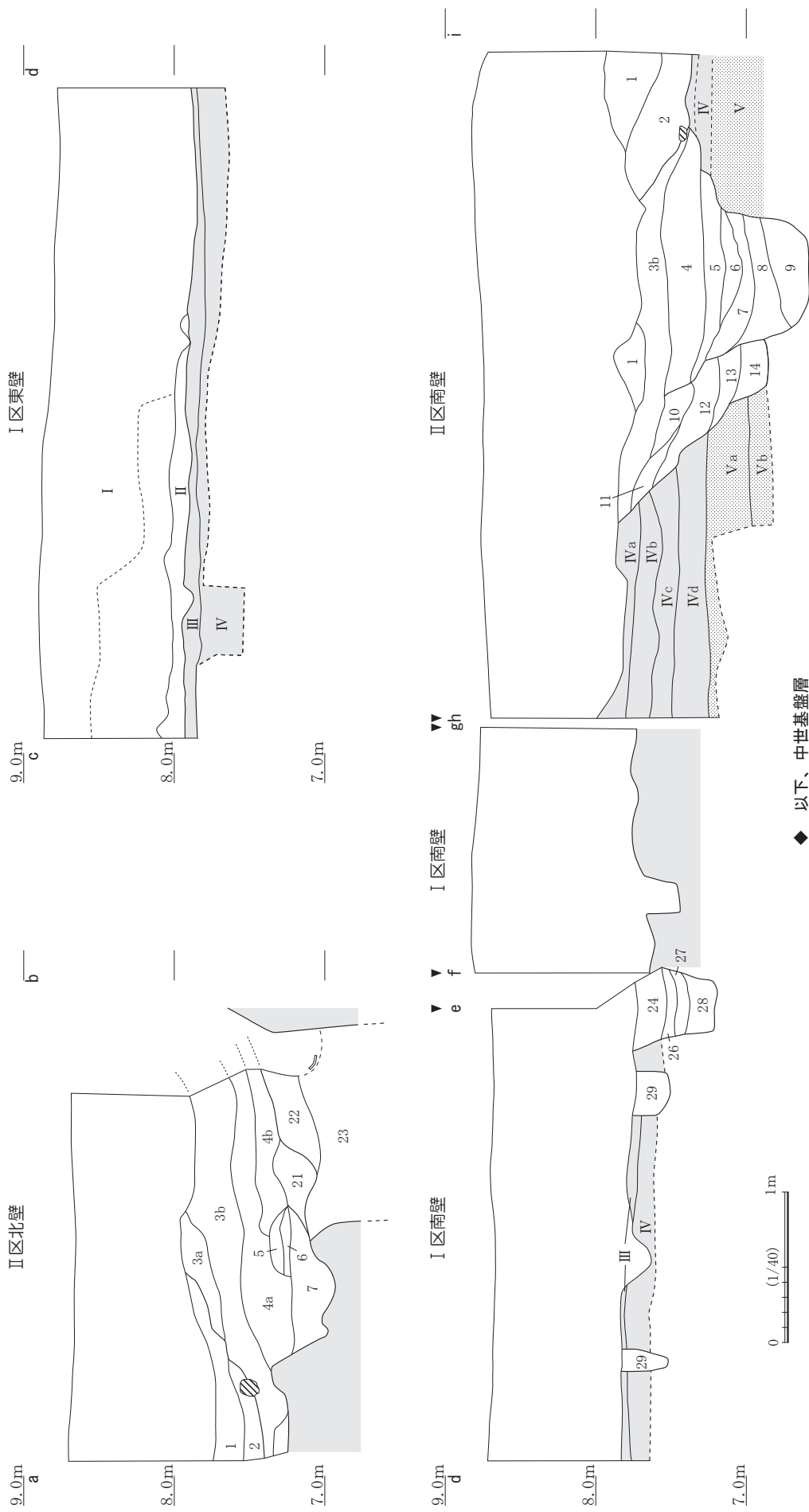


図4 検出遺構平面図②



◆ 以下、中世基盤層

- I. 褐色土 粘質土。表土・攪乱層。コンクリートブロックなどを含む。
- II. 黒褐色土 粘質土。白色微粒を少量含む。
- III. 淡褐色土 泥岩粒や炭化物粒を少量含む。中世遺物包含層。
上面を中世の遺構面として捉えた。
- IVa. 灰黒色土 粒径 1mm 以下の白色粒を微量含む。粘性、締まり強い。
- IVb. 黒色土 灰黄色土が斑文状に混入する。粘性、締まり強い。
- IVc. 灰黒色土 粘性、締まり強い。
- IVd. 黒色土 粒径 1mm 以下の白色粒子を微量含む。締まり、粘性強い。
- Va. 暗黄灰色 / 暗青灰色砂 上半部が酸化により黄色に変色。粗砂粒、粒径 5 ~ 10mm の泥岩粒を微量含む。
- Vb. 青灰色砂 粗砂粒に粒径 10 ~ 30mm の泥岩粒をやや多く含む。締まり弱い。

図5 調査区壁断面図

調査区壁断面図 土層説明 (図5に対応)

【溝1a】

1. 暗灰褐色土 砂質土。泥岩粒多い。締まりややあり。
2. 暗灰褐色土 砂質土。1層より泥岩粒減少する。締まりあり。

【溝1b】

- 3a. 暗黄褐色土 泥岩粒多い整地層。締まり強い。
- 3b. 暗黄褐色土 3a層より泥岩粒多く締まり強い。
- 4a. 暗褐色土 砂質で土丹粒多い。炭粒少量。
5. 暗黄褐色土 細粒化した泥岩流からなる。
6. 黒褐色土 砂質土。部分的に泥岩ブロックと混貝砂の集積あり。
7. 黒褐色土 黒色砂質土と貝砂の混交層。縞状堆積。
8. 灰黒色土 粘性あり。板片が少量混入する。「マグソ」層。
9. 灰黒色砂 粗粒の混貝砂を全体に多く含む。

【溝1c】

10. 暗褐色土 4層と同質だが泥岩の量と締まりの強さに欠ける。
11. 暗灰褐色土 泥岩粒少量。締まり、粘性ともに強い。

12. 暗灰褐色土 11層より泥岩粒減少し、粘性・締まりともに強さ増す。

13. 灰黒色土 14層に微砂粒を交える。締まり弱く粘性ややあり。

14. 黒色土 粘性あり、ボソボソ。腐植土。

21. 黄褐色砂 粗粒の混貝砂が主体。締まり弱い。

【井戸1】

22. 灰黒色土 砂質土。泥岩粒少量。粘性あり。締まり弱い。

23. 灰黒色土 泥岩ブロック少量。粘性強く、締まり弱い。

【溝2 (柱穴列c・図6のA-A'にも対応)】

24. 黒褐色土 粘質土。泥岩微粒、白色微粒を少量含む。締まりあり。

25. 灰色土 粘質土。砂を含み軟質。

26. 灰褐色土 砂質土。

27. 灰色土 粘質土。砂を少量含む。

28. 褐色土 粘質土。

灰黒色土で、層中からは板片や丸木杭、ウマの上顎骨が出土している。土器類の出土は皆無であった。

土坑1は、I区の南東角付近で検出された。隅丸長方形の平面プランで、断面は逆台形を呈していた。長径100cm、短径80cmで、確認面からは30cmほどの深さがあった。覆土は4層に細分され、砂質土と粘質土がレンズ状に堆積していた。

柱穴列a～e：布掘りの可能性を持つ溝2 (柱穴列c)を含め、5列の柱穴列を復元しえた。概ね溝1の走方向と平行または直交する軸線を持ち、板塀など、区画施設を構成した遺構と考えられる。

柱穴列aは溝1cの東肩を切って構築され、溝1bと同時期に機能していた可能性が考えられる。礎版や明確な柱痕は捉えられなかったが、底面に柱の据え穴と見られる小穴を確認している。各柱穴の平面規模は長径40～50cmで、確認面からの深さは30cm前後であった。柱間の距離は100～110cmである。覆土は暗褐色土で、直径1～2cmの泥岩粒を多く含んでいた。主軸線は、N43° E前後を指す。

柱穴列bは、列aのすぐ東側で検出された。一部、列aの柱穴に切られていることを確認している。遺構間の新旧関係および検出位置から、溝1cと同時期に機能した可能性も考えられる。やはり明確な柱痕は確認できず、底面の小穴も見て取れなかった。柱穴の平面規模は長径40～50cmで、確認面からの深さは10～35cmであった。柱間距離は、140～150cmを測る。覆土は暗褐色土で、少量の泥岩粒を含んでいた。主軸方位は、N42° Eを指す。

柱穴列cについては、前記した溝2の項を参照されたい。

柱穴列d・eは、I区の北部で検出された。ともに同一の軸線上にあり、溝1の走方向とは直交方向に展開する。ピット間の距離や底面の泥岩塊の存在により2段階の柱穴列に分けたが、検出範囲が狭いこともあり、本報告での復元は可能性の提示に留めたい。

柱穴列dは底面に泥岩塊が据えられたピット2基をもって復元した。両穴間の距離は215cmで、他の柱穴列に比べ非常に大きい間隔となっている。柱穴の平面規模は長径30～40cmで、確認面から30～40cmの深さを計測した。両穴とも、底面には厚さ10cm以下の扁平な泥岩塊が据えられていた。泥岩の

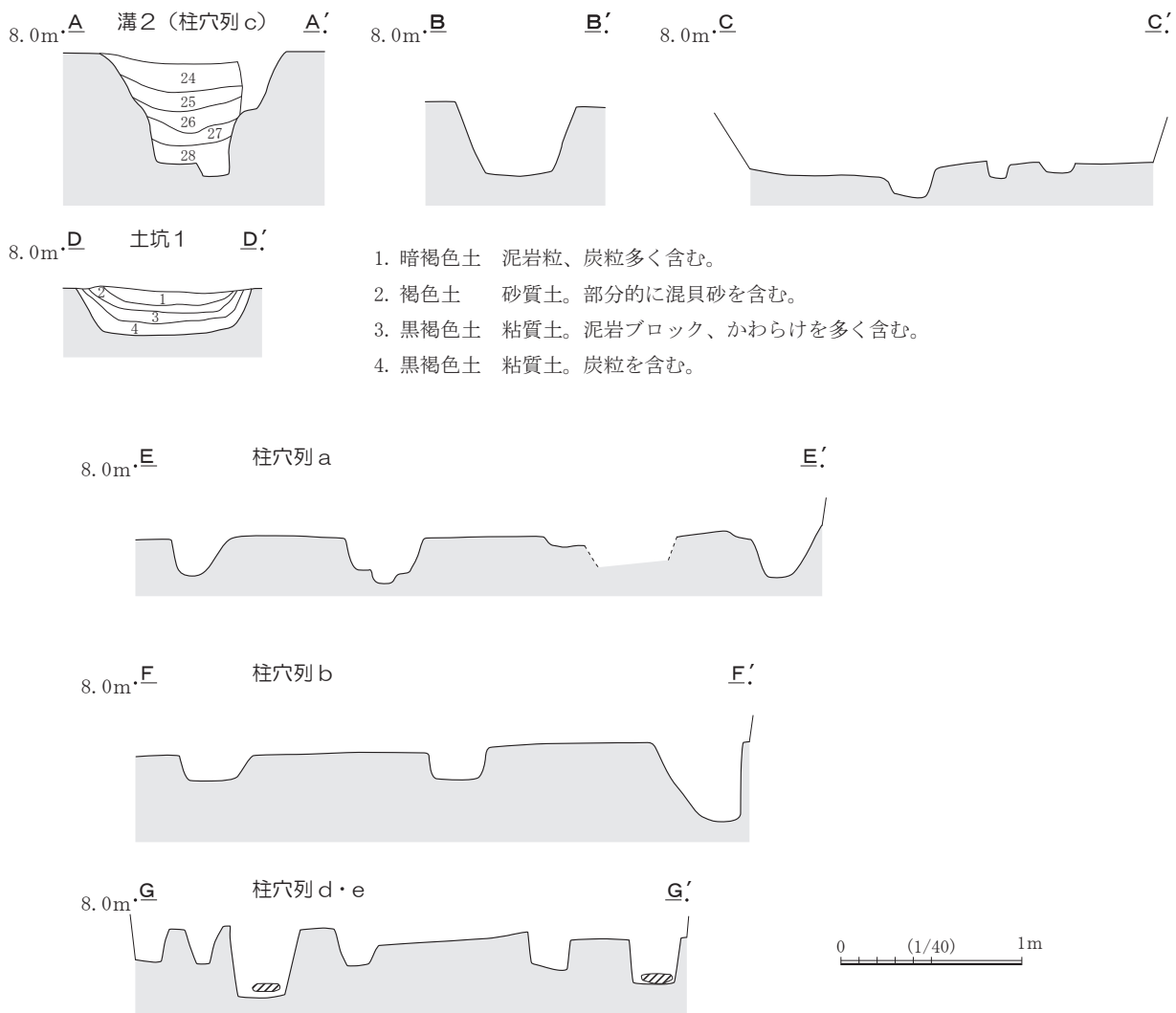


図6 遺構断面図

上端レベルは、7.53～7.60 mであった。中心軸は、N52° Wを指す。

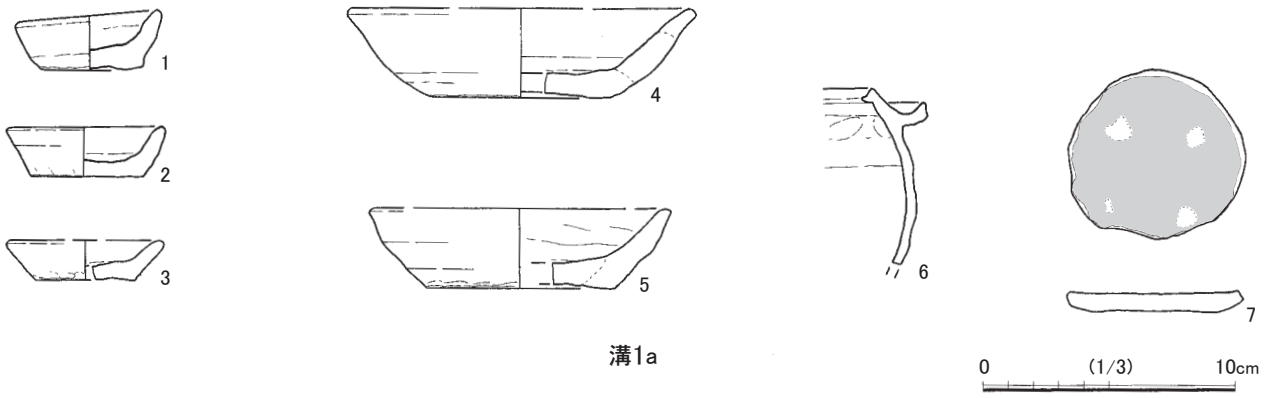
柱穴列eは、直径25cm～30cmの小穴が110～120cm間隔で並ぶ列として復元した。検出された東端のピットが溝2の東肩を切っている。各柱穴の深さは、確認面から15～20cmとごく浅いものであった。いずれのピットでも、柱痕は確認できなかった。

第2節 出土遺物

図7には溝1aの出土遺物を掲げた。1～5はロクロかわらけ。小(1～3)、大(4・5)ともに器壁が厚く体部から口縁部にかけて外反する傾向を示す。4・5は体部下半がやや丸みを帯びており、総体としては15世紀中葉～後半頃の形態的特徴を備えている。6は土器の罏釜。胎土は精良・緻密で、器壁は薄く作られる。7は古瀬戸の碗または皿の底部で、二次利用のため円形に打ち欠かれている。内面にのみ灰釉が施され、焼成時のトチ痕が4ヶ所に残る。釉薬・トチ痕とも摩擦によって平滑になっている。研磨具として再利用されたものであろう。外底面には回転糸切り痕が残り、擦痕は見られなかった。

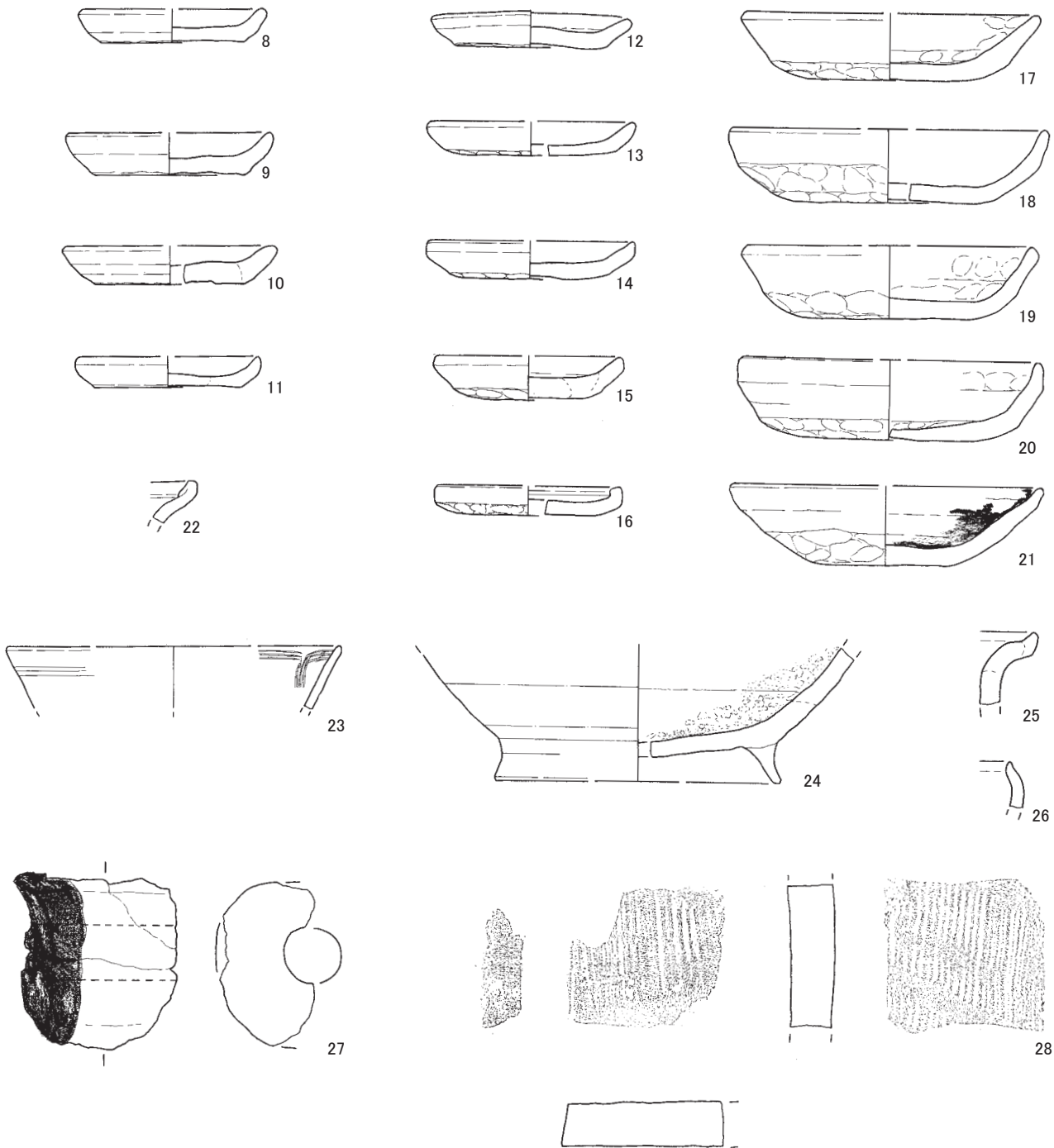
かわらけは出土点数の76%をロクロ成形の資料が占めており、これらの器形的特徴を見れば、24%を占める手づくねかわらけも、前代からの混入品と判断できる(表1)。

図8には、溝1bの覆土上層より出土した遺物を掲げた。かわらけはロクロ成形の資料(8～11)と手



溝1a

図7 出土遺物①



溝1b上層

図8 出土遺物②

づくね成形のもの（小12～16、大17～21）に分かれるが、溝1b全体の出土点数（表1）を見れば、手づくねが88%を占め、この段階においての主体であったことが分かる。手づくねは大・小とも身深で器壁が厚く、この類型の中では新しい特徴を備えている。23の龍泉窯系青磁劃花文碗（大宰府I-4類）や24の尾張産の山茶碗系片口鉢（I類）、25の常滑4～5型式の甕口縁部片、28の永福寺創建期に比される女瓦A類など、全体として13世紀の中葉以前にまとまる遺物様相として捉えられる。

図9に掲げた遺物も溝1bの出土で、かわらけ集中部を含む中層より出土した。かわらけ（29～38、42～51）は上層と同じく手づくね製品が主体を占めるが、器壁がやや薄手となる資料（34～36）や、口縁端部をナデによって面取りするもの（34～37、47～49）など、わずかに古相の名残が見受けられる。40・41の木製品は、ともに用途不明である。

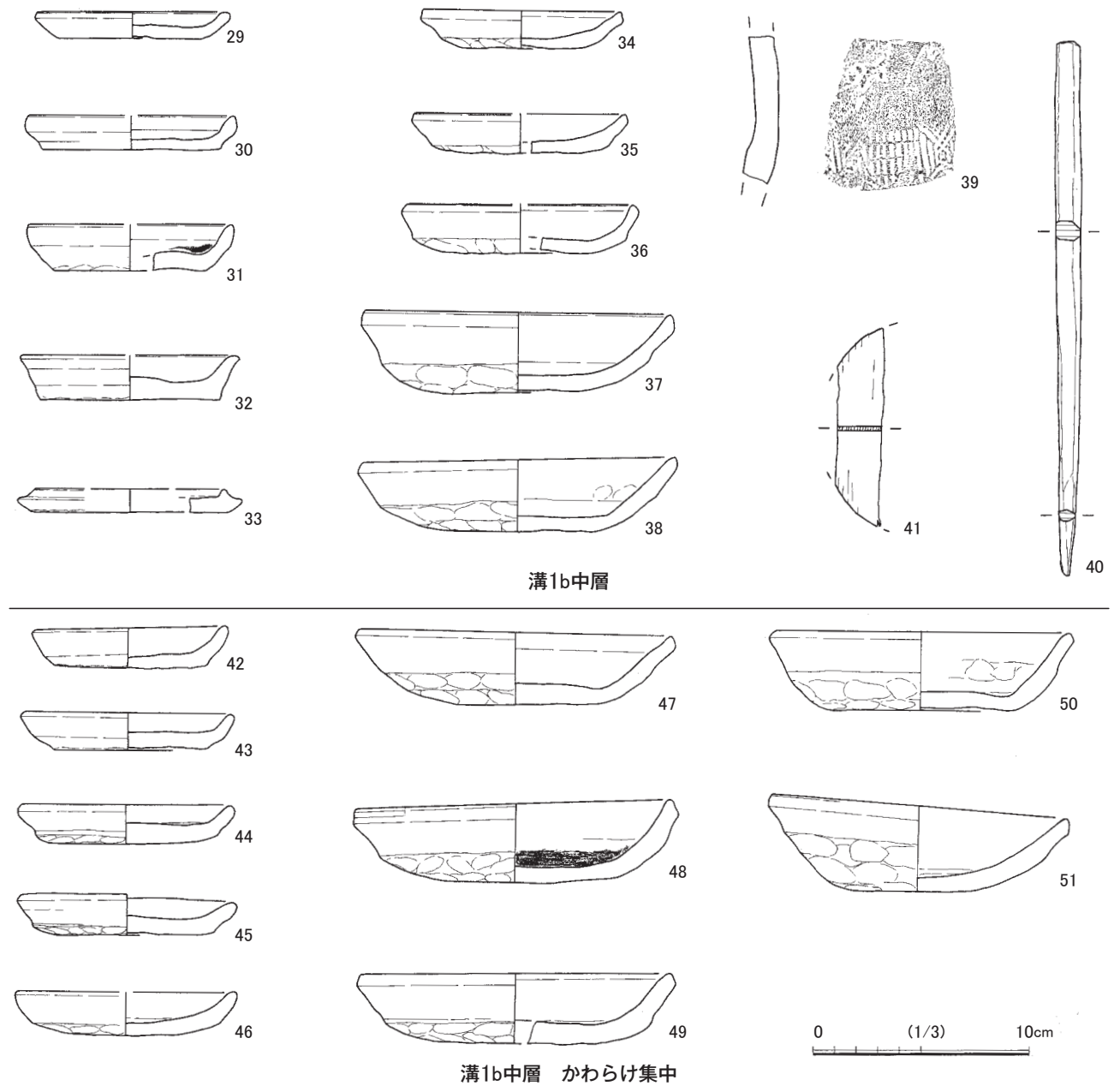


図9 出土遺物③

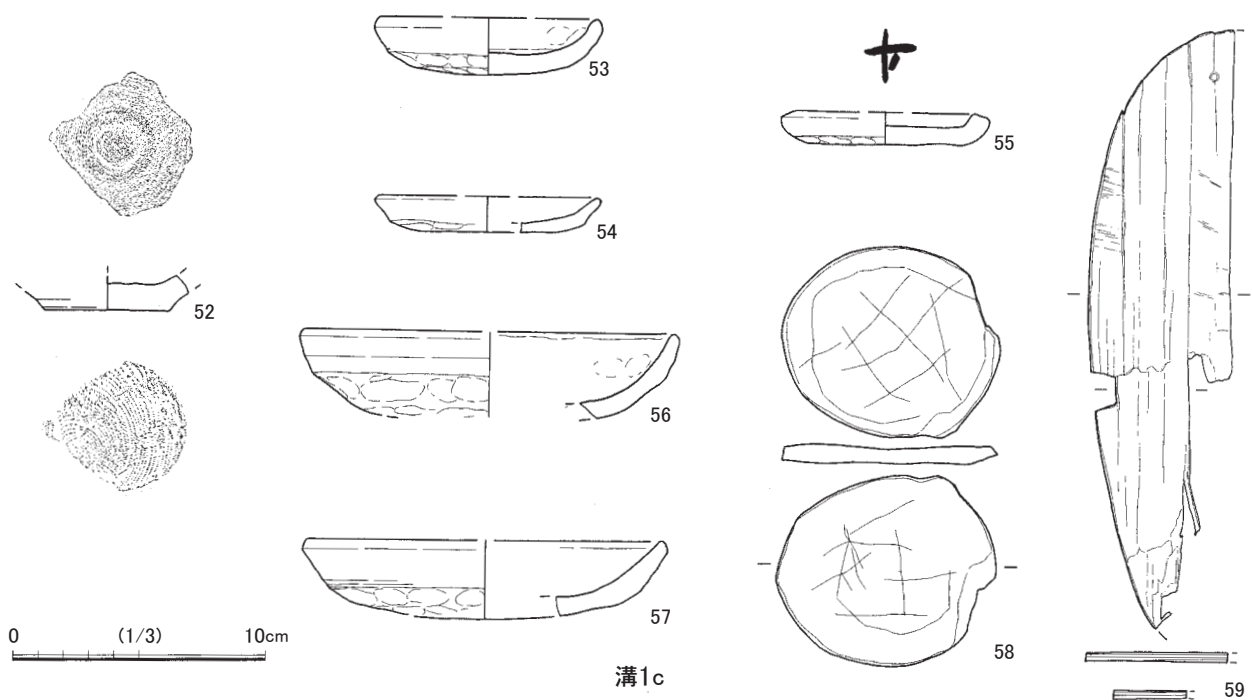


図10 出土遺物④

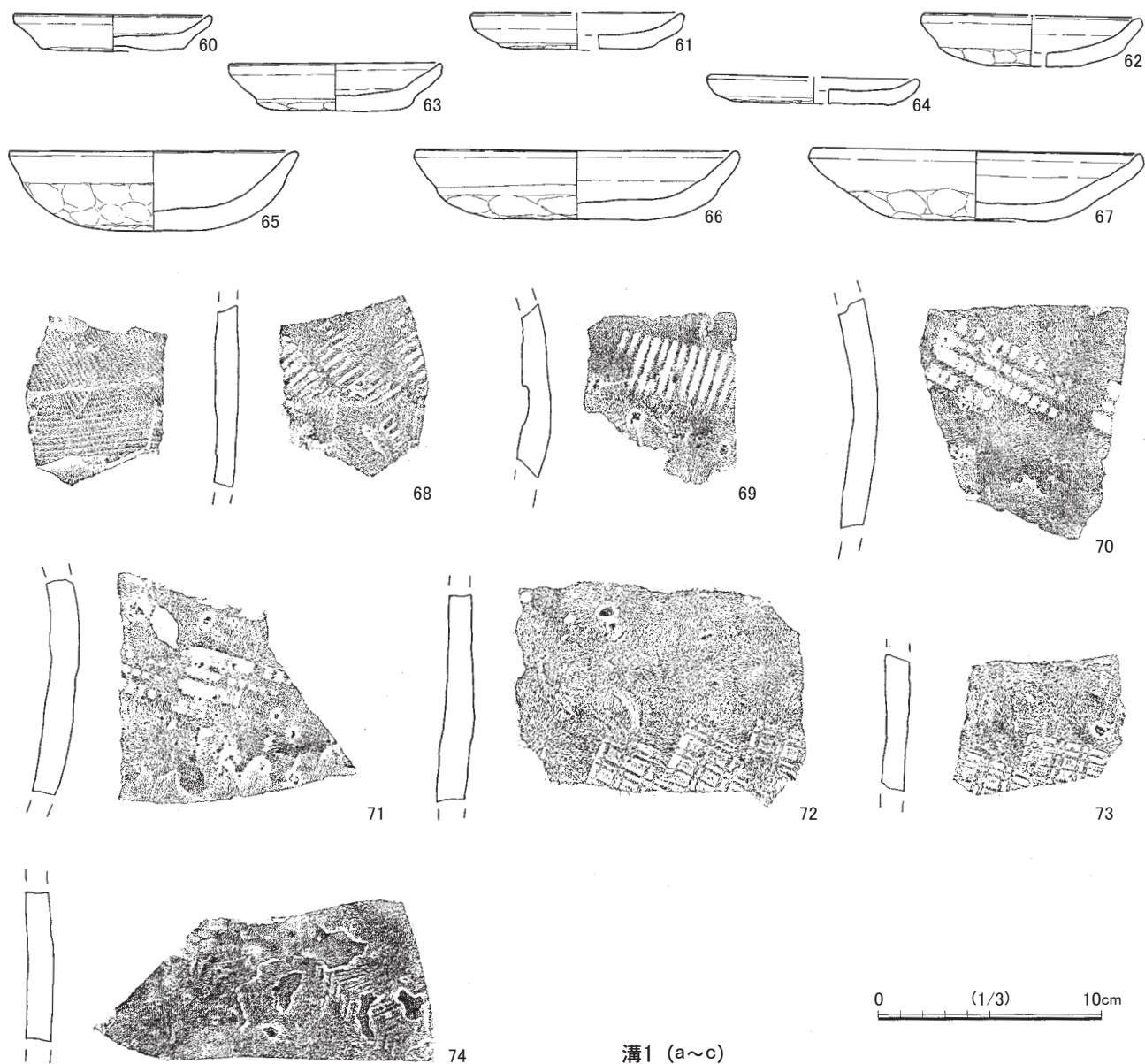
図10には溝1cの出土遺物を掲げた。表1におけるかわらけの出土点数は手づくねが97%を占め、ロクロ成形の資料は1点のみの出土であった。52の底部片がそれで、厚底で外底面の糸切り痕は回転が緩く、内底面には仕上げのナデが施されずロクロ挽き痕が顕著に残る。胎土は細砂粒が多い精良土で、焼成は良く淡灰褐色を呈している。全体として鎌倉時代初期の12世紀末葉に遡る様相を示している。手づくねは溝1bほど遺存の良好な資料が多くないため明確な様相差を見出しにくい。限られた資料からは56・57の大皿が身浅となる場所に古い要素を見て取れるかもしれない。55は内折れかわらけ。図示したほど明瞭ではないが、内底面に判読できない墨痕が認められた。58は手づくね大皿の底部で、内外面に針状具による線刻が施されていた。何を象ったものかは定かでない。59は草履芯の半存品。

図11には、溝1のうちa～cへの帰属を把握できなかった遺物を掲げた。表1では手づくね製品がかわらけのうち81%の点数比率を占めることから、概ね1b以前の出土状況を色濃く映し出していると考えられる。実測・図示できたかわらけ(60～67)は全て手づくねである。68～74は常滑甕の胴部片で、外面に押印のある資料を集めた。

図12-75～81は土坑1の出土遺物。出土したかわらけの約90%がロクロ成形の資料となる。図化できたロクロかわらけ(75～79)は大・小とも器高が低く、口径と底径との差が小さい。また、大皿の器形がさほど内湾傾向を示していないことから見て、13世紀前半～中頃の所産であると考えられる。実測・法量復元できた個体は限られているが、中皿への法量分化が進む以前の資料と考えておきたい。手づくねがごく僅少であることは、時期的傾向というよりも選択の結果による組成の特徴といえよう。81は渥美甕の胴(肩)部片。外面に平行格子状押印とヘラ描きによる「上」の線刻文字が施されている。

図12-82・83は柱穴列aのPit27から出土したかわらけ。Pit27は、溝1cを切って構築されている。84は柱穴列bのPit20から出土したかわらけ。85はPit6、86はPit24で出土した手づくねかわらけ小皿。

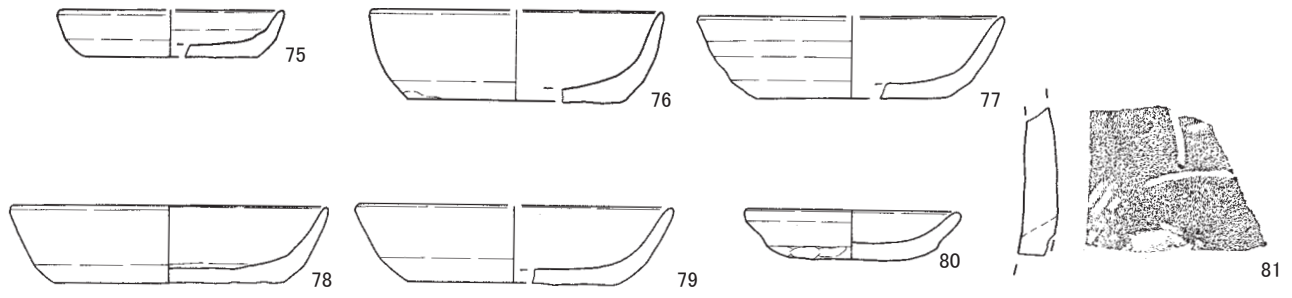
図12-87～95は遺構外の出土遺物。95のみ1面上の精査時に出土した資料で、その他は全て表土および攪乱掘削時に出土した遺物である。87のロクロかわらけ小皿は器壁が厚手で口径に対して身深の形態をとる。15世紀中葉～後半の所産と見られ、溝1a出土かわらけと同例の資料である。93は平瓦



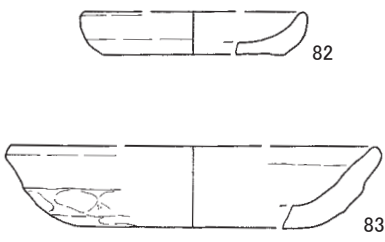
溝1 (a~c)

図11 出土遺物⑤

の小片を転用した研磨具。凹面～破断面が使用され、平滑になっている。凹面には布目痕が僅かに残る。94・95はともに同安窯系の青磁で碗と皿。94の碗は体部外面に縦方向の櫛描き文を、内面にへラと櫛歯を併用した劃花文を施している。大宰府 I - 1b類。95の皿も内底面にへラと櫛歯による劃花文を施している。外面の体部下端～底部に回転へラケズリを施しており、外底面は無釉である。大宰府 I - 1b類。



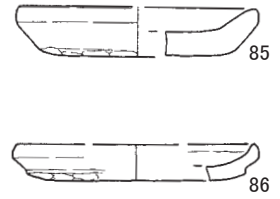
土坑1



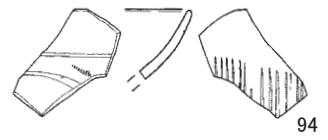
柱穴列a



柱穴列b



pit



遺構外

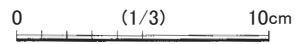
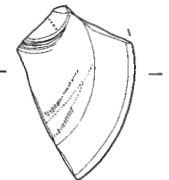


图12 出土遺物⑥

表1 出土遺物計数・計量表

地区	面	遺構	層位	かわらけ															
				ロクロ				手づくね				内折れ		不明		小片		小壺?	
				大		小		大		小									
II	1	溝1a～1c		35	356	22	189	197	2494	48	431					24	72		
II	1	溝1a	最下層	41	521	10	150	12	82	2	10								
II	1	溝1a						2	260										
II	1	溝1b				7	194	81	2096	29	353					28	75		
II	1	溝1b	上層	52	699	32	452	420	5055	72	771	3	39			42	120		
II	1	溝1b	中層	8	90	12	140	163	2282	39	337	2	19						
II	1	溝1c						24	341	7	79	1	6						
II	1	溝1c	13・14層	1	35			1	6	1	20	1	9			1	14		
I	1	溝2						6	29	4	57								
II	1	井戸1		1	35			1	6										
I	1	土坑1		81	864	23	156	9	62	3	11					63	128		
II	1	柱列a-P21						2	17	1	4								
II	1	柱列a-P27		1	10			8	98										
II	1	柱列a-P28								3	16								
II	1	柱列b-P20		4	93	1	4	8	85	3	9								
II	1	柱列b-P23						1	16										
II	1	柱列b-P26						1	9							2	6		
II	1	柱列d-P7						1	4	1	4								
II	1	柱列e-P5														3	6		
I	1	柱列e-P10						1	11							3	5		
II	1	P8		1	20			9	37							10	24		
I	1	P14		51	261	8	60	59	427	16	80					41	104		
II	1	P18						14	127	1	42								
II	1	P24						1	7	1	7								
I	1	P29						2	16										
I	～1	遺構外	表土・攪乱	7	100	4	59	7	68	2	29					1	11		
I	1	遺構外		26	236	13	105	63	606	9	64					9	71		
II	～1	遺構外	表土・攪乱	57	850	20	201	138	1335	27	266					51	194	1	26
I・II	～1	遺構外	攪乱	4	86	1	12	4	46										

地区	面	遺構	層位	土器				白磁			青磁(同安系)		青磁(龍泉系)						
				鍔釜	南伊勢系鍋	口元皿	皿	瓶	櫛描文碗	割花文碗	蓮弁文碗	碗・皿							
II	1	溝1a～1c								1	31			1	3			1	3
II	1	溝1a	最下層	1	42														
II	1	溝1a																	
II	1	溝1b																	
II	1	溝1b	上層			1	10			2	27			4	52			4	17
II	1	溝1b	中層					1	2					2	13				
II	1	溝1c																	
II	1	溝1c	13・14層																
I	1	溝2																	
II	1	井戸1																	
I	1	土坑1																	
II	1	柱列a-P21																	
II	1	柱列a-P27																	
II	1	柱列a-P28																	
II	1	柱列b-P20																	
II	1	柱列b-P23																	
II	1	柱列b-P26																	
II	1	柱列d-P7										1	2						
II	1	柱列e-P5																	
I	1	柱列e-P10																	
II	1	P8																	
I	1	P14														1	6		
II	1	P18																	
II	1	P24																	
I	1	P29																	
I	～1	遺構外	表土・攪乱																
I	1	遺構外										1	24						
II	～1	遺構外	表土・攪乱									1	4			1	6	2	6
I・II	～1	遺構外	攪乱																

地区	面	遺構	層位	瀬戸						渥美・湖西							
				卸皿		折縁鉢		入子		瓶子		甗		短頸壺			
II	1	溝1a ~ 1c								1	24						
II	1	溝1a		1	35			1	51								
II	1	溝1a	最下層														
II	1	溝1b										1	41				
II	1	溝1b	上層			1	10			1	8	1	32	2	82	2	11
II	1	溝1b	中層									2	49				
II	1	溝1c															
II	1	溝1c	13・14層														
I	1	溝2															
II	1	井戸1															
I	1	土坑1										1	83				
II	1	柱列a-P21															
II	1	柱列a-P27															
II	1	柱列a-P28															
II	1	柱列b-P20															
II	1	柱列b-P23															
II	1	柱列b-P26															
II	1	柱列d-P7															
II	1	柱列e-P5															
I	1	柱列e-P10															
II	1	P8															
I	1	P14															
II	1	P18															
II	1	P24															
I	1	P29															
I	~1	遺構外	表土・攪乱														
I	1	遺構外										1	19				
II	~1	遺構外	表土・攪乱						1	9		1	35				
I・II	~1	遺構外	攪乱														

地区	面	遺構	層位	尾張・常滑				瓦器		瓦質土器		瓦				
				甗		片口鉢		碗	火鉢	平瓦		丸瓦				
						I類	II類			永・女A類	不明	永・男A類	永・男D類			
II	1	溝1a ~ 1c		42	4241	3	127									
II	1	溝1a								1	36			1	4	
II	1	溝1a	最下層	1	35											
II	1	溝1b		1	411											
II	1	溝1b	上層	19	1004	6	392		2	4		2	250		1	61
II	1	溝1b	中層	1	81											
II	1	溝1c		2	143											
II	1	溝1c	13・14層													
I	1	溝2														
II	1	井戸1														
I	1	土坑1		1	132											
II	1	柱列a-P21														
II	1	柱列a-P27														
II	1	柱列a-P28		3	214											
II	1	柱列b-P20				1	23	1	23							
II	1	柱列b-P23														
II	1	柱列b-P26		7	293											
II	1	柱列d-P7		1	20											
II	1	柱列e-P5														
I	1	柱列e-P10														
II	1	P8												1	11	
I	1	P14		6	246	3	94									
II	1	P18														
II	1	P24														
I	1	P29														
I	~1	遺構外	表土・攪乱	3	166											
I	1	遺構外		6	338	1	35	1	70							
II	~1	遺構外	表土・攪乱	21	989	5	138	1	46	1	2	1	1	2	72	
I・II	~1	遺構外	攪乱													

地区	面	遺構	層位	鉄製品・鉄滓				石製品		木製品・木材					
				刀子		釘		不明	鉄滓	火打石	砥石	草履 芯	箸	不明	板片
II	1	溝1a～1c		1	29	1	12		1	23					13
II	1	溝1a													
II	1	溝1a	最下層												
II	1	溝1b													
II	1	溝1b	上層					10	166	7	273				16
II	1	溝1b	中層										6	2	
II	1	溝1c													14
II	1	溝1c	13・14層						1	46			1		20
I	1	溝2													
II	1	井戸1												1	2
I	1	土坑1				1	3								
II	1	柱列a-P21													
II	1	柱列a-P27							1	230					
II	1	柱列a-P28													
II	1	柱列b-P20													
II	1	柱列b-P23													
II	1	柱列b-P26													
II	1	柱列d-P7													
II	1	柱列e-P5													
I	1	柱列e-P10				1	8								
II	1	P8									1	8			
I	1	P14				5	20		5	18					
II	1	P18													
II	1	P24													
I	1	P29													
I	～1	遺構外	表土・攪乱												
I	1	遺構外									1	7			
II	～1	遺構外	表土・攪乱			1	10								
I・II	～1	遺構外	攪乱												

地区	面	遺構	層位	土製品・用材			肥前系磁器		瀬戸・美濃系磁器		不明陶器			
				轆羽口	炉壁	炭化材(土壁?)	染付碗	染付碗	不明	播鉢				
II	1	溝1a～1c		3	118		1	32						
II	1	溝1a												
II	1	溝1a	最下層											
II	1	溝1b												
II	1	溝1b	上層	7	365									
II	1	溝1b	中層	1	73									
II	1	溝1c												
II	1	溝1c	13・14層											
I	1	溝2												
II	1	井戸1												
I	1	土坑1												
II	1	柱列a-P21												
II	1	柱列a-P27												
II	1	柱列a-P28				1	64							
II	1	柱列b-P20												
II	1	柱列b-P23												
II	1	柱列b-P26												
II	1	柱列d-P7												
II	1	柱列e-P5												
I	1	柱列e-P10												
II	1	P8												
I	1	P14												
II	1	P18												
II	1	P24												
I	1	P29												
I	～1	遺構外	表土・攪乱											
I	1	遺構外							1	5				
II	～1	遺構外	表土・攪乱					1	3		1	29	2	14
I・II	～1	遺構外	攪乱											

地区	面	遺構	層位	土師器		須恵器	獣骨		貝						種子		
				相模型甕	不明	坏	不明	ウシ・ウマ	不明	アカニシ	サザエ	アワビ	ハマグリ	チョウセンハマグリ		ダンベイキサゴ	桃核
II	1	溝1a～1c			2	19		3	18			1	1	5		1	8
II	1	溝1a						1	1								
II	1	溝1a	最下層														
II	1	溝1b															
II	1	溝1b	上層		1	21		4			5			1			9
II	1	溝1b	中層					1		2	6	1	6	33	1	17	1
II	1	溝1c															
II	1	溝1c	13・14層							1	1	1	1	3			
I	1	溝2															
II	1	井戸1							1								
I	1	土坑1						1									
II	1	柱列 a-P21															
II	1	柱列 a-P27															
II	1	柱列 a-P28															
II	1	柱列 b-P20															
II	1	柱列 b-P23															
II	1	柱列 b-P26															
II	1	柱列 d-P7															
II	1	柱列 e-P5															
I	1	柱列 e-P10															
II	1	P8															
I	1	P14					1	7									
II	1	P18															
II	1	P24															
I	1	P29															
I	～1	遺構外	表土・攪乱														
I	1	遺構外															
II	～1	遺構外	表土・攪乱	1	11												
I・II	～1	遺構外	攪乱														

凡例

かわらけ			
ロクロ			
大		小	
35	356	22	189
41	521	10	150
		7	194
52	699	32	452
8	90	12	140
1	35		

破片点数 重量

(木製品・自然遺物は点数のみ)

表2 出土遺物観察表

番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
1面 溝1a (図7)						
1	土器	かわらけ	5.5	4.1	2.0	完形 32g ロクロ小 胎土：白色針状物質 色調：橙褐色
2	土器	かわらけ	6.0	4.4	1.9	2/3 ロクロ小 胎土：白色針状物質 色調：橙褐色
3	土器	かわらけ	(5.9)	(4.0)	1.6	1/4 ロクロ小 胎土：白色針状物質 色調：橙褐色
4	土器	かわらけ	(13.5)	(7.2)	3.2	1/6 ロクロ大 胎土：白色針状物質 色調：橙褐色
5	土器	かわらけ	(11.5)	(7.5)	3.2	1/8 ロクロ小 胎土：白色針状物質 色調：橙褐色
6	土器	鏝釜	—	—	[6.9]	口小片 胎土：精良 色調：淡黄褐色
7	陶器	瀬戸 碗 or 皿	—	5.0	0.9	底部完存 内面の灰釉が摩滅 4ヶ所にトチ痕あり
1面 溝1b上層 (図8)						
8	土器	かわらけ	(8.6)	6.8	1.6	1/2弱 ロクロ小 胎土：白色針状物質 色調：淡黄褐色
9	土器	かわらけ	(9.6)	7.1	2.1	1/3 ロクロ小 胎土：白色針状物質 色調：明褐色
10	土器	かわらけ	(9.9)	(7.2)	1.8	1/3 ロクロ小 胎土：やや粉質 色調：淡黄褐色
11	土器	かわらけ	(8.5)	(7.0)	1.5	1/4 ロクロ小 胎土：白色針状物質 色調：明褐色
12	土器	かわらけ	9.3	7.3	1.8	2/3 手づくね小 胎土：白色針状物質 色調：淡黄褐色
13	土器	かわらけ	(9.7)	(8.2)	1.5	1/3 手づくね小 胎土：雲母・白色針状物質 色調：淡黄褐色
14	土器	かわらけ	(9.7)	(7.7)	1.8	1/4 手づくね小 胎土：雲母・白色針状物質 色調：淡黄褐色
15	土器	かわらけ	(8.7)	(7.1)	2.1	1/4 手づくね小 胎土：雲母・白色針状物質 色調：淡黄褐色
16	土器	かわらけ	(8.8)	—	1.4	1/4 手づくね小(内折れ) 胎土：雲母・白色針状物質 色調：淡黄褐色
17	土器	かわらけ	(13.8)	—	3.3	1/2 手づくね大 胎土：白色針状物質 色調：淡黄褐色
18	土器	かわらけ	(14.9)	—	3.5	1/4 手づくね大 胎土：白色針状物質 色調：淡黄褐色
19	土器	かわらけ	(13.6)	—	3.5	1/4 手づくね大 胎土：白色針状物質 色調：淡黄褐色
20	土器	かわらけ	(14.2)	—	3.9	1/4 手づくね大 胎土：やや粉質 色調：淡黄褐色
21	土器	かわらけ	(14.7)	—	3.8	1/3 手づくね大 胎土：微砂粒少量 白色針状物質 色調：橙褐色/黒色
22	土器	鍋	—	—	[1.9]	口小片 南伊勢系 胎土：白色小礫 色調：明褐褐色
23	青磁	碗	(15.7)	—	[3.0]	口1/8 龍泉窯系・I-4類 胎土：緻密 色調：明緑灰色
24	陶器	尾張 片口鉢	—	(13.6)	[6.6]	底1/4 山茶碗系 (I類) 胎土：長石多量 色調：淡灰色
25	陶器	常滑 甕	—	—	[3.4]	口小片 4型式 胎土：長石多量 色調：暗灰色
26	陶器	短頸壺	—	—	—	口小片 渥美・湖西産か 胎土：微細砂多量 色調：淡灰色
27	土製品	鞆羽口	長さ [7.2]	直径 (7.8)	孔径 (2.7)	先端部1/2弱 胎土：粗雑 色調：橙褐色/黒色 先端部ガラス質付着
28	瓦	平瓦	長さ [7.7]	幅 [7.8]	厚さ 2.2	小片 永福寺女瓦A類 胎土：精良 色調：灰黒～淡灰色
1面 溝1b中層 (図9)						
29	土器	かわらけ	8.7	6.5	1.2	完形 48g ロクロ小 胎土：雲母・白色針状物質 色調：明褐色
30	土器	かわらけ	(9.6)	(8.2)	1.6	1/4 ロクロ小 胎土：雲母・白色針状物質 色調：明褐色
31	土器	かわらけ	(9.4)	(7.0)	2.1	1/4 ロクロ小 胎土：雲母・白色針状物質 色調：褐色
32	土器	かわらけ	(9.9)	(8.4)	2.1	1/4 ロクロ小 胎土：雲母・白色針状物質 色調：淡黄褐色

33	土器	かわらけ	(8.1)	—	1.6	1/6 手づくね小(内折れ) 胎土:雲母・白色針状物質 色調:褐色
34	土器	かわらけ	(9.1)	—	1.7	1/4 手づくね小 胎土:雲母・白色針状物質 色調:褐色
35	土器	かわらけ	(9.6)	—	1.8	1/4 手づくね小 胎土:雲母・白色針状物質 色調:淡黄褐色
36	土器	かわらけ	(10.4)	—	2.3	1/4 手づくね小 胎土:雲母・白色針状物質 色調:淡黄褐色
37	土器	かわらけ	14.2	—	3.5	略完形 206g 手づくね大 胎土:雲母・白色針状物質 色調:淡黄褐色
38	土器	かわらけ	14.3	—	3.6	完形 227g 手づくね大 胎土:精良、白色針状物質 色調:淡黄褐色/黒褐色
39	陶器	常滑甕	—	—	—	胴小片 外面に格子目タタキ
40	木製品	用途不明	長さ 24.6	幅 1.3	厚さ 1.0	棒状 板目材を使用 側縁部を刀子により面取り、一端を尖らせる
41	木製品	用途不明	直径 (10.0)	—	厚さ 0.2	円板状 柾目材を使用
1面 溝1b中層 かわらけ集中(図9)						
42	土器	かわらけ	8.7	7.1	2.0	略完形 [59]g ロクロ小 胎土:精良、白色針状物質 色調:明橙褐色
43	土器	かわらけ	9.5	7.1	1.8	完形 77g ロクロ小 胎土:精良、白色針状物質 色調:完形
44	土器	かわらけ	9.6	8.4	1.8	完形 109g 手づくね小 胎土:白色針状物質 色調:淡黄褐色
45	土器	かわらけ	9.8	8.4	1.9	2/3 手づくね小 胎土:白色針状物質 色調:淡黄褐色
46	土器	かわらけ	(10.0)	—	2.0	1/4 手づくね小 胎土:精良、白色針状物質 色調:明橙褐色
47	土器	かわらけ	14.4	—	3.6	完形 248g 手づくね大 胎土:精良、白色針状物質 色調:明橙褐色
48	土器	かわらけ	14.4	—	4.0	完形 247g 手づくね大 胎土:精良、白色針状物質 色調:明橙褐色
49	土器	かわらけ	14.3	—	3.5	3/4 手づくね大 胎土:細砂粒多い 白色針状物質 色調:明黄褐色
50	土器	かわらけ	13.5	—	3.7	完形 197g 手づくね大 胎土:細砂粒多い 白色針状物質 色調:明黄褐色
51	土器	かわらけ	13.7	—	4.4	完形 197g 手づくね大 胎土:細砂粒多い 白色針状物質 色調:橙褐色
1面 溝1c(図10)						
52	土器	かわらけ	—	5.0	[1.4]	底2/3 ロクロ大 胎土:雲母・白色針状物質 色調:淡灰褐色 内底面未調整(ロクロ目を残す)
53	土器	かわらけ	(8.7)	—	2.2	1/3 手づくね小 胎土:白色針状物質 色調:橙褐色
54	土器	かわらけ	(8.6)	—	1.5	1/6 手づくね小 胎土:精良 色調:橙褐色
55	土器	かわらけ	(7.1)	—	1.3	1/3 手づくね小(内折れ) 胎土:白色針状物質 色調:橙褐色
56	土器	かわらけ	(14.6)	—	[3.3]	1/4 手づくね大 胎土:白色針状物質 色調:明橙褐色
57	土器	かわらけ	(14.0)	—	(3.1)	1/4 手づくね大 胎土:白色針状物質 色調:橙褐色
58	土器	かわらけ	長径 8.7	短径 7.5	厚さ 0.8	(完存) 手づくね大の底部 胎土:白色針状物質 色調:淡黄褐色 内外面に線刻画(焼成後)
59	木製品	草履芯	長さ [23.0]	幅 [4.0]	厚さ [0.4]	1/3 板目材を使用(樹種未同定) 13・14層
1面 溝1(a~c)(図11)						
60	土器	かわらけ	(8.8)	—	1.4	1/4 手づくね小 胎土:雲母・白色針状物質 色調:淡黄褐色
61	土器	かわらけ	(9.4)	—	1.6	1/4 手づくね小 胎土:雲母・白色針状物質 色調:淡灰褐色
62	土器	かわらけ	(9.8)	—	2.2	1/3 手づくね小 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
63	土器	かわらけ	9.4	—	2.0	1/2 手づくね小 胎土:雲母・白色針状物質 色調:淡黄褐色
64	土器	かわらけ	(9.4)	—	1.2	1/4 手づくね小 胎土:雲母・白色針状物質 色調:淡黄褐色

65	土器	かわらけ	12.8	—	3.6	2/3 手づくね大 胎土：雲母・白色針状物質 色調：褐色
66	土器	かわらけ	(14.4)	—	3.1	1/3 手づくね大 胎土：雲母・白色針状物質 色調：淡黄褐色
67	土器	かわらけ	(14.6)	—	3.1	1/2 弱 手づくね大 胎土：雲母・白色針状物質 色調：淡黄褐色
68	陶器	常滑甗	—	—	—	胴小片 外面に格子目タタキ、内面ハケ状小口によるナデ
69	陶器	常滑甗	—	—	—	胴小片 外面に格子目タタキ
70	陶器	常滑甗	—	—	—	胴小片 外面に格子目タタキ
71	陶器	常滑甗	—	—	—	胴小片 外面に格子目タタキ
72	陶器	常滑甗	—	—	—	胴小片 外面に格子目タタキ
73	陶器	常滑甗	—	—	—	胴小片 外面に格子目(四菱形)タタキ
74	陶器	常滑甗	—	—	—	胴小片 外面に格子目(四菱形)タタキ
1面 土坑1(図12)						
75	土器	かわらけ	(8.8)	(6.9)	1.6	1/2弱 ロクロ小 胎土：雲母・白色針状物質 色調：橙色
76	土器	かわらけ	(11.4)	(8.4)	3.3	1/4 ロクロ大 胎土：雲母・白色針状物質 色調：淡黄褐色
77	土器	かわらけ	(12.0)	(7.6)	3.0	1/4 ロクロ大 胎土：雲母・白色針状物質 色調：橙色
78	土器	かわらけ	(12.4)	(9.0)	3.1	1/3 ロクロ大 胎土：雲母・白色針状物質 色調：淡黄褐色
79	土器	かわらけ	(12.4)	(8.0)	3.1	1/4 ロクロ大 胎土：白色針状物質 色調：橙色
80	土器	かわらけ	(8.8)	—	2.0	1/4 手づくね小 胎土：雲母・白色針状物質 色調：橙色
81	陶器	渥美甗	—	—	—	胴小片 外面にヘラによる線刻「上」と格子目タタキ
1面 柱穴列a(図12)						
82	土器	かわらけ	(8.7)	(7.2)	1.7	1/6 ロクロ小 胎土：白色針状物質 色調：橙褐色 Pit27出土
83	土器	かわらけ	(14.3)	—	3.2	1/8 手づくね大 胎土：白色針状物質 色調：淡黄褐色 Pit27出土
1面 柱穴列b(図12)						
84	土器	かわらけ	(12.4)	(9.9)	2.8	1/3 ロクロ大 胎土：細砂粒多量 色調：淡黄褐色 Pit20出土
1面 ビット						
85	土器	かわらけ	(9.4)	—	1.8	1/3 手づくね小 胎土：雲母 色調：淡黄褐色 Pit6出土
86	土器	かわらけ	(9.4)	—	1.5	1/8 手づくね小 胎土：白色針状物質 色調：橙褐色 Pit24出土
遺構外(図12)						
87	土器	かわらけ	(6.4)	(4.0)	2.0	1/2弱 ロクロ小 胎土：雲母・白色針状物質 色調：明橙色
88	土器	かわらけ	(10.4)	(7.4)	1.6	1/4 ロクロ小 胎土：雲母・白色針状物質 色調：淡黄褐色
89	土器	かわらけ	(12.5)	9.2	2.3	1/2弱 ロクロ大 胎土：雲母・白色針状物質 色調：橙色
90	土器	かわらけ	(11.7)	(7.6)	2.8	1/3 ロクロ大 胎土：雲母・白色針状物質 色調：褐色
91	土器	かわらけ	(12.7)	(8.8)	2.8	1/5 ロクロ大 胎土：雲母・白色針状物質 色調：褐色
92	土器	かわらけ	(9.6)	—	1.8	1/3 手づくね小 胎土：雲母・白色針状物質 色調：橙色
93	土器	平瓦 (転用)	3.8	3.5	2.6	凹面～破断面に擦痕 色調：灰色
94	青磁	碗	—	—	[2.8]	口小片 同安窯系・I-1b類 胎土：精良 色調：灰緑色
95	青磁	皿	(10.8)	(6.0)	2.5	1/6 同安窯系・I-1b類 胎土：精良 色調：灰緑色

第五章 調査成果のまとめ

本地点では中世の遺構面が現代の攪乱によって大きく失われており、遺存していたのは中世基盤層の上面に構築された1面のみであった。この1面上で中世の遺構群が重複して検出され、多いところでは4段階の遺構変遷(切り合い)を把握することができた。

また、中世遺構の調査を終えた後に中世基盤層を部分的に掘り抜いたが、遺構・遺物の発見には至らなかった。

以下、中世遺構の展開と変遷について、溝1の変遷を軸に若干の検討を加えて本調査成果のまとめをしたい。

溝1(「小町大路」側溝)について

溝1はⅡ区西半部で検出された北東-南西方向の溝で、古い順に溝1c→1b→1aの順に構築されていたことが確認できた。3段階の溝とも概ね同方向で延びるが、細かく見ると1bが若干西振れとなる。流下方向は全体として北東から南西に向かっていたが、1b・1cでは底面が段状に20cmほど落ち込んでおり、1cでは北側が一段低くなっている状況が見て取れた。開削時における工事分担者の違いや存続期間内の浚渫によって生じた段差と考えられよう。a～c、いずれの段階においても護岸施設の痕跡は窺えなかった。

出土遺物の様相からは1c-1b間に若干の時間差が窺えたが、1c埋没(13世紀前半)から1b構築・廃絶(13世紀中葉頃)までに経過した時間は長くないことが、1b中層出土のかわらけから読み取れた。1b中層のかわらけ集中部は標高7.5～7.6mで平面的な広がりを見せ、鎌倉でいう「かわらけ溜まり」ほどの集積状況ではなかった。ただ、完形資料が主体となる点からは、一括廃棄の跡と考えて大過ないだろう。かわらけ廃棄時における遺構の断面形は非常になだらかな傾斜としか捉えられず、覆土様相を見ても溝としての機能は失っていたものと考えられる。次の溝1aでは15世紀中葉～後半のかわらけが数点出土しており、覆土様相が1bまでと大きく異なっていた点からも、1bの廃絶以後、1cの開削までには一定の断絶期間があったと考えられる。この間、溝1bに後続する溝の存在を窺わせる痕跡は確認できなかった。存在したとすれば本地点の西側、現行の道路下またはそれに近接した未調査範囲ということになるだろう。

これら三時期に亘る溝の性格について、出土位置や流下方向を見れば、西側に存在したであろう道路の側溝と見るのが自然な理解であろう。第1章で述べたように、中世において西側道路は「小町大路」または「町大路」と称され(註1)、現行道路についても小町大路と呼ばれている。周辺の調査では、現行の小町大路を挟んだ東西で道路の側溝と見られる北東-南西方向の溝が発見され、重層的に版築を施した道路面も複数の地点で確認されている。過去の調査成果に共通しているのは、大路の西側溝では土台角材から立ち上げた木組み護岸が施されているのに対し、東側溝では護岸施設を持たずに素掘り溝として検出されている点である。後者の状況は、本地点でも追加事例として確認できた。他地点の報告では両側に木組み護岸を持つ若宮大路側溝との対比から、小町大路の西側溝にも東側溝と同様の木組み護岸が設置され、(腐朽により)遺存しなかったものと理解されている。この点について、今回の調査所見にのみ基づけば、①各時期の側溝(溝1a～c)断面に護岸裏込め土と思しき痕跡が見られなかった。②溝の底面に土台材の据え方や規則的な杭穴の痕跡が認められなかった。③市内の他地域に比べ地下水は豊富でなかったものの一定量の湧水はあり、僅少なながら溝内には木製遺物が遺存していた。といった理由から、土台材を含む木組み護岸が何の痕跡も残さずに腐朽・消失したとは考えにくい。狭小な点的成

果をもって普遍的評価として示すことはできないが、実状として東側溝での護岸検出例がない以上、部分的であるにせよ東側溝が素掘り溝として構築・維持されていた可能性を考えても良いだろう。

対する西側溝では木組み護岸に加えて、新しい時期になると切石（鎌倉石）による護岸が構築されるケースが確認されている（註2）。竪穴建物の多い「二ノ鳥居」以南地区での検出例が目立ち、時期や場の性格によって護岸形態が異なっていたことを窺わせてくれる。もう一つ、最初期の西側溝が極めて規模の大きなものであった可能性が、近年の調査成果から把握されつつあること（註3）も重要である。「小町大路」の整備時期や初現段階の規模を知ることにより、都市鎌倉の形成史に新たな知見がもたらされることだろう。

「小町大路」東側溝が検出された地点の中で、本地点の80 m北東に位置する小町二丁目402番5地点（図1-2）では新旧4時期の大路側溝と推定される溝が確認され、このうち溝4・5が最古段階に位置付けられている。覆土様相の対比からは、どちらかが本地点の溝1cと同一の遺構として繋がるものと推測できる。また、同地点の北東に隣接する402番9地点（図1-3）でも合計で6段階の大路側溝と思われる溝が確認されている。ほぼ同じ位置に繰り返し構築され、複雑な覆土堆積を残すため前掲地点との直接的な対比は難しいが、第3面の溝17・15cが初期側溝と考えられているので、これも本地点の溝1cと同一遺構となる可能性が高い。同地点の側溝では、第1面の溝1が側溝では最も新しい。古い側溝の西側上部を浅く削り込んだだけで、東岸のみの検出であったため詳細は不明であるが、幅は4m以上と広い。底面は一定レベルで平らに推移しており、断面図を一見した限りでは側溝というより造成平場という印象を持った。15世紀代のかかわりが出土しており、覆土様相の近似性から見ても本地点の溝1aとは同一の遺構と判断して差し支えないだろう。溝1aも東岸から幅1mしか検出していないので、これがどのような規模・形態の遺構となるかについては、今後の周辺における調査成果に委ねたい。

その他の検出遺構について

溝1a～cの他、本地点では井戸や土坑、柱穴列といった遺構が検出された。

井戸1はⅡ区の北壁際で検出され、安全面への配慮から底面まで完掘することができなかった。そのため、井枠を有するかも分からず井戸と判断した根拠は薄弱であるが、平面規模や円筒形の断面形状を呈することから井戸と認識した。本遺構は、初期「小町大路」側溝と見られる溝1cに切られており、本地点の中世遺構としては最古段階に位置付けられる。覆土中にウマ上顎骨や板片が捨てられていた他は出土遺物がなかったため具体的な所産時期は分からないが、大路の整備という土地利用の画期を考察する上では貴重な事例である。周辺成果も含めた断片情報を繋ぎ合わせることで、鎌倉初期、もしくはそれ以前における当地域の性格に近付くことができるだろう。

柱穴列は、溝1と平行に並ぶ3列（柱穴列a～c）と、これと直交方向に並ぶ2列（柱穴列d・e）を本報告では提示した。狭い調査範囲での復元のため過誤があるかも知れないが、基本的な軸線は溝1に沿っていると考えて間違いないだろう。各列とも掘立柱建物に復元できるものはなく、板塀など区画・遮蔽施設の痕跡と考えられる。前掲の2地点など、本地点より広い面積の調査地でも明確な建物復元案は示されていないので、若宮大路沿いの屋敷地と同様、道路に接した土地は少なくとも主屋を配置するような空間として認識されていなかったと考えられる。

柱穴列aは溝1cの東岸と柱穴列bを切っていることが確認できた。やや短絡的な想定だが、各遺構の配置関係から、当初は溝1cと柱穴列bがセットとして存在し、その後、溝1bと柱穴列aのセットが西に位置をずらして再構築されたことが考えられる。

柱穴列cは、溝2の底面に並ぶ「布掘り」方式をとる。他の柱列と上部構造がどのように異なるのか明確でないが、より堅牢な構造体を造るための措置と考えるのが妥当であろう。前掲2地点でも同形態の遺構が確認されており、小町大路の周辺では普遍的な工法であったことが窺える(註4)。出土遺物はロクロかわらけのみで、実測個体がないため詳細は不明であるが、13世紀後半以降の所産になると考えられる。

付記一年代観の根拠について

本報告では各遺構の年代観について、主として下記の文献を参考に提示したが、在地土器で供膳具の中心となる「かわらけ」の編年研究では、特に年代観の付与という点で鎌倉内の研究者間に共通理解を見出せていない現状があり、また筆者自身がこれら先行研究を咀嚼できていないこともあって一定の幅を持たせた曖昧な記述に終始してしまった。お詫びしたい。

かわらけ：宗臺秀明 2005「中世鎌倉の土器・陶磁器」『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～資料集』

常滑：中野晴久 2005「常滑・渥美系」『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～発表要旨集』

【註】

- 註1 史料解釈に諸説があるため範囲の確定はできないとしながらも、「小町大路」が宝戒寺以南で夷堂橋以北の名称と理解することの蓋然性を説いている(馬淵ほか2007)。
- 註2 図1-地点8で切石積みの護岸が良好に遺存していた(宮田眞氏のご教示による)。地点9・10では溝内に切石が捨てられており、同様の切石護岸が存在していた可能性を窺える(地点10は筆者調査、地点9は調査担当者である山口正紀氏からのご教示)。本覚寺夷堂の建設に伴う発掘調査では、現在の小町大路にほぼ併行して走る切石積みの石垣が確認されている。詳細な説明はないが、概報の掲載写真からは溝(大路側溝)の護岸を思わせる検出状況が見て取れる(地点11・松尾1983)。
- 註3 やはり図1-地点8・9・10などで検出されている。各地点とも調査範囲の制約もあって幅や深さは把握されておらず、具体的な規模や形状、存続期間については今後の課題である。地点8・9では、この大溝が有機質土で埋没した後、上部に道路面が重層的に構築されている(宮田氏・山口氏のご教示による)。近年、玉林美男氏の整理によって、初期の若宮大路側溝と同形態・同規模となる可能性が示されている(玉林2010)。
- 註4 宇都洋平氏は鎌倉市内で検出された「布掘り」柱穴列を集成し、中世鎌倉では布掘り工法による建物は検出例がなく、主として区画施設の基礎工法として採用されたと理解されている。「布掘り」が採られた理由として、柱穴のみの構造体より強度・耐久性を高めるためとの認識が示されている(宇都2007)。

【引用・参考文献】

- 高柳光寿 1959『鎌倉市史 総説編』鎌倉市
- 松尾宣方 1983「36 本覚寺境内」鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報 I」鎌倉市教育委員会
- 宇都洋平 2007「第4章 第2節 考察 若宮大路周辺遺跡群(小町二丁目402番9ほか地点)第2面検出の柱穴列について」(後掲、馬淵ほか2007所収)
- 馬淵和雄ほか 2007「若宮大路周辺遺跡群(No.242) 小町二丁目402番9ほか地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 23(第2分冊)』鎌倉市教育委員会
- 玉林美男 2010「中世の動向(鎌倉を中心として)」『神奈川の考古学・最近の動向』平成22年度考古学講座 当日配布資料 神奈川県考古学会



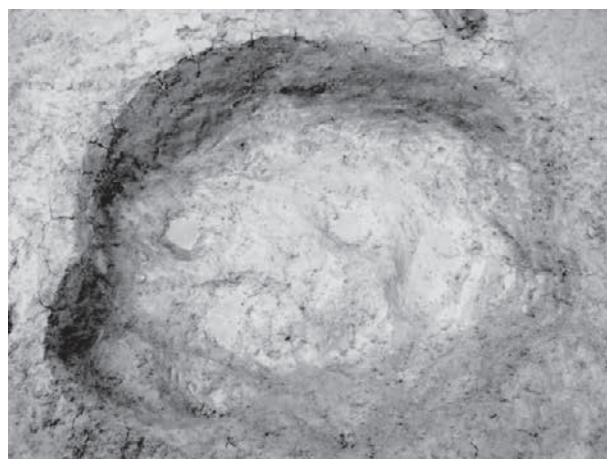
1. I区1面 全景(南東から)



2. I区1面 溝2(南西から)



3. I区1面 土坑1断面(南西から)



4. I区1面 土坑1 完掘状況(南西から)

図版2



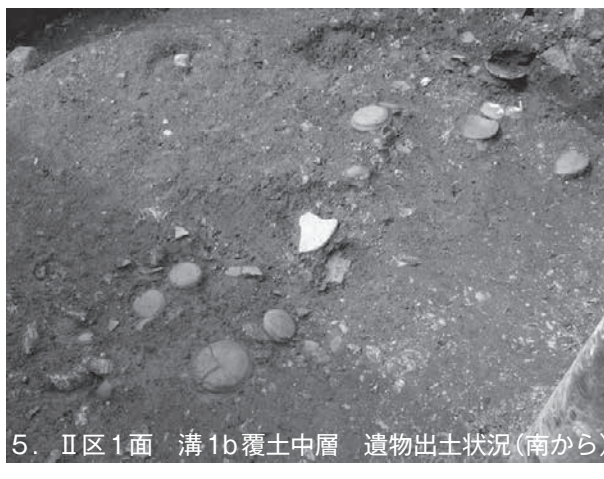
1. II区1面 遺構確認状況(南西から)



4. II区1面 溝1a内 遺物出土状況(南から)



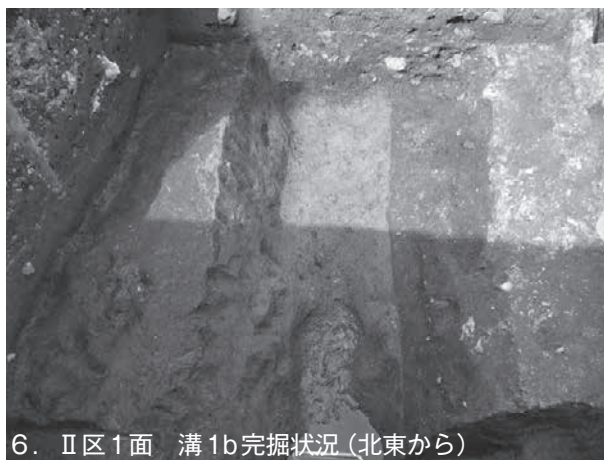
2. II区1面 溝1a土層断面(北東から)



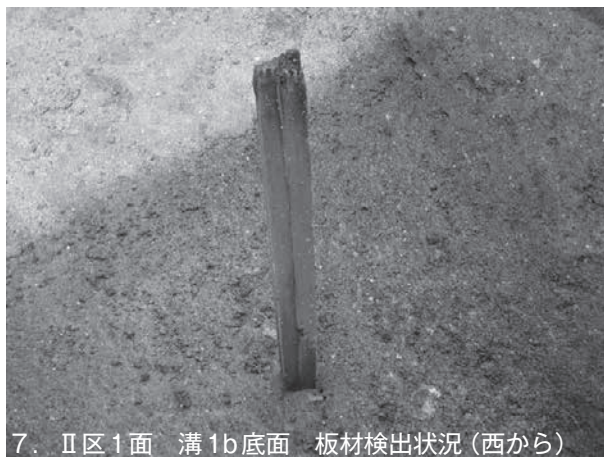
5. II区1面 溝1b覆土中層 遺物出土状況(南から)



3. II区1面 溝1a完掘状況(北東から)



6. II区1面 溝1b完掘状況(北東から)



7. II区1面 溝1b底面 板材検出状況(西から)



1. II区1面 溝1b完掘状況(北東から)



4. II区1面 遺構完掘後全景(東から)



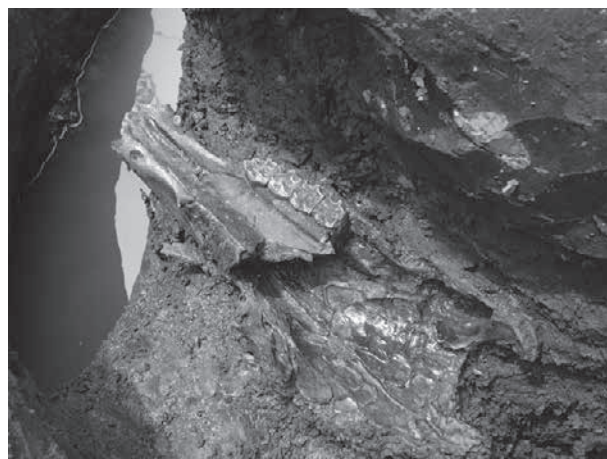
2. II区1面 溝1b・1c土層断面(北東から)



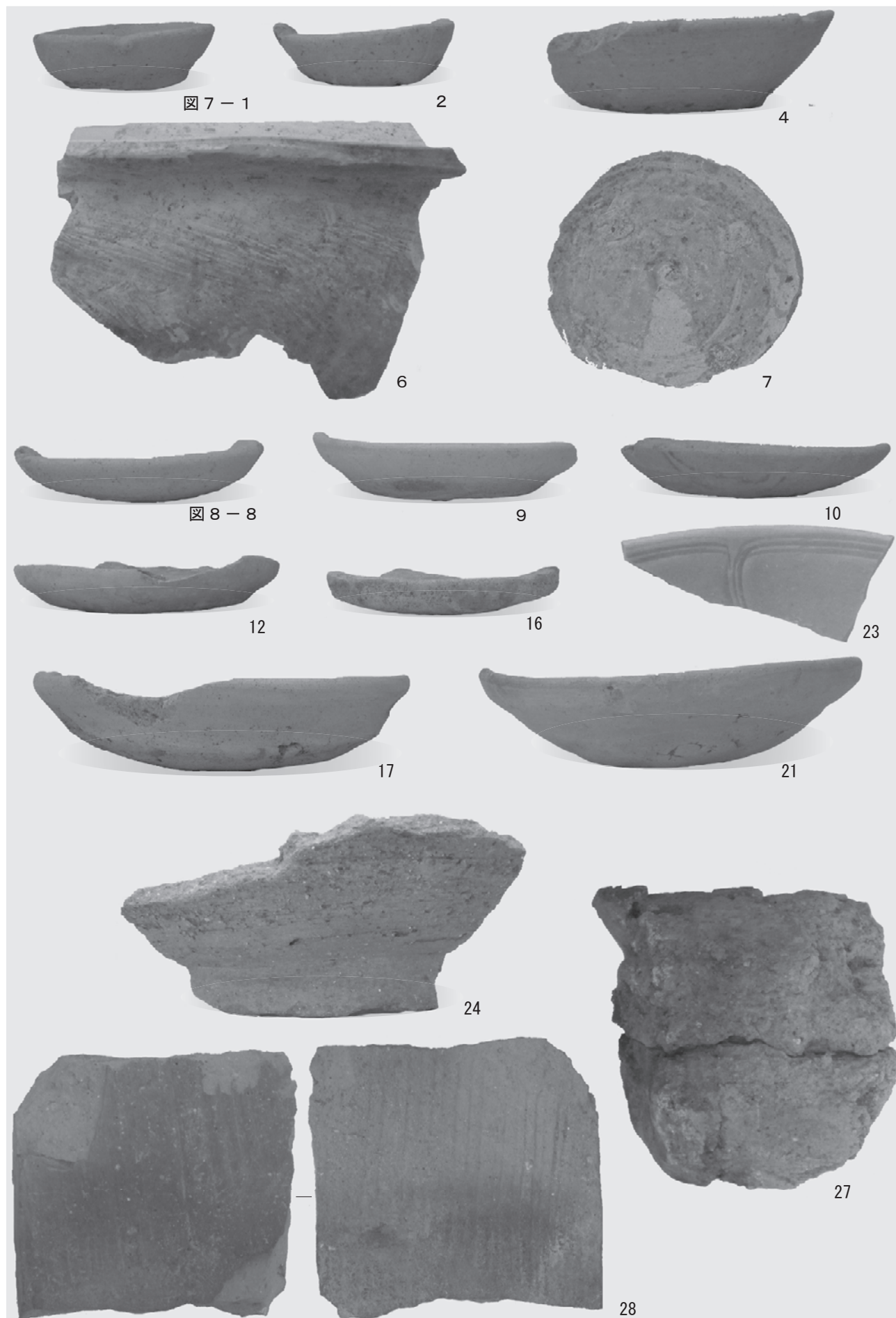
5. II区1面 井戸1(南東から)

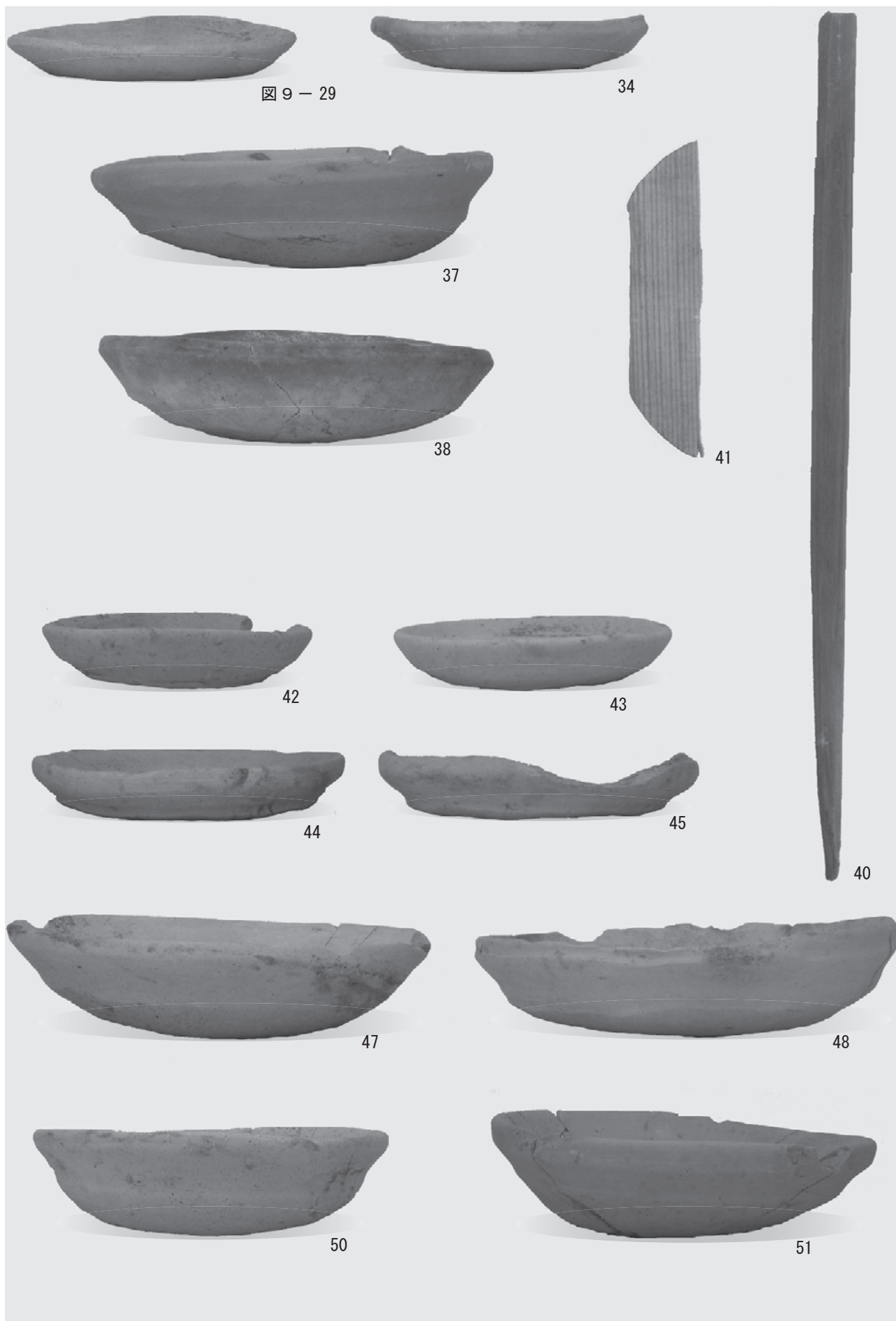


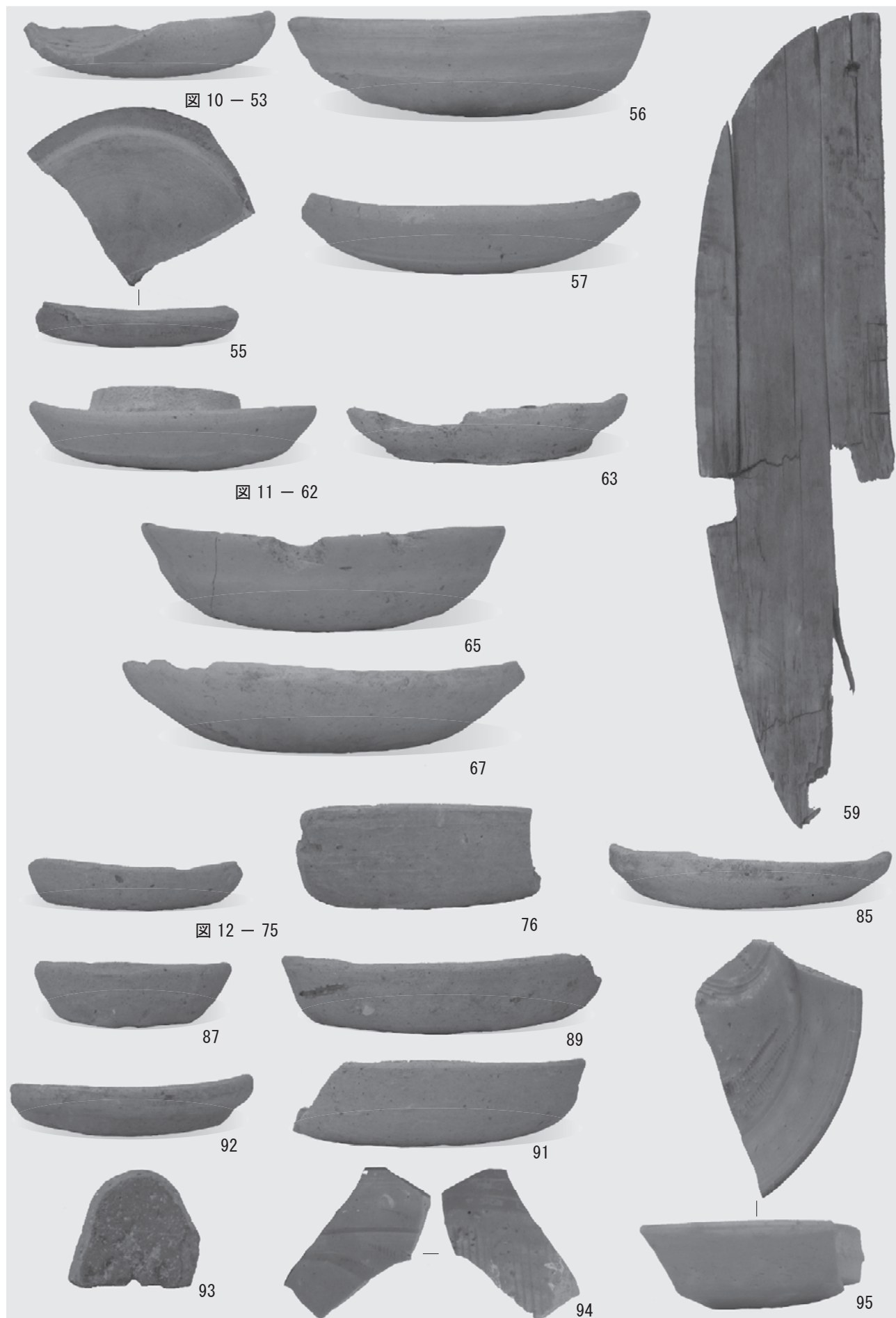
3. II区1面 溝1c・中世基盤層土層断面(北東から)



6. II区1面 井戸1内 ウマ上顎骨出土状況(東から)







米町遺跡 (No.245)

大町二丁目 2311 番 5

例 言

1. 本報告は、鎌倉市大町二丁目2311番5地点において個人専用住宅の建設に伴って実施した、米町遺跡（神奈川県遺跡台帳－鎌倉市No.245）の緊急調査報告である。
2. 発掘調査は平成21年6月23日から8月31日にかけて、国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。調査の対象面積は、53.6㎡である。
3. 発掘調査体制は、以下のとおりである。
調査担当者 熊谷 満（平成21年6月）、押木弘己（同年7・8月）
調査員 岡田慶子
作業員 牛島道夫、清水政利、佐野吉男、根市真古人
（公益社団法人 鎌倉市シルバー人材センター）
整理作業参加者 岡田、押木、菅野尚子、村松房代
天野隆男、倉澤六郎、秋田公佑、松岡信喜
（公益社団法人 鎌倉市シルバー人材センター）
4. 本報告では世界測地系（第IX系）の国家座標軸に基づく測量成果を掲げたが、平成23年3月11日以前の測量基準点を基に測量・作図したため、座標値は東日本大震災後の地殻変動に対応した補正值となっていない。
5. 本報告の執筆・編集は、押木が行った。
6. 本報告で使用した写真は、現地写真を熊谷と押木が、出土遺物を押木が撮影した。
7. 出土品の整理に当たり、以下の諸氏からご教示を賜った（五十音順、敬称略）。
沖元 道、汐見一夫、中野晴久、馬淵和雄、安井俊則
8. 本調査に係わる出土遺物および各種記録類は、鎌倉市教育委員会が保管している。本地点の略称は市教育委員会の統一基準に従って「KM0906」とし、出土品への注記その他に使用した。

目次 本文目次

第一章 遺跡の位置と歴史的環境	185
第二章 調査の方法と経過	187
第1節 調査に至る経緯	
第2節 調査の方法	
第三章 基本土層	188
第四章 発見された遺構と遺物	192
第1節 検出遺構	
第2節 出土遺物(図15～図29)	
第五章 調査成果のまとめ	213
第1節 各遺構面の年代観	
第2節 3面遺構の性格と軸線について	

挿 図 目 次

図1 調査地の位置	185	図16 1面出土遺物①	205
図2 調査区配置図	187	図17 1面出土遺物②	206
図3 土層断面図①	189	図18 1面下出土遺物	207
図4 土層断面図②	190	図19 1面下・2面出土遺物	208
図5 1面全体図	193	図20 2面下出土遺物	209
図6 1面個別遺構図	194	図21 3面出土遺物①	210
図7 2面全体図	195	図22 3面出土遺物②	211
図8 3面全体図	197	図23 3面出土遺物③	212
図9 3面個別遺構図	198	図24 3面出土遺物④	213
図10 3面遺構27・135	199	図25 3面下出土遺物①	214
図11 3面遺構27	200	図26 3面下出土遺物②	215
図12 3面下全体図①	201	図27 3面下出土遺物③	216
図13 3面下全体図②	202	図28 3面下出土遺物④	217
図14 3面下個別遺構図	203	図29 3面下出土遺物⑤	218
図15 表土～1面出土遺物	204	図30 東西道路の検出地点	219

表 目 次

表1 出土遺物計数・計量表	221	表2 出土遺物観察表	239
---------------------	-----	------------------	-----

図 版 目 次

<p>図版 1 249</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. I区1面 全景(北から) 2. I区1面 遺構7a(東から) 3. 同上 土層断面(東から) 4. I区1面 遺構7b(東から) 5. I区1面 遺構7b(東から) 6. 同上 断面(東から) 7. I区1面 遺構1(北から) 8. I区1面 遺構9(北から) <p>図版 2 250</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. I区1面 遺構7a断面・遺構11(東から) 2. I区1面 遺構11(南から) 3. I区2面 全景(北から) 4. I区3面 遺構27a 遺物出土状況(西から) 5. 同上 アワビ殻集積出土状況(南から) 6. I区1面 遺構27a板壁材検出状況(西から) <p>図版 3 251</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. I区3面 遺構27a(北から) 2. I区3面下 遺構57(北から) 3. 同上 土層断面(南東から) 4. 同上 遺物出土状況(南から) 5. II東区3面下 遺構27周辺 遺物出土状況 (東から) 6. II西区2面 全景(北から) 7. II西区3面 全景(北から) 	<p>図版 4 252</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. II西区3面下 全景(北から) 2. II西区3面下② 全景(北から) 3. II東区1面 全景(東から) 4. II東区3面 全景(北から) 5. II東区3面 遺構27a 遺物出土状況 6. II東区3面下 全景(北から) 7. II東区3面下 遺構133(西から) 8. II東区 地山砂層検出状況(南西から) <p>図版 5 253</p> <p>図版 6 254</p> <p>図版 7 255</p> <p>図版 8 256</p> <p>図版 9 257</p> <p>図版 10 258</p> <p>図版 11 259</p> <p>図版 12 260</p> <p>図版 13 261</p> <p>図版 14 262</p>
--	---

第一章 遺跡の位置と歴史的環境

米町遺跡は、県道鎌倉葉山線とJR横須賀線とに挟まれた東西700m、南北200mの範囲を有する。地形的には滑川の支流である逆川の右岸(北岸)に位置し、北の山稜(祇園山)裾部から逆川に向かう微高地上に立地する。現地表の標高は約7.8mを測り、微高地を南に下りきった魚町橋付近との比高差は2.2mを測る。今回の調査は、本遺跡内で16地点目の発掘調査となる(試掘・確認調査は除く)。

本地点の北側を走る県道鎌倉葉山線は長谷・笹目から名越方面へと通じ、中世から都市鎌倉を東西に貫く基幹道であったと考えられている。中世の名称については定説がないものの、「大町大路」とする理解が一般的かと思われる。さらには奈良時代の宝亀二年(771)以前の東海道駅路に前身を遡らせて考える所見もある。周辺の発掘調査では、中世の東西道と考えられる路盤面や側溝跡が発見されている(図1-地点11・17など)。古代駅路については歴史地理学にもとづいた想定にとどまっており(木下ほか1997など)、未だ発掘調査による遺構の検出には及んでいない。

遺跡名の「米町」は『吾妻鏡』建保元年(1213)五月二日条に「若宮大路米町口」「米町辻」などの記述があり、下記の町屋免許の記事とともに鎌倉時代まで遡る地域名であることを示している。

建長三年(1251)と文永二年(1265)の二回、鎌倉内の商業地を規定する通達が出されたことは有名だが、そこには「米町」や異称の「穀町」という名で当地区も掲げられている。免許地の詳細な範囲は定かでないが、近隣地名の「大町」や「小町」も同じく町屋免許を与えられていることから、鎌倉中期には当地区一帯が広く商業地としての様相を呈していたことを窺わせてくれる。

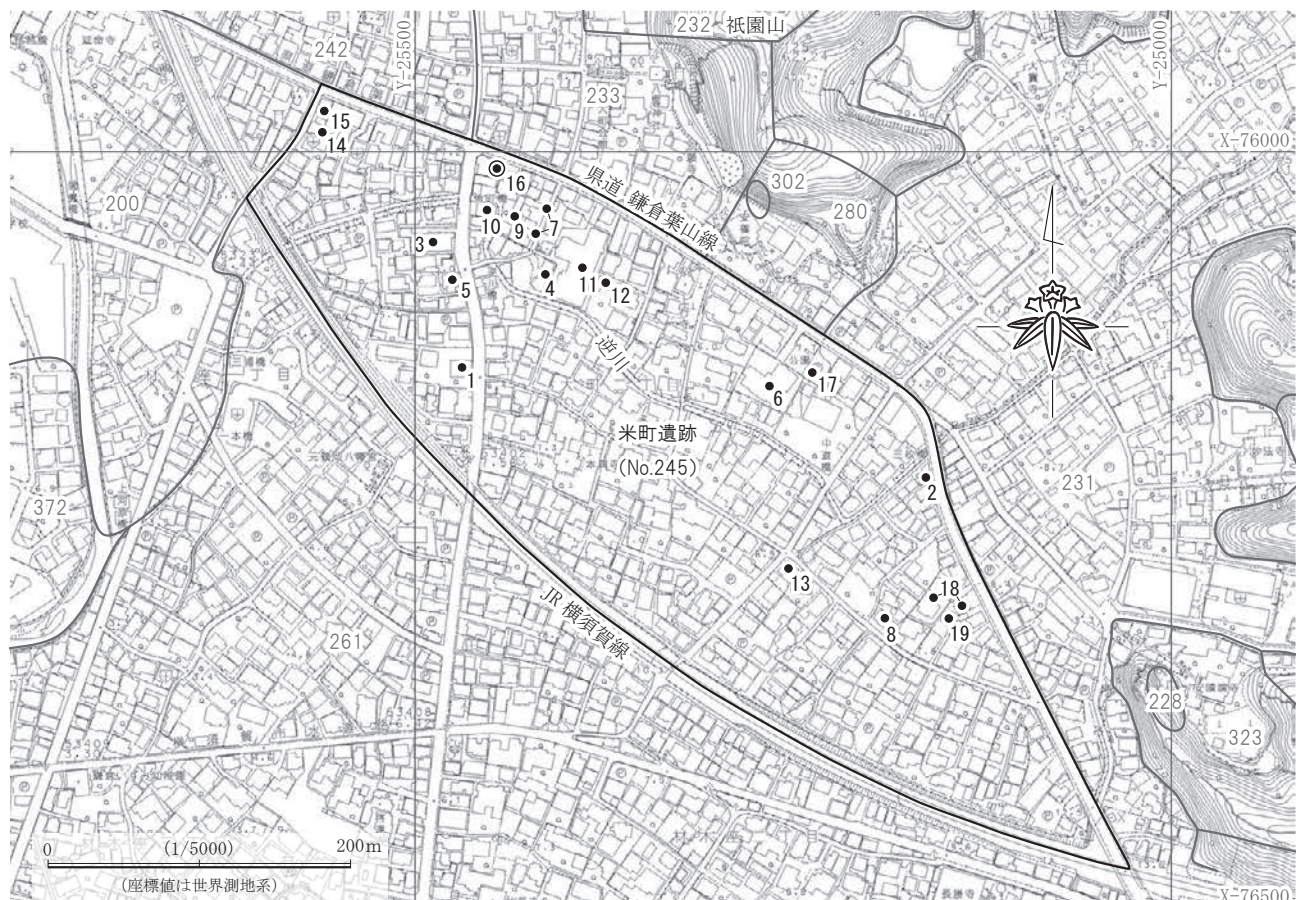


図1 調査地の位置

図1-地点11では庶民の家屋と目される簡素な板壁建物の建ち並ぶさまが見て取れ、傘の轆轤部分や製作途上の草履芯など手工業者の存在を窺わせる遺物が出土している。これらは主に鎌倉中・後期に属しており、史料が示す町屋の活動を裏付ける成果となった。一方で、『吾妻鏡』は当地区に御家人の邸宅が存在していたことも伝えており、一概に庶民(≒商工業者)の居住・活動の場という要素のみで当地を語ることはできない。地点6では溝と柱穴列(堀跡)によって区画された空間内に多数の井戸が穿たれ、区画の面積や井戸の規模が大きいこと、そして常滑産の突帯付三耳壺など優品を含む出土遺物から、寺院または屋敷地としての性格が想定されている。このように、中世の当地区は寺院・屋敷地と庶民居住地とが混在する、都市鎌倉を象徴するような景観を呈していたと推察される。

時代は下って、明応年間(1492～1501)の製作とされる「善寶寺寺地図」には「置石」(若宮大路段葛)の東に滑川に架かる延命寺橋と町屋らしき家並みが続き、そこに「米町」の注記がみえる。鎌倉が政権機能を失った戦国時代にあっても「米町」が一定の賑わいをもつ地区であったことを示す貴重な史料といえる。 【引用・参考文献は第五章末尾にまとめて掲げた】

調査地点・報告一覧(発掘調査の実施順)

1. 大町二丁目929番 未報告
2. 大町二丁目2411番2『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書5』所収 1989年 鎌倉市教育委員会
3. 大町二丁目933番外『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書6』所収 1990年 鎌倉市教育委員会
4. 大町二丁目2315番外『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書11』所収 1995年 鎌倉市教育委員会
5. 大町二丁目931番1『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書14』所収 1998年 鎌倉市教育委員会
6. 大町二丁目2338番1『米町遺跡発掘調査報告書』 1999年 米町遺跡発掘調査団
7. 大町二丁目2312番4・10『米町遺跡—第6地点、第7地点発掘調査報告書—』 2000年 米町遺跡発掘調査団
8. 大町二丁目2404番の一部『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書16』所収 2000年 鎌倉市教育委員会
9. 大町二丁目2313番15地点『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書17(第1分冊)』所収 2001年 鎌倉市教育委員会
10. 大町二丁目2308番1地点『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書17(第2分冊)』所収 2001年 鎌倉市教育委員会
11. 大町二丁目2320番1『米町遺跡発掘調査報告書—第10地点—』 2005年 有限会社鎌倉遺跡調査会
12. 大町二丁目2324番1外『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書20』所収 2004年 鎌倉市教育委員会
13. 大町二丁目2235番3『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書24』所収 2008年 鎌倉市教育委員会
14. 大町二丁目992番7外『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書22(第2分冊)』所収 2006年 鎌倉市教育委員会
15. 大町二丁目993番1外『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書29(第2分冊)』所収 2013年 鎌倉市教育委員会
16. 大町二丁目2311番5 本報告
17. 大町二丁目2340番10 一部報告
18. 大町二丁目2398番、2400番3 未報告
19. 大町二丁目2400番5 未報告

第二章 調査の方法と経過

第1節 調査に至る経緯

本発掘調査は、個人住宅の建設に伴う事前の記録保存調査として鎌倉市教育委員会が実施した。建築計画の届出を受けて平成21年3月3・4日に確認調査を実施した結果、現地表95cm以下で近世と中世の堆積層が確認された。建築計画では基礎部分に長さ5mの鋼管杭を打ち込む予定であったことから、確認調査の結果を受けて本格的な発掘調査を実施する必要があるものと判断された。

現地調査は平成21年6月23日に着手し、同年8月31日まで2ヶ月強の期間を要した。

出土品等の整理および本報告の作成業務は平成25年6月から10月まで断続的に行った。

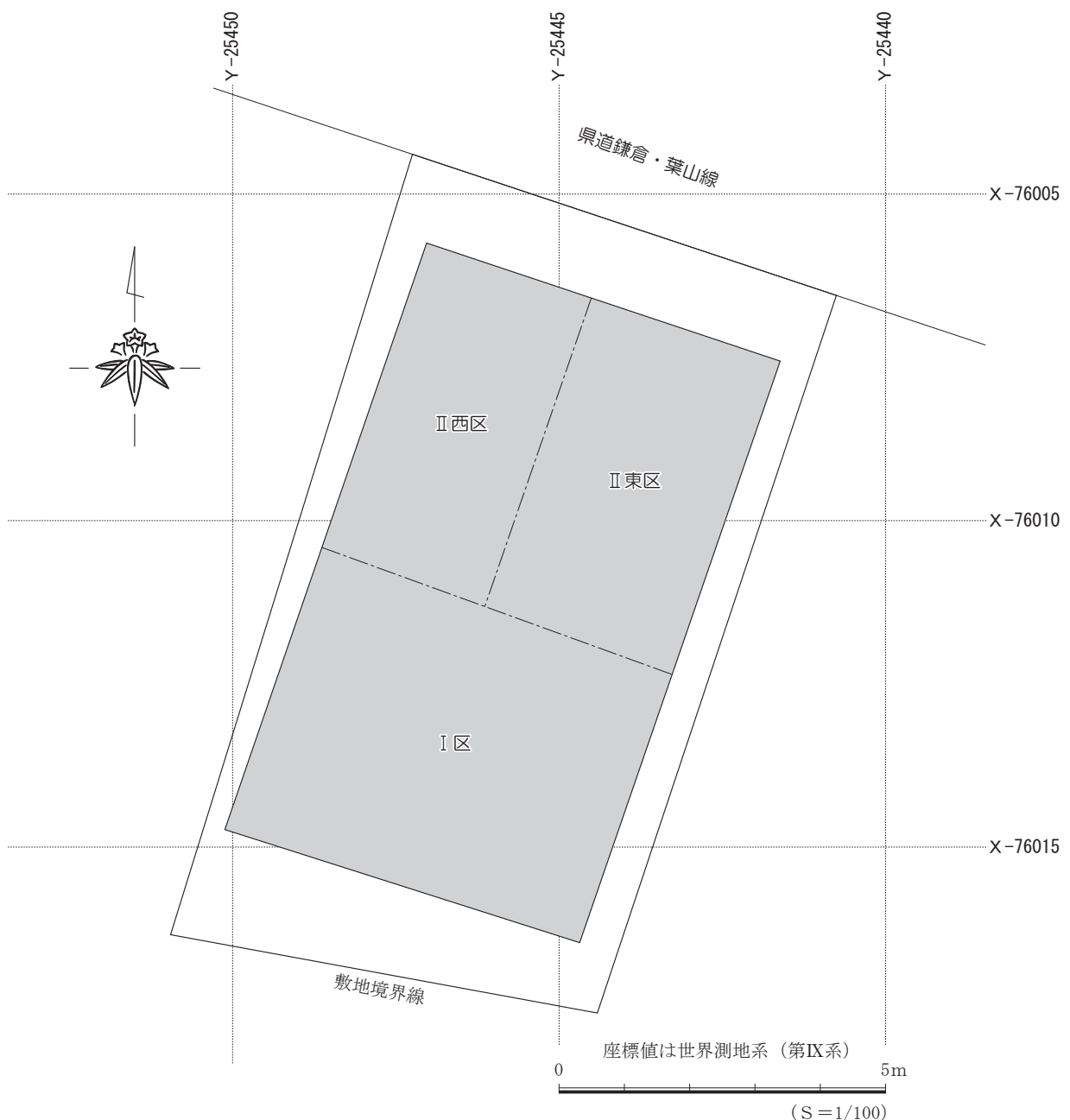


図2 調査区配置図

第2節 調査の方法

表土の除去は重機によって実施し、遺構面に近付いたところで人力での掘削に移行した。掘削に伴う残土置場を確保する必要から調査対象地は3分割し、先行して着手した南半部をⅠ区、北西1/4ほどをⅡ-西区、北東1/4ほどをⅡ-東区と呼称し、順次、掘削・調査に当たった。本報告においても、現地での呼称にもとづいて記載を進めていく。今回は敷地のほぼ全域が調査対象となったこともあり、掘削による発生土の処理には苦慮した。残土山崩落の危険を回避するため、各調査区間には未掘削のベルトを残して土留めの役割をもたせるなど、本来の調査対象である53.6㎡のうち、結果的に調査を施せた範囲は36㎡までに縮減した。

建物基礎となる鋼管杭の強度を保つ必要があるため、調査に伴う掘削深度は現地地表下3mまでと制限された。表土層の堆積分となる深さ100cmまではH鋼と矢板で土留め施工を行い、隣地との境界塀などが崩落しないよう留意した。これ以下では未掘削箇所の設定や調査区壁の勾配を緩やかにするなどして崩落の危険性を回避した。

各調査区とも1面～3面下の計4枚の遺構面を把握して、写真撮影・測量ほかの記録作業を進めた。

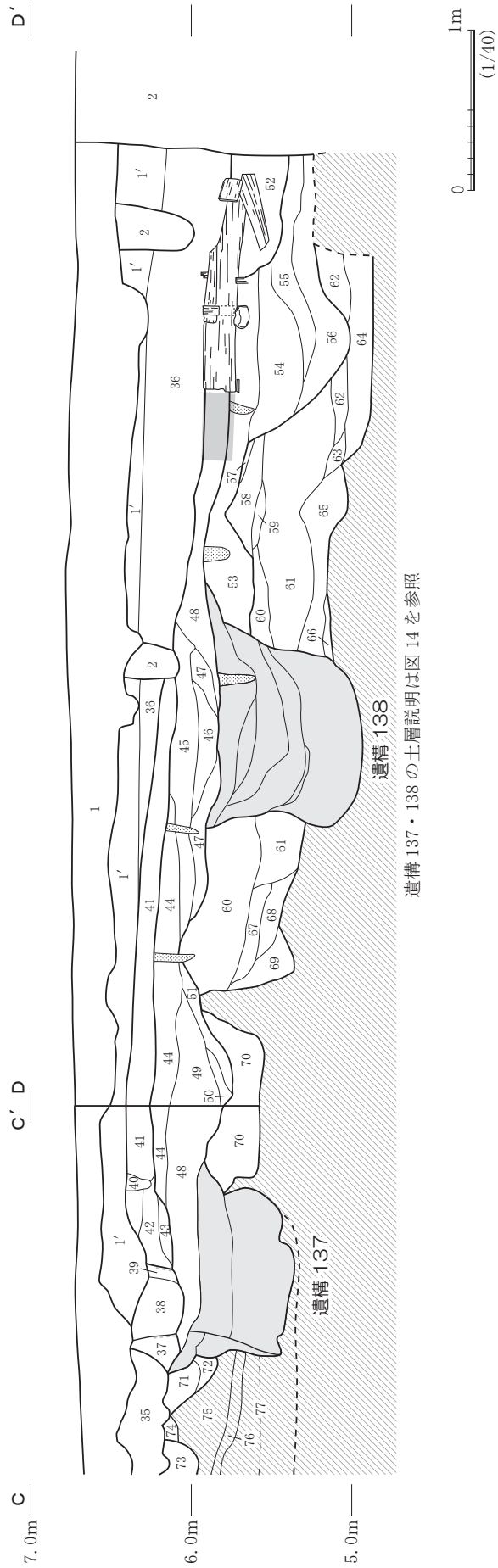
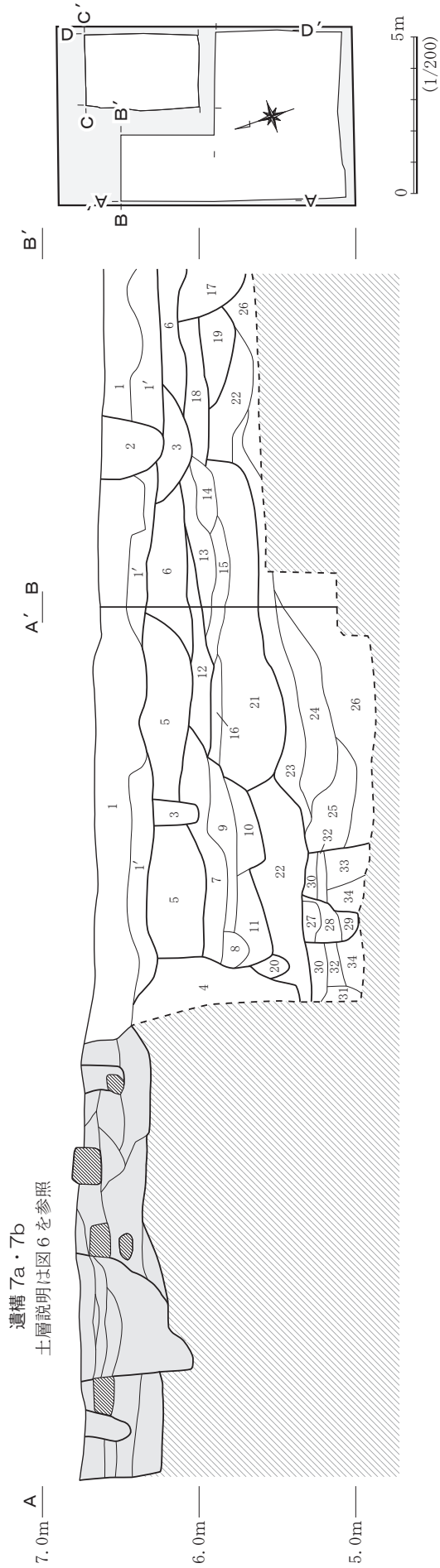
測量に当たっては、国家座標軸に沿った方眼区画を設定して平面図の作成に供した。国家座標の移設は市道上に設置された鎌倉市4級基準点「H8-362」と「H8-363」の2点間関係から開放トラバース測量によって行なった。現地では旧測地系の国家座標値をもとに方眼区画を設定したため、本報告の作成に際して世界測地系の座標値に改訂した。座標値の変換には、国土地理院が公開する座標変換ソフトWeb版「TKY2JGD」を使用した。また、標高については、辻薬師堂前にある3級基準点「No.53402」から水準点移動を行い、任意の基準点に標高値を移して断面図その他の作図に利用した。

第三章 基本土層

繰り返しになるが、本地点では表土層が地表下95cmまで堆積し、これ以下では近代と中世の堆積層が確認された。Ⅱ-東区の北端では地表下2mで無遺物の黄褐色砂層が検出されたが、南と西に向かうにつれて検出レベルは低くなり、Ⅰ区とⅡ-西区では規制深度の下にも中世の遺物包含層・遺構の続く状況が確認された。表土直下の1面は江戸末期～近代の遺構面で、標高6.8m付近で検出された。2面以下は中世面となる。2面は標高6.3～6.7mで確認した。3面は5.8～6.4m、3面下は5.8～6.1mで確認した。3面は上下2層に細別でき、3面下についてはⅡ-東区でⅣ層・黄灰色砂層の上面で土坑などを確認したものの、他の調査区では同砂層の確認には及ばず、概ね規制深度で掘削を終了した。Ⅱ-西区では3面下での遺構の重複が著しかったため、全体図を2枚に分割、提示した(図12・13)。中世層は暗灰褐色の砂質土をベースとしており、3面の道路面を除き明確な地業層は検出できなかった。土層の硬軟や泥岩粒の混入量の違いをもとに遺構面の把握に努めたものの、上層遺構を下層面において確認しえたケースも多くある。本報告では現地の平面図と断面図とを整合させた全体図を提示したが、少なからず混乱を残した点をご寛容いただきたい。

整理すると、本地点の堆積は以下のとおりに大別できる。各層とも、細別層ごとに色調は多様である。

- Ⅰ層 暗褐色土 表土・現代攪乱層。コンクリート片などを含む。
- Ⅱ層 暗灰色砂質土 近世以降の耕作土。Ⅲ層より灰色味が強く、泥岩粒などの混入量が少ない。
- Ⅲ層 暗灰褐色砂質土 中世の遺物包含層・遺構面形成層。泥岩粒・ブロックを多く含む。
- Ⅳ層 黄白色/灰白色砂 無遺物層。この直下に波蝕台岩盤が広がっているものと思われる。



遺構 137・138 の土層説明は図 14 を参照

図3 土層断面図①

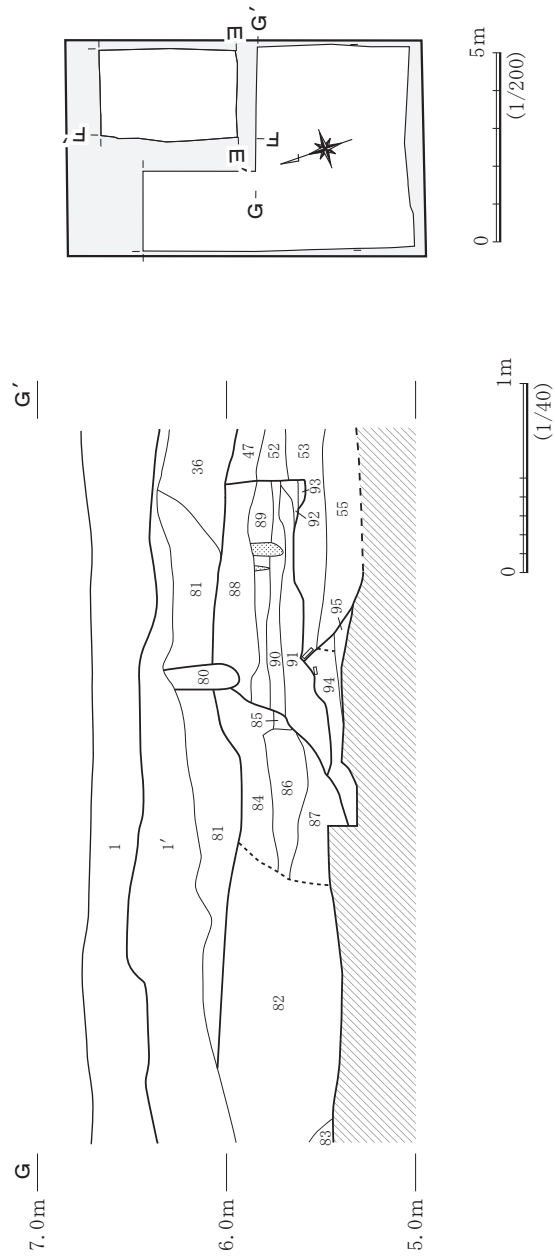
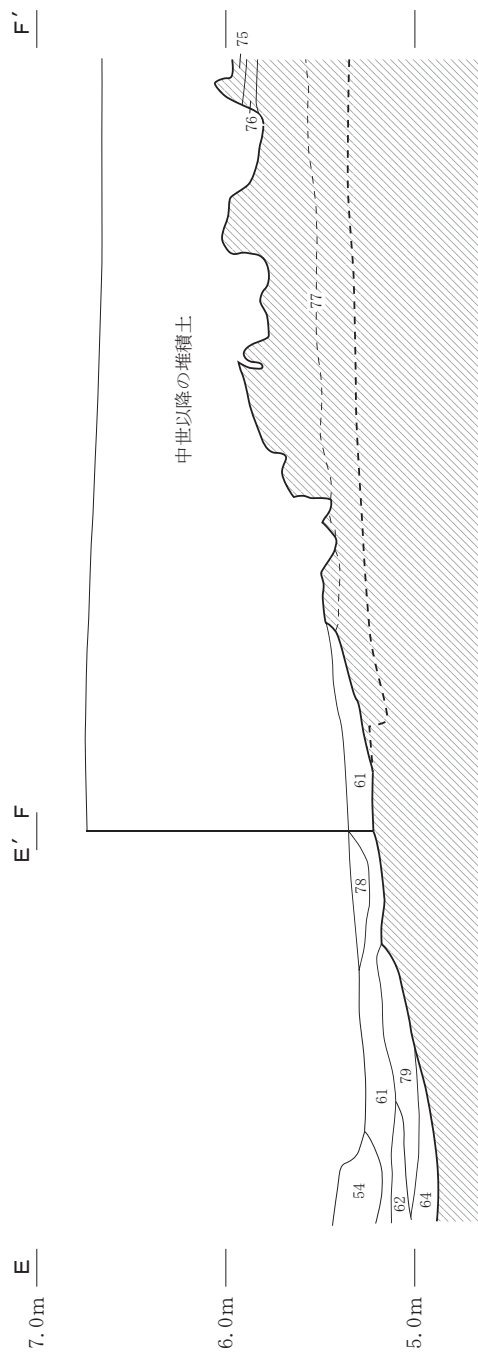


図4 土層断面図②

調査区壁断面図 土層説明 (図3・4に対応)

- | | |
|---------------------------|--------------------------|
| 1 暗灰色土 砂質土。泥岩塊多い。1面構成土。 | 6 暗灰色土 砂質土。泥岩粒少量。2面構成土。 |
| 1' 暗灰色土 砂質土。泥岩塊少量。 | 7 暗灰色土 泥岩粒多量。締まり強い。 |
| 2 暗灰色土 泥岩粒多量。締まり強い。 | 8 暗灰色土 砂質土。泥岩粒少量。 |
| 3 暗灰色土 泥岩粒少量。粘性あり。 | 9 暗灰色土 砂質土。泥岩粒ごく微量、炭粒微量。 |
| 4 暗黄褐色土 泥岩塊多量。締まりあり。 | 10 暗灰色土 砂質土。炭粒多量。 |
| 5 暗灰色土 砂質土。泥岩粒少量。灰の薄層が入る。 | 11 暗灰色土 砂質土。炭粒少量。 |
| | 12 暗灰色土 砂質土。泥岩粒少量。締まりあり。 |

- 13 暗灰色土 砂質土。上面に泥岩地業層あり。
黄色砂を斑文状に含む。締まりあり。
3面構成土。
- 14 黄褐色砂 暗灰色土が斑文状に入る。炭粒微量。
- 15 暗灰色土 砂質土。締まり弱い。
- 16 暗灰色土 砂質土。締まりあり。
- 17 暗灰色土 砂質土。炭粒微量。
- 18 暗灰色土 砂質土。泥岩粒微量。締まりあり。
- 19 暗灰色土 炭粒微量。
- 20 暗灰色土 泥岩粒多量。粘性あり。
- 21 暗灰色土 砂質土。炭粒、貝殻片少量。
- 22 暗褐色土 砂質土。貝殻片少量。締まりあり。
- 23 暗褐色土 砂質土。泥岩粒微量。
- 24 暗褐色土 砂質土。炭粒、貝殻片微量。
- 25 暗褐色土 砂質土。泥岩粒微量。
- 26 暗灰褐色土 泥岩塊多量。締まり弱い。
- 27 暗褐色土 砂質土。黄色砂を斑文状に含む。
- 28 黒褐色土 砂質土。黄色砂を斑文状に含む。
- 29 灰褐色砂 黒色土を斑文状に含む。
- 30 暗褐色土 砂質土。
- 31 暗褐色土 砂質土。
- 32 黄色砂 下部で暗褐色砂を含む。
- 33 暗灰褐色砂 貝殻片少量。
- 34 灰色砂 貝殻片微量。ラミナ状の互層堆積。
- 35 暗褐色土 泥岩粒少量。
- 36 暗灰色土 泥岩塊多量。
- 37 暗灰褐色土 砂質土。締まり弱い。
- 38 黄褐色砂 泥岩粒多量。締まりあり。
- 39 暗灰褐色砂 泥岩塊少量。
- 40 暗褐色土 泥岩粒少量。
- 41 黄灰色土 泥岩ブロックによる地業層。遺構35
(道路) 築成土。
- 42 暗灰色土 砂質土。泥岩粒少量。締まりあり。
- 43 黄褐色砂 中位に炭層が入る。
- 44 暗灰色土 泥岩粒少量。締まりあり。
- 45 暗灰色土 砂質土。泥岩粒、貝殻片少量。
- 46 暗灰色土 砂質土。黄色砂、泥岩粒少量。
- 47 暗灰色土 微細砂を含む砂質土。粘性ややあり。
- 48 暗灰色土 微細砂を含む砂質土。粘性ややあり。
- 49 暗灰色土 砂質土。褐鉄化した薄い層が入る。
締まりあり。
- 50 暗灰色土 砂質土。貝殻片少量。締まりあり。
- 51 暗灰色砂 貝殻片少量。酸化により締まりやや
あり。
- 52 黒色土 貝殻片少量。締まりややあり。
- 53 暗黄褐色土 砂質土。黄色砂が斑文状に入る。
- 54 暗黄褐色土 有機質腐植土。砂が少量混入。
- 55 青灰色砂 やや粗い貝殻片を少量含む。
- 56 暗黄褐色土 有機質腐植土。木片多く混入。
- 57 黒色土 有機質腐植土。酸化のため硬化。
- 58 黒褐色土 砂質土。泥岩粒微量。締まりあり。
- 59 黒褐色土 粘性ややあり。
- 60 黒褐色土 砂質土。締まりあり。
- 61 黒褐色土 砂質土。灰色砂をブロック状に含む。
- 62 青灰色砂
- 63 黒色土 有機質遺物多い。粘性あり。
- 64 黒灰色砂 木片少量。締まり弱い。
- 65 黒灰色砂 黄色砂をブロック状に含む。
- 66 黒褐色土 砂質土。炭化物を多量に含む。
- 67 暗灰色土 砂質土。泥岩塊少量。
- 68 暗灰色土 砂質土。67層より砂が多く締まり強い。
- 69 暗灰色土 砂質土。68層より砂が多く締まり強い。
- 70 黒褐色土 細砂少量。粘性ややあり。締まり弱い。
- 71 暗灰色土 砂質土。黄色砂、泥岩粒少量。
- 72 黄褐色砂 暗灰色土が斑文状に混入。締まりあり。
- 73 暗灰色土 砂質土。炭粒少量。締まりややあり。
- 74 暗灰色土 砂質土。黄色砂やや多い。締まりあり。
- 75 黄灰色砂 酸化鉄が目立ち硬化。
- 76 灰白色砂 粗粒の砂層。貝殻片を含む。
- 77 灰白色砂 細砂と中粗砂の互層。
- 78 黒色土 砂質土。64層より腐植土多く黒色味
が強い。
- 79 黒色土 砂質土。やや砂質感が強い。
- 80 暗灰色土 泥岩粒少量。粘性あり。
- 81 暗灰色土 泥岩塊多い。
- 82 暗灰色土 泥岩塊、貝殻片多い。締まりあり。
- 83 暗灰色砂 混入物殆ど含まない。
- 84 暗灰色土 泥岩塊多い。締まりあり。

- 85 暗灰色土 砂質土。泥岩粒、炭粒少量。
- 86 暗黄灰色土 砂質土。貝殻片少量。締まりややあり。
- 87 暗灰色土 砂質土。炭粒少量。締まりあり。
- 88 暗灰色土 砂質土。泥岩粒、貝殻片少量。
- 89 暗灰色土 泥岩粒少量。締まり弱い。
- 90 黒灰色土 細砂と粘質土の混交土。炭粒微量。締まりやややり。
- 91 黒灰色土 貝殻片少量。90層より締まりあり。
- 92 暗灰褐色砂 締まり弱い。
- 93 黒灰色土 粘質土。腐植した木材か。
- 94 黒灰色土 粘質土。下位へ向けて有機質腐植土に漸移。
- 95 暗灰色土 砂質土。上面に有機物腐植土が堆積。

第四章 発見された遺構と遺物

第1節 検出遺構

前章で述べたとおり、本地点で把握できた遺構面は、近代1枚、中世が3枚である。以下、新しい時代から順に検出された遺構の概要を説明する。

1面(近代) 表土直下、標高6.8mほどで検出され、基本土層のⅡ層を基盤とする。一部、近世末～近代の遺構が確認された。

遺構1はⅠ区南端で発見された井戸跡。平面円形で凝灰岩切石積みの井枠をもつ。南半部は調査区外へ続く。井枠の内寸で直径100cm、掘り方も円形の平面プランを呈し直径270cmを計測した。遺構10よりも新しく、使用は現代まで下ると思われる。帰属時期が新しく、掘削による崩落も心配されたことから詳細な調査は行わず、下層掘削に当たってもこの部分は掘り残して調査を進めた。

遺構7はⅠ区西辺で検出されたカマド跡。2基が並んで検出され、南側を7a、北側を7bと呼称した。

西半分ほどが調査区外に続く。上部が表土層で削平されているため両者が新旧で造り替えられたものなのか、同時期に使用されたものであるかは定かにできなかった。ともに袖の基礎に凝灰岩の切石を据えており、7aは両袖が残存、7bは右袖が欠失していた。両基の袖石とも側辺を弓状に加工しており、特に内側辺のカーブが強く見て取れた。残存部からは胴張り状の平面形を呈する馬蹄形であった可能性も推測できる。両袖間の内寸は7aが75cm、7bが80cm以上を測る。奥行きは7aが40cm以上で、7bは袖部分が60cm、焚口部～灰原?を含めると150cm以上を計測する。カマド内部には焼土が厚く堆積し、袖石の内側辺は被熱による変色・剥落が顕著であった。7a・7b全体の掘り方は方形の平面プランで、幅280cm以上、奥行き100cm以上を測る。切り合い関係では明確にしえなかったが、掘り方形状からは構築・操業は同時期に行われたとする判断もできようか。一般民家の煮炊きに供したものか、ある種の業務用とされていたのかについて、現時点では類例も少なく断定できない。

出土遺物からは、18世紀後半頃の使用年代が考えられる。

遺構11は、遺構7a前面の掘り方で発見された。常滑産と見られる陶器壺を据えた小土坑で、カマドに付随する施設なのかは明確にできなかった。壺の内容物は確認できず、有機物を入れていた可能性も考えられる。一部、7aの掘り方と混同して埋土を掘ってしまったが、直径が45cm、深さは壺の器高と同じ30cm前後であったと推測される。

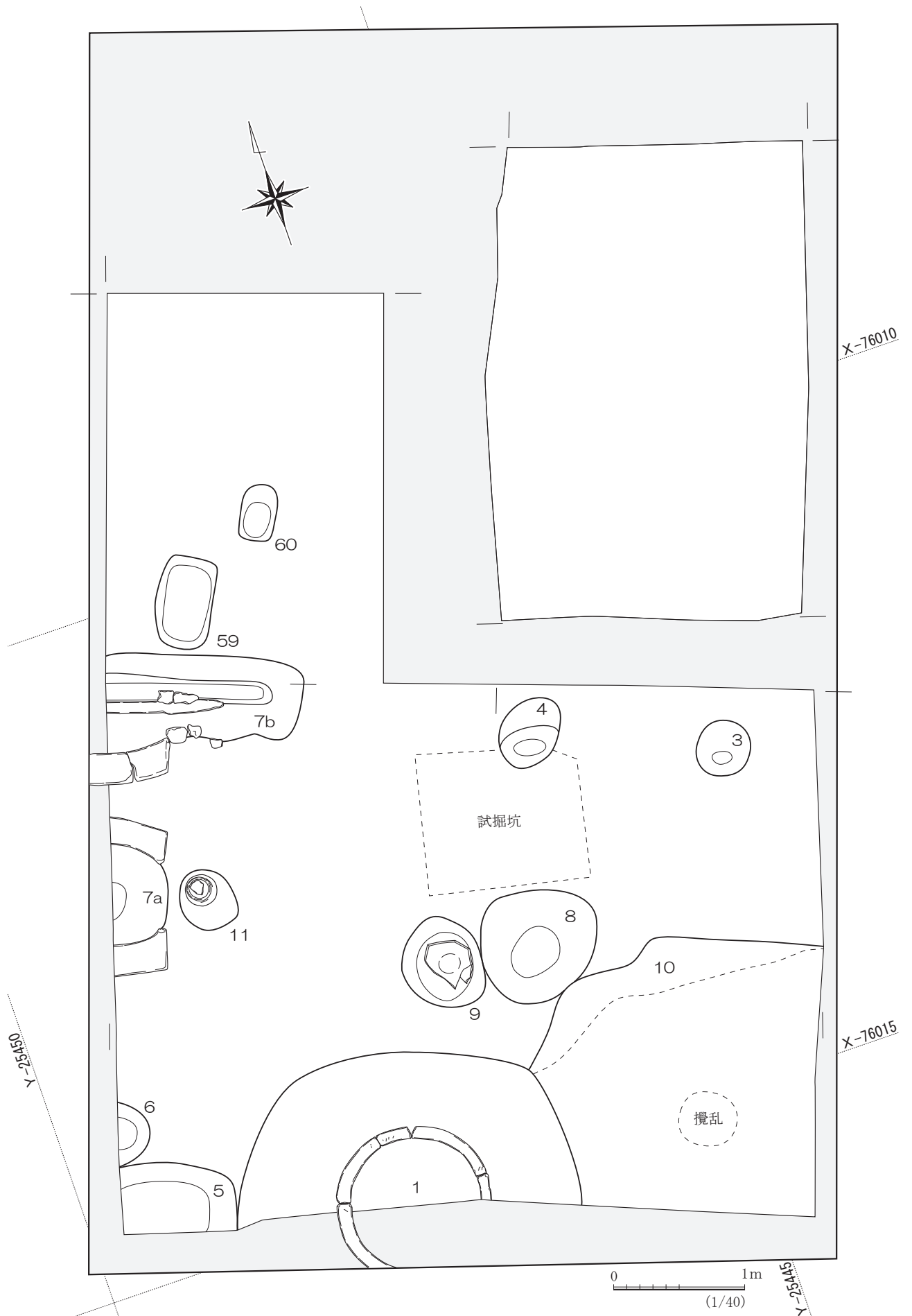


図5 1面全体図

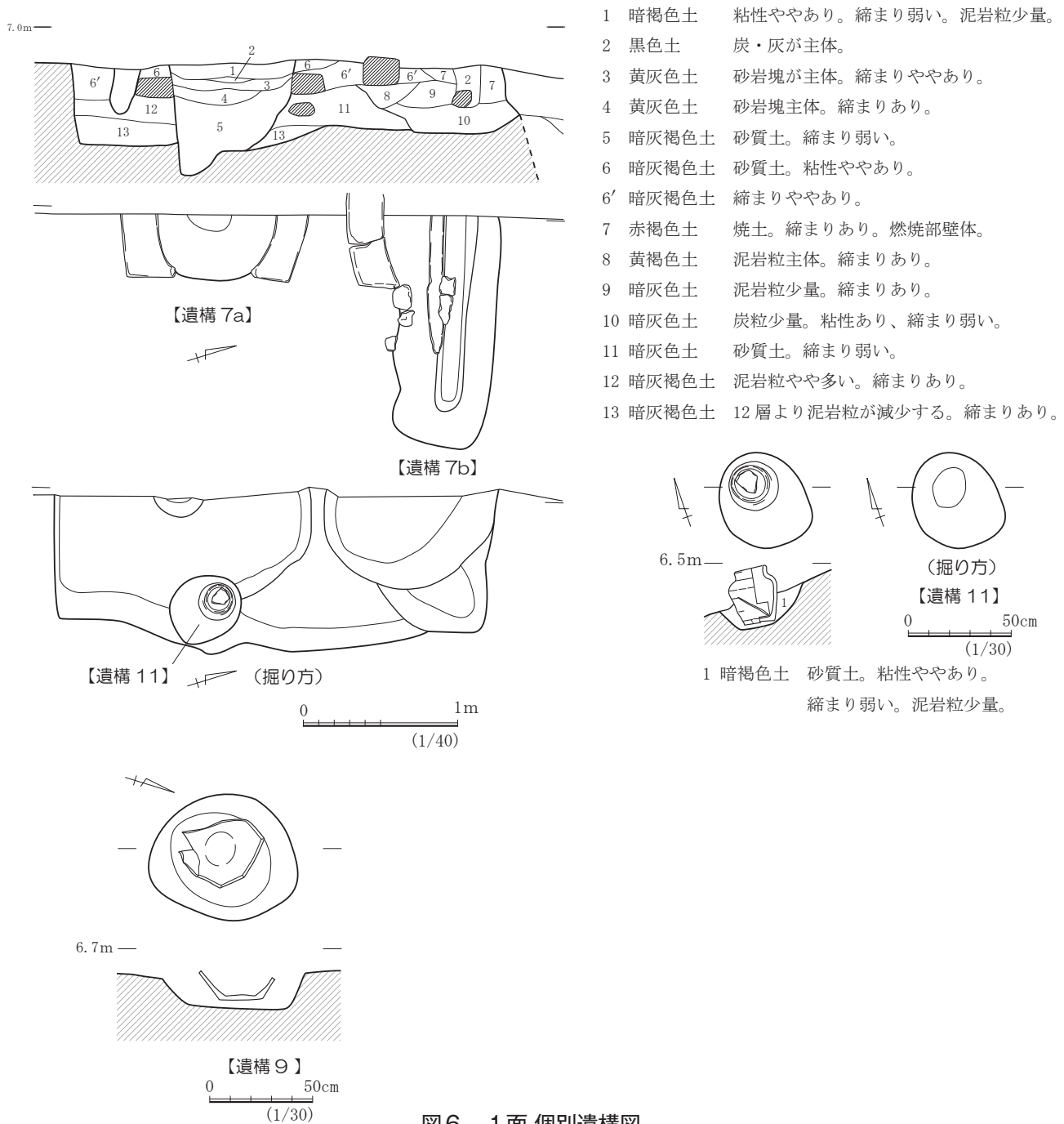


図6 1面 個別遺構図

遺構9は常滑産であろう陶器甕を据えた小土坑で、長径70cm、短径60cmほどの楕円形プランを呈する。確認できた深さは18cmで、据甕の底部のみが遺存していた。甕は胎土が均質で近代以降の印象を受ける。用途は不明だが、水甕や便槽などが可能性として考えられる。

1面では他に、大小の土坑や落ち込みが発見されている。遺構10は地表下3mより深く、ほぼ垂直に落ち込むことから井戸の可能性はある。遺構1に切られ、出土遺物の特徴から、使用時期は近代に収まるものと考えられる。

2面(中世) 標高6.3~6.7mで確認した。1面下からの掘り下げ時、および当面検出の遺構からも少量ながら近世遺物が出土している。遺構出土分の大半は中世の遺物なので、上層調査時の掘り残しと判断している。検出遺構の大半が小規模なピットで、一部は柱穴としての認識が可能な遺構も存在していたが、いずれも並びが不明確で上部構造の復元には及ばなかった。

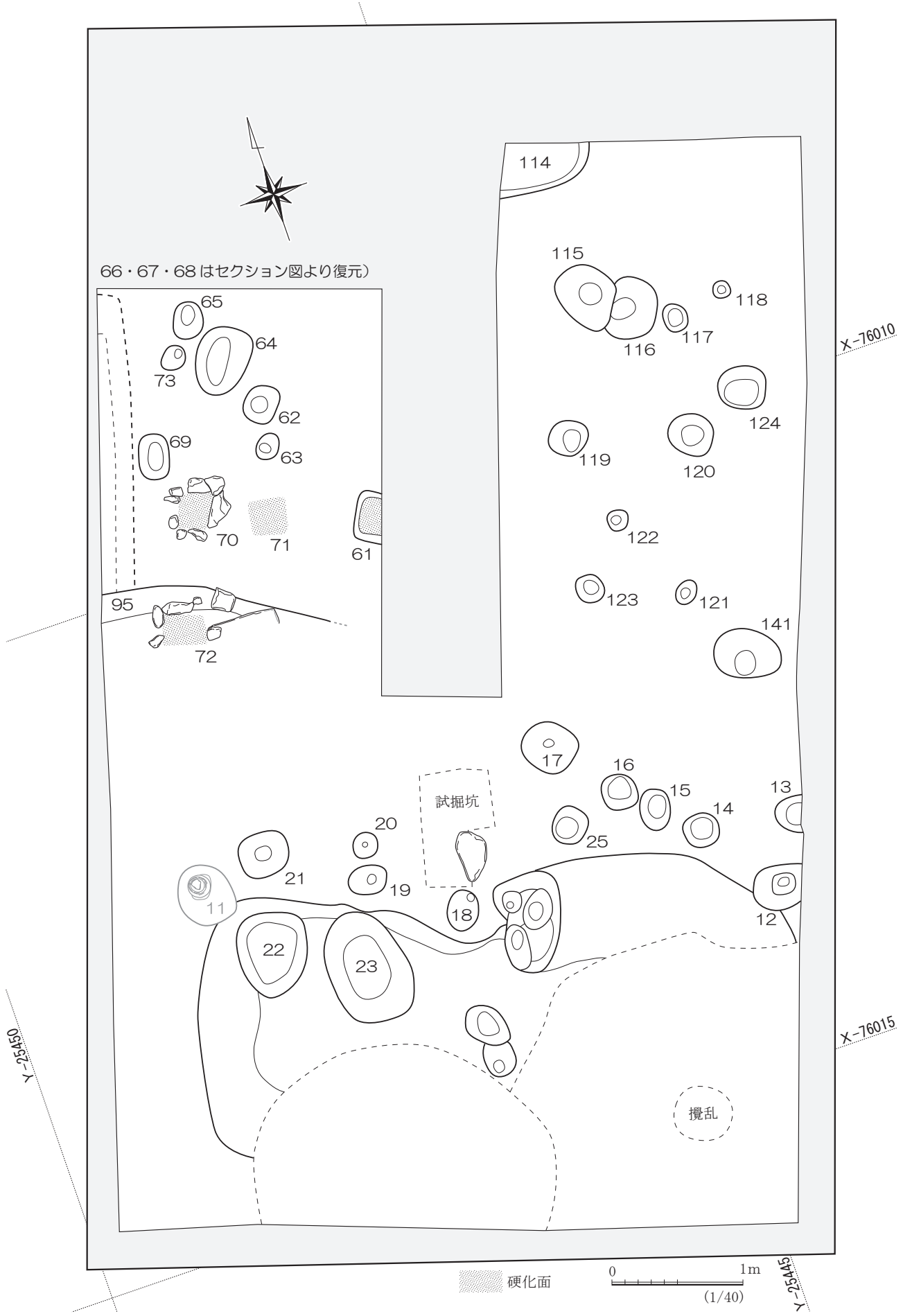


図7 2面全体図

遺構61・70・71・72は25cm四方ほどの平面形を呈する浅い窪みで、底面の硬化が顕著で柱材の加重によるものと考えられた。70・72の周囲には拳大の破碎泥岩が並んでおり、柱の根方固めと判断された。柱穴であれば、本来の掘り込み面は1面以上となろう。I区南東部では幅4.5mほどの浅い落ち込みを確認した。落ち込みの北岸には多数のピットが見つかるが確実に並ぶものではなく、落ち込みとの関連は明らかでない。小穴に混じって、礎石様の安山岩扁平石が一例見られた。落ち込みに関しては、自然地形の斜面堆積を遺構として認識してしまった可能性もある。

3面(中世) 5.8～6.4mで確認された。板壁建物と南北道路で構成される下層部分と、板壁建物が埋没した後の上層ピット群に細別される。後者の段階においても南北道路は機能していたと判断され、大きくは1枚の遺構面として捉えた。

上層では小規模なピットと土坑が検出された。ピットは特定の場所に集中する傾向が見られたものの柱穴列として並ぶ状況は確認できなかった。II-西区の西壁側で検出された土坑群について、現地では明確な形で捉えられなかったため、整理作業時にセクション図を参考にして図上復元した。上層遺構について、個々の性格は不明である。また、下層の遺構27a(板壁建物)を切って西へ落ち込む遺構27bも底面まで完掘していないため、性格について明言しえない。

遺構41はI区南部で検出された落ち込みで、大部分が上層遺構に切られてしまっていたが方形基調の平面プランを呈していたものと考えられる。東西220cm、南北20cmの平面規模を有し、確認面からの深さは20cmを計測した。底面ではピット1基が確認された。遺構の北辺は真北の直交方向に延びる。

下層の遺構27aの仕切り板と近い方向軸を示すことから、板材等は残っていなかったものの、本遺構も建物痕跡の一部と見なせるかもしれない。

下層遺構として、図10・11に南北道路(遺構135)と板壁建物跡(遺構27a)を掲げた。

遺構135はII-東区の北東隅で検出された。泥岩ブロックで整地された道路面が確認でき、その西辺に遺構27aが取り付くように構築されていた。道路は側溝を伴わず、建物壁材との間は裏込め土が充填されていたと考えている。近隣の調査成果も参考とすれば、道路には建物間を繋ぐ路地といった規模と性格が想定できる。路面上の標高は、約6.4m。全体の検出に及んでいないため略測値になるが、道路の走方向はN2°Wを指すことから、概ね真北を指向する規格のもとに造作されたと考えてよいだろう。

遺構27aは遺構135の東側に接し、調査範囲を超える建物規模を有していたと考えられる。遺構135との境界には板杭で固定された横板が立ち、これが上屋建物の外壁を成すものと考えた。ただ、横板の接地面レベルが南に向けて緩やかに落ち込む点が気に掛かるので、単に道路の土留め材という可能性も残る。建物内部と考えた西側には微かに南下がりの平坦面が広がり、この面上では腐植・粘質土化した横板の痕跡が9条ほど確認でき、間仕切りと推定した。なお、外壁の道路側でも横板痕跡を確認したが、路盤に直に接した位置にあることから、路盤の整形に供された補助材といった用途を考えたい。外壁はN5°Eに延び、間仕切り痕跡も近似した方向軸を残していた。

建物内の底面では2基の小穴が確認されたほか、やや特異な状況としてアワビ殻の集中出土が挙げられる。17個体分の集積箇所に加え、遺構の南域に散在する状況も見られた。いずれも殻を伏せた状態で確認されたが、身が付いた個体であったかについては知る術がない。

3面下(中世) 5.8～6.1mで確認した。先述のように、調査区全域を同一層の上面で捉えたのではない。全体に南へ落ち込む自然地形が把握でき、II-東区では中世基盤層となるIV層・黄白色/灰白色砂層が検出されたものの、I区ではこれより低いレベルでも同砂層は見取れず、さらに下位での中世遺構の展開が確認された。

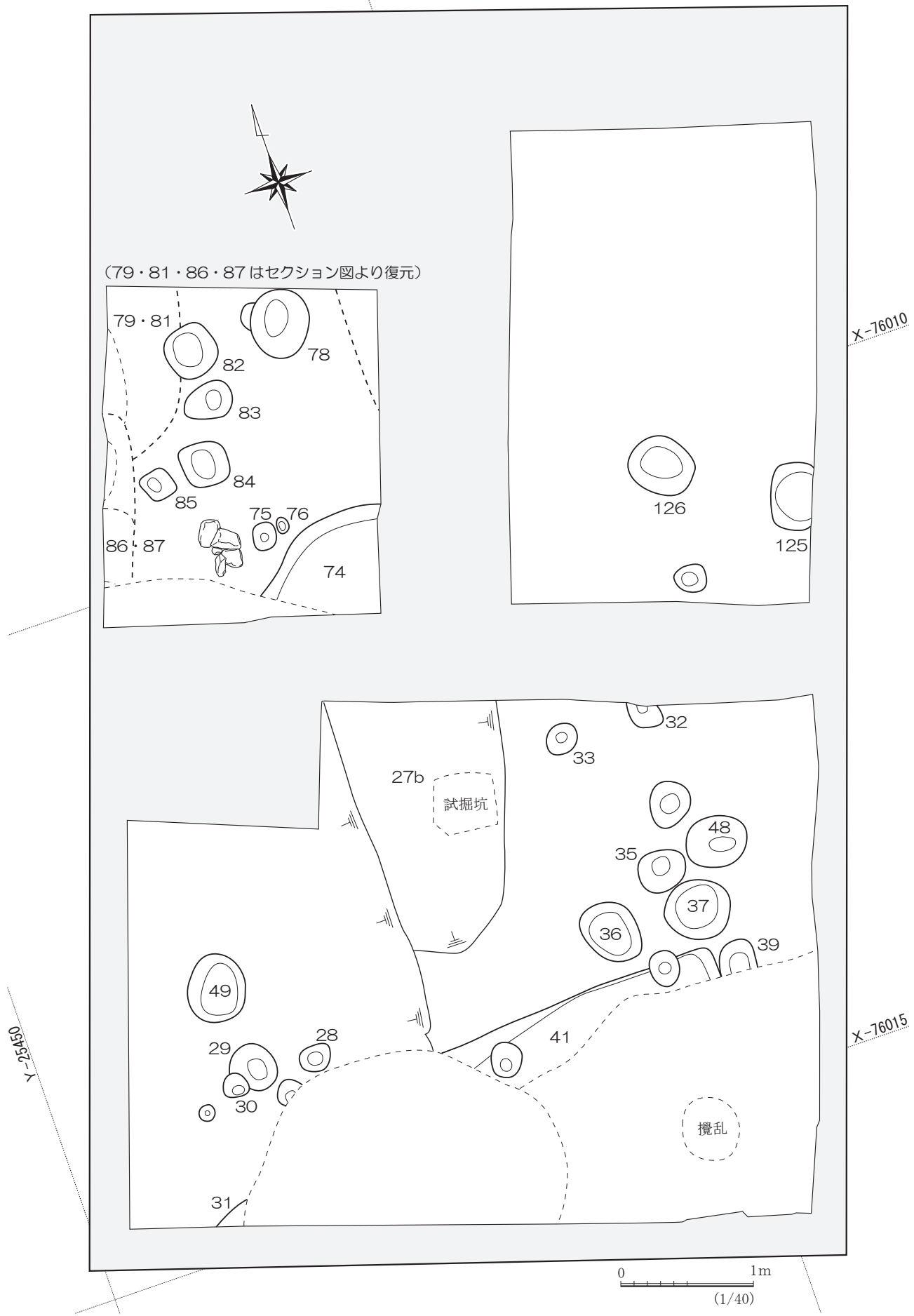


図8 3面全体図

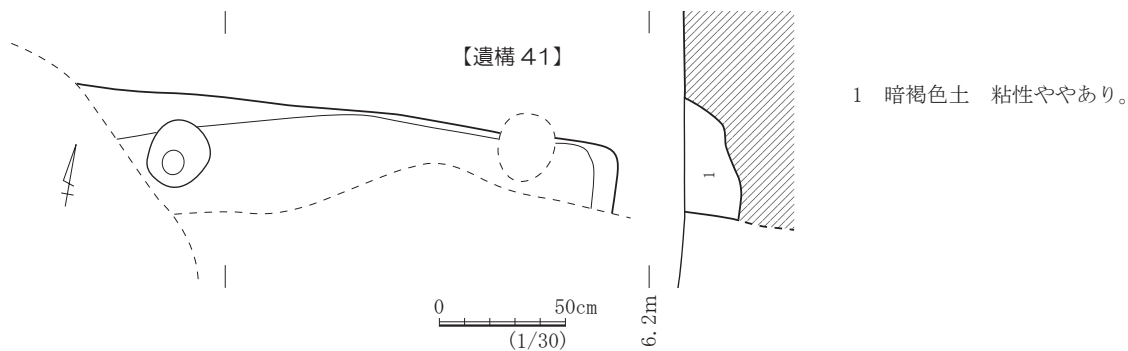


図9 3面 個別遺構図

II - 西区でも、II - 東区と同じ標高ではIV層の確認はできなかった。

I区では木組み護岸を持つ溝状遺構が、II - 西・東区では土坑群が検出された。

遺構57はI区で発見された南北溝状遺構で、両岸とも横板の内壁際を板杭で固定した護岸施設を有していた。東辺の護岸材が土圧により西へ倒れていたため正確な計測値ではないが、大よその幅は40cmほどであったと推測される。護岸材の検出長は東辺が200cm、西辺が120cmであった。確認できた深さは30cmほどで、両護岸材とも南へ向けて落ち込んでいた。走方向は、N3° W。

遺構内からは手づくねかわらけや下駄などが出土し、立てた下駄の上にアワビ殻を被せた状況も見られた。意味は不明。

遺構58は遺構57の下位に遺存する。サブトレンチによる部分的な確認にとどまったが、57と同様の木組み護岸を有する東西溝状遺構と考えられる。幅約36cm、確認長は240cmを測る。護岸材の上端を確認できたので、深さは不明。走方向は、N85° W。

遺構133・138・137はやや大形の土坑で、有機質腐植土（鎌倉の遺跡調査では慣例的にマグソと呼ぶ）を覆土とする共通点をもつ。137と138は側壁がオーバーハングする袋状の断面形を呈し、規模・形状の近似性から同一の機能を有していたことが想定される。133は直径120cmの不整円形プランを呈し、確認面からの深さは50cmを測る。137は北端部が調査区外に続くため全体の検出には至らなかったが、概ね直径130cmの円形プランを呈していたと思われる。確認面からの深さは77cmを測る。底面上では部分的に硬化した繊維状物質が認められた（図版4-7）。138も東側の1/2以上が調査区外に続くため全体規模は定かでないが、概ね直径110cm前後の円形を基調とする平面プランを呈していたと考えられる。確認面からの深さは97cmを測る。

この他、規模のやや小さい土坑やピットが複数検出され、II - 西区では不整形土坑の切り合いが顕著であった。

第2節 出土遺物（図15～図29）

図15は表土～1面検出時までに出土した遺物を掲げた。中世と近世の遺物を図示したが、出土層序は近・現代である。1～10はロクロかわらけ。7・8は15世紀代、10は近世まで時期が下るだろうか。11は素焼きの土器で蓋と見られる。在地かわらけと同じく、胎土に白色針状物質を含んでいる。焼成は良好である。類例が乏しく定かでないが、これも近世まで下る資料となろうか。14は銅製の煙管雁首。江戸遺跡の編年研究から、18世紀後半の年代観が与えられる。

図16は1面検出遺構の出土遺物。15は遺構1出土の砥石。16～27は遺構10から出土。量としては



図10 3面 遺構27・135

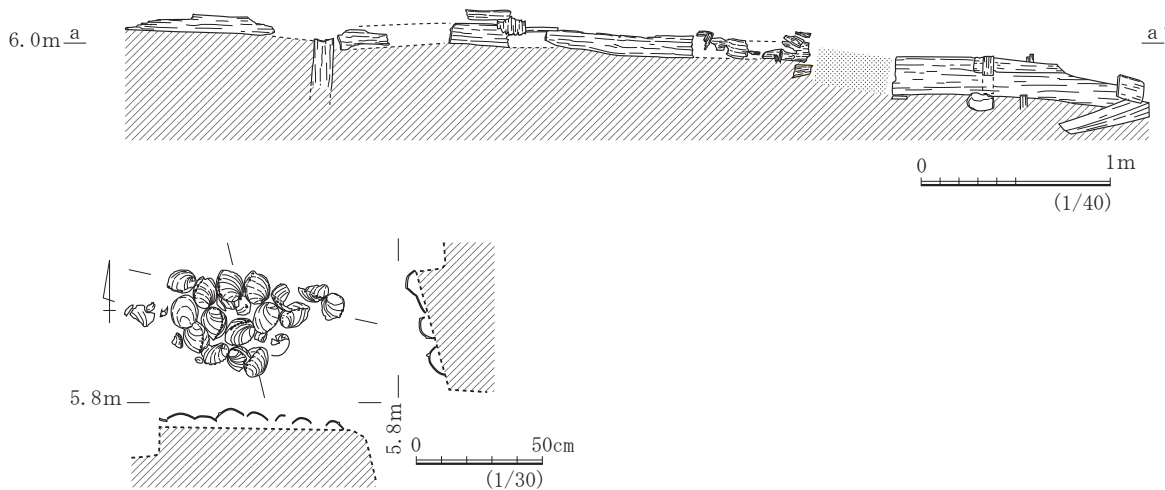


図11 3面遺構27

近世の遺物が主体を成すが、21の瓦片などは近代まで下るものとなろう。22の火打石は半透明石英質の割り石を用いており、殆どの稜角に打撃・摩擦痕が認められる。25は用途不明の銅製品。両端近くの側面に貫通孔2ヶ所を設けている。26は木製の刀子柄。先端部に鞘と咬み合わせる突起を作出している。27も木製品だが用途は不明。板材短辺の凹部に角棒を差し込み、鉄釘で挟み込む形で固定している。28～31は遺構7a（カマド）から出土。28～30は肥前系磁器の染付け碗。何れも外面に手描きによる絵付けが見られる。

図17も1面遺構の出土遺物。33は遺構9の据甕底部。常滑産と思われる。胎土は均質で焼成は良好である。中世の常滑甕に比べて緻密で硬質な仕上がりとなっている。35は遺構11出土の常滑壺。ほぼ完形であるが口縁端部に僅かな摩擦痕が認められる。外面の胴下部にはへら描きの一本線が見られる。窯印であろう。

図18には1面下から2面まで掘り下げる際に出土した遺物を掲載した。中世遺物が主体であるが、近世・近代の遺物も少量ながら出土している。43～45は手づくねかわらけの小皿。46～58はロクロかわらけ。46・47は極小タイプの内折れ皿。48～54は小皿、55～58は大皿。これらのかかわらけは、何れも中世に帰属する。59は肥前系磁器の染付け碗。60は陶器の染付け碗。産地は特定できない。61は均質・緻密な胎土で軟質な焼き上がりとなっている。近代以降の所産か。67は筒状の銅製品で、煙管の吸口であろうか。被熱のためか、空洞部が若干潰れてしまっている。

図19にも2面までの掘り下げ時、および2面遺構の出土遺物を掲載した。68～70が2面までの掘り下げ時の出土で、いずれも中国・北宋代に発行された銅銭。3点とも銭銘が良好に読み取れる。71以下は2面遺構の出土遺物。遺構23出土の73は常滑甕の口縁部小片。近世、18世紀中葉～後葉の所産か。83は遺構63出土の寛永通寶。これら近世遺物が出土した遺構は、1面で確認しきれなかった可能性が高い。89・90は遺構66から出土。90は頁岩製の硯。石材は京都・鳴滝産と思われるが、作硯は滋賀・高島産と見られる。裏面に針状具による線刻が見て取れる。

図20には2面下から3面検出までに出土した遺物を掲載した。91～96は手づくねかわらけの小皿。97・98も手づくねかわらけで大皿。99～108はロクロかわらけ。107が大皿、108が柱状高台皿と見られる他は小皿である。図示した分では手づくねの比率が高いように思われるが、出土した破片数・重量ではロクロ成形が手づくねを凌いでいる（表1）。また、図示はしなかったものの、ここでも近世遺物が若干量出土しており、やはり上層調査時の掘り残し遺構に包含されていた遺物と考えられる。

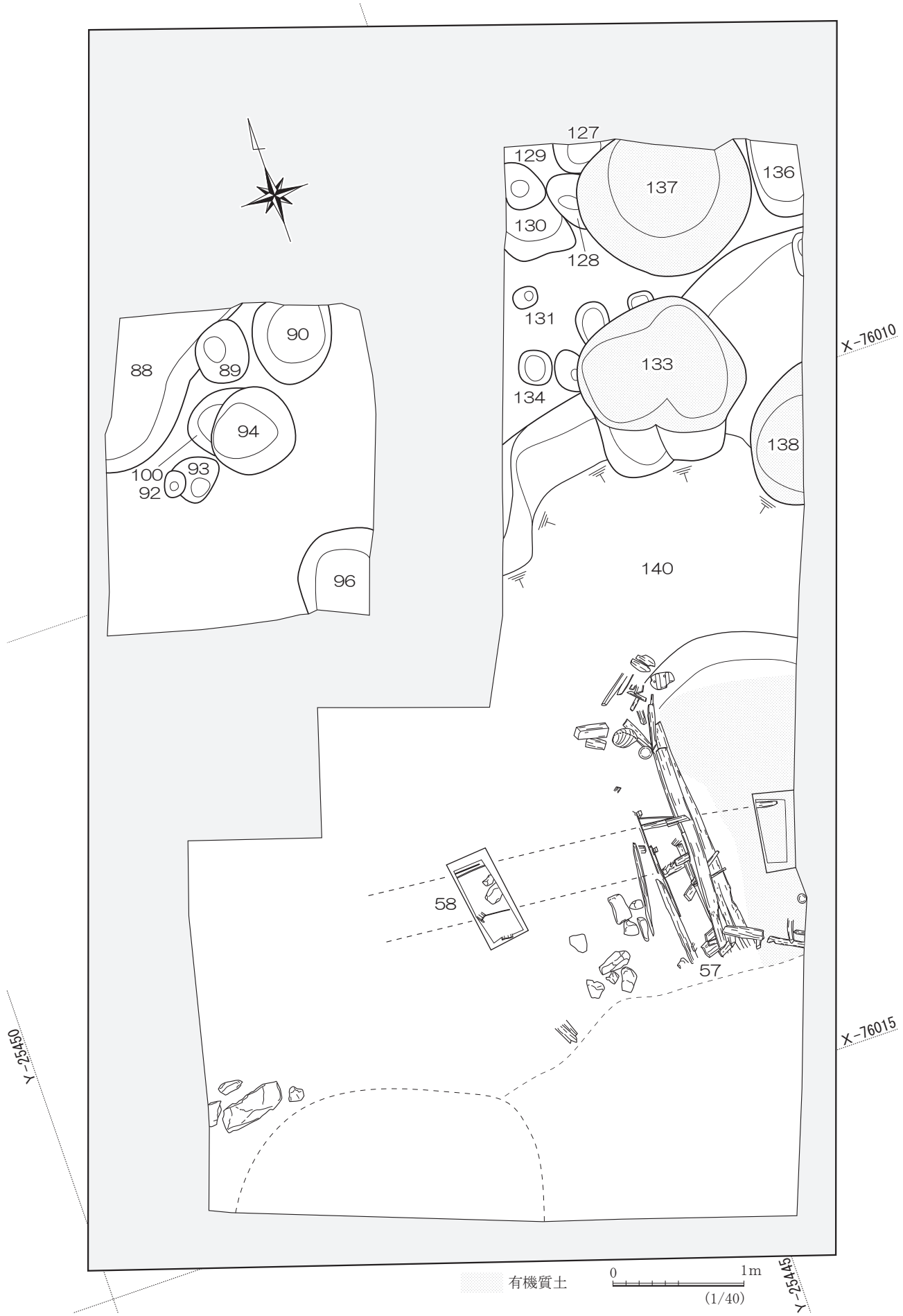


図12 3面下全体図①

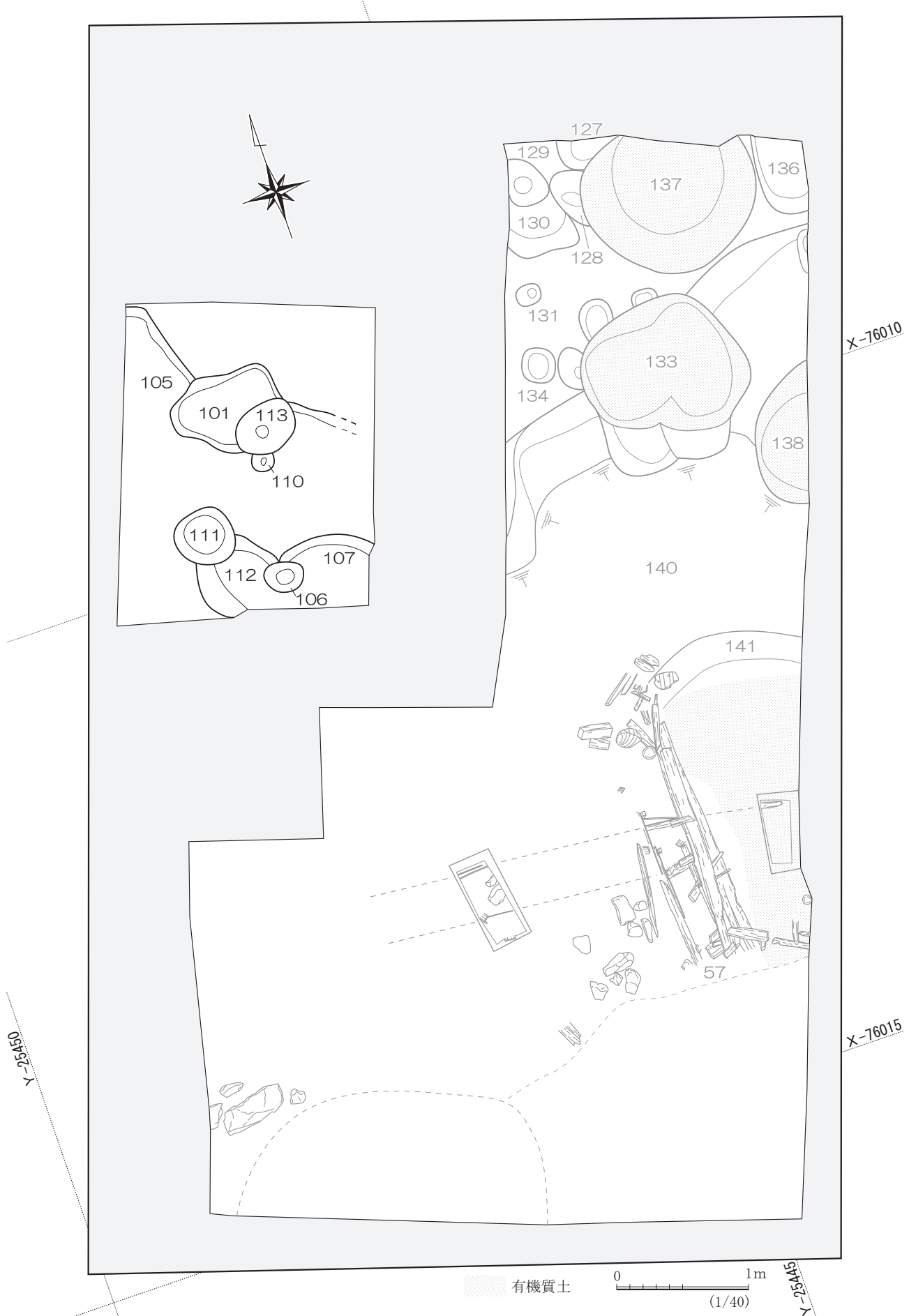


図13 3面下全体図②

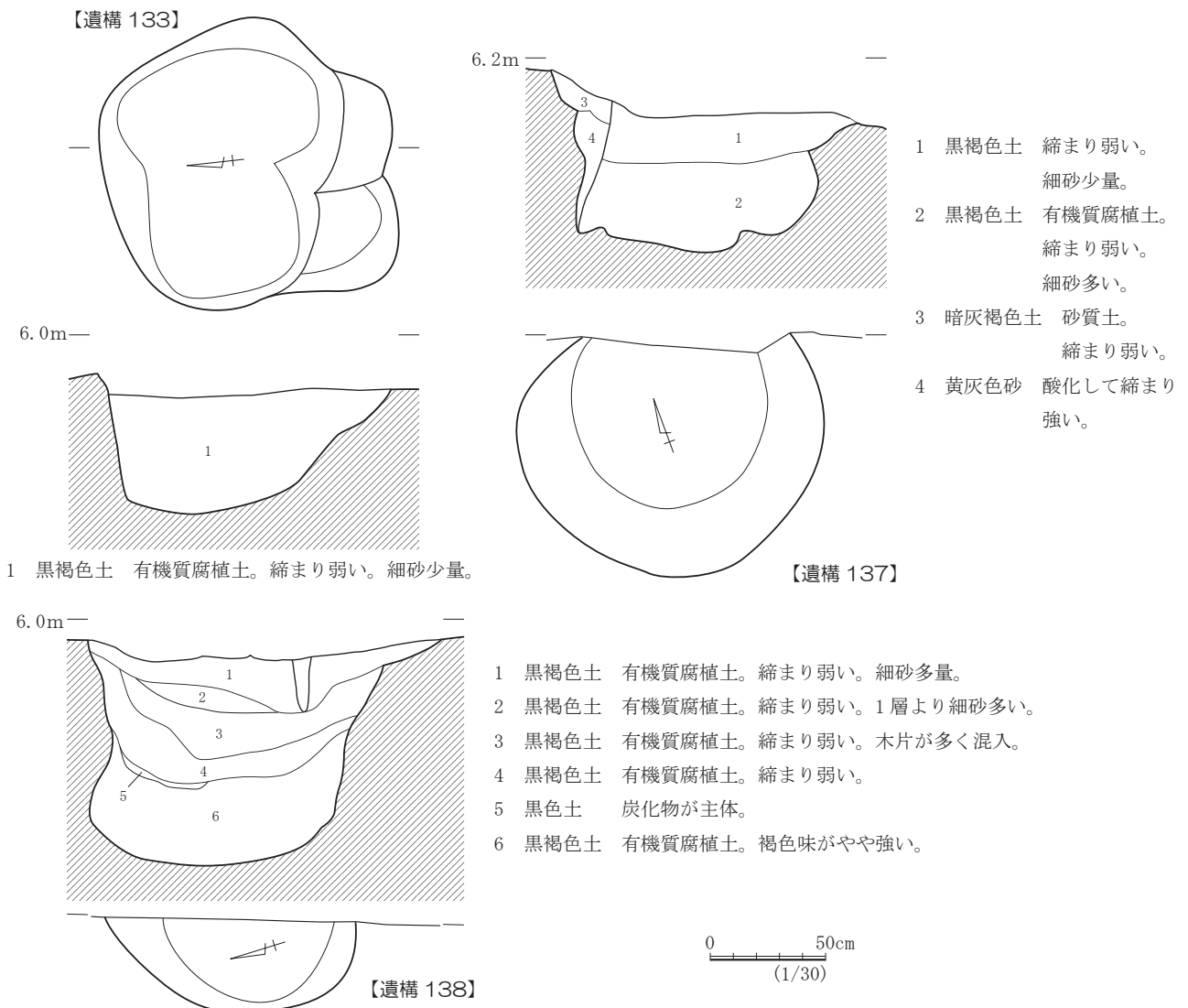
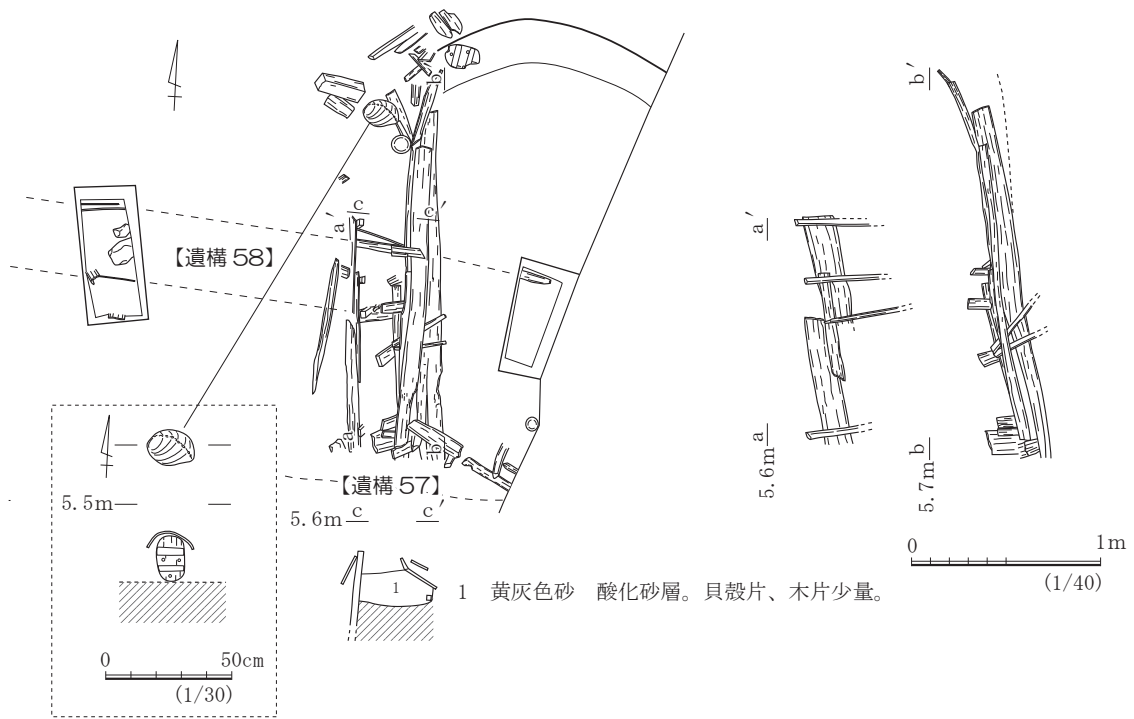


図 14 3面下 個別遺構図

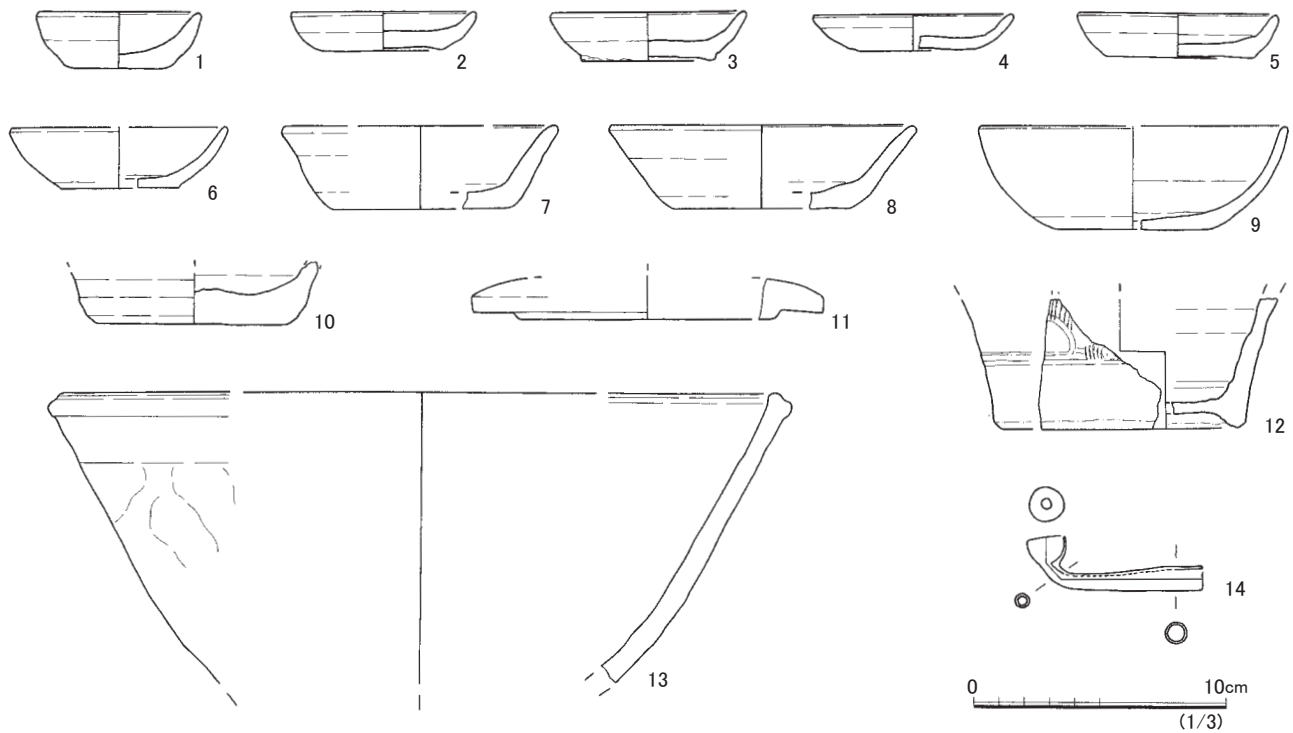


図15 表土～1面 出土遺物

図21～図24には、3面検出遺構からの出土遺物を掲載した。

図21 - 118～122は遺構135（南北道路）出土の遺物。出土総量は少なく、路盤構築土への包含遺物が主体となるため、小片遺物が大部分を占める。なお、路盤下ということで、表1においては3面下の欄に本遺構からの出土遺物を掲載している。118は手づくねかわらけの小皿。119はロクロかわらけの小皿で、外底面には静止糸切り痕が残る。本遺構出土のかわらけは、大・小ともに手づくねがロクロの破片数・重量を上回っている。121は常滑甕（壺）の肩部片で、外面に断面三角形の凸帯が巡る。外面に掛かる自然釉は厚く、光沢が鮮やかである。

図21 - 123～図22 - 163は遺構27a（板壁建物）の覆土から出土した。123～128は手づくねかわらけの小皿。129～132も手づくねかわらけで大皿。133～144はロクロかわらけ。138までが小皿、139～144が大皿である。138は上面観が擬扇面状となっている。割れ口の状況から、故意に打ち欠き・二次整形されたものと考えられる。143も二次的な加工痕が見られ、割れ口の二辺が摩擦によって平滑になっている。144は厚手の底部を有し、内底面には横方向の指ナデを施していない。外底面の回転糸切り痕は摩擦によるものか、やや不鮮明となっている。

図22 - 145・146は舶載磁器。145は青白磁の合子蓋。天井部の外面に草花文のレリーフが見られる。146は白磁口元皿（碗）の口縁と底部の小片。ともに内面に細線による文様が見て取れる。作りは非常に薄い。147は陶器の壺で、全体形状は復元できず、頸部・肩部・底部の破片をそれぞれ掲図せざるを得なかった。大きくは東海諸窯産と見られ、胎土の緻密さから瀬戸または渥美を産地候補として考えているが現時点では特定に至っていない。149は尾張産片口鉢。無高台ながら体部から口縁部の内外面は回転ナデ調整であり、口縁部は丸く仕上げられている。外面体部下端には回転ヘラケズリ様の調整痕が看取でき、全体としてⅠ類の特徴を備えている。Ⅱ類への過渡期に作成されたものとなろうか。150は常滑の片口鉢で、体部外面に指頭押圧痕を残すⅡ類。口縁端部はやや内傾する平坦面を成している。154は古代の須恵器坏底部。156は軽石加工品、2面に摩擦痕と数条の条痕が見て取れ、研磨具と考えて良いだろう。157～159は北宋銭。159は157と対照的に銹化が著しく、辛うじて「大観通寶」の銭銘



図16 1面 出土遺物①

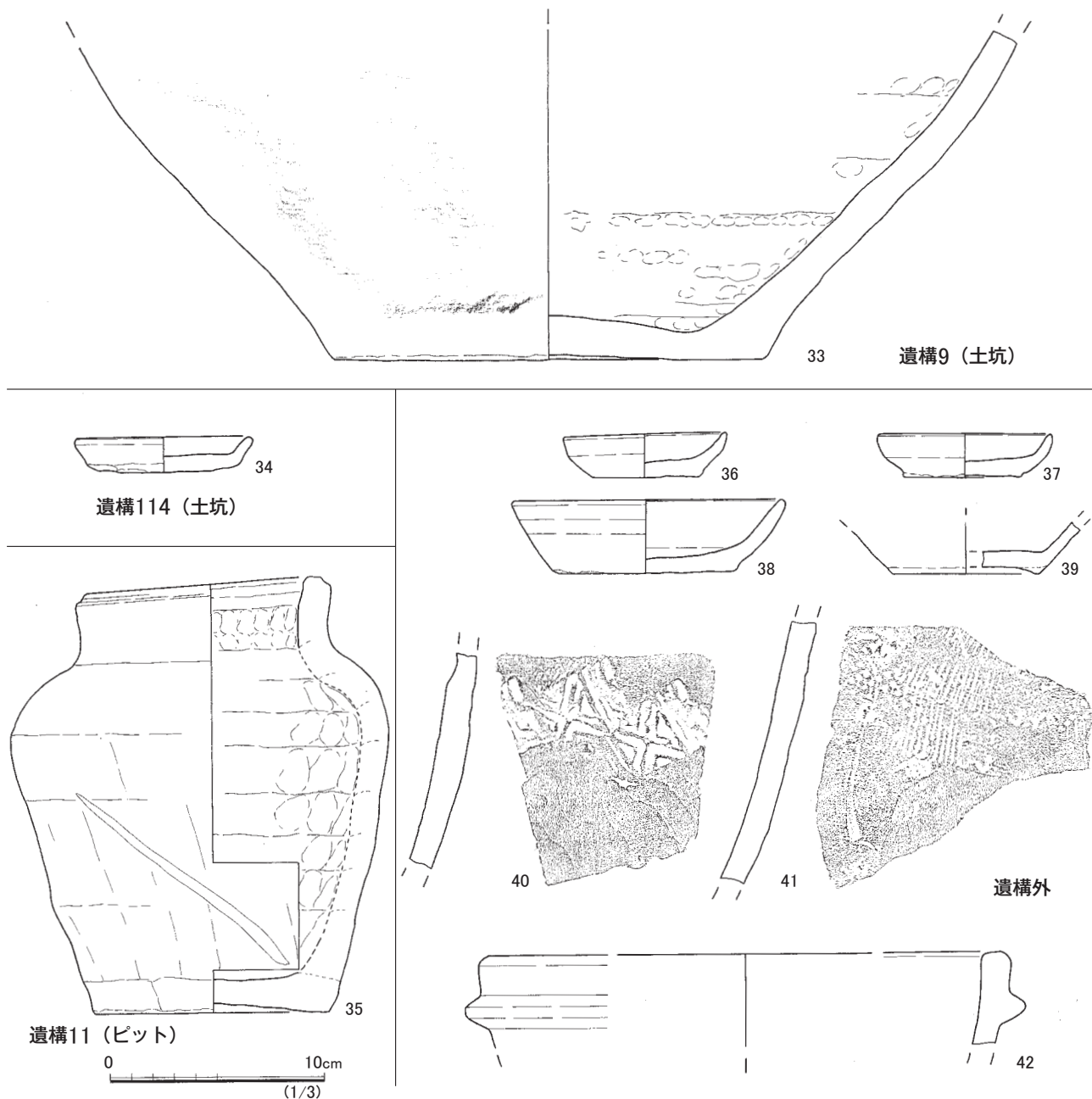


図17 1面 出土遺物②

を読み取ることができた。162は用途不明の円盤状木製品。板目材を使用している。163は貝殻の殻頂部を切断してリング状に加工した製品。ツタノハガイ科のマツバガイ、またはベッコウカサガイの殻を用いたか。切断面も含む外面は摩擦によるものか、やや滑らかになっている。用途は不明。

図23も3面遺構出土遺物。164～183は引き続き遺構27aに帰属する遺物で、171までが覆土下層、172～174が床面上、175～183が裏込め土など掘り方から出土。164・165は手づくねかわらけの大皿。165は底部のみの破片で、中央に穿孔がある。焼成後、内・外面から穿たれたものと見て取れた。168は素焼きの土器で、器種不明品の口縁部片。図示した傾きも不明確である。169は常滑壺の胴下端～底部。成形が粗雑で、胴部内面には粘土紐を巻く際のシワが顕著に残る。170・171は常滑甕の口縁～肩部で、ともに5型式。171は肩部外面に細かな斜格子のスタンプ文と指ナデによる2条の凹線が見られる。後者は、窯印か。172は手づくねかわらけの小皿。173はロクロかわらけの大皿。174は木製の横櫛。表面は黒色を呈するが、漆塗膜は確認できない。175～178は手づくねかわらけの小皿・大皿。179～182はロク

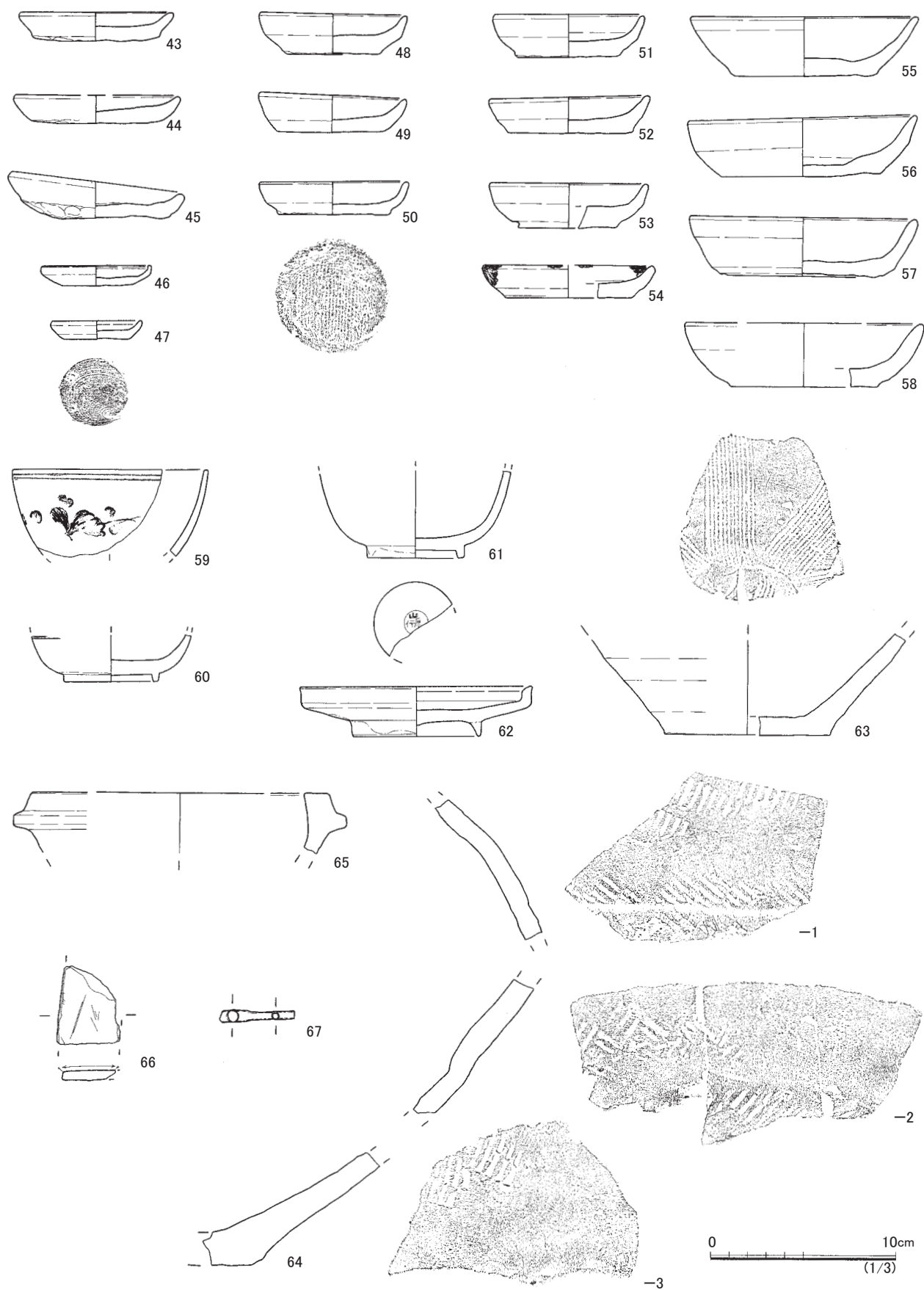


图18 1面下出土遺物

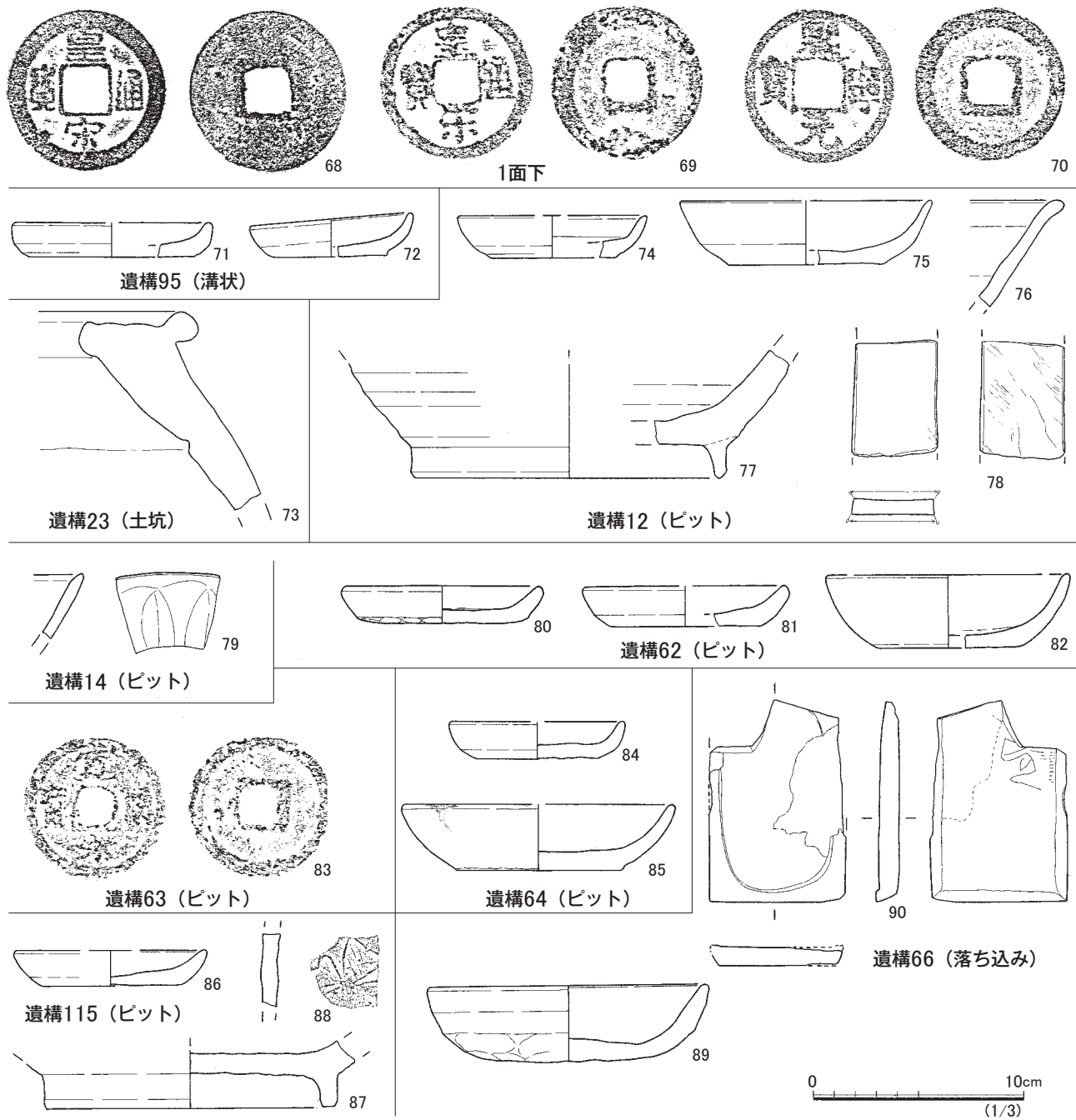


図19 1面下・2面 出土遺物

ロかわらけの小皿である。本遺構で出土したかわらけは、大皿で手づくねがロクロ成形品を凌駕し、小皿では両成形品が拮抗した破片数と重量を示している。183は円筒形の木製品で、容器の栓であろうか。

図23 - 184 ~ 194は他の3面遺構から出土。遺構54出土の185は注口部を欠くが瓜形水注であろう。小片からの復元であり、図示した径には不安が残る。遺構41出土の186は寛永通寶の文銭で、遺構1や遺構10など隣接する上層遺構の覆土を掘り残していたために混入したものと思われる。

図24 - 195 ~ 205は遺構27bから出土した遺物である。195 ~ 197はロクロかわらけの小皿と大皿。198は素焼きで小型の壺形土器。胎土には白色針状物質を含む。203は銹化の著しい銅銭。「熙寧元寶」と微かに判読できた。

図25 ~ 27には3面下の遺構から出土した遺物を掲載した。

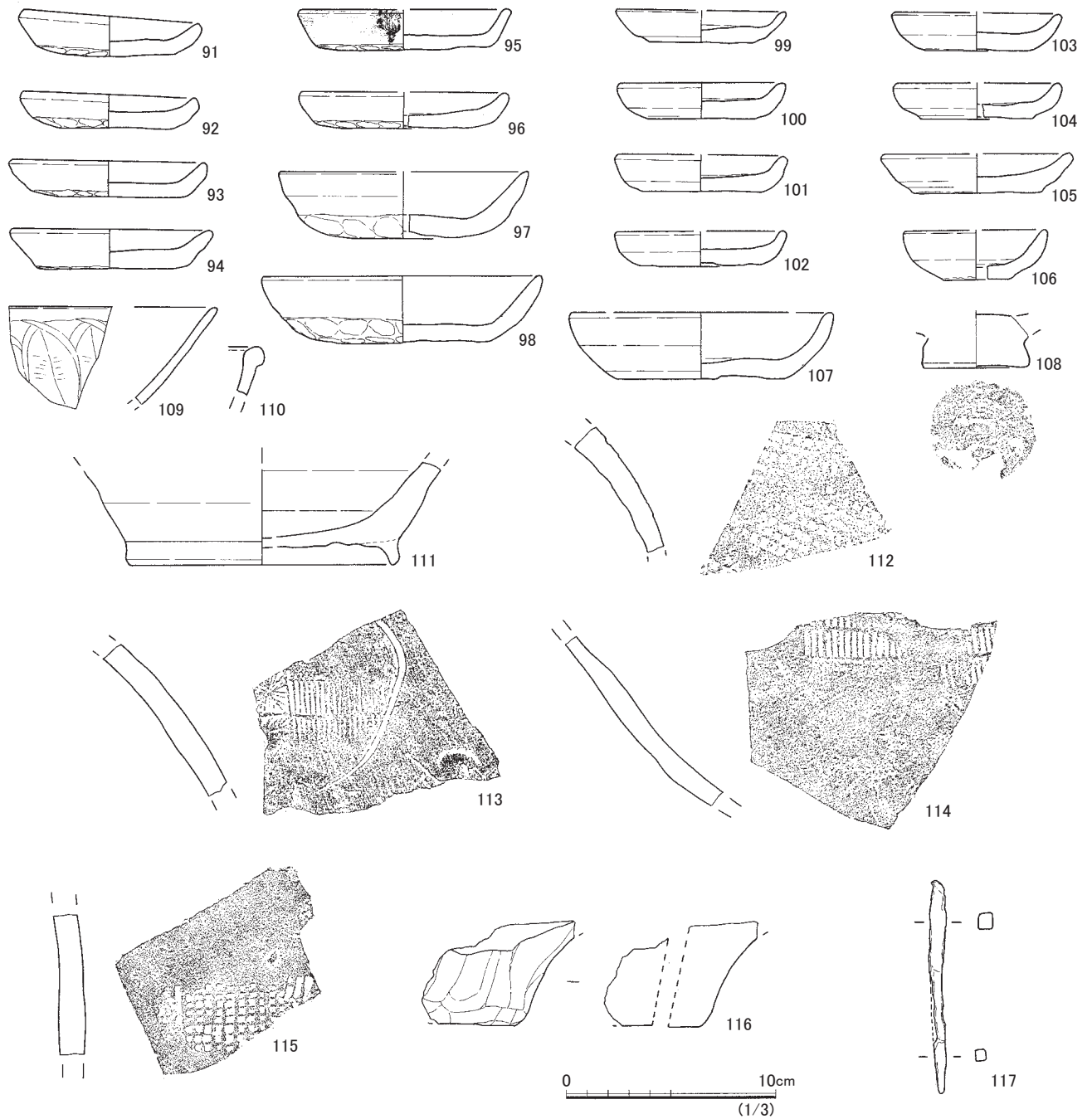


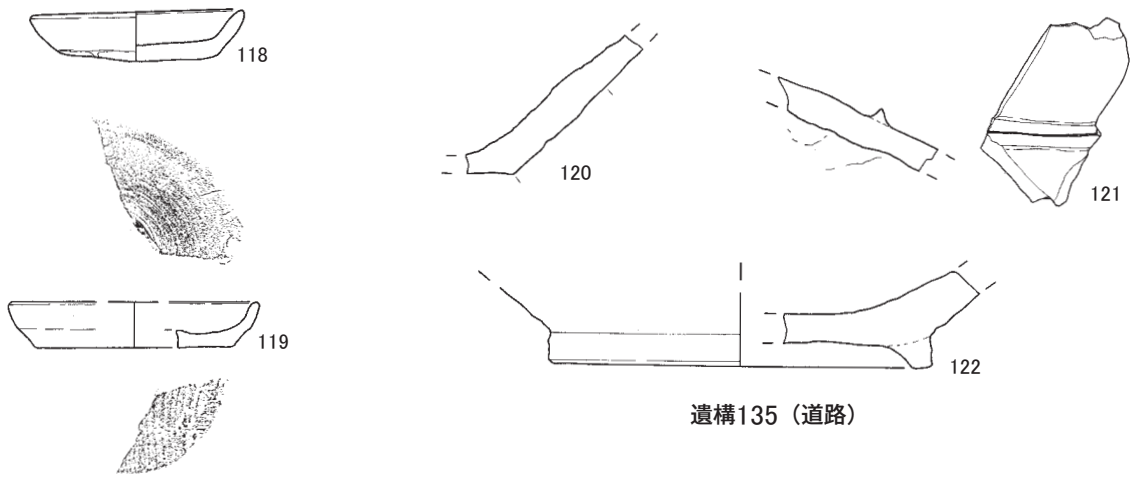
図20 2面下 出土遺物

図25 - 211 ~ 217は遺構133から出土。211・212は手づくねかわらけの大皿。213はロクロかわらけの大皿。本遺構では、出土かわらけの主体は手づくねとなる。217は常滑甕の胴部と底部。胴部外面に菊花文のスタンプを捺している。

図26 - 219 ~ 224は遺構138から出土。219・220はロクロかわらけの小皿。本遺構では手づくねも一定量の出土があり、大皿はロクロ成形品を超える破片数・重量を示している。

225 ~ 245は遺構140から出土。225 ~ 227は手づくねかわらけの大皿・小皿。本遺構でのかわらけ出土破片数は5点で、うち4点が手づくね成形品となっている。231 ~ 245は木製品。231は形状から鳥形との見解を示したが、確定はできない。232 ~ 245は箸。本報告では完形、もしくはそれに準じる資料のみを1点 = 1個体としてカウントした。

246は遺構141で出土した手づくねかわらけの大皿。本遺構からの出土遺物は、この1点のみである。



遺構27a (板壁建物?) 覆土

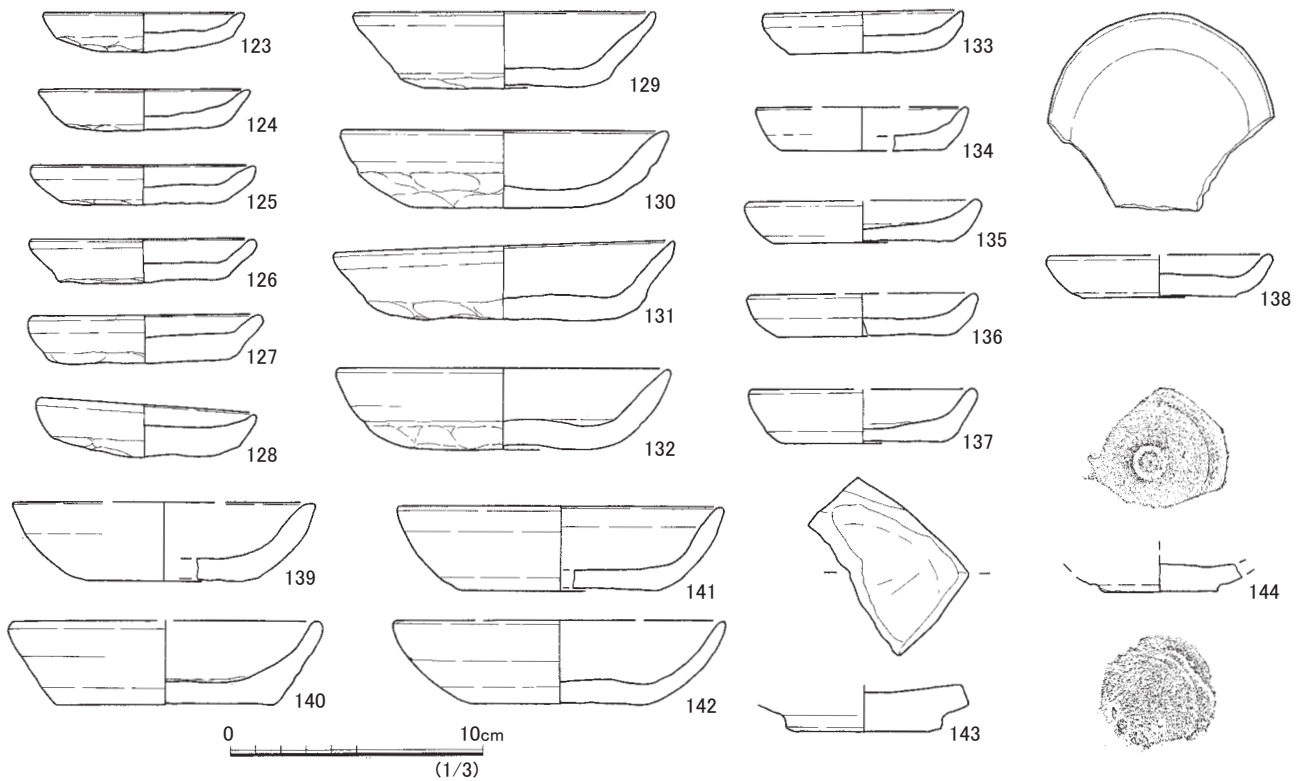


図21 3面 出土遺物①

図27 - 247 ~ 251は遺構57の木組み内から出土した。247 ~ 249は手づくねかわらけの小皿。249は焼け歪みが顕著である。250は漆器皿。内外面とも黒色漆が塗られ、文様は施していない。251は木製連歯下駄。後方を下にして立った状態で出土し、この上にアワビ殻が被っていた。252 ~ 260は遺構57の西側、261・262は東側から出土した。明確な掘り方プランを検出した訳ではなく、近接位置で出土したという程度の認識で捉えている。252は手づくねかわらけの小皿。253 ~ 257はロクロかわらけで、255までが小皿、256が大皿、257は柱状高台皿と思われる。256・257ともに底部外面の回転糸切り痕が不鮮明である。261・262はロクロかわらけの小皿と大皿。262の底部外面には静止糸切り痕が残る。本遺構および周辺出土のかわらけは、大皿では手づくねが主体だが、小皿の重量に関しては手づくね・ロクロ成形品が拮抗した数値を示している。

269 ~ 275は遺構105から出土。269 ~ 271は手づくねかわらけ。270の小皿と271の大皿は口縁端部

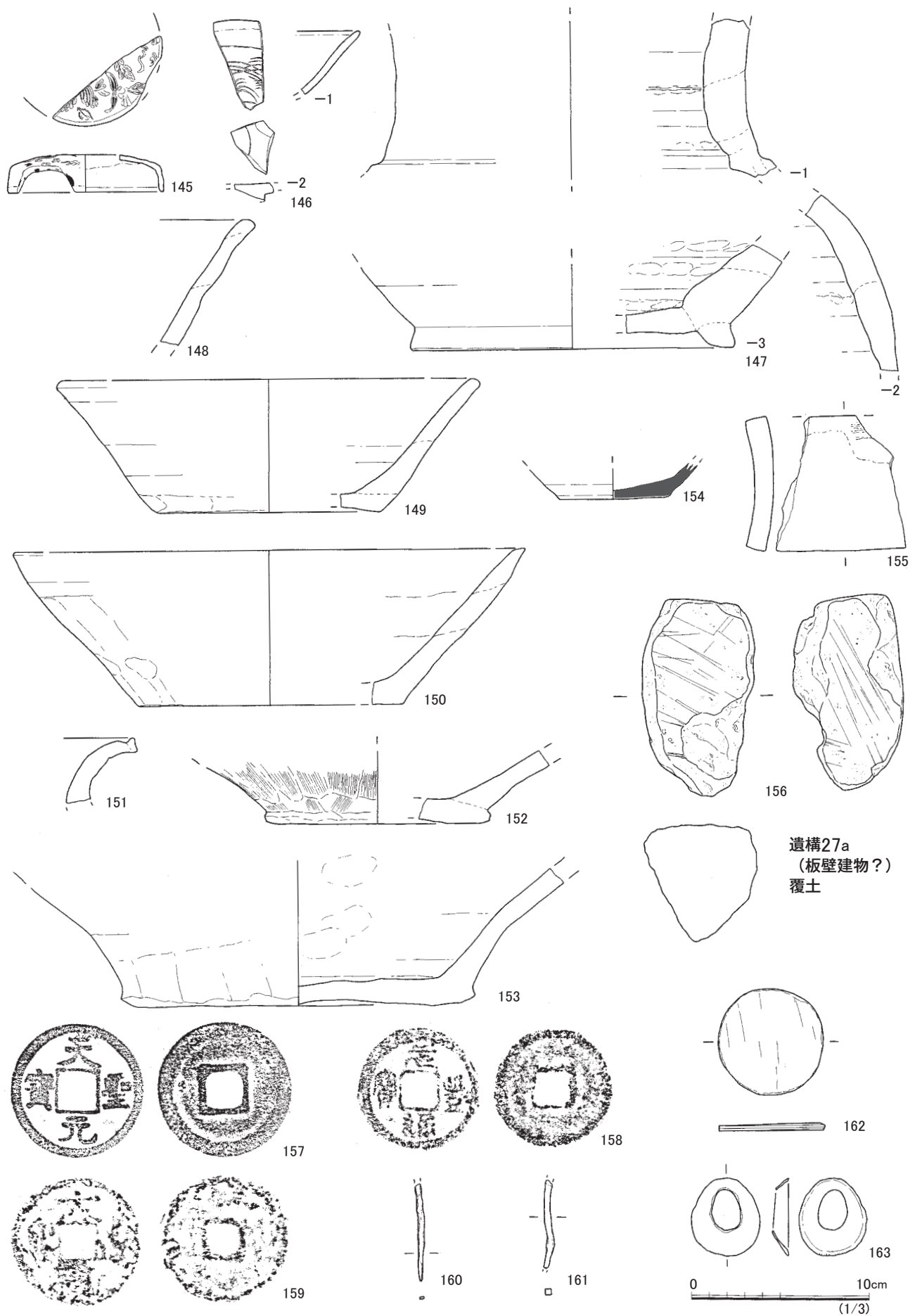
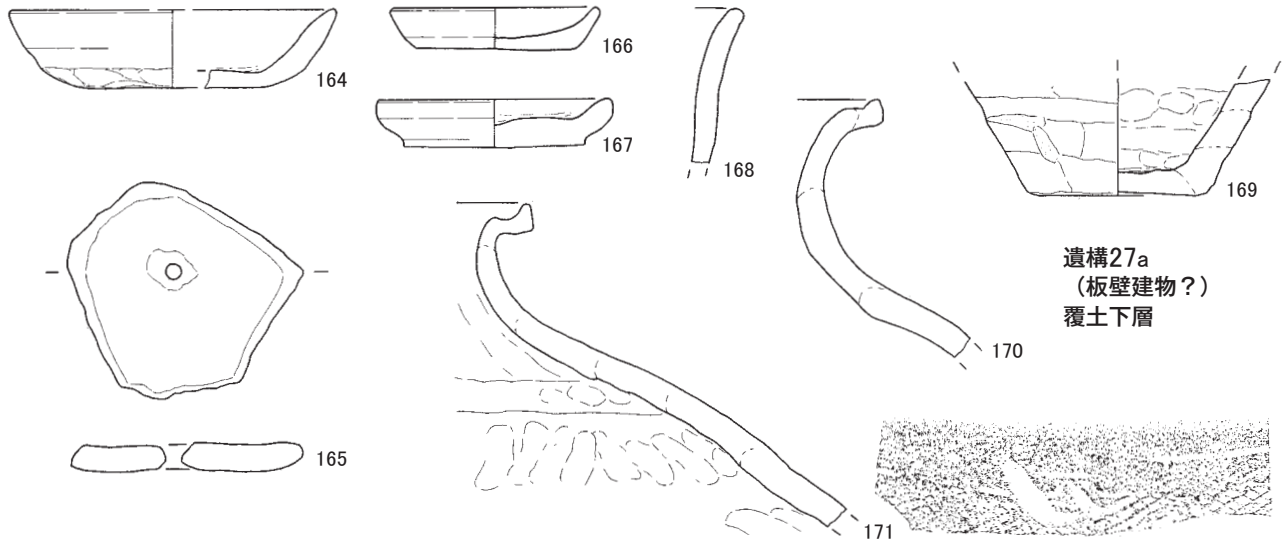
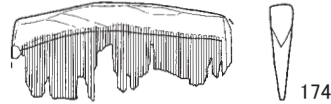
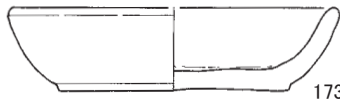


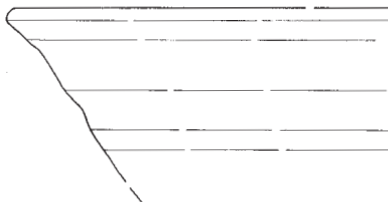
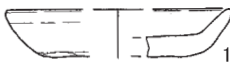
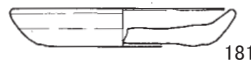
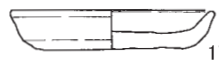
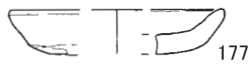
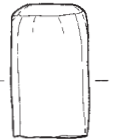
图22 3面出土遺物②



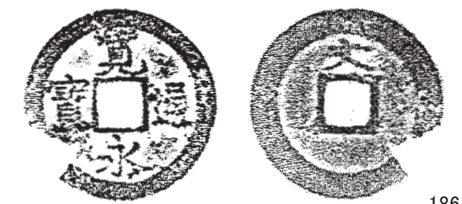
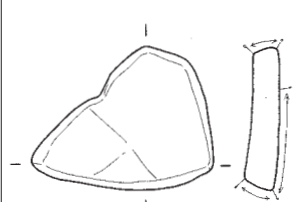
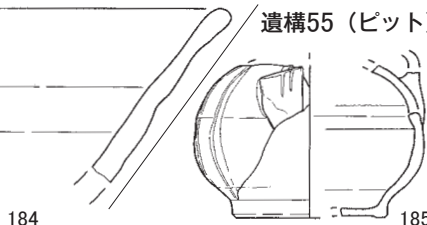
遺構27a (板壁建物?)
床面上



遺構27a
(板壁建物?)
掘り方



遺構54 (土坑)



遺構41 (溝状)



遺構86 (ピット)

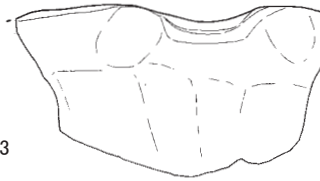
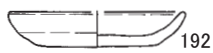


遺構84 (ピット)



遺構81 (落ち込み)

遺構外



遺構87
(落ち込み)



図23 3面 出土遺物③

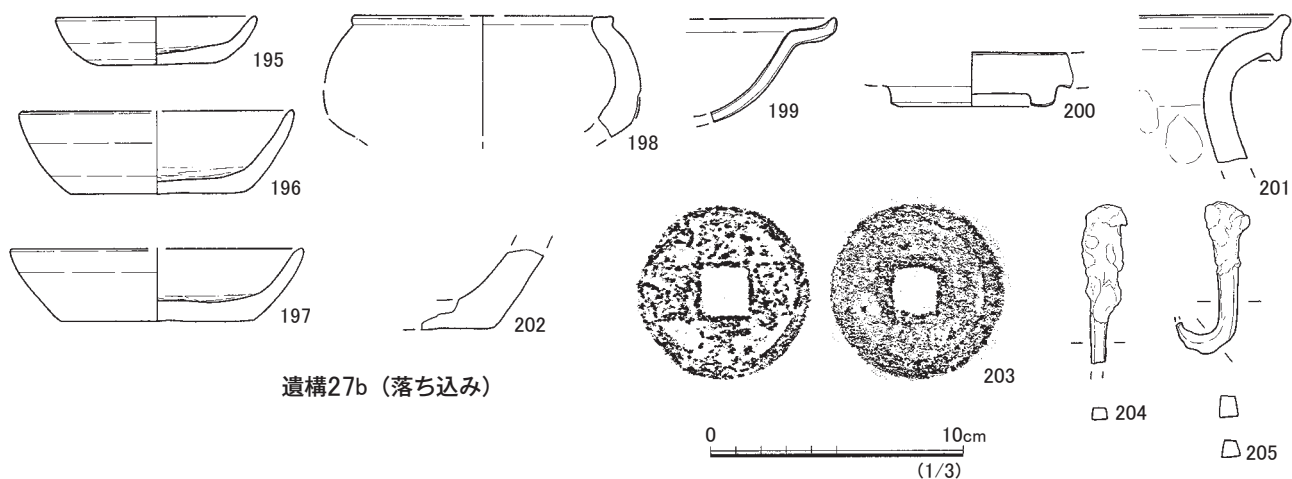


図24 3面 出土遺物④

がナデによって面取りされる。272・273はロクロかわらけの小皿と大皿。本遺構でのかわらけの出土量は、大皿では手づくねが主体で、小皿でも手づくねがロクロ成形品を上回っている。276は円盤状の鉄製品。

図28・図29も3面下からの出土遺物で、帰属遺構を把握できなかったもの。277～292は手づくねかわらけの小皿。293～296は手づくねの大皿である。297～313はロクロかわらけ。313の大皿以外、全て小皿である。297の底部内面には横方向のナデ調整が施されず、外底面に静止糸切り痕が残る。319は瀬戸の播鉢で、上層遺構の掘り残しなどから出土したものであろう。

図29－324は肩部に突帯をもつ常滑甕(壺)片。331は木製品で連歯下駄。332も木製品で草履芯。334はハマグリの殻で内面に黒色の付着物が見られる。漆または膠などの接着剤と見られ、パレットとして使用されたものであろう。

第五章 調査成果のまとめ

ここまで、発見された遺構と遺物について説明を行ってきた。既述のように各面での遺構の検出には苦慮し、下位の遺構面で上層遺構を確認する例も間々あった。こうした現地での混乱については整理時に修正を図ったが、十分に果たせないままの報告となった。反省点が多く、今後の調査に活かしたい。

以下、出土遺物から各遺構面の年代観を検討し、周辺の調査成果も参考にしながら本報告のまとめを述べたい。

第1節 各遺構面の年代観

1面では円形の凝灰岩切石積み井戸(遺構1)や、袖材として切石を配するカマド(遺構7a・b)が発見された。遺構1は本遺構よりも古い遺構10で近代の所産と思われる瓦片が出土していることから、近代以降に構築されたものと考えた。同形態の井戸は現在でもコンクリート枡を付け足すなどして使用されている例があり、近代以降、一定の規格のもと普及したと考えられる。遺構7aは肥前系染付碗から18世紀後半頃に使用されたと考えられる。遺構11ピット内に埋置された壺は常滑産で17世紀代の所産と考えられる。このように、1面の検出遺構には近世から近代までの幅が認められる。

1面下～2面掘り下げ時に出土した遺物には近世・近代遺物が混在しているが、これらは該期遺構の掘り残しに伴うものであろう。かわらけの形態や供伴遺物の特徴から明確な年代観は示しにくい。この

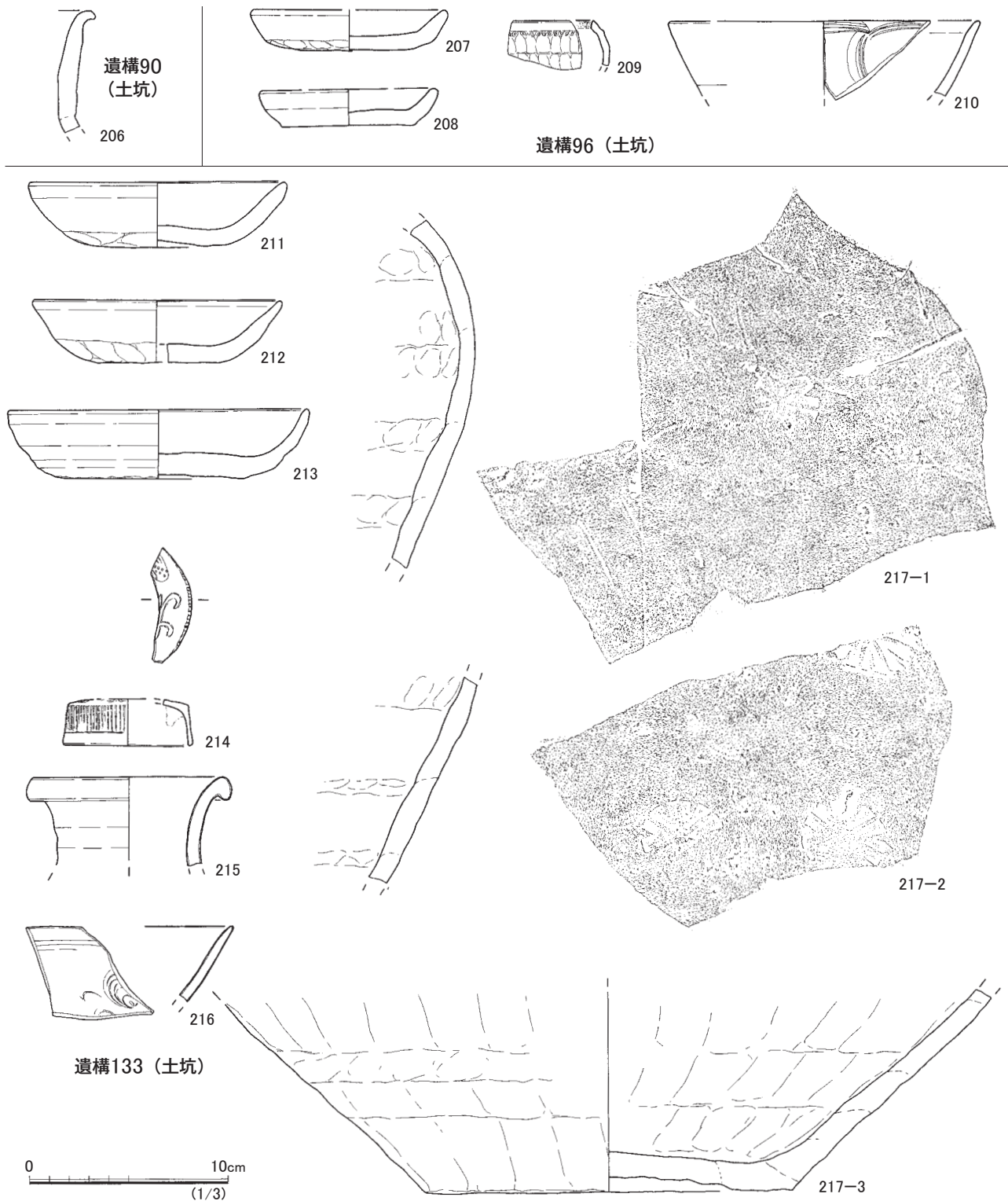


図25 3面下 出土遺物①

段階のかわらけを特徴付ける薄手丸深化や大・中・小への法量分化といった要素は見取れなかったが、後述する2面年代観との相対から、13世紀後半～14世紀前半頃の年代観を与えておく。

2面でも一部の遺構で18世紀代の遺物が出土しているが、これらは調査時の混乱に伴う混入遺物と考えている。残りの良い遺物が少なかったため面全体の傾向を示しているか注意が必要だが、かわらけに一定量の手づくね成形品を含んでいること、ロクロ成形品の大皿は底径が広く身深でないことから、13世紀中葉～後半の特徴と考えられる。この段階では大・小ともロクロ成形品の出土量が手づくねを上回る傾向が見取れる。2面下では両者の出土比率は縮まり、Ⅱ-東区では大皿で手づくねが上回る。

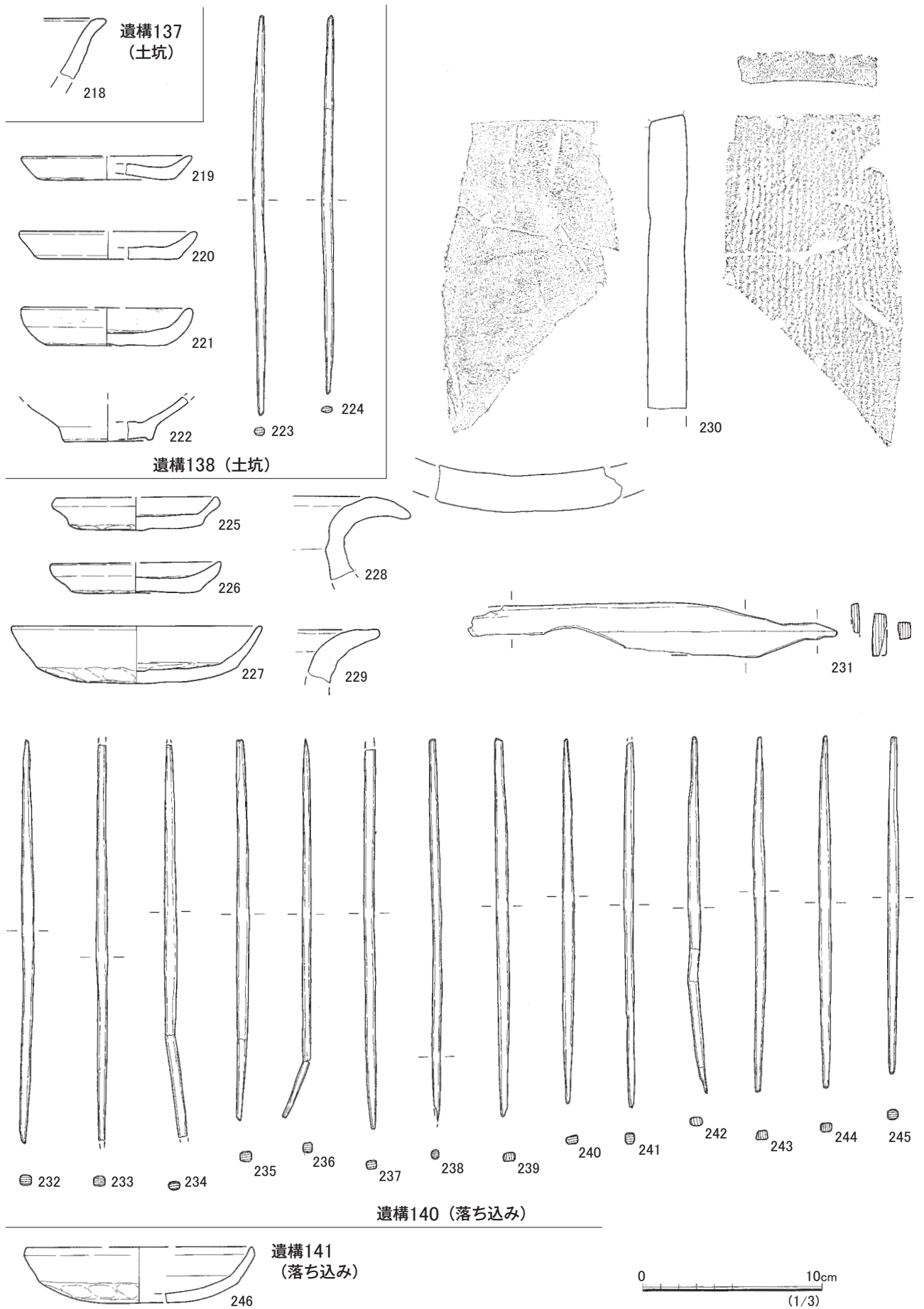
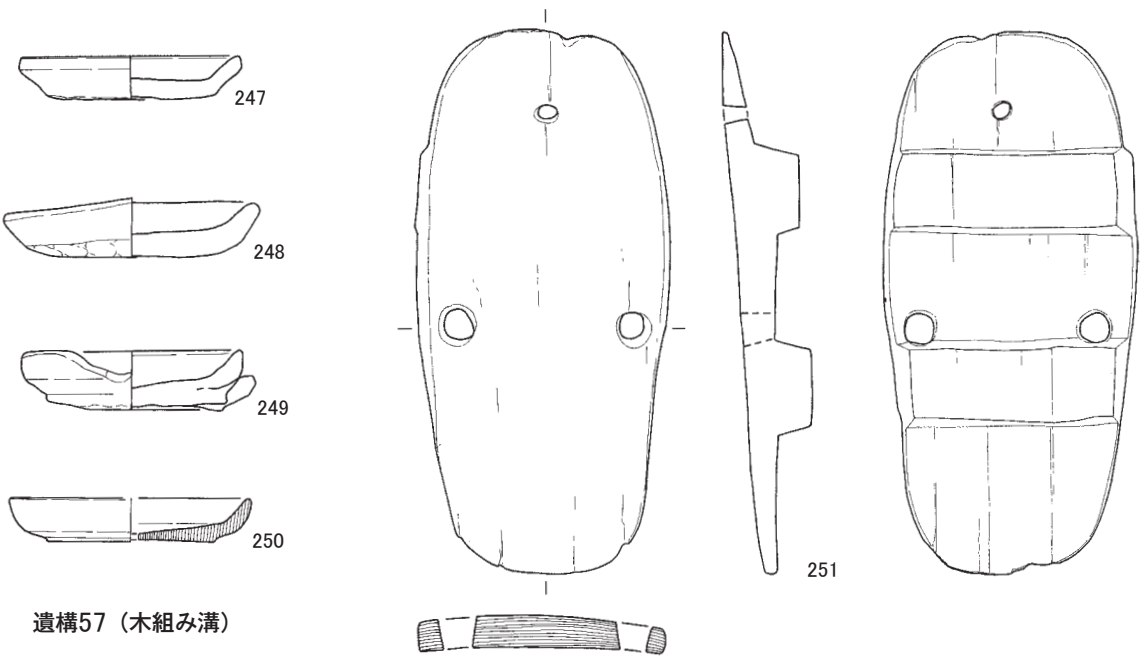
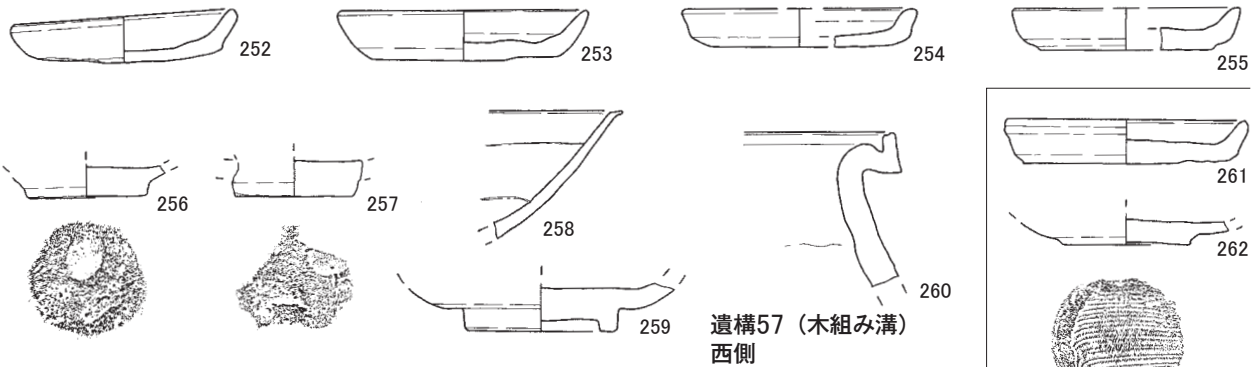


図26 3面下 出土遺物②

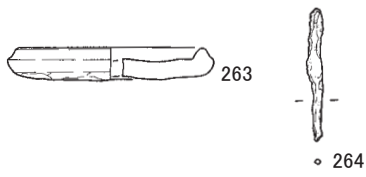


遺構57 (木組み溝)

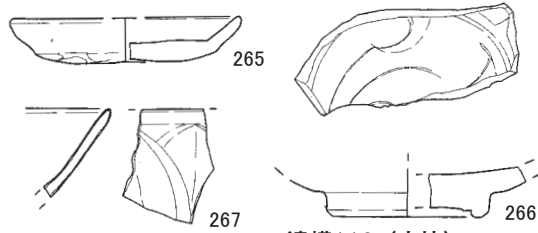


遺構57 (木組み溝) 西側

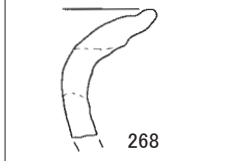
遺構57 (木組み溝) 東側



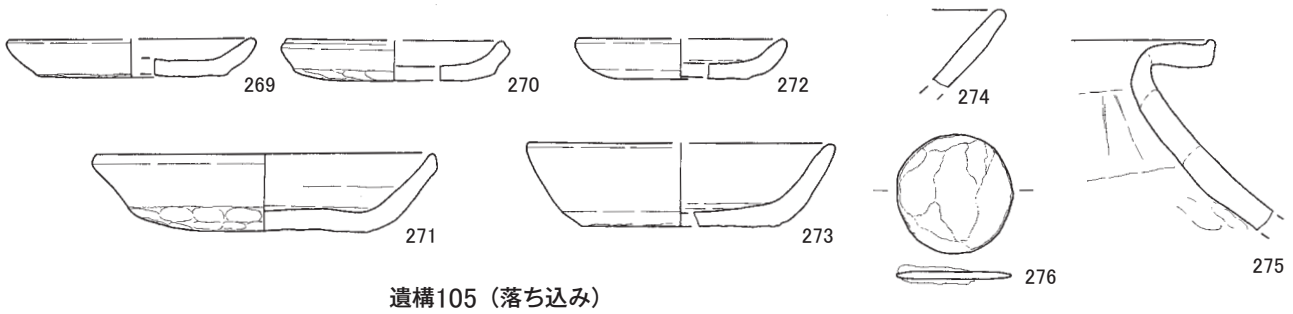
遺構107 (土坑)



遺構112 (土坑)



遺構89 (ピット)



遺構105 (落ち込み)



図27 3面下 出土遺物③

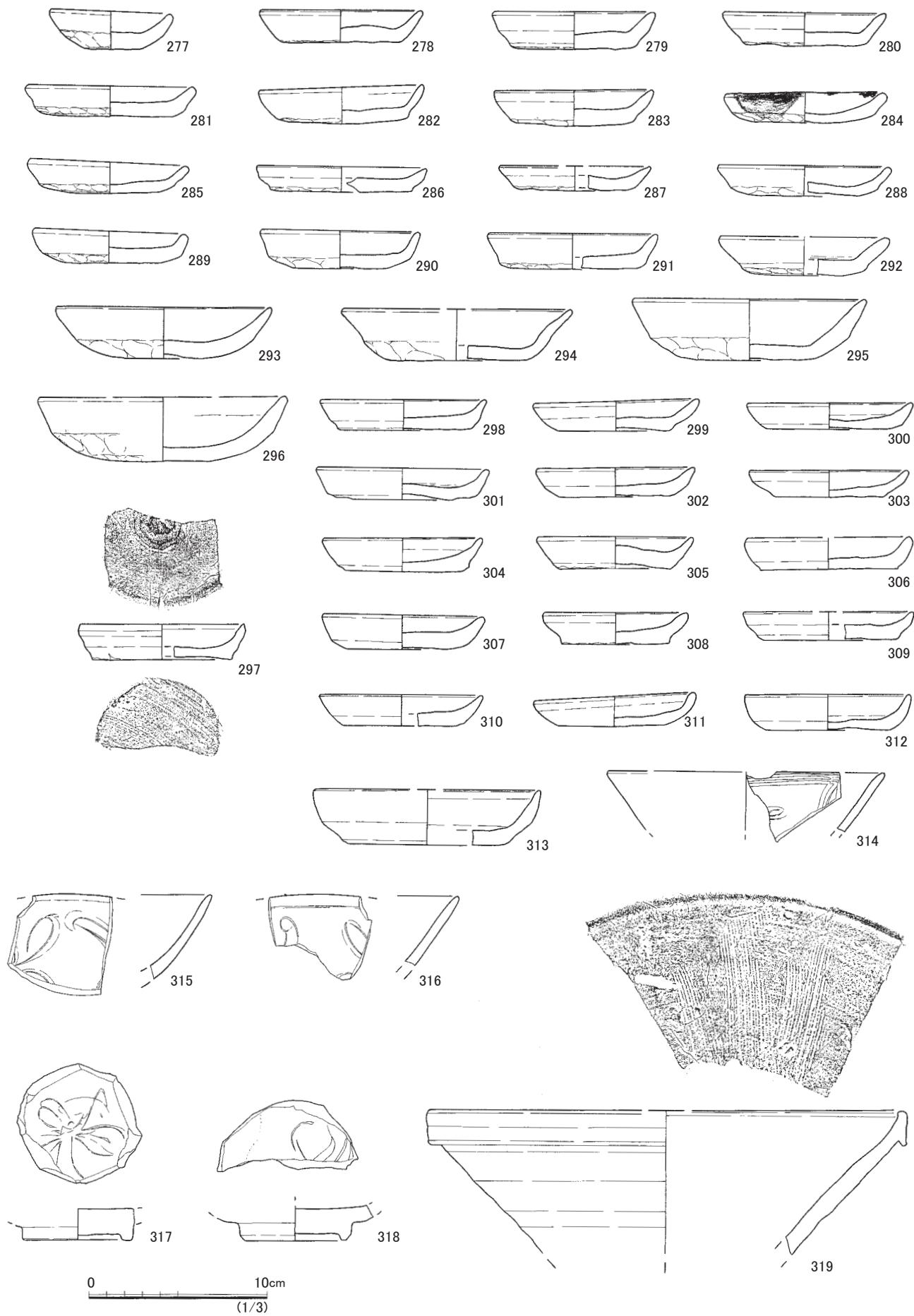


图28 3面下 出土遺物④

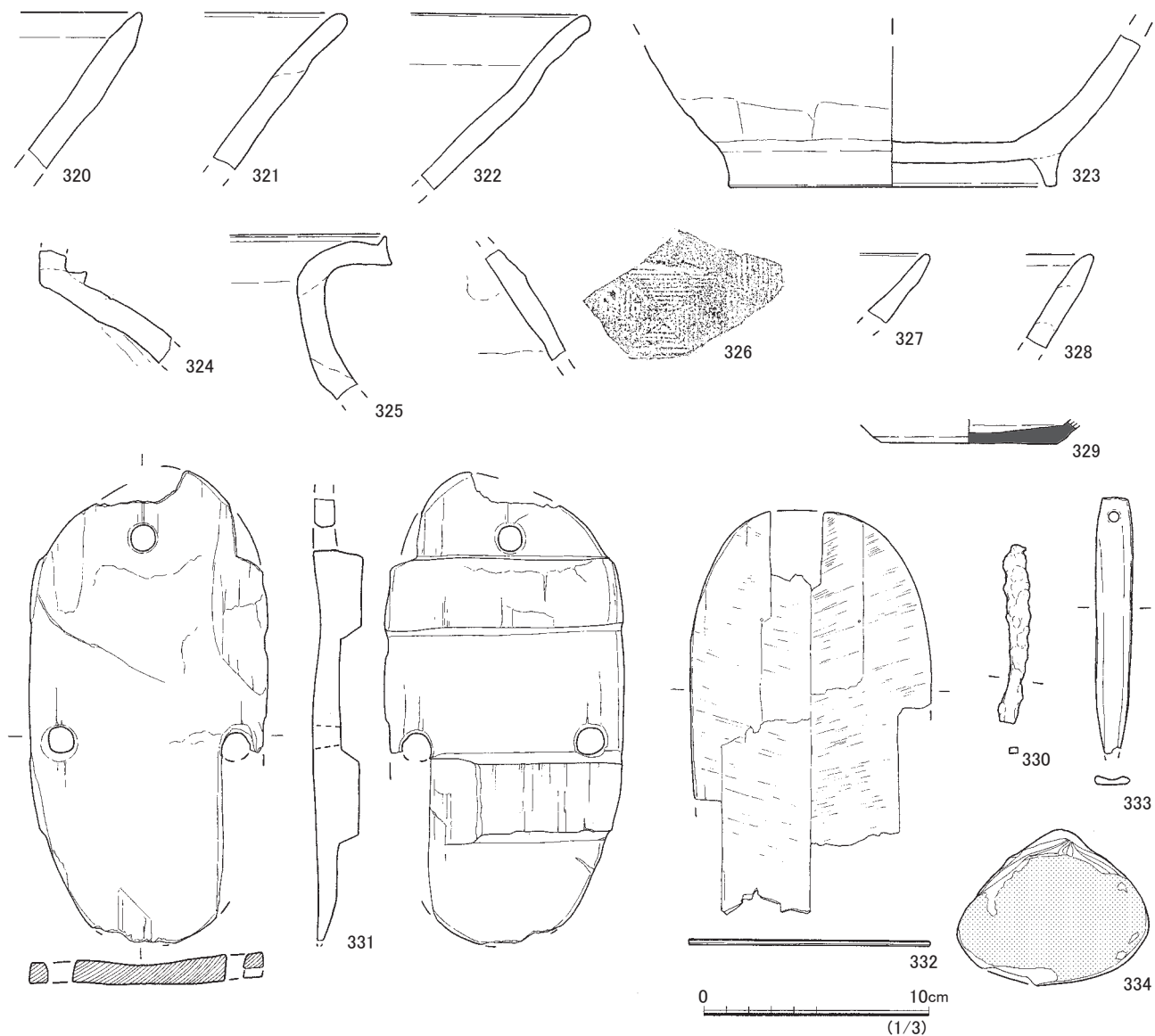


図29 3面下 出土遺物⑤

3面遺構では手づくねの出土比率が相対的に高くなるが、遺構によって異なり斉一的な動きとはならない。形態・法量上の特徴は2面・2面下のかわりけと大差がなく、ここから明確な年代差は認めにくい。遺構27aは覆土から常滑6型式の片口鉢Ⅱ類が出土しているので13世紀後半との位置付けも可能だが、前記かわらけの成形比率や2面年代観との対比から、13世紀中葉の年代観を示しておきたい。

3面下では手づくねかわらけの相対量が増し、一部の遺構を除きロクロ成形品を上回る状況となる。大皿・小皿とも口径が一回り大きく低平な側面観を呈するようになる。また、手づくねかわらけに器壁が薄く口縁端部を面状に整形する資料が何点か認められる。常滑窯の製品は5型式までに収まり、一部極端に新しい要素も混在するが、概ね13世紀第2四半期～中葉の遺物様相を呈している。

I区では規制深度より下位へも中世層の堆積が認められたため、さらに古相を示す遺物が包含されている可能性も想定されるが、IV層上に構築された遺構133・138など土坑からの出土遺物を参考とすれば、本地点では大よそ13世紀第2四半期前後に開発が始まったものと理解できようか。

周辺調査地では13世紀前半、または12世紀末～13世紀第1四半期といった年代を当地域における中世の開発始期と捉えている。本地点でも製作年代が12世紀代まで遡及する個体は認められるので、I区以南の下層には、より古段階の遺構が展開していた可能性も残しておきたい。

第2節 3面遺構の性格と軸線について

3面では南北道路の西に接して延びる、板杭で固定された横板を確認した。その西側での間仕切り状痕跡も含めて遺構27 a と捉え、本報告では板壁建物と性格付けた。ごく狭小な範囲での検出であり、横板が南に向けて低くなる点など、現代の視点からは建物と考えるのに否定的要素も存在する。また、板壁建物の壁体は地中に埋め込むのが通例とされるので、この論に従えば建物内と想定したアワビ殻の集積などは床下に埋置されたことになる。こうした点をもとに、本遺構の性格をめぐっては以下の二説も併記しておきたい。①建物と考えた上で、壁体は地中に埋め込まず、ごく浅い竖穴の底を床面として使用した。この場合、直床となるので作業場など居住とは異なる用途を推測できる。②横板は南北道路の補強を目的に設置された。

3面以下の遺構は、概ね真北を意識した軸線で構築されたものと考えた。遺構展開が明確でないが、2面以降、現在の土地割りに近いN20° E前後の軸線が採用されたようだ。図1-地点6・11では中世の全時期を通じて「大町大路」に沿った後者の基軸線を看取でき、地点7・11・17では大路と同方向に延びる道路遺構(泥岩整地面)が検出されている。これら3地点で検出された道路遺構を単純に直線で結ぶと本地点の南辺を通ることになる(図29)。全てが一連の道路となるかは具体的な比較検討が必要であるため可能性の提示に止めるが、直線で本地点の南辺を通ると仮定すれば幅員は12 m以下と推定できる。本地点は逆川が北に屈曲して接近してくる位置にあることから、流路の位置が道路の走方向に影響を及ぼした可能性も考えられる。3面以下の遺構軸線が現在の土地区画と異なる要因も、当該期における河川など地形上の制約や、それを受けた道路の軸線に求めることができるかもしれない。現在、本地点の西側を走る南北道路は正方位に近い軸線であり、3面以前には、これに沿った土地割りが採用されていたことも考えられる。土地区画の規定要因は一様ではなく、地点や時期ごとに多元的に考える必要があるだろう。3面から2面への移行期において遺構軸線が変わる事象については、13世紀中葉～後半という比定時期とともに構築物の形態=土地利用の在り方が変わる点にヒントがあるように思われる。本地点の資料だけでは歴史的背景までを含めた考察はできないが、上記2点を掲げ、調査成果の蓄積を待つことにしたい。



図30 東西道路の検出地点

付記一年代観の根拠について一

本編では各遺構面の年代観について、主として下記の文献を参考に提示してきた。在地土器で供膳具の中心となる「かわらけ」の編年研究では、特に年代観の付与という点で鎌倉内の研究者間に共通理解を見出せていない現状があり、また筆者自身がこれら先行研究を咀嚼できていないこともあって一定の幅を持たせた曖昧な記述に終始してしまった。お詫びしたい。

かわらけ：宗臺秀明 2005「中世鎌倉の土器・陶磁器」『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～資料集』

常滑：中野晴久 2005「常滑・渥美系」『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～発表要旨集』

引用・参考文献

高柳光寿 1959『鎌倉市史 総説編』 鎌倉市

三浦勝男編 1969『鎌倉の古絵図Ⅱ』 鎌倉市教育委員会・鎌倉国宝館

白石永二編 1976『鎌倉事典』 東京堂出版

菊川英政 1995「名越ヶ谷遺跡 大町三丁目1217番1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書11（第1分冊）』
鎌倉市教育委員会

木下 良ほか 1997『神奈川の古代道』 藤沢市教育委員会 博物館建設準備担当

押木弘己 2011「調査速報 米町遺跡の調査」『かまくら考古 第10号』 特定非営利活動法人鎌倉考古学研究所

地区	面	遺構	かわらけ				土器				青磁(龍泉系)				瀬戸	瀬美・湖西	
			ロクロ		手づくね		南伊勢系鍋	火鉢	劃花文碗	進弁文碗	碗・皿	瓶	水注	皿・鉢			甕
			大	小	大	小											
I	2	12	6	133	2	24	4	45									
I	2	14	5	26	1	2											
I	2	15	10	56	3	14	1	6									
I	2	16	5	42	8	34	3	21							1	14	
I	2	17	5	38	4	20											
I	2	18			2	8											
I	2	19	5	36	4	19											
I	2	21	5	34													
I	2	22	14	116	4	19											
I	2	23	19	138	9	56											
I	2	24	6	42	3	16	1	15									
I	2	25			5	18											
I	2	26	5	53	3	21											
I	2	61					2	9									
II西	2	62	13	122	7	55	3	62	2	29							
II西	2	63			1	4										1	
II西	2	64	10	170	10	75											
II西	2	65	11	59													
II西	2	66・67・68	1	7	1	4	5	30	2	5							
II西	2	73	3	71	4	24	2	18	1	17	1	5					
II西	2	95	1	9	1	54											
II東	2	114	16	133	15	80	38	370	5	60							
II東	2	115	5	28	14	86	2	15	1	4	1	8					
II東	2	116	4	33	2	21	9	187	1	23							
II東	2	117	3	19			1	16									
II東	2	120	2	72			2	185									
II東	2	123	7	57	6	25									1	6	

地区	面	遺構	常滑				瓦質土器		瓦	銅製品		石製品		近世陶器		土師器		須惠器	
			甕	壺	片口鉢 I類	片口鉢 II類	山茶碗 山皿	火鉢		平瓦	錢	砥石	硯	碗・皿・鉢	相模型甕	坏	蓋		
I	2	12	10	553	2	276				1	11	1	37						
I	2	14	4	240	1	51													
I	2	15	1	38	1	55													
I	2	16	8	295															
I	2	17	1	9															
I	2	18	1	7	1	12													
I	2	19																	
I	2	21																	
I	2	22	1	56															
I	2	23	2	632	3	71													
I	2	24			1	13													
I	2	25																	
I	2	26	6	209	2	20													
II西	2	61																	
II西	2	62	6	128				1	36										
II西	2	63								1	3								
II西	2	64	7	438															
II西	2	65																	
II西	2	66・67・68	2	38								1	104					1	6
II西	2	73			1	139											1	4	
II西	2	95																	
II東	2	114	22	948	3	83						1	10			2	33		
II東	2	115	8	127	1	194													
II東	2	116	18	1002	1	102													
II東	2	117	1	26											1	21			
II東	2	120																	
II東	2	123			1	4		1	44										

地区	面	遺構	かわらけ						白かわらけ						土器				白磁							
			ロクロ		手づくね		かわらけ		ロクロ		手づくね		かわらけ		南伊勢系鍋		火鉢		不明		口瓦皿		碗		瓶	
			大	小	大	小	大	小	大	小	大	小	大	小	大	小	大	小	大	小	大	小	大	小	大	小
I	3	27a 覆土～床面	166	2709	118	1435	360	5051	91	1133	1	12	1	12	6	47					2	11	1	5	2	17
II東	3	27a 裏込め			2	119			1	72																
I	3	27b	164	2062	69	598	83	1194	17	156							1	112			2	10	1	3		
I	3	28	3	21	5	16	2	10											1	21						
I	3	29	11	73	3	17																				
I	3	30			2	14																				
I	3	32					1	6																		
I	3	33	3	13																						
I	3	34			1	9																				
I	3	35	3	15			1	8																		
I	3	36	1	10			1	8	1	9																
I	3	37	5	38					1	4																
I	3	39					1	4																		
I	3	41	5	77	3	17	13	103	1	12													1	8		
I	3	48	4	19																						
I	3	49	19	194	4	24																				
I	3	54	8	67	2	25																				
I	3	55																								
II西	3	74	3	21									2	26												
II西	3	75	1	5																						
II西	3	76	1	8																						
II西	3	78	1	10																						
II西	3	79・81	4	50	2	13	21	141	5	43																
II西	3	82	1	21	2	12	11	90	3	13																
II西	3	83	3	11	1	3																				
II西	3	84	3	31			2	14																		
II西	3	85	4	35	5	33	7	56																		
II西	3	86・87																								
II西	3	91	1	11			2	25																		
II東	3	125	4	17	2	4	5	35	1	3																
II東	3	126	1	11	4	21	2	17																		

地区	面	遺構	青磁(同安系)		青磁(龍泉系)						青白磁			
			細描文碗	劃花文碗	蓮弁文碗	折縁皿	碗・皿	瓶	水注	合子				
I	3	27a 覆土~床面	2	9	12	163	6	51	1	3	1	7	1	14
II東	3	27a 裏込												
I	3	27b			1	4	2	24	1	26	1	143		
I	3	28												
I	3	29												
I	3	30												
I	3	32												
I	3	33												
I	3	34												
I	3	35												
I	3	36												
I	3	37												
I	3	39												
I	3	41			1	7								
I	3	48												
I	3	49												
I	3	54												
I	3	55											1	12
II西	3	74												
II西	3	75												
II西	3	76												
II西	3	78												
II西	3	79・81												
II西	3	82												
II西	3	83												
II西	3	84												
II西	3	85												
II西	3	86・87												
II西	3	91												
II東	3	125												
II東	3	126												

地区	面	遺構	瀬戸				渥美・湖西				尾張型・常滑													
			卸皿	皿・鉢	瓶	甕	壺	こね鉢	山茶碗	甕	壺	片口鉢		山茶碗										
			1	28	1	59		60	2887					366	25347	4	329	14	824	6	478	2	25	
I	3	27a 甕土～床面																						
II東	3	27a裏込																						
I	3	27b			1	10		19	670		1	39	1	16	106	4807	1	29	8	350	3	230		
I	3	28													1	122								
I	3	29													4	159								
I	3	30													1	13								
I	3	32																						
I	3	33																						
I	3	34													1	7								
I	3	35						1	18	1	34													
I	3	36					4	273																
I	3	37					2	135					1	7	3	44								
I	3	39													1	22								
I	3	41					2	69							8	485			2	29				
I	3	48																						
I	3	49					1	13							3	108			3	121				
I	3	54													1	18			1	18				
I	3	55																						
II西	3	74																						
II西	3	75																						
II西	3	76								2	95													
II西	3	78																						
II西	3	79・81					2	34							5	296			2	26				
II西	3	82					1	68							5	192								
II西	3	83													1	8								
II西	3	84													3	150								
II西	3	85													7	56								
II西	3	86・87																						
II西	3	91													1	30								
II東	3	125					1	26							6	335								
II東	3	126													3	80								

地区	面	遺構	かわらけ						土器				白磁				
			ロクロ		手づくね		内折れ	南伊勢系鍋	不明	端反碗	碗	瓶					
			大	小	大	小											
Ⅱ西	3下	100															
Ⅱ西	3下	107	1	9	2	7	7	71	6	44	1	22					
Ⅱ東	3下	127			2	9	1	8					1	12			
Ⅱ東	3下	128					1	11									
Ⅱ東	3下	129					1	4	1	3							
Ⅱ東	3下	130					1	12									
Ⅱ東	3下	131					1	8									
Ⅱ東	3下	132	2	34	1	17	8	88	3	31							
Ⅱ東	3下	133	5	199			18	497	8	46					1	33	
Ⅱ東	3下	134					3	17									
Ⅱ東	3下	135下	2	21	3	28	18	203	6	92						1	5
Ⅱ東	3下	137			1	14	7	99									
Ⅱ東	3下	138	8	81	7	117	12	92	4	30					1	13	
Ⅱ東	3下	140	1	12			3	164	2	20							13
I	3下	57	7	128	8	327	60	888	23	371			1	20	1	28	
I	3下	57西															
I	3下	57東							1	64							
Ⅱ西	3下	88	21	195			6	64			1	6	2	37			
Ⅱ西	3下	89							5	18							
Ⅱ西	3下	93					1	9									
Ⅱ西	3下	90	3	19	2	13	2	18							1	5	
Ⅱ西	3下	94			3	36	4	62									
Ⅱ西	3下b	101															
Ⅱ西	3下b	105	9	154	12	70	28	409	16	125						2	35
Ⅱ西	3下b	106															
Ⅱ西	3下b	110					1	5	1	3							
Ⅱ西	3下b	111			3	25	4	25									
Ⅱ西	3下b	113					1	7									

地区	面	遺構	青磁(龍泉系)						梅瓶蓋	碗	瀬戸		渥美・湖西	
			翻花文碗	通弁文碗	碗・皿	瓶	酒会壺	碗			皿・鉢	瓶	甕	乙ね鉢
Ⅱ西	3下	100	1	14										
Ⅱ西	3下	107	1	2		1	17							
Ⅱ東	3下	127												
Ⅱ東	3下	128												
Ⅱ東	3下	129												
Ⅱ東	3下	130												
Ⅱ東	3下	131												
Ⅱ東	3下	132												
Ⅱ東	3下	133	1	18	1	3		2	48	1	8			
Ⅱ東	3下	134												
Ⅱ東	3下	135下										1	132	
Ⅱ東	3下	137										3	185	1
Ⅱ東	3下	138										1	86	
Ⅱ東	3下	140										1	21	
Ⅱ東	3下	140										1	64	
I	3下	57	3	10	1	10	1	97		1	6	3	148	1
I	3下	57西												27
I	3下	57東												
Ⅱ西	3下	88										2	33	
Ⅱ西	3下	89												
Ⅱ西	3下	93												
Ⅱ西	3下	90										1	58	
Ⅱ西	3下	94										1	165	
Ⅱ西	3下b	101					1	4						
Ⅱ西	3下b	105												
Ⅱ西	3下b	106												
Ⅱ西	3下b	110												
Ⅱ西	3下b	111												
Ⅱ西	3下b	113												

地区	面	遺構	尾張型・常滑			東遠		瓦			鉄製品・鉄滓				石製品			
			甕	片口鉢 I類	山茶碗 山皿	無台碗	平瓦	釘	不明	鉄滓	火打石	硯	滑石鍋					
II西	3下	100	1	26														
II西	3下	107	9	336					1	46	1	2						
II東	3下	127	2	558														
II東	3下	128												1	48			
II東	3下	129																
II東	3下	130																
II東	3下	131																
II東	3下	132	4	747														
II東	3下	133	15	908														
II東	3下	134																
II東	3下	135下	39	2491	1	43	3	257										
II東	3下	137																
II東	3下	138																
II東	3下	140																
I	3下	57	45	2753	1	9	5	121										
I	3下	57西																
I	3下	57東	1	17														
II西	3下	88	7	321														
II西	3下	89	1	93									1	7				
II西	3下	93	6	567														
II西	3下	90	11	572														
II西	3下	94	8	376														
II西	3下b	101	2	94														
2西	3下b	105	19	1576	1	23	3	120										
II西	3下b	106																
II西	3下b	110	1	34														
II西	3下b	111	1	147														
II西	3下b	113																

地区	面	瀬戸						瀬美・湖西						
		鈎皿	折縁深皿	縁種皿	入子	天目碗	皿・鉢	蓋	瓶	甕	壺	こね鉢	山茶碗	
一	表採													
I	表土													
II西	表土													
II東	表土	2	70											
I	I													
I	1下	1	7											
II西	1下	1	10											
II東	1下			1	27	1	13							
I	2下													
II西	2下													
II東	2下													
I	3													
II西	3													
II東	3													
I	3下													
II西	3下													
II東	3下													
II東	地山砂層													

地区	面	尾張型・常滑				備前			瓦			鉄製品・鉄滓					
		甕	壺	片口鉢		掃鉢	火鉢	平瓦	丸瓦	釘	針	不明	鉄滓				
				I類	II類												
一	表採	11	530														
I	表土	20	3081														
II西	表土	19	664														
II東	表土	88	5354	1	65	9	431	4	359								
I	I	143	7233	1	45	2	248	3	371	4	62						
I	1下	162	6512	1	82	10	686	4	201								
II西	1下	78	3865	1	19	7	242	2	104								
II東	1下	183	11218			8	296	5	307	1	8						
I	2下	93	5052	2	76	10	554	1	60	2	43						
II西	2下	82	4446	1	14	5	218	3	360								
II東	2下	39	2259			1	27										
I	3	51	1928	2	42	6	201	8	798								
II西	3	7	809			2	250										
II東	3	14	1411														
I	3下	21	1133														
II西	3下	206	11275	1	66	9	855										
II東	3下	25	1612														
II東	地山砂層																

地区	面	土師器		ロクロ土師器		古式土師器		須恵器				灰釉陶器
		環	甕	環	甕	環	蓋	瓶	甕	碗		
一	表採											
Ⅰ	表土											
Ⅱ西	表土											
Ⅱ東	表土								1	5		
Ⅰ	Ⅰ											
Ⅰ	1下		2	16					2	21		1
Ⅱ西	1下	1	9						1	6		
Ⅱ東	1下				1	10						1
Ⅰ	2下											
Ⅱ西	2下		5	50		2	14				1	33
Ⅱ東	2下											2
Ⅰ	3	1	6	1	3	1	6		2	40		
Ⅱ西	3											
Ⅱ東	3								1	25		
Ⅰ	3下		1									
Ⅱ西	3下	2	10	4	54		2	19	5	48		3
Ⅱ東	3下		1	8					1	6		28
Ⅱ東	地山砂層											

地区	面	遺構	動物遺体													
			不明	角骨	アカニシ	ササエ	アワビ	バテイラ	ハマグリ	チョウセンハマグリ	シジミ	バイ	サルボウガイ	ツメタガイ	ダンベイキサゴ	
Ⅰ	1	1掘り方			3	2				1				1		
Ⅰ	1	7a														
Ⅰ	1	7b	1													
Ⅰ	1	8														
Ⅰ	1	9														
Ⅰ	1	10	4	2	23	4	6	3	8	1	1	3	1	2	3	
Ⅰ	1	11														
Ⅱ西	1	60		1						1						

地区	面	遺構	動物遺体		
			獣骨	アカニン	ダンベイキサゴ
I	2	12			
I	2	14			
I	2	15			
I	2	16	1		
I	2	17	1		
I	2	18			
I	2	19			
I	2	21			
I	2	22	3		
I	2	23	1		
I	2	24			
I	2	25			
I	2	26			
II西	2	61			
II西	2	62		1	
II西	2	63			
II西	2	64			
II西	2	65			
II西	2	66・67・68			
II西	2	73			
II西	2	95			
II東	2	114	1		
II東	2	115	1	1	1
II東	2	116	1		
II東	2	117			
II東	2	120			
II東	2	123			

地区	面	遺構	人骨	動物遺体														
				不明	魚骨	アカニン	サザエ	アワビ	バイイラ	カキ	ハグリ	チョウセンハマグリ	バイ	ツメタガイ	カガミガイ	ツノマダナガニシ	オオノガイ	ダンベイキサゴ
I	3	27a 覆土～床面	1	9	4	36	7	51	1	1	1	1	1	1	2	2	1	34
II東	3	27a 裏込め																
I	3	27b		1		9	2	1						2		1	1	
I	3	28																
I	3	29																
I	3	30																
I	3	32																
I	3	33																
I	3	34																
I	3	35																
I	3	36		1														
I	3	37																
I	3	39																
I	3	41				1	1	1			1							
I	3	48																
I	3	49																
I	3	54				1							1				1	
I	3	55																
II西	3	74																
II西	3	75																
II西	3	76																
II西	3	78																
II西	3	79・81																
II西	3	82																
II西	3	83																
II西	3	84																
II西	3	85																
II西	3	86・87																
II西	3	91				1	1											
II東	3	125																
II東	3	126																

地区	面	遺構	動物遺体															種子									
			獣骨	魚骨	アカニシ	サザエ	アワビ	バテイラ	カキ	ハマグリ	チョウセンハマグリ	シジミ	シオキガイ	バイ	サルボウガイ	ツメタガイ	サトウガイ	カガミガイ	イタヤガイ	アサリ	ツノマタナガニシ	ダンベイキサコ	桃核	胡桃核			
Ⅱ西	3下	100		1																							
Ⅱ西	3下	107		1																	1						
Ⅱ東	3下	127																									
Ⅱ東	3下	128																									
Ⅱ東	3下	129				1																					
Ⅱ東	3下	130																									
Ⅱ東	3下	131																									
Ⅱ東	3下	132		1				1																			
Ⅱ東	3下	133		1				1																			
Ⅱ東	3下	134																									
Ⅱ東	3下	135下		1																							
Ⅱ東	3下	137		1			2																				
Ⅱ東	3下	138		1				1																			
Ⅱ東	3下	140		8		23	9	3																			
I	3下	57		5		9	13	1																			
I	3下	57西		1		10	2	1																			
I	3下	57東																									
Ⅱ西	3下	88																									
Ⅱ西	3下	89		1																							
Ⅱ西	3下	93							2																		
Ⅱ西	3下	90																									
Ⅱ西	3下	94																									
Ⅱ西	3下b	101																									
Ⅱ西	3下b	105		3		1	2	1																			
Ⅱ西	3下b	106																									
Ⅱ西	3下b	110		1																							
Ⅱ西	3下b	111																									
Ⅱ西	3下b	113																									

地区	面	動物遺体											種子									
		獣骨	魚骨	アカニシ	サザエ	アワビ	カキ	ハマグリ	ハマグリ	シオフキガイ	バイ	サルボウガイ		ツメタガイ	ゴイサキ	キサゴイ	ダンベイ	桃核				
I	表探																					
I	表土																					
II西	表土																					
II東	表土		1																			
I	1		1																			
I	1下		2																			
II西	1下																					
II東	1下			4																		
I	2下		3	3	1																	
II西	2下		1	1																		
II東	2下		1	1																		
I	3		1	1	8	1	3															
II西	3																					
II東	3			1																		
I	3下		1		2	1																
II西	3下		1	1	10	6	5	1	16	6	1											
II東	3下		1	1	15	4	5	1	2	2	1											
II東	地山砂層																					

凡例

	かわらけ						
	ロクロ			手づくね			
	大	小	大	小	大	小	
27	228	12	65	4	29	1	5
13	212	4	40				
2	19	3	27	17	223		
4	31						
206	1872	96	745	104	1210	7	56
5	38	1	4	3	36	2	21

破片点数 重量

(木製品・自然遺物は点数のみ)

表2 出土遺物観察表

番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
表土～1面 出土遺物(図15)						
1	土器	ロクロかわらけ	(6.9)	(3.8)	2.2	小 1/2弱 胎土：白色針状物質 色調：橙色
2	土器	ロクロかわらけ	7.1	4.6	1.5	小 ほぼ完形 胎土：白色針状物質 色調：黄橙色
3	土器	ロクロかわらけ	(7.6)	(5.3)	1.9	小 1/3 胎土：白色針状物質 色調：橙色
4	土器	ロクロかわらけ	(7.8)	(4.7)	1.4	小 1/3 胎土：雲母 色調：白橙色
5	土器	ロクロかわらけ	7.7	5.8	1.7	小 完形、59g 胎土：白色針状物質 色調：黄橙色
6	土器	ロクロかわらけ	(8.5)	(4.6)	2.4	小 1/3 胎土：精良 色調：橙褐色
7	土器	ロクロかわらけ	(10.6)	(6.8)	3.3	大 1/6 胎土：白色針状物質 色調：橙色
8	土器	ロクロかわらけ	(11.9)	(7.0)	3.3	大 1/4 胎土：白色針状物質 色調：淡橙色
9	土器	ロクロかわらけ	(12.0)	(6.0)	4.1	大 1/2弱 胎土：精良、白色針状物質 色調：橙褐色
10	土器	ロクロかわらけ	—	(7.4)	2.5	大 底2/3 胎土：白色針状物質 色調：黄橙色
11	土器	蓋	外径(13.8)	凸部径(10.6)	[1.6]	1/8以下 胎土：白色針状物質 色調：橙色
12	青白磁	梅瓶	—	(9.4)	[5.0]	底部1/6
13	陶器	常滑片口鉢	(28.2)	—	[11.7]	Ⅱ類 口1/6 内面に自然釉 胎土：長石 色調：褐色
14	銅製品	煙管雁首	長さ6.9	火皿径0.9	小口径0.6	江戸Ⅳ期 18世紀後半 完形、重さ10g
1面 出土遺物①(図16)						
15	石製品	砥石	長さ[7.7]	幅2.8	厚さ2.3	上野産中砥(凝灰岩) 一端が欠損 表面一面を使用
16	土器	鉢	—	13.0	[4.3]	胎土は橙色で雲母・白色針状物質を含む
17	磁器	肥前系染付碗	7.0	3.2	4.9	(小坏) 体部外面に草花文
18	陶器	瀬戸緑釉小皿	(11.0)	(4.8)	1.8	外底面に回転系切り痕 口縁内外面に灰釉 古瀬戸後期以降か
19	陶器	瀬戸蓋	外径6.8	3.7	[1.2]	ツマミ欠失 天井外面に褐釉 小壺・茶入類の蓋か
20	陶器	堺・明石系播鉢	—	—	[3.7]	傾き不明瞭 体部内面に播り目 胎土は明橙色で白色・赤色の礫を含む
21	瓦	平瓦(棧瓦)	長さ[12.0]	幅4.7	厚さ1.7	いぶし瓦 表面は黒灰色でにぶい光沢あり 近代以降か
22	石製品	火打石	長さ4.4	幅3.5	厚さ1.7	重さ21g 石英質の割り石で、白色・半透明 殆どの稜角に摩擦痕あり
23	石製品	砥石	長さ13.5	幅3.3	厚さ3.5	上野産中砥(凝灰岩) ほぼ完形 表面一面を使用 櫛歯状タガネ痕あり
24	鉄製品	釘	長さ10.5	幅0.3	厚さ0.3	
25	銅製品	不明	長さ5.0	幅1.2	厚さ0.8	両端付近の側面に貫通孔2ヶ所 用途不明
26	木製品	刀子柄	長さ12.9	幅2.5	厚さ1.6	ほぼ完形 板目材 組み合わせ式 莖装着部に鉄錆付着
27	木製品	不明	長さ11.0	幅5.8	厚さ3.0	ほぼ完形? 板目材による組み物 溝状凹部への差し込みと鉄釘で固定
28	磁器	肥前系染付碗	10.0	4.4	6.0	体部外面に草花文 高台内に「大明年製」
29	磁器	肥前系染付碗	10.2	4.4	5.5	体部外面に草花文 高台内に「大明年製」
30	磁器	肥前系染付碗	(11.0)	—	[6.6]	体部外面に草花文 高台内に「大明年製」
31	陶器	瀬戸大皿	—	(13.0)	[2.4]	内底面に櫛歯による圏線 内底面～体部外面灰釉
32	石製品	基石(黒)	直径2.2	—	厚さ	
1面 出土遺物②(図17)						
33	陶器	常滑甕	—	20.1	[15.1]	胴下部～底部 外底面に砂付着、外周ナデ 胴部外面煤付着 胎土：長石 色調：暗赤灰色

番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
34	土器	手づくね かわらけ	(8.0)	—	1.6	小 1/2 胎土：白色針状物質 色調：橙色
35	陶器	常滑? 壺	9.8	10.9	20.2	ほぼ完形 外面胴下端はヨコヘラケズリ、外面の胴下部に焼成前のヘラ描き(窯印か)口縁端部に擦痕胎土：長石(表出目立つ) 色調：淡赤橙色
36	土器	ロクロ かわらけ	7.5	5.0	2.0	小 完形、51g 胎土：白色針状物質 色調：黄橙色
37	土器	ロクロ かわらけ	8.0	5.4	2.0	小 2/3 胎土：白色針状物質 色調：黄橙色
38	土器	ロクロ かわらけ	12.7	8.4	3.5	大 1/2 胎土：白色針状物質 色調：黄橙色
39	陶器	尾張型 山茶碗	—	(7.0)	[2.4]	底部1/4 胎土：長石 色調：灰白色
40	陶器	常滑 甕	—	—	—	胴小片 外面に「×」+縦格子文のスタンプ
41	陶器	渥美 甕	—	—	—	胴小片 外面に格子目叩きとハケメ
42	石製品	滑石鍋	(24.0)	—	[5.7]	口1/8
1面下 出土遺物(図18)						
43	土器	手づくね かわらけ	8.2	(6.9)	1.5	小 3/4 胎土：白色針状物質 色調：黄橙色
44	土器	手づくね かわらけ	(8.7)	(7.2)	1.4	小 1/4 胎土：白色針状物質 色調：橙色
45	土器	手づくね かわらけ	9.2	—	2.5	小 2/3 胎土：精良 色調：橙褐色
46	土器	ロクロ かわらけ	5.8	4.0	1.1	極小 2/3 胎土：白色針状物質 色調：黄色
47	土器	ロクロ かわらけ	4.8	3.6	1.0	極小 完形、18g 胎土：白色針状物質 色調：橙色 外底面に板状圧痕
48	土器	ロクロ かわらけ	7.8	5.0	2.1	小 完形、69g 胎土：白色針状物質 色調：黄橙色
49	土器	ロクロ かわらけ	7.8	5.7	1.9	小 完形、62g 胎土：白色針状物質 色調：橙色
50	土器	ロクロ かわらけ	7.9	6.0	1.8	小 2/3 胎土：白色針状物質 色調：黄橙色 外底面に簾状の圧痕
51	土器	ロクロ かわらけ	8.1	5.7	2.5	小 完形、72g 胎土：白色針状物質 色調：黄橙色
52	土器	ロクロ かわらけ	8.4	6.7	1.9	小 完形、77g 胎土：白色針状物質 色調：橙色
53	土器	ロクロ かわらけ	8.3	5.2	2.4	小 2/3 胎土：白色針状物質 色調：黄橙色
54	土器	ロクロ かわらけ	(9.0)	(6.7)	1.8	小 1/3 胎土：白色針状物質 色調：橙褐色 口縁部内外面に煤付着
55	土器	ロクロ かわらけ	(12.1)	7.8	3.2	大 1/3 胎土：白色針状物質 色調：橙色
56	土器	ロクロ かわらけ	12.2	8.6	3.2	大 完形、191g 胎土：白色針状物質 色調：黄橙色
57	土器	ロクロ かわらけ	(12.0)	8.7	3.2	大 1/3 胎土：白色針状物質 色調：橙色
58	土器	ロクロ かわらけ	(12.7)	(8.0)	3.5	大 1/4 胎土：白色針状物質 色調：黄橙色
59	磁器	肥前系 染付碗	(10.4)	—	[4.7]	体部外面に草花文
60	陶器	染付碗	—	(10.1)	[2.5]	淡い黄緑色釉(外面体部下端～高台内無釉) 体部外面に絵付け 胎土：緻密・軟質
61	陶器	碗	—	(5.2)	[4.7]	淡い灰桃色釉(高台外面～高台内無釉) 台内中央に印判「山仔原」? 胎土：緻密・軟質
62	陶器	瀬戸・美濃 皿	12.6	6.8	2.7	内面～体部外面に灰釉 内底面にトチン痕 高台内に回転ヘラ切り痕
63	陶器	瀬戸・美濃 搦鉢	—	(9.0)	[5.1]	体～底1/6 内外面に鉄釉 外底面回転糸切り痕 内面体部に12条、底部に9条一単位の播り目
64	陶器	渥美 甕	—	—	—	胴・底小片 胴部外面に平行文のタタキメ
65	石製品	滑石鍋	(16.0)	—	[3.3]	口1/8 外面に煤付着
66	石製品	砥石	長さ [4.3]	幅 3.3	厚さ 0.5	鳴滝産仕上げ砥(頁岩) 表一面を使用
67	銅製品	煙管 吸口	長さ 4.1	径 0.7	—	完形、重さ4g

番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
1 面下・2面遺構 出土遺物 (図19)						
68	銅製品	銭	直径 2.5	孔径 0.7	厚さ 0.1	「皇宋通寶」真書 北宋代、1038年初鑄
69	銅製品	銭	直径 2.4	孔径 0.7	厚さ 0.1	「皇宋通寶」北宋代、1039年初鑄
70	銅製品	銭	直径 2.3	孔径 0.7	厚さ 0.1	「熙寧元寶」北宋代、1068年初鑄
71	土器	ロクロ かわらけ	(9.3)	(7.8)	1.6	小 1/4 胎土：白色針状物質 色調：橙褐色
72	土器	ロクロ かわらけ	7.5	5.5	1.7	小 ほぼ完形 胎土：白色針状物質 色調：黄橙色
73	陶器	常滑 甕	—	—	[9.1]	近世D類 18世紀中葉～後葉 口小片 胎土：長石 色調：橙色
74	土器	ロクロ かわらけ	(8.8)	(6.0)	2.0	小 1/3 胎土：白色針状物質 色調：橙色
75	土器	ロクロ かわらけ	(11.8)	(7.3)	3.0	大 1/3 胎土：白色針状物質 色調：黄橙色
76	陶器	尾張 片口鉢	—	—	[3.5]	山茶碗系 (I類) 口小片 胎土：長石 色調：灰褐色
77	陶器	尾張 片口鉢	—	(14.3)	[5.5]	山茶碗系 (I類) 底1/4 胎土：長石 色調：灰色
78	石製品	砥石	長さ [5.6]	幅 3.9	厚さ 0.8	産地不明仕上げ砥 (頁岩) 表裏二面を使用、両側面に鋸挽き痕
79	青磁	龍泉窯系 鎬蓮弁文碗	—	—	[3.0]	口小片
80	土器	手づくね かわらけ	(9.2)	(8.3)	1.8	小 1/4 色調：橙褐色
81	土器	ロクロ かわらけ	(9.6)	(7.1)	1.9	小 1/4 胎土：白色針状物質 色調：淡黄褐色
82	土器	ロクロ かわらけ	(11.4)	(6.5)	3.5	大 1/5 胎土：白色針状物質 色調：橙褐色
83	銅製品	銭	2.2	0.6	0.1	「寛永通宝」江戸時代、1636年初鑄
84	土器	ロクロ かわらけ	(8.2)	(5.8)	1.8	小 1/3 胎土：雲母 色調：橙褐色
85	土器	ロクロ かわらけ	(12.7)	(7.8)	3.2	大 1/3 胎土：白色針状物質 色調：橙褐色
86	土器	ロクロ かわらけ	(8.8)	(6.5)	1.7	小 1/4 胎土：白色針状物質 色調：橙色
87	陶器	尾張 片口鉢	—	(13.8)	[3.1]	山茶碗系 (I類) 底1/4 胎土：長石 色調：灰褐色
88	陶器	常滑 甕	—	—	—	胴部 胴小片 外面に花弁文のスタンプ
89	土器	手づくね かわらけ	(13.0)	—	3.6	大 2/3 胎土：白色針状物質 色調：橙色
90	石製品	硯	長さ [7.6]	幅 6.5	高さ 1.1	鳴滝産 (頁岩)、作硯は高島か 前方部欠損、裏面に針状具による線刻あり
2 面下 出土遺物 (図20)						
91	土器	手づくね かわらけ	8.4	6.6	2.2	小 4/5 胎土：白色針状物質、雲母 色調：橙褐色
92	土器	手づくね かわらけ	8.2	—	1.8	小 4/5 胎土：白色針状物質、雲母 色調：橙褐色
93	土器	手づくね かわらけ	9.2	7.7	1.8	小 完形、84g 胎土：白色針状物質 色調：橙褐色
94	土器	手づくね かわらけ	9.4	7.3	1.9	小 完形、96g 胎土：白色針状物質 色調：橙褐色
95	土器	手づくね かわらけ	(9.8)	(8.7)	1.9	小 1/2弱 胎土：白色針状物質 色調：淡褐色
96	土器	手づくね かわらけ	(9.7)	(8.7)	1.7	小 1/2弱 胎土：白色針状物質、雲母 色調：橙褐色
97	土器	手づくね かわらけ	(12.0)	—	3.2	大 1/3 胎土：白色針状物質 色調：黄橙色
98	土器	手づくね かわらけ	13.2	—	3.3	大 ほぼ完形、185g 胎土：白色針状物質 色調：淡黄褐色
99	土器	ロクロ かわらけ	(8.1)	(5.0)	1.5	小 1/3 胎土：白色針状物質 色調：黄橙色
100	土器	ロクロ かわらけ	7.8	5.1	1.8	小 完形、60g 色調：橙褐色
101	土器	ロクロ かわらけ	(7.8)	(5.6)	1.8	小 1/3 胎土：白色針状物質 色調：淡褐色

番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
102	土器	ロクロ かわらけ	(8.0)	(5.8)	1.7	小 1/4 胎土：白色針状物質 色調：橙褐色
103	土器	ロクロ かわらけ	(7.8)	(4.8)	1.8	小 1/2弱 胎土：白色針状物質 色調：淡黄褐色
104	土器	ロクロ かわらけ	(7.6)	(5.3)	1.7	小 1/2弱 色調：にぶい淡褐色
105	土器	ロクロ かわらけ	(8.8)	(6.1)	1.9	小 1/3 胎土：白色針状物質 色調：橙褐色
106	土器	ロクロ かわらけ	(6.7)	(3.0)	2.4	小 1/2弱 胎土：白色針状物質 色調：橙褐色
107	土器	ロクロ かわらけ	(12.4)	8.1	3.2	大 1/3 胎土：白色針状物質 色調：橙褐色
108	土器	ロクロ かわらけ	—	5.0	[2.7]	柱状高台のみ 胎土：白色針状物質 色調：黄橙色
109	青磁	龍泉窯系 蓮弁文碗	—	—	[4.6]	II b類 口小片
110	陶器	緑釉陶器 盤	—	—	[2.3]	口小片 胎土：白色・黒色粒多い
111	陶器	尾張 片口鉢	—	(12.6)	[5.0]	山茶碗系 (I類) 底1/4 胎土：長石 色調：灰色
112	陶器	常滑 甕	—	—	—	胴部小片 外面格子目タタキ
113	陶器	常滑 甕	—	—	—	胴小片 外面に御簾格子+花卉文のスタンプ、 へら描きによる窯印
114	陶器	常滑 甕	—	—	—	胴小片 外面に御簾格子のスタンプ
115	陶器	渥美 甕	—	—	—	胴小片 外面に格子目のスタンプ
116	瓦質 土器	火鉢	—	—	[5.0]	獣脚部のみ 貫通孔あり
117	鉄製品	釘	長さ [10.2]	幅 0.8	厚さ 0.9	下端わずかに欠損
3面 出土遺物① (図21)						
118	土器	手づくね かわらけ	8.3	6.5	1.8	小 2/3 胎土：白色針状物質 色調：黄橙色
119	土器	ロクロ かわらけ	(9.8)	(7.8)	1.8	小 1/3 胎土：白色針状物質 色調：黄橙色 内底面のナデ調整なし、外底面静止糸切り痕
120	陶器	尾張 片口鉢	—	—	[5.4]	山茶碗系 (I類) 底部片 (無高台) 胎土：長石 色調：灰色
121	陶器	常滑 甕	—	—	—	胴小片 肩部外面に断面三角形の凸帯を貼付 外面に自然釉
122	渥美	渥美 こね鉢	—	(13.5)	[3.8]	底1/6 胎土：長石 色調：灰褐色
123	土器	手づくね かわらけ	(7.8)	—	1.5	小 1/3 胎土：白色針状物質 色調：橙色
124	土器	手づくね かわらけ	(8.2)	(6.5)	1.6	小 1/4 胎土：白色針状物質 色調：黄橙色
125	土器	手づくね かわらけ	(8.7)	(6.8)	1.6	小 1/3 胎土：白色針状物質 色調：黄橙色
126	土器	手づくね かわらけ	8.8	6.8	1.3	小 3/4 胎土：白色針状物質 色調：黄橙色
127	土器	手づくね かわらけ	8.9	7.8	1.9	小 3/4 胎土：白色針状物質 色調：黄橙色
128	土器	手づくね かわらけ	8.4	—	1.6	小 完形、77g 胎土：白色針状物質 色調：橙色
129	土器	手づくね かわらけ	(11.8)	(8.4)	3.0	大 1/3 胎土：白色針状物質 色調：橙色
130	土器	手づくね かわらけ	(12.7)	—	3.1	大 1/3 胎土：白色針状物質 色調：橙色
131	土器	手づくね かわらけ	13.4	—	2.9	大 2/3 胎土：白色針状物質 色調：橙色
132	土器	手づくね かわらけ	13.0	—	3.2	大 1/2 胎土：白色針状物質 色調：黄橙色
133	土器	ロクロ かわらけ	(7.8)	(6.0)	1.6	小 1/3 胎土：白色針状物質 色調：橙色
134	土器	ロクロ かわらけ	(8.2)	(6.4)	1.7	小 1/3 胎土：白色針状物質 色調：黄橙色
135	土器	ロクロ かわらけ	(9.0)	(7.0)	1.7	小 1/4 胎土：白色針状物質 色調：橙褐色

番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
136	土器	ロクロ かわらけ	(8.8)	(6.7)	1.7	小 1/5 胎土：白色針状物質 色調：橙褐色
137	土器	ロクロ かわらけ	(8.8)	(6.2)	2.1	小 1/3 胎土：白色針状物質 色調：橙色
138	土器	ロクロ かわらけ	8.6	6.0	1.7	小 1/2 胎土：白色針状物質 色調：橙褐色
139	土器	ロクロ かわらけ	(11.8)	(7.2)	3.1	大 1/6 胎土：白色針状物質 色調：橙色
140	土器	ロクロ かわらけ	(12.0)	8.6	3.3	大 1/4 胎土：白色針状物質 色調：橙褐色
141	土器	ロクロ かわらけ	(12.7)	(7.8)	3.3	大 1/4 胎土：白色針状物質 色調：橙色
142	土器	ロクロ かわらけ	(13.0)	7.0	3.3	大 1/5 胎土：白色針状物質 色調：淡黄褐色
143	土器	ロクロ かわらけ	—	6.1	[1.9]	大 底1/2 二次利用(割れ口が研磨により平滑)
144	土器	ロクロ かわらけ	—	4.5	[1.1]	大 底部ほぼ完存 胎土：白色針状物質 色調：橙色 内底面のナデ調整なし
3面 出土遺物② (図22)						
145	青白磁	合子蓋	(8.6)	—	[2.1]	1/3 内面無釉 天井部外面に浮き彫りの草花文 割れ口に黒色の付着物
146	白磁	口元皿	—	—	[0.9]	口・底小片 内面に櫛描き状の文様あり
147	陶器	瀬戸? 瓶?	—	(18.0)	—	頸・胴・底小片 頸～肩外面灰釉(ハケ塗り?+自然釉)、内面自然釉 胴下端、高台内外周は回転ヘラケズリ
148	陶器	尾張 片口鉢	—	—	[7.0]	山茶碗系(I類) 口～体部小片 胎土：長石 色調：灰白色
149	陶器	尾張 片口鉢	(23.0)	(12.4)	7.5	山茶碗系(I類・無高台) 1/8 内面使用により平滑 胎土：粗砂、長石 色調：灰褐色
150	陶器	常滑 片口鉢	(28.6)	(14.9)	8.7	II類 1/8 内面使用により平滑、一部黒変 胎土：緻密、長石 色調：褐色
151	陶器	常滑 甕	—	—	[3.7]	5型式 口小片 胎土：粗砂、長石 色調：淡黄褐色 口縁内面～端部に自然釉
152	陶器	常滑 甕	—	(12.6)	[4.1]	胴下端～底部1/3 胴外面タテハケ 外底面砂付着、条痕多数 胎土：精良 色調：灰色
153	陶器	常滑甕	—	(20.0)	[7.6]	底1/4 胎土：長石 色調：橙色
154	須恵器	坏	—	(6.0)	[2.2]	底部1/4 外底面に回転糸切り痕 胎土：精良 色調：灰褐色
155	石製品	滑石鍋 転用品	長さ 8.6	幅 [7.3]	厚さ 1.3	胴部片の再加工品 外面側や薄く焦げている
156	石製品	研磨具	長さ 11.0	幅 6.0	厚さ 6.5	軽石製 二面に擦痕と条線痕
157	銅製品	銭	直径 2.5	孔径 0.8	厚さ 0.1	「天聖元寶」 北宋代、1023年初鑄
158	銅製品	銭	直径 2.2	孔径 0.7	厚さ 0.1	「元豊通寶」 北宋代、1078年初鑄
159	銅製品	銭	直径 2.4	孔径 0.6	厚さ 0.1	「大觀通寶」 北宋代、1107年初鑄
160	鉄製品	釘	長さ [5.6]	幅 0.3	厚さ 0.3	上端欠損 重さ1g
161	鉄製品	釘	長さ [5.0]	幅 0.4	厚さ 0.4	上・下端とも欠損
162	木製品	円盤 用途不明	直径 6.0	—	厚さ 0.4	板目材 表面に細かな条痕あり
163	貝製品	不明	長径 4.5	短径 3.9	高さ 0.9	用途不明
3面 出土遺物③ (図23)						
164	土器	手づくね かわらけ	(12.8)	—	3.0	大 1/4 胎土：白色針状物質 色調：黄橙色
165	土器	手づくね かわらけ	長さ 9.2	幅 8.6	厚さ 1.2	大(転用品) 焼成後に底部穿孔 胎土：白色針状物質 色調：橙褐色
166	土器	ロクロ かわらけ	8.0	6.2	1.6	小 3/4 胎土：白色針状物質 色調：淡黄褐色
167	土器	ロクロ かわらけ	9.0	7.2	1.8	小 3/4 胎土：白色針状物質 色調：橙色
168	土器	不明	—	—	[6.0]	口小片 胎土：雲母 色調：淡桃褐色
169	陶器	常滑 壺	—	[7.5]	[4.5]	底1/3 胴部外面にヨコヘラケズリ 胎土：緻密 色調：褐灰色

番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
170	陶器	常滑甕	—	—	[10.1]	5型式 口小片 胎土：長石 色調：褐色 口縁内面～胴部外面に自然釉
171	陶器	常滑甕	—	—	—	5型式 傾き不明確 胎土：長石 色調：褐色 肩部外面に斜格子文のスタンプとナデによる凹線
172	土器	手づくねかわらけ	8.6	6.8	1.8	小 完形、72g 胎土：白色針状物質 色調：黄橙
173	土器	ロクロかわらけ	(12.8)	(9.0)	[3.3]	大 1/3 胎土：白色針状物質 色調：橙色
174	木製品	横櫛	横幅 [8.7]	高さ 3.8	厚さ 0.9	3/4ほど遺存か 板目材 表面は黒色(漆ではない)
175	土器	手づくねかわらけ	8.4	7.2	1.8	小 完形、71g 胎土：白色針状物質 色調：黄橙色
176	土器	手づくねかわらけ	(8.7)	6.6	1.9	小 1/4 胎土：白色針状物質 色調：黄橙色
177	土器	手づくねかわらけ	(8.3)	7.1	1.8	小 1/3 胎土：白色針状物質 色調：黄橙色
178	土器	手づくねかわらけ	12.6	—	3.4	大 2/3 胎土：白色針状物質 色調：黄橙色
179	土器	ロクロかわらけ	7.9	6.2	1.5	小 完形、53g 胎土：白色針状物質 色調：黄橙色
180	土器	ロクロかわらけ	8.3	6.8	1.6	小 完形、67g 色調：黄橙色
181	土器	ロクロかわらけ	(8.6)	(6.6)	1.6	小 1/3 胎土：白色針状物質 色調：黄橙色
182	土器	ロクロかわらけ	(9.2)	(6.6)	1.6	小 1/3 胎土：白色針状物質 色調：黄橙色
183	木製品	栓	直径 3.2	—	高さ 5.3	完形 外面に黒色の付着物(漆か)
184	陶器	尾張片口鉢	(29.8)	—	[6.8]	山茶碗系(I類) 胎土：長石 色調：灰色
185	青白磁	瓜形水注	—	(6.2)	[6.0]	胴・底1/4(図上合成) 環状把手一部遺存 内面および胴下端～底部外面は無釉
186	銅製品	銭	直径 2.5	孔径 0.7	厚さ 1.0	「寛永通寶」(文銭) 江戸時代、1668年初鋳
187	陶器	渥美甕転用	長さ 7.3	幅 5.7	厚さ 1.3	割れ四辺と外面側の一面が使用により摩滅・滑らか
188	土器	手づくねかわらけ	(8.0)	(6.8)	1.5	小 1/3 胎土：白色針状物質 色調：橙褐色
189	土器	ロクロかわらけ	(12.0)	(8.4)	3.5	大 1/5 胎土：白色針状物質 色調：橙褐色
190	土器	手づくねかわらけ	(8.6)	(6.5)	1.9	小 1/6 胎土：白色針状物質 色調：淡褐色
191	青磁	龍泉窯系劃花文碗	—	(6.0)	[2.3]	底部1/4 高台内～接地面無釉 内底面にヘラ描きの劃花文
192	土器	ロクロかわらけ	(6.9)	(5.0)	1.4	小 1/3 胎土：白色針状物質 色調：黄橙色
193	陶器	瀬戸皿	—	—	[2.0]	稜皿か 小片 内面～体部外面に褐釉
194	陶器	常滑片口鉢	—	—	[6.4]	II類 胎土：長石 色調：橙色
3面 出土遺物④(図24)						
195	土器	ロクロかわらけ	7.8	4.7	1.9	小 2/3 胎土：白色針状物質 色調：橙色
196	土器	ロクロかわらけ	(10.8)	7.0	3.2	中 1/3 胎土：白色針状物質 色調：黄橙色
197	土器	ロクロかわらけ	(11.6)	(7.8)	3.0	大 1/4 胎土：白色針状物質 色調：橙色
198	土器	壺	(10.1)	—	[4.7]	1/4 胎土：白色針状物質 色調：橙色
199	青磁	龍泉窯系折縁皿	—	—	[4.0]	口小片
200	青磁	龍泉窯系碗	—	6.6	[2.1]	底のみ 高台接地面にも釉付着
201	陶器	常滑甕	—	—	[5.6]	6a型式 口小片
202	石製品	滑石鍋	—	—	[3.2]	底・体部小片 外面に煤付着
203	銅製品	銭	直径 2.3	孔径 0.7	厚さ 0.1	「熙寧元寶」 唐代、621年初鋳
204	鉄製品	釘	長さ [6.3]	幅 0.6	厚さ 0.5	下端欠損

番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
205	鉄製品	釘	長さ [5.0]	幅 0.4	高さ 0.6	下端欠損
3面下 出土遺物① (図25)						
206	陶器	瀬戸 四耳壺	—	—	[6.0]	前期 I a 期 口頸小片 口頸内外面にハケ塗り施釉
207	土器	手づくね かわらけ	(9.7)	(8.6)	2.0	小 1/4 胎土：白色針状物質 色調：淡黄褐色
208	土器	ロクロ かわらけ	(8.7)	(6.7)	1.8	小 1/6 胎土：白色針状物質 色調：橙褐色
209	青白磁	小壺	—	—	[2.2]	口～胴小片 口縁端の内面無釉、煤付着
210	青磁	龍泉窯系 劃花文碗	(15.6)	—	[3.8]	I - 2 類 口 1/5 内面にへら描きの劃花文
211	土器	手づくね かわらけ	(12.2)	—	3.4	大 1/3 胎土：白色針状物質 色調：橙色
212	土器	手づくね かわらけ	(12.3)	—	3.1	大 1/3 胎土：白色針状物質 色調：橙色
213	土器	ロクロ かわらけ	(15.0)	9.8	3.5	大 2/3 胎土：白色針状物質 色調：橙色
214	青白磁	合子蓋	(6.0)	—	[2.3]	1/4 天井部外面に浮き彫りの文様(唐草文?)
215	青磁	瓶子	(9.8)	—	[4.3]	口頸部 1/3
216	青磁	龍泉窯系 劃花文碗	—	—	[3.8]	内面にへら描き劃花文
217	陶器	常滑 甕	—	(18.5)	[10.0]	胴小片・底 1/6 胴部外面に菊花様花弁文のスタンプ 外底面に砂付着 胎土：長石 色調：橙褐色
3面下 出土遺物② (図26)						
218	陶器	尾張 片口鉢	—	—	[3.3]	山茶碗系 (I 類) 口小片 胎土：長石 色調：灰色
219	土器	手づくね かわらけ	(9.3)	(7.8)	1.3	小 1/4 胎土：白色針状物質 色調：橙色
220	土器	ロクロ かわらけ	(9.7)	(7.7)	1.6	小 1/3 胎土：白色針状物質 色調：橙色
221	土器	ロクロ かわらけ	(9.3)	(6.8)	2.1	小 1/3 胎土：白色針状物質 色調：淡褐色 内外面に薄く煤付着
222	白磁	碗	—	(4.8)	[2.4]	底 1/5 高台接地面～高台内無釉
223	木製品	箸	長さ 22.0	幅 0.6	高さ 0.4	完形
224	木製品	箸	長さ 22.0	幅 0.6	高さ 0.4	完形
225	土器	手づくね かわらけ	(8.8)	(7.5)	1.8	小 1/3 胎土：白色針状物質 色調：黄橙色
226	土器	手づくね かわらけ	(9.3)	(7.4)	1.8	小 1/4 胎土：白色針状物質 色調：黄橙色
227	土器	手づくね かわらけ	13.7	—	3.2	大 3/4 胎土：白色針状物質 色調：黄橙色
228	陶器	渥美 甕	—	—	[5.6]	口小片 口縁部内面に自然釉
229	陶器	渥美 甕	—	—	[3.0]	口小片 口縁部内外面に自然釉
230	瓦	平瓦	長さ [16.0]	幅 [10.0]	高さ 2.1	永福寺女瓦 A 類 狭端部と一側縁遺存 凹面ナデ、凸面縦位の縄目タタキ
231	木製品	鳥形?	長さ 20.6	幅 2.9	高さ 0.8	完形? 板目材
232	木製品	箸	長さ 22.4	幅 0.7	高さ 0.7	完形
233	木製品	箸	長さ [21.9]	幅 0.6	高さ 0.6	上下端とも欠損
234	木製品	箸	長さ [21.9]	幅 0.7	高さ 0.5	上下端とも欠損
235	木製品	箸	長さ 21.2	幅 0.7	高さ 0.6	完形
236	木製品	箸	長さ 21.2	幅 0.5	高さ 0.6	完形
237	木製品	箸	長さ [21.0]	幅 0.6	高さ 0.5	一端欠損
238	木製品	箸	長さ [21.4]	幅 [0.5]	高さ 0.6	一端、一側面欠損

番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
239	木製品	箸	長さ 21.0	幅 0.7	厚さ 0.6	完形
240	木製品	箸	長さ 20.2	幅 0.7	厚さ 0.5	完形
241	木製品	箸	長さ [20.3]	幅 0.5	厚さ 0.6	一端欠損
242	木製品	箸	長さ 19.8	幅 0.7	厚さ 0.5	完形
243	木製品	箸	長さ 19.7	幅 0.7	厚さ 0.6	完形
244	木製品	箸	長さ 20.6	幅 0.6	厚さ 0.5	完形
245	木製品	箸	長さ 18.7	幅 0.6	厚さ 0.6	完形
246	土器	手づくね かわらけ	(12.5)	—	3.1	大 1/4弱 胎土：白色針状物質 色調：橙褐色
3面下 出土遺物③ (図27)						
247	土器	手づくね かわらけ	(8.6)	(6.6)	1.6	小 1/4 胎土：白色針状物質 色調：灰橙色
248	土器	手づくね かわらけ	9.8	—	2.4	小 完形、109g 胎土：白色針状物質、雲母 色調：橙褐色
249	土器	ロクロ かわらけ	8.5	7.0	2.3	小 完形、87g 胎土：白色針状物質 色調：橙色 歪み大きい(片口を成形か?)
250	木製品	漆器 皿	(9.5)	(6.6)	1.7	1/4 板目材 内面ロクロ挽き痕目立つ 内外面とも黒色漆塗り、無文
251	木製品	連歯下駄	長さ 21.3	幅 10.0	高さ 3.0	完形 板目材 左前方部にわずかな窪み
252	土器	手づくね かわらけ	8.6	7.7	1.8	小 完形、65g 胎土：白色針状物質 色調：黄橙色
253	土器	ロクロ かわらけ	9.7	7.3	2.0	小 完形、45g 胎土：白色針状物質 色調：黄橙色
254	土器	ロクロ かわらけ	(9.0)	(7.2)	1.5	小 1/3 胎土：白色針状物質 色調：橙色
255	土器	ロクロ かわらけ	(8.9)	(6.8)	1.6	小 1/3 胎土：白色針状物質 色調：赤橙色
256	土器	ロクロ かわらけ	—	4.8	[1.2]	小 底部完存 胎土：白色針状物質 色調：橙色 外底面ナデ?
257	土器	ロクロ かわらけ	—	4.7	[1.4]	大? 底3/4 胎土：白色針状物質 色調：橙色 外底面ナデ?
258	白磁	端反碗	—	—	[5.0]	体部内面に沈線
259	青磁	龍泉窯系 碗	—	6.0	[1.9]	底部のみ 高台内～接地面無釉
260	陶器	常滑 甕	—	—	[6.2]	5型式 口小片 胎土：長石 色調：灰褐色
261	土器	ロクロ かわらけ	(9.4)	(8.4)	1.8	小 2/3 胎土：白色針状物質 色調：橙色
262	陶器	東遠? 無台碗	—	5.0	[1.0]	底完存 胎土：精良、混入物なし 色調：灰黒色 外底面に静止糸切り痕
263	土器	手づくね かわらけ	(7.8)	—	1.3	内折れ 1/3 胎土：白色針状物質 色調：黄橙色
264	鉄製品	釘	長さ 5.2	幅 0.2	厚さ 0.2	上下端とも欠損
265	土器	手づくね かわらけ	(8.9)	—	1.8	小 1/3 胎土：白色針状物質 色調：橙色
266	青磁	龍泉窯系 劃花文碗	—	(6.4)	[2.0]	底部1/3 内底面にヘラ描きの劃花文
267	青磁	龍泉窯系 蓮弁文碗	—	—	—	口小片、傾き不明確
268	陶器	常滑 甕	—	—	[5.1]	3型式 口小片 胎土：長石 色調：灰色 口縁部内面～外面に自然釉
269	土器	ロクロ かわらけ	(9.6)	(7.7)	1.5	小 1/4 胎土：白色針状物質 色調：淡黄褐色
270	土器	手づくね かわらけ	(8.6)	—	1.6	小 1/5 胎土：白色針状物質 色調：橙褐色
271	土器	手づくね かわらけ	(13.3)	—	3.2	大 2/3 胎土：白色針状物質 色調：淡黄褐色
272	土器	ロクロ かわらけ	(8.0)	(5.4)	1.6	小 1/4 胎土：白色針状物質 色調：橙褐色

番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
273	土器	ロクロ かわらけ	(12.0)	(7.8)	3.3	大 1/3 胎土：白色針状物質 色調：橙褐色
274	陶器	尾張 片口鉢	—	—	[3.1]	山茶碗系 (I類) 口小片 胎土：長石 色調：淡橙褐色
275	陶器	常滑 甕	—	—	[7.7]	5型式 口～胴小片 胴内面黒変
276	鉄製品	円盤 用途不明	直径 4.7	—	厚さ 0.3	重さ 15g
3面下 出土遺物④ (図28)						
277	土器	手づくね かわらけ	6.7	—	2.1	小 ほぼ完形、[41]g 胎土：白色針状物質 色調：にぶい灰褐色
278	土器	手づくね かわらけ	8.9	6.9	1.7	小 2/3 胎土：白色針状物質 色調：橙褐色
279	土器	手づくね かわらけ	9.0	7.1	2.0	小 3/4 胎土：白色針状物質 色調：橙色
280	土器	手づくね かわらけ	9.1	7.1	1.8	小 完形、73.1g 2/3 胎土：白色針状物質 色調：黄橙色
281	土器	手づくね かわらけ	9.3	—	1.7	小 ほぼ完形、[71]g 胎土：緻密、夾雑物少ない 色調：淡黄褐色
282	土器	手づくね かわらけ	9.0	7.4	2.0	小 完形、80g 胎土：白色針状物質 色調：黄橙色
283	土器	手づくね かわらけ	8.8	6.9	1.9	小 ほぼ完形、68.7g 3/4 胎土：白色針状物質 色調：橙色
284	土器	手づくね かわらけ	8.3	—	1.8	小 完形、65g 胎土：色調：暗褐灰色
285	土器	手づくね かわらけ	8.8	—	1.9	小 1/2 胎土：緻密 色調：淡黄褐色
286	土器	手づくね かわらけ	(9.4)	(8.0)	1.4	小 1/3 胎土：白色針状物質 色調：黄橙色
287	土器	手づくね かわらけ	(8.4)	(6.8)	1.4	小 1/4 胎土：白色針状物質 色調：黄橙色
288	土器	手づくね かわらけ	(9.4)	—	1.7	小 1/3 胎土：白色針状物質 色調：黄橙色
289	土器	手づくね かわらけ	8.4	—	2.0	小 3/4 胎土：白色針状物質 色調：淡黄褐色
290	土器	手づくね かわらけ	8.6	—	2.2	小 完形、87g 胎土：白色針状物質 色調：黄橙色
291	土器	手づくね かわらけ	(9.4)	(8.3)	2.0	小 1/2 胎土：白色針状物質 色調：黄橙色
292	土器	手づくね かわらけ	(9.2)	—	2.2	小 1/3 胎土：白色針状物質 色調：橙色
293	土器	手づくね かわらけ	(12.0)	—	2.8	小 1/3 胎土：白色針状物質 色調：黄橙色
294	土器	手づくね かわらけ	(12.8)	—	2.8	大 1/3 胎土：白色針状物質 色調：黄橙色
295	土器	手づくね かわらけ	13.0	—	3.3	大 2/3 胎土：白色針状物質 色調：黄橙色
296	土器	手づくね かわらけ	(13.7)	—	3.6	大 1/4 胎土：白色針状物質 色調：淡黄褐色
297	土器	ロクロ かわらけ	(9.2)	(7.8)	2.0	小 1/3 胎土：白色針状物質 色調：橙褐色
298	土器	ロクロ かわらけ	9.0	7.4	1.7	小 完形、87.1g 胎土：白色針状物質 色調：黄橙色
299	土器	ロクロ かわらけ	9.0	6.2	1.6	小 2/3 胎土：白色針状物質 色調：黄橙色
300	土器	ロクロ かわらけ	9.1	7.0	1.5	小 ほぼ完形、70.5g 胎土：白色針状物質 色調：橙色
301	土器	ロクロ かわらけ	9.7	8.2	1.8	小 3/4 胎土：白色針状物質 色調：橙色
302	土器	ロクロ かわらけ	(8.8)	6.0	1.6	小 1/3 胎土：白色針状物質 色調：黄橙色
303	土器	ロクロ かわらけ	(8.8)	(6.0)	1.5	小 1/3 胎土：白色針状物質 色調：黄橙色
304	土器	ロクロ かわらけ	8.8	7.0	2.0	小 ほぼ完形、71.4g 胎土：白色針状物質 色調：黄橙色
305	土器	ロクロ かわらけ	8.7	6.4	1.8	小 1/3 胎土：白色針状物質 色調：橙褐色
306	土器	ロクロ かわらけ	(9.0)	(7.8)	1.8	小 1/4 胎土：白色針状物質、雲母 色調：橙褐色

番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
307	土器	ロクロ かわらけ	9.0	6.0	1.9	小 2/3 胎土：白色針状物質 色調：黄橙色
308	土器	ロクロ かわらけ	(7.9)	(6.0)	1.8	小 1/4 胎土：白色針状物質 色調：黄橙色
309	土器	ロクロ かわらけ	(9.4)	(7.4)	1.6	小 1/2弱 胎土：白色針状物質 色調：橙色
310	土器	ロクロ かわらけ	(9.0)	(7.0)	1.8	小 1/2 胎土：白色針状物質 色調：灰橙色
311	土器	ロクロ かわらけ	9.0	6.0	1.7	小 1/2 胎土：白色針状物質 色調：黄橙色
312	土器	ロクロ かわらけ	9.0	7.0	2.0	小 1/2 胎土：白色針状物質 色調：黄橙色
313	土器	ロクロ かわらけ	(12.5)	(8.8)	3.1	大 1/4 胎土：白色針状物質 色調：黄橙色
314	青磁	龍泉窯系 劃花文碗	—	5.6	[2.0]	I - 2類 底1/2 高台接地面～高台内無釉 内底面へラ描きの劃花文
315	青磁	龍泉窯系 劃花文碗	—	—	[4.7]	内面にへラ描きの劃花文
316	青磁	龍泉窯系 劃花文碗	—	—	[4.0]	内面にへラ描きの劃花文
317	青磁	龍泉窯系 劃花文碗	—	6.2	[1.8]	底完存 内底面にへラ描きの劃花文
318	青磁	龍泉窯系 劃花文碗	(15.4)	—	[3.3]	I - 2類 口1/5 内面にへラ描きの劃花文
319	陶器	瀬戸・美濃 播鉢	(11.4)	(8.4)	3.3	I類 大窯第2段階後半か 口1/6 内外面に鉄釉 内面に11～12条一単位の播り目
3面下 出土遺物⑤(図29)						
320	陶器	常滑 片口鉢	—	—	[7.7]	II類 口小片 胎土：長石 色調：褐色
321	陶器	尾張 片口鉢	—	—	[6.8]	山茶碗系(I類) 口小片 胎土：長石 色調：灰褐色
322	陶器	尾張 片口鉢	—	—	[7.5]	山茶碗系(I類) 口小片 胎土：長石 色調：灰色
323	陶器	尾張 片口鉢	—	14.4	[6.0]	山茶碗系(I類) 底部1/2 外面の体部下端ヨコヘラケズリ 胎土：長石 色調：灰色
324	陶器	常滑 甕	—	—	—	胴小片 肩部外面に断面三角形の凸帯を貼付 外面に自然釉
325	陶器	常滑 甕	—	—	[7.3]	5型式 口小片 胎土：長石 色調：褐色
326	陶器	常滑 甕	—	—	—	胴小片 外面に重方格文のスタンプ
327	陶器	渥美 こね鉢	—	—	[3.3]	口小片 胎土：精良 色調：灰褐色
328	陶器	渥美 こね鉢	—	—	[4.2]	口小片 内面使用により摩滅・平滑
329	須恵器	坏	—	(7.8)	[1.1]	南比企窯産 底1/4 内面の体・底部境に圈線 外底面回転糸切り離し→外周回転ヘラケズリ 胎土：白色針状物質 色調：灰黒色
330	鉄製品	釘	長さ 8.0	幅 0.4	厚さ 0.3	下端欠損
331	木製品	連歯下駄	長さ [21.0]	幅 10.3	高さ 2.0	前端部と右後方部側辺が欠損 追衤目材
332	木製品	草履芯	[17.9]	10.7	0.3	前方部1/2ほど 板目材 一部に編み藁付着
333	骨製品	筭	[11.4]	1.6	0.4	先端部欠損
334	貝製品	漆パレット	長軸 8.5	短軸 7.0	—	内面に黒色の付着物(漆?ニカワ?)



1. I区1面 全景(北から)



5. I区1面 遺構7b(東から)



2. I区1面 遺構7a(東から)



6. 同上 断面(東から)



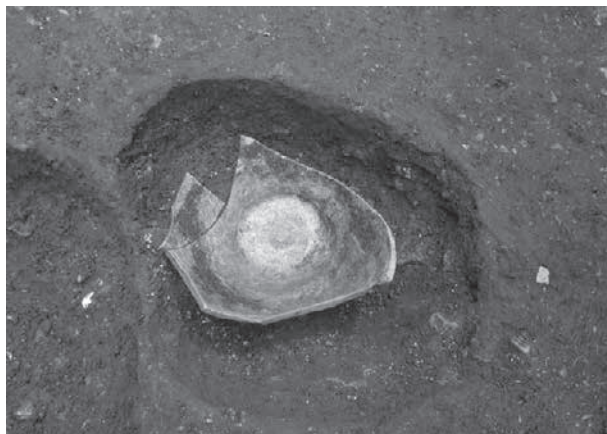
3. 同上 土層断面(東から)



7. I区1面 遺構1(北から)



4. I区1面 遺構7b(東から)



8. I区1面 遺構9(北から)

図版2



1. I区1面 遺構7a断面・遺構11(東から)



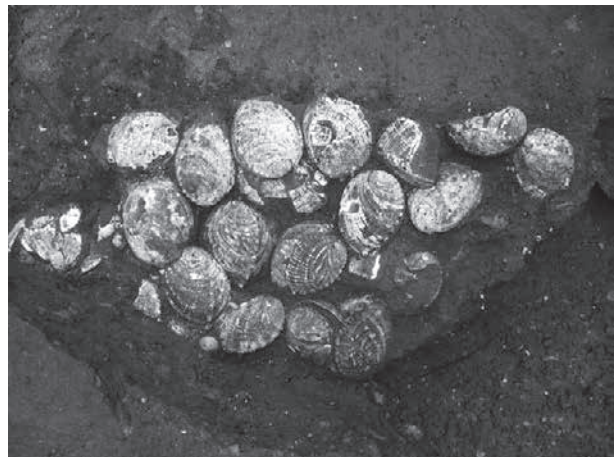
2. I区1面 遺構11(南から)



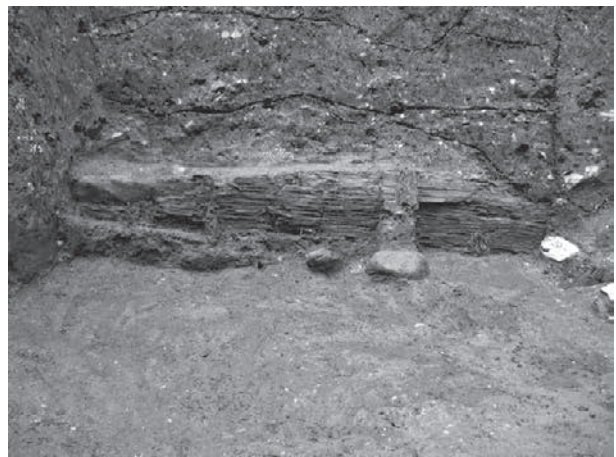
3. I区2面 全景(北から)



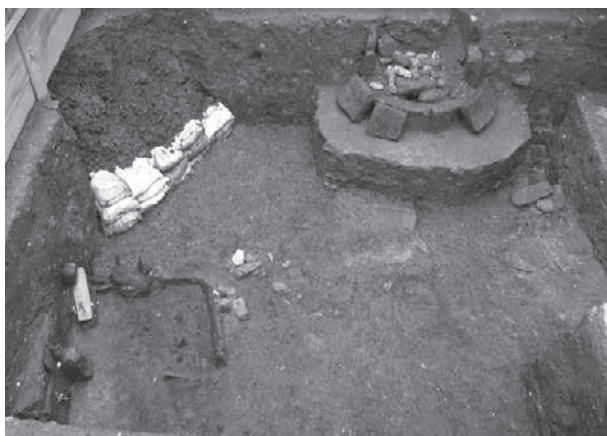
4. I区3面 遺構27a 遺物出土状況(西から)



5. 同上 アワビ殻集積出土状況(南から)



6. I区1面 遺構27a板壁材検出状況(西から)



1. I区3面 遺構27a(北から)



5. II東区3面下 遺構27周辺 遺物出土状況(東から)



2. I区3面下 遺構57(北から)



6. II西区2面 全景(北から)



3. 同上 土層断面(南東から)



4. 同上 遺物出土状況(南から)



7. II西区3面 全景(北から)

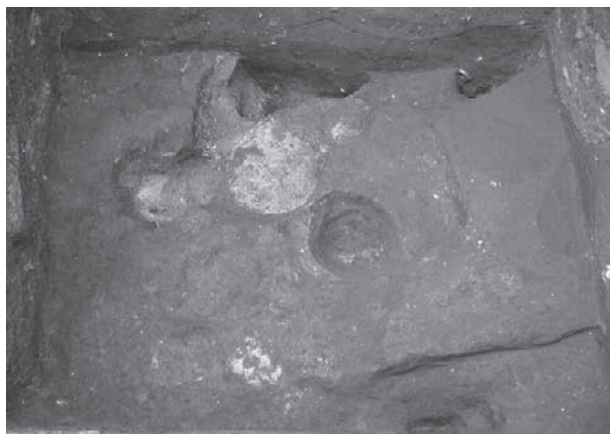
図版4



1. II西区3面下 全景(北から)



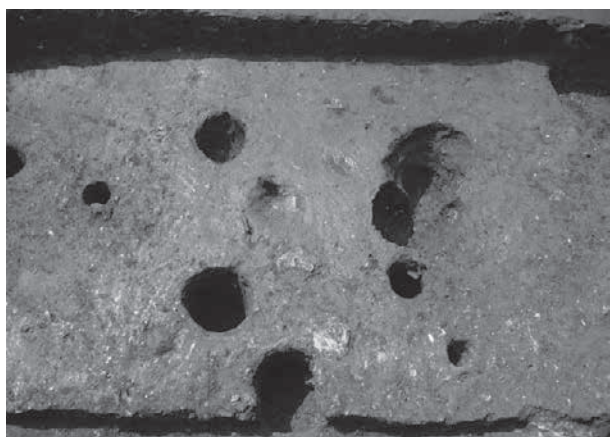
5. II東区3面 遺構27a 遺物出土状況



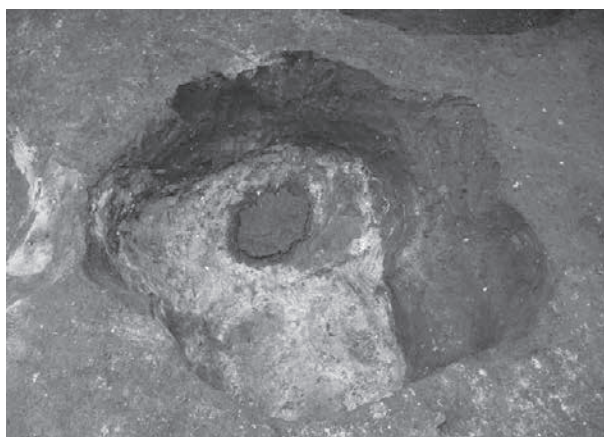
2. II西区3面下② 全景(北から)



6. II東区3面下 全景(北から)



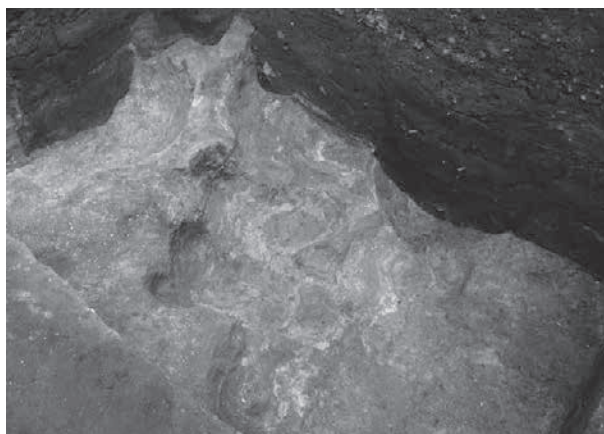
3. II東区1面 全景(東から)



7. II東区3面下 遺構133(西から)



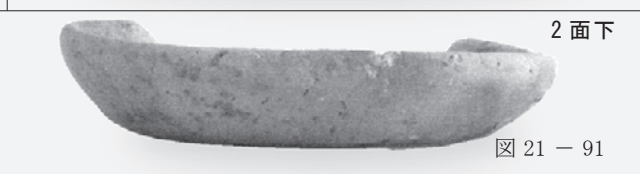
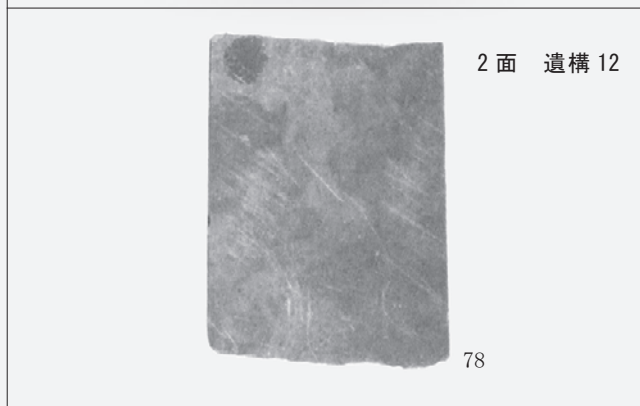
4. II東区3面 全景(北から)



8. II東区 地山砂層検出状況(南西から)







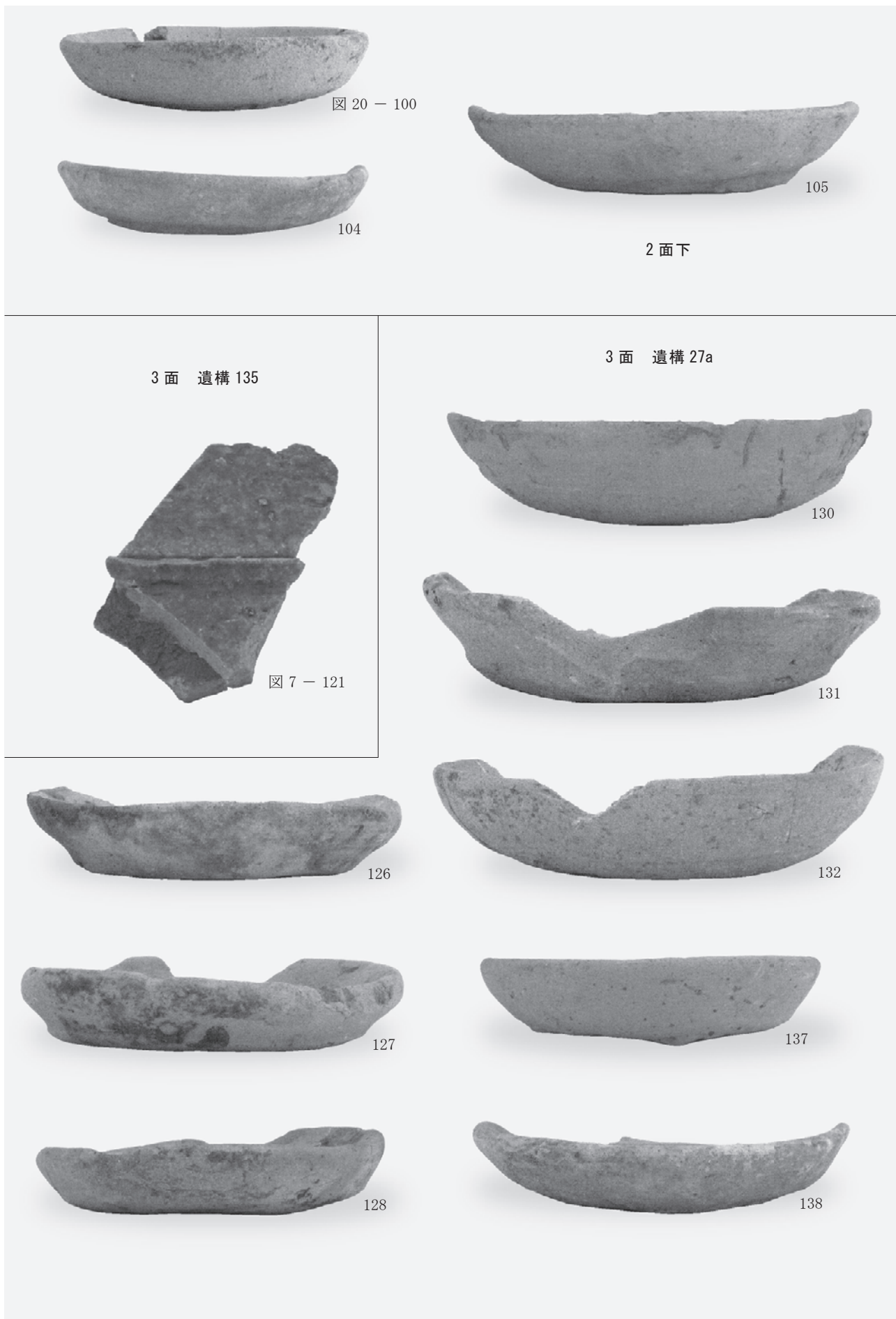


图 20 - 100

104

105

2面下

3面 遺構 135

图 7 - 121

3面 遺構 27a

130

131

126

132

127

137

128

138

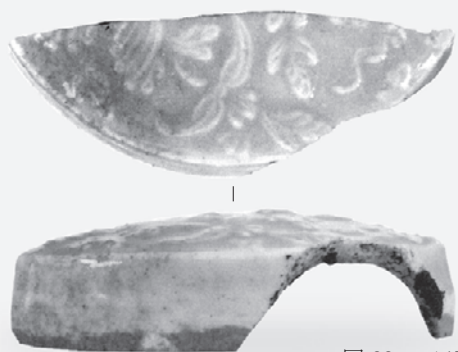


图 22 - 145



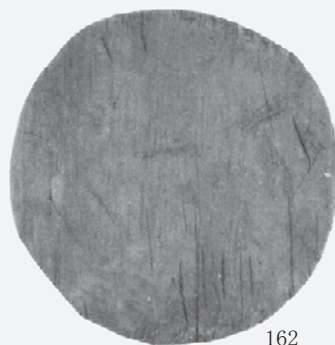
146



149



156



162



163

3面 遺構 27a

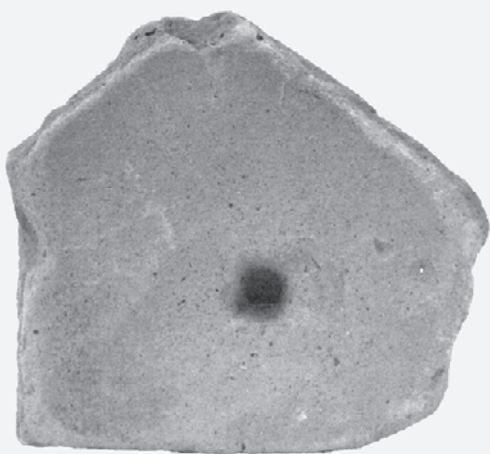
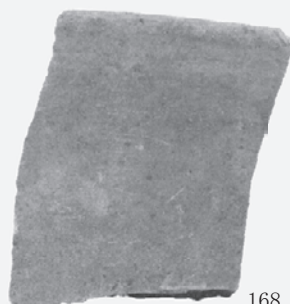


图 23 - 165



168



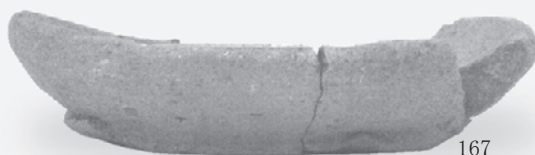
169



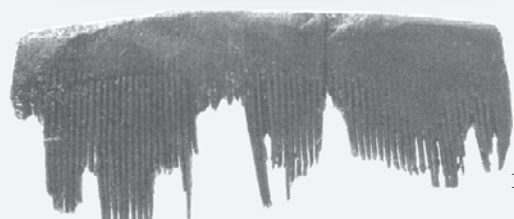
166



172



167



174

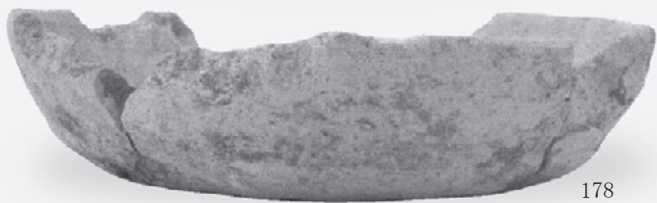
3面 遺構 27a



图 23 - 175



179



178



180



183



3面 遺構 84

187



图 25 - 214

3面下 遺構 138

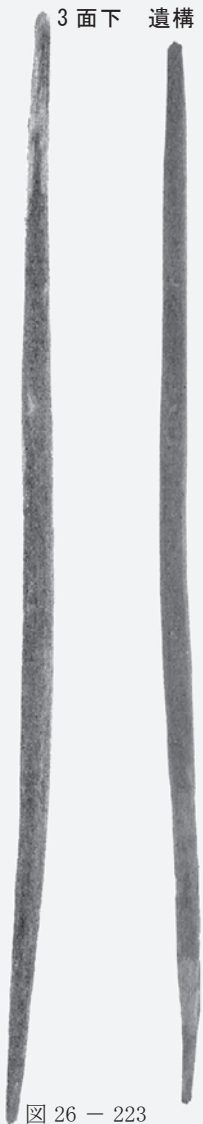


图 26 - 223



224



231



215

3面下 遺構 133

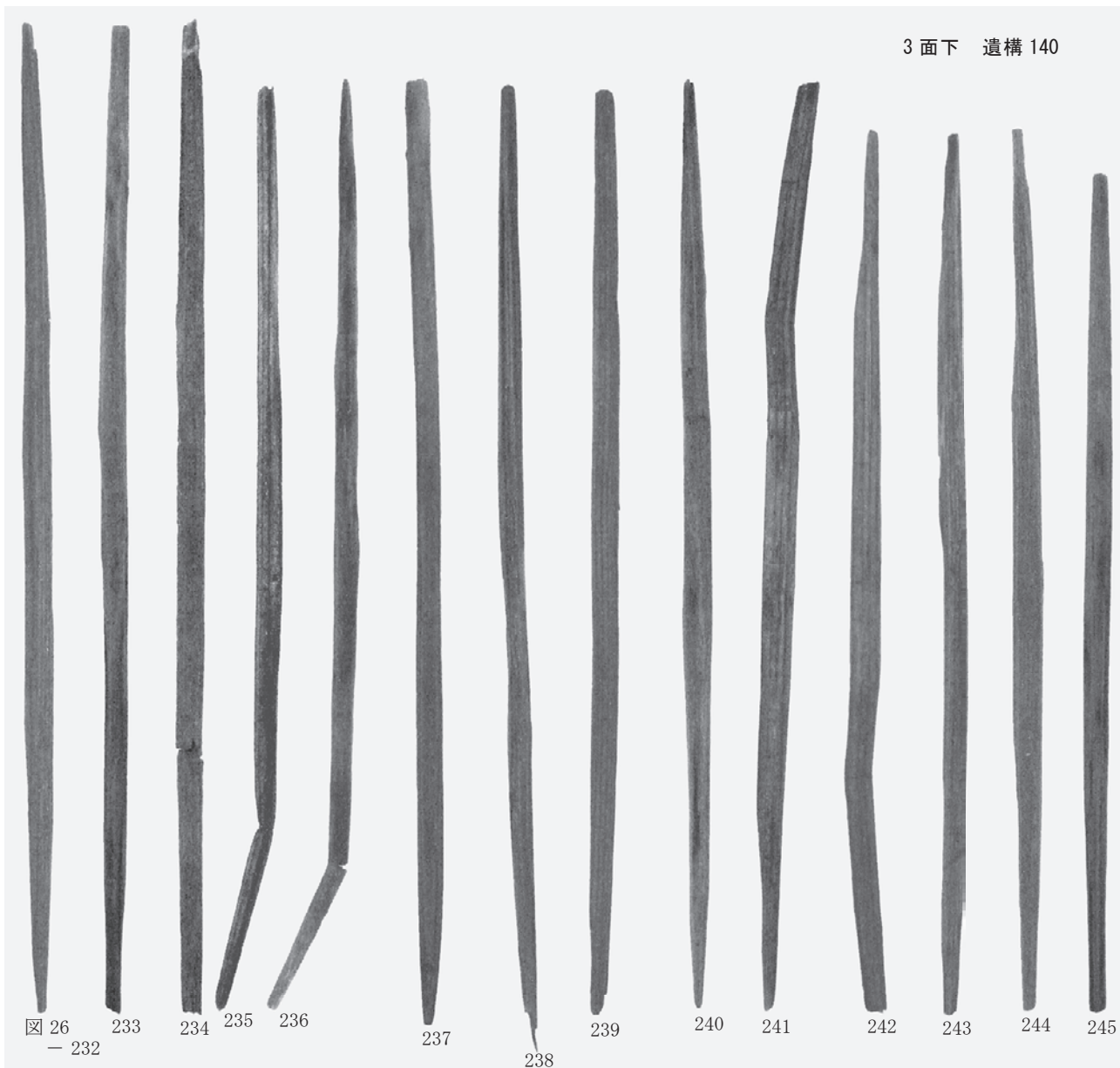
3面下 遺構 140



225



227



3 面下 遺構 140

26
- 232
 233
 234
 235
 236
 237
 238
 239
 240
 241
 242
 243
 244
 245



3 面 遺構 27b



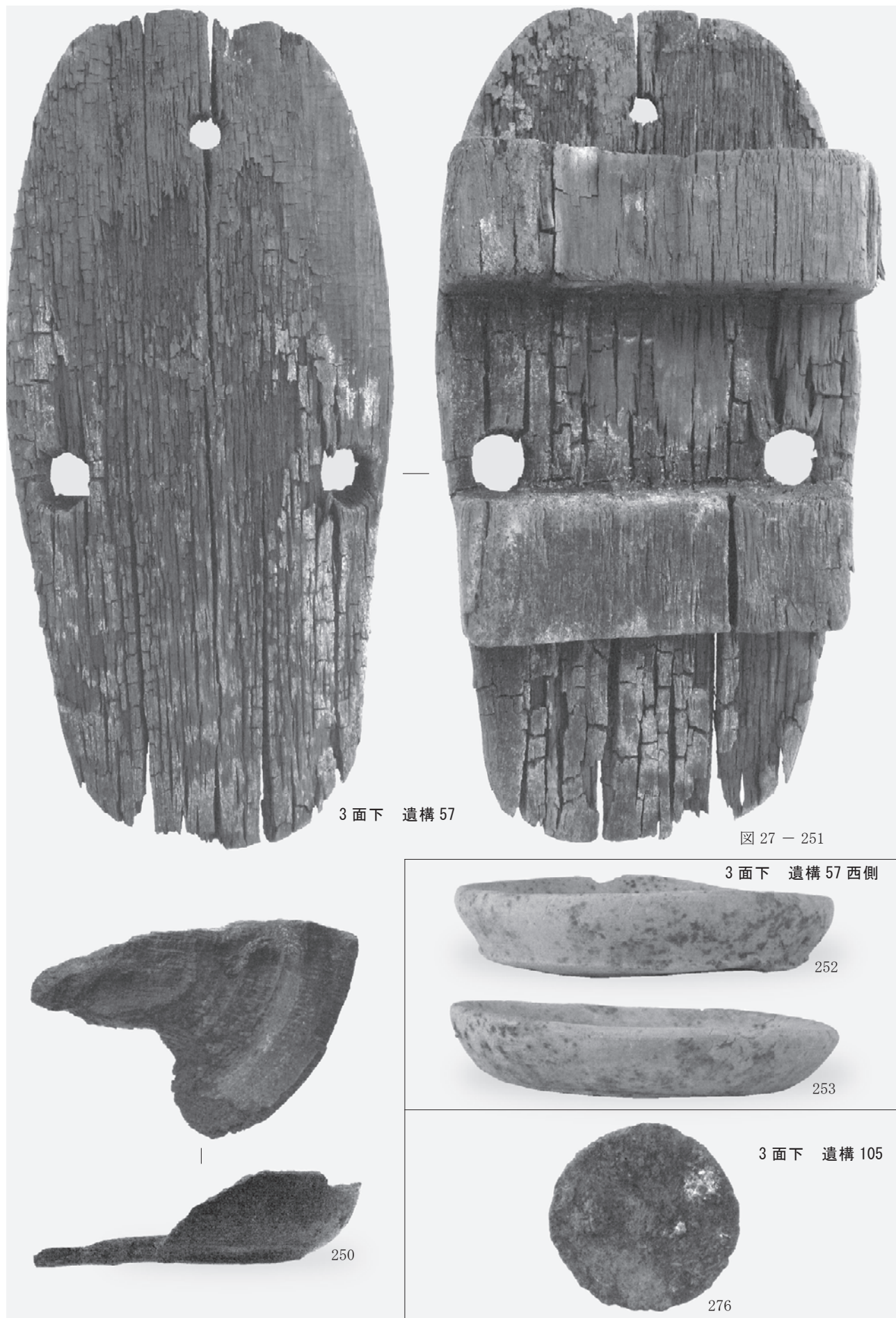
3 面下 遺構 57

24 - 195

27 - 247

248

249



3 面下 遺構 57

图 27 - 251

3 面下 遺構 57 西側

252

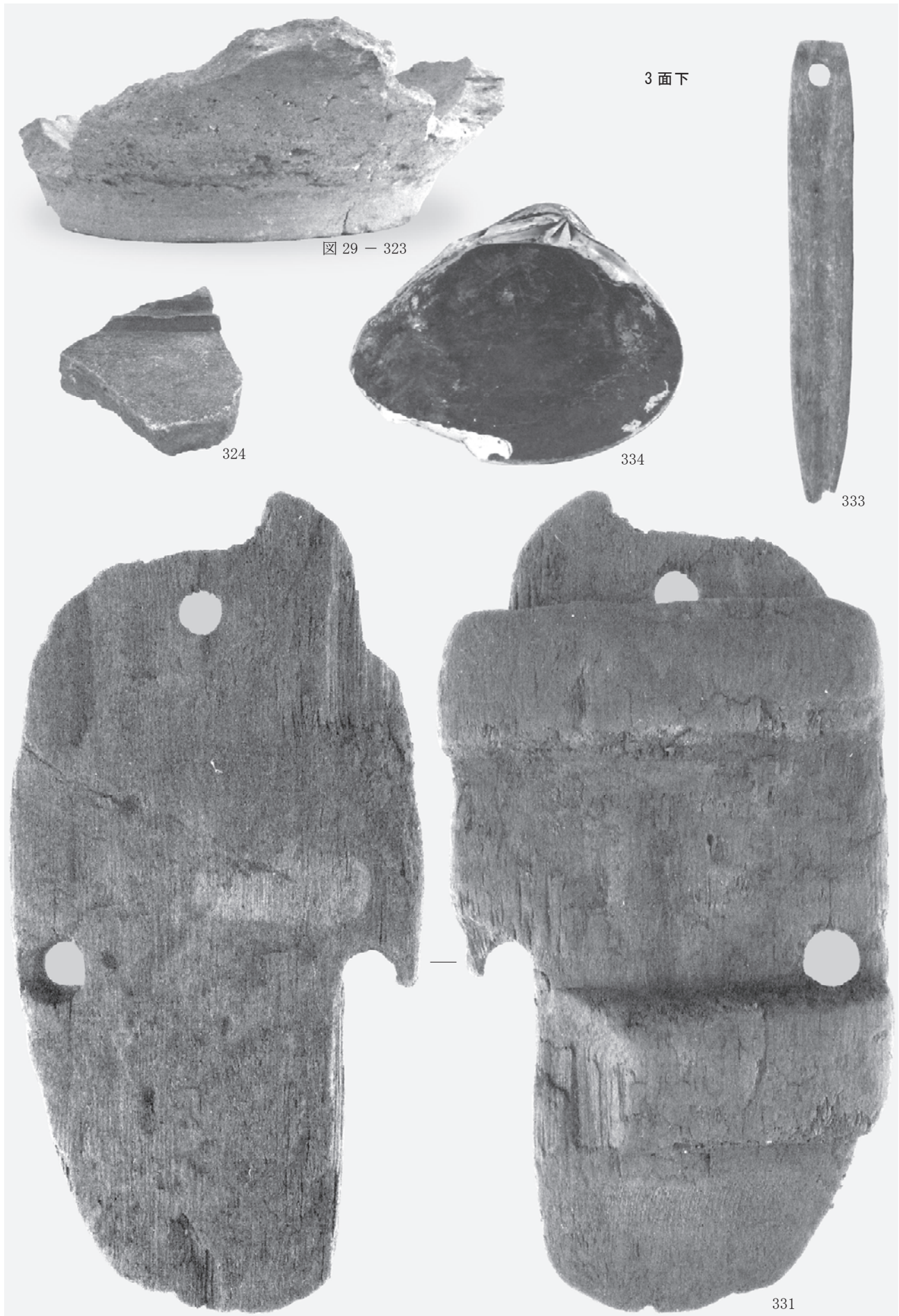
253

3 面下 遺構 105

250

276





田楽辻子周辺遺跡 (No.33)

浄明寺二丁目 569 番 10

例 言

1. 本報は「田楽辻子周辺遺跡」内、浄明寺二丁目569番10における埋蔵文化財発掘調査報告である。

2. 調査期間 2012年6月14日～同年7月26日

調査面積 60m²

3. 本調査地点の略称はD Z 1201とした。

4. 調査体制

担 当 者 原廣志

調 査 員 吉田桂子 森谷十美 根本志保

作 業 員 秋田公佑 片山直文 赤坂進 安藤宗幸 永野幹晴

5. 本報告作業分担

遺構図整理 根本志保

遺物実測 吉田桂子・森谷十美・根本志保

同墨入れ 吉田桂子・森谷十美・根本志保

同観察表 根本志保

同写真撮影 須佐仁和・根本志保

原稿執筆 根本志保

編 集 根本志保

6. 出土遺物、図面、写真などの発掘調査資料は、報告書刊行後に鎌倉市教育委員会が保管する。

7. 本報の凡例は以下の通りである。

挿図 縮尺：全側図：1/50 遺構図：1/40 1/20 遺物図：1/1 1/3 1/6

数 値：文章中の（）数値は復元径を示す。

遺 構 図：遺構の標高は海拔高の数値を示している。

遺 構 図：黒塗りは土器・陶器に付着した油煙煤、漆、紅色顔料を表現している。

分 類：火鉢は河野眞知郎氏による分類に従った。

瓦は原廣志氏による分類に従った。文献はいずれも参考文献に記した。

編 年：常滑の編年はの愛知県史(2012)の中野晴久編年による。

現地調査及び資料整理に際して以下の方々からご助言とご協力を戴いた。記して感謝の意を表したい。

尚、施主小松氏から物心両面の援助をいただき感謝を申し上げる(敬称略、五十音順)。

上村和直・上本進二・河野眞知郎・熊谷満・古田土俊一・後藤建・汐見一夫・玉林美男

(株)博通・能芝勉・馬淵和雄

目次

第一章 調査地点の概観	267
第1節 遺跡の概観	
1. 位置と立地	
2. 歴史的環境	
3. 周辺の遺跡	
第二章 調査の概要	276
1. 調査の経過	
2. 測量軸の設定	
3. 層序	
第三章 検出された遺構と出土遺物	281
1. 第1面の遺構と出土遺物	
2. 第2面の遺構と出土遺物	
3. 2面下深掘り坑出土遺物	
第四章 まとめ	339
1. 遺構の変遷	
2. 出土遺物と計量比について	

挿図目次

図1 周辺の遺跡	268	図19 第2面 建物2	302・303
図2 中世の鎌倉地形図(『鎌倉・逗子地形発達史 7』加除筆)	271	図20 第2面 建物2出土遺物	304
図3 明治15年頃の調査地点周辺(『迅速側図』加 除筆)	272	図21 第2面 かわらけ溜り・出土遺物	305
図4 グリッド配置図	277	図22 第2面 土坑(1)・出土遺物	306
図5 調査区堆積土層図	278	図23 第2面 土坑(2)・出土遺物	307
図6 第1面全体図	280	図24 第2面 土坑(3)・柱穴71・出土遺物	310
図7 第1面 井戸1	282	図25 第2面 土坑30(1)・出土遺物	311
図8 第1面 井戸1出土遺物	283	図26 第2面 土坑30(2)・出土遺物	312
図9 第1面 かわらけ溜まり・出土遺物	284	図27 第2面 柱穴(1)・出土遺物	314
図10 第1面 土坑(1)・出土遺物	286	図28 第2面 柱穴(2)・出土遺物	315
図11 第1面 土坑(2)・出土遺物	287	図29 第2面 1面下2面上出土遺物(1)	318
図12 第1面 柱穴	288	図30 第2面 1面下2面上出土遺物(2)	319
図13 第1面 柱穴出土遺物	289	図31 第2面 1面下2面上出土遺物(3)	320
図14 第1面上出土遺物(1)	293	図32 第2下深掘り坑出土遺物	323
図15 第1面上出土遺物(2)	294		
図16 第2面 全体図	296		
図17 第2面 建物1	298・299		
図18 第2面 建物1出土遺物	301		

表 目 次

表 1 周辺の遺跡(1).....269	表 11 遺物観察表(7).....330
表 2 周辺の遺跡(2).....270	表 12 遺物観察表(8).....331
表 3 第1面遺構観察表.....290	表 13 遺物観察表(9).....332
表 4 第2面遺構観察表.....317	表 14 遺物観察表(10).....333
表 5 遺物観察表(1).....324	表 15 遺物観察表(11).....334
表 6 遺物観察表(2).....325	表 16 遺物観察表(12).....335
表 7 遺物観察表(3).....326	表 17 遺物観察表(13).....336
表 8 遺物観察表(4).....327	表 18 出土遺物計量表(1).....337
表 9 遺物観察表(5).....328	表 19 出土遺物計量表(2).....338
表 10 遺物観察表(6).....329	

図 版 目 次

図版 1342 第1面近景(南から) 第1面全景(井戸1を中心に・北から)	図版 7348 第2面建物・柱穴53・87(東から) 第2面柱穴87遺物出土状況(南から) 第2面かわらけ溜り(東から)	図 11 第1面柱穴 図版 13354 図 12 第1面上(1) 図 13 第1面上(2) 図 16 第2面建物1
図版 2343 第1面全景(南から) 第1面上遺物出土状況(北から) 第1面かわらけ溜り遺物出土状況(東から)	図版 8349 第2面土坑19(南から) 第2面土坑20(東から) 第2面土坑23(東から) 第2面土坑26(西から) 第2面土坑27(西から) 第2面土坑29(南から)	図版 14355 図 16 第2面建物1 図 18 第2面建物2 図 19 第2面かわらけ溜り 図 20 第2面土坑(1)
図版 3344 第1面井戸1(北から) 第1面井戸1西面(東から) 第1面井戸1東面(西から) 第1面井戸1南東隅接合面(北西から)	図版 9350 第2面土坑30・35(北から) 第2面土坑30(北から) 第2面土坑35(東から)	図版 15356 図 21 第2面土坑(2) 図 22 第2面土坑(3) 図 23 土坑30(1) 図 24 土坑30(2) 図 25 柱穴(1)
図版 4345 第1面井戸1南面(北から) 第1面井戸1南面鑿痕アップ 第1面井戸1北面(南から)	図版 10351 第2面土坑35(南西から) 第2面上遺物出土状況(南から) 第2面柱穴50(北から) 第2面柱穴50 遺物出土状況(北から)	図版 16357 図 25 第2面柱穴(1) 図 26 第2面柱穴(2) 図 27 第2面1面下2面上(1)
図版 5346 第1面柱穴102(南から) 第1面土坑1(南から) 第1面土坑3(北から) 第1面土坑4(北から) 第1面土坑5(西から) 第1面土坑6(北から) 第1面土坑13周辺(東から)	図版 11352 2面下深掘坑(東から) 調査区南壁土層堆積 調査区東壁土層堆積	図版 17358 図 28 第2面1面下2面上(2) 図 29 第2面1面下2面(3) 図 30 2面下深掘坑
図版 6347 第2面全景(南から) 第2面全景(東から)	図版 12353 図 6 第1面井戸1 図 7 第1面かわらけ溜り 図 8 第1面土坑(1) 図 9 第1面土坑(2)	図版 18359 出土した釘 チャート 使用痕のある軽石 鉄滓

第一章 調査地点の概観

第1節 遺跡の概観

1. 位置と立地

調査地点は「田楽辻子周辺遺跡(県遺跡番号NO.33)」の範囲内、浄明寺二丁目569番10に所在する。鎌倉市の東部の六浦道(県道金沢・鎌倉線、以下「六浦道」に統一)沿いの杉本寺前に架かる犬懸橋を渡り、住宅街に入った中にある。周辺は字名を「宅間」と言い、その範囲は現行の町名である浄明寺二丁目とほぼ一致する。調査地点の南西側には犬懸ヶ谷があり、「宅間」「犬懸」ともに上杉諸流の名字である。

六浦道とほぼ並行に流れる滑川は十二所に源を発し、谷を開析し所々蛇行しながら西に流れ大蔵付近で二階堂川と東御門川、南から釈迦堂川、大御堂川と合流し約20mの川幅を持ち鶴岡八幡宮の東側あたりで大きく南に向きを変え、鎌倉市中心部の沖積平野を形成しつつ相模湾に流れ込む。

現在「田楽辻子のみち」とされているのは大御堂橋を南に渡り、大御堂ヶ谷、釈迦堂ヶ谷、犬懸ヶ谷の開口部を経て宅間ヶ谷に抜ける東西道である。道幅は狭いものの滑川を挟み県道六浦道とほぼ平行して走る。調査地点は滑川左岸であり、六浦道と「田楽辻子のみち」に挟まれている。上本進二の「鎌倉・逗子地形発達史」によると鎌倉時代この辺りは谷底平野・山麓平野にあたる。(上本2000)。また鎌倉市中の主峰とも言うべき衣張山は調査区の南に位置する。滑川を越えた北東の平地には浄妙寺があり、その東側前面の字名を「御所之内」と言い、鎌倉公方の屋敷があったとされる。

2. 歴史的環境

古代以前

今回の調査でも弥生式土器の壺と思われる土器片が3片出土している。

縄文時代では図1からは外れるが周辺の荏柄天神辺りや明王院の周辺、鑪ヶ谷北遺跡で土器片の発見がある。弥生時代になると沖積低地に遺跡が見られるようになる。調査地点からほぼ1km西の滑川右岸の大倉幕府周辺遺跡群では弥生時代中期から古墳時代初頭の集落が展開する。古墳時代には駅周辺の低地部で集落が見られ、丘陵部には横穴がある。調査地周辺では当該期の遺物が採集されている。また衣張山の山頂付近では弥生時代末から古墳時代の高坏、甕が出土している。山頂に小規模な集落があったのか、もしくは祭祀的な場であったかと報告者は指摘している(鈴木・菊川2001)。奈良・平安時代には今小路西遺跡(御成小学校地点)で鎌倉評家が発見されているように、鎌倉旧市街地に評家関連遺構とそれに伴う集落が検出されている。調査地周辺でも竪穴住居の発見や土師器片が出土されている。弥生時代から平安時代にかけては雪ノ下や杉本寺周辺に集落が点在するが、浄妙寺以東ではまとまった集落址の発見はなく開発は浄妙寺より西側で先行するようだ。だが、浄妙寺以東でも点的ではあるが遺物の出土例はあり、主だった生活域を浄妙寺以西と決めるのは尚早である。中世に幹線道路となる六浦道の原形がどこまで遡るかという点も併せて考えると興味深いところである。

表1 周辺の遺跡(1)

田楽辻子周辺遺跡(NO.33)

地点	地番	報告書/他
1	浄明寺二丁目569-10	調査地点
2	浄明寺字宅間562-33	大上周三 1992『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』8 鎌倉市教育委員会
3	浄明寺一丁目661-1	森孝子 2000『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』16 鎌倉市教育委員会
4	浄明寺一丁目676-1	未報告
5	浄明寺一丁目556-6外	福田誠 2006『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』22 鎌倉市教育委員会
6	浄明寺一丁目691-4	未報告
7	浄明寺一丁目652-8	森孝子 2009『第19回鎌倉市遺跡調査・研究発表会発表要旨』鎌倉考古学研究所他
8	浄明寺一丁目556-6	押木弘己 2012『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』28 鎌倉市教育委員会
9	浄明寺釈迦堂658	手塚直樹 1990『釈迦堂田楽辻子遺跡』釈迦堂田楽辻子遺跡団

杉本寺周辺遺跡(NO.158)

10	二階堂字杉本912	馬淵和雄 2002『杉本寺周辺遺跡』鎌倉市教育委員会
11	二階堂字杉本912	未報告
12	二階堂字杉本903	松尾宣方 1983『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報』I 鎌倉市教育委員会
13	二階堂字杉本932-1	宮田真 2007『杉本寺周辺遺跡発掘調査報告書』(株)博通
14	二階堂字杉本903	田代郁夫 1988『報国寺境内やぐら・杉本寺周辺遺跡内やぐら発掘調査報告書』杉本寺周辺遺跡内やぐら発掘調査団

浄妙寺旧境内遺跡(NO.408)

15	浄明寺字向小路78	鎌倉市教育委員会 1983『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報』I 鎌倉市教育委員会
16	浄明寺字稲荷小路129-2	原廣志 1985『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』1 鎌倉市教育委員会
17	浄明寺字向小路90-1	田代郁夫・原廣志 1991『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』7 鎌倉市教育委員会
18	浄明寺三丁目6-3	大河内勉 1996『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』12 鎌倉市教育委員会
19	浄明寺三丁目115-2	松山敬一朗 1999『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』15 鎌倉市教育委員会
20	浄明寺三丁目16-1	松山敬一朗 2002『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』18 鎌倉市教育委員会
21	浄明寺三丁目126	原廣志 2005『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』21 鎌倉市教育委員会
22	浄明寺三丁目119	瀬田哲夫 2004『神奈川県埋蔵文化財調査報告』46 神奈川県教育委員会
23	浄明寺三丁目101-13	斉木秀雄・降矢順子 2006『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』22 鎌倉市教育委員会
24	浄明寺三丁目3-2	福田誠 2007『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』23 鎌倉市教育委員会
25	浄明寺三丁目122-1・2	馬淵和雄 2011『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』27 鎌倉市教育委員会
26	浄明寺三丁目115-14	熊谷満 2010『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』26 鎌倉市教育委員会
	浄明寺三丁目115-3	熊谷満 2010『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』26 鎌倉市教育委員会

公方屋敷跡(NO.268)

27	浄明寺三丁目143-2	原廣志 1994『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』10 鎌倉市教育委員会
28	浄明寺三丁目151-1・151-4	宮田真 1996『公方屋敷跡発掘調査報告書』公方屋敷跡発掘調査団
29	浄明寺四丁目237	熊谷満・斉木秀雄 2006『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』22 鎌倉市教育委員会
30	浄明寺四丁目297-12外	未報告

大楽寺跡(NO.262)

31	浄明寺字胡桃ヶ谷251-1	田代郁夫 1989『神奈川県埋蔵文化財調査報告』31 神奈川県教育委員会
32	浄明寺四丁目246-1	宮田真 2010『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』26 鎌倉市教育委員会
33	浄明寺四丁目181	根本志保 2007『神奈川県埋蔵文化財調査報告』51 神奈川県教育委員会
34	浄明寺四丁目181-12	未報告

報国寺遺跡(NO.306)

35	浄明寺字宅間533	松尾宣方 1983『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報』I 鎌倉市教育委員会
36	浄明寺字宅間520-1	武淳一 1994『東国歴史考古学研究所調査研究報告』1 東国歴史考古学研究所
37	浄明寺二丁目474-11外	原廣志 2007『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』23 鎌倉市教育委員会
38	浄明寺二丁目474-12	原廣志 2007『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』23 鎌倉市教育委員会
39	浄明寺二丁目533	田代郁夫 2006『神奈川県埋蔵文化財調査報告』49 神奈川県教育委員会

表2 周辺の遺跡(2)

上杉氏憲邸跡(NO.258)

地点	地番	報告書/備考
40	浄明寺一丁目699	馬淵和雄 1995『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』11 鎌倉市教育委員会

积迦堂遺跡(NO.257)

41	浄明寺字积迦堂642	松尾宣方 1983『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報』I 鎌倉市教育委員会
42	浄明寺字积迦堂597-1	斉木秀雄 1989『神奈川県埋蔵文化財調査報告』31 神奈川県教育委員会
43	浄明寺621	手塚直樹 1989『浄妙寺积迦堂ヶ谷遺跡』浄妙寺积迦堂ヶ谷遺跡発掘調査団
44	浄明寺一丁目598-21	未報告
45	浄明寺一丁目598-35	未報告
46	浄明寺一丁目602-1他	未報告

青砥藤網邸跡(NO.269)

47	浄明寺五丁目434-4	未報告
----	-------------	-----

鎌倉城(NO.87)

48	浄明寺五丁目448・1449	鈴木庸一郎 2005『鎌倉城 浄明寺五丁目地内』(財) かながわ考古学財団
----	----------------	---------------------------------------

川越重頼邸跡(NO.270)

49	浄明寺五丁目305イ外	斉木秀雄 2006『川越重頼邸跡発掘調査報告書』(有) 鎌倉遺跡調査会
50	浄明寺五丁目318-1	未報告
51	浄明寺五丁目423-1外	未報告

横小路周辺遺跡(NO.259)

52	二階堂字荏柄9-1	菊川英政 1990『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』6 鎌倉市教育委員会
53	雪ノ下五丁目557-1	野本健二 1998『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』14 鎌倉市教育委員会
54	二階堂字荏柄10-6	福田誠 2000『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』16 鎌倉市教育委員会
55	二階堂字荏柄10-1	原廣志 2003『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』19 鎌倉市教育委員会

大倉幕府周辺遺跡群(NO.49)

56	雪ノ下四丁目565-4	菊川英政 1991『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』7 鎌倉市教育委員会
57	二階堂字荏柄3-6外	未報告
58	雪ノ下字天神前562-30	未報告
59	雪ノ下字天神前562-29	福田誠 1996『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』12 鎌倉市教育委員会
60	雪ノ下字大倉耕地562-16	福田誠 2001『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』17 鎌倉市教育委員会
61	雪ノ下四丁目567-7	馬淵和雄 2004『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』20 鎌倉市教育委員会
62	雪ノ下四丁目573-4	未報告
63	雪ノ下四丁目569-1	馬淵和雄 1990『大倉幕府周辺遺跡群』大倉幕府周辺遺跡群発掘調査団

天王館跡(NO.409)

64	浄明寺三丁目104-1	未報告, 河野真知郎 1995『中世都市鎌倉 遺跡が語る武士の都』講談社選書メチエ
----	-------------	---

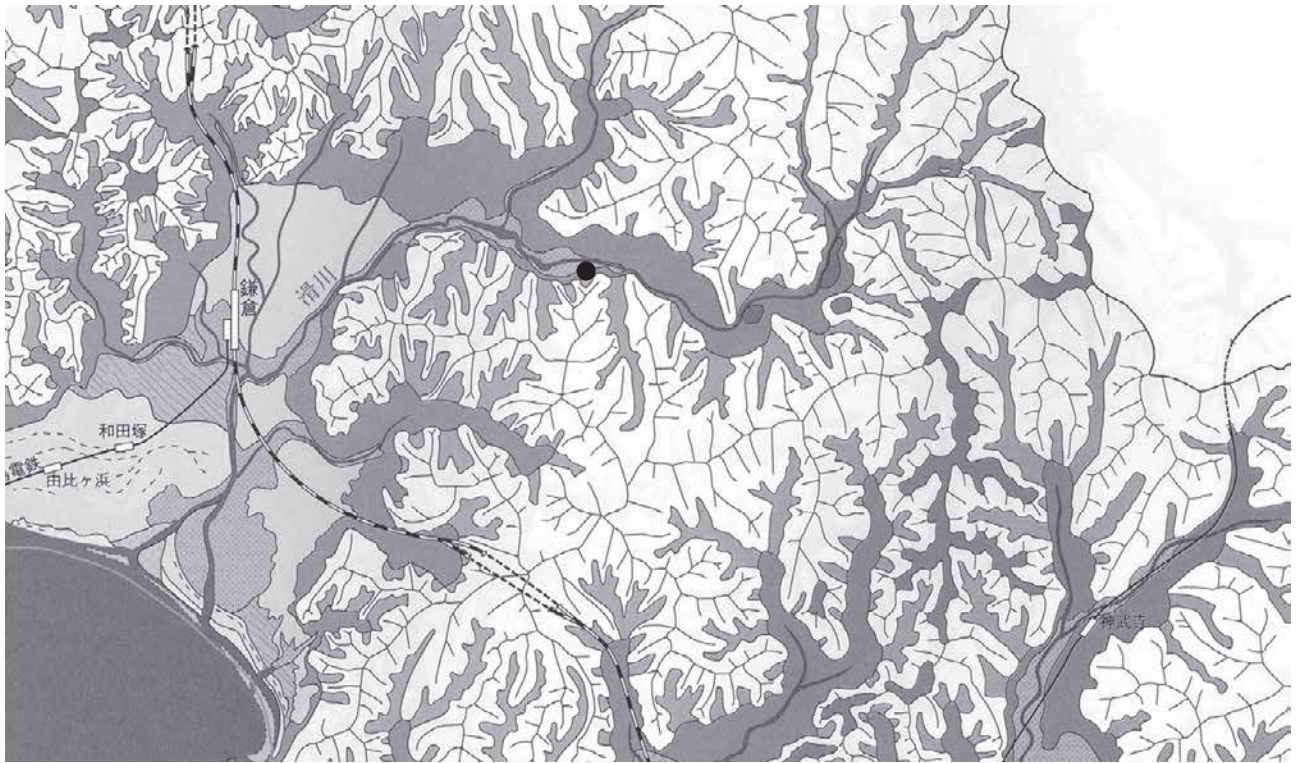


図2 中世の鎌倉地形図(上本2000図7に加除筆)

田楽辻子

「辻子」というのは小路より更に小さい通路のことを呼んだのではないかとされている(石井1989)。「田楽辻子」の史料による初見は『吾妻鏡』による嘉禄三年(1227)正月二日条、「戌の刻、田楽辻子の東西一町余焼亡す」の記事である。「東西一町余」ということから東西に通ずる路であることが分かる。次に出現するのは、正嘉元年(1257)十一月二十二日条の「若宮大路焼失す。(略)田楽辻子に至りて、火止まる。」という記事である。若宮大路からそれほど遠くない、南北の大路と交差する路のようにもとれる。おぼろげに田楽辻子は見えてきたが判然としない。後述するが図1の地点3・9では道路状遺構の検出がある。13世紀半ば以降滑川左岸に東西道はあり、そして、六浦に抜ける道に合流していたのではないだろうか。また、『相良家文書』による正応三年(1291)五月八日付の迎蓮(相良頼俊)の譲状に鎌倉の釈迦堂の前の地としてその四至を注して、「東限てんがくの地」というのが見られ、てんがくは田楽であり、釈迦堂は元仁元年(1224)に北条泰時が亡父義時追福のため造立した大御堂ヶ谷の東の釈迦堂ヶ谷にあったそれであろうから、現在の「田楽辻子のみち」とそう変わらないのではないかという指摘もある(高柳1967)。

名前は、釈迦堂前に田楽が住んでいた。田楽座を構成していた。といわれ、それに由来する。「田楽」自体は、平安後期から見られるようである。当初は実際に水田耕作に携わる直接生産者とその労働の効率を良くするために奏した音楽であったが、その後、農事を伴わない芸能としての「田楽」に発展し、11世紀には悪霊を退散されるためとして田楽法師が出現し人気を博していたようである。鎌倉時代には祭礼芸能の主座を占めるようになり、また、14代執権北条高時が田楽に狂していたとも言う。史料では『吾妻鏡』の寛元三年(1245)八月一六日条に「(略)入道大納言家棧敷において御見物ありと云々。馬場の儀、神子田楽、馬長等常のごとしと云々。(略)」という記事がある。また、宝治元(1247)年九月一六日条では「相模国毛利庄の山中に怪異等あり。毎夜田楽の粧を成すの由、土民等言上すと云々。」との記事がある。



図3 明治15年頃の調査地点周辺（『迅速側図』加除筆）

六浦道

現在は大倉辺りから朝比奈を越え武蔵国六浦に通じる街道を指す。また、頼朝が鎌倉に入る以前は現在の寿福寺にあったといわれる義朝の館まで通じていたとされる（馬淵1994）。

六浦道は、鎌倉時代国際的な貿易拠点としての湊を持つ六浦と鎌倉を結ぶ道であり、湊からの物資が流通し、時に軍用ともなる主要道路であった。また六浦は鎌倉の一部もしくは境界領域として考えられていた。鎌倉の内と外については様々な議論があるが、一例として『吾妻鏡』の元仁元年（1224）十二月二六日の記事で、疫病流行のため四角四境鬼気祭、陰陽権助国道が申し行われる。東は六浦、南は小壺、西は稲村、北は山内とある。

鎌倉幕府開幕当初は東西方向の六浦道を基軸にしていたが、嘉禄元年（1225）の御所移転後は南北の若宮大路を機軸にするようになる。しかし大倉あたりの邸宅が廃棄され荒野に帰することはなかったし、鎌倉府が浄妙寺の東に置かれた際には再び六浦道が基軸となり武士たちの居館も六浦道沿いに移転したのである。上杉氏も鎌倉府に近接する犬懸、宅間に邸宅を持っていた。また山内・扇谷にも居館があり、山内は今小路が北の武蔵国府へ向かう地域であり扇谷は寿福寺のある亀ヶ谷に近接していることを考慮すれば、室町時代の鎌倉における要地が六浦道沿いと武蔵国府に向かう道沿い・扇谷周辺にあったと考えることができる。この状況が、今小路と六浦道の交差点である亀ヶ谷に館を構えた義朝の頃と似ていることから、室町期の鎌倉の構造は義朝の頃のような自然発生的な本来あるべき鎌倉の姿に回帰したものであるとの指摘もある（石井1988）。

鎌倉公方と上杉氏

鎌倉公方とは室町幕府が東国統治のために置いた鎌倉府の首長の通称であり、鎌倉御所、関東公方とも呼ばれている。あくまでも京都にいる将軍の代理であり幕府の正式な職名ではない。

東国の統治は足利一族が五代（足利義詮－基氏－氏満－満兼－持氏）にわたり行った。時代が下るにつれ幕

府から権限が移管され次第に独立した支配をするようになるが、管領上杉憲忠を殺害したため(享徳の乱)幕府に追討され鎌倉を追われ、下総国古河に移る。これら歴代の鎌倉公方の居住地(御所)は浄妙寺の東側に比定され一帯は公方屋敷の遺称がある。17世紀に編まれた『新編鎌倉誌』にも記載があるため江戸時代始めには一帯は「公方屋敷」として認識されていたようだ。

鎌倉公方を補佐していたのが関東管領上杉氏である。上杉氏の始祖である重房は元々公家であったが建長四年(1252)宗尊親王が将軍として鎌倉に赴くのに随行し、側近としてそのまま鎌倉に定着した。以後足利氏と姻戚関係となり重んじられる。暦応三年(1340)には鎌倉公方の補佐役として重能が任ぜられる。以後幕府の抗争もあり退くが尊氏の死後、貞治二年(1363)公方基氏の要請により再び補佐役となる。それ以来、関東管領の職名が確立し、その職は上杉氏の世襲となり山内・犬懸・宅間各家で持ちまわる。しかし、室町開府以降、幕府と鎌倉府、公方と管領の抗争は絶えることはなく鎌倉府が安定していたわけではない。応永二三年(1416)には犬懸家の氏憲(禅秀)が公方足利持氏・管領(山内)上杉憲基に反旗を翻し上杉禅秀の乱が起きる。禅秀は一度は政権を奪取するが、基氏が室町幕府の援助を得て反撃し結局公方・管領が勝利した。これにより犬懸氏は滅亡した。これ以降管領職は上杉宗家である山内氏が独占するようになる。管領の勢力は大きくなったが、公方との対立は収まらず加えて扇谷家上杉氏との抗争も激化する。しかし永享・享徳の乱で鎌倉府が事実上崩壊すると管領職も実体を失い、さらには後北条との対立により勢力は衰退に向かう。天文十五年(1546)、憲正は管領職と上杉姓を長尾景虎(謙信)に譲り、形式上管領職は相続されるが謙信の死により消滅する。

宅間ヶ谷

調査地点は字名を宅間ということは先に触れた。宅間家の祖は上杉重能で、父は勸修寺道宏、母は上杉頼重の娘加賀局である。祖父重房も元は勸修寺家の出であり、重能は母の兄弟である憲房の養子となる。同じく頼重の娘を母とする足利尊氏とは従兄弟にあたる。元弘三年の六波羅攻めに参じるなど、永く尊氏に功があったが貞和五年(1349)に高師直によって殺害される。実子がなかったため管領山内憲頭の子能憲を養子とした。能憲は応安元年(1368)に憲頭の跡を受けて管領となり永和四年(1378)に亡くなるまで職にあった。この間義堂周信を開山に迎え、西御門に報恩寺を開創している。義堂周信の日記『空華日用工夫略集』には能憲の死に際して彼が「琢磨谷」の屋敷を訪れたと書かれており、14世紀末までは宅間ヶ谷に宅間上杉氏の屋敷があったと推測する。その養子憲孝(山内憲方の子)も明德三年(1392)から応永元年(1394)まで管領を務めた。しかし憲孝以後の宅間氏は活躍することなく途絶えてしまう。

文献で「宅間」は「詫間」「宅磨」「沢間」と書かれることもある。「宅間」という名の由来は宅磨派の絵師が住んでいたためという伝承がある。『風土記稿』もその説をとっている。吾妻鏡によると京都の絵師宅磨派の祖、宅磨為遠の三男為久は元暦元年(1184)正月とその翌年の文治元年(1184)に頼朝に京都から招かれ、勝長寿院本堂の壁画、二十五菩薩図の制作に携わった記事が載る。また宅磨為行は為久の子かとも言われる。『吾妻鏡』寛喜三年(1231)十月六日条に将軍藤原頼経の命に応じ五大堂建立予定地で「左近将監為行」が図を描いたことがみえる。為久・為行が始祖となりその後、14世紀半ば以降に宅磨長祐・浄宏(法眼)などの名がみられる。鎌倉宅磨派の絵師・仏師は南北朝・室町期まで活躍を見せ上杉氏の名字になる前「たくま」という地名があったと考えられ、その由来となろう。

また、五山文学僧として知られる中巖円月の自選年譜である『仏種慧济禅師中岩円月和尚自曆譜』には円月13歳の正和元年(1312)「是年予十三(略)後学秘密教於三宝院、日々詣詫間谷、礼宝篋欄等、巡百匝而帰拜弘法大使像百拜」とある。14世紀前半代に中巖円月が詣でる寺院が宅間ヶ谷にあったのではないか。

3. 周辺の遺跡

弥生時代から平安時代までの遺構の検出、遺物が出土するのは、調査地点数の粗密や後世による削平、滑川の氾濫なども視野に入れるべきではあるが、先にも述べたとおり浄妙寺以西が主体である。地点8では古墳後期から平安時代の遺物包含層が発見され古墳後期を中心とした土師器、須恵器がまとまって出土している。地点61では弥生時代から平安時代までの河道と遺物が出土されている。地点53では弥生土器が出土している。地点5では土師器が出土している。地点13では縄文時代から平安時代までの遺物の出土と窪地の検出がある。地点10では弥生時代中期から後期の土器と石器、住居址の検出がある。地点2では古代の溝状の遺構、地点18では弥生時代土器の出土がある。唯一浄妙寺以東の発見例の地点26では須恵器の甕片が出土している。

全地点で中世の遺跡は検出されている。ここでは大きく田楽辻子、六浦道、杉本寺から犬懸ヶ谷に抜ける南北道、各谷戸、公方屋敷を意識してみたい。

調査地点に一番近い地点2の鎌倉時代の遺構は東西に延びる溝が検出している。その南側の肩は土塁の可能性があると報告されている。地点3・9では13世紀中頃から15世紀代にわたる東西の道路状遺構を検出している。現行道路と平行・重複し田楽辻子を彷彿させる。また各地点とも13世紀後半から14世紀前半に貝砂、玉砂利の張り替えがあり、宗教関係を思わせる場との指摘がある。特に地点3では『吾妻鏡』の康元元年(1256)一二月の記事の勝長寿院焼亡と比定する焦土の検出の指摘がある。地点9の道路状遺構は6回の改修が施され、開始時期は13世紀頃まで遡ることが指摘されている。

この道筋に展開する一番西側の谷の釈迦堂ヶ谷の地点7では合計9面調査され、その内4面の13世紀前半から中頃にかけて武家屋敷を想像させる規模の礎石建物の検出があり、特記すべきは礎石建物の周りは白砂で覆われていたことであろう。しかし鎌倉末から南北朝期にかけては屋敷の縁辺部的な様相を示すと指摘されている。地点43は谷戸内の平場全域とそれを囲む尾根の調査であり、尾根からは瓦に囲まれた常滑の蔵骨器の出土がある。平場の遺構ややぐらの存在から寺院址の可能性を指摘出来よう。また須恵器の甕片の出土がある。

犬懸ヶ谷の地点40では南北に延びる道路状遺構と共に15世紀代の炭化層の検出があり、応永23年(1416)の「上杉禅秀の乱」であると見てよいのではとの指摘がある。この南北道は後述する犬懸坂に抜ける道であろうか。谷戸開口部の地点6では、古墳時代から古代に帰属する溝状遺構と13世紀から15世紀の3面の生活面が調査され礎版を持った柱穴や玉砂利敷きが検出されている(山口正紀氏教示による)。屋敷もしくは寺院の一角の可能性が考えられよう。

宅間ヶ谷では東西の山裾に展開するやぐら群と、東やぐら群ではやぐら群の前面を「崖下遺構群」としての調査がなされ、検出された遺構は屋敷もしくは寺地の一部を構成する遺構群として捉えられている。また地点37・38では13世紀前半から後葉までの宅間上杉氏を想起させる建物址の検出と14世紀前葉から15世紀にかかる報国寺に関連すると見られる遺構の検出がある。報国寺境内の地点35では鎌倉末期から昭和初期までの整然と積まれた東西の石垣と、南北方向の道路状遺構の検出がある。

地点10では平安時代末期(12世紀第4四半期)から南北朝時代(13世紀第3四半期)まで存続する南北に延びる道路状遺構の検出がある。遺構は当初、軸線を異にするものの次第に六浦道に直交する方向に変化していく。この道路に対して報告者は、道路の南側の延長が犬懸坂に真っ直ぐ続くことから、杉本寺から始まる坂東札所の巡礼道ではないかと考察している。巡礼道について、『新編鎌倉志』は「(略)土俗、衣掛山とも云う。此所と、釈迦堂谷との間に、切抜の道あり。名越へ出るなり。昔の本道とみへたり」(巻之二「犬懸谷」との記述がある。更に、時代を遡り『源平盛衰記』巻二十一「小坪坂合戦事」によると、

小坪合戦以前に「イササカ公用」のために鎌倉を訪れていた和田義茂は、小坪において源氏方の三浦一族と、平家方の武蔵武士との間で合戦が行われたとの報を聞き「犬懸坂ヲ馳超テ」名越方面へと向かっている。(『神奈川県史 資料編』1-826)との平安時代末期の資料があることを踏まえ、この道は杉本寺の麓から出ており、犬懸坂に続く。平安時代後期から長く使われ、決して仮設的な存在ではない。おそらく準幹線ともいう役割を担っていたはずと指摘している。また報告者は以上の点と石井進の推論(石井1986)を合わせ、遺跡自体に対して杉本(=和田)一族の本拠地であったと言及している。地点10ではほかに4期にわたる遺構の変遷があり、13世紀前半には埋没されてしまう薬研堀の溝や12世紀第4四半期から13世紀第1四半期の和田一族と指摘される有力豪族の大型の居館や13世紀第2四半期から13世紀第3四半期を中心とした有力武士の建物址、13世紀後半から14世紀前半に渡り、寺院の一角から職能に関わる人々の活動空間への変遷が指摘されている(馬淵2002)。

六浦道は仁治2年(1241)の朝比奈切通しが開かれた際の整備以前からの路であろう。現在の寿福寺にあったとされる義朝の館は六浦道と武蔵国府に向かう現在の今小路との交差点という要地を占めていたと考えられている(馬淵1994)。この今小路とつながる六浦道沿いには参道がほぼ直角に交わる荏柄天神や道に面して位置する杉本寺など頼朝の都市設営以前からの存在が想定される寺がある。だが、現在の六浦道と平行・重複する明確な遺構の検出は少ないが、地点64では鎌倉時代の六浦道と考えられる両側に側溝を持つ幅5mほどの道跡とその南側には屋敷跡が検出されたという。地点10には、ガス管理設工事に伴う立ち会い調査が行われた際に発見された、幅6.9m以上の泥岩地形による舗装道路と北側側溝の発見が報告されている。ただ地点13で12世紀末から13世紀初頭頃の東西に延びる道路状遺構の検出はあるが、「六浦道とは考えにくい」との指摘がある。しかしながら地点10の12世紀第4四半期から始まる大型建物は六浦道に直交すると指摘がある。13世紀頃以降になると六浦道を意識した区画は多く見られるようであり、地点26では13世紀中頃から14世紀前半の六浦道と平行する東西溝や、南北の道路状遺構、柱穴列など六浦道を意識した区画を採っていると指摘されている。地点27では遺跡を3期に分け、その中で13世紀前葉から15世紀前葉まで連続と続く木組の側溝を持ち浄妙寺と足利邸(公方屋敷)とを結ぶと推定される東西道路の検出がある。地点17は13世紀前半から15世紀前半までの南北方向の道路状遺構の検出がある。現在の六浦道沿いの地点28は遺跡を3期に分け中でも13世紀後葉から14世紀初頭に最盛期をもつ遺跡であり、この地域が当時六浦道を軸に捉えた町割り展開していたと予想されるという。地点29では13世紀前葉から14世紀代の遺跡として礎石建物、通路、それに伴う門、溝、玉砂利敷き等の遺構が六浦道を軸にした地割に準じていることが推測されている。また地点56では六浦道と直交する荏柄天神の旧参道と指摘される土塁状遺構と13世紀前半には機能を失う薬研形の溝の検出がある。この同時期に機能を失う薬研形の溝はほかに地点54、55、60に見られる。浄妙寺以東では全体に13世紀中頃から14世紀代の遺跡が目立ち、足利氏関連の遺跡の姿が見えてくる。地点25では13世紀前半から15世紀前半までの遺跡を7期に分け、建物等の遺構を武士住宅から都市住民の小型住宅、その後武士住宅もしくは寺院の一角と変遷し、更に後半の一世紀に面の更新がないことから鎌倉時代が終われば鎌倉は「都市性」を失うと言及する。地点32は鎌倉府の盛衰と符合するように遺構が変遷する。地点23では13世紀後半から14世紀前半の建物が検出され、町屋的な空間と指摘されている。地点21は13世紀後半から15世紀の遺跡で区画溝、建物、粘土採掘坑等の検出があり、足利氏に外護された浄妙寺旧境内に関連していると指摘。地点24では池が検出され、13世紀前葉から14世紀前半の平瓦がまとまって出土している。杉本寺の別当もしくは浄妙寺の前身の寺の可能性が考えられよう。

第二章 調査の概要

1. 調査の経過

調査地点は鎌倉市の北東に位置し、杉本寺前の犬懸橋を渡り、県道金沢・鎌倉線より南の住宅街に550 m程入った鎌倉市浄明寺二丁目569番10に所在する。今回の発掘調査は個人専用住宅建設の計画があったため、工事の実施により掘削深度が60cmであり埋蔵文化財に影響を及ぼす恐れのあることが予想された。このために鎌倉市教育委員会による遺構確認の試掘調査が行われた。その結果、現地地下15cm前後まで現代の客土が確認され、それ以下は南北朝時代から鎌倉時代の2時期の遺構面（生活面）とそれに伴う遺物が出土し、具体的に埋蔵文化財が存在することが判明した。これにより当該建築工事の実施による埋蔵文化財への影響が避けられないと判断された。このため事業主と協議を行ったところ当初の計画に基づき建築工事を行いたいとの意向が示された。そこで文化財保護法に基づく届け出手続きを行い、施工者と調査方法・工程の協議を重ねた結果、平成24年6月14日から約1ヶ月半の予定で発掘調査を実施する運びとなった。

現地調査は6月14日に機材を搬入した後、試掘データに基づいて遺構面まで人力で掘り下げ、遺構の確認・検出を行った。

調査面積は60㎡が対象である。調査の結果、建物址、井戸、柱穴、土坑などにより構成された遺構群が検出された。出土遺物は、かわらけを始め、貿易陶磁器、国産陶器、瓦質製品、石製品、金属製品、など13世紀後半から15世紀前葉の所産である。また、6月21日より南隣接地の発掘調査が始まる。調査は(株)博通が請け負っており、調査にあたって使用した測量軸等の設定の協力を得た。

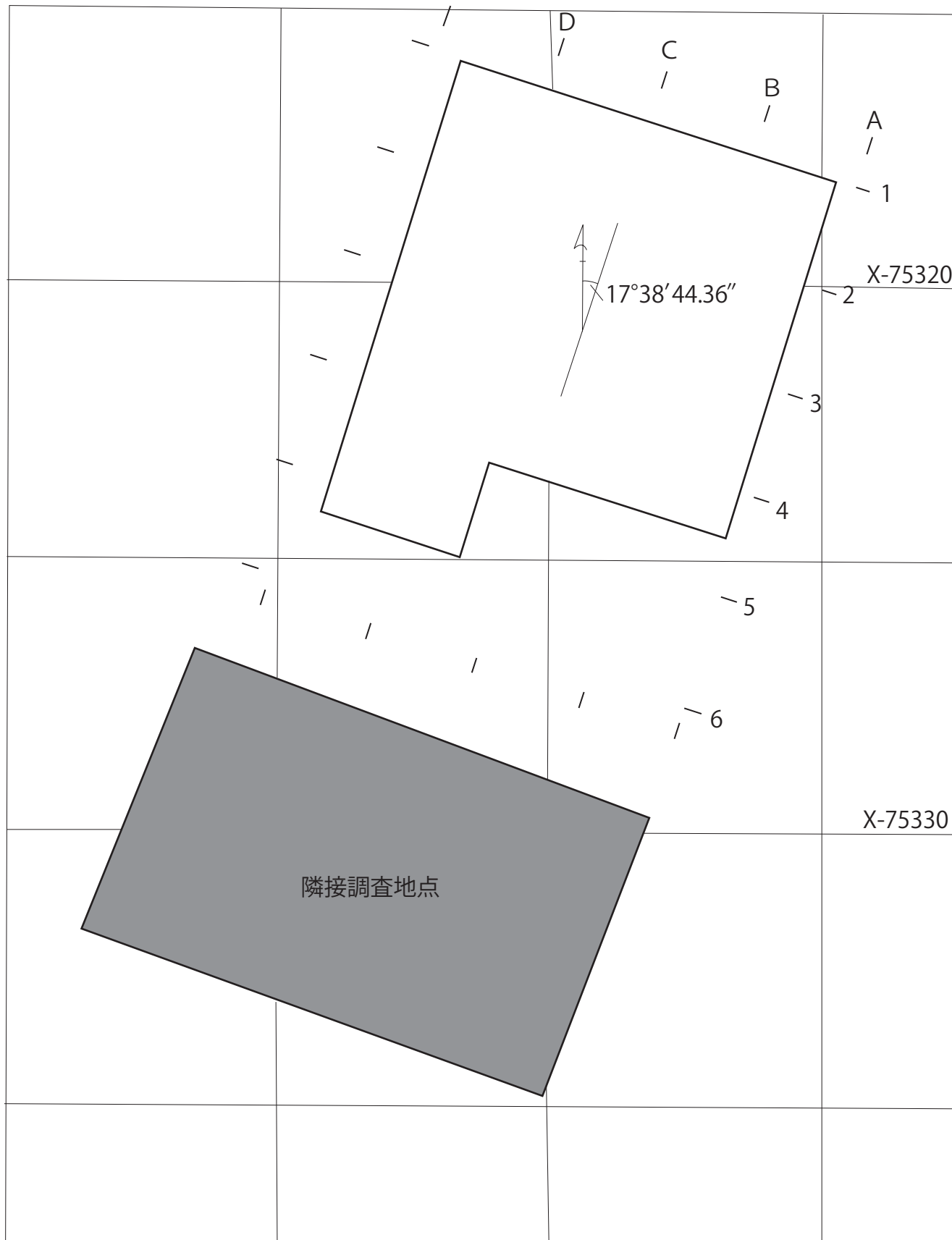
調査は平成24年7月26日までの間に必要な記録作業を行い、同時に機材を撤去して現地調査を終了した。調査の経過については、以下に主な作業内容を日誌抜粋で記しておく。

日誌抄

- 6月14日(木) 調査区を設定して現地表下15cmまで人力で表土掘削を実施。測量用の海拔高を鎌倉市三級水準点から原点レベルを敷地内に移動。機材の搬入。環境整備。
- 6月25日(月) 鎌倉市4級基準点を基に測量軸方眼の設定。
- 6月26日(火) 第1面の遺構確認作業を開始。
- 7月2日(月) 第1面平面図、個別遺構断面図作成。
- 7月5日(木) 第1面全景写真の撮影、個別遺構の写真撮影。第2面まで掘り下げ。
- 7月10日(火) 第2面遺構確認作業を開始。
- 7月20日(金) 第2面平面図、個別遺構断面図作成。
- 7月23日(月) 第2面全景写真の撮影、個別遺構の写真撮影。
- 7月24日(火) 最終深堀設定、掘削、図面作成。
- 7月26日(木) 現地調査終了。機材撤収。

Y-24190

Y-24180



S = 1/100

図4 グリッド配置図

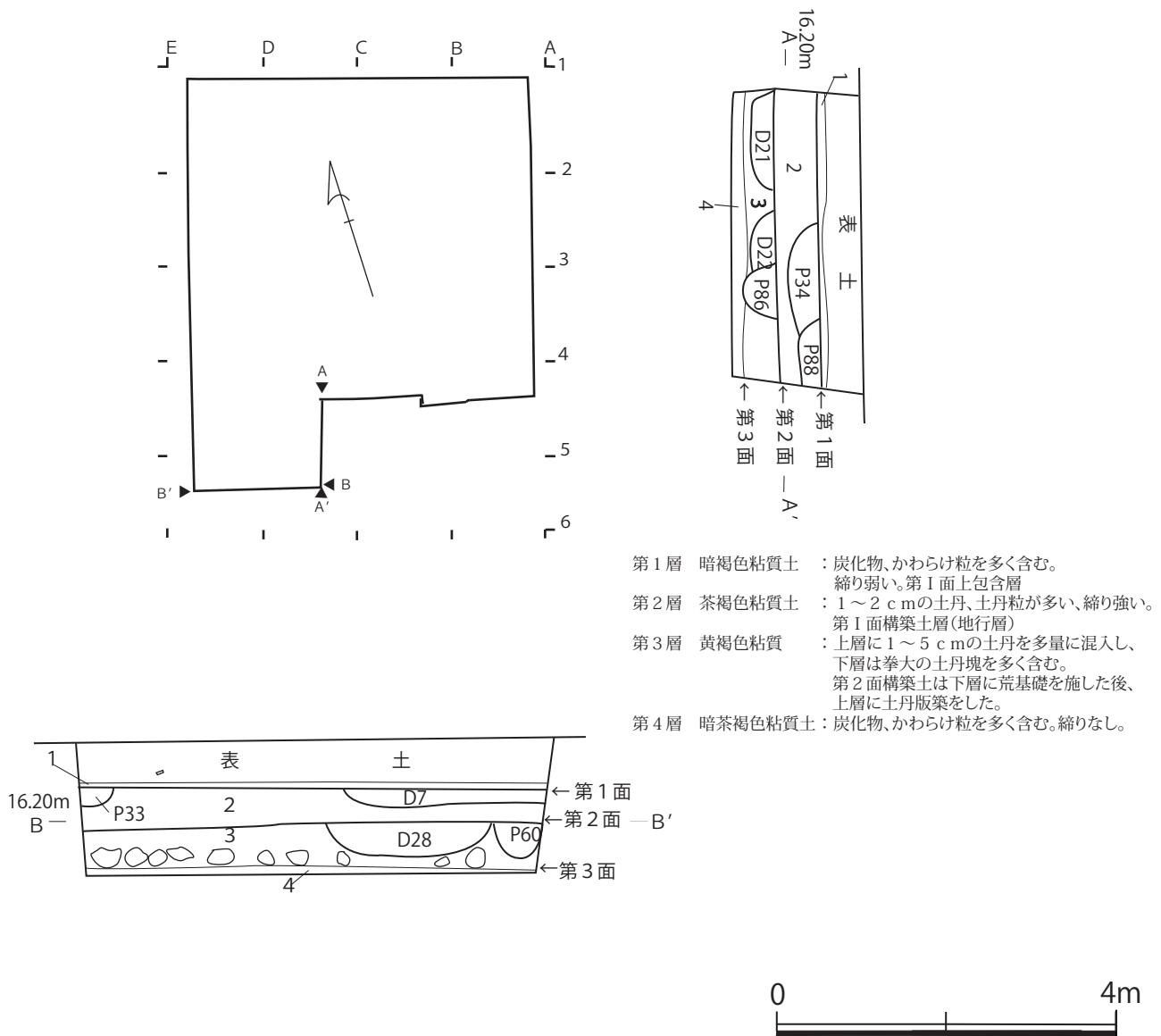


図5 調査区堆積土層図

2. 測量軸の設定

調査にあたって使用した測量軸の設定には図4に示したように国土座標の数値(世界測地系IV系)を用いており、測量グリッドは調査区の軸方向にほぼ平行して東西の基準軸を設け調査を実施した。また南側の隣接した地点は(株)博通による発掘調査が重複した期間(平成24年6月21日から6月28日)で実施された。近接した地点から考えて同一敷地内の遺構検出も予想されたので(株)博通の協力により測量軸を統一して設定することにした。4級基準点2点の関係から開放トラバース測量により算出して測量基準点にあたるグリッド杭を設定している。更に測量軸は東西軸と南北軸2m方眼による軸線を配し東西軸はA~Eのアルファベットの名称、南北軸は1~6の算用数字をそれぞれ付してグリッド設定を行った。なおグリッドの南北方位はN-17°38'44.36"-Eである。

3. 層序

調査区は現地表面の海拔の高さを約16.60m測る。調査区の北側は若干下がる様相を示すがおおよそ平坦な宅地を形成している。鎌倉市教育委員会が実施した試掘調査を基に、現地表下約15cmまで堆

積していた近現代の客土を人力により掘り下げ、遺構の確認を実施した。調査は深度規制が現地地表下60cmまでであり、土層の観察もそれまでとする。土層堆積は表土以下の第1層の遺物包含層から現地地表下60cmの間に3枚の生活面が確認される。調査区南壁、東壁の土層堆積の観察は図5に示した通りである。

表土の堆積土を除去すると、締りの弱い暗褐色粘質土の遺物包含層第1層が薄く堆積するのが観察された。この包含層を取り除くと1～2cm大の泥岩、泥岩粒を多く混入した締りの強い茶褐色粘質土の地形層である第2層が検出され、これを第1面として調査を行った。第1面の海拔は16.40 mである。遺構は井戸、土坑、柱穴、かわらけ溜りを検出した。第1面を構成する地形層は20cm～25cmの厚みを持ち、これを掘り下げると、泥岩を版築した地形層第3層が現れる。これを第2面とした。第3層は黄褐色粘質土で上層は1～5cmの泥岩を多量に混入し、下層は拳大の泥岩塊を多く含む。下層に荒基礎を施した後、上層に泥岩により版築をした様子が観察できる。第2面の海拔は16.20cmであり、建物址、土坑、柱穴、かわらけ溜り等の検出がある。第2面を構成する第3層は30cmの厚さを持つ。土層の観察をするために設けた最終深堀坑では調査区壁面で第4層を確認した。海拔は15.90mであり、これを第3面としたが掘削深度規制を上回るため、土層観察のみの調査である。しかし、これにより、以下の土層にも遺構が存在することに期待が持てた。第4層は、暗茶褐色粘質土、炭化物、かわらけ粒を多く含み締まりはない。

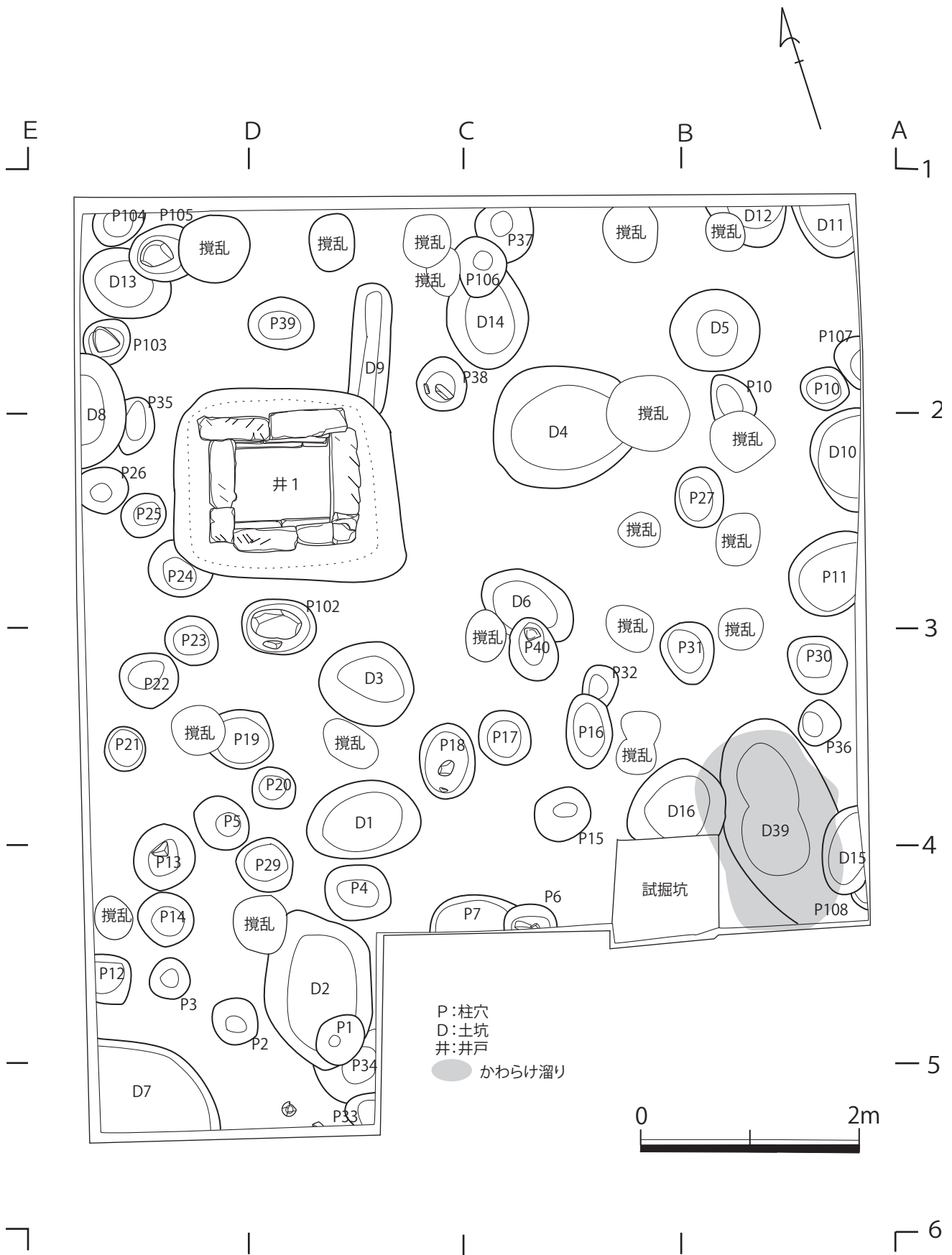


図6 第1面全体図

第三章 検出された遺構と出土遺物

1. 第1面の遺構と遺物 (図6～15)

この面は締りの強い茶褐色粘質土で、1～2cmの泥岩と泥岩粒により地形している。海拔は16.25～16.40cmを測る。検出された遺構は井戸1基、土坑39基、柱穴108穴、かわらけ溜り1箇所である。出土した遺物は弥生式土器、ロクロ成形主体のかわらけ、白かわらけ、青磁、白磁、青白磁、褐釉の貿易陶磁器、国産陶器は備前・瀬戸・常滑窯製品、ほかに瓦質製品、瓦、鉄製品、土製品、石製品等である。

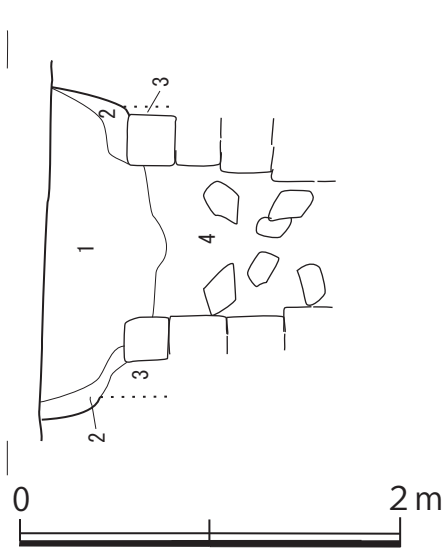
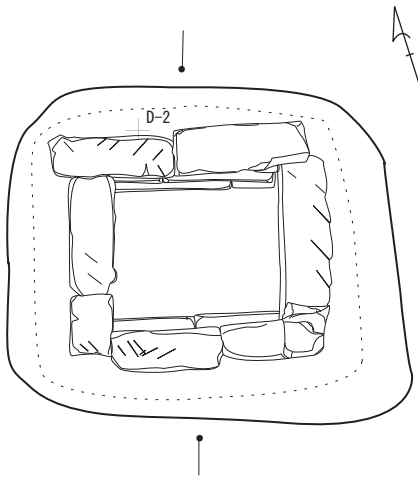
井戸1 (図7・8)

調査区の北西C-2グリッドで検出された。当初方形に泥岩が充填されて検出されたため、方形土坑と捉えていたがそれを取り除くと石組みの井戸が現れた。鎌倉市の許可の元、深さ1.5mまで調査することが出来た。

井戸は四方を凝灰質砂岩(鎌倉石)の切り石で囲い、4段に組んである。全体の規模は東西1.4m、南北1.3m。井戸の内側の規模は東西91cm(3尺)、南北84cm(2尺8寸)であり、やや東西に長い。主軸方位N-20°-W。重複関係は土坑9、柱穴24を切る。遺存状態は良好であり、切り石の表面は鑿により丁寧に加工されている。一つの切り石の高さは一律に30cmで、幅はおおむね60cmのもの20cm～40cmのものがあり、それを組み合わせる。東面の上から一段目は大きく欠損するが、北東隅では南面の切り石と巧妙にL字に切り合せている。4段目の南北側の切り石は5cm程内側に張り出して組まれる。覆土は拳から人頭大の泥岩をやや多く混入する暗黄褐色弱粘質土である。掘り方は井戸枠から15cmから40cmの幅で掘られ、かなり狭い印象がある。出土遺物の図8-1はかわらけ小皿であり、体部が直線的に立ち上がる。2もかわらけ小皿であり、体部が直線的に立ち上がる。3から6はかわらけ中皿と大皿である。3は中皿であり、器高が低く、内底面に強いナデが残る。4も中皿である。体部がやや膨らみ口縁部は外反する。内底面にナデが残る。5は深めの大皿であり内底面にナデが残る。6は大皿である。体部がやや丸みを持ち内底面にナデが入る。7は瀬戸の折縁皿の口縁である。6、7は裏込めからの出土である。

かわらけ溜り (図9)

調査区南東のA-3・4グリッドで検出したかわらけ溜りである。かわらけは破片を主体に大小の泥岩塊と混じり、面上に南北1.7m・東西1.2m程の範囲で平面的な拡がりを確認することができた。他に瓦質香炉や軒丸瓦等の破片、毛抜きが混在していた。かわらけの残存率が悪く細かい破片ばかりであることや、泥岩塊、香炉や平瓦の破片の混在遺物があること、加えて、確認できたかわらけは圧倒的に大皿が多く、小皿が少なかったこと。かわらけは土坑39に廃棄されたものではなく、上層に平面的に広がることなどから、かわらけを「割る」行為が目的にも見て取れ、祭祀的な要素が強いといえよう。土坑39はかわらけや泥岩を取り上げると浅い皿状に窪みが検出され、かわらけ溜りに伴う遺構とした。かわらけ溜りの規模は南北に細長く、東西1.2m、南北1.8mを測る。主軸方位はほぼ真北である。土坑39はやはり南北に細長く北側を調査区外に延びるが確認できただけでも南北2mを測り、東西は0.55mである。断面形は浅い皿状であり主軸方位はほぼ真北を示し、重複関係は土坑15・16に切られる。出土遺物は接合率はあまり良いとはいえなかった。図9-1は小型のかわらけである。体部はやや外反する。2～10は大型のかわらけである。



- 第1層 黄灰色土丹塊層 : 3 cm~拳大の土丹塊を多量に混入した
埋め立て土
- 第2層 暗褐色粘質土 : 1 cm~拳大の土丹塊多量、土丹粒、かわ
らけ粒を少量含む。
- 第3層 茶褐色粘質土 : 拳大の土丹少量、炭化物、かわらけ粒を
やや多く含む。締めやや強い。(真込め)
- 第4層 暗黄褐色弱粘質土 : 拳から頭大の土丹塊、凝灰岩(鍾倉石)
を多めに含む。粗砂、炭化物少量含む。
下層へ移る次第に炭化物多い。

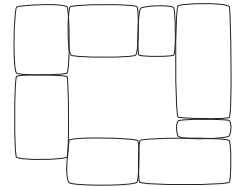
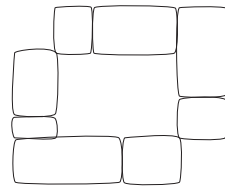
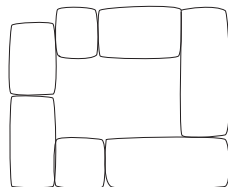
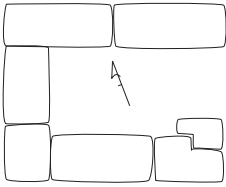
石組み模式図

1段目(上から)

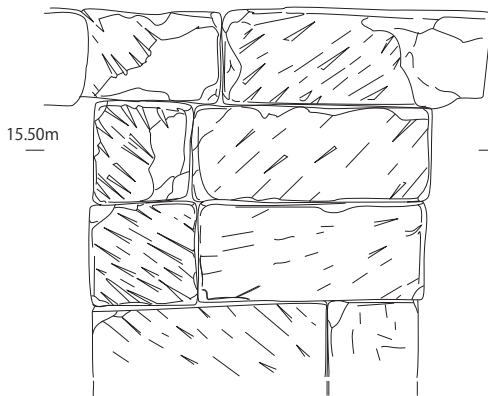
2段目

3段目

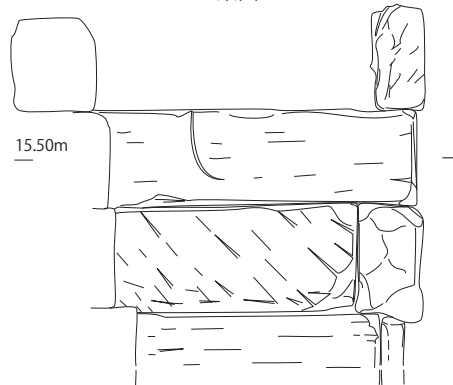
4段目



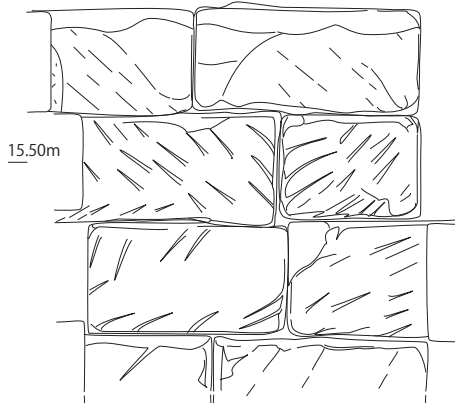
北面



東面



南面



西面

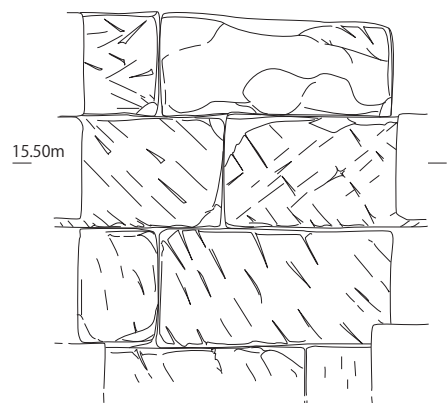


図7 第1面 井戸1

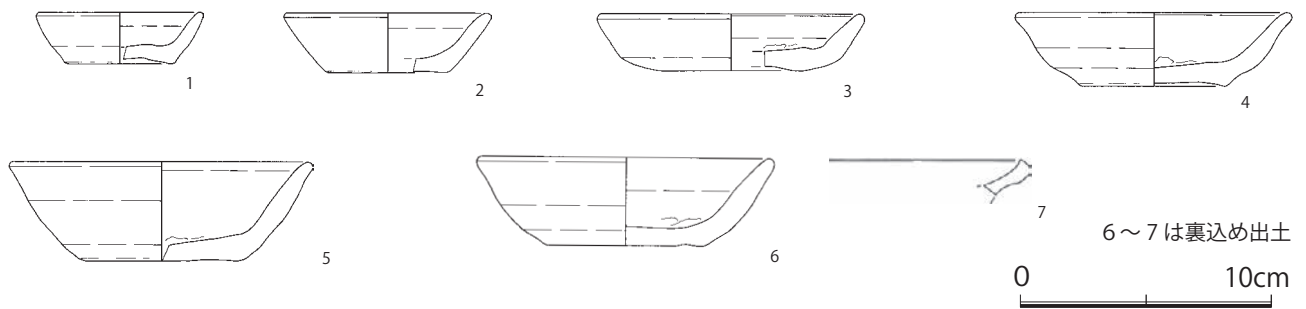


図8 第1面 井戸1出土遺物

2は直線的に立ち上がる。3は体部下方に丸みを持つ。4は口径が開き、体部は直線的に立ち上がる。5は体部下方に稜を持ちやや膨らむ。6は直線的に立ち上がる。7は体部真中あたりに強い稜を持つ。8は全体に外反気味である。9は直線的に立ち上がる。10はやや丸みを帯びる。11は瓦器質の火鉢の脚部である。河野分類のIV類で表面を炭素吸着させ、黒色処理している。12は瓦質の香炉である。黒色処理され、小型菊花スタンプと連珠貼り付け文で装飾される。13は右廻三巴文軒丸平瓦である。14は鉄製品の毛抜きである。15から20は釘である。

土坑(図10～11)

土坑1: C-3グリッドで検出した。平面形は楕円形であり規模は73×10.5cmを測る。断面形は逆台形であり、主軸方位はN-95°-Wである。出土遺物の図10-1は小型のかわらけである。体部真中あたりが少し張る。2は大型のかわらけである。薄手でやや内湾する。

土坑2: C-4グリッドで検出した。平面形は不正円形であり、規模は98×15cmを測り、断面形は緩い逆台形である。主軸方位はほぼ真北である。出土遺物の図10-3は大型のかわらけである。体部中ほどに稜を持つ。

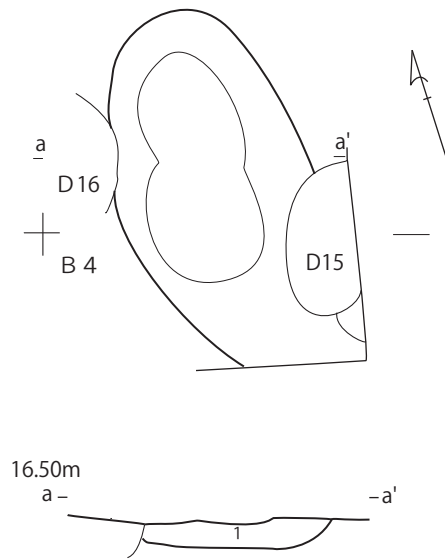
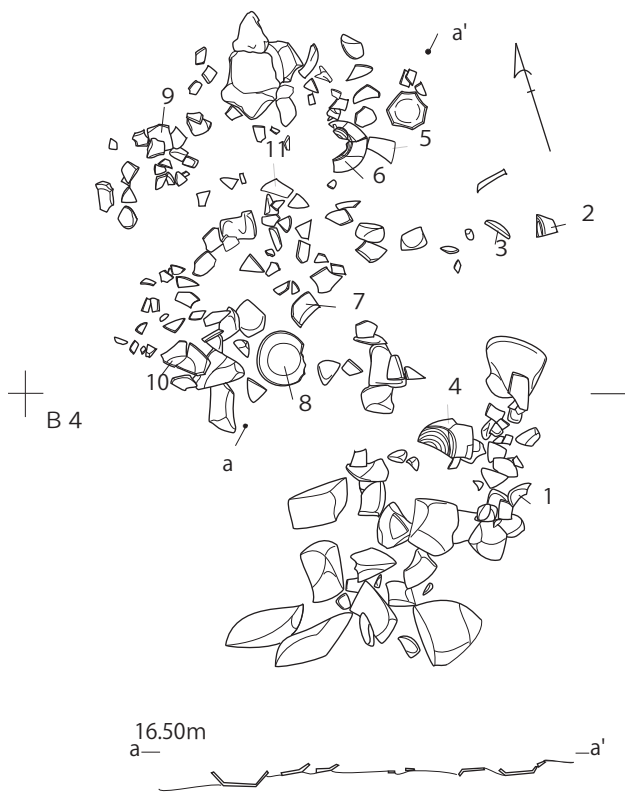
土坑3: C-3グリッドで検出した。平面形は円形であり、規模は87×77cmを測る。断面形はほぼ逆台形であり、主軸方位はN-33°-Wである。出土遺物の図10-4は瀬戸卸皿の底部である5は平瓦片で鶴岡八幡宮創草期B類と同類である。凹面は縄目が転写、離れ砂顕著。凸面は縄目叩きがある。

土坑4: B-1・2グリッドで検出した。平面形は不正円形であり、規模は115×(10.5)cmを測る。断面形は緩い逆台形であるのか、東側を攪乱に切られ形態不明。主軸方位はN-92°-Wである。出土遺物の図10-6は常滑の壺である。折り返し口縁の下端がヘラ削りされている。三耳壺によく見られる口縁である。7は瀬戸卸皿の口縁、卸目が口縁近くまで上がっている。中期様式のI期か。8は摩耗陶片、常滑の甕片の端部を使用している。

土坑5: A-1グリッドで検出された。平面形は円形であり、規模は82×75cmを測る。断面形は逆台形である。出土遺物の図10-9は凸部を持つ白かわらけ片、形態から蓋と判断した。色調は暗灰色である。

土坑6: B-2グリッドで検出した。平面形は楕円形で、規模は92×61cmである。断面形は箱型を呈する。攪乱、柱穴40に切られる。主軸方位はN-140°-Wである。出土遺物の図10-10はの小型のかわらけ皿である。

土坑7: 調査区南西隅のA-2グリッドで検出した。平面形、断面形は不明である。確認出来た規模は96×38cmを測る。覆土は暗褐色粘質土で泥岩粒を多く含む、締りのある土である。出土遺物の図11-1は弥生式土器の壺片であり、外面に刷毛目が施してある。2はかわらけの大皿、器壁厚く直線的に立つ。3は常滑の甕の肩部の格子目の押印部分である。4は瀬戸天目茶碗であり、断面に漆が残る。漆継ぎしたものであろう。



第1層 暗褐色粘質土：1～5cm大の土丹、土丹粒を多量に、かわらけ粒、炭化物を少量含む。締り弱い。

土坑39

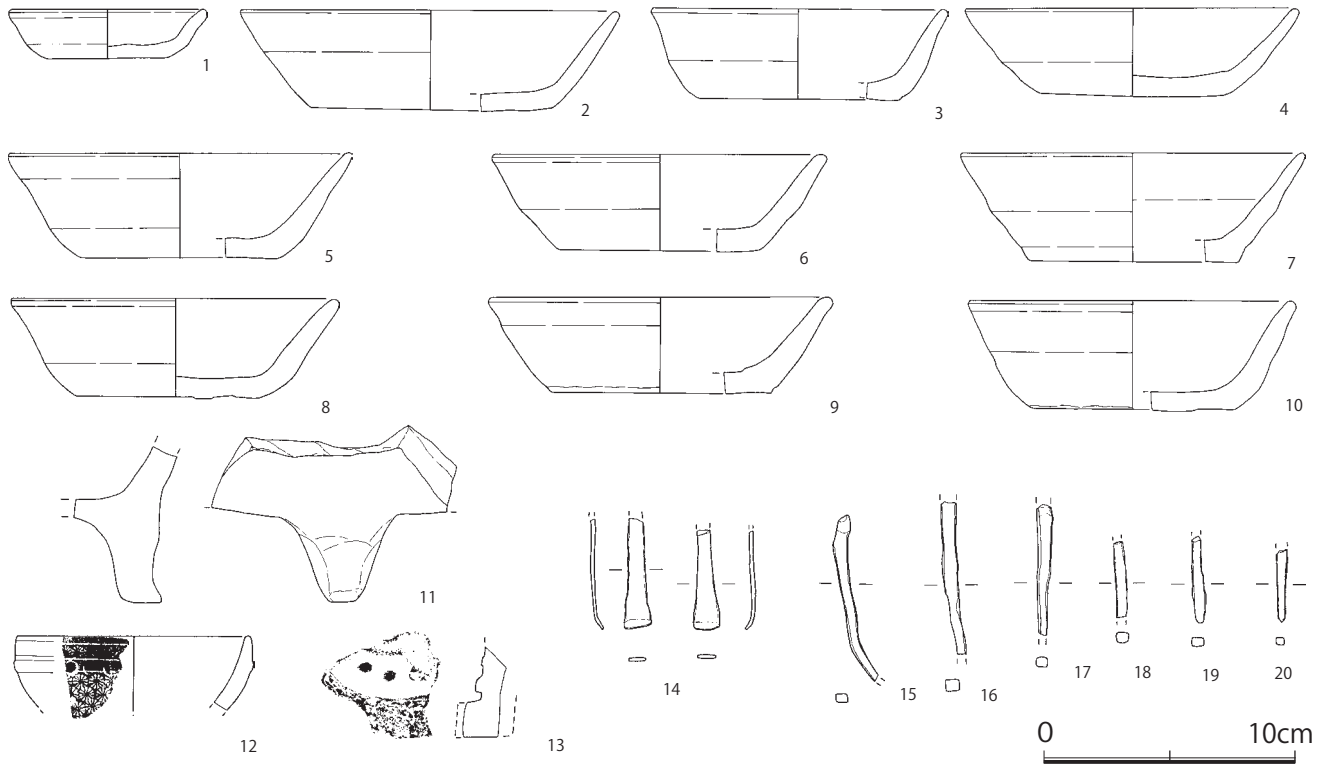


図9 第1面 かわらけ溜まり・出土遺物

土坑8：西側調査区壁沿いのB-1・2グリッドで検出された。調査区に切られるため全容は不明だが、平面形は楕円形であろう。規模は96×(38)を測り、断面形は皿状である。切り合い関係は柱穴35を切る。出土遺物の図11-5はかわらけの中皿である。ロクロ目がやや強く口縁部外反する。体部中位に稜を持ち、器壁は厚い。6はかわらけの大皿である。直線的に立ち、内底面にナデが残る。

土坑10：調査区東壁のA-2グリッドで検出した。調査区に切られるため全容は確認できないが、平面形は円形もしくは楕円形だろうか。確認出来た規模は96×(38)cmである。断面形はU字形か。主軸方位はN-22°-Wである。出土遺物の図11-7は復元径が10cm位のかわらけ中皿だが、胎土がやや粗土である。8はロクロ成形の白かわらけ底部、火を受けている。9は褐釉の壺胴部である。10は龍泉窯青磁の折腰鉢口縁部である。11は北宋銭の皇宋通寶、篆書で、初鑄年は1038年である。「宋」の部分欠けているが篆書で頭に「皇」を持つのは皇宋通寶だけなのでそれによった。外径2.4cm、内径1.9cmを測る。

土坑13：D-1グリッドで検出した。東側で柱穴105に切られる。平面形は楕円形、確認出来た規模は82×48cmである。掘り方は断面皿状を呈する。主軸方位はN-106°-Wである。出土遺物の図11-12はかわらけ大皿である。体部は直線的に立ち上がる。

土坑15：調査区南東隅のA-3・4グリッドで検出した。土坑39、柱穴108を切る。東側を調査区に切られ全貌を明らかとしないが、平面形は楕円であろう。確認出来た規模は84×33cmである。断面は逆台形を呈する。主軸方位はN-30°-Wである。出土遺物の図11-13は鉄釘であり、残存している長さは5.1cmである。

土坑16：A・B-3グリッドで検出した。土坑39を切る。平面形は不正円形、確認できた規模は92×(70)cmを測る。断面形は皿状であり、主軸方位はほぼ真北を示す。出土遺物の図11-14は瓦質香炉である。炭素吸着させて黒色処理している。体部には菊花文スタンプが密に施され、口縁近くには連珠文が配される。

柱穴(図12～13)

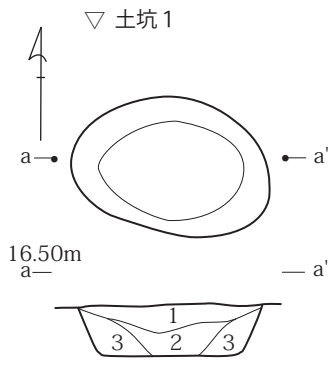
柱穴は47穴検出されたが、建物として配列をつかむことはできなかった。また特別特徴的な検出のされ方もしていない。しかし調査区を広げれば建物は建つ可能性はあろう。以下出土遺物の図示しえたものだけに限り説明を加える。

柱穴3：D-4グリッドで検出された。平面形は円形である。規模は49×38cmであり、断面形はU字型である。覆土は暗褐色粘質土で泥岩粒を多く含む締りのある土である。出土遺物の図13-1は瀬戸の口縁が輪花型の香炉か。表面は鉄釉により黒褐色である。2は平瓦片である。表面離れ砂、裏面は斜格子の叩き目が残る。永福寺Ⅲ期E類と同類である。3は渥美の摩耗陶片で、端部を全周使用している。

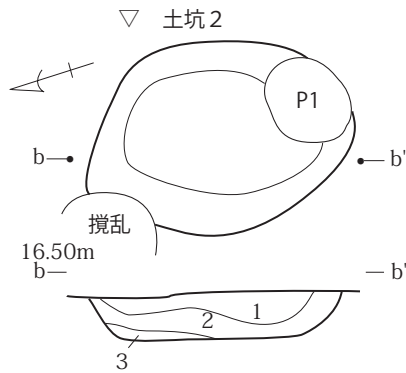
柱穴5：D-3グリッドで検出した。平面形は不正円形で、規模は55×50cmを測り、断面形は逆台形を呈する。覆土は炭化物を多く含む暗褐色粘質土である。出土遺物の図13-4はかわらけの大皿である。器壁が厚くやや丸みを帯びるが、ほぼ直線的な立ち上がりとみていだろう。

柱穴7：調査区南壁に切られてB・C-4グリッドで検出した。柱穴6に切られる。平面形は概ね楕円形を呈する。確認できた規模は(70)×(33)cmを測る。断面形は浅い箱型か。覆土は暗褐色粘質土である。出土遺物の図13-5、6は小型のかわらけ皿である。5の胎土はやや粗土である。6は口縁に油煙煤が付着する、灯明皿であろう。

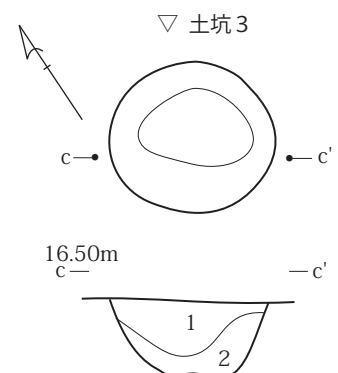
柱穴10：A-1グリッドで検出した。攪乱に切られる。平面形は不正円形で、確認出来た規模は41×(38)cmである。断面は逆台形を呈する。覆土は炭化物を多く含む暗褐色粘質土である。出土遺物の図13-7は東濃型山茶碗である。高台に初殻痕残り、内面は青色の透明な自然降灰釉が残る。8は龍泉窯青磁蓮弁文椀



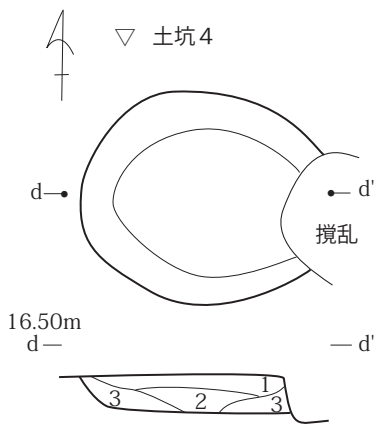
第1層 暗褐色粘質土 : 1cm大の土丹、炭化物を多量に含み粘性がある。
 第2層 暗褐色粘質土 : 土丹粒を多く含む、縮りややあり。
 第3層 暗茶褐色粘質土 : 土丹粒、炭化物、かわらけ片を多く含む。縮り弱い。



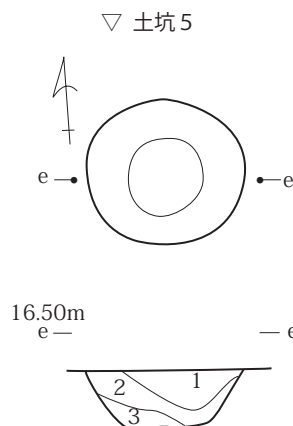
第1層 暗褐色粘質土 : 1cm大の土丹、土丹粒を多めに含む。縮りややあり。
 第2層 暗褐色粘質土 : 土丹粒、炭化物が多く、かわらけ粒を少量含む。縮りあり。
 第3層 暗茶褐色粘質土 : 土丹粒、かわらけ粒を多く含む。縮りやや弱い。



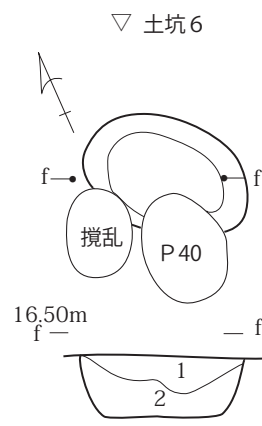
第1層 暗褐色粘質土 : 土丹粒、炭化物、かわらけ片を多く含む。縮りややあり。
 第2層 暗褐色粘質土 : 1cm大の土丹、炭化物を多量に含む。縮りあり。



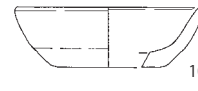
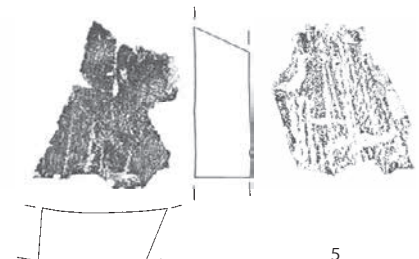
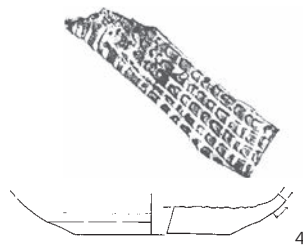
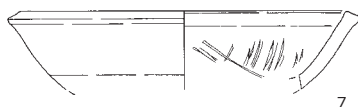
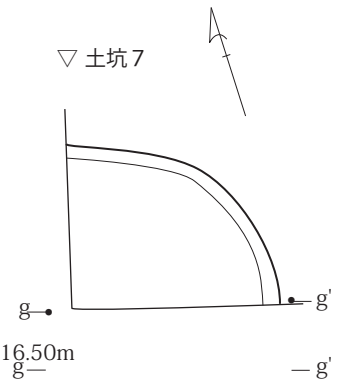
第1層 暗褐色粘質土 : 1cm大の土丹、炭化物を多量に含む。縮りあり。
 第2層 暗褐色粘質土 : 土丹粒、かわらけ粒を多く含む。縮りややあり。
 第3層 暗茶褐色粘質土 : 土丹粒、かわらけ粒をやや多く含む。縮りやや弱い。



第1層 暗褐色粘質土 : 1cm大の土丹、炭化物を多く含む。縮りややあり。
 第2層 暗褐色粘質土 : 土丹粒、炭化物を多く含み、かわらけ粒を少量含む。
 第3層 暗褐色粘質土 : 土丹粒、かわらけ粒を多く含む。縮り弱い。



第1層 暗褐色粘質土 : 1cm大の土丹、土丹粒を多く含む。縮りややあり。
 第2層 暗褐色粘質土 : 土丹粒、炭化物を多く含む。縮り弱い。



- 1~2 : 土坑 1
- 3 : 土坑 2
- 4~5 : 土坑 3
- 6~8 : 土坑 4
- 9 : 土坑 5
- 10 : 土坑 6



図10 第1面 土坑(1)・出土遺物

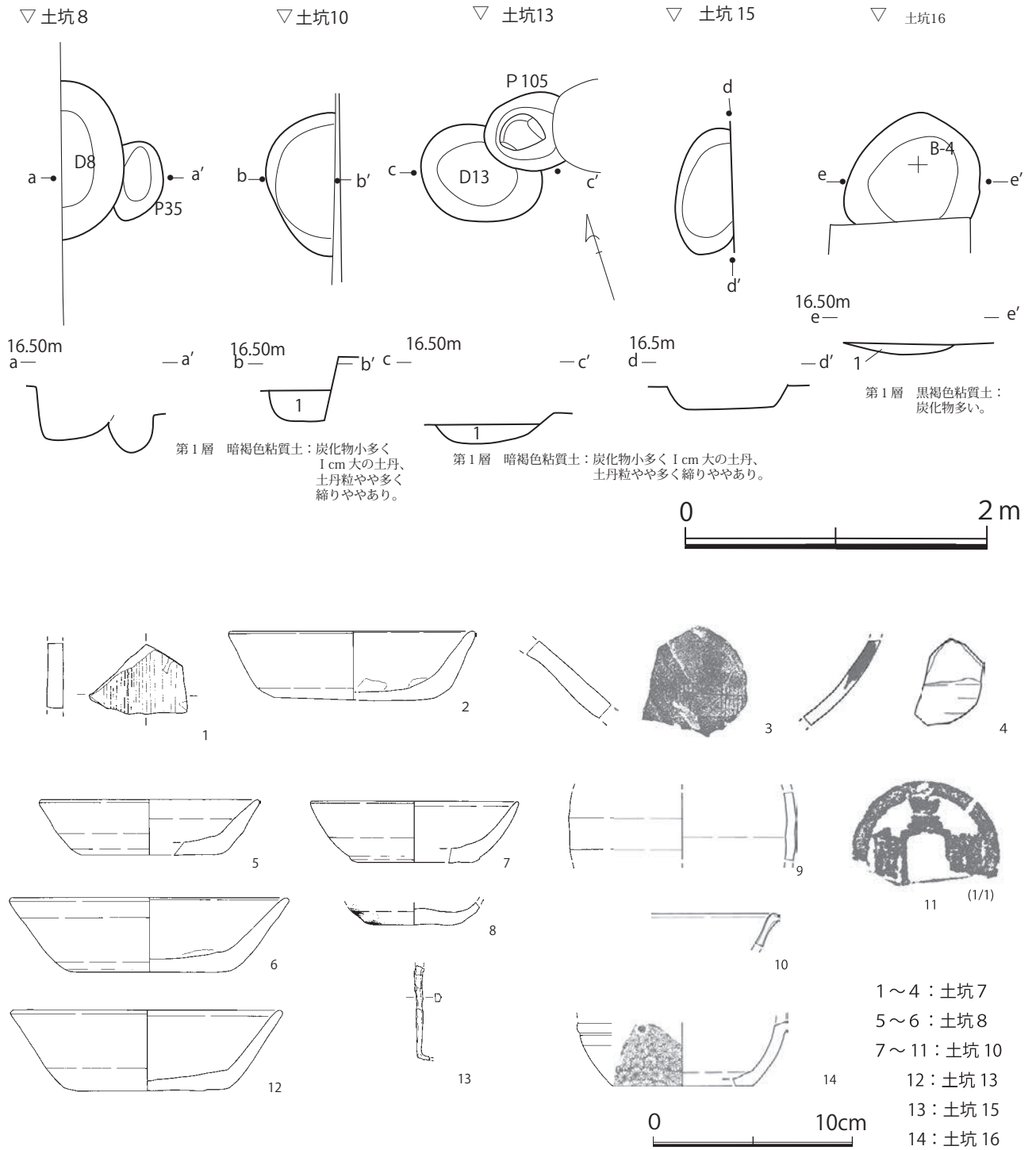


図11 第1面 土坑(2)・出土遺物

である。内外面稜花を施す。

柱穴12：調査区西壁沿いのD-4グリッドで検出した。西側を調査区に切られるため全容を明らかにしないが、平面形は楕円形か不正円形で、規模は45×(45)cmを測る。断面形はU字形か。覆土は炭化物を多く含む暗褐色粘質土である。出土遺物の図13-12は常滑壺の口縁である。13は瀬戸の洗である。内底面に同心円の沈線巡る。

柱穴13：D-3・4グリッドで検出された。平面形は円形で、規模は64×58cmである。断面形は逆台形を呈する。覆土は泥岩粒を混入する暗褐色粘質土である。出土遺物の図13-9はやや内湾するかわらけの

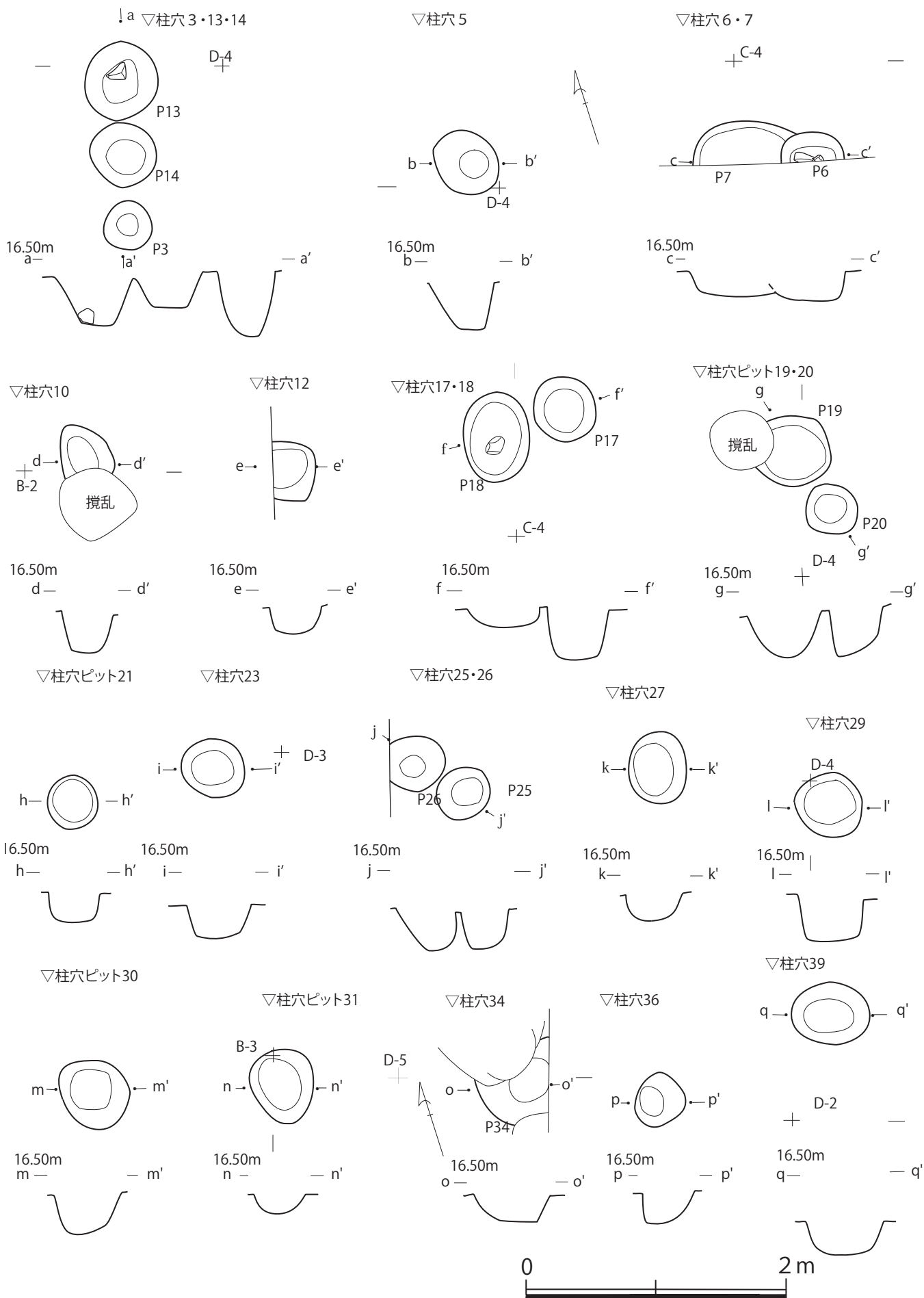


図12 第1面 柱穴

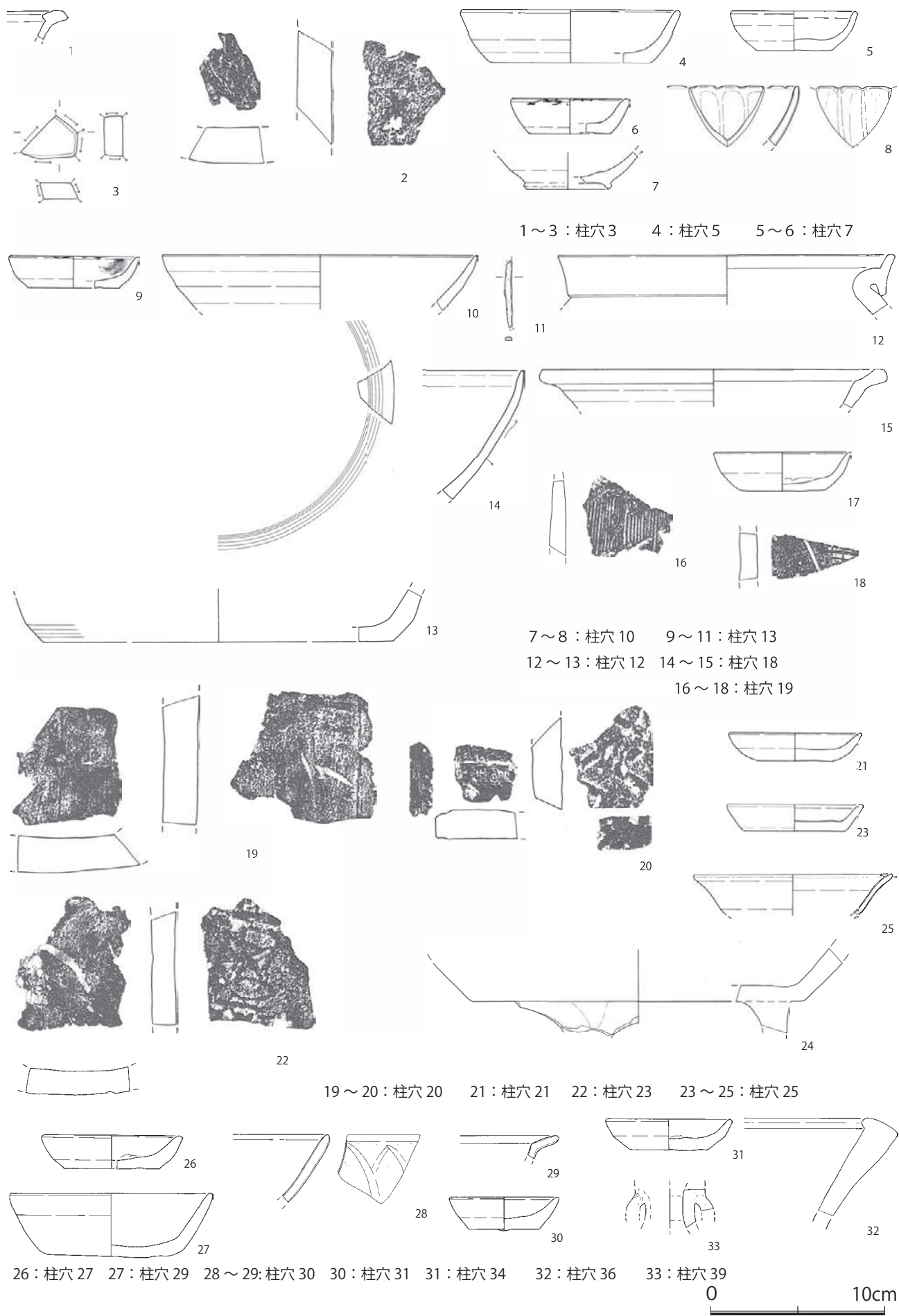


图13 第1面 柱穴出土遺物

表3 第1面遺構観察表

遺構番号	グリッド	長径	短径	深度	底標高	覆土/備考
P1	C-4	51	42	21	16.185	暗褐色A/P34・D2を切る
P2	D-4	47	43	32.5	16.075	暗褐色B
P3	D-4	49	38	41.5	15.985	暗褐色A
P4	C-4	63	54	30	16.02	暗褐色A
P5	D-3	55	50	36	15.975	暗褐色B
P6	B-4	50	(24)	19.5	16.19	暗褐色A/P7を切る
P7	B・C-4	(70)	(33)	13	16.255	暗褐色A
P9	A-1	45	40	21	16.1	暗褐色B
P10	A-1	41	(38)	27.5	16.035	暗褐色B
P11	A-2	84	(61)	19	16.15	暗褐色B
P12	D-4	45	45	70.5	16.19	暗褐色B
P13	D-3・4	64	58	62	15.995	暗褐色A
P14	D-4	52	50	27	16.12	暗褐色A
P15	B-3	54	51	39	16.0	暗褐色A
P16	B-3	68	43	21	16.145	暗褐色A/P3を切る
P17	B-3	50	50	35.5	16.025	暗褐色A
P18	C-3	70	55	30.5	16.075	暗褐色A
P19	C・D-3	60	46	26	16.5	暗褐色A
P20	C-3	44	43	27.5	16.04	暗褐色A
P21	D-3	40	40	19.5	16.135	暗褐色B
P22	D-3	54	51	31.5	16.02	暗褐色B
P23	D-2・3	50	46	18.5	16.15	暗褐色A
P24	D-2	59	(35)	18.5	16.13	暗褐色B
P25	D-2	47	38	25	16.055	暗褐色A
P26	D-2	43	43	71	15.995	暗褐色A
P27	A-2	57	45	18.5	16.165	暗褐色B
P29	C-4	53	53	28.5	16.09	暗褐色B
P30	A-3	56	53	49.7	15.87	暗褐色A
P31	A-3	60	50	21.5	16.145	暗褐色A
P32	B-3	(32)	31	0.5	16.2	暗褐色B
P33	C-5	(29)	(28)	9.5	16.345	暗褐色A/P34を切る
P34	C-4・5	(53)	(51)	18.5	16.23	暗褐色A
P35	D-1・2	54	(25)	25	16	暗褐色B
P36	A-3	43	39	24.2	16.138	暗褐色A
P37	B-1	54	(38)	23.5	16.025	暗褐色B/D14を切る
P38	C-1	50	46	29	16	暗褐色B
P39	C-1	60	48	23.5	16.02	暗褐色B
P40	B-3	60	43	41	15.955	暗褐色B/D6を切る
P102	C-2・3	69	50	10	16.22	暗褐色A
P103	D-1	43	38	11	16.075	—
P104	D-1	47	(25)	20	15.97	暗褐色B
P105	D-1	(61)	55	26.5	15.94	暗褐色B/D13を切る
P106	B-1	55	(37)	42	15.89	暗褐色B/D14・P37を切る
P107	A-1	50	(25)	52	15.745	暗褐色B
P108	A-4	(30)	(13)	0.5	16.36	—
D1	C-3	73	10.5	25.5	16.08	暗褐色B
D2	C-4	(98)	15	29	16.13	暗褐色A/P34を切る
D3	C-3	87	77	28.5	16.04	暗褐色B
D4	B-1・2	115	(105)	20	16.14	暗褐色B
D5	A-1	82	75	28	16.03	暗褐色B
D6	B-2	92	61	30	16.07	暗褐色A
D7	D-5	110	(78)	15	16.28	暗褐色A
D8	D-1・2	108	(42)	12	16.1	P35を切る

遺構番号	グリッド	長径	短径	深度	底標高	覆土/備考
D9	C-1	36	(12)	16	16.13	暗褐色B
D10	A-2	96	(38)	17	16.135	暗褐色B
D11	A-1	84	(60)	19.5	16.5	暗褐色B
D12	A-1	74	(40)	17.4	16.08	—
D13	D-1	82	(48)	15.5	16.03	暗褐色B
D14	B-1	76	(69)	16.5	16.145	暗褐色A
D15	A-3・4	84	(33)	7.5	16.255	D39・P108を切る
D16	A・B-3	92	(70)	7.5	16.255	黒褐色C
D39	A-3・4	211	108	85	16.255	—

(単位：海拔m/以外cm)

P:ピット
D:土坑

遺構覆土詳細

暗褐色A：暗褐色粘質土 1cm大の泥岩、泥岩粒多く、縮りあり。

暗褐色B：暗褐色粘質土 炭化物多く、1cm大の泥岩、泥岩粒やや多く、縮りややあり。

黒褐色C：黒褐色粘質土 炭化物多く、縮りない。

小皿である。口縁に油煙煤が付着し、灯明皿として使用した痕跡が残る。10は瀬戸の碗である。やや黄色がかかった緑色の釉が全体に施釉される。11は鉄釘である。3.7cmを測る。

柱穴18：C-3グリッドで検出された。平面形は楕円形で、規模は70×55cmである。断面形は皿状で、覆土は泥岩粒を混入する暗褐色粘質土である。出土遺物の図13-14は瀬戸の平碗である。体部途中から内面にかけて施釉される。15は瀬戸の折縁皿口縁である。内外面刷毛により施釉され、色調は黄白色である。

柱穴19：C・D-3グリッドで検出された。西側を攪乱に切られる。平面形は不正円形、規模は60×46cmを測る。断面形はU字形であり、覆土は泥岩粒をまじえる暗褐色粘質土である。出土遺物の図13-16は弥生式土器の壺の胴部と思われ、刷毛目が残る。17はかわらけの小皿である。内底面にナデが残る。18は常滑の甕片であり、格子目の押印部分である。

柱穴20：C-3グリッドで検出した。東側で柱穴19を切る。平面形はほぼ円形、規模は44×43cmである。断面形はU字を呈する。覆土は泥岩を混入する暗褐色粘質土である。出土遺物の図13-19・20とも平瓦である。19は表面に離れ砂、縦位のナデを残す。裏面は格子の叩き目がある。胎土はやや粗土な土器質。永福寺Ⅱ期C類と同類である。20の表面は離れ砂、裏面は斜格子の叩き目がある。胎土は砂粒、白色粒、小石粒の混入したザクザクとした粗土な瓦質である。永福寺Ⅲ期E類と同類である。

柱穴21：D-3で検出した。平面形はほぼ円形で、規模は40×40cmである。断面形は箱型を呈する。覆土は炭化物を多く含有する暗褐色粘質土である。出土遺物は図13-21の器壁がやや厚いかかわらけ小皿である。

柱穴23：D-2・3で検出された。平面形は円形である。規模は50×46cmを測る。断面形は逆台形を呈する。覆土は泥岩を混入した暗褐色粘質土である。出土遺物の図13-22は平瓦である。胎土はやや粗土で、表面は離れ砂が残り、裏面は丸に菱形文の叩き目が残る。永福寺Ⅲ期E類と同類である。

柱穴25：D-2グリッドで検出した。平面形は円形であり、規模は47×38cmを測る。断面形はU字型を呈する。覆土は泥岩粒を多く含む暗褐色粘質土である。出土遺物の図13-23はかわらけの小皿である。器壁厚く体部は直線的に立ち上がる。24は火鉢のⅢ類である。残存状態は悪いが黒色処理と磨きを施した痕跡を残す。25は白磁の口元皿である。

柱穴27：A-2グリッドで検出した。平面形は楕円形で、規模は57×45cmを測る。断面形はU字形を呈する。覆土は炭化物を含む暗褐色粘質土である。出土遺物の図13-26は小型皿のかわらけである。器壁厚く、内底面にナデが残る。

柱穴29：C-4グリッドで検出した。平面形はほぼ円形であり、規模は53×53cmを測る。断面形は箱型を呈する。覆土は炭化物を含む暗褐色粘質土である。出土遺物の図13-27はかわらけの大皿である。全体に摩滅し整形は不明である。体部は直線的に立ち上がる。

柱穴30：A-3グリッドで検出した。平面形は不正円形で、規模は56×53cmを測る。断面形はU字型を呈する。覆土は泥岩粒を混入する暗褐色粘質土である。出土遺物の図13-28は龍泉窯の青磁鎬蓮弁文碗の口縁である。29は龍泉窯青磁折縁皿の口縁である。

柱穴31：A-3グリッドで検出された。平面形は不正円形で、規模は60×50cmを測る。断面形はU字形を呈する。覆土は泥岩粒を含有する暗褐色粘質土である。出土遺物の図13-30はかわらけ皿の小皿である。器壁厚く、直線的に立ち上がる。

柱穴34：調査区東壁に切られるC-4・5グリッドで検出した。柱穴1・34・土坑2に切られるため平面形は不明である。確認出来た規模は(53)×(51)cmである。断面形はU字形か。覆土は暗褐色粘質土である。出土遺物の図13-31はかわらけ小皿、内底面ナデが入る。

柱穴36：A-3グリッドで検出した。平面形は不正円形で、規模は43×39cmを測る。断面形はU字形か。

覆土は泥岩粒を含む暗褐色粘質土である。出土遺物の図13 - 32は火鉢のI類であり、黒色処理されている。

柱穴39：C - 1グリッドで検出した。平面形は楕円形で、規模は60 × 48cmを測る。断面形はU字形を呈する。覆土は炭化物を含有する暗褐色粘質土である。出土遺物の図13 - 33は瀬戸の仏華瓶の頸部である。鉄釉が施釉される。

第1面上出土遺物(図14・15)

層序の第1層の遺物包含層と遺構検出面の第1面上までの遺構外で出土した遺物を収めた。

1は手づくねかわらけの小皿である。2から5はかわらけの小皿である。一様に胎土は粗土であり、器壁が厚く、整形が粗雑である。6は中皿で体部の下部に稜を持つがやや外反して立つ。7も中皿で体部の下部に稜を持ちやや丸みを帯びるが外反して立つ。8は大皿でほぼ直線的に立つ。9は大皿で口唇部がやや外反する。10は大皿で体部は直線的に立ち口縁部が外反する。11は中皿で体部下半は丸みを帯び、そこから直線的に立ち口唇部が僅かに外反する。この器形が宅間ヶ谷の調査例では多く出土する。12から19は大皿である。12は口径が開き直線的に立つ。13も直線的に立つ。14は器高が高く体部下半に稜を持つが、そこから直線的に立ち上がる。15は体部下半に若干丸みを帯び、そこから口縁が開き直線的に立つ。16は体部に丸みを帯び口縁部外反する。17は体部反り返り口縁が開く。18は体部下半は丸みを帯びるがやや外反しながら立つ。19は口縁が開き直線的に立ち口唇部はやや外反する。20はとりべ状の大皿のかわらけで、内面黒灰色をなし、気泡が立つ。21は白かわらけ、皿としたが凸部を持つ蓋かもしれない。22は火鉢のIV類である。体部下部に菊花文か蓮華文の判断のしづらい花文が帯状に廻り、その上に沈線が巡り、蓮珠文が貼られていた様相を示す。23は瓦質香炉口縁部である。黒色処理され磨きが施される。体部には二段の菱形渦巻き文が配される。24も香炉である。黒色処理され磨きを施される。25は東濃型山茶碗の口縁部である。26は常滑の片口鉢I類の口縁である。27は備前のすり鉢の体部片であり、卸目が4本見て取れる。28は常滑の甕口縁である。縁帯上部は欠けるが、中野編年の6a形式のものであろう。29は瀬戸の香炉である。釉薬は緑灰色の刷毛塗りを施す。30も瀬戸の香炉であろう。内面緑灰釉で外面鉄釉である。また外面には菊花文かと思われるスタンプが施される。31は瀬戸の平碗の口縁部である。内外面に緑灰色の釉が施釉される。32も瀬戸の平碗の口縁部である。内外面緑灰釉が施釉されるが、外面口縁部にかけて剥離する。33は瀬戸の丸碗の口縁部である。大窯期のものであろう。釉薬は緑灰釉で貫入が入る。34から36は瀬戸の天目茶碗。34は口縁から体部にかけて残る。口縁部が僅かに屈曲し、内外面鉄釉が施釉される。35は口縁部である。わずかに屈曲がある。釉薬は外面褐色、内面口縁は褐色、内体部にかけて黒色の鉄釉がかかる。36も口縁部で、屈曲がきつい。内外面褐色の鉄釉がかかる。37は瀬戸の折縁小皿である。口縁は屈曲し、灰釉が刷毛塗りされている。38は瀬戸の折縁深皿である。口縁内側に段差を持ち屈曲し、外体部は強い稜を持つ。釉薬は刷毛塗りされている。39は瀬戸の折縁深皿の口縁部である。屈曲を持ち内側に沈線が走る。釉薬は緑灰釉で刷毛塗りされる。40は瀬戸の折縁深皿の口縁である。緑灰釉の漬け掛けか。口縁はほぼ直角に外反し口唇部の内面に沈線を持つ。口縁の外面も口唇部の下に稜が走る。41は瀬戸の折縁深皿の口縁部。釉薬は白色で刷毛塗りである。口唇部は強く屈曲し、内面に深い沈線が走る。42は瀬戸の折縁深皿の口縁部である。釉薬は草色であり、やや厚い。口唇部屈曲しその下に外面沈線が走り、内側に二本の沈線が走る。43は瀬戸の折縁深皿の底部である。底部は回転ヘラ削りされ脚を持つ。体部下半まで釉薬が施釉される。内底面には菊花スタンプが施される。

44から46は瀬戸の直縁大皿の口縁部である。いずれも口唇部の下に稜が入る。釉薬は緑灰白色釉である。47は口縁部が輪花型の香炉である。黒褐色の釉が施釉される。接合関係にはないが柱穴3(図13 - 1)出

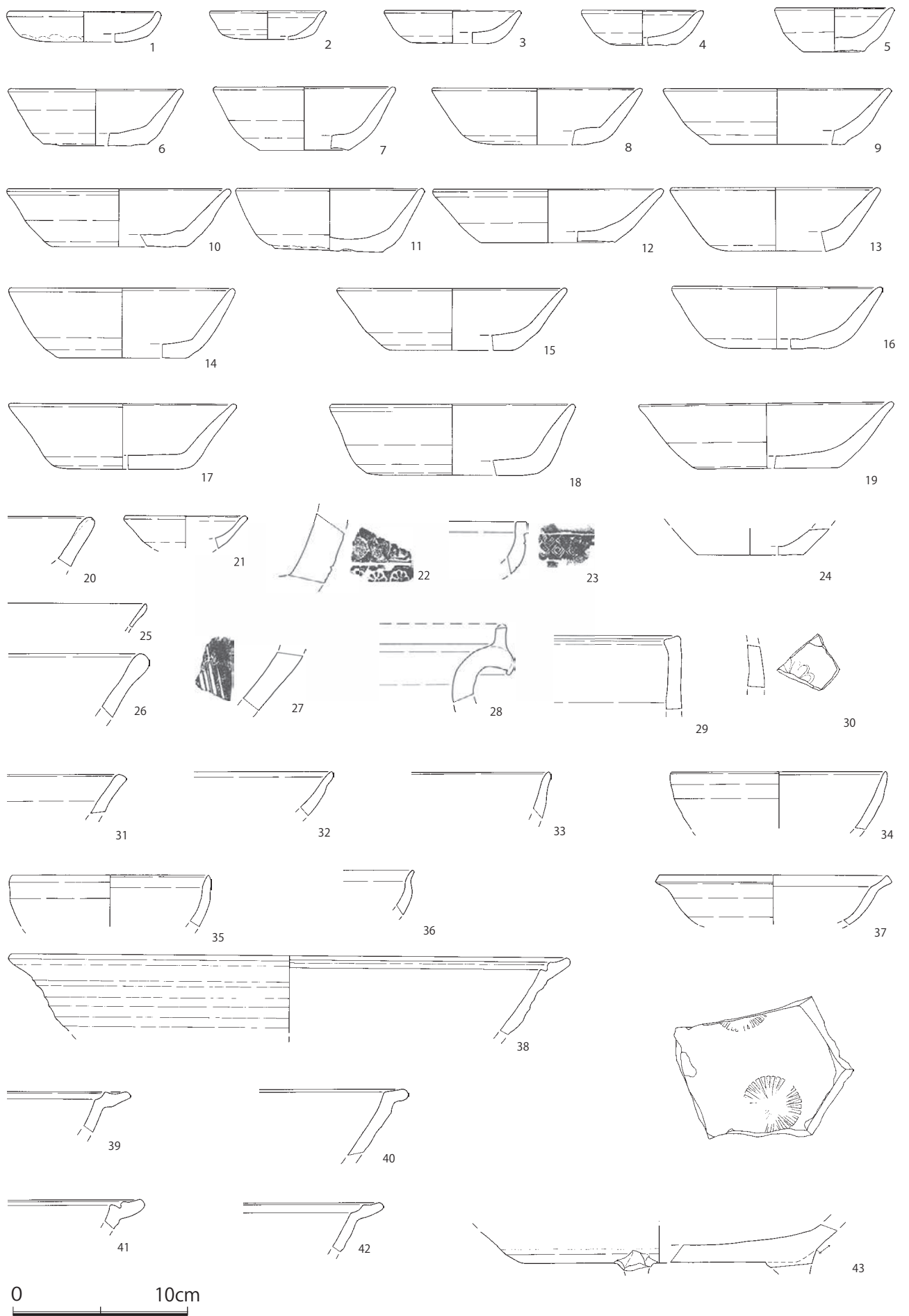


图14 第1面上出土遺物(1)

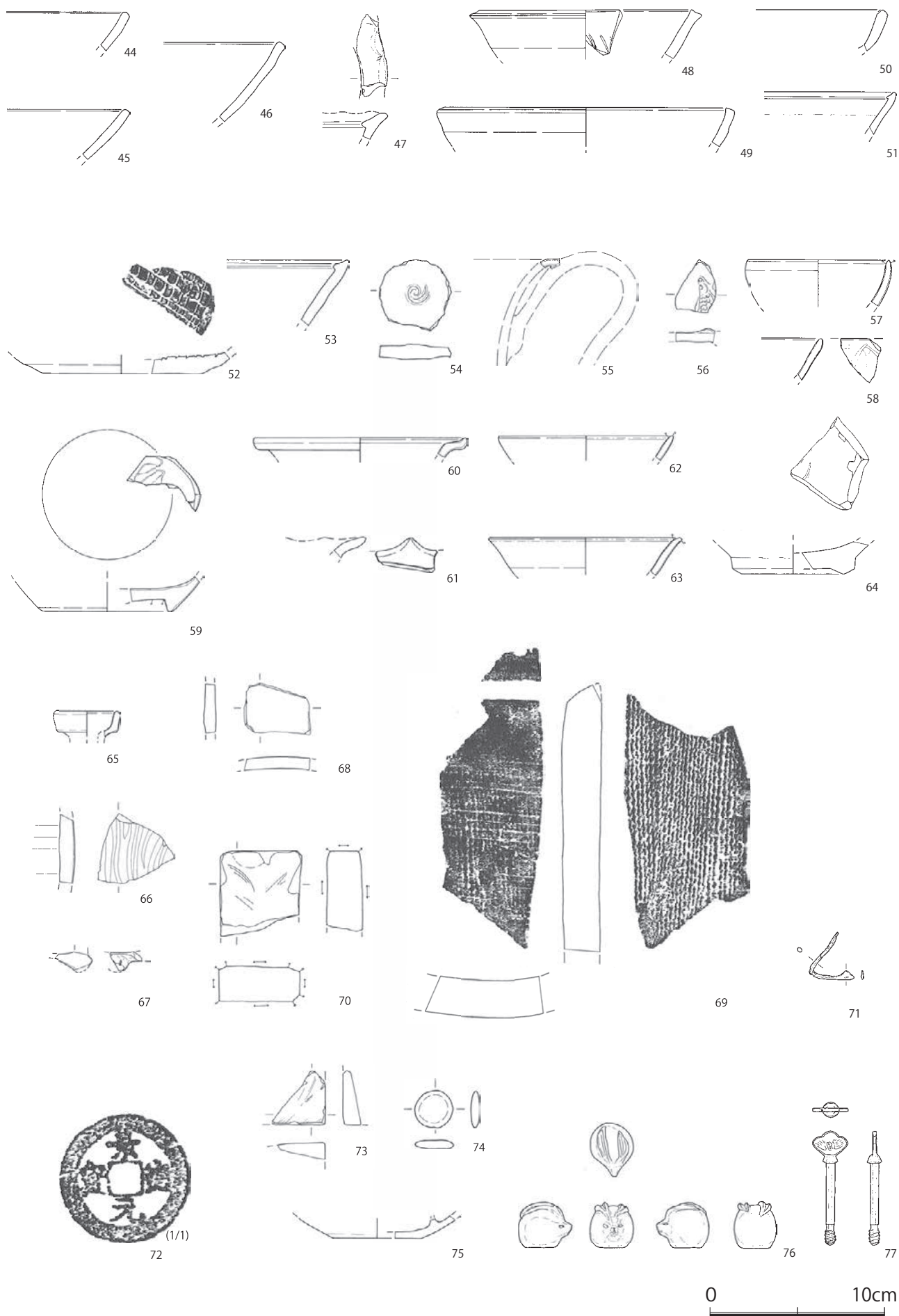


图15 第1面上出土遺物(2)

土のものと同一個体であろう。48から52は瀬戸の卸皿。いずれも釉薬は緑灰色で薄く施釉されている。48は口唇部に沈線走り口縁部近くまで内面に卸目が上がる。49は口唇部内側が緩くくびれる。50は極小片である。51は口唇部内側に返しが付き口縁周辺のみ施釉される。52は底部、内底面は卸目が施され、外底部は糸切りである。53は卸目付大皿、口唇部内側から外面は口縁部まで施釉される。口唇部は内側に返しが付き沈線走る。54は瀬戸製品の加工品で円盤である。底部回転ヘラ削り、周囲を丸く打ち欠いている。折縁皿の底部か。55は龍泉窯青磁の広口瓶の取っ手部分である。瓶の口唇部と取っ手の接合部分がかろうじて残存していた。56は龍泉窯青磁の盤の底部で、貼り付け双魚文の魚の頭部である。57は龍泉窯青磁の無文碗であり、釉が厚い。58は龍泉窯青磁鎬蓮弁文碗である。釉薬は草色で厚い。59は龍泉窯青磁印花文碗である。高台部外側の削りが浅く、高台内は蛇目釉剥ぎをしている。内底面に印花文があり、釉薬は全体に厚い。60は龍泉窯折縁皿の口縁であり、口縁部は屈曲する。61は龍泉窯青磁である。稜花状であるが、器種は不明である。釉は二次焼成を受けているのか白濁している。62は白磁の口元皿の極小片である。63は白磁の口元小皿、口唇部が内外面露胎する。64は白磁の碗か、底部の外面が露胎する。65は青白磁水注の口縁である。水青色の半透明の釉がやや厚めに施釉される。66は青白磁梅瓶の胴部。二次焼成を受ける。67は青白磁の香炉の脚部、辛うじて残る。水色の透明釉。68は黒褐釉だが器種は不明。内面露胎している。69は平瓦である。表面は糸切り後ナデ、裏面は縄目の叩きがあり、離れ砂が付着する。永福寺A類I期と同類である。70は平瓦の加工品である。側面が特に摩滅している。71は金銅製品である。頭は平たく、先端は窄まる。部分的に金が残る。72は北宋銭、景德元寶の真書である。初鑄年は1004年で、外径2.5cm、内径1.8cmを測る。73は砥石である。鳴滝産の仕上砥で片面のみ使用している。74は黒い基石である。径は2.2×2.1cmを測る。75は近世の灯明皿である。内面のみ施釉されている。76は近世の土人形の兎である。幅3cm、高さ2.3cmを測る。77は現代の鍵である。長さ6.6cmを測る。

2. 第2面の遺構と出土遺物 (図16～31)

第2面は泥岩を版築した黄褐色粘質土で、1～5cmの泥岩を多量に混入し地形している。海拔は16.00～16.15cmを測る。検出された遺構は建物址2軒、土坑21基、柱穴73穴、かわらけ溜り1箇所である。出土した遺物は弥生式土器、ロクロ成形のかわらけ、白かわらけ、土器。貿易陶磁器は、青磁、白磁、青白磁、褐釉。国産陶器は備前・瀬戸・常滑窯製品、ほかに瓦、鉄製品、銭、石製品等である。

建物址 (図17・19)

深さを持った柱穴が立ち並ぶ掘立柱建物である。建物1・2は重複関係にあり、建物1が建物2を切る。おそらく建物2は建物1を建て替えたものと考えられる。規模は東西2間、南北3間を確認したが全容は調査区の外に展開するので掴めない。しかし、南側には延びない様相を示している。

建物1：調査区の北側2/3を占めるA～D-1～3グリッドで範囲をつかんだ。しかし、遺構は東、西、北側にはまだ広がる様子である。確認出来た規模は東西3間(柱間距離西から2.00m-1.80m-2.00m)×南北2間(柱間距離北から2.20m-1.80m)である。主軸方位はN-14°-Wである。建物2を切る。覆土は暗褐色粘質土のやや粘性のある土で3cm前後の泥岩粒とかかわらけ片、炭化物を混入する。

個別に柱穴の説明を加える。柱穴76はD-1グリッドで検出した。重複関係は柱穴84を切る。平面形は不正円形で規模は51×(45)cmを測り、断面形は逆台形と言えようか。底面標高は15.67mを測る。出土遺物の図18-13はかわらけの大皿で内底面にナデが残る。胎土はやや粗土である。14は摩耗陶片である。常滑の片口鉢Ⅱ類の口縁部を使用している。15は丸瓦であり、表面はヘラ削りされ裏面は布目が残る。極楽寺創建時に類

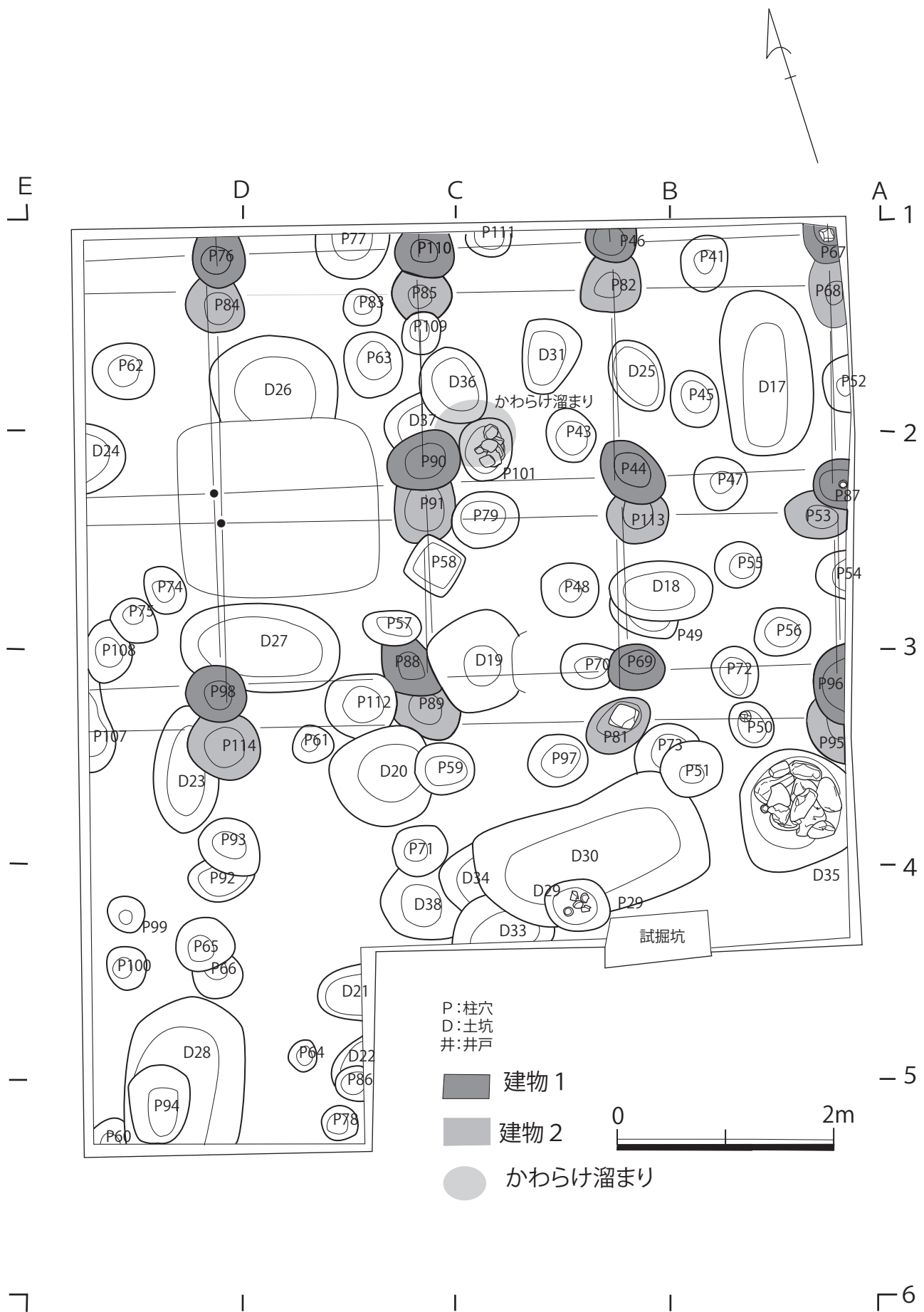
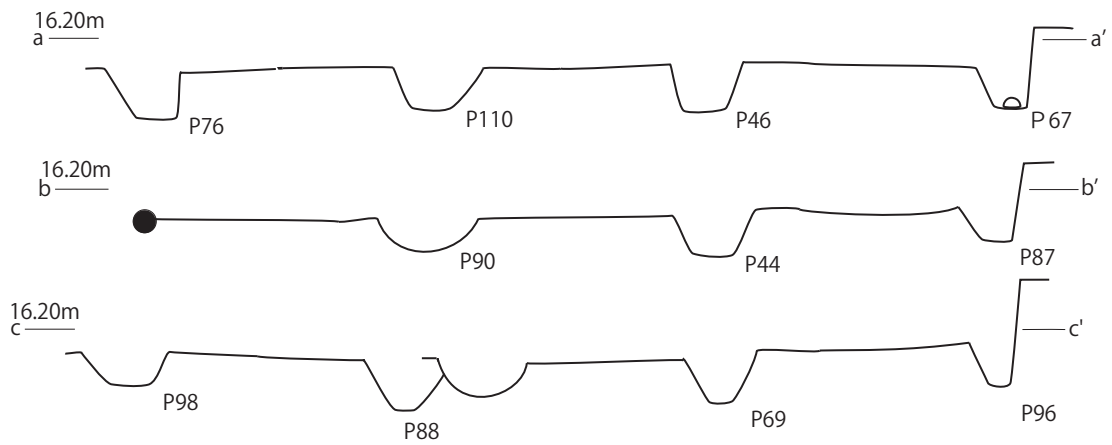
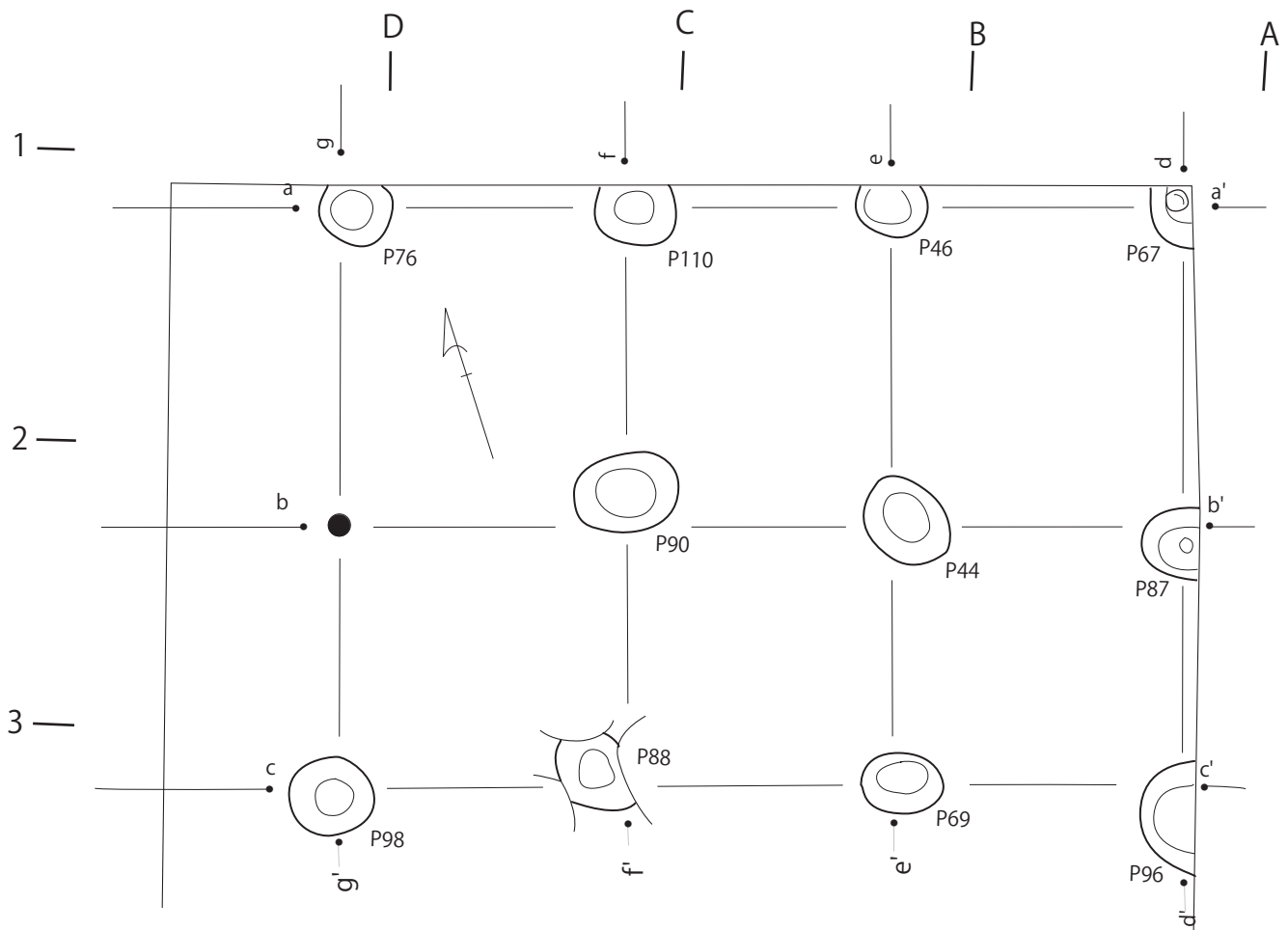


図16 第2面 全体図

似する。柱穴110はC-1グリッドで検出した。重複関係は柱穴85を切る。平面形は不正円形であり、規模は55×(39)cmを測る。断面形は逆台形を呈する。底面標高は15.756mを測る。柱穴46はB-1グリッドで検出した。重複関係は柱穴82を切る。平面形は楕円形となろう。規模は48×30cmを測り、断面形は箱型を呈する。底面標高は15.747mを測る。出土遺物の図18-9はかわらけの中皿である。10は常滑片口鉢のI類。11は平瓦で、胎土は良土であり、白い流文が入る。裏面に弱く格子の叩き目痕が残る。八幡宮B類・永福寺I期と同類である。12は平瓦である。表面、裏面とも離れ砂の黒色微砂が残る。胎土はやや粗土で砂を多く含み、流文が見られる。永福寺III期と同類である。柱穴67は調査区北東隅のA-1グリッドで検出した。重複関係は柱穴68を切る。平面形は円形か楕円形であろう。確認出来た規模は(54)×(41)cmを測る。断面形はU字形か。底面海拔15.765mを測る。底部には泥岩の礎石を残す。柱穴90はC-2グリッドで検出した。土坑37、柱穴91を切る。平面形は楕円形で、規模は68×54cmを測り、断面形は箱型である。底面海拔15.628mを測る。出土遺物の図18-22は東濃型山茶碗。内面口縁部まで卸目が刻まれる。23は火鉢の底部、I b類である。柱穴44はB-2グリッドで検出した。柱穴113を切る。平面形は楕円形で、70×53cmを測り、断面形は逆台形を呈する。底面の海拔は15.78mである。出土遺物の図18-1はかわらけ小皿で胎土は粗土である。2はかわらけ大皿で胎土は粗土である。3は東濃型山茶碗である。底部糸切りで糸目が体部に上がる。内底面は摩滅し紅が残る。4は常滑壺の口縁である。縁帯部内側が欠損する。5は褐釉壺の耳の部分、上部に幅1cmの沈線が巡るようである。6は褐釉の壺の胴部か。7は龍泉窯青磁鎬蓮弁文碗である。釉薬が厚い。8は青白磁合子の蓋。型作りの文様が見られる。柱穴87は調査区東壁にかかるA-2グリッドで検出した。柱穴53を切る。平面形は概ね楕円形と見られ、規模は50×(36)cmである。断面形は箱型と言えようか。底面の海拔は15.865mであり、特記すべきは柱穴底部にかかわらけが二枚重ねて埋納されていたことである。出土遺物の図18-16・17は重ねて出土したかわらけで、16が17の上に重なり出土した。いずれもかわらけの中皿であり、胎土は黒色微砂、赤色粒が入るやや粗土である。18はとりべ状のかわらけである。口唇部に気泡が立つ。19は白磁の口兀碗である。口径はもう少し大きいか、小片なので判断がつかない。20・21は鉄釘である。柱穴98はD-3グリッドで検出した。柱穴114、土坑23・27を切る。平面形は円形で、規模は57×53cmを測る。断面は逆台形である。底面海拔は15.803mを測る。出土遺物の図18-24はかわらけ小皿であり、やや粗土である。25はかわらけ大皿である。板状圧痕が強く残る。胎土はやや粗土である。柱穴88はD-3グリッドで検出した。柱穴89を切り、土坑19・柱穴57・112に切られる。平面形は不正円形で、確認出来た規模は(54)×(48)cmを測る。断面形は逆台形を呈し、底面海拔は15.686mを測る。柱穴69はB-3グリッドで検出された。柱穴70を切る。平面形は楕円形で、規模は54×45cmを測る。断面形は逆台形であり、底面の海拔は15.73mである。柱穴96は調査区東壁際A-3グリッドで検出した。平面形は円形もしくは楕円形が考えられる。規模は75×(30)cmを測り、断面形は箱型を呈する。底面の海拔15.83mである。

建物2：建物1同様、調査区の北側2/3を占めるA~D-1~3グリッドで範囲をつかんだ。しかし、遺構は東西、北側にはまだ広がる様子である。確認した規模は東西3間(柱間距離西から1.90m-1.80m-2.00m)×南北2間(柱間距離北から2.10m-1.90m)である。主軸方位はN-16°-W。建物1に切られる。覆土は茶褐色粘質土のやや明るめの土で5~8cmの泥岩粒とかかわらけ片、炭化物を混入する。

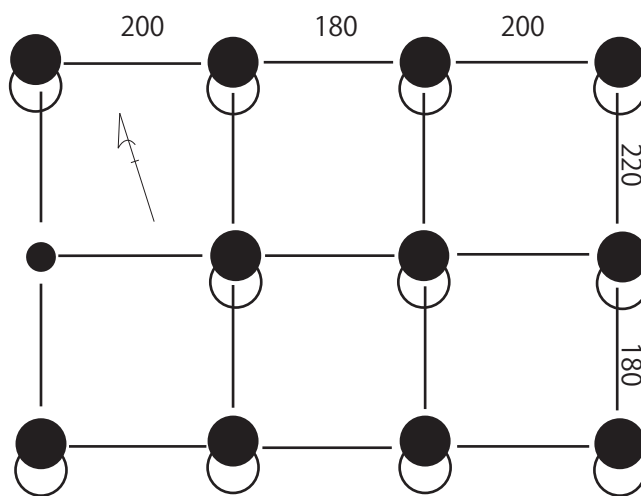
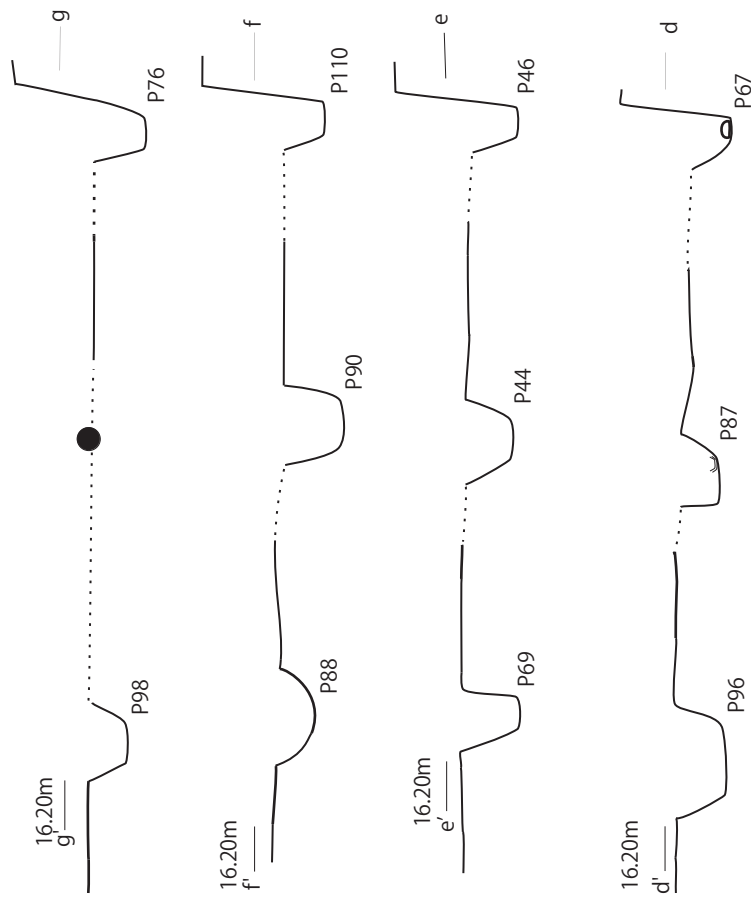
個別に柱穴の説明を加える。柱穴84はD-1グリッドで検出され、柱穴76に切られる。ほぼ円形の平面形であり、規模は54×(45)cmで、断面形は箱型と言えよう。底面海拔は15.791mである。柱穴85はC-1で検出され、柱穴110・109に切られる。平面形はほぼ円形であろう。規模は55×(34)cmで、断面形は逆台形を呈する。底面海拔は15.77mである。柱穴82はB-1で検出され、柱穴46に切られる。平面形は不正円形で、規模は60×(47)cmを測る。断面形はU字形を呈する。底面の海拔は15.752mである。柱穴68は調査区北東隅、A-1グ



	P76	P110	P46	P67	P90	P44	P87	P98	P88	P69	P96
長径	(45.0)	55.0	48.0	(54.0)	(68.0)	70.0	50.0	57.0	(54.0)	54.0	75.0
短径	51.0	(39.0)	30.0	(41.0)	54.0	53.0	(36.0)	53.0	(48.0)	45.0	(30.0)
深さ	36.4	25.9	30.0	26.4	39.0	28.8	24.2	24.2	33.3	33.0	30.9

(単位:cm)

図17 第2面 建物1

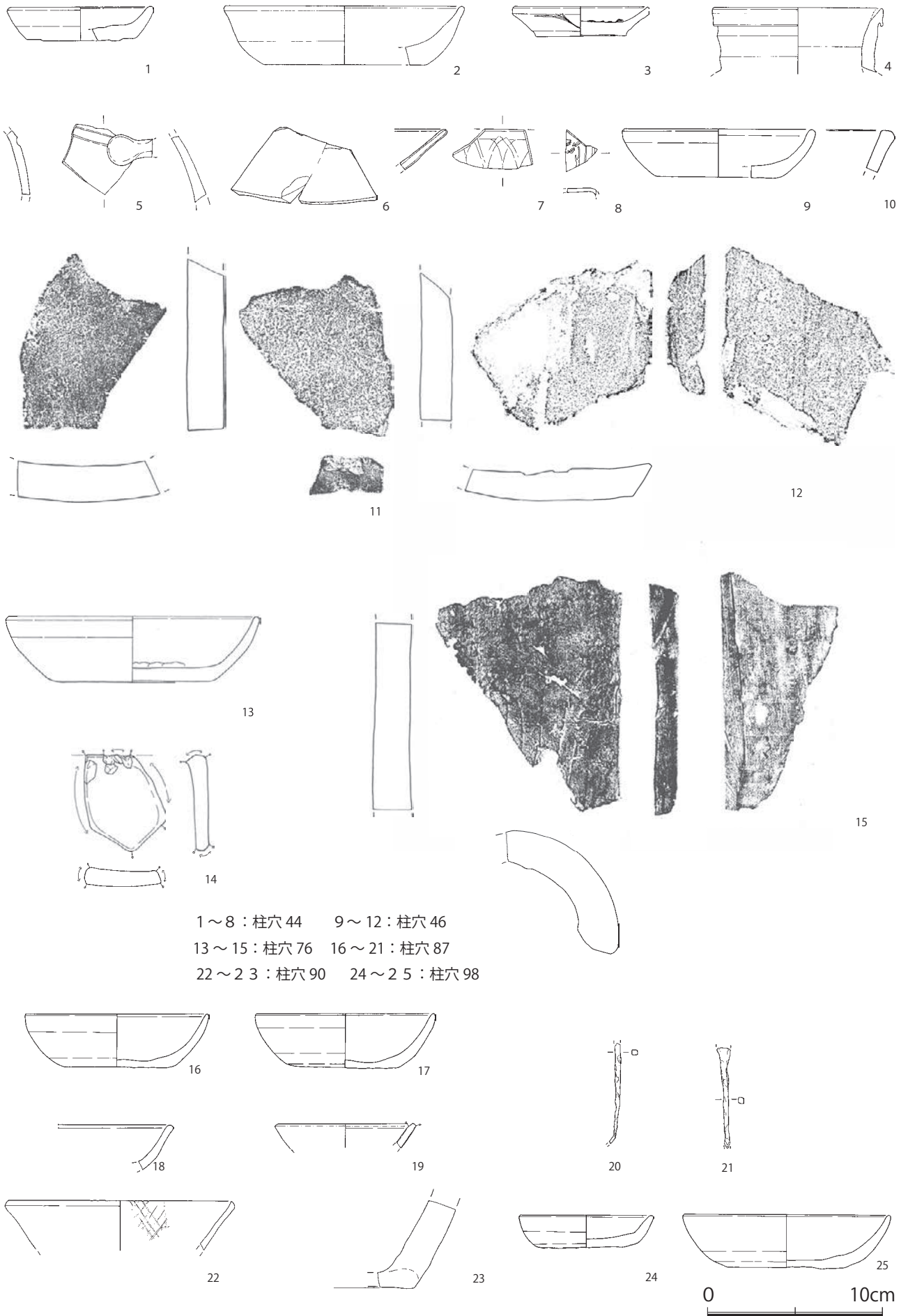


リッドで検出された。柱穴67に切られる。平面形は不明。確認できた規模は(60)×(37)cmを測る。断面形はU字形を呈する。底面の海拔高は15.65mである。出土遺物の図20-2は片口鉢の底部で、高台の上はヘラ削りが一周する。柱穴91はC-2グリッドで検出した。柱穴90・79・58に切られる。平面形は楕円形と見られ、規模は56×(47)cmを測る。断面形は箱型を呈する。底面海拔高は15.652mを測る。出土遺物の図20-9はかわらの底部で、砂を多く含む胎土である。10は龍泉窯青磁無文碗である。貫入が入り釉薬が厚く、口縁部が外反する。11は白磁の合子蓋である。櫛掻き状の文様が入り、釉は乳白色である。柱穴113はB-2グリッドで検出した。柱穴44に切られる。平面形は円形で規模は48×(40)cmを測る。断面形は逆台形である。底面の海拔高は15.763mを測る。柱穴53は調査区東端のA-2グリッドで検出した。柱穴87に切られる。平面形は楕円形で、規模は(57)×(47)cmである。断面は逆台形を呈する。底面の海拔高は15.785mを測る。出土遺物の図20-1はかわらけの中皿である。やや粗土であり、内底面に鉄滓が付着する。柱穴114はD-3グリッドで検出した。柱穴98に切れ、土坑23を切る。平面形は不正円形で規模は69×(54)cmである。断面形は逆台形を呈する。底面の海拔高は15.695mである。柱穴89はC-3グリッドで検出された。柱穴88・112・土坑19・20に切られる。平面形は概ね楕円形で、確認出来た規模は(61)×(42)cmである。断面は箱型を呈する。底面の海拔高は15.68mである。柱穴81はB-3グリッドで検出した。底部に一辺30cmの四角く加工した泥岩の礎石を持つ。平面形は楕円形で、規模は67×48cmである。断面は箱型を呈する。底面海拔高は15.78mを測る。出土遺物の図20-3は龍泉窯青磁鎚蓮弁文碗の底部。高台の内側は露胎である。釉薬は草色で厚く施釉される。4は白磁の口元印花文皿。柱穴95は調査区東端のA-3グリッドで検出した。柱穴96に切られる。平面形は楕円形か。規模は(40)×(37)cmである。断面形は箱型のようなものである。底面海拔高は15.73mである。出土遺物の図20-12は小型かわらけ皿である。口縁に油煙煤が付着するので灯明皿であろう。13は常滑I類の片口鉢、5形式か。14も常滑片口鉢I類、口縁丸みを帯びる。6a形式か。

第2面かわらけ溜り(図21)

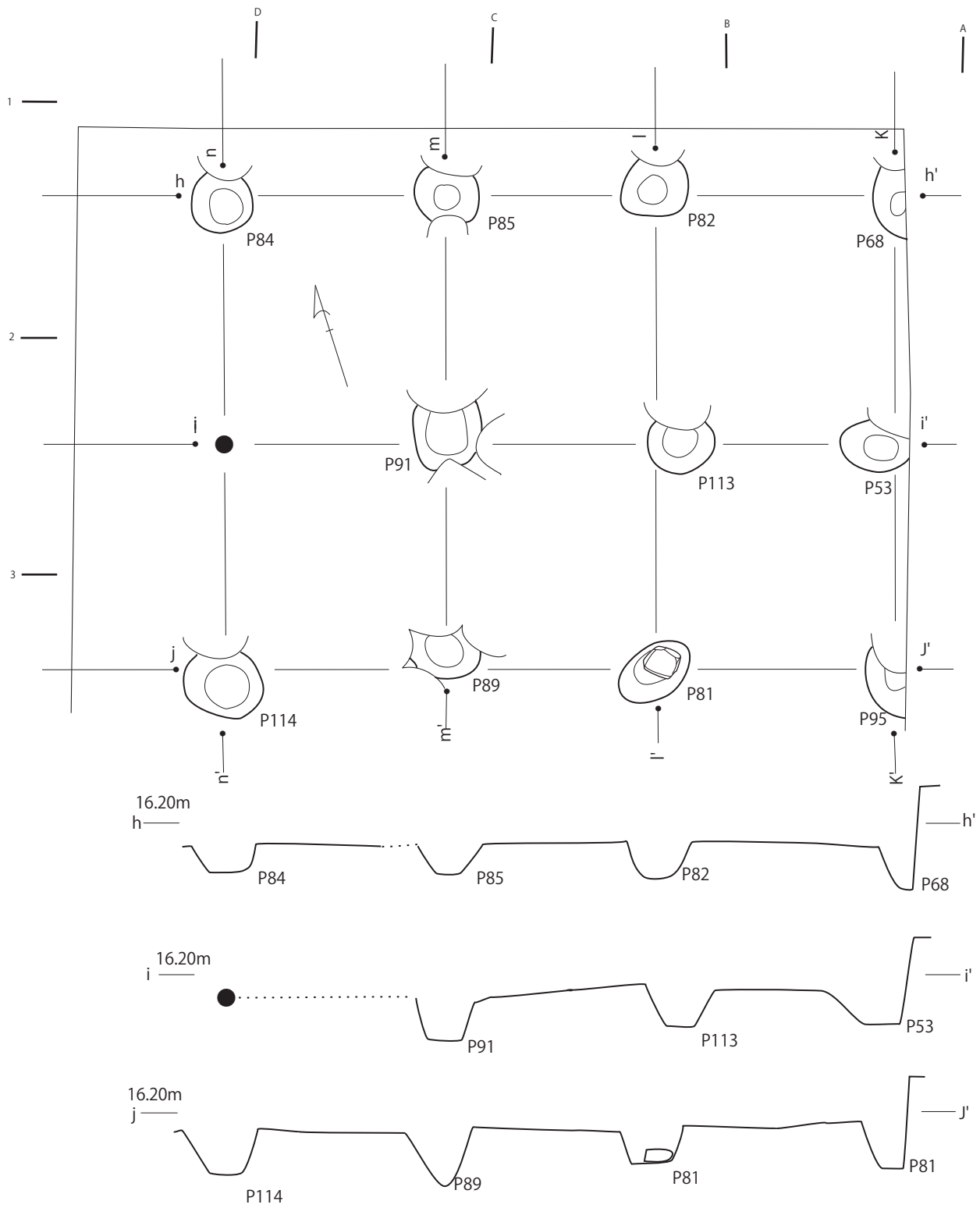
C-2グリッド周辺で検出した。第2面の上に弱い面があったのか掴みきれなかったが、柱穴等の遺構の上面でかわらけは散らばった。土坑36・柱穴90・101はかわらけ溜りを取り上げ、精査した後に検出されている。かわらけはいずれも破片であったが燈色のかわらけと、凸部を持つ白色のかわらけであった。凸部を持つ白いかわらけの名称を「白かわらけ」の「蓋」としていいものか考えあぐねたが、過去の調査事例に基づき「白かわらけ」の「蓋」とした。また他に図19の15~17に見られるように生活雑器の破片の混在があるが、これらは第1面構成土の混入物と捉え、かわらけ溜り自体はかわらけと白かわらけで構成されていたと考えたい。というのは、いわゆる儀式、祭祀的な要素を強く感じ取られるからである。

かわらけ溜りの出土状況は、海拔16.00mで平坦に2m四方に散らばるが北西で白かわらけがまとまって出土している。全て蓋である。出土の様に規則性はなく凸部が上に向いたり逆さになっている。2面上まで掘り下げる間にB-1グリッドあたりで白かわらけ質の高坏の脚部とそれに伴う坏部の出土もある(図29-29)。遺跡全体で見ても白かわらけの出土は多い、ただ多くは破片であり、それが坏になるのか蓋になるのかは不明であった。図21-1はかわらけ小皿である。器壁厚く、胎土は砂、赤色粒を混入するやや粗土である。内底面に強いナデが入る。2もかわらけ小皿である。口縁部に油煙煤が付着している。灯明皿であろう。全体に摩滅し、整形不明である。体部中心やや下に稜を持つ。胎土は砂の多い粗土である。3はかわらけ中皿である。口縁部に油煙煤を付着した灯明皿である。体部に丸みを持つが口縁部は外反する。胎土はやや砂が多く赤色粒も見られる。4はかわらけ大皿である。内底面に強いナデが入る。器壁はやや厚目だが胎土は比較的精良と言っていいだろう。5はかわらけ大皿である。体部に丸みを持つ。胎土は砂が多く入り、赤色粒も見られる



1~8: 柱穴 44 9~12: 柱穴 46
 13~15: 柱穴 76 16~21: 柱穴 87
 22~23: 柱穴 90 24~25: 柱穴 98

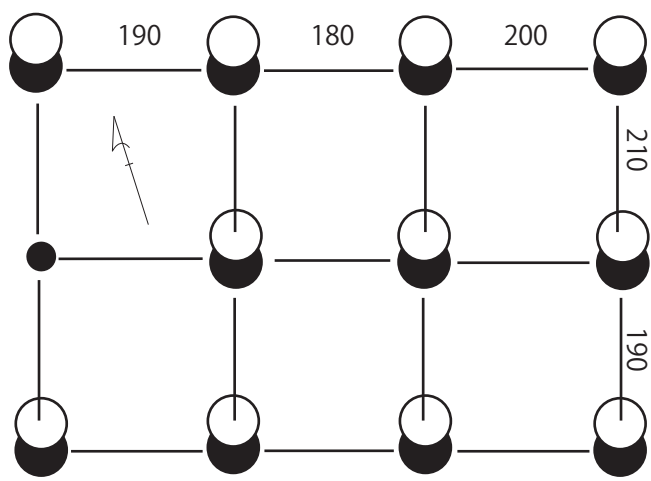
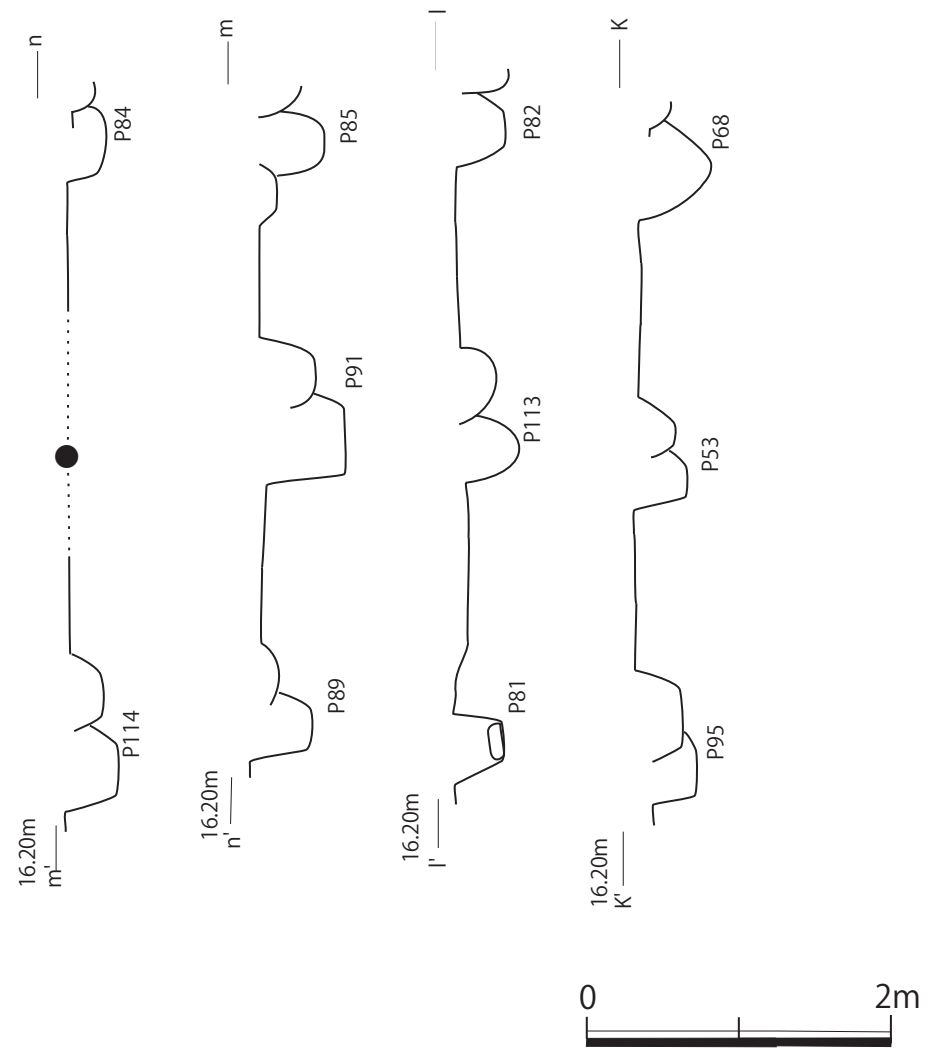
图18 第2面 建物1出土遺物



	P84	P85	P82	P68	P91	P113	P53	P114	P89	P81	P95
長径	54.0	55.0	60.0	(60.0)	56.0	48.0	(57.0)	69.0	(61.0)	67.0	(40.0)
短径	(45.0)	(34.0)	(47.0)	(37.0)	(47.0)	(40.0)	(47.0)	(54.0)	(42.0)	48.0	(37.0)
深さ	15.78	26.3	29.9	40.4	15.65	15.76	34.5	34.2	39.4	33.7	39.9

(単位:cm)

図19 第2面 建物2



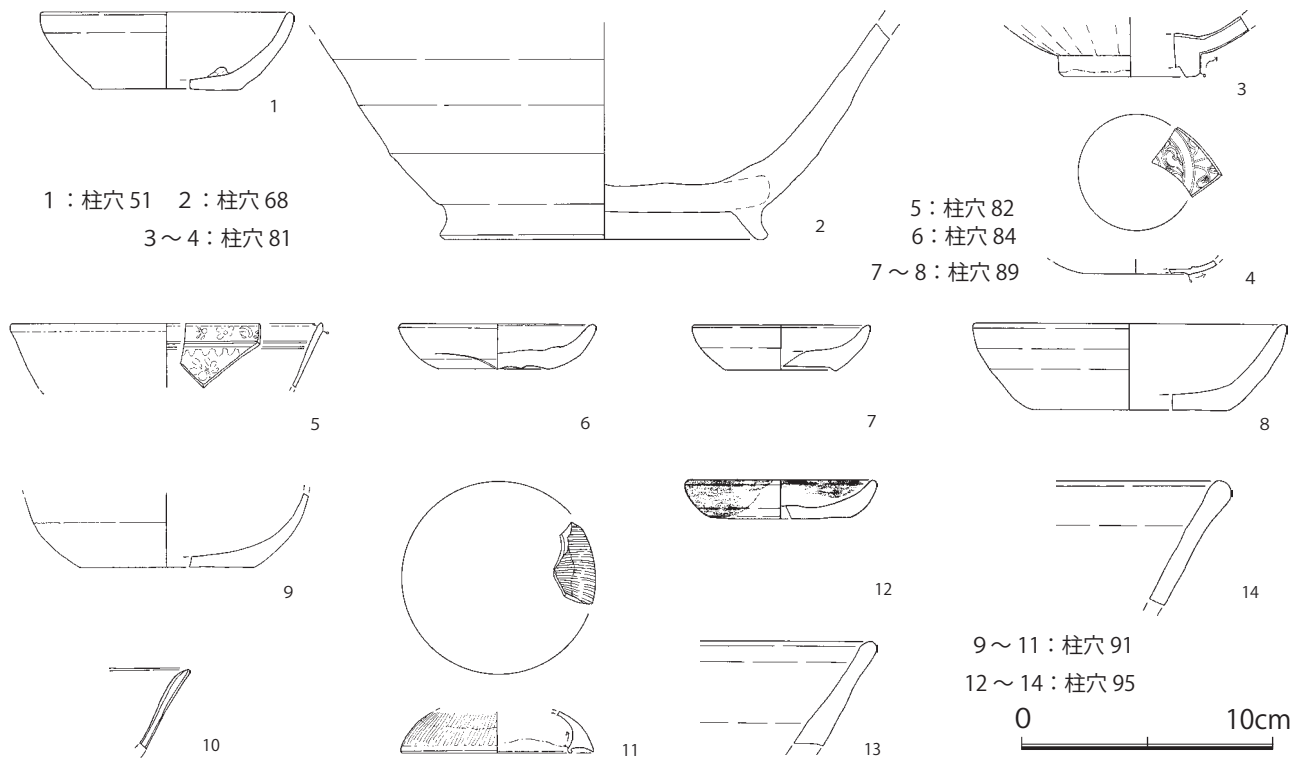


図20 第2面 建物2出土遺物

粗土である。6は白かわらけ蓋の口唇部、小片であるため坏との見分けがつきにくいだが、角度により蓋と判断した。胎土に砂が極少量混じる。色調はやや赤味を帯びた乳白色で、整形は摩滅により不明である。7は白かわらけ蓋の口唇部。これも小片であったが、口唇部から体部にかけて内側に膨らみを持つので坏ではなく蓋とした。胎土に少量砂が混じる。色調は乳白色である。摩滅著しく整形不明である。8は直径3cm、高さ1cmの凸部を持つ白かわらけの蓋。凸部分は貼り付けてあるようである。凸部と体部の間は強くなでられている。胎土は極少量の砂を含有する。色調は僅かに赤味を帯びる乳白色である。9は直径3cm、高さ1.3cmの凸部を持つ白かわらけの蓋である。口唇部の先端が摩滅しているのか口唇部なのか判断に苦しんだが全体の残存状況から口唇部とはしなかった。凸部を残し、体部は2/3欠損している。8もそうであったが凸部の欠損部分がひどく摩滅している。体部はヨコナデされている。胎土は極少量の砂を含有する。色調は乳白色である。10は凸部を持つであろう白かわらけの蓋。頂部が平たく強く撫でられているため蓋が付くものとみなした。体部はヨコナデされている。胎土は少量の砂を含む。色調は乳白色である。11は直径3cm、高さ1.5cmの凸部を持つ白かわらけ蓋である。破片端部の摩滅が顕著である。凸部と体部の間に強いナデが入り、体部はヨコナデされる。胎土は砂が少量入り、色調は乳白色である。12は幅3.5cm、高さ1cmの凸部をもつ白かわらけの蓋である。全体に摩滅しているが端部の摩滅は著しく全体形も円盤状で、人為的なものを感じ得る。胎土は砂を含有する。色調は乳白色である。13は直径3cm、高さ1cmの凸部を持つ白かわらけの蓋である。これも全体に摩滅しているが、端部の摩滅は著しくやはり人為的なものを感じ得る。全体形も円盤状である。14は白かわらけ質の台付きの皿になるであろうか。上下に貫通しない穴が穿たれる。台の部分は削りだしているようである。内底面はほんのり赤く、外底面は明らかに火を受けたようで、台部赤く、体部は部分的に煤けている。胎土は砂を少量混入する。15は常滑の片口鉢のⅡ類である。口縁は内側に少し突起するが外側のほうが強く突起が付く。9形式か。16は瀬戸の輪花型入れ子である。残存状態は悪いが内面に紅が残る。17は鳴滝産の砥石の仕上砥である。片面のみ使用痕残る。

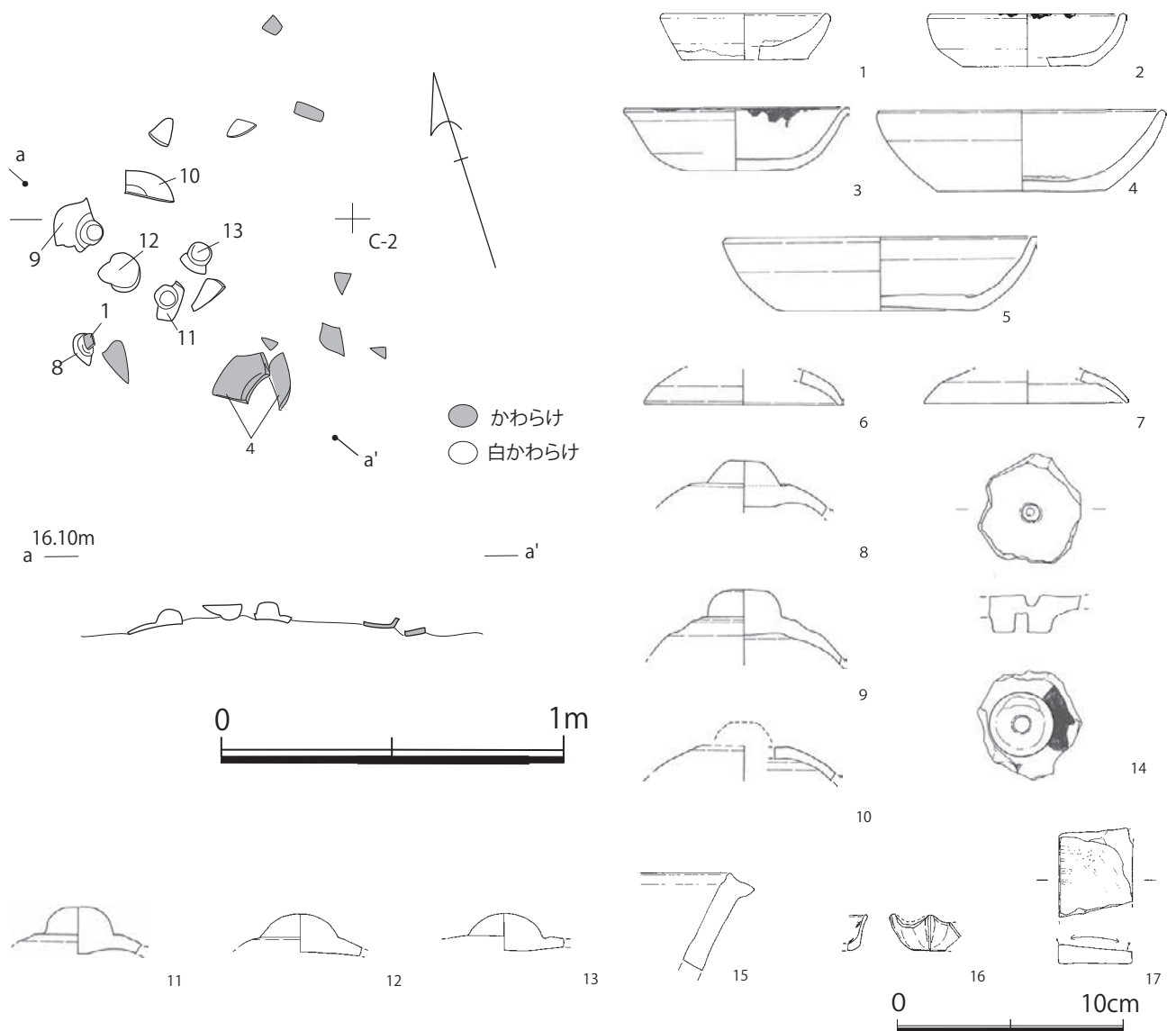


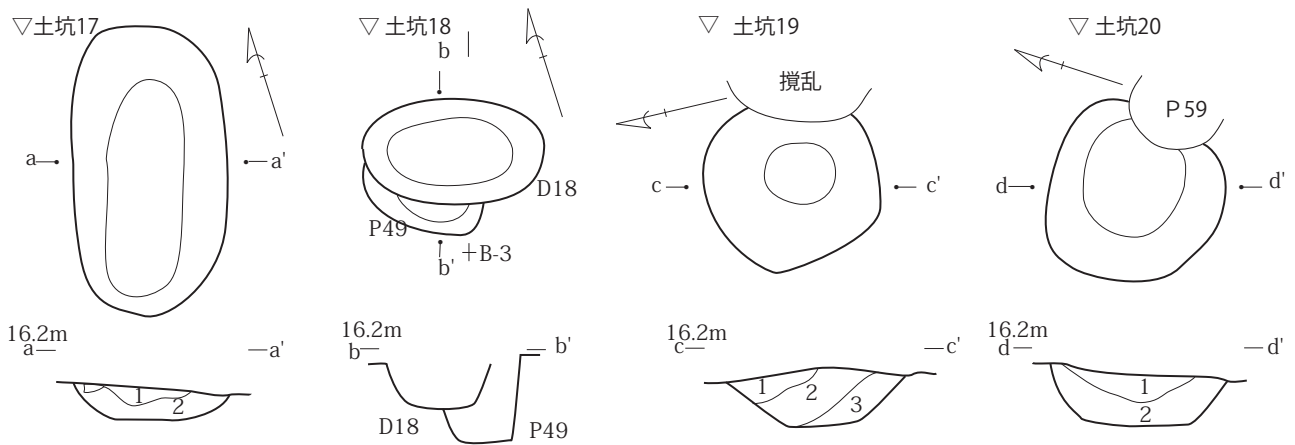
図21 第2面 かわらけ溜り・出土遺物

土坑 (図22 ~ 26)

土坑は規則性を持たず調査区内に広がり規模の統一性もない。土坑30・35と隣り合わせた土坑は礎石に使用したと思われる安山岩(伊豆石)を充填しているかのように包含した遺構であった。礎石建物の礎石を集め廃棄したものと思われ、周辺にある程度の規模の建物址があったことが窺える。土坑30の西側は土坑が密集するが、便所遺構等の可能性は低い。

土坑17:A-1グリッドで検出した。平面形は楕円形で、規模は150×80cmである。断面形は皿状を呈する。主軸方位はN-18°-Eである。出土遺物の図22-1・2はかわらけ小皿である。1は底部が小さく口縁が広がる。灯明皿として使用している。2は口縁を打ち欠いてある。3は白かわらけ、底部糸きりのろくろ成形である。4は瀬戸の入れ子で片口を持つものである。外体部にロクロ回転糸切り痕の糸が巻きついた痕が残る。底部はヘラ削りされている。5は北宋銭の皇口通寶である。おそらく皇宗通寶の篆書であろう。

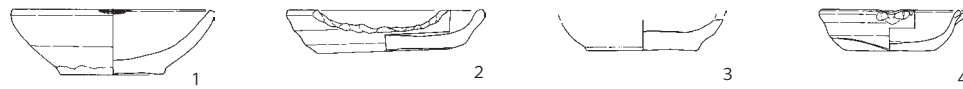
土坑18:A-2グリッドで検出された。柱穴49を切る。平面形は楕円形であり、規模は96×57cmを測る。断面形は箱型を呈する。主軸方位はN-107°-Wである。出土遺物の図22-6はかわらけ小皿である。器高は低く胎土は粗土である。7はかわらけ小皿である。口唇部のヨコナデが強く体部中ほどにも稜が入る。胎土はやや粗土である。8はかわらけ小皿で口縁部に油煙煤が付着しているので灯明皿であろう。9はかわらけの中皿。体部丸みを持ちながら立ち上がり、口径が開く。胎土は砂を多く含むやや粗土である。10はかわらけ大皿。



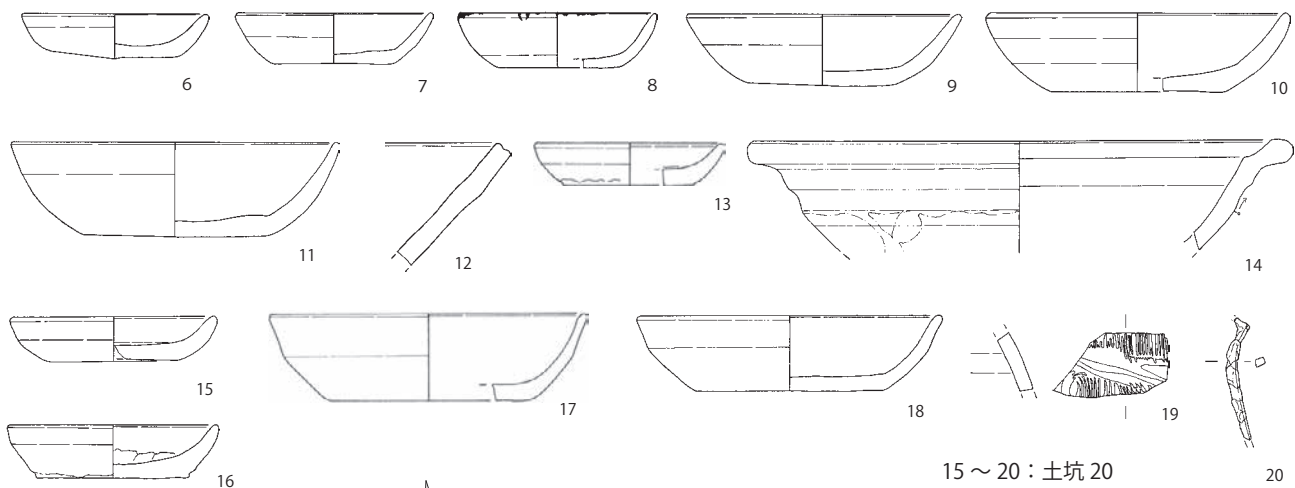
第1層 暗褐色粘質土：土丹粒、炭化物を多く含む。縮りなし。
 第2層 茶褐色粘質土：1～3cm大の土丹、かわらけ粒を多く含む。縮りややあり。

第1層 暗褐色粘質土：1～5cm大の土丹、土丹粒を多量に含む。縮りあり。
 第2層 茶褐色粘質土：土丹粒、かわらけ片、炭化物を多量に含む。縮り弱い。
 第3層 明茶褐色粘質土：土丹粒が多量、炭化物、かわらけ粒を少量含む。明茶褐色粘土ブロックを多めに含む。縮りややあり。

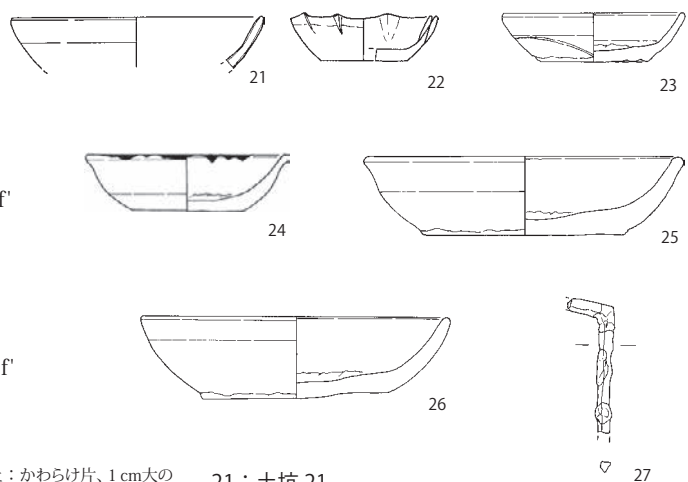
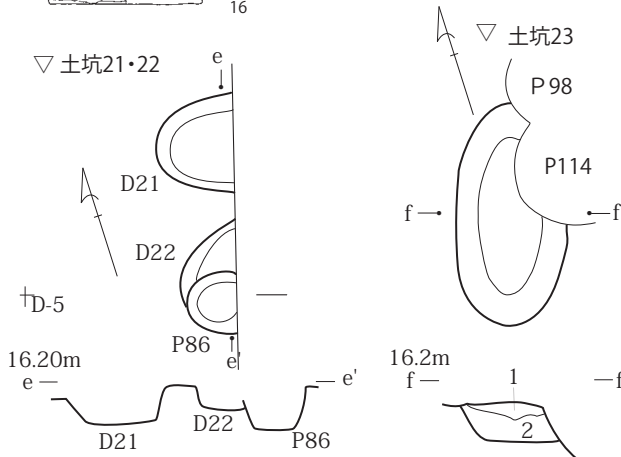
第1層 暗褐色粘質土：炭化物、土丹粒を多く含む。縮りあり。
 第2層 茶褐色粘質土：1cm大の土丹、かわらけ粒、炭化物を多く含む。縮り弱い。



1～5：土坑 17 7～12：土坑 18 13～14：土坑 19



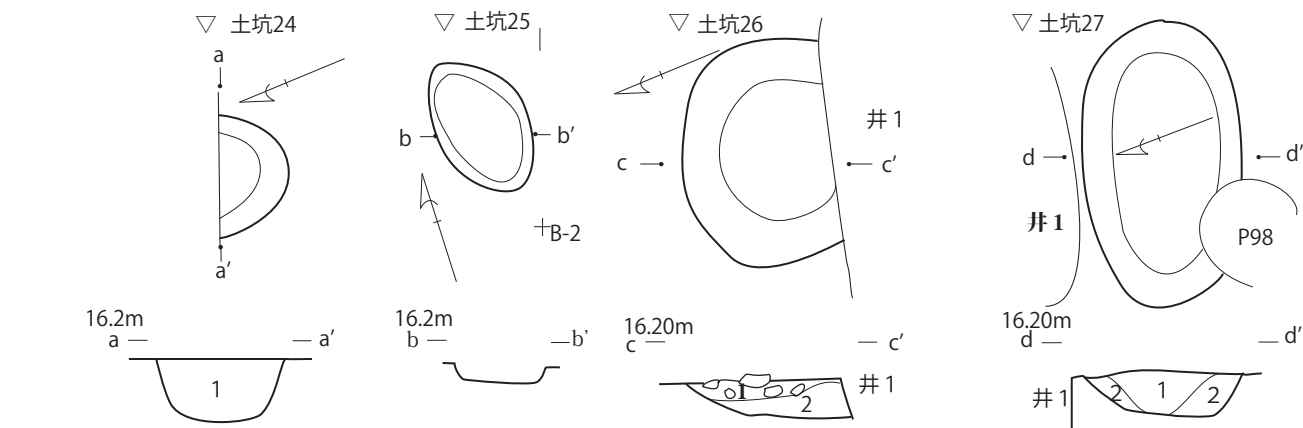
15～20：土坑 20



第1層 茶褐色粘質土：かわらけ片、1cm大の土丹を多量に含む。縮りあり。
 第2層 茶褐色粘質土：2cm～拳大の土丹塊、炭化物を多めに含む。縮りややあり。

21：土坑 21
 22：土坑 22
 23～27：土坑 23

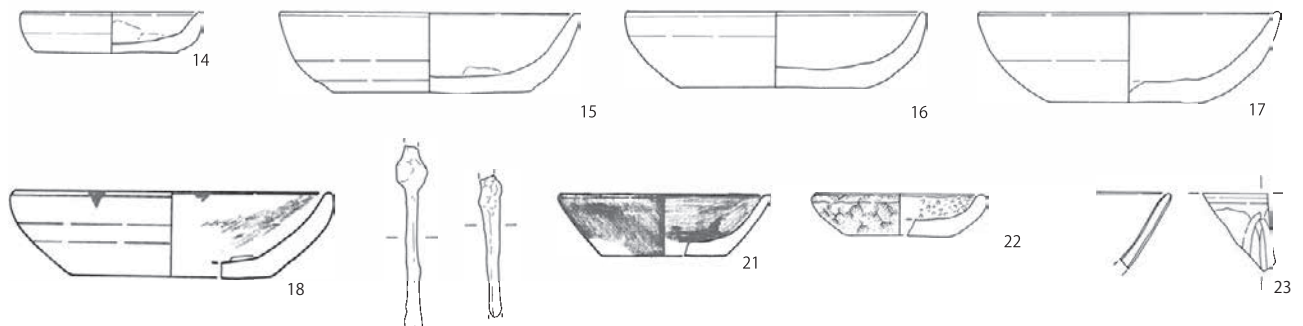
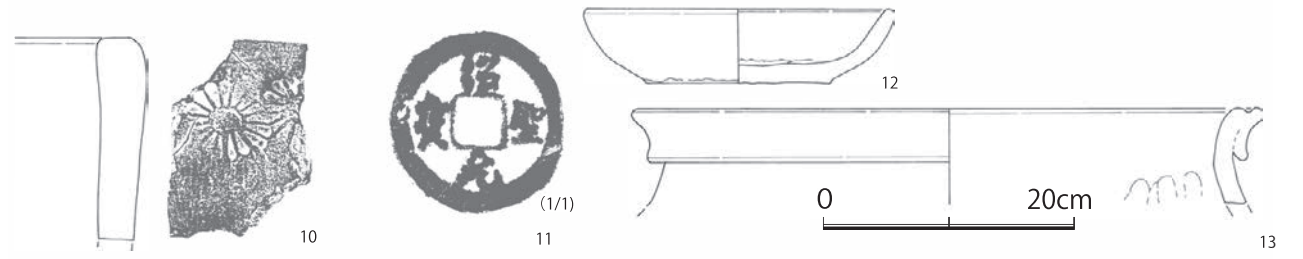
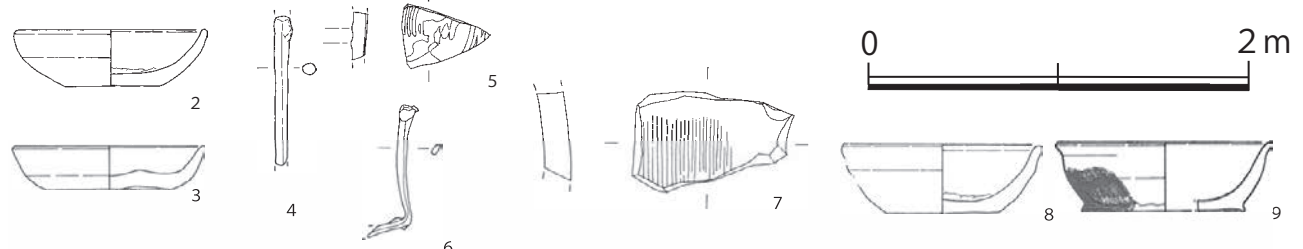
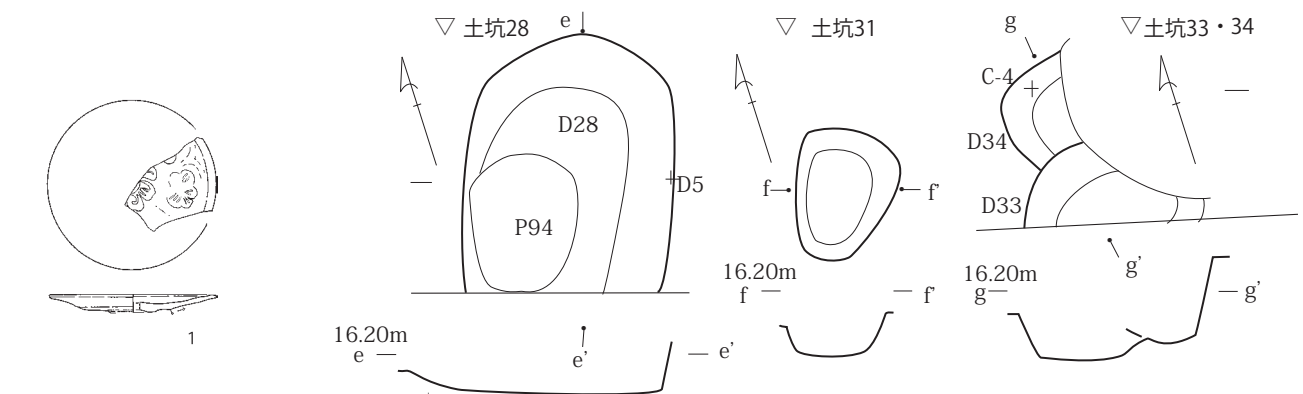
図22 第2面 土坑(1)・出土遺物



第1層 暗茶褐色粘質土：拳大の土丹、かわらけ片、炭化物少量含む。

第1層 茶褐色粘質土：拳大の土丹塊をやや多く、かわらけ片、炭化物を少量含む。縮り強い。
第2層 茶褐色粘質土：土丹粒、炭化物多量に含む。縮りやや弱い。

第1層 暗褐色粘質土：1～3cm大の土丹を多量、かわらけ粒少量含む。縮り強い。
第2層 茶褐色粘質土：かわらけ粒、土丹粒、炭化物多く含む。縮りやや弱い。



1：土坑24 2：土坑25 3～4：土坑26 5～6：土坑27 7～11：土坑28 12～13：土坑31 14～20：土坑33 21～23：土坑34

図23 第2面 土坑(2)・出土遺物

器壁が厚く、内湾する。胎土は粗土である。11はかわらけ大皿である。全体に摩滅する。内湾し口唇部に強いヨコナデが入る。胎土は砂を多く含むやや粗土である。12は常滑片口鉢Ⅱ類の口縁部で、6b～7形式。

土坑19：B-2・3グリッドで検出された。攪乱に切られ、柱穴88・89（建物1・2）を切る。平面形は大概円形で規模は98×(80)cmである。断面形は浅い逆台形を呈する。主軸方位はほぼ真北である。出土遺物の図22-13はかわらけ小皿。内底面にナデが入る。器壁厚くやや直線的に立ち上がる。14は瀬戸の折縁深皿で、釉薬は漬け掛けされている。中期様式Ⅳ期であろう。

土坑20：C-3グリッドで検出された。柱穴59に切られ、柱穴89（建物2）・112を切る。平面形は不正円形で規模は96×90cmを測り、断面形は逆台形を呈する。主軸方位はN-90°-Wである。出土遺物の図22-15・16はかわらけ小皿である。双方とも器壁厚く、内底面のナデが強い。また、粗土である。17・18はかわらけ大皿である。17は体部の真中辺りに稜を持つ。胎土は砂を多く含むやや粗土である。18は全体に摩滅しているが、胎土は良土で、器壁は薄目で、体部丸みを帯びるが口縁部やや反る。19は青白磁の梅瓶胴部である。水色の透明釉を施す。20は鉄釘である。

土坑21：C-4グリッドで検出した。全貌を調査区外に展開するため、明らかではない。平面形は楕円形か。規模は53×(40)cmを測り、断面形は箱型である。主軸方位はN-104°-W。出土遺物の図22-21は龍泉窯青磁無文碗で、釉薬は深い草色で厚く施釉される。

土坑22：C-4グリッドで検出した。柱穴86に切られる。全貌を調査区外に展開するため明らかではないが楕円形であろうか。確認出来た規模は(60)×(30)cmである。断面形は箱型か。主軸方位はN-70°-Wである。出土遺物の図22-22は瀬戸の輪花型入れ子である。

土坑23：D-3グリッドで検出した。柱穴114・98（建物1・2）に切られる。平面形は楕円形、規模は(118)×60cmである。断面形は箱型か。主軸方向はN-20°-Wである。出土遺物の図22-23はかわらけ小皿である。体部にロクロ回転糸切りの糸が巻きついた痕が残る。内底面に弱くだがナデが残る。胎土は砂を多く含む粗土である。24はかわらけ小皿であり、口縁部に油煙煤を付着させた灯明皿である。内側は摩滅しているがナデが残る。体部は丸みを帯び、口縁部は外反する。胎土は砂を含む粗土である。25・26はかわらけ大皿である。器壁厚く、胎土に砂を含む粗土である。内底面にナデがあり、26は内底面のナデが特に強い。25は口縁部が若干反る。27は鉄釘である。

土坑24：D-2グリッドで検出した。遺構西側は調査区外に展開する。平面形は円形もしくは楕円形で、規模は67×(39)cmであり、断面はU字型を呈する。主軸方向はN-17°-Eである。出土遺物の図23-1は白磁印花文皿である。内面に印花され、外面は体部下方から高台内側にかけて露胎している。釉はほのかに青い白色で薄い施釉である。

土坑25：B-1グリッドで検出した。平面形は楕円形で規模は71×50cmであり、断面形は浅い箱型を呈する。主軸方位はN-14°-Eである。出土遺物の図23-2はかわらけ小皿である。全体に摩滅しているが、内底面に強いナデが残る。やや内湾的に立ち上がる。

土坑26：C-1グリッドで検出した。南側を井戸1に切られる。平面形は概ね不正円形と見られ、規模は119×(80)cmを測る。断面形は皿状であろうか。主軸方位はN-14°-Eである。出土遺物の図23-3は小型かわらけである。内底面に強いナデが入り、胎土は砂が入るがやや良土である。4は鉄釘である。

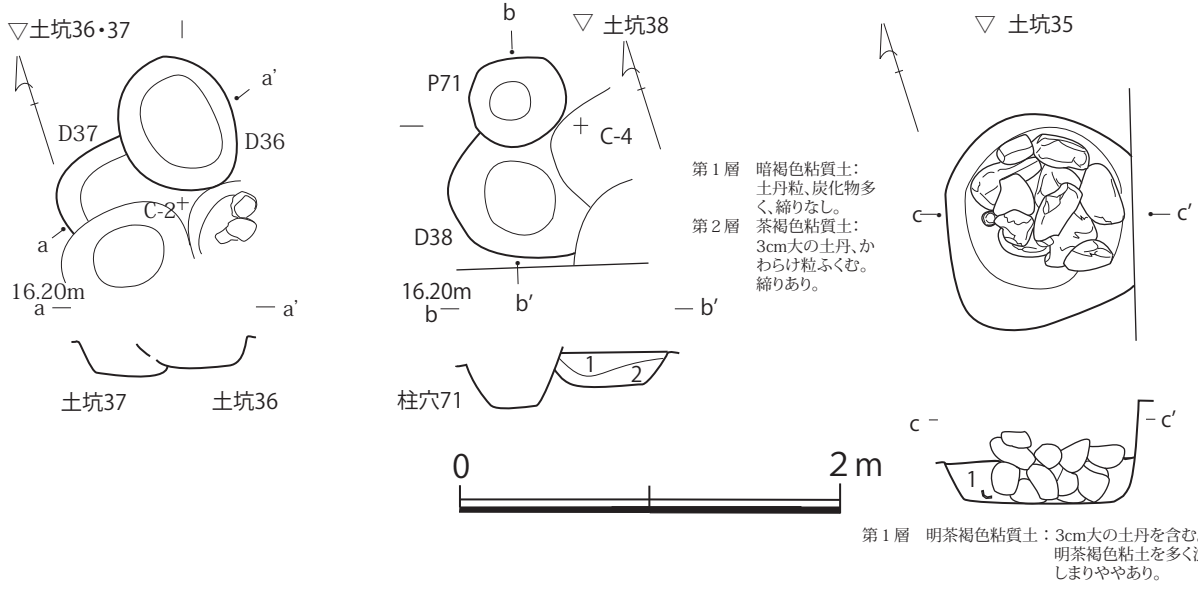
土坑27：C・D-2・3グリッドで検出した。柱穴98（建物1）に切られる。平面形は楕円形で規模は149×83cmで、断面形は逆台形を呈する。主軸方向はN-107°-Wである。出土遺物の図23-5は青白磁の梅瓶胴部である。やや深い水色の半透明の釉が厚く施釉している。6は鉄釘である。

土坑28：調査区南端のD-4・5で検出した。柱穴94に切られ、柱穴60を切る。調査区に切られ全貌は明

らかではないが、平面形は楕円形であろうか。確認出来た規模は(146)×110cmである。断面形は皿状を呈する。主軸方位はN-16°-Wである。出土遺物の図23-7は弥生式土器の壺、胴部片である。刷毛目が見られる。8・9はかわらけ小皿である。8は内底面のナデ強く、口縁部外反する。胎土は砂が多い粗土である。9は体部が黒く煤けていて、やはり口縁が外反する。胎土は粗土である。10は輪花型の火鉢の皿類である。外面黒色処理、縦位の磨きが施され菊花のスタンプを押印する。内面は横位の磨きが施される。11は北宋銭である。紹聖元寶の行書で初鑄年は1094年である。外径2.4cm、内径1.8cmを測る。

土坑29: B-4グリッドで検出された。かわらけの一括廃棄土坑である。供伴遺物がないので祭祀的な目的を伴う、かわらけ埋納遺構の可能性も拭えない。かわらけは破片数も合わせて27点出土している。残存率が良くその内図示しえたのはかわらけ大小皿の5点である。遺構は土坑30を切る。平面形は不正円形で規模は61×48cmを測り、断面形は逆台形を呈する。覆土は茶褐色粘質土で5~8cmの泥岩、かわらけ、炭化物を含む。主軸方位はN-58°-Eである。出土遺物の図24-9~11はかわらけ小型皿である。9は全体にやや摩滅しているが内底面にナデ調整が残る。やや内湾しながら立ち上がる。胎土は混入物の多い粗土である。10は底部が歪むほどの強いナデが内底面に残り、かわらけ全体にも歪みがあるが直線的に立ち上がり、胎土は砂の多い粗土である。11は直線的に立ち上がる。内底面は弧を描くようなナデ調整で、砂の多いやや粗土である。12~13はかわらけ大皿である。12は器壁薄く、内湾的に立ち上がるが、胎土に砂を多く含む粗土である。内底面にナデ調整が残る。13は口縁が開く。立ち上がりは直線的であり、内底面中央はナデ調整である。胎土は砂、赤色粒を含む粗土である。

土坑30: B-3グリッドで検出した。東側で柱穴73を切り、柱穴51に切られる。西側で土坑33・34を切り、土坑29に切られる。遺構検出作業当初は幾つかの遺構に見えたが精査を繰り返し、結果的に一つの遺構として捉えた。西側上層では土坑35同様に30~40cmの安山岩(伊豆石)が集中して多く出土している。土坑30の中で、度重ねて掘り返しがあったようである。平面形は不正楕円形で規模は214×108cmを測り、断面形は逆台形を呈する。主軸方位はN-90°-Wである。出土遺物の図25-1~6はかわらけである。1は小皿で器壁が厚く体部の上位に強い稜が入り内底面にナデ調整が残る。胎土は砂を多く含むやや粗土である。2は小皿で、器壁が厚く全体に歪む。体部の中央に稜を持ち内底面の中央にナデが見られる。胎土は含有物の多い粗土である。3も小皿である。器壁薄く内湾して立ちあがるが胎土は砂の多いやや粗土である。4は小皿の灯明皿で、内底面外周をナデている。外体部にはロクロ回転糸切りの糸が巻きついた痕が残る。胎土は砂の入るやや粗土である。5・6は大皿である。5は小片でありながら、成形の雑さがうかがえる。内底面ナデ調整あり、外体部上位に稜が入る。胎土は含有物の多い粗土である。6は器壁厚く全体に摩滅している。胎土は含有物の多い粗土である。7は白かわらけの皿である。胎土は砂が入り、色調は乳白色である。8はIc類の瓦質火鉢で、黒色処理されている。9はII類の火鉢でかわらけ質。体部下位へラ削りされている。10は火鉢の皿類である。黒色処理され輪花のへラ刻みが見られ、底部は砂底で体部外面は指頭後に工具による雑なナデが見られる。11は常滑の壺である。12は龍泉窯青磁鎬蓮弁文皿。何度も傾きを確認したが皿になる。薄い草色の透明釉が厚く施釉される。13は龍泉窯青磁鎬蓮弁文碗。やや青味がかかった灰色の釉薬をやや薄めに施釉する。14は景德鎮窯の白磁口元印花文皿。底部は釉をぬぐい、内面印花文が施され、白色の透明釉を薄く施釉している。15は褐釉の壺である。口縁から胴部にかけて降灰釉がかかる。胴部に熔着痕がある。口縁部と胴部は接合できなかったが同一個体と考えられる。成形はヨコナデである。16は平瓦。表面は粗めの離れ砂、叩き目が転写する。裏面は格子と三条線の叩き目。八幡宮出土のF類と叩き目が類似する。17も平瓦である。表面は黒色微砂による離れ砂。裏面は格子の叩き目である。永福寺III期と類似する。18、19は鉄釘である。遺構からは他に鉄釘が16本出土している。20は銭である。□祐元寶と読みとれ北宋銭の篆書で、景祐元寶か嘉祐元寶であろう。



第1層 明茶褐色粘質土：3cm大の土丹を含む。
明茶褐色粘土を多く混入。
しまりややあり。

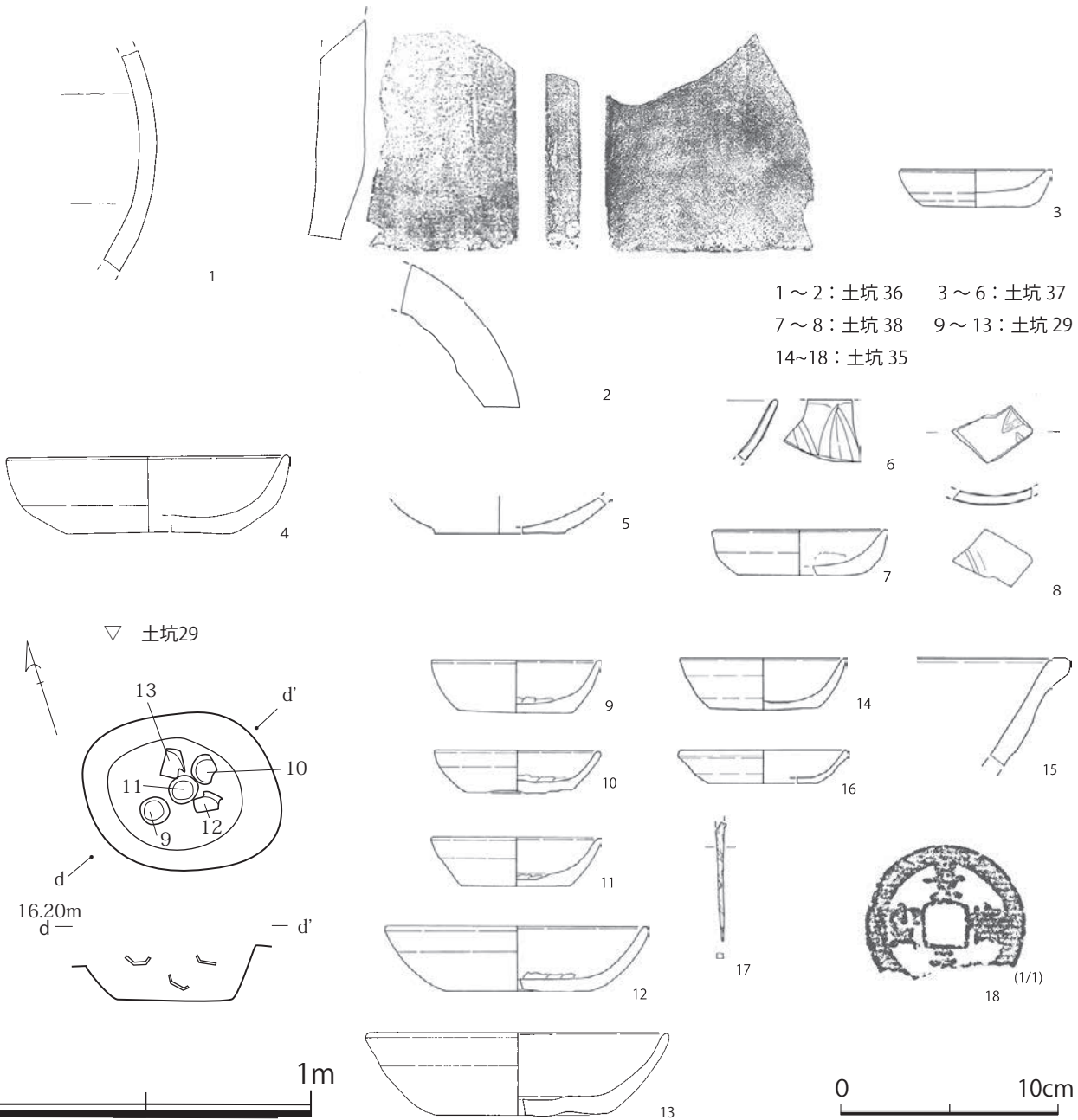


図24 第2面 土坑(3)・柱穴71・出土遺物

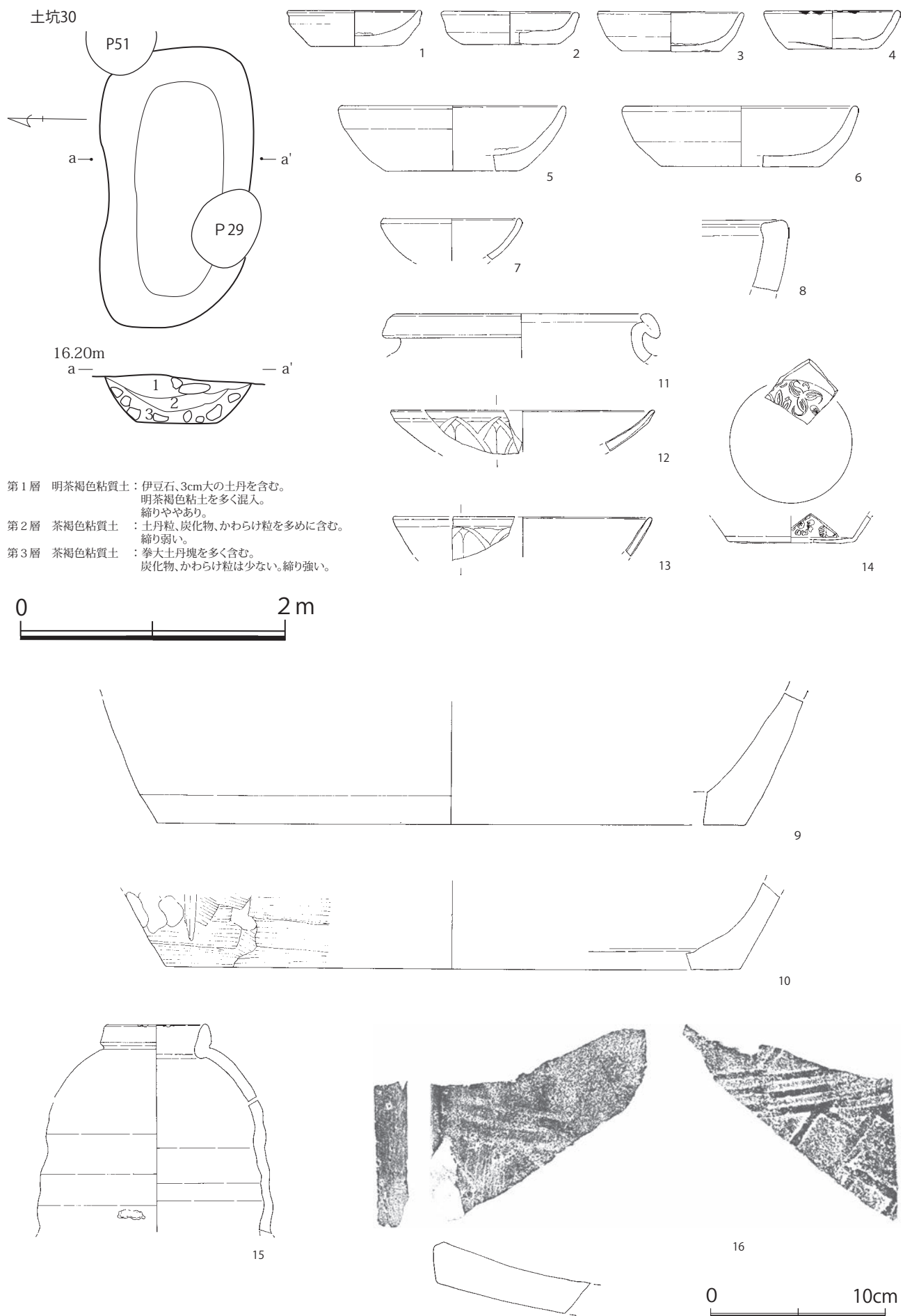


図25 第2面 土坑30(1)・出土遺物

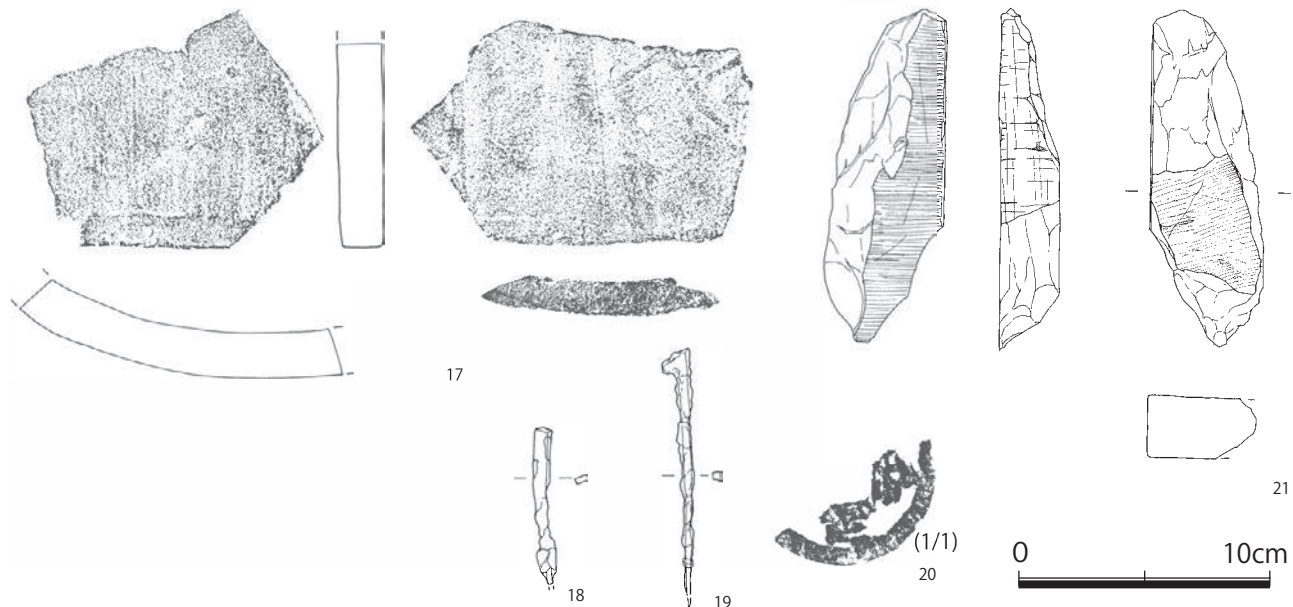


図26 第2面 土坑30(2)・出土遺物

21は滑石である。石鍋の底部を転用した温石か。三面が平坦に削られ残る。厚みは2.4cmを測る。

土坑31：B-1グリッドで検出した。平面形は不正円形で規模は70×56cmを測る。断面形はU字形である。主軸方位はN-29°-Wである。出土遺物の図23-12はかわらけ大皿である。内底面のナデ調整が強い。器壁厚く、内湾して立ちあがる。胎土は混入物の多い粗土である。13は常滑甕の口縁片で縁帯の幅は4cmである。9形式であろう。

土坑33：B-4グリッドで検出した。土坑30に切られ、土坑34を切る。平面形は楕円形か。確認出来た規模は94×(50)cmである。断面形不明。主軸方位はN-60°-Wである。出土遺物の図23-14はかわらけ小皿である。内面は口縁までナデ上げ、器壁厚く体部丸みを帯びる。胎土は砂を多く含む粗土である。15から18はかわらけ大皿である。15は内底面に強いナデ調整が残る。器壁が厚く、胎土は混入物の多い粗土である。16は内底面にナデ調整残り、体部は丸みを持つ。胎土は砂を多く含む粗土である。17は底径が小さく、内湾して立ちあがり、内底面に強いナデが入る。胎土は砂を含むやや粗土である。18は口縁内湾する。胎土は砂多く混入物の多い粗土である。口縁部に油煙煤が付着しているので灯明皿であろう。19・20は鉄釘である。

土坑34：B-4グリッドで検出した。土坑30・33に切られ、土坑38を切る。平面形は不正円形か。確認出来た規模は(46)×(39)cmである。断面形は逆台形か。主軸方位不明である。出土遺物の図23-21はかわらけ小皿の灯明皿である。内外面煤けている。22はかわらけのとりべ状小皿である。内面気泡が立ち白色の付着物がある。23は龍泉窯青磁鎬蓮弁文碗の口縁部である。薄い草色の半透明の釉をやや薄く施釉している。

土坑35：A-1グリッドで検出した。東側を調査区に切られる。平面形は不正円形で、規模は117×(100)cmを測り、断面形は箱型である。主軸方位はN-18°-Wである。覆土内には30～40cmの安山岩(伊豆石)を充填している。西隣の土坑30の上層でも同じように安山岩が集中して出土していた。土坑30とは遺物の接合関係もあることから同時期の遺構と思われる。周囲の礎石建物の礎石を集め土坑30・35に一括廃棄したものと思われる。安山岩の数は20数個に及び周辺に大きな礎石建物の存在が窺える。出土遺物の図24-14はかわらけ小皿である。内底面ナデがあり、胎土は砂などの混入物の多い粗土である。15は常滑産片口鉢である。口縁を引き上げ断面三角形を呈する。16は瀬戸入子。底部は糸切りである。17は鉄釘。18は北宋銭の景德元寶の真書で、初鑄年は1004年である。外形2.4cm、内径1.8cmを測る。

土坑36：B・C-1グリッドで検出された。土坑37を切る。平面形は不正円形で、規模は76×61cmである。断面形はU字形を呈する。主軸方位はほぼ真北を示している。出土遺物の図24-1は褐釉の壺の胴部である。

2は丸瓦。表面は、横位のナデと縦位の叩き目、側面はヘラ削りが見られる。裏面は横位の糸切り痕、布目痕、離れ砂が見られる。永福寺I期A類と同類である。

土坑37：C-1グリッドで検出した。土坑36・柱穴90（建物1）・101に切られる。平面形は楕円、もしくは不正円形か。確認出来た規模は(50)×(35)cmを測る。断面形は箱型もしくは逆台形を呈する。主軸方向は不明である。出土遺物の図24-3はかわらけ小皿である。器壁が厚く、内底面ナデ調整で、胎土は含有物の多い粗土である。4は大型かわらけである。体部中央やや下に稜を持ち、胎土は混入物の多い粗土である。5は東濃型の碗である。内面無釉である。外面は施釉され、底部糸きり。内底面は指でぐっと押さえられている。体部の整形はヨコナデで、胎土は灰色の緻密な土であり、不明な点の多い遺物である。6は龍泉窯青磁碗鎬蓮弁文碗。半透明の薄い草色の釉がやや厚く施釉される。

土坑38：C-4グリッドで検出した。土坑33・34・柱穴71に切られる。平面形は不明だが、不正円形であろう。確認出来た規模は(78)×(49)cmを測り、断面形はU字形を呈する。主軸方位は不明。出土遺物の図24-7はかわらけ小皿である。全体に摩滅が著しいが、内底面にナデが入り、胎土は砂の入るやや粗土である。8は器種不明だが、青磁皿か。内面の文様は凸状に草花文を施文する。外面は線描き蓮弁か。

柱穴(図27～28)

柱穴は69穴検出した。その内22穴は建物1・2である。それ以外の柱穴は建物としての配列の規則性はなかったが、調査区を広げてみれば、その可能性がないとは言えないだろう。以下出土遺物が図示しえたものに限り説明を加える。

柱穴41：A-1グリッドで検出した。平面形はほぼ円形で、規模は54×45cmを測る。断面形は逆台形であり、覆土は黒褐色粘質土で炭化物の多い締りのない土である。出土遺物の図27-1は褐釉の壺の胴部である。表面は二次焼成を受けているのか、荒れている。2は龍泉窯青磁鎬蓮弁文碗の底部で、高台から内側は露胎する。釉薬は深い草色で厚く施釉される。

柱穴45：A-1グリッドで検出した。平面形はほぼ円形で、規模は54×48cmを測る。断面形は箱型である。覆土は暗褐色粘質土で、4cm大の泥岩粒、かわらけ片、炭化物を含む粘性のある土である。出土遺物の図27-3はかわらけ小皿で、器壁厚く、胎土は砂を含む粗土である。4は常滑甕の口縁片である。6b形式か。6は白磁口元印花文皿である。内体部うっすらだが文様が見える。

柱穴48：B-2グリッドで検出した。平面形は円形で規模は56×55cmを測る。断面形は逆台形で、覆土は暗褐色粘質土で炭化物が多く、泥岩粒、かわらけ片を含む。出土遺物の図27-6はかわらけ大皿。成形は粗雑であり、器壁厚くやや内湾して立ちあがる。胎土は砂の多い粗土である。

柱穴50：A-3グリッドで検出した。かわらけ一括廃棄遺構である。供伴遺物が少ないので祭祀的な目的を伴うかわらけ埋納遺構の可能性も拭えないであろう。かわらけは破片数も合わせて17点であり、青磁片1片が出土している。残存率が良く、その内で図示しえたのはかわらけ大中小の7点である。内5点が小型のかわらけであることも注視すべきである。遺構の平面形はほぼ円形であり、規模は47×40cmを測る。断面形は箱型を呈する。覆土は暗褐色粘質土である。炭化物は多いが、含有物の少ない土層である。底部でかわらけが伏せた形で潰れて出土した。出土遺物の図27-7～11はかわらけ小皿である。7は器壁厚く体部は直線的に立ち上がる。内底面にナデ調整が残り、胎土は含有物の多い粗土である。8はやや内湾して立ちあがり口唇部すぼまる。内底面はナデ調整され、胎土は混合物の多い粗土である。9は体部中段に稜を持ち、内底面に強いナデが入る。胎土は砂、赤色粒を多く含む粗土である。10は器壁厚く体部中段に稜を持つ。胎土は混入物の多い粗土である。11は器壁厚くやや直線的に立ち上がり、胎土は混入物をやや多く含む粗土である。12はかわら

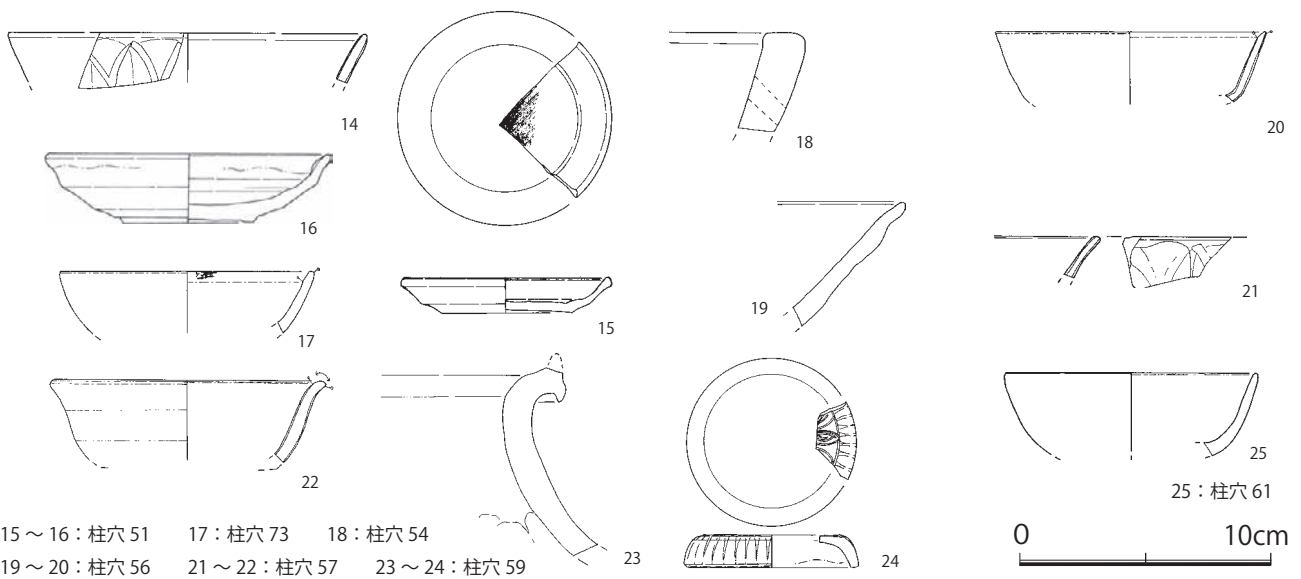
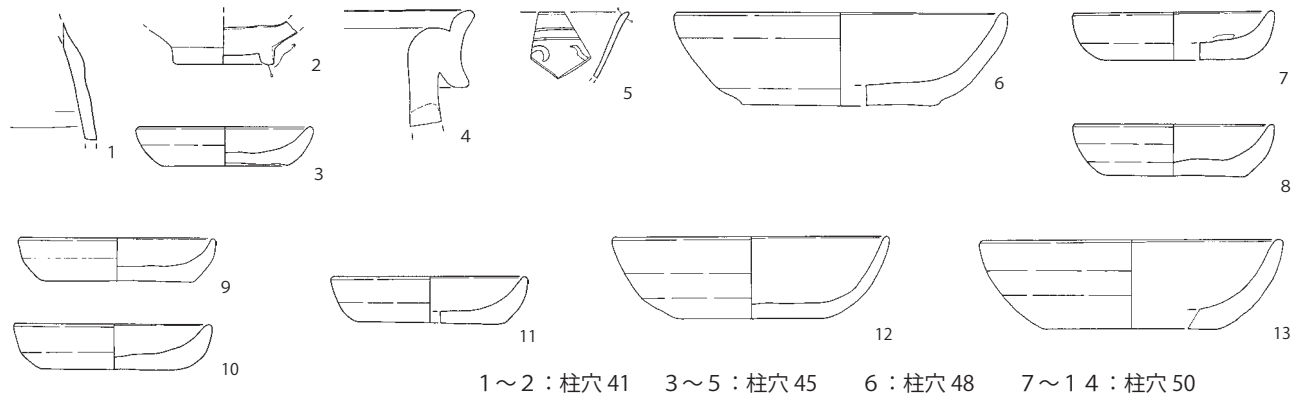
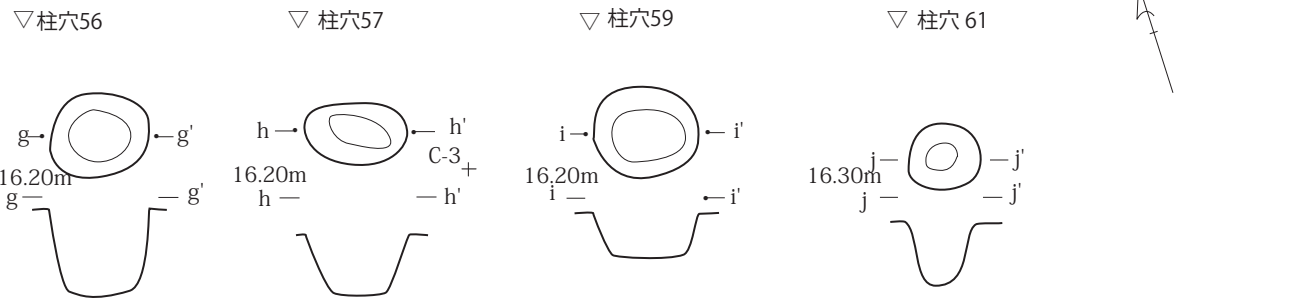
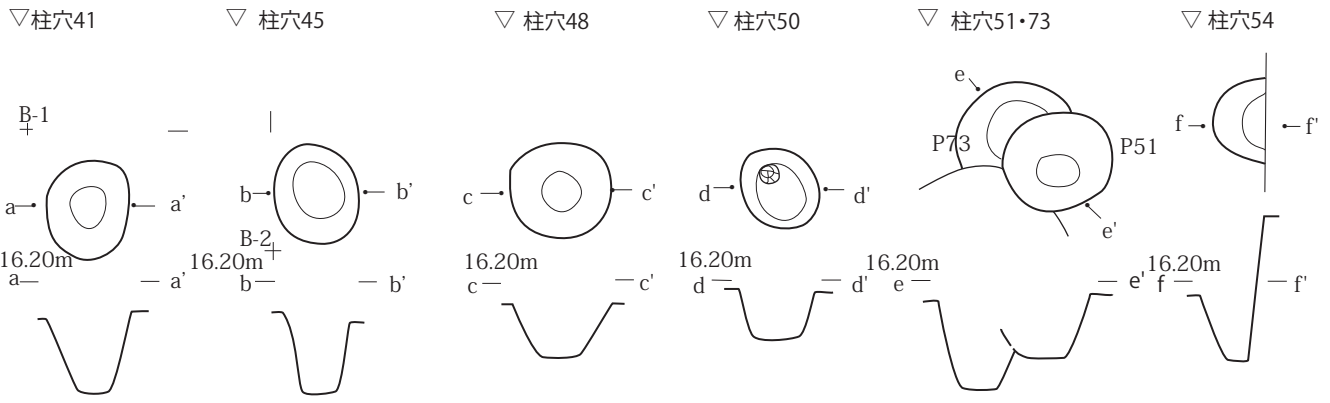
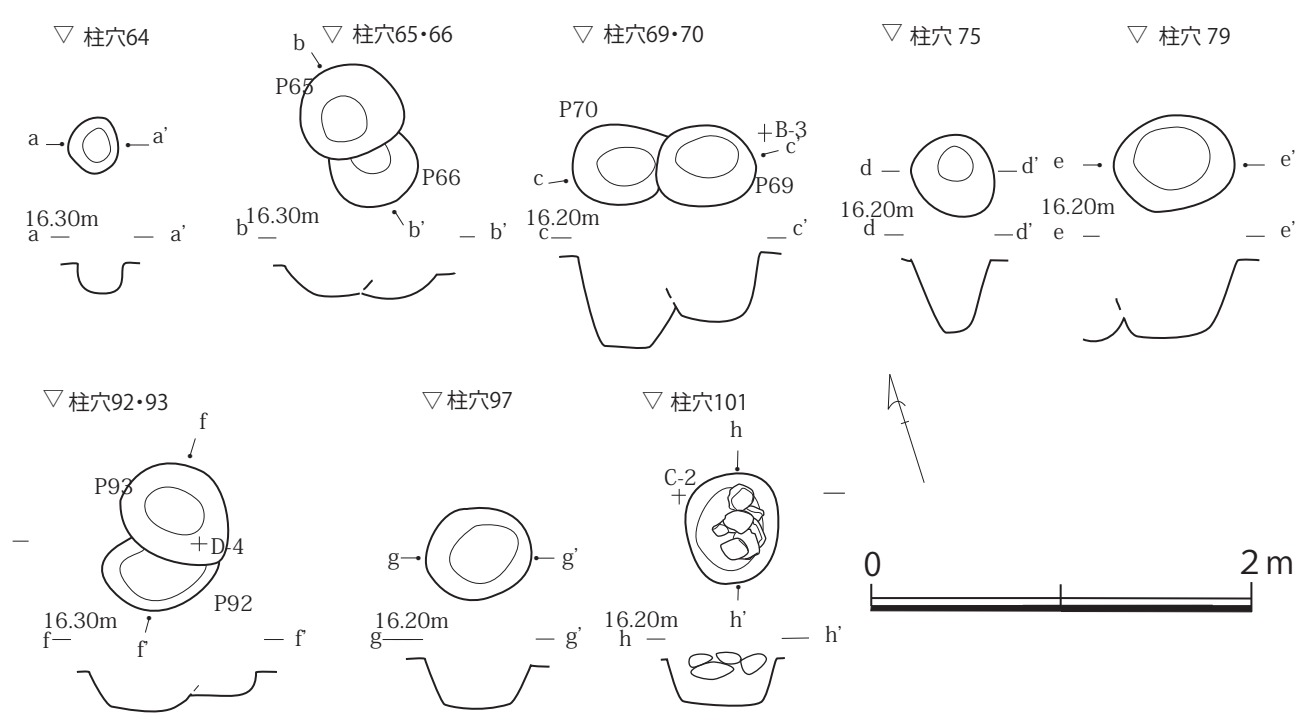


图27 第2面 柱穴(1)·出土遺物



1: 柱穴 64 2~7: 柱穴 66 8~10: 柱穴 70 11~13: 柱穴 71
 14: 柱穴 75 15~17: 柱穴 79 18: 柱穴 93 19: 柱穴 97

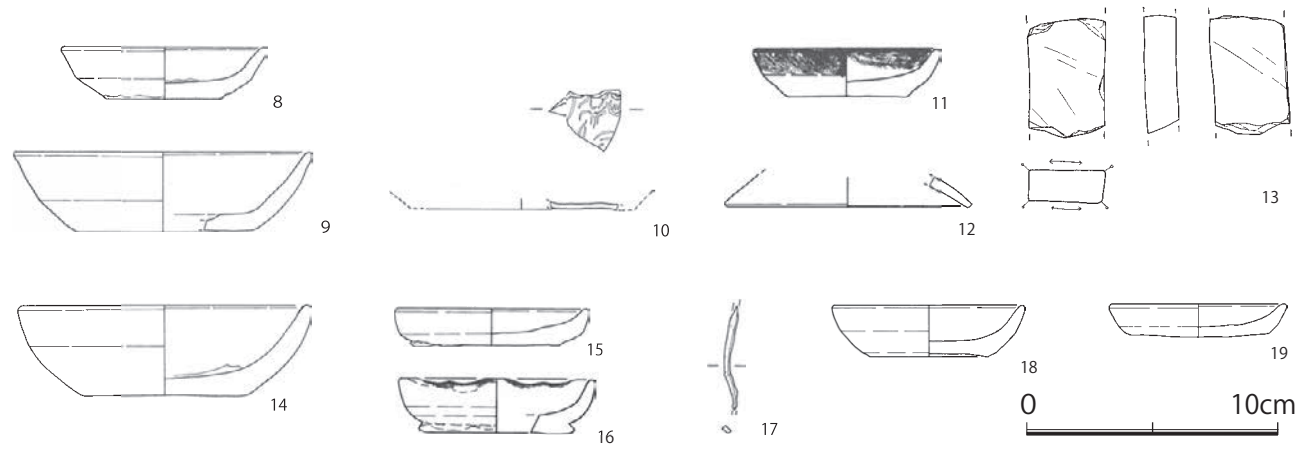


图28 第2面 柱穴(2)·出土遺物

け中皿で、遺構の底で潰れていたものである。成形は器壁薄く口縁部に強いヨコナデが一周するが全体に摩滅していてよくわからない。胎土は砂をやや多く含むやや粗土である。13はかわらけの大皿である。やや内湾して立ち上がり、胎土は含有物が多い粗土である。14は龍泉窯青磁鎚蓮弁文碗の口縁部の小片である。青みがかかった草色の釉が厚く施釉される。

柱穴51：A-3グリッドで検出した。土坑30・柱穴73を切る。平面形は円形で規模は58×52cmを測る。断面形は逆台形か。覆土は炭化物を多く含む暗褐色粘質土である。切り合いや出土遺物等から第1面の遺構の掘り残しの可能性も否めない。出土遺物の図27-15は東濃型山皿である。底部は糸切りされ体部は中段に強い稜を持つ。内底面はナデ調整され紅が残る。16は緑釉小皿か。口縁部はヨコナデされ透明な緑色釉が厚くかかる。底部は糸切りで高台はやや雑に削り出しされ体部は二段の回転ヘラ削りである。

柱穴54：A-1グリッドで検出された。東側を調査区壁に切られる。平面形はおそらく円形で確認出来た規模は56×(26)cmである。断面形もおそらく逆台形である。覆土は暗褐色粘質土で3cm大の泥岩、かわらけ片、炭化物を含む粘性のある土である。出土遺物の図27-18は火鉢の口縁部、I B類である。体部はヘラ削りされ、穿孔がある。

柱穴56：A-2グリッドで検出した。平面形は不正円形で規模は54×44cmを測る。断面形は箱型を呈する。覆土は暗褐色粘質土で炭化物多く、かわらけ片、泥岩粒も見られる。出土遺物の図27-19は尾張型の山茶碗の7形式。体部から口縁部にかけてロクロ目がややきつく、すぼまっていき口縁部は強いヨコナデが入る。20は白磁の口元皿である。釉が厚く施釉され、体部下方に釉溜りしている。

柱穴57：C-2グリッドで検出した。柱穴88(建物1)を切る。平面形は楕円形で規模は55×35cmを測る。断面形は逆台形である。覆土は暗褐色粘質土で泥岩粒、かわらけ片、炭化物を含む粘性のある土である。出土遺物の図27-21は龍泉窯青磁鎚蓮弁文碗の口縁片である。深い草色の釉が厚く施釉される。22は白磁の口元皿である。白色の釉がやや厚めに施釉される。

柱穴59：B・C-3グリッドで検出した。土坑20を切る。平面形はほぼ円形で規模は58×50cmを測る。断面形は箱型を呈する。覆土は暗茶褐色粘質土で3～4cmの泥岩やかわらけ片、炭化物の入る粘性のある土である。出土遺物の図27-23は常滑甕の口縁部片で、縁帯の上部が欠損している。土坑34と接合関係にある。6a形式か。24は瀬戸の合子の蓋である。口縁部は露胎し、天井部、側面は施文される。やや青味がかかった緑色の透明釉である。

柱穴61：C-3グリッドで検出した。平面形はほぼ円形で規模は37×35cmを測る。断面形はU字形を呈する。覆土は茶褐色粘質土で明るい土である。5～8cmの泥岩、かわらけ片、炭化物を含む。出土遺物の図27-25は瀬戸の入れ子である。胎土はきめ細かく、色調は黄色から淡い燈色で、調整はヨコナデである。

柱穴64：C-4グリッドで検出した。平面形は不正円形で規模は30×26cmを測る。断面形はU字形を呈する。覆土は炭化物の多い暗褐色粘質土である。出土遺物の図28-1は平瓦である。表裏面とも黒色微砂による離れ砂が顕著であり、永福寺Ⅲ期に類似する。

柱穴66：D-4グリッドで検出した。かわらけ一括廃棄遺構である。供伴遺物がないので祭祀的な目的を伴う、かわらけ埋納遺構の可能性も拭えない。かわらけは破片数も合せて27点出土している。残存率が良くその内図示しえたのはかわらけ大小の6点である。遺構は柱穴65に切られる。平面形は不正円形で規模は57×(30)cmを測る。断面形は皿状を呈する。覆土は炭化物の多い暗褐色粘質土である。出土遺物の図28-2～7はかわらけである。2はかわらけ小皿で、内底面に強いナデが入り体部中段に稜が入る。胎土は砂の多い粗土である。3もかわらけ小皿で、内底面にナデが入り、直線的に立ち器壁は厚い。胎土は砂、赤色粒の入る粗土である。4はかわらけ大皿で、直線的に立ち上がり胎土は砂を多く含む粗土である。5はかわらけ大皿で、

表4 第2面遺構観察表

遺構番号	グリッド	長径	短径	深度	底標高	覆土/備考
P41	A-1	54	45	41.9	15.627	黒褐色
P43	B-1・2	52	45	24	15.841	暗褐色D
P44	B-2	70	53	28.8	15.78	暗褐色C
P45	A-1	54	48	41	15.62	暗褐色C
P46	B-1	48	30	30	15.747	暗褐色C
P47	A-2	53	50	44.7	15.745	暗褐色C
P48	B-2	56	55	28	15.835	暗褐色D
P49	B-2	70	45	39.5	15.722	
P50	A-3	47	40	23	15.91	暗褐色D
P51	A-3	58	52	35	15.79	暗褐色D/P73・P30を切る。P73と接合
P52	A-1	56	(26)	33.7	15.717	暗褐色C
P53	A-2	(57)	(47)	34.5	15.785	茶褐色
P54	A-2	46	(27)	34.5	15.78	暗褐色D
P55	A-2	45	43	18.1	15.954	暗褐色C
P56	A-2	54	44	43	15.71	暗褐色D
P57	C-2	55	35	32.7	15.717	暗褐色C
P58	C-2	48	48	22	15.875	茶褐色
P59	B・C-3	58	50	23	15.905	暗褐色C/D20を切る/D34と接合
P60	D-5	(32)	(27)	17.5	15.945	茶褐色
P61	C-3	37	35	40.5	15.665	茶褐色
P62	D-1	58	55	38.6	15.633	暗褐色C
P63	C-1	62	56	38.4	15.659	暗褐色C
P64	C-4	30	26	13.5	16.027	暗褐色D/D28と接合
P65	D-4	55	52	34	15.785	暗褐色C/P66を切る
P66	D-4	57	(30)	31	15.785	暗褐色D
P67	A-1	(54)	(41)	26.4	15.765	暗褐色C/P68を切る
P68	A-1	(60)	(37)	40.4	15.65	茶褐色
P69	B-3	54	45	33	15.73	暗褐色C
P70	B-3	45	(45)	34.5	15.74	暗褐色D
P71	C-3	55	50	32.5	15.795	暗褐色D/D38を切る
P72	A-3	50	43	39.5	15.726	暗褐色C
P73	A・B-3	68	(38)	32.7	15.79	暗褐色D/P51と接合
P74	D-2	49	37	37.7	16.656	暗褐色C
P75	D-2	48	40	36.4	15.694	暗褐色D/P108を切る
P76	D-1	51	(45)	33.2	15.67	暗褐色C/P84を切る
P77	C-1	69	(35)	36.3	15.66	D36と接合
P78	C-5	36	36	23.5	15.88	暗褐色C
P79	B-2	65	54	36.9	15.698	暗褐色D/P91を切る
P81	B-3	67	48	33.7	15.78	茶褐色/D30と接合
P82	B-1	60	(47)	29.9	15.752	茶褐色
P83	C-1	39	36	37.9	15.632	暗褐色D
P84	D-1	54	(45)	22.2	15.791	茶褐色
P85	C-1	55	(34)	26.3	15.77	茶褐色
P86	C-4・5	33	(28)	20.5	15.945	
P87	A-2	50	(36)	24.2	15.865	暗褐色C/P53を切る
P88	C-3	(54)	(48)	33.3	15.686	暗褐色C/P89を切る
P89	C-3	(61)	(42)	39.4	15.68	茶褐色
P90	C-2	(68)	54	39	15.628	暗褐色C/P91・D37を切る
P91	C-2	56	(47)	36.6	15.652	暗褐色C
P92	D-4	46	(35)	12.8	16.026	暗褐色C
P93	C・D-3	62	49	13.6	15.948	P92を切る

遺構番号	グリッド	長径	短径	深度	底標高	覆土/備考
P94	D-5	74	56	34.8	15.717	暗褐色D/D28を切る
P95	A-3	(40)	(37)	39.9	15.73	茶褐色
P96	A-3	75	(30)	30.9	15.83	暗褐色C/P95を切る
P97	B-3	56	49	24.1	15.86	
P98	D-3	57	53	24.2	15.803	暗褐色C/D23・D27・P114を切る
P99	D-4	37	34	21.8	15.936	暗茶
P100	D-4	40	37	23.3	15.91	
P101	B-2	61	48	17.1	15.876	P90を切る
P107	D-3	(90)	(19)	8.5	15.989	
P108	D-2・3	54.1	(42)	16.5	15.91	茶褐色/P107を切る
P109	C-1	40	35	23.3	15.783	暗褐色C/P85を切る
P110	C-1	55	(39)	25.9	15.756	暗褐色C/P85を切る
P111	B-1	42	(22)	19.7	15.816	暗褐色C
P112	C-3	65	(57)	14.3	15.907	暗褐色C/P88・P89を切る
P113	B-2	48	(40)	32.9	15.762	茶褐色
P114	D-3	69	(54)	34.2	15.695	茶褐色
D17	A-1	150	80	24.7	15.793	暗褐色D/D31と接合
D18	A-2	96	57	19.5	15.925	暗褐色C/P49を切る
D19	B-2・3	98	(80)	22.4	15.824	暗褐色C/P88・P89を切る
D20	C-3	96	90	28.5	15.765	暗褐色D/P89を切る
D21	C-4	53	(40)	11	16.060	暗褐色D
D22	C-4	(60)	(30)	10	16.070	暗褐色D/P86を切る
D23	D-3	(118)	60	17.2	15.865	茶褐色
D24	D-2	67	(39)	23.5	15.8	暗茶
D25	B-1	71	50	11	15.95	茶褐色
D26	C-1	119	(80)	22.9	15.778	茶褐色
D27	C・D-2・3	149	83	22	15.835	暗褐色D
D28	D-4・5	(146)	110	14.7	15.988	茶褐色/P64と接合
D29	B-4	61	48	11.5	15.97	茶褐色/D30を切る
D30	B-3	214	108	32.5	15.785	明茶/D33・D34・P73を切る/D35・P81と接合
D31	B-1	70	56	19.6	15.884	暗褐色D/D17と接合
D33	B-4	94	(50)	11.5	15.95	暗褐色D/D34・D38を切る
D34	B-4	(46)	(39)	28.5	15.825	暗褐色D/D38を切る/P59と接合
D35	A-3	117	(100)	32	15.89	明茶/D30と接合
D36	B・C-1	76	61	15.2	15.894	茶褐色/P77と接合
D37	C-1	(50)	(35)	11	15.866	暗褐色D
D38	C-4	(78)	(49)	29	15.838	暗褐色D

(単位：海拔m/以外cm)

P:ピット D:土坑

遺構覆土詳細

- 暗褐色C：暗褐色粘質土、3～4cm大の泥岩かわらけ、炭化物含む。粘性あり。
- 暗褐色D：暗褐色粘質土、炭化物多く、4cm前後の泥岩、かわらけ片含む。(含有物少ない)
- 茶褐色：茶褐色粘質土、(明るい土)5～8cm大の泥岩、かわらけ片、炭化物含む。
- 暗茶：暗茶褐色粘質土、拳大の泥岩、かわらけ片炭化物少量含む。
- 明茶：明茶褐色粘質土、伊豆石を主体とし、3cm大の泥岩、明茶褐色粘質土を混入。縮りややあり。
- 黒褐色：黒褐色粘質土、炭化物多い、縮りなし。

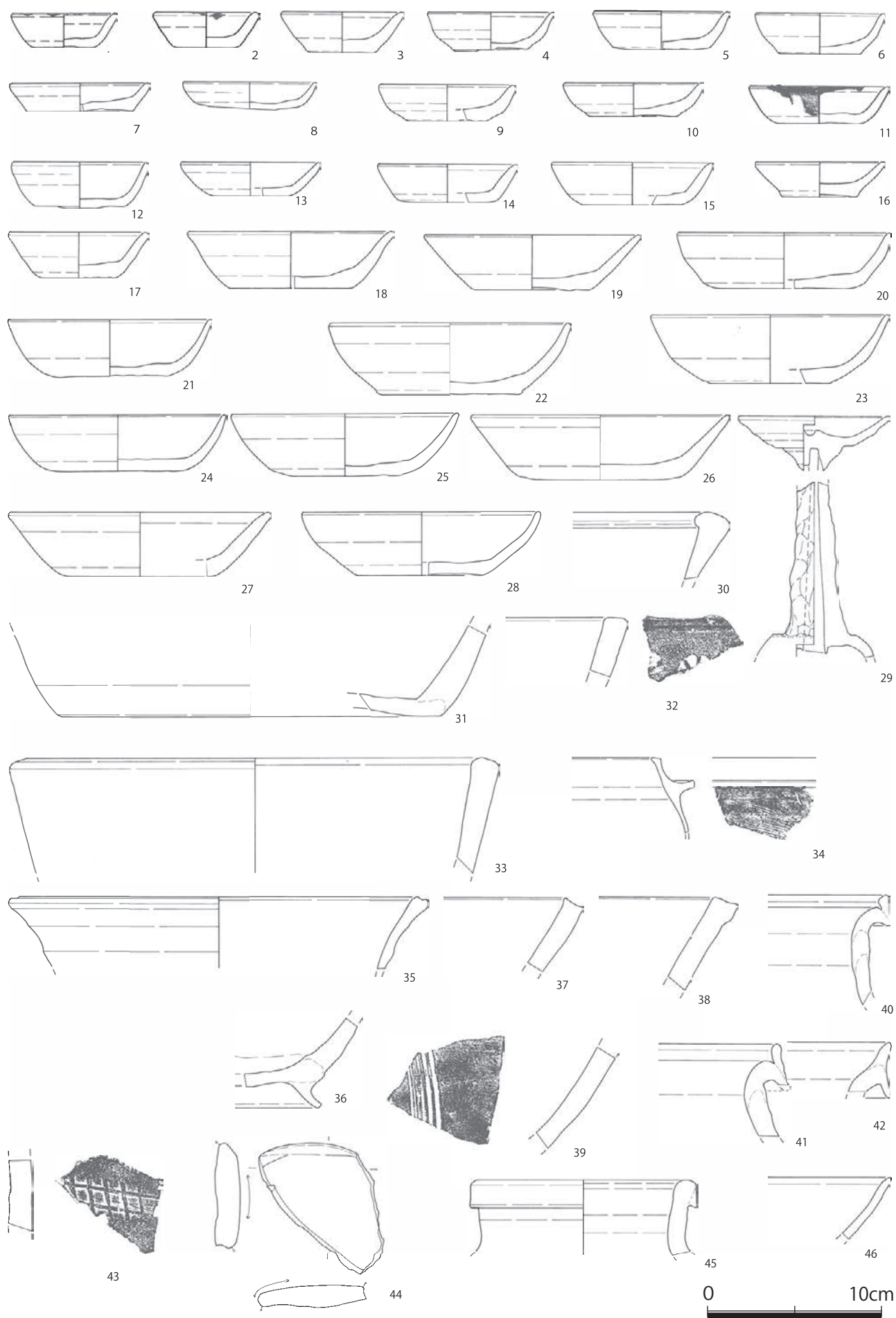


图29 第2面 1面下2面上出土遺物(1)

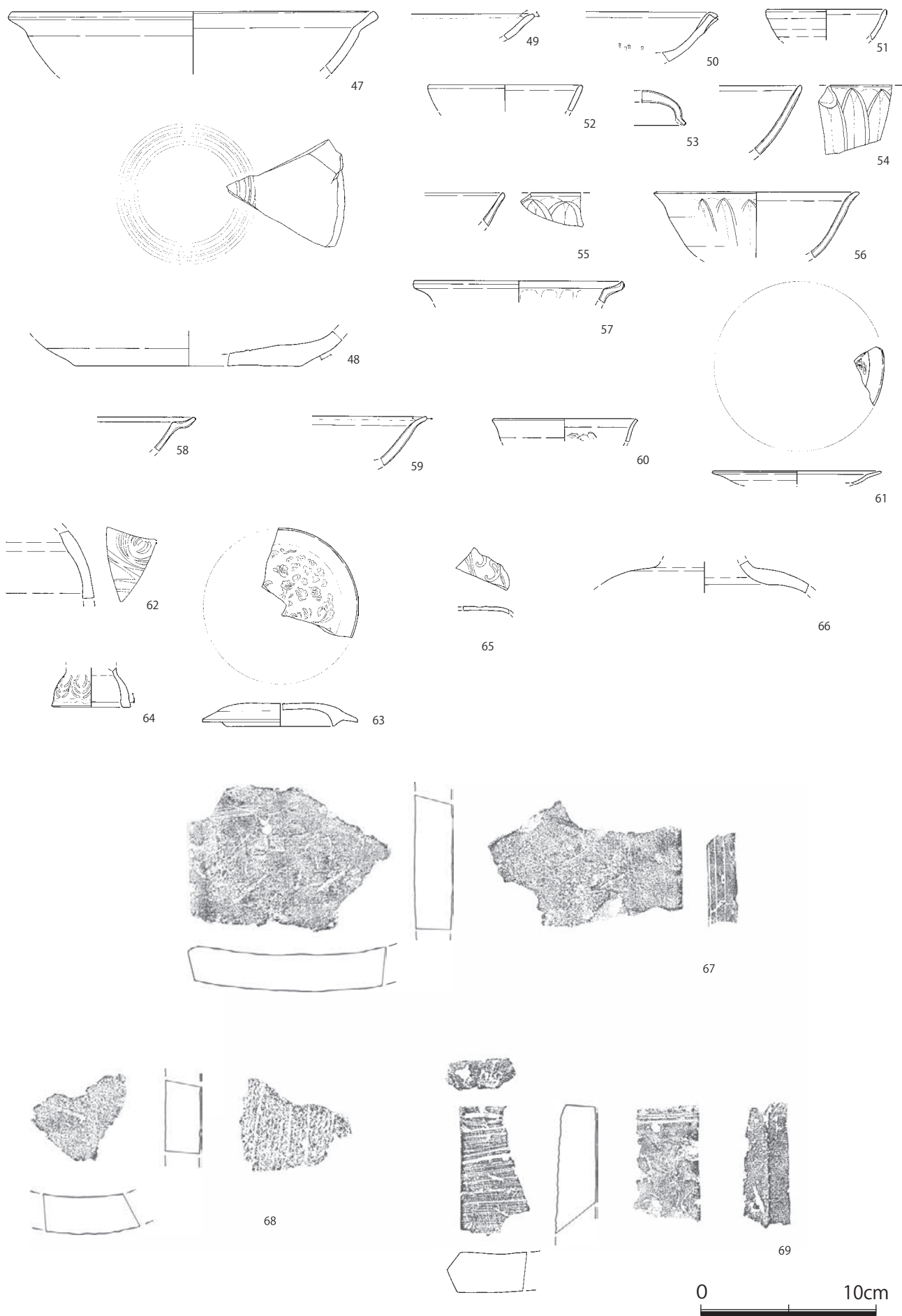


图30 第2面 1面下2面上出土遺物(2)

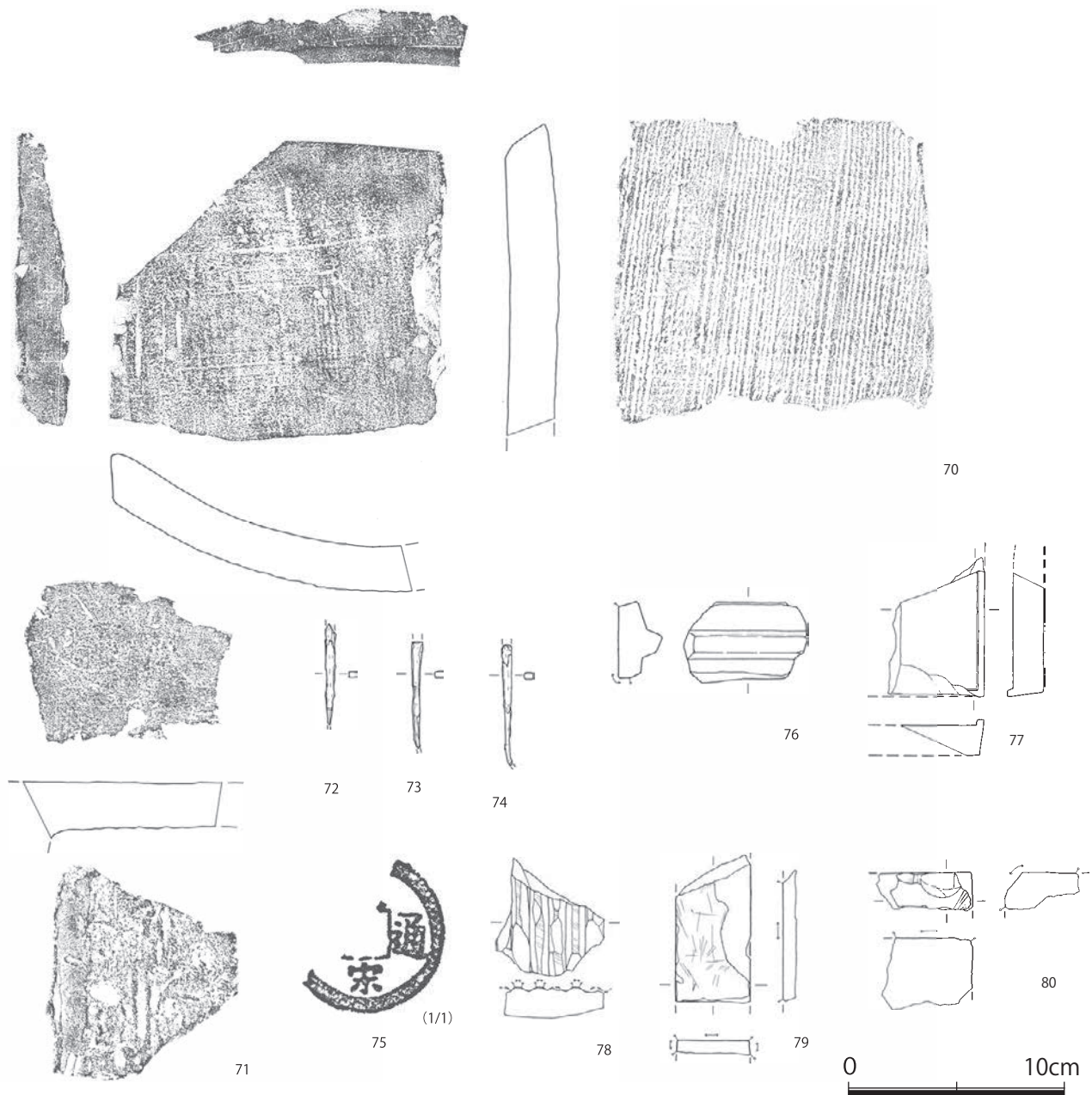


図31 第2面 1面下2面上出土遺物(3)

口縁に油煙煤が付着するため灯明皿として使用したものであろう。内底面は強いナデ調整で、胎土は砂を多く含む粗土である。6はかわらけ大皿で、内底面強いナデが入る。胎土は混入物の多い粗土である。7はかわらけ大皿で、内底面強いナデが入り歪む。薄手だが砂、赤色粒の多く入るやや粗土である。

柱穴70：B-3グリッドで検出した。柱穴69(建物1)に切られる。平面形は不正円形で規模は45×(45)cmを測る。断面形は逆台形を呈する。覆土は炭化物を多く含む暗褐色粘質土である。出土遺物の図28-8はかわらけ小皿である。内底面に強いナデが入る。胎土は砂を多く含むやや粗土である。9はかわらけ大皿である。全体に摩滅が著しいが、内底面にナデが入る。胎土はやや砂の入ったやや粗土である。10は白磁の口元印花文皿の底部である。内底面に印花が施文され、器形は中央が盛り上がる。釉薬は薄い。

柱穴71：C-3グリッドで検出された。土坑38を切る。平面形は不正円形で規模は55×50cmを測る。断面形は逆台形を呈する。覆土は暗褐色粘質土で炭化物多く、泥岩粒、かわらけ片を少量含む。出土遺物の図28-11はかわらけ小皿である。口縁に油煙煤を付着させているので、灯明皿であろう。内底面は摩滅し調整が不明である。胎土は砂を多く含む粗土である。12は白かわらけ、蓋か。やや赤味を帯びた乳白色で砂を少量

含有し、内外面ヨコナデ調整である。13は砥石である。伊予産の中砥で両面使用痕がある。

柱穴73：A・B - 3グリッドで検出。土坑30・柱穴51に切られる。平面形はほぼ円形で規模は68×(38)cmを測る。断面形は逆台形か。覆土は暗褐色粘質土で含有物は少ないが炭化物の多い土である。出土遺物の図27 - 17は白磁の口元碗である。灰白色の釉が薄く施釉される。柱穴51と接合関係にある。

柱穴75：D - 2グリッドで検出した。柱穴108を切る。平面形は不正円形、規模は48×40cmを測る。断面形はU字形を呈する。覆土は含有物は少ないが炭化物は多い暗褐色粘質土である。出土遺物の図28 - 14はかわらけ大皿。内底面にナデ調整入り、胎土は砂を多く含む粗土である。

柱穴79：B - 2グリッドで検出した。柱穴91(建物2)を切る。平面形は楕円形、規模は65×54cmを測る。断面形はU字形か。覆土は炭化物の多い暗褐色粘質土である。出土遺物の図28 - 15はかわらけ小皿である。成形が粗雑で内底面にナデ調整が残り、胎土は砂を多く含む粗土である。16はかわらけ小皿である。口縁の一部が摩耗し油煙煤が付着しているので灯明皿であろう。成形は粗雑であり、胎土は砂を多く含む粗土である。17は鉄釘。

柱穴93：C・D - 3グリッドで検出した。柱穴92を切る。平面形は不正円形で規模は62×49cmを測る。断面形は皿状を呈する。出土遺物の図28 - 18はかわらけ小皿である。器壁は厚く、内底面ナデている。胎土は混入物の多い粗土である。

柱穴97：B - 3グリッドで検出した。平面形は不正円形で規模は56×49cmを測る。断面形は箱型を呈する。出土遺物の図28 - 19はかわらけ小皿である。器高低く内底面に強いナデが残る。胎土は砂、赤色粒、砂が多く入る粗土である。

柱穴101：B - 2グリッドで検出した。平面形は不正円形、規模は61×48cmである。断面形は箱型を呈する。覆土上層に30cm前後の泥岩を10個弱包含する。

第2面 1面下2面上出土遺物(図29・30・31)

層序の第2層、第1面構築土と遺構検出面の第3層の上面である第2面上の精査時に出土した遺物を収めた。

1～17はかわらけ小皿である。1は器高が高く、口唇部に油煙煤が付着する、灯明皿であろう。成形はやや粗雑である。胎土は砂を若干含むやや粗土である。2は口唇部に油煙煤が付着する、灯明皿だろう。器高が高く内底面にナデ調整が見られる。胎土は含有物の少ないやや良土である。3は器高が高く口縁が開き全体に摩滅している。胎土は含有物の多い粗土である。4は口縁部が外反し内底面に雑なナデを残す。胎土は砂の多いやや粗土である。5は口縁部に強いヨコナデが入り、体部はやや外反し内底面の中央にナデが残るが全体に摩滅しわかりづらい。胎土は砂を多く含む粗土である。6は体部中段に稜を持ち内底面中央にナデが見られる。胎土は砂を多く含む粗土である。7は口径大きく開き、器高が低く、直線的に立ち上がり内底面中央に強めのナデが見られる。胎土は砂を含むやや粗土である。8は成形が粗雑でやや歪みがあり、焼成にもむらがある。内底面に雑にナデが入る。胎土は砂、赤色粒を含む粗土である。9は器壁が厚く体部中段やや下位に稜を持ち内底面にナデが見られる。胎土は砂を多く含むやや粗土である。10は成形が粗雑で内底面中央に雑な強いナデが見られる。胎土は砂、赤色粒が見られるやや粗土である。11は口縁部に油煙煤が見られる。灯明皿であろう。全体に摩滅するが内底面にナデは見られる。12は器高が高く口径底径比があまりない。内底面の中央にナデが見られる。胎土は砂をやや含むやや粗土である。13は口径が開くが全体に摩滅が著しく調整不明である。14は器壁厚く直線的に立ちあがり、内底面の中央にナデが見られる。胎土は砂と赤色粒の見られる粗土である。15は器高が高く器壁の厚い、やや粗雑なつくりである。胎土は砂を含むやや粗土である。16は口縁が開き内底面の中央にナデが見られる。胎土は砂を多く含む粗土である。17は器壁が厚く器高が高い。内底面にナデ

が見られ、胎土は含有物の多い粗土である。18から28はかわらけ大皿である。18は口縁部が外反し内底面ナデが見られる。胎土は混入物の多い粗土である。19は体部が直線的に立ち上がり内底面にナデが見られる。胎土は砂、赤色粒の入ったやや粗土である。20は器壁厚く体部の中段に稜が入り、内底面にナデが見られる。胎土は砂を含む粗土である。21は大皿である。内底面に強いナデが入るためでこぼこしている。器壁は薄いが砂を多く含む粗土である。22は全体に鉄分が付着し調整、胎土は不明である。23は体部の中段に稜が入る。胎土は粉っぽく砂が少量入るやや良土である。24は全体に摩滅しているが内底面にナデが見られる。胎土は砂、赤色粒の入るやや粗土である。25は内底面のナデにより底部がでこぼしている。胎土は砂を多く含むやや粗土である。26は口縁が開き、内底面にナデが見られる。胎土はやや粉っぽく砂を含むやや良土である。27は口縁が開き、やや粗雑な作りで、胎土は砂を含むやや粗土である。28は口縁部内湾し、内底面はナデが見られる。胎土は砂の入るやや良土である。29は白かわらけ質の高坏である。脚部と坏は接合は出来なかったが出土地点も近く胎土が同じなので同一のものともみなした。出土地点は白かわらけの蓋が複数出土したかわらけ溜りのC-2グリッド付近であり、かわらけ溜りとの関係も注視したい。また、29の坏を凸部がありながら蓋としなかったのは、凸部の形態のちがいと内底面中央の貫通しない直径5mm程の穴による。坏部から説明を加える。体部はヨコナデされている。凸部は貫通しない直径5mmの穴があく。凸部は貼り付けられ、接合面は強いナデが巡る。胎土は砂を含有する乳白色である。脚部は指頭と縦位のナデにより成形される。脚部と台部の接合部分の成形に際してへら状工具を使用し痕跡を残す。台部分はやや内湾するが底部は欠損して不明である。脚部の中央は穿孔されるが、下方は直径1.4cmであり、上部は0.4mmとすぼまる。胎土は坏と同様、砂を含む乳白色である。30は火鉢のI C類である。口縁内側は突起状に膨らみ巡る。外体部に強い指頭痕がある。31は火鉢の底部、I B類で、底部は砂底である。32は火鉢のIII類である。黒色処理され花文のスタンプが押印される。33は火鉢のIII類。残存状態が悪いが黒色処理されている。34は伊勢系の鏝鍋。体部はササラ状工具で搔き削られている。35は尾張型I類の片口鉢。口唇部に沈線が巡る。36は常滑I類の片口鉢の底部である。内底面摩耗し、外体部の貼り付け高台の上はへら削りされる。胎土は白色粒、小石粒含む燈色の胎土で、それだけ見るとII類に見える。37、38は常滑片口鉢のII類である。8もしくは9形式である。37は褐色をなし、38は燈色である。39は備前のすり鉢であり、1条の卸目は6本で構成されている。40は常滑の甕の口縁部である。5形式と古い。41は常滑の甕の口縁部である。縁帯の下部を欠損している。42は常滑の甕口縁である。7形式であろう。43は常滑甕の肩部であり、格子の押印がある。44は摩耗陶片である。常滑甕の胴部片の表面がくまなく摩耗している。45は瀬戸の壺である。釉薬は剥離してしまっているが僅かに残るものから鉄釉であろうか。胎土は硬質である。46は瀬戸の平碗である。緑灰色の半透明釉を施釉している。47は瀬戸の折縁皿の口縁部である。二次焼成を受け表面が荒れている。48は折縁皿底部である。内底面に4条の同心円が刻まれる。底部はへら削りされ露胎する。49は瀬戸の緑釉皿の口縁片である。口縁部は緑色の透明釉で施釉される。50は瀬戸の片口卸皿である。卸目が刻まれ緑釉の薄い透明釉が施釉されている。51は瀬戸の入れ子の破片であり、内面降灰釉がかかる。52も瀬戸の入れ子の破片である。口縁部に降灰釉がかかる。53は龍泉窯青磁蓋である。深い草色の釉が厚くかかる。54は龍泉窯青磁鎗蓮弁文碗、単弁である。明るい半透明の草色の釉が厚く施釉される。55は龍泉窯青磁鎗蓮弁文碗である。半透明の草色の釉が厚く施釉されている。56は龍泉窯青磁鎗米色蓮弁文碗である。釉薬が茶褐色の米色青磁であり、口縁は外反し釉薬は透明で厚く、貫入が細かく入る。57は龍泉窯青磁折縁皿である。内体部に蓮弁文が配される。釉は半透明の草色で厚く施釉される。58は龍泉窯青磁折縁皿の口縁部である。明るい草色の釉が厚く施釉される。59は白磁の口兀碗である。やや青味がかかった釉が薄く施釉される。60は白磁の口兀印花文碗である。口唇部はすっと切られ断面が四角い。内体部にわずかに印花が見える。61も白磁の印花文皿である。白色の透明釉が施釉され、内体部に印花が施文される。62は青白磁の梅瓶の胴部片である。

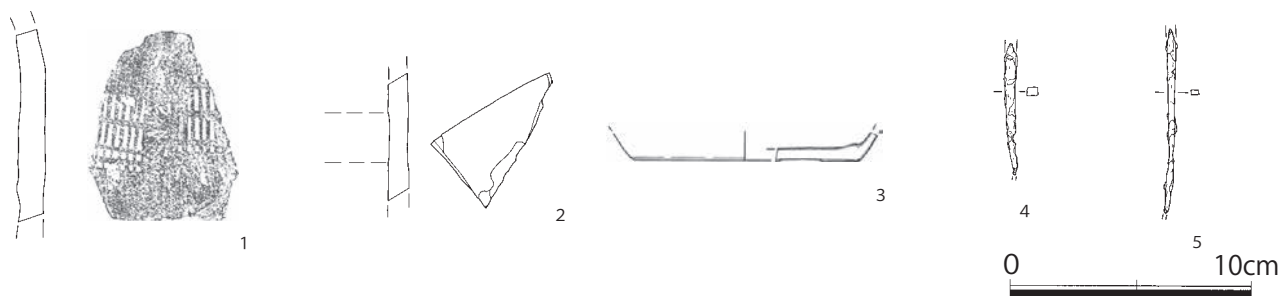


図32 第2面下深掘り坑出土遺物

水色の透明釉で、貫入が入る。63は青白磁の壺の蓋。口唇部から内側露胎する。淡い水色の透明釉がやや厚く施釉される。文様を型捺しによって作り出している。64は青白磁の香炉もしくは仏華瓶の脚部か。脚部下から内側にかけて露胎する。文様は型捺しにより作り出す。淡い青色の透明釉が施釉される。65は白磁である。合子の蓋天井部であろう。文様は型捺しされてた草花文である。釉薬はやや青味がかかった白色の透明釉で内外面施釉される。66は褐釉の壺の頸部である。黒褐釉かも知れない。二次焼成を受け器表が荒れる。67は平瓦。表裏面とも離れ砂後ナデてあり、永福寺Ⅱ期C類と同類である。68は平瓦。表面は離れ砂後ナデてあり、裏面は縄目の叩き目がある。八幡宮D類と同類である。69は平瓦。表面は糸切り痕が顕著で、裏面は叩き目が見えず指頭痕があり、側面は三角形にヘラ削りされている。永福寺Ⅰ期と同類か。70は平瓦である。表面は離れ砂、糸切り痕、ナデが見られ、裏面は縄目の叩き目である。永福寺Ⅰ期A類と同類と見られる。71は軒平瓦。表面は、黒色微砂の離れ砂であり、叩き目の転写が見られる。裏面は叩き目があり、二条線に丸に菱形文か。永福寺Ⅱ期軒平瓦と同類と見られる。72から74は鉄釘である。75は北宋銭で、残存率が悪く読み取れるのは、□宋通□であり、真書である。書体で当てはまるものは皇宋通寶で、初鑄年は1038年である。外径2.5cm、内径2.0cmを測る。76は滑石鍋の加工品である。スタンプを作る途中過程のものか。鏝の裏面は平坦に擦られている。77は方硯の陸部分である。黒色粘板岩であり、鳴滝産若王子石である。裏面は剥離している。成形方法から赤間手である。78は石臼の搗り面である。使用面以外は剥離する。79は砥石である。鳴滝産の仕上砥で、裏面は剥離している。80は砥石である。残存率が悪いが、天草産の中砥である。

3. 第2面下深掘り坑出土遺物（図32 - 1～5）

調査区の南端部で土層の観察のため、現地表下80cmまで、L字型に東西2.5m×0.5m、南北1.5m×0.5mの深掘り坑を設け掘削した。出土遺物の以下図示しえたものの説明を加える。

1は常滑の甕肩部片であり、格子の押印が見られる。2は褐釉の壺の胴部片である。3は白磁の口元皿底部である。釉は乳白色でやや厚く、底部はぬぐわれている。4、5は鉄釘である。

写真のみの掲載遺物（図版18）

今回の調査では釘の出土が目立った。その数79本である。2面上、土坑30から目立って出土している。軽石は井戸1の掘り方からの出土である。1側面を平らに擦った痕跡がある。

鉄率は2面上からの出土である。トリベ状のかわらけの出土は3例あり、注視したい。

炭化物は土坑29からのまとまった出土である。

表5 遺物観察表(1)

()は復元値

挿図番号	出土面・遺構	種別	口径	底径	器高	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
			(cm)	(cm)	(cm)	
8-1	第1面 井戸1	かわらけ皿 小型	(6.3)	(4.4)	2.0	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 雲母 泥岩粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
8-2	〃	かわらけ皿 小型	(7.8)	(4.6)	2.3	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 小石粒 雲母 泥岩粒 やや粗土 c.暗黄灰色 e.やや甘い
8-3	〃	かわらけ皿 中型	(10.2)	(5.6)	2.2	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 雲母 泥岩粒 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面ナデあり
8-4	〃	かわらけ皿 中型	(10.6)	(5.6)	2.9	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 雲母 泥岩粒 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面ナデあり
8-5	〃	かわらけ皿 大型	(11.6)	(6.6)	3.9	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 雲母 泥岩粒 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面ナデあり
8-6	第1面 井戸1裏込め	かわらけ皿 大型	(11.4)	6.2	3.5	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 雲母 泥岩粒 小石粒 粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面ナデあり
8-7	第1面 井戸1裏込め	瀬戸 折縁皿	7.3	4.0	1.9	b.良土 c.橙灰白色 e.良好 f.緑灰釉 透明
9-1	第1面 かわらけ溜り	かわらけ皿 小型	(7.6)	(4.7)	1.9	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
9-2	〃	かわらけ皿 大型	(14.9)	(9.6)	3.9	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
9-3	〃	かわらけ皿 大型	(11.5)	(8.0)	3.6	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
9-4	〃	かわらけ皿 大型	(13.1)	(7.4)	3.5	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
9-5	〃	かわらけ皿 大型	(13.4)	(8.8)	3.7	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
9-6	〃	かわらけ皿 大型	(13.0)	(8.0)	3.8	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
9-7	〃	かわらけ皿 大型	(12.9)	(8.0)	4.3	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
9-8	〃	かわらけ皿 大型	13.0	7.7	3.8	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
9-9	〃	かわらけ皿 大型	(13.4)	(8.8)	3.7	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
9-10	〃	かわらけ皿 大型	(12.9)	(8.0)	4.3	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
9-11	〃	火鉢	—	—	—	a.ナデ b.微砂 長石 c.灰色 e.良好 f.IV類
9-12	〃	香炉	(9.6)	—	—	b.微砂 c.黒色 e.良好 f.黒色処理、沈線間に小型菊花文スタンプ、連珠貼り付け文
9-13	〃	軒丸瓦	幅4.8 高さ3.7 厚さ(1.5)		—	b.黒色微砂 小石粒 c.灰白色 e.やや甘い f.右廻三巴文
9-14	〃	鉄製品 毛抜き	左・長さ4.4 幅0.7 厚さ0.1 右・長さ4.9 幅0.7 厚さ0.1		—	f.頂部欠損
9-15	〃	鉄製品 釘	残存長(6.6)×厚さ0.4		—	a.鍛造 断面四角形 頂部と先端部欠失
9-16	〃	〃	残存長(6.1)×厚さ0.5		—	a.鍛造 断面四角形 頂部と先端部欠失
9-17	〃	〃	残存長(5.1)×厚さ0.5		—	a.鍛造 断面四角形 頂部と先端部欠失
9-18	〃	〃	残存長(3.0)×厚さ0.5		—	a.鍛造 断面四角形 頂部と先端部欠失
9-19	〃	〃	残存長(3.4)×厚さ0.5		—	a.鍛造 断面四角形 頂部と先端部欠失
9-20	〃	〃	残存長(3.0)×厚さ0.4		—	a.鍛造 断面四角形 頂部と先端部欠失
10-1	1面 土坑1	かわらけ皿 小型	(7.1)	(4.0)	1.9	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
10-2	〃	かわらけ皿 小型	11.8	6.9	3.2	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 小石粒 粗土 c.橙色 e.良好
10-3	1面 土坑2	かわらけ皿 大型	(12.8)	(7.4)	3.5	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
10-4	1面 土坑3	瀬戸 卸皿	—	(6.0)	—	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.良土 硬質 c.黄灰色/釉・緑白色 e.良好
10-5	〃	平瓦	幅(6.0) 高さ(7.3) 厚さ2.2		—	a.表：離れ砂、裏面の縄目が転写 裏：縄目の叩き b.微砂 流文 良土 c.灰色 e.良好 f.八幡宮 I期B類と同類
10-6	1面 土坑4	常滑 壺	(10.0)	—	—	a.ヨコナデ b.微砂 白色粒 小石粒 やや粗土 c.暗茶褐色 e.良好
10-7	〃	瀬戸 卸皿	(13.0)	—	—	b.良土 c.灰白色/釉 緑灰色 e.良好 f.内体部まで卸目

表6 遺物観察表(2)

()は復元値

挿図番号	出土面・遺構	種別	口径	底径	器高	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
			(cm)	(cm)	(cm)	
10-8	1面 土坑4	常滑 摩耗陶片	幅6.8 高さ7.0 厚み1.2			全面使用痕あり
10-9	1面 土坑5	白かわらけ 蓋	幅4.8 厚み1.7 凸部幅2.4			a.ヨコナデ b.微砂 雲母 良土 c.灰白色 e.良好 f.二次焼成受ける。
10-10	1面 土坑6	かわらけ皿 小型	(7.1)	(4.0)	2.4	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
11-1	1面 土坑7	弥生式土器 壺	幅4.9 高さ3.5 厚み0.8			a.刷毛目 b.微砂 白色粒 赤色粒 黒色粒 良土 c.暗灰色 e.良好
11-2	〃	かわらけ皿 大型	(12.3)	(8.0)	3.5	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 小石粒 雲母 泥岩粒 やや粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面ナデあり
11-3	〃	常滑甕 押印	肩部片			押印：格子目
11-4	〃	瀬戸 天目碗	体部片			a.ロクロ ヨコナデ b.灰白色 微砂 良土 d.鉄釉 厚手施釉
11-5	1面 土坑8	かわらけ皿 中型	(10.8)	(7.2)	2.8	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 小石粒 雲母 泥岩粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
11-6	〃	かわらけ皿 大型	(10.8)	(7.2)	2.8	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 小石粒 雲母 泥岩粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
11-7	1面 土坑10	かわらけ皿 中型	(10.2)	(6.4)	3.0	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 小石粒 雲母 泥岩粒 粗土 c.橙色 e.良好
11-8	〃	白かわらけ	—	4.0	—	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 b.微砂 雲母 良土 c.灰白色 e.良好
11-9	〃	褐釉 壺	胴部片			a.ヨコナデ b.微砂 良土 c.茶褐色 e.良好
11-10	〃	龍泉窯 青磁折腰鉢	口縁部小片			a.ロクロ b.精良堅緻 d.青灰色半透明 やや厚手施釉
11-11	〃	銭	外径2.4 内径1.9 孔径0.7 厚さ0.1			皇宋通寶 北宋 初鑄年 1038年 f.篆書
11-12	1面 土坑13	かわらけ皿 大型	(13.3)	(7.4)	4.0	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 小石粒 雲母 泥岩粒 やや粗土 c.ki黄橙色 e.良好
11-13	1面 土坑15	鉄製品 釘	長さ4.7×厚さ0.4			a.鍛造 断面四角形 頂部と先端部欠失
11-14	1面 土坑14	瓦質 香炉	—	(7.0)	—	a.ミガキ b.微砂 小石粒 良土 c.黒色(黒色処理) e.良好 f.菊花スタンプ文、蓮珠文
13-1	1面 柱穴3	瀬戸 香炉	口縁部小片			b.微砂 良土 c.灰色/黒褐釉 e.良好 f.口縁輪花型、二次焼成受ける。
13-2	〃	平瓦	幅4.5 高さ8.5 厚み2.0			a.表：黒色微砂による離れ砂 裏：斜格子の叩き b.微砂 小石粒 白色粒 粗土 c.灰色～橙色 e.良好 f.永福寺Ⅱ期E類と同類
13-3	〃	渥美 摩耗陶片	幅3.0 高さ2.3 厚み1.0			f.全面摩耗している。
13-4	1面 柱穴5	かわらけ皿 大型	(12.2)	(9.0)	3.0	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 小石粒 雲母 泥岩粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
13-5	1面 柱穴7	かわらけ皿 小型	7.0	4.4	2.2	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 小石粒 雲母 泥岩粒 粗土 c.橙色 e.良好
13-6	〃	かわらけ皿 小皿	(6.4)	(4.4)	2.0	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 小石粒 雲母 泥岩粒 やや粗土 c.橙色 e.良好 f.口唇部油煙煤付着、灯明皿
13-7	1面 柱穴10	東濃型 山茶碗	—	(4.6)	—	a.ロクロ ヨコナデ 高台粗痕 b.微砂 良土 c.灰色 e.良好 f.内底面青色の透明な降灰釉
13-8	〃	龍泉窯 青磁蓮 弁文碗	口縁部小片			a.ロクロ b.灰色 精良堅緻 d.草色半透明 やや厚め施釉 f.内外面稜花
13-9	1面 柱穴13	かわらけ皿 小皿	(7.2)	(5.2)	1.8	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 雲母 泥岩粒 やや粗土 c.橙色 e.良好 f.口唇部油煙煤付着、灯明皿
13-10	〃	瀬戸 碗	(17.9)	—	—	b.微砂 良土 c.釉：緑灰色 透明 e.良好
13-11	〃	鉄製品 釘	長さ3.7×厚さ0.4			a.鍛造 断面四角形 頂部と先端部欠失
13-12	1面 柱穴12	常滑 壺	(19.0)	—	—	a.輪積み技法 内面：指頭痕 横位ナデ b.灰色 長石 石英 砂粒多い 粗土 c.褐色 e.良好
13-13	〃	瀬戸 洗	—	(20.0)	—	a.外底面 外周部へう削り、蛇の目剥ぎ、体部へう削り ヨコナデ 内底面 3本の同心円の沈線 b.微砂 良土 c.釉 黄緑灰色 半透明 e.良好
13-14	1面 柱穴18	瀬戸 平碗	—	—	—	a.ヨコナデ b.微砂 良土 c.釉 白色～緑灰色 外体部下方露胎 e.良好
13-15	〃	瀬戸 折縁皿	(20.0)	—	—	b.微砂 良土 c.黄灰白色 釉 刷毛塗り 黄白色 e.良好
13-16	1面 柱穴19	弥生式土器 壺	幅5.3 高さ4.5 厚み0.8			a.刷毛目 b.微砂 白色粒 赤色粒 黒色粒 良土 c.暗灰色 e.良好
13-17	〃	かわらけ皿 小皿	7.6	4.9	2.2	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 雲母 泥岩粒 やや粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面ナデあり

表7 遺物観察表(3)

()は復元値

挿図番号	出土面・遺構	種別	口径	底径	器高	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
			(cm)	(cm)	(cm)	
13-18	1面 柱穴19	常滑甕 押印	胴部片			押印：格子
13-19	1面 柱穴20	平瓦	幅7.0高さ8.4厚み2.0			a.表：離れ砂 縦位ナデ 裏：格子の叩き目 b.微砂 白色粒 やや粗土 c.橙色 e.良好 f.永福寺Ⅱ期C類と同類
13-20	”	平瓦	幅5.8高さ5.6厚み1.7			a.表：離れ砂 裏：斜格子の叩き目 b.微砂 白色粒 小石粒 粗土 c.灰色～橙色 e.良好 f.永福寺Ⅲ期E類と同類
13-21	1面 柱穴21	かわらけ皿 小型	(7.6)	(5.7)	1.5	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
13-22	1面 柱穴23	平瓦	幅6.5高さ8.1厚み1.4			a.表：離れ砂 裏：斜格子に丸目の叩き目 b.微砂 白色粒 小石粒 やや粗土 c.暗灰色 e.良好 f.永福寺Ⅲ期E類と同類
13-23	1面 柱穴25	かわらけ皿 小型	7.4	4.2	1.6	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
13-24	”	火鉢	底部片			a.ミガキ 黒色処理 b.灰白色 砂粒 小石粒 気泡多い c.黒色 e.良好 f.Ⅲ類
13-25	”	白磁 口元皿	(11.4)	—	—	b.灰白色 精良堅緻 d.白色 透明 やや厚めに施釉 e.良好
13-26	1面 柱穴27	かわらけ皿 小型	(7.6)	(5.4)	1.9	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 やや粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面ナデあり
13-27	1面 柱穴29	かわらけ皿 大型	(11.4)	(7.6)	3.5	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 やや粗土 c.橙色 e.良好
13-28	1面 柱穴30	龍泉窯青磁 鎗蓮弁文碗	口縁小片			a.ロクロ 外面片切彫り蓮弁文 b.精良堅緻 気孔有り d.草色半透明 やや厚手 施釉
13-29	”	龍泉窯青磁 折縁皿	口縁小片			b.精良堅緻 c.灰白色 d.草色 半透明 厚手施釉 e.良好
13-30	1面 柱穴31	かわらけ皿 小型	6.0	4.0	1.8	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 粗土 c.橙色 e.良好
13-31	1面 柱穴34	かわらけ皿 小型	(6.9)	(4.2)	1.8	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 やや粗土 c.橙色 e.良好
13-32	1面 柱穴36	火鉢	口縁部片			a.ヨコナデ 黒色処理 b.橙色 砂粒 白色粒 赤色粒 黒色粒 f.IC類
13-33	1面 柱穴39	瀬戸 仏華瓶	頸部片			b.灰白色 良土 d.鉄釉を施釉 e.良好
14-1	1面上 出土遺物	手づくね かわらけ小型	(8.4)	(7.2)	1.7	a.手捏ね b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 雲母 やや粗土 c.橙色 e.良好
14-2	”	かわらけ皿 小型	(6.5)	(5.2)	1.6	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 雲母 やや粗土 c.橙色 e.良好
14-3	”	かわらけ皿 小型	(7.6)	(4.7)	1.85	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 泥岩粒 雲母 やや粗土 c.橙色 e.良好
14-4	”	かわらけ皿 小型	(6.8)	(3.8)	2.0	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 小石粒 雲母 やや粗 土 c.橙色 e.良好
14-5	”	かわらけ皿 小型	6.6	3.5	2.5	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 泥岩粒 雲母 やや粗土 c.橙色 e.良好
14-6	”	かわらけ皿 中型	(9.6)	6.0	3.2	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 泥岩粒 雲母 やや粗土 c.橙色 e.良好
14-7	”	かわらけ皿 中型	(10.0)	(5.0)	3.6	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 泥岩粒 雲母 やや粗土 c.橙色 e.良好
14-8	”	かわらけ皿 大型	(11.7)	(7.4)	3.2	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 泥岩粒 雲母 やや粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面ナデが強い。
14-9	”	かわらけ皿 大型	(12.6)	(7.6)	3.2	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 泥岩粒 雲母 やや粗土 c.橙色 e.良好
14-10	”	かわらけ皿 大型	(12.5)	(7.6)	3.3	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 泥岩粒 雲母 やや粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面ナデが強い。
14-11	”	かわらけ皿 中型	10.4	6.0	3.5	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 泥岩粒 雲母 粗土 c.橙色 e.良好 f.宅間ガ谷型
14-12	”	かわらけ皿 大型	(14.0)	(7.6)	3.0	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 泥岩粒 雲母 粗土 c.橙色 e.良好
14-13	”	かわらけ皿 大型	(11.6)	(6.2)	3.6	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 雲母 やや粗土 c.橙色 e.良好
14-14	”	かわらけ皿 大型	(12.7)	(7.2)	4.0	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 泥岩粒 雲母 粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面のナデが強い
14-15	”	かわらけ皿 大型	(12.9)	(7.0)	3.5	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 泥岩粒 雲母 やや粗土 c.黄褐色 e.良好
14-16	”	かわらけ皿 大型	(11.7)	(6.2)	3.5	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 泥岩粒 雲母 やや粗土 c.橙色 e.良好
14-17	”	かわらけ皿 大型	(12.7)	(7.9)	3.7	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 泥岩粒 雲母 やや粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面のナデが強い
14-18	”	かわらけ皿 大型	(13.7)	(9.8)	4.0	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 泥岩粒 雲母 やや粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面ナデが強い

表8 遺物観察表(4)

()は復元値

挿図番号	出土面・遺構	種別	口径	底径	器高	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
			(cm)	(cm)	(cm)	
14-19	I 面上 出土遺物	かわらけ皿 大型	(14.4)	(8.0)	3.7	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 泥岩粒 雲母 やや粗土 c.橙色 e.良好
14-20	”	かわらけ皿 大型	(7.3)	(5.5)	1.7	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 泥岩粒 雲母 やや粗土 c.黒灰色 e.良好 f.トリベ状 口唇部から内面気泡
14-21	”	白かわらけ	(6.7)	—	—	a.ロクロ b.微砂 小石粒 やや粗土 c.乳白色 e.良好 f.蓋の可能性あり
14-22	”	火鉢	底部片			a.ミガキ 黒色処理 b.小石粒 良土 c.灰白色 e.良好 f.沈線 花文スタンプ 蓮珠文が施される。IV類
14-23	”	香炉	口縁部片			a.ミガキ 黒色処理 b.黒色粒 小石粒 良土 c.黒色 e.良好 f.瓦質 体部二段の菱形渦巻き文
14-24	”	香炉	底部片			a.ミガキ 黒色処理 b.黒色粒 小石粒 良土 c.黒色 e.良好 f.瓦質
14-25	”	東濃型 山茶碗	口縁部片			a.ロクロ ヨコナデ b.微砂 良土 c.灰白色 e.良好 f.硬質
14-26	”	常滑 片口鉢	口縁部片			a.輪積み技法 内面指頭痕 b.微砂 白色粒 小石粒 c.灰白色 e.良好 f. I 類
14-27	”	備前 すり鉢	体部片			a.条痕 4本 b.微砂 小石粒 c.灰白色 e.良好
14-28	”	常滑 甕	口縁部片			a.輪積み技法 内面 指頭痕 横位ナデ b.灰白色 長石 白色粒 c.黒褐色 e.良好 f.縁帯が欠ける
14-29	”	瀬戸 香炉	口縁部片			b.灰白色 良土 d.緑灰色 刷毛塗り e.良好 硬質
14-30	”	瀬戸 香炉	体部片			b.灰白色 良土 c.黒褐色 d.外面鉄釉 内面灰緑色 半透明 e.良好 f.菊花スタンプが施される
14-31	”	瀬戸 平碗	口縁部片			b.灰白色 良土 d.灰緑色 薄い e.良好 硬質
14-32	”	瀬戸 平碗	口縁部片			b.黄灰白色 良土 d.緑灰色 薄い e.良好 硬質
14-33	”	瀬戸 丸碗	口縁部片			b.灰白色 良土 d.緑灰色 透明 e.良好 硬質 f.大窯
14-34	”	瀬戸 天目碗	(12.2)	—	—	b.灰白色 良土 d.黒色 鉄釉 e.良好 硬質
14-35	”	瀬戸 天目碗	(11.2)	—	—	b.灰白色 良土 d.黒色 鉄釉 薄い e.良好 硬質
14-36	”	瀬戸 天目碗	口縁部片			b.黄灰白色 良土 d.茶褐色 鉄釉 e.良好 硬質
14-37	”	瀬戸 折縁小皿	(13.0)	—	—	b.灰白色 良土 d.灰釉 刷毛塗り 薄い e.良好 硬質
14-38	”	瀬戸 折縁深皿	(32.0)	—	—	b.黄灰白色 良土 d.黄白色釉 e.良好 硬質
14-39	”	瀬戸 折縁深皿	口縁部片			b.灰白色 良土 d.緑灰色釉 刷毛塗り e.良好 硬質
14-40	”	瀬戸 折縁深皿	口縁部片			b.灰白色 良土 d.灰緑色釉 e.良好 硬質
14-41	”	瀬戸 折縁深皿	口縁部片			b.黄灰白色 良土 d.黄白色釉 e.良好 硬質
14-42	”	瀬戸 折縁深皿	口縁部片			b.灰白色 良土 d.灰緑色釉 e.良好 硬質
14-43	”	瀬戸 折縁深皿	—	(15.4)	—	a.底部回転ヘラ削り b.灰白色 小石粒 やや粗土 d.灰緑色釉 透明 e.良好 硬質 f.内底面菊花スタンプを施す。脚を持つ
15-44	”	瀬戸 直縁大皿	口縁部片			b.灰白色 良土 d.緑灰白色釉 e.良好 硬質
15-45	”	瀬戸 直縁大皿	口縁部片			b.黄灰白色 良土 d.緑灰白色釉 e.良好 硬質
15-46	”	瀬戸 直縁大皿	口縁部片			b.灰白色 良土 d.緑灰白色釉 e.良好 硬質
15-47	”	瀬戸 香炉	口縁部片			a.口縁輪花型 b.灰白色 良土 d.黒褐色釉 e.良好 硬質 f.二次焼成を受けている。接合関係にないが柱穴3出土の口縁部片と同一個体か
15-48	”	瀬戸 卸皿	(12.0)	—	—	b.灰白色 良土 d.緑灰色釉 e.良好 硬質
15-49	”	瀬戸 卸皿	(16.0)	—	—	b.黄灰白色 良土 d.緑灰白色釉 e.良好 硬質
15-50	”	瀬戸 卸皿	口縁部片			b.灰白色 良土 d.緑灰色釉 e.良好 硬質
15-51	”	瀬戸 卸皿	口縁部片			b.黄灰白色 良土 d.緑灰白色釉 e.良好 硬質
15-52	”	瀬戸 卸皿	—	(9.0)	—	a.ロクロ 底部糸切り b.灰白色 良土 d.緑灰色釉 e.良好 硬質

表9 遺物観察表(5)

()は復元値

挿図番号	出土面・遺構	種別	口径	底径	器高	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
			(cm)	(cm)	(cm)	
15-53	1面上 出土遺物	瀬戸 卸目付大皿	口縁部片			b.黄灰白色 良土 d.緑灰白色釉 e.良好 硬質
15-54	〃	瀬戸 加工品	直径4.0×3.8 厚さ0.8			a.底部回転ヘラ削り、周辺を打ち欠き円盤状に成形 b.黄灰白色 良土 d.黄灰白色 e.良好 硬質
15-55	〃	龍泉窯青磁 広口壺	—	—	—	b.精良堅緻 c.灰白色 d.草色 半透明 気泡あり 薄手施釉 e.良好 f.取っ手部分
15-56	〃	龍泉窯青磁 盤	—	—	—	b.精良堅緻 c.灰白色 d.草色 半透明 気泡あり 厚手施釉 e.良好 f.貼り付け双魚文
15-57	〃	龍泉窯青磁 碗	(8.0)	—	—	b.精良堅緻 c.暗灰白色 d.草色 半透明 気泡あり 厚手施釉 e.良好
15-58	〃	龍泉窯青磁 鎗蓮弁文碗	口縁部片			a.ロクロ 外面片切彫り蓮弁文 b.精良堅緻 気孔有り d.草色半透明 やや薄手施釉
15-59	〃	龍泉窯青磁 印花文碗	—	(7.4)	—	a.ロクロ 高台内蛇の目釉剥ぎ 内底面印花文 b.精良堅緻 気孔有り d.草色 半透明 厚手施釉
15-60	〃	龍泉窯青磁 折縁皿	(12.0)	—	—	b.精良堅緻 c.灰白色 d.草色 半透明 気泡あり 厚手施釉 e.良好
15-61	〃	龍泉窯青磁 器種不明	口縁部片			a.稜花状 b.精良堅緻 c.灰白色 d.草色 半透明 気泡あり 厚手施釉 e.良好 f.二次焼成を受けている
15-62	〃	白磁 口元皿	(9.8)	—	—	b.灰白色 精良堅緻 d.乳白色 半透明 やや薄手に施釉 e.良好
15-63	〃	白磁 口元皿	(10.8)	—	—	b.灰白色 精良堅緻 d.乳白色 半透明 やや厚手に施釉 e.良好
15-64	〃	白磁 碗	—	(7.8)	—	a.外底部露胎 b.灰白色 気泡あり d.乳白色 透明 薄手に施釉 e.良好
15-65	〃	青白磁 水注	(3.4)	—	—	a.口縁 b.灰白色 精良堅緻 d.水青色 半透明 厚手に施釉 e.良好
15-66	〃	青白磁 梅瓶	胴部片			b.灰白色 精良堅緻 d.水青色 半透明 厚手に施釉 e.良好 f.二次焼成を受けている
15-67	〃	青白磁 香炉	脚部片			b.灰白色 精良堅緻 d.水青色 半透明 気泡あり e.良好
15-68	〃	黒褐釉 器種不明	胴部片			b.灰色 精良堅緻 d.黒褐色 内面露胎 e.良好
15-69	〃	平瓦	幅(6.7)高さ(15.3) 厚み2.2			a.表 糸切り後ナデ裏 縄目叩き 離れ砂 b.灰色 小石粒 良土 c.灰色 e.良好 f.永福寺A類 I期と同類
15-70	〃	瓦 加工品	幅4.5高さ(4.3) 厚み2.0			a.平瓦を加工、側面摩耗 b.小石粒 良土 c.灰白色
15-71	〃	金銅製品 不明	長さ5.1幅0.5			不明品 部分的に金が残る。
15-72	〃	銭	外径2.5内径1.8 孔径0.6厚さ0.15			景德元寶 北宋 初鑄年 1004年 f.真書
15-73	〃	砥石 仕上砥	(3.0)×(3.0)			a.片面のみ使用 c.黄灰白色 f.鳴滝産
15-74	〃	基石	2.2×2.3			c.黒色
15-75	〃	近世陶器 灯明皿	口縁部小片			b.灰白色 良土 硬質 c.茶褐色 e.良好 f.漆継ぎ痕あり
15-76	〃	土人形 兎型	幅3.0高さ2.3			b.橙色 砂 白色粒 良土 c.橙色 e.良好
15-77	〃	鉄製品 鍵	長さ6.6幅0.5			近現代
18-1	2面 建物1 P 44	かわらけ皿 小型	(8.0)	(6.2)	1.9	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 泥岩粒 雲母 yaや粗土 c.橙色 e.良好
18-2	〃	かわらけ皿 大型	(13.4)	(9.1)	(3.3)	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 泥岩粒 雲母 粗土 c.橙色 e.良好
18-3	〃	東濃型 山茶皿	(7.1)	5.2	1.65	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 黒色粒 良土 c.灰色 e.良好 f.糸目が体部に上がる 内底面摩耗し赤色顔料付着
18-4	〃	常滑 壺	(9.8)	—	—	a.輪積み技法 内面 指頭痕 横位ナデ b.微砂 長石 やや粗土 c.褐色 e.良好 f.縁帯内側が欠損
18-5	〃	緑褐釉 広口壺	長さ(3.6)幅(4.9) 厚さ(0.5)			a.横位の耳がつく 耳の上に線刻による文様あり b.微砂 精良堅緻 c.暗緑灰色 e.良好 f.二次焼成受ける
18-6	〃	褐釉 壺	胴部片			a.ヨコナデ b.精良堅緻 長石少量入る c.暗褐色～茶褐色 e.良好
18-7	〃	龍泉窯青磁 鎗蓮弁文碗	口縁部片			a.ロクロ 外面片切彫り蓮弁文 b.精良堅緻 気孔有り d.草色半透明 厚手施釉
18-8	〃	青白磁 合子蓋	小片			a.型作り文様 b.精良堅緻 d.淡青灰色 半透明 気泡あり
18-9	2面 建物1 P 46	かわらけ皿 中型	(10.6)	(7.0)	2.7	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 yaや粗土 c.橙色 e.良好

表10 遺物観察表(6)

()は復元値

挿図番号	出土面・遺構	種別	口径	底径	器高	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
			(cm)	(cm)	(cm)	
18-10	2面 建物1 P46	常滑 片口鉢	口縁部片			a.輪積み技法 b.微砂 白色粒 小石粒 c.灰白色 e.良好 f. I類
18-11	”	平瓦	(10.0) × (7.8)			a.表 離れ砂 裏 格子目叩き 離れ砂 b.灰色 白色流文 良土 c.灰白色 e.良好 f.八幡宮 B類、永福寺 I類と同類
18-12	”	平瓦	(8.2) × (9..8)			表裏 黒色微砂による離れ砂 b.砂多く流文みられる やや粗土 f.永福寺Ⅲ期と同類
18-13	2面 建物1 P 76	かわらけ皿 大型	14.2	9.4	3.6	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 やや粗土 c.橙色 e.やや甘い
18-14	”	常滑 摩耗陶片	長さ5.6幅4.4厚さ1.0			常滑片口鉢Ⅱ類の口縁部を使用、口唇部 打痕 側面を摩耗する
18-15	”	丸瓦	(12.8) × (5.3)			a.表 へう削り 裏 布目 b.瓦質 砂 良土 c.黒灰色 e.良好 f.極楽寺創建時に類似
18-16	2面 建物1 P 87	かわらけ皿 中型	10.2	5.6	3.0	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 やや粗土 c.橙色 e.良好
18-17	”	かわらけ皿 中型	10.0	5.6	3.0	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 やや粗土 c.橙色 e.良好
18-18	”	かわらけ皿 大型トリベ状	口縁部片			a.ロクロ トリベ状口縁部気泡目立つ b.微砂 赤色粒 泥岩粒 小石粒 雲母 やや粗土 c.灰色 e.良好
18-19	”	白磁 口元皿	7.6	—	—	b.灰白色 精良堅緻 d.乳白色 半透明 やや薄手に施釉 e.良好
18-20	”	鉄製品 釘	長さ(5.8) × 幅3.0			a.鍛造 断面四角形 頂部と先端部欠失
18-21	”	鉄製品 釘	長さ(5.8) × 幅3.0			a.鍛造 断面四角形 頂部と先端部欠失
18-22	2面 建物1 P 90	東濃型 山茶碗	(12.6)	—	—	a.ロクロ 口縁の内側まで卸目 b.微砂 良土 c.灰白色 e.良好
18-23	”	火鉢	底部片			a.ヨコナデ 底部砂底 b.小石粒 雲母 良土 c.暗灰色 e.良好 f.Ib類
18-24	2面 建物1 P 98	かわらけ皿 小型	7.3	4.9	1.8	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
18-25	”	かわらけ皿 大型	(11.6)	(6.6)	3.0	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好 f.板状圧痕強い
20-1	2面 建物2 P 53	かわらけ皿 中型	(9.8)	(6.0)	3.0	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
20-2	2面 建物2 P 68	常滑 片口鉢	—	(12.6)	—	a.輪積み技法 体部下方へう削り 高台貼り付け b.微砂 白色粒 小石粒 やや粗土 c.灰色 e.良好 f. I類
20-3	2面 建物2 P 81	龍泉窯青磁 鎬蓮弁文碗	—	(5.2)	—	a.ロクロ 外面片切彫り蓮弁文 高台内露胎 b.精良堅緻 気孔有り d.緑灰色 半透明 厚手施釉
20-4	”	白磁 印花文皿	—	(4.2)	—	a.底部釉を拭い露胎する b.白色 精良堅緻 d.白色 半透明 薄手に施釉 e.良好
20-5	2面 建物2 P 82	白磁 口元印花文皿	(12.3)	—	—	b.白色 精良堅緻 d.白色 半透明 薄手に施釉 e.良好
20-6	2面 建物2 P 84	かわらけ皿 小型	7.6	4.8	1.8	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好 f.体部に糸切り切り上げ痕あり 内底面ナデ強い
20-7	2面 建物2 P 89	かわらけ皿 小型	(6.8)	(4.4)	1.7	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
20-8	”	かわらけ皿 大型	(12.2)	(7.8)	3.4	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
20-9	2面 建物2 P 91	かわらけ皿 大型	—	(7.0)	—	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
20-10	”	龍泉窯青磁 無文碗	口縁部片			a.ロクロ 左回転 b.白色 精良堅緻 d.灰緑色 半透明 厚い 貫入が左上から右下へ入る。
20-11	”	白磁 合子蓋	(8.5)	—	—	b.白色 精良堅緻 d.乳白色 不透明 やや薄手に施釉 e.良好 f.クシガキ状の文様
20-12	2面 建物2 P 95	かわらけ皿 小型	(7.3)	(5.6)	1.5	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好 f.口縁部煤付着、灯明皿
20-13	”	常滑 片口鉢	口縁部片			a.輪積み技法 b.微砂 白色粒 小石粒 やや粗土 c.灰色 e.良好 f. I類
20-14	”	常滑 片口鉢	口縁部片			a.輪積み技法 b.微砂 白色粒 小石粒 粗土 c.灰色 e.良好 f. I類
21-1	2面 かわらけ溜り	かわらけ皿 小型	(7.1)	(5.0)	1.9	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 やや粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面ナデ強い
21-2	”	かわらけ皿 小型	(8.4)	(5.5)	2.3	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 粗土 c.橙色 e.良好 f.口縁部油煙煤付着、灯明皿
21-3	”	かわらけ皿 中型	(9.3)	(4.2)	2.8	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 粗土 c.橙色 e.良好 f.口縁部油煙煤付着、灯明皿
21-4	”	かわらけ皿 大型	(6.8)	(4.4)	1.7	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 良土 c.橙色 e.良好 f.内底面ナデ強い

表11 遺物観察表(7)

()は復元値

挿図番号	出土面・遺構	種別	口径	底径	器高	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
			(cm)	(cm)	(cm)	
21-5	2面 かわらけ溜り	かわらけ皿 大型	(13.4)	(8.1)	3.2	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 雲母 やや粗土 c.橙色 e.良好
21-6	"	白かわらけ 蓋	(8.6)	—	—	a.摩滅著しい b.微砂少量 軟質 c.乳白色 やや赤味を帯びる e.良好
21-7	"	白かわらけ 蓋	(8.8)	—	—	a.摩滅著しい b.微砂少量 砂粒 軟質 c.乳白色 やや赤味を帯びる e.良好
21-8	"	白かわらけ 蓋	(7.2)	—	—	a.摩滅著しい b.微砂少量 砂粒 軟質 c.乳白色 やや赤味を帯びる e.良好 f.摘み部の直径3.2 高さ1.0
21-9	"	白かわらけ 蓋	(8.4)	—	—	a.摩滅著しいがヨコナデが見れる b.微砂少量 砂粒 軟質 c.乳白色 e.良好 f.摘み部の直径3.2 高さ1.2
21-10	"	白かわらけ 蓋	(8.0)	—	—	a.摩滅著しい b.微砂少量 砂粒 軟質 c.灰白色 e.やや甘い
21-11	"	白かわらけ 蓋	(5.5)	—	—	a.摩滅著しい b.微砂少量 砂粒 軟質 c.乳白色 e.良好 f.摘み部の直径3.0 高さ1.1 側面著しく摩滅
21-12	"	白かわらけ 蓋	(5.5)	—	—	a.摩滅著しい b.微砂少量 砂粒 軟質 c.乳白色 e.良好 f.摘み部の直径3.4 高さ1.0 側面著しく摩滅
21-13	"	白かわらけ 蓋	(5.0)	—	—	a.摩滅著しい b.微砂少量 砂粒 軟質 c.乳白色 e.良好 f.摘み部の直径3.2 高さ1.0 側面著しく摩滅
21-14	"	白かわらけ 台		2.2		a.ヨコナデ b.微砂少量 砂粒 c.灰白色 e.良好 f.台は削り出し、上下に貫通しない穴がある、内底面と底部は火を受け赤味を帯びる、外体部煤けている
21-15	"	常滑 片口鉢	口縁部片			a.輪積み技法 b.微砂 白色粒 小石粒 やや粗土 c.褐色 e.良好 f.Ⅱ類
21-16	"	瀬戸 入子	小片			a.輪花状にへらで刻みをつける b.微砂 良土 c.灰白色 e.良好 f.内面に紅が残る
21-17	"	砥石 仕上砥	幅3.2×高さ(3.7) ×厚み(0.8)			a.片面のみ使用 裏面剥離している c.黄橙灰色 f.鳴滝産
22-1	2面 土坑(1) D17	かわらけ皿 小型	7.3	4.1	2.6	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 粗土 c.黄橙色 e.良好 f.口縁部油煙煤付着、灯明皿
22-2	"	かわらけ皿 小型	7.4	5.3	1.6	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 粗土 c.橙色 e.良好 f.打ち欠き痕あり
22-3	"	白かわらけ皿 小型	—	4.4	—	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 良土 c.灰白色 e.良好 硬質
22-4	"	瀬戸 片口入子	5.4	1.6	3.5	a.ロクロ 底部へら削り b.砂 良土 c.灰色 e.良好 f.糸切り引き上げ痕が体部につく、へらにより片口を突き出す
22-5	"	銭	外径2.4 内径1.9 孔径0.7 厚さ0.13			皇宋通寶 北宋 初鑄年 1038年 f.篆書
22-6	2面 土坑(1) D18	かわらけ皿 小型	7.3	5.3	1.8	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 粗土 c.橙色 e.良好
22-7	"	かわらけ皿 小型	(7.6)	(4.8)	2.0	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
22-8	"	かわらけ皿 小型	(7.7)	(4.8)	2.1	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好 f.口縁部油煙煤付着、灯明皿
22-9	"	かわらけ皿 中型	(10.7)	(6.0)	2.8	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
22-10	"	かわらけ皿 大型	(11.7)	(7.0)	3.1	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
22-11	"	かわらけ皿 大型	(12.8)	(7.4)	3.7	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
22-12	"	常滑 片口鉢	口縁部片			a.輪積み技法 b.微砂 白色粒 小石粒 やや粗土 c.褐色 e.良好 f.Ⅱ類
22-13	2面 土坑(1) D19	かわらけ皿 小型	(7.4)	(5.1)	1.6	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 雲母 カクセン石 やや粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面ナデ強い
22-14	"	瀬戸 折縁深皿	(21.0)	—	—	a.体部回転へら削り b.黄灰色 微砂 良土 d.灰白色 不透明 漬け掛け e.良好
22-15	2面 土坑(1) D20	かわらけ皿 小型	(7.9)	(5.0)	1.7	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面ナデ強い
22-16	"	かわらけ皿 小型	(8.2)	(6.0)	2.1	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面ナデ強い
22-17	"	かわらけ皿 大型	(12.4)	(7.8)	3.4	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 雲母 やや粗土 c.橙色 e.良好
22-18	"	かわらけ皿 大型	(11.8)	(7.4)	3.0	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 雲母 良土 粉質 c.橙色 e.良好
22-19	"	青白磁 梅瓶	胴部片			b.灰色 微砂 精良堅緻 d.水青色 透明 厚手に施釉 e.良好
22-20	"	鉄製品 釘	残存長(4.9)×厚さ0.4			a.鍛造 断面四角形 頂部と先端部欠失
22-21	2面 土坑(1) D21	龍泉窯青磁 無文碗	(9.9)	—	—	a.ロクロ b.白色 精良堅緻 d.灰緑色 半透明 厚い 気泡入る

表12 遺物観察表(8)

()は復元値

挿図番号	出土面・遺構	種別	口径	底径	器高	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
			(cm)	(cm)	(cm)	
22-22	2面 土坑(1) D22	瀬戸 入子	(5.8)	(3.5)	2.0	a.輪花状にヘラで刻みをつける ロクロ 外底右回転糸切痕 b.微砂 良土 c.灰 白色 e.良好
22-23	2面 土坑(1) D23	かわらけ皿 小型	(7.1)	(4.2)	1.9	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 粗土 c.橙色 e.良好 f.糸切り切り上げ痕が体部に残る
22-24	”	かわらけ皿 小型	(7.9)	(4.3)	2.2	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 やや粗土 c.橙色 e.良好 f.口縁部油煙煤付着、灯明皿。内底面のナデが強い
22-25	”	かわらけ皿 大型	(12.4)	7.9	3.1	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面のナデが強い
22-26	”	かわらけ皿 大型	(12.0)	7.4	3.3	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 粗土 c.黄橙色 e.良好 f.内底面のナデが特に強い
22-27	”	鉄製品 釘	残存長(6.0)×厚さ0.4			a.鍛造 断面四角形 頂部と先端部欠失
23-1	2面 土坑(2) D24	白磁 口元印花文皿	(6.2)	(1.9)	0.7	a.外体部高台内露胎 b.白色 精良堅緻 d.白灰色 半透明 薄手に施釉 e.良好
23-2	2面 土坑(2) D25	かわらけ皿 小型	(7.5)	(5.0)	1.7	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 泥岩粒 やや粗土 c.橙色 e.やや粗土 f.内底面のナデが強い
23-3	2面 土坑(2) D26	かわらけ皿 小型	(7.9)	(4.3)	2.2	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 やや良土 c.橙色 e.良好 f.灯明皿内底面のナデが強い
23-4	”	鉄製品 釘	残存長(5.8)×厚さ0.4			a.鍛造 断面四角形 頂部と先端部欠失
23-5	2面 土坑(2) D27	青白磁 梅瓶	胴部片			b.白色 微砂 精良堅緻 d.青色 半透明 気泡あり やや厚手に施釉 e.良好
23-6	”	鉄製品 釘	残存長(6.4)×厚さ0.4			a.鍛造 断面四角形 頂部と先端部欠失
23-7	2面 土坑(2) D28	弥生式土器 壺	幅6.2 高さ3.8 厚み1.2			a.刷毛目 b.微砂 白色粒 赤色粒 黒色粒 良土 c.暗灰色 e.良好
23-8	”	かわらけ皿 小型	(7.7)	4.3	2.7	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 泥岩粒 やや粗土 c.橙色 e.粗土 f.内底面のナデが強い
23-9	”	かわらけ皿 小型	(8.3)	(6.5)	2.7	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 やや良土 c.橙色 e.良好 f.外体部煤けている
23-10	”	火鉢	口縁部～体部			a.輪花状 外 ミガキ 黒色処理 菊花スタンプ 内 横位ミガキ b.暗灰色 砂 砂粒 やや粗土 c.黒色～橙色 e.良好 f.菊花文スタンプ 皿類
23-11	”	銭	外径2.4 内径1.8 孔径0.6 厚さ0.15			紹聖元寶 北宋 初鑄年 1094年 f.行書
23-12	2面 土坑(2) D31	かわらけ皿 大型	(12.0)	7.3	2.9	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面のナデが強い
23-13	”	常滑 甕	(28.5)	—	—	a.輪積み技法 外面 ヨコナデ 内面 指頭痕 横位ナデ b.暗灰色 長石 砂 小石粒 c.褐色 e.良好
23-14	2面 土坑(2) D33	かわらけ皿 小型	7.0	5.6	1.6	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 泥岩粒 粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面のナデが強く口縁までかかる
23-15	”	かわらけ皿 大型	11.7	7.9	3.1	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面のナデが強い
23-16	”	かわらけ皿 大型	11.7	7.4	3.0	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面のナデが強い
23-17	”	かわらけ皿 大型	(12.0)	(6.4)	3.5	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面のナデが強い
23-18	”	かわらけ皿 大型	(12.6)	(8.0)	3.3	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小 石粒 粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面のナデが強い 口縁部油煙煤付着、灯明皿
23-19	”	鉄製品 釘	残存長(8.4)×厚さ0.5			a.鍛造 断面四角形 頂部と先端部欠失
23-20	”	鉄製品 釘	残存長(5.5)×厚さ0.6			a.鍛造 断面四角形 頂部と先端部欠失
23-21	2面 土坑(2) D34	かわらけ皿 小型	(8.0)	(4.9)	2.5	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 泥岩粒 やや粗土 c.黒褐色 e.粗土 f.二次的に強く火を受け内外面煤が付着。灯明か？
23-22	”	かわらけ皿 大型トリベ状	(6.6)	(4.2)	1.6	a.ロクロ トリベ状 内側は気泡が目立ち 外側は亀裂が走る b.微砂 海綿骨芯 やや粗土 c.黒灰色 e.良好
23-23	”	龍泉窯青磁 鎚蓮弁文碗	口縁部片			a.ロクロ 外面片切彫り蓮弁文 b.精良堅緻 気孔あり d.緑灰色 半透明 やや 薄手施釉
24-1	2面 土坑(3) D36	褐釉 壺	胴部片			a.ヨコナデ b.灰褐色 精良堅緻 c.暗褐色 e.良好
24-2	”	丸瓦	(4.8)×(10.0) 厚み2.2			a.表 横位ナデ 縦位叩き目 裏 横位糸切り 布目 b.砂 白色粒 良土 c.黒灰色 e.良好 f.永福寺 I期 A類と同類
24-3	2面 土坑(3) D37	かわらけ皿 小型	(6.8)	(5.0)	1.7	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 泥岩粒 粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面のナデが強い
24-4	”	かわらけ皿 大型	(12.7)	(7.6)	3.5	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 粗土 c.橙色 e.良好
24-5	”	東濃型 山茶碗	—	(6.0)	—	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 内 無釉 内底面指頭 体部ヨコナデ 外 施釉 b.灰 色 緻密な良土 c.透明釉 e.良好

表13 遺物観察表(9)

()は復元値

挿図番号	出土面・遺構	種別	口径	底径	器高	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
			(cm)	(cm)	(cm)	
24-6	2面 土坑(3) D37	龍泉窯青磁 鎚蓮弁文碗	口縁部片			a.ロクロ 外面片切彫り蓮弁文 b.精良堅緻 d.淡緑灰色 半透明 やや厚手施釉
24-7	2面 土坑(3) D38	かわらけ皿 小型	(7.8)	(5.7)	2.1	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 泥岩粒 やや粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面のナデが残る
24-8	”	龍泉窯青磁 器種不明	破片			a.内 凸状に草花文、外 線描き蓮弁 b.灰白色 精良堅緻 c.緑灰色 d.半透明 薄い
24-9	2面 土坑(3) D29	かわらけ皿 小型	7.5	5.1	2.4	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 泥岩粒 粗土 c.黄橙色 e.良好
24-10	”	かわらけ皿 小型	7.5	5.0	1.9	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 泥岩粒 粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面のナデが強い
24-11	”	かわらけ皿 小型	7.5	5.0	2.2	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 泥岩粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
24-12	”	かわらけ皿 大型	(11.8)	(6.5)	2.9	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 粗土 c.橙色 e.良好
24-13	”	かわらけ皿 大型	(12.7)	(7.6)	3.5	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 粗土 c.橙色 e.良好
24-14	2面 土坑(3) D35	かわらけ皿 小型	7.4	4.9	2.3	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 泥岩粒 小石粒 粗土 c.黄橙色 e.良好 f.内底面のナデが残る
24-15	”	常滑 片口鉢	口縁部片			a.輪積み技法 b.微砂 白色粒 小石粒 やや粗土 c.灰色 e.良好 f. I 類
24-16	”	瀬戸 入子	(7.4)	(4.8)	1.5	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 b.灰白色 砂 小石粒 良土 c.淡橙色～.灰白色 e.良好
24-17	”	鉄製品 釘	残存長(5.4)×厚さ0.3			a.鍛造 断面四角形 頂部を欠失
24-18	”	銭	外径2.4 内径1.8 孔径0.6 厚さ0.13			景德元寶 北宋 初鑄年 1004年 f.真書
25-1	2面 土坑30(1)	かわらけ皿 小型	(7.3)	5.1	2.0	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 泥岩粒 やや粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面のナデが残る
25-2	”	かわらけ皿 小型	(7.4)	(5.3)	1.9	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 泥岩粒 小石粒 粗土 c.黄橙色 e.良好
25-3	”	かわらけ皿 小型	(8.2)	(5.2)	2.2	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 泥岩粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
25-4	”	かわらけ皿 小型	6.4	5.1	2.2	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 泥岩粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好 f.体部に糸切りの引き上げ痕あり 口縁部油煙煤付着、灯明皿
25-5	”	かわらけ皿 大型	(12.6)	(7.6)	3.7	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面のナデが残る 作りが雑
25-6	”	かわらけ皿 大型	(13.1)	(9.0)	3.4	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 粗土 c.橙色 e.良好
25-7	”	白かわらけ	(12.6)	(7.6)	3.7	a.ロクロ ヨコナデ b.微砂 良土 c.乳白色 e.良好 f.蓋の可能性あり
25-8	”	火鉢	口縁部片			a.ヨコナデ 黒色処理 b.黒灰色 砂 砂粒 c.黒色 e.良好 f. I C 類
25-9	”	火鉢	—	(33.5)	—	a.体部下位へラ削り ヨコナデ b.黒灰色 砂 砂粒 c.橙色 e.やや甘い f. II 類
25-10	”	火鉢	—	(32.5)	—	a.輪花状の刻み見られる 黒色処理 体部 指頭 工具による雑なナデ ヨコナデ 底部砂底 b.橙灰色 砂 小石粒 c.黒灰色 e.良好 f. III 類
25-11	”	常滑 壺	(14.3)	—	—	a.輪積み技法 内面：指頭痕 横位ナデ b.灰色 長石 石英 砂粒多い やや粗土 c.暗褐色 e.良好
25-12	”	龍泉窯青磁 鎚蓮弁文皿	(14.7)	—	—	a.ロクロ 外面片切彫り蓮弁文 b.精良堅緻 d.淡緑灰色 透明 厚手施釉
25-13	”	龍泉窯青磁 鎚蓮弁文碗	(14.5)	—	—	a.ロクロ 外面片切彫り蓮弁文 b.精良堅緻 気泡あり d.緑灰色 半透明 厚手施釉 f.鎚が浅い
25-14	”	白磁 口元印花文皿	—	(7.4)	—	a.底部釉を拭う b.乳白色 精良堅緻 d.乳白色 透明 薄手に施釉 e.良好
25-15	”	褐釉 壺	5.6	—	—	a.ヨコナデ b.灰褐色 精良堅緻 c.暗褐色 光沢なし不透明 口縁から胴部降灰あり、緑褐色 e.良好 f.胴部に熔着あり 口縁と胴部は接合しないが同一個体である
25-16	”	平瓦	(4.1)×(8.8)×2.3			a.表 離れ砂 裏面の叩き目転写 裏 格子目と三条線の叩き 離れ砂 b.砂 長石少量 良土 c.灰色～橙色 e.良好 f.八幡宮 F 類と同類
26-17	2面 土坑30(2)	平瓦	(4.1)×(8.8)×2.3			a.表 離れ砂 裏 格子叩き目 離れ砂 b.砂 小石粒多い 粗土 c.暗灰色 e.良好 f.永福寺 III 類と同類
26-18	”	鉄製品 釘	残存長(9.8)×厚さ0.4			a.鍛造 断面四角形 先端部欠失
26-19	”	鉄製品 釘	残存長(6.2)×厚さ0.5			a.鍛造 断面四角形 頂部と先端部欠失
26-20	”	銭	外径－内径－ 孔径－厚さ0.12			□祐元寶 北宋 f.篆書 景祐元寶もしくは嘉祐元寶
26-21	”	滑石 加工品	(13.1)×(4.3)×2.4			a.三面摩滅する。温石か

表14 遺物観察表(10)

()は復元値

挿図番号	出土面・遺構	種別	口径	底径	器高	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
			(cm)	(cm)	(cm)	
27-1	2面 柱穴(1)P41	褐釉 壺	胴部片			a.ヨコナデ b.茶褐色 精良堅緻 c.暗褐色 e.良好 f.二次焼成うける
27-2	”	龍泉窯青磁 鎬蓮弁文碗	—	3.7	—	a.ロクロ 外面片切彫り蓮弁文 b.暗灰白色 精良堅緻 d.深緑灰色 半透明 薄手施釉 f.高台内露胎
27-3	2面 柱穴(1)P45	かわらけ皿 小型	(6.8)	(5.0)	1.5	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 泥岩粒 粗土 c.橙色 e.良好
27-4	”	常滑 甕	口縁部			a.輪積み技法 外面 ヨコナデ 内面 指頭痕 横位ナデ b.暗灰色 長石 砂 小石粒 黒色粒 c.暗褐色 e.良好
27-5	”	白磁 口元印花文皿	口縁部片			a.内面印花 b.灰白色 精良堅緻 d.白色 透明 薄手に施釉 e.良好
27-6	2面 柱穴(1)P48	かわらけ皿 大型	(12.9)	(7.8)	3.7	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 粗土 c.橙色 e.良好
27-7	2面 柱穴(1)P50	かわらけ皿 小型	(7.8)	(5.8)	1.9	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面のナデが残る
27-8	”	かわらけ皿 小型	(7.8)	(5.6)	2.0	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面のナデが残る
27-9	”	かわらけ皿 小型	(7.6)	(6.0)	1.7	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面のナデが残る
27-10	”	かわらけ皿 小型	7.7	6.0	1.8	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 粗土 c.橙色 e.良好
27-11	”	かわらけ皿 小型	7.6	5.9	1.8	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 粗土 c.橙色 e.良好
27-12	”	かわらけ皿 中型	(10.9)	(6.0)	3.2	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 粗土 c.橙色 e.良好
27-13	”	かわらけ皿 大型	(11.7)	(7.0)	3.5	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 粗土 c.橙色 e.良好
27-14	”	龍泉窯青磁 鎬蓮弁文碗	(14.1)	—	—	a.ロクロ 外面片切彫り蓮弁文 b.精良堅緻 d.青緑灰色 半透明 厚手施釉
27-15	2面 柱穴(1)P51	東濃型 山茶碗	(8.0)	(5.0)	1.4	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 体部ヨコナデ b.灰色 微砂 緻密な良土 e.良好 f.内底面 指一本による浅いナデ 紅が残る
27-16	”	瀬戸 緑釉小皿	(11.0)	5.2	(2.7)	a.ロクロ 口縁部ヨコナデ 体部二段の回転ヘラ削り 底部右回転糸切痕 高台 やや雑な削り出し b.灰色 砂 黒色粒 良土 c.灰白色 d.緑釉 口唇部のみ 厚い e.良好 f.P.51と接合
27-17	2面 柱穴(1)P73	白磁 口元皿	(9.6)	—	—	b.灰白色 精良堅緻 d.乳白色 半透明 やや薄手に施釉 e.良好 f.口唇部に油煙 煤着く P.51と接合
27-18	2面 柱穴(1)P54	火鉢	口縁部片			a.ヘラ削り b.暗灰色 砂 砂粒 やや粗土 c.暗灰色 e.良好 f.穿孔あり IB類
27-19	2面 柱穴(1)P56	尾張型 山茶碗	口縁部片			a.ヨコナデ b.灰色 微砂 長石 黒色粒 e.良好
27-20	”	白磁 口元皿	(10.6)	—	—	b.灰色 微砂 精良堅緻 d.灰白色 半透明 厚手に施釉 e.良好 f.釉厚く、体部に 釉垂れする
27-21	2面 柱穴(1)P57	龍泉窯青磁 鎬蓮弁文碗	(17.9)	—	—	a.ロクロ 外面片切彫り蓮弁文 b.灰色 精良堅緻 d.暗緑色 半透明 厚手施釉 f.蓮弁文雑な彫り
27-22	”	白磁 口元皿	(10.6)	—	—	b.白色 微砂 精良堅緻 d.白色 半透明 やや厚手に施釉 e.良好
27-23	2面 柱穴(1)P59	常滑 甕	口縁部			a.輪積み技法 外面 ヨコナデ 内面 指頭痕 横位ナデ b.暗灰色 長石 砂 黒色粒 c.暗褐色 e.良好
27-24	”	瀬戸 合子蓋	(6.6)	(5.4)	1.3	a.口縁露胎 天井部、側面施文 b.白色 硬質 d.青緑色 透明 e.良好
27-25	2面 柱穴(1)P61	瀬戸 卸皿	(12.0)	—	—	b.灰白色 良土 d.緑灰色釉 e.良好 硬質
28-1	2面 柱穴(1)P64	平瓦	(12.6) × (13.9) × 2.0			表裏 黒色微砂による離れ砂 b.砂多く 小石粒みられる やや粗土 f.永福寺Ⅲ期E類と同類
28-2	2面 柱穴(1)P66	かわらけ皿 小型	(7.3)	(4.4)	2.0	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面のナデが強い
28-3	”	かわらけ皿 小型	(7.3)	(4.8)	2.0	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 粗土 c.黄橙色 e.良好 f.内底面のナデが残る
28-4	”	かわらけ皿 大型	(11.4)	(6.8)	2.8	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
28-5	”	かわらけ皿 大型	(11.4)	(5.8)	3.1	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面のナデが強い 口唇部に油煙煤付着 灯明皿
28-6	”	かわらけ皿 大型	(11.7)	(7.0)	3.5	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面のナデが強い
28-7	”	かわらけ皿 大型	(13.7)	(7.6)	3.1	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面のナデが強い
28-8	2面 柱穴(2)P70	かわらけ皿 小型	8.0	4.4	2.0	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 やや粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面のナデが強い

表15 遺物観察表(11)

()は復元値

挿図番号	出土面・遺構	種別	口径	底径	器高	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
			(cm)	(cm)	(cm)	
28-9	2面 柱穴(2)P70	かわらけ皿 大型	(11.4)	(7.1)	3.1	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 やや粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面のナゲが残る
28-10	”	白磁 口兀皿	底部片			a.内底面印花文 b.白色 精良堅緻 d.白灰色 透明 薄手に施釉 e.良好 f.底部中 央が盛り上がる
28-11	2面 柱穴(2)P71	かわらけ皿 小型	(7.2)	(4.8)	1.9	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 粗土 c.橙色 e.良好 f.口縁が煤けている 灯明皿
28-12	”	白かわらけ	(9.6)	—	—	a.ヨコナゲ b.微砂 c.淡橙白色 e.良好 f.蓋の可能性あり
28-13	”	砥石 中砥	幅4.6×高さ(3.0) ×厚み1.3			a.両面使用 c.淡黄色 f.伊予産
28-14	2面 柱穴(2)P75	かわらけ皿 大型	(11.2)	(6.5)	3.5	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面のナゲが残る
28-15	2面 柱穴(2)P79	かわらけ皿 小型	7.4	5.7	1.4	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面のナゲが残る
28-16	”	かわらけ皿 小型	(7.5)	(5.6)	2.1	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石 粒 粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面のナゲが強い 口唇部摩耗し油煙煤付着 灯明皿
28-17	”	鉄製品 釘	残存長(4.1)×厚さ0.3			a.鍛造 断面四角形 頂部と先端部欠失
28-18	2面 柱穴(2)P93	かわらけ皿 小型	(7.4)	(4.6)	2.0	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面のナゲが残る
28-19	2面 柱穴(2)P97	かわらけ皿 小型	(6.8)	(5.2)	1.3	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面のナゲが強い
29-1	1面下2面上 出土遺物	かわらけ皿 小型	(5.8)	(3.3)	1.9	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石 粒 粗土 c.橙色 e.良好 f.口唇部油煙煤付着 灯明皿
29-2	”	かわらけ皿 小型	(5.6)	(3.8)	2.0	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 良土 c.橙色 e.良 好 f.内底面ナゲ調整
29-3	”	かわらけ皿 小型	(6.7)	(3.6)	2.3	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 泥岩粒 小石粒 粗土 c.橙色 e.良好
29-4	”	かわらけ皿 小型	7.0	4.1	2.2	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 泥岩粒 小石粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
29-5	”	かわらけ皿 小型	(7.5)	(5.5)	2.2	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 泥岩粒 小石粒 粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面ナゲ調整
29-6	”	かわらけ皿 小型	(7.2)	(4.8)	2.3	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 泥岩粒 小石粒 粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面中央にナゲ調整
29-7	”	かわらけ皿 小型	(7.7)	(6.0)	1.6	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 泥岩粒 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面に強いナゲ調整
29-8	”	かわらけ皿 小型	7.4	6.0	1.6	a.全体に粗雑な成形 ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲 母 泥岩粒 小石粒 粗土 c.橙色 e.やや良好 f.内底面雑なナゲ調整
29-9	”	かわらけ皿 小型	(7.4)	(4.2)	2.1	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 泥岩粒 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面ナゲ調整
29-10	”	かわらけ皿 小型	(7.7)	(4.8)	1.9	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 泥岩粒 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面に強いナゲ調整
29-11	”	かわらけ皿 小型	(7.8)	(4.6)	2.1	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 泥岩粒 雲母 小石粒 粗土 c.橙色 e.良好 f.口唇部油煙煤付着 灯明皿 内底面にナゲ
29-12	”	かわらけ皿 小型	(7.5)	(5.0)	2.6	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 泥岩粒 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面中央にナゲ調整
29-13	”	かわらけ皿 小	(7.7)	(4.2)	1.9	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 泥岩粒 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好 f.摩滅著しい
29-14	”	かわらけ皿 小型	(7.7)	(5.6)	2.1	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 泥岩粒 小石粒 粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面中央にナゲ調整
29-15	”	かわらけ皿 小型	(9.0)	(5.6)	2.4	a.成形粗雑 ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 泥岩粒 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好 f.中皿か
29-16	”	かわらけ皿 小型	(7.1)	(4.2)	2.0	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 泥岩粒 小石粒 粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面中央にナゲ調整
29-17	”	かわらけ皿 小型	(7.6)	(4.4)	2.6	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 泥岩粒 小石粒 粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面ナゲ調整
29-18	”	かわらけ皿 大型	(11.6)	(7.0)	3.2	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 泥岩粒 小石粒 粗土 c.黄橙色 e.良好 f.内底面ナゲ調整
29-19	”	かわらけ皿 大型	(12.0)	(6.8)	3.1	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 泥岩粒 小石粒 粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面ナゲ調整
29-20	”	かわらけ皿 大型	(12.0)	(8.0)	3.2	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 泥岩粒 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面ナゲ調整
29-21	”	かわらけ皿 大型	11.4	6.1	3.3	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 泥岩粒 小石粒 粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面強いナゲ調整
29-22	”	かわらけ皿 大型	(13.3)	8.4	4.1	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 泥岩粒 小石粒 粗土 c.橙色 e.良好 f.全体に鉄分が付着する
29-23	”	かわらけ皿 大型	(13.3)	(7.2)	3.9	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 粉質良土 c.橙色 e.良好

表16 遺物観察表(12)

()は復元値

挿図番号	出土面・遺構	種別	口径	底径	器高	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
			(cm)	(cm)	(cm)	
29-24	1面下2面上 出土遺物	かわらけ皿 大型	(12.2)	8.0	3.2	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 泥岩粒 小石粒 粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面ナデ調整
29-25	〃	かわらけ皿 大型	(12.8)	(6.0)	3.5	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 泥岩粒 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面に強いナデ調整
29-26	〃	かわらけ皿 大型	(14.5)	(9.2)	3.7	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 やや良土 c.黄橙色 e.良好 f.内底面ナデ調整
29-27	〃	かわらけ皿 大型	(14.7)	(9.0)	3.6	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 泥岩粒 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
29-28	〃	かわらけ皿 大型	(13.4)	(7.2)	3.6	a.ロクロ 外底右回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 良土 c.橙色 e.良好 f.内底面ナデ調整
29-29	〃	白かわらけ 高坏	(8.5)	(6.8)	(13.7)	a.坏 凸部貼り付け面強いナデ 貫通しない穴があく 体部ヨコナデ 脚部 指頭と縦位のナデ 台部との接合部へラ状工具縦位ナデ b.微砂 c.乳白色 e.良好 f.坏部と脚部は接合関係にないが同一個体である
29-30	〃	火鉢	口縁部片			a.外体部 指頭 b.灰色 砂 小石粒 c.灰色 e.良好 f.IC類
29-31	〃	火鉢	—	(21.6)	—	a.底部 砂底 体部 ヨコナデ b.灰色 砂 小石粒 c.灰色 e.良好 f.IB類
29-32	〃	火鉢	口縁部片			a.黒色処理 b.橙色 小石粒 c.黒色 e.良好 f.III類 花文スタンプあり
29-33	〃	火鉢	(28.0)	—	—	a.黒色処理 b.灰白色 砂 小石粒 c.黒灰色 e.良好 f.III類
29-34	〃	伊勢系 鏝鍋	口縁～体部片			a.体部 ササラ状工具で掻き削られている 口縁 ヨコナデ b.暗灰色 小石粒 金雲母 c.黄灰白色 e.良好
29-35	〃	尾張型 片口鉢	口縁部片			a.輪積み技法 ヨコナデ b.灰白色 砂 小石粒 c.灰白色 e.良好 f.I類
29-36	〃	常滑 片口鉢	底部片			a.輪積み技法 貼り付け高台の上はへら削り b.砂 白色粒 小石粒 c.橙色 e.良好 f.内底面摩滅する 胎土だけ見るとII類に似るが、I類
29-37	〃	常滑 片口鉢	口縁部片			a.輪積み技法 ヨコナデ b.灰色 砂 白色粒 小石粒 c.暗赤褐色 e.良好 f.II類
29-38	〃	常滑 片口鉢	口縁部片			a.輪積み技法 ヨコナデ b.砂 小石粒多い c.橙色 e.良好 f.II類
29-39	〃	備前 すり鉢	体部片			a.1条の目目6本で構成 b.橙灰色 砂 小石粒 白色粒 c.灰色 e.良好
29-40	〃	常滑 甕	口縁部片			a.輪積み技法 外面 ヨコナデ 内面 指頭痕 横位ナデ b.橙色 小石粒多い c.暗褐色 e.良好
29-41	〃	常滑 甕	口縁部片			a.輪積み技法 外面 ヨコナデ 内面 指頭痕 横位ナデ b.灰白色 小石粒多い c.褐色 e.良好 f.縁下部欠損
29-42	〃	常滑 甕	口縁部片			a.輪積み技法 外面 ヨコナデ 内面 指頭痕 横位ナデ b.灰白色 小石粒多い c.灰白色 e.良好
29-43	〃	常滑甕 押印	肩部片			押印：格子
29-44	〃	常滑 摩耗陶片	長さ5.6幅4.4厚さ1.0			側面を3辺及び表面をくまなく摩耗する
29-45	〃	瀬戸 壺	(11.8)	—	—	b.灰白色 良土 d.黒褐色 鉄釉 不透明 e.良好 硬質 f.釉は全体にはがれ僅かに残る
29-46	〃	瀬戸 平碗	口縁部片			b.灰白色 良土 d.灰緑色釉 不透明 e.良好 硬質
30-47	〃	瀬戸 折縁深皿	(20.6)	—	—	b.灰白色 良土 d.緑灰色 透明 e.良好 硬質 f.二次焼成を受ける
30-48	〃	瀬戸 折縁深皿	—	(13.0)	—	a.底部へら削りし露胎 内底面4条の同心円刻まれる b.黄灰白色 良土 d.緑灰色 透明 e.良好 軟質
30-49	〃	瀬戸 緑釉皿	口縁部片			b.灰白色 良土 d.口唇部のみ施釉 緑釉 透明 e.良好 軟質
30-50	〃	瀬戸 片口卸皿	口縁部片			b.黄灰白色 良土 d.緑灰色釉 e.良好 硬質
30-51	〃	瀬戸 入子	(6.6)	—	—	b.灰白色 良土 c.灰白色 e.良好 硬質
30-52	〃	瀬戸 入子	(8.6)	—	—	b.黄 灰白色 良土 c.黄 灰白色 e.良好 硬質
30-53	〃	龍泉窯青磁 蓋	小片			b.暗灰白色 精良堅緻 d.暗 灰緑色 半透明 厚い
30-54	〃	龍泉窯青磁 鎚蓮弁文碗	口縁部片			a.ロクロ 外面片切彫り蓮弁文 b.灰白色 精良堅緻 d.明緑灰色 半透明 厚手施釉 f.単弁
30-55	〃	龍泉窯青磁 鎚蓮弁文碗	口縁部片			a.ロクロ 外面片切彫り蓮弁文 b.灰白色 精良堅緻 d.緑灰色 半透明 厚手施釉
30-56	〃	龍泉窯青磁 米色鎚蓮弁文碗	(11.3)	—	—	a.ロクロ 外面片切彫り蓮弁文 b.橙灰白色 精良堅緻 d.茶色 透明 厚手施釉 f.細かい貫入が入る

表17 遺物観察表(13)

()は復元値

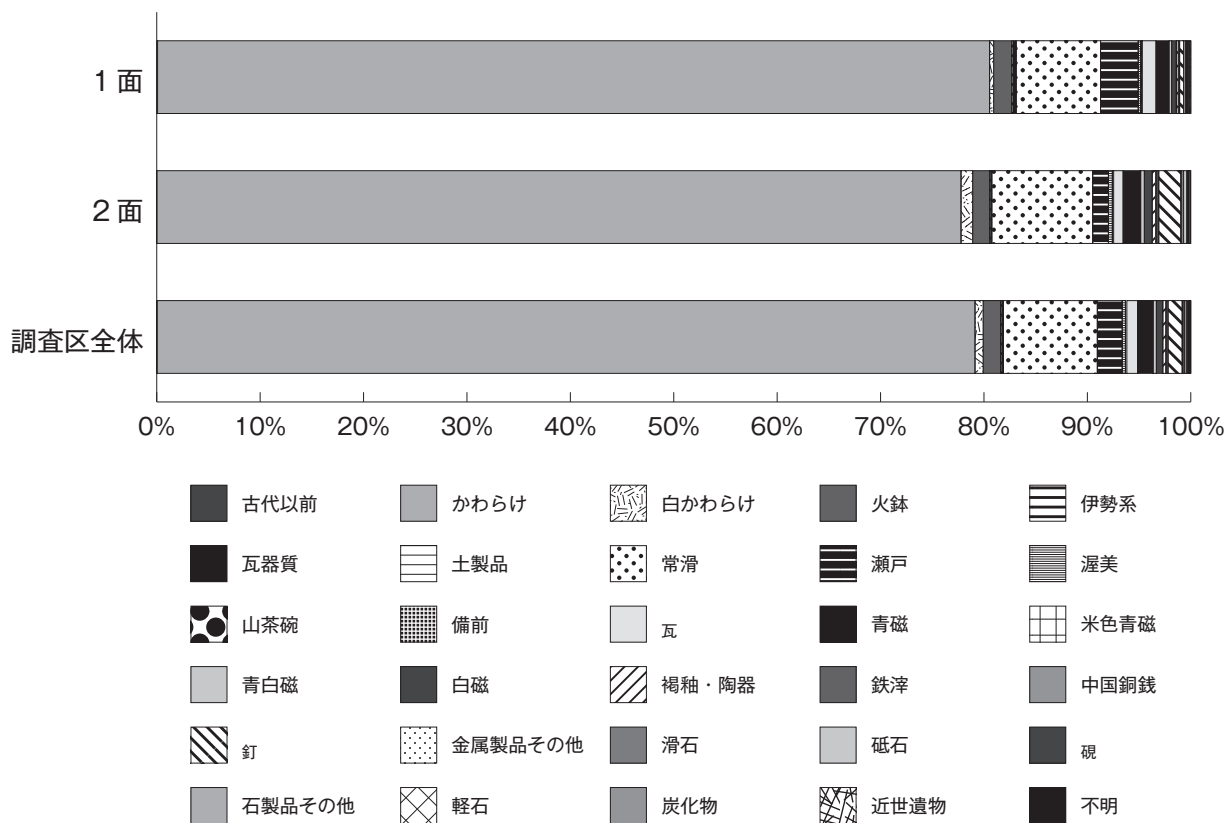
挿図番号	出土面・遺構	種別	口径	底径	器高	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
			(cm)	(cm)	(cm)	
30-57	1 面下 2 面上 出土遺物	龍泉窯青磁 折縁皿	(11.8)	—	—	b.灰白色 精良堅緻 d.緑灰色 透明 厚手施釉 f.内面蓮弁文
30-58	”	龍泉窯青磁 折縁皿	口縁部片			b.灰.白色 精良堅緻 d.緑灰色 半透明 厚い
30-59	”	白磁 口兀碗	口縁部片			b.灰白色 精良堅緻 d.白色 透明 薄手に施釉 e.良好
30-60	”	白磁 口兀印花文碗	(8.0)	—	—	b.灰白色 精良堅緻 d.灰白色 透明 薄手に施釉 e.良好 f.内面印花 口唇部四角く切られる
30-61	”	白磁 口兀印花文皿	(9.4)	—	—	b.白色 精良堅緻 d.白色 透明 薄手に施釉 e.良好 f.内面草花文印花
30-62	”	青白磁 梅瓶	胴部片			b.灰白色 精良堅緻 d.淡青色 透明 やや厚手に施釉 貫入あり e.良好
30-63	”	青白磁 壺蓋	(8.8)	—	1.3	a.口唇部から内側露胎 文様型捺し b.白色 精良堅緻 d.淡青色 透明 厚手に施釉 e.良好
30-64	”	青白磁 仏華瓶	脚部			a.文様型捺し 脚部下から内側露胎 b.白色 精良堅緻 d.淡青色 やや厚手に施釉 e.良好 f.香炉の脚部の可能性あり
30-65	”	青白磁 合子蓋	天井部片			a.文様草花文 型捺し b.白色 精良堅緻 d.淡青色 透明 薄手に施釉 e.良好
30-66	”	褐釉 壺	頸部片			a.ヨコナデ b.灰白色 精良堅緻 c.黒褐色 不透明 e.良好 f.二次焼成を受ける 黒褐釉か
30-67	”	平瓦	(13.0) × (7.8) × 2.1			a.表裏 ナデ 離れ砂 b.灰白色 小石粒 やや粗土 c.灰色 e.良好 f.永福寺Ⅱ期C類と同類
30-68	”	平瓦	(6.2) × (5.2) × 2.0			a.表 ナデ 裏 縄目叩き b.灰色 小石粒多い 粗土 c.灰色 e.良好 f.八幡宮D類と同類
30-69	”	平瓦	(4.0) × (7.3) × 2.1			a.表 糸切り 裏 指頭痕 b.橙色 小石粒多い 粗土 c.橙色 e.良好 f.側面三角形にへら削り 永福寺Ⅰ類と同類
31-70	”	平瓦	(14.3) × (13.8) × 2.2			a.表 糸切り 裏 縄目叩き目 b.灰色 小石粒 やや粗土 c.灰色 e.良好 f.永福寺Ⅰ類A類と同類
31-71	”	軒平瓦	(8.3) × (9.8) × 2.2			a.表 黒色微砂 叩き目転写 裏 二条線に丸に菱形文叩き目 b.灰白色 小石粒 粗土 c.灰白色 e.良好 f.永福寺Ⅱ類と同類
31-72	”	鉄製品 釘	残存長(4.7) × 厚さ0.4			a.鍛造 断面四角形 頂部と先端部欠失
31-73	”	鉄製品 釘	残存長(4.9) × 厚さ0.4			a.鍛造 断面四角形 頂部と先端部欠失
31-74	”	鉄製品 釘	残存長(5.7) × 厚さ0.4			a.鍛造 断面四角形 頂部と先端部欠失
31-75	”	銭	外径2.4 内径1.9 孔径0.7 厚さ0.15			□宋通□北宋 f.真書 書体で当てはまるのは皇宋通寶 初鑄年1038年
31-76	”	滑石 加工品	(5.6) × (3.5)			滑石鍋の鏝の部分を使用 裏面は平坦に擦られている スタンプ加工途中のものか
31-77	”	石製品 硯	(6.4) × (4.4) × 1.6			方硯 裏面剥離している 鳴滝産 若王子石 赤間手
31-78	”	石製品 石臼	(4.7) × (4.9) × (1.4)			使用面以外剥離 使用面摩滅する
31-79	”	砥石 仕上砥	3.4 × (6.8) × (0.6)			一面のみ使用 裏面剥離 鳴滝産
31-80	”	砥石 中砥石	(4.4) × (1.6) × (3.0)			二面使用 二方剥離 天草産
32-1	2 面下 深掘り坑	常滑甕 押印	肩部片			押印：格子
32-2	”	褐釉 壺	胴部片			a.ヨコナデ b.灰色 精良堅緻 c.褐色 e.良好
32-3	”	白磁 口兀皿	—	(8.8)	—	b.灰白色 微砂 精良堅緻 d.乳白色 半透明 やや厚手に施釉 e.良好
32-4	”	鉄製品 釘	残存長(5.2) × 厚さ0.4			a.鍛造 断面四角形 頂部と先端部欠失
32-5	”	鉄製品 釘	残存長(7.4) × 厚さ0.3			a.鍛造 断面四角形 頂部と先端部欠失

表18 出土遺物計量表(1)

			1面		2面		トレンチ		表採		総計	
古代以前古墳以降			2	0.08%	1	0.03%	0	0.00%	0	0.00%	3	0.05%
土器	かわらけ	手捏ね	2	0.08%	6	0.19%	0	0.00%	0	0.00%	8	0.14%
		ロクロ	1431	57.29%	2394	75.66%	49	73.13%	41	89.13%	3915	67.79%
		不明	577	23.10%	60	1.90%	5	7.46%	2	4.35%	644	11.15%
	白かわらけ		8	0.32%	14	0.44%	0	0.00%	0	0.00%	22	0.38%
		高坏	0	0.00%	2	0.06%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.03%
		蓋	1	0.04%	20	0.63%	0	0.00%	0	0.00%	21	0.36%
	火鉢	不明	1	0.04%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%
		I類	7	0.28%	28	0.88%	1	1.49%	0	0.00%	36	0.62%
		II類	1	0.04%	1	0.03%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.03%
		III類	22	0.88%	14	0.44%	0	0.00%	0	0.00%	36	0.62%
	伊勢系	IV類	4	0.16%	2	0.06%	0	0.00%	0	0.00%	6	0.10%
		不明	10	0.40%	7	0.22%	0	0.00%	0	0.00%	17	0.29%
		伊勢系鍔鍋	1	0.04%	1	0.03%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.03%
	瓦器質	伊勢系鍋	2	0.08%	2	0.06%	0	0.00%	0	0.00%	4	0.07%
		器種不明	1	0.04%	1	0.03%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.03%
土製品	土器質	鉢	1	0.04%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%
		香炉	4	0.16%	2	0.06%	0	0.00%	0	0.00%	6	0.10%
国産陶器	常滑	人形	1	0.04%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%
		壺	8	0.32%	17	0.54%	0	0.00%	0	0.00%	25	0.43%
		甕	182	7.29%	247	7.81%	6	8.96%	1	2.17%	436	7.55%
		片口鉢I類	10	0.40%	23	0.73%	3	4.48%	1	2.17%	37	0.64%
		片口鉢II類	2	0.08%	16	0.51%	0	0.00%	0	0.00%	18	0.31%
		山皿	0	0.00%	1	0.03%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%
		山茶碗	1	0.04%	2	0.06%	0	0.00%	0	0.00%	3	0.05%
		すり常滑	1	0.04%	2	0.06%	0	0.00%	0	0.00%	3	0.05%
		不明	0	0.00%	1	0.03%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%
		瀬戸	壺類	7	0.28%	5	0.16%	0	0.00%	0	0.00%	12
	甕		0	0.00%	2	0.06%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.03%
	瓶子		0	0.00%	1	0.03%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%
	仏華瓶		1	0.04%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%
	碗		6	0.24%	1	0.03%	0	0.00%	0	0.00%	7	0.12%
	天目碗		7	0.28%	3	0.09%	0	0.00%	0	0.00%	10	0.17%
	卸皿		9	0.36%	4	0.13%	0	0.00%	0	0.00%	13	0.23%
	折縁皿		34	1.36%	8	0.25%	0	0.00%	0	0.00%	42	0.73%
	皿		10	0.40%	3	0.09%	0	0.00%	0	0.00%	13	0.23%
	洗		1	0.04%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%
	香炉類		3	0.12%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	3	0.05%
	入子		8	0.32%	11	0.35%	0	0.00%	0	0.00%	19	0.33%
	渥美		山皿	0	0.00%	2	0.06%	0	0.00%	0	0.00%	2
		器種不明	4	0.16%	8	0.25%	0	0.00%	0	0.00%	12	0.21%
		加工品	1	0.04%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%
		甕	4	0.16%	9	0.28%	0	0.00%	0	0.00%	13	0.23%
		壺	0	0.00%	2	0.06%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.03%
	山茶碗	片口鉢	1	0.04%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%
		すり渥美	1	0.04%	1	0.03%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.03%
			3	0.12%	3	0.09%	0	0.00%	0	0.00%	6	0.10%
	備前	擂鉢	1	0.04%	1	0.03%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.03%
	瓦	平瓦	25	1.00%	20	0.63%	0	0.00%	0	0.00%	45	0.78%
		軒平瓦	1	0.04%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%
		丸瓦	5	0.20%	8	0.25%	0	0.00%	0	0.00%	13	0.23%
軒丸瓦		1	0.04%	1	0.03%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.03%	
瓦加工品		1	0.04%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%	
舶載	青磁	壺	0	0.00%	1	0.03%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%
		鉢	0	0.00%	1	0.03%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%
		碗	14	0.56%	14	0.44%	0	0.00%	0	0.00%	28	0.48%
		蓮弁文碗	3	0.12%	29	0.92%	0	0.00%	0	0.00%	32	0.55%
		稜花内外蓮弁文碗	1	0.04%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%
		皿	2	0.08%	1	0.03%	0	0.00%	0	0.00%	3	0.05%
		折縁皿・盤	8	0.32%	2	0.06%	0	0.00%	0	0.00%	10	0.17%
		稜花皿	1	0.04%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%
		折腰皿	2	0.08%	1	0.03%	0	0.00%	0	0.00%	3	0.05%
		合子の蓋	0	0.00%	2	0.06%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.03%
	米色青磁	香炉	1	0.04%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%
		白堆文器種不明	0	0.00%	1	0.03%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%
	青白磁	蓮弁文碗	0	0.00%	2	0.06%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.03%
		壺	1	0.04%	1	0.03%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.03%
		梅瓶	3	0.12%	5	0.16%	0	0.00%	0	0.00%	8	0.14%
碗		0	0.00%	1	0.03%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%	
	合子	0	0.00%	3	0.09%	0	0.00%	0	0.00%	3	0.05%	
	水注	1	0.04%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%	

表19 出土遺物計量表(2)

			1面		2面		トレンチ		表採		総計	
舶 載	青白磁	香炉	1	0.04%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%
		脚部	0	0.00%	1	0.03%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%
	白磁	壺	2	0.08%	1	0.03%	0	0.00%	0	0.00%	3	0.05%
		鉢	0	0.00%	1	0.03%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%
		碗	2	0.08%	2	0.06%	0	0.00%	0	0.00%	4	0.07%
		口元碗	1	0.04%	6	0.19%	0	0.00%	0	0.00%	7	0.12%
		皿	0	0.00%	9	0.28%	0	0.00%	0	0.00%	9	0.16%
		口元皿	5	0.20%	3	0.09%	1	1.49%	0	0.00%	9	0.16%
		合子蓋	1	0.04%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%
	器種不明	0	0.00%	2	0.06%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.03%	
	褐釉・陶器	壺	2	0.08%	10	0.32%	1	1.49%	0	0.00%	13	0.23%
盤		1	0.04%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%	
その他		2	0.08%	1	0.03%	0	0.00%	0	0.00%	3	0.05%	
鉄 滓	鉄滓	0	0.00%	4	0.13%	0	0.00%	0	0.00%	4	0.07%	
金属製品	中国銅銭		3	0.12%	5	0.16%	0	0.00%	0	0.00%	8	0.14%
	鉄	釘	10	0.40%	68	2.15%	1	1.49%	0	0.00%	79	1.37%
	その他		4	0.16%	1	0.03%	0	0.00%	0	0.00%	5	0.09%
石 製 品	滑石	滑石鍋	1	0.04%	4	0.13%	0	0.00%	0	0.00%	5	0.09%
		滑石鍋加工品	0	0.00%	1	0.03%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%
		滑石	2	0.08%	1	0.03%	0	0.00%	0	0.00%	3	0.05%
		滑石加工品	0	0.00%	1	0.03%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%
	砥石	中砥・天草	0	0.00%	2	0.06%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.03%
		中砥・伊子	0	0.00%	1	0.03%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%
		仕上砥・鳴滝	1	0.04%	7	0.22%	0	0.00%	0	0.00%	8	0.14%
	硯	鳴滝	2	0.08%	2	0.06%	0	0.00%	0	0.00%	4	0.07%
		ひき臼	0	0.00%	1	0.03%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%
	その他	チャート	2	0.08%	3	0.09%	0	0.00%	0	0.00%	5	0.09%
基石		1	0.04%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%	
石	軽石	0	0.00%	1	0.03%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%	
自然遺物	炭化物(炭)		0	0.00%	4	0.13%	0	0.00%	0	0.00%	4	0.07%
近世遺物			4	0.16%	0	0.00%	0	0.00%	1	2.17%	5	0.09%
不 明			0	0.00%	1	0.03%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%
合 計			2498	100%	3164	100%	67	100%	46	100%	5775	100%



第四章 まとめ

1. 遺構の変遷

遺物の組成を含めこの場の使われ方ははっきりしている。また、今回の調査では掘削深度の規制があり、2面のみの調査であった。しかし手づくねかわらけ等の、面の年代を遡る遺物の出土があることや周辺の遺跡から、遺跡の歴史が鎌倉時代以前に始まることは容易に想像できよう。

以下のように遺跡の変遷を追うが、年代としてはあまり差が出なかった。

今回は2面のみの調査であったが遺跡は3時期に分けられよう。

I期：第2面が相当する。掘立柱建物が2軒建つ。柱穴の重複関係、建物の軸方位、出土遺物から短期間に建て替えられたものと思われ、土地所有者は変わらないであろう。建物は2間×3間以上で、東西、北側に展開する。建物1の柱穴87では柱穴の中央にかわらけが2枚重ねて埋納されていた(図18-16・17)。おおむね13世紀後葉から14世紀前葉のもののみられ、建物及びI期の廃絶期が示される。かわらけ廃棄もしくは埋納遺構とした土坑29・柱穴50・66もいずれも建物より南側に位置するため建物との関係性は注視すべきであろう。土坑30・35の安山岩の集積は周辺もしくはこの地に礎石建物が存在したことを表し、ある程度の規模の建物があったことが推測されよう。遺物の出土傾向を見ると、第1面に比べ貿易陶磁は目に見えて増加した。どれも小片であり、この期に属するものではないにしろ周辺もしくは前時代の遺物の紛れ込みであることは確かである。周辺を含めこの地が屋敷地であったことが窺える。また、先に触れた礎石集石遺構の存在から周辺に寺院があったことも視野に入れたい。I期の年代は13世紀後葉から14世紀前葉までとする。

II期：かわらけ、白かわらけにより祭祀を行った時期である。確実にI期の建物や遺構が廃絶した後であり、第1面の地形がなされる前である。年代は14世紀前葉である。ここで一時期、祭祀行為を行った時期を設けたい。

III期：第1面が相当する。砂質凝灰岩を組んだ井戸、かわらけ溜り、土坑、柱穴の検出がある。第1面は上層を削平されており、全ての遺構が面に伴うものではなく、上層より掘り込まれた遺構もあるため、15世紀の遺物を伴う遺構も見られた。柱穴は多く検出したが建物は捉えられなかった。しかし石組みの井戸の存在から居住空間の縁辺部であることが想定できる。検出された井戸は鎌倉石の切石によるしっかりとした石組みを持つ物であり、やはり武家屋敷を連想する。井戸の年代は14世紀後半から15世紀である。第1面の年代は14世紀代が主体で15世紀までの幅を持ちたい。

2. 出土遺物と計量比について

出土した遺物を総破片数計量し表5にまとめた。やはり飛び抜けてかわらけは多いが、第1面のかわらけ溜りや第2面のかわらけ廃棄・埋納遺構によるものも大きいと思われる。第1面のかわらけ溜りは平面的な出土であった。大皿を主体とし、その対比は、大皿、小皿、不明の順で294:16:421であった。そこからもわかるように残存率が悪く細かな破片ばかりであったことは、いわゆる「宴会」後の廃棄によるものではなく、そこで投げ割った様な行為が看取され、祭祀的な様相が強く感じられる。また、第2面のかわらけ廃棄・埋納遺構は3カ所あった。各遺構の大皿と小皿(中皿)の対比は、土坑29は19:8。柱穴50は10:1(中皿)土坑66は19:1である。大皿が主体であり、供膳具の構成を持たないのではないか。土坑や柱穴といった落ち込みそのものの廃棄に伴う埋納儀礼の一種、もしくはその地に対する祭祀的な要素が色濃く伝わる。いずれも建物1・2より南側であることも注視したい。

第2面のかわらけ溜りのかわらけは74片出土し、図示しえたのは5点である。その内2点の小型と中型のかわらけは口縁に油煙煤を付着させる。白かわらけは20片出土している。そのほとんどは蓋のようであり、図示しえたものは8点である。また、第2面上まで掘り下げる間に至近の距離で白かわらけ質の高坏の脚部とそれに伴う坏部の出土もある(図29-29)。胎土・成形から在地産のものと考えられる。

中国の青銅器の祭器に「豆(トウ)」という高坏がある。土器としては新石器時代から存在し、青銅器としては西周前期からあるが、増えるのは西周後期以降で、戦国時代まで作成された。春秋時代後期からは細長いフォルムになり、蓋付きになったという。今回出土した高坏はその模倣であり日常の飲食器ではなく、何かの祀り事の後に、意識的に高坏を割って廃棄している可能性がある」と河野真知郎氏から御教示を賜った。

出土した白かわらけは蓋のみである。市内の遺跡でこの器形は時折出土している。1992年に報告された「無量寺跡」のやぐらの調査ではロクロ成形の白かわらけと一緒に蓋がまとまって検出された。その中の三点は墨書土器であり、「□庚申□」と解釈された。庚申信仰が日本に伝わったのは8世紀後半で、朝鮮半島経由ではないかと言われている(飯島1998)。また、民間に広まり始めたのは室町時代後期とされる。庚申信仰は中国の道教で説く、庚申の夜は三尸(さんし)の虫が睡眠中の身体から抜け出し、天に昇り天帝に罪過を告げるとする三尸説を中心に、仏教、道教、修験道、呪術的な医学、日本の民間の様々な信仰や習俗が集合して独自の展開をした。平安時代では主に酒饌を賜り、碁、詩歌管絃その他の遊びをしながらの徹夜であった。形式こそ道教の説く三尸説とは違うが、目的と精神は三尸説同様長生きである。『吾妻鏡』では「守庚申」として記事が載る。その初見は建暦三年(1213年)三月十九日の「今夜御所に庚申を守り御會あり。」とある。しかしこの日は鎌倉中不穩のため営中の庚申会を中止している。その後も、建保五年(1217年)八月十五日「明日に望みて庚申を守り、當座の和歌御會あり。」、嘉禎三年(1238年)三月九日「今夜新御所に始めて和歌の御會あり。庚申を守らるるなり。」などの記事があり庚申の夜は夜を徹して和歌に興じた様子を物語る。また、平安時代前期の天台宗僧侶円仁による『入唐求法巡礼行記』の承和五年(838)十一月二十六日の条に「その晩に中国の人がみな寝なかったのは、日本の正月庚申の夜と同じ」と記されている。次いで市内遺跡の出土例をあげると、1990年に報告された「若宮大路周辺遺跡群」では未報告資料であるが、白かわらけの蓋に「度嶂散(どしょうさん)」と墨書されていたものがある(馬淵和雄氏提供、能芝勉氏教示による)。他に、1999年に報告された「北条時房・顕時邸跡」ではやはり白かわらけの蓋に「□□散」と墨書され、報告者は薬壺の蓋であろうかと指摘している。同様のものが京都府の鳥羽離宮から出土している。京都では「白色土器」として報告されているこの土器の基本的な器形は碗、皿(高台付きと無高台がある)、高坏、三足盤、耳皿、台付き皿、蓋、壺類などがある。鳥羽離宮から平安末期にあたる「白色土器」の蓋が出土している。しかも墨書されており、「度嶂散」「白散」と書かれていた。「度嶂散」「白散」は邪気払いに年始に飲用する薬名とみられ、『延喜式』典薬寮には元旦御薬として記載されている。この蓋はそれらの容器のものと見ることができよう。との報告がある(平尾1994・吉村1994)。出土傾向として、特異な出土状況を示す例が内裏やその周辺に集中している。この土器が宮中を中心とする特定の用途に使用された器物として理解出来る可能性を示唆していると指摘されている。

今回のかわらけ溜りには墨書土器の出土はなかったが、上記した遺物との関連は強く、祭祀的な要素を大いに含む。また、図21-12・13のように遺物が円盤状に摩滅していることは注視すべきである。人為的ととれるからである。共伴遺物として灯明皿が出土している点も興味深い。年代は13世紀後葉から14世紀前葉が考えられる。

釘とみられる鉄製品は遺跡全体で79本の出土である。掘立柱建物が主体の本遺跡にしてはかなり多いとみていいだろう。その内18本は土坑30からの出土であり、有機物の残らない土壌がら木製品は残存していないが、

釘を多用した木製品の存在が土坑30内に想定できる。また釘の多さは建物に関わるものかもしれない。

1997年に馬淵が試みた総破片数計量による中世都市鎌倉の食器消費の状況から論じた食文化のあり方(1997馬淵)をふまえ、遺跡の傾向を見ていきたい。

馬淵は市内を都市中核部・武家屋敷・町屋地区・海岸部の四つに分け、とりわけ「土師器皿」(かわらけ)の消費のあり方に注目して比較検討している。今回の遺跡は位置的に都市中核部と海岸部から外れ、武家屋敷、町屋的に該当するが、遺構は石積みの井戸と柱穴ばかりであった。それだけでは馬淵の分けた残りの武家屋敷、町屋地区のいずれに該当するかは不明である。遺物の比較を見ていきたい。かわらけ、国産陶器、中国陶磁器の順で78.98:11.84:2.71となる。かわらけは武家屋敷的もしくは町屋的であり、国産陶器は武家屋敷的である。意外に数値の出た中国陶磁器は武家屋敷に最も近い。遺物の全体の出土傾向は馬淵の分類によれば、武家屋敷的と言える。もちろん目立って完形品が出土している訳ではなくどれも破片ばかりであり、客土・包含層出土によるものが多いが、周辺の犬懸ヶ谷、宅間ヶ谷に管領屋敷があったとされており、この二つの谷に挟まれた遺跡地もそういった性格は色濃いのではないか。

京都での「白色土器」は宮中を核とした貴族社会の伝統的な行事に供されるという特殊な用途を持つ。第2面のかわらけ溜りもまた公的な富裕層の存在を思わせる。そして時を空けずして建て替えられた2軒の掘立柱建物の存在、礎石建物を連想させる土坑30・35の集石、第1面の石組みの井戸等、この地は管領屋敷の一角であったことが窺えないか。

引用・参考文献

- 神奈川県企画調査部県史編集部1973『神奈川県史 資料編』1・2 (財)神奈川県共済会
上本進二2000「鎌倉・逗子の地形発達史と遺跡形成」『池子棧敷戸遺跡』東国歴史考古学研究所
馬淵和雄1997「食器から見た中世都市鎌倉」『国立民族博物館研究報告』71 国立歴史民族博物館
馬淵和雄2004「中世史学としての土器研究—モノ・空間認識・文化伝播—」『中近世土器の基礎研究』xⅧ日本中近世土器研究会
馬淵和雄1994「武士の都鎌倉」『中世の風景を読む』2 新人物往来社
貫志正造・永原慶二1989『全譯 吾妻鏡』3・5 新人物往来社
河野真知郎1993「中世鎌倉火鉢考—東国との関連において—」『考古論叢 神奈河』2 神奈川県考古学会
河野真知郎1992「鎌倉の搬入土器と在地土器」『中近世土器の基礎研究』Ⅷ 日本中近世土器研究会
清水菜穂1994「「かわらけ」考(3)—鎌倉市検出の一括廃棄遺構に関する若干の基礎的検証—」『中世都市研究』3 中世都市同人会
高柳光壽1967『鎌倉市史 総説編』吉川弘文館
西岡芳文2004「港湾都市六浦と鎌倉」『中世都市鎌倉の実像と境界』高志書院
上田明美1981「「横大路」考」『鎌倉考古』5 鎌倉考古学研究所
松尾剛次1993『中世都市鎌倉の風景』吉川弘文館
平尾政幸1994「緑釉陶器・灰釉陶器・白色土器」『平安京提要』角川書店
吉村正親1994「墨書土器」『平安京提要』角川書店
秋山進午1979『古代中国の土器 陶磁体系33』平凡社
石井進1988「都市と景観の読み方」『日本の歴史・別冊』朝日新聞
石井進1989『よみがえる中世3』平凡社
芸能史研究会編『日本芸能史 2 古代—中世』法政大学出版局
安田次郎『寺社と芸能の中世』山川出版
石井進他『神奈川の地名』平凡社
鈴木庸一郎『宅間谷東やぐら群』(財)かながわ考古学財団
鈴木庸一郎・菊川英政2001「『古都鎌倉』を取り巻く山稜部の調査」神奈川県教育委員会・鎌倉市教育委員会・(財)かながわ考古学財団
原廣志「出土瓦について」2002『永福寺跡』鎌倉市教育委員会



▲第1面近景(南から)



▲第1面全景(井戸1を中心に・北から)



▲第1面全景(南から)



▲第1面上遺物出土状況(北から)



▲第1面かわらけ溜り遺物出土状況(東から)



▲第1面井戸1 (北から)

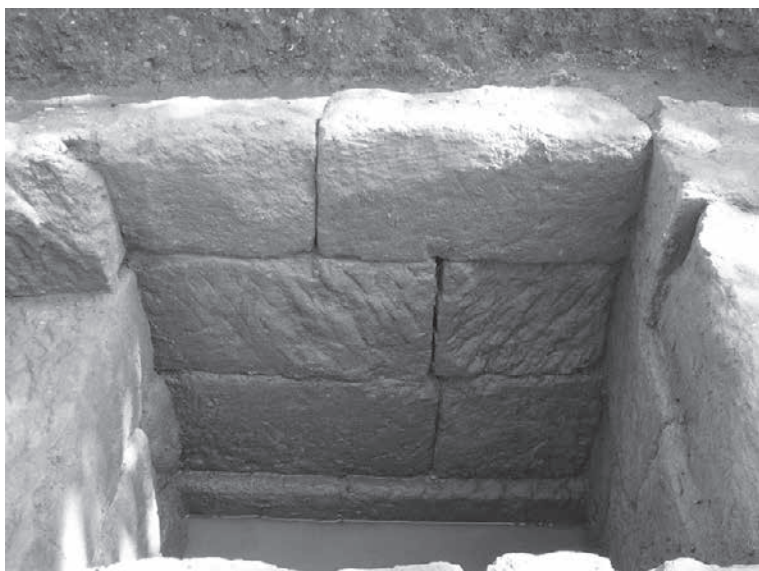


▲第1面井戸1 西面 (東から)

▼第1面井戸1 南東隅接合面 (北西から)



▲第1面井戸1 東面 (西から)



▲第1面井戸1南面(北から)



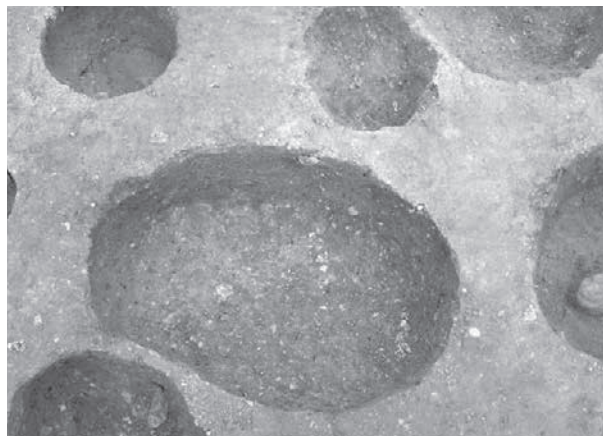
▲第1面井戸1南面鑿痕アツブ



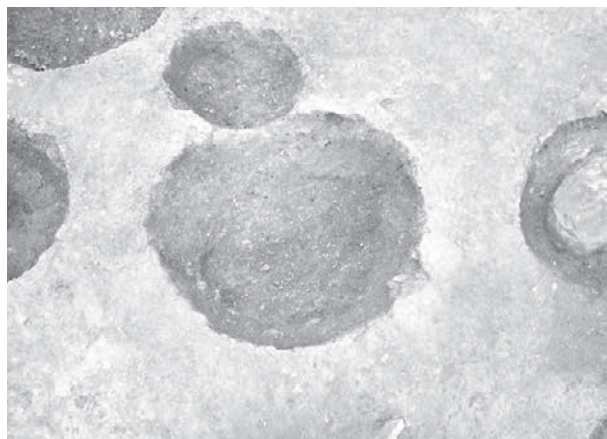
▲第1面井戸1北面(南から)



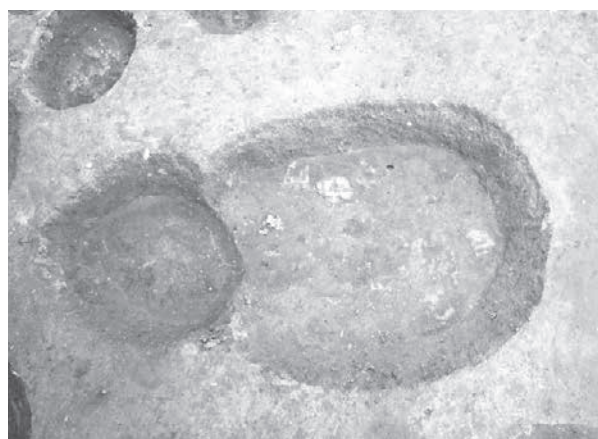
▲第1面柱穴102(南から)



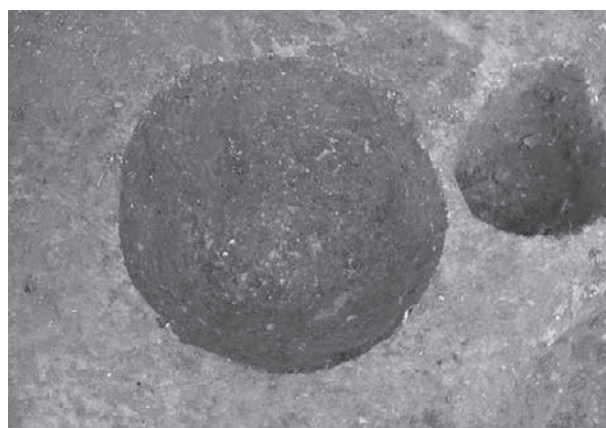
▲第1面土坑1(南から)



▲第1面土坑3(北から)



▲第1面土坑4(北から)



▲第1面土坑5(西から)



▲第1面土坑6(北から)

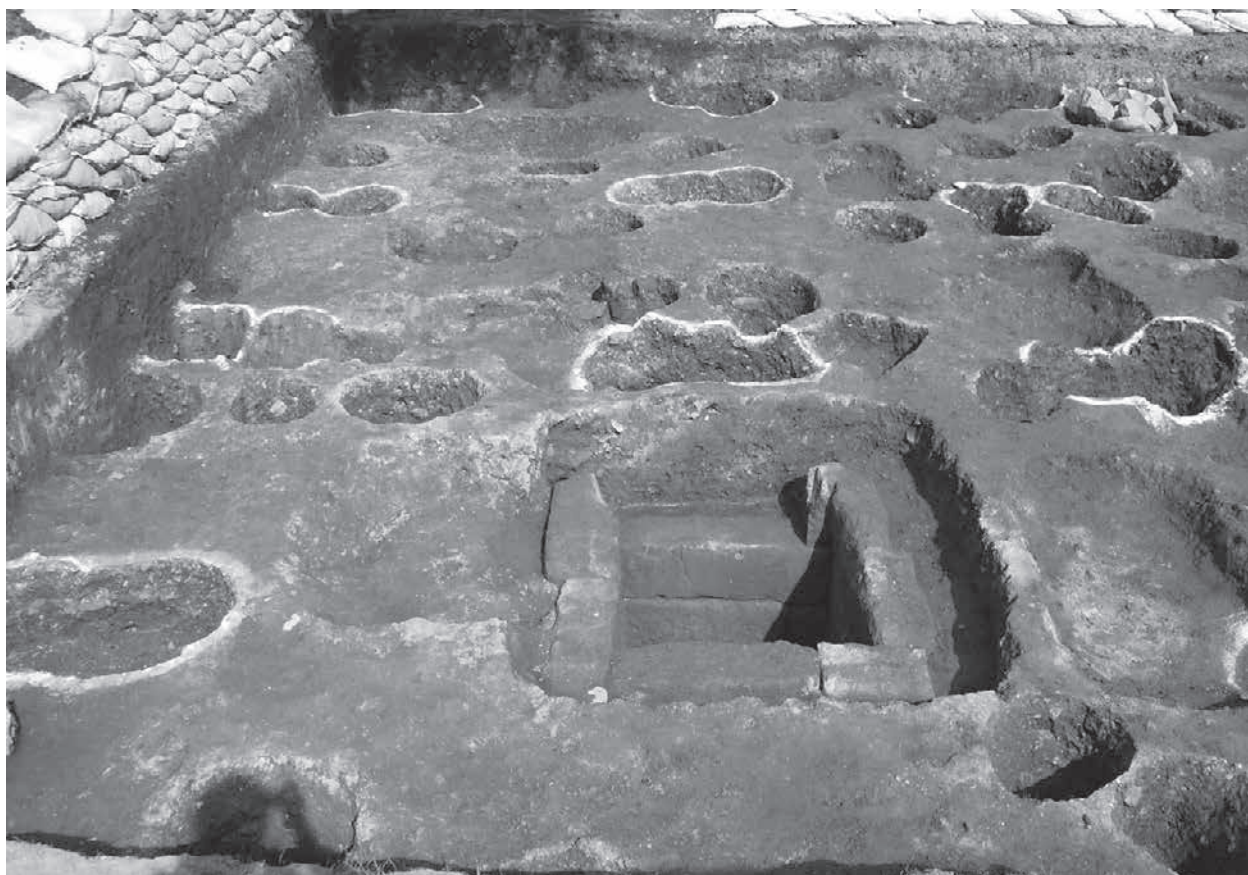


◀第1面土坑13周辺(東から)





▲第2面全景（南から）



▲第2面全景（東から）



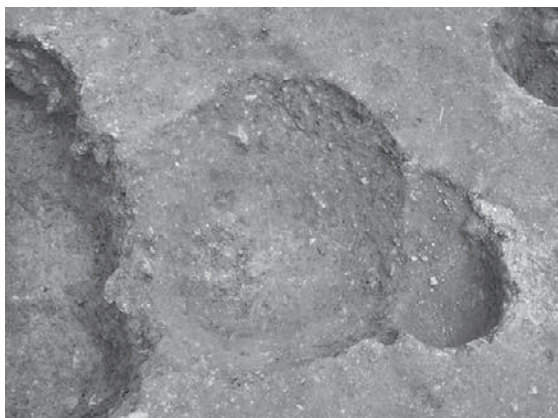
▲第2面建物・柱穴53・87(東から)



▲第2面柱穴87遺物出土状況(南から)



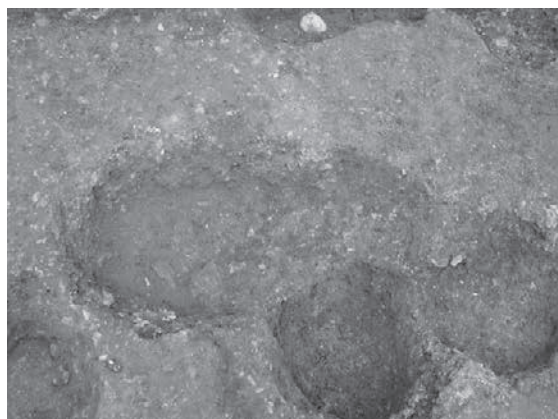
▲第2面かわらけ溜り(東から)



▲第2面土坑19(南から)



▲第2面土坑20(東から)



▲第2面土坑23(東から)



▲第2面土坑26(西から)



▲第2面土坑27(西から)



▲第2面土坑29(南から)



▲第2面土坑30・35(北から)



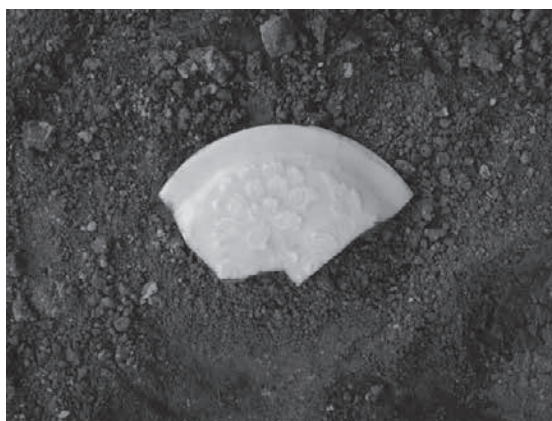
▲第2面土坑30(北から)



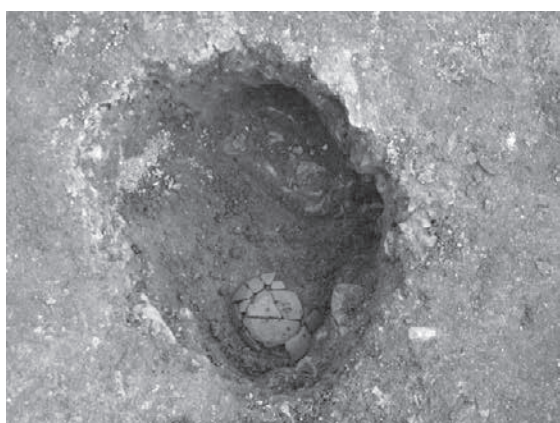
▲第2面土坑35(東から)



▲第2面土坑35 (南西から)



▲第2面上遺物出土状況 (南から)



▲第2面柱穴50 (北から)



▲第2面柱穴50 遺物出土状況 (北から)



▲ 2面下深掘坑（東から）



▲ 調査区南壁土層堆積



▲ 調査区東壁土層堆積

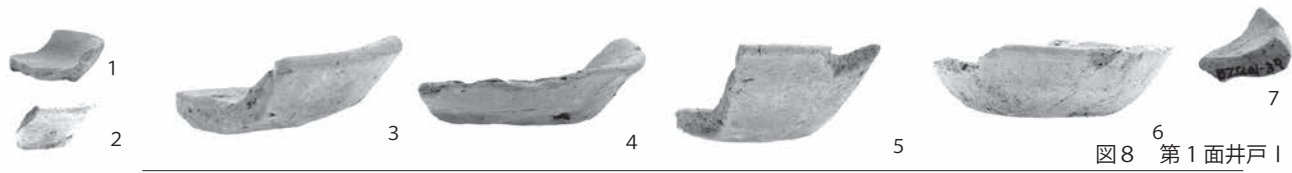


図8 第1面井戸 I

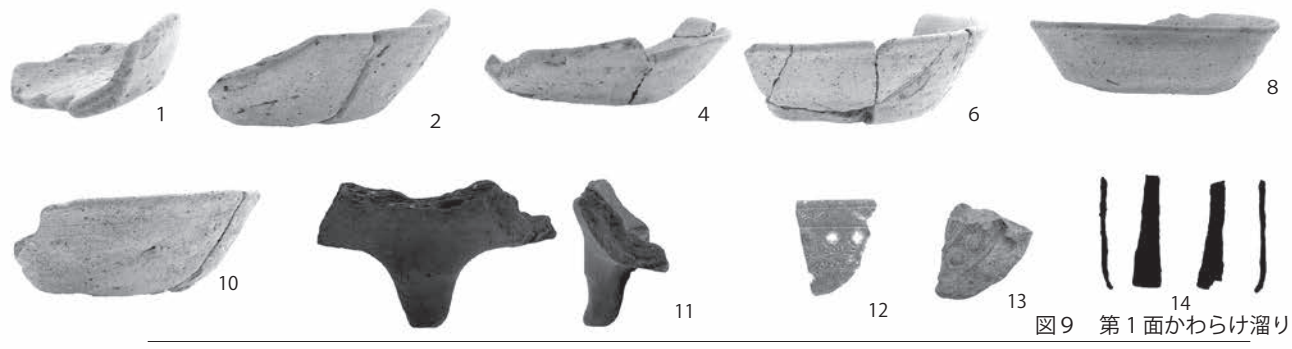


図9 第1面かわらけ溜り

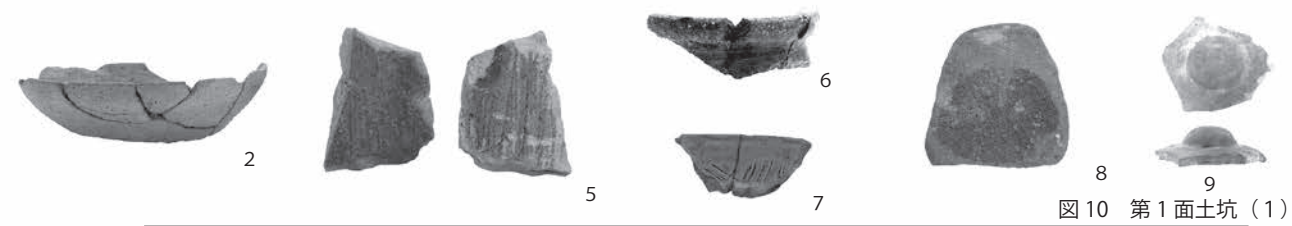


図10 第1面土坑 (1)

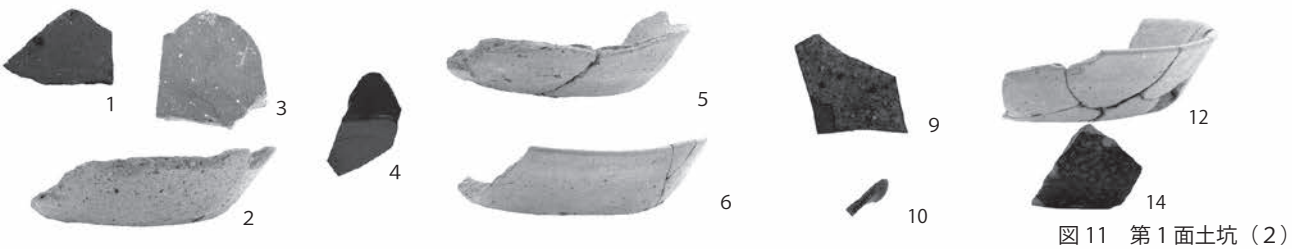


図11 第1面土坑 (2)

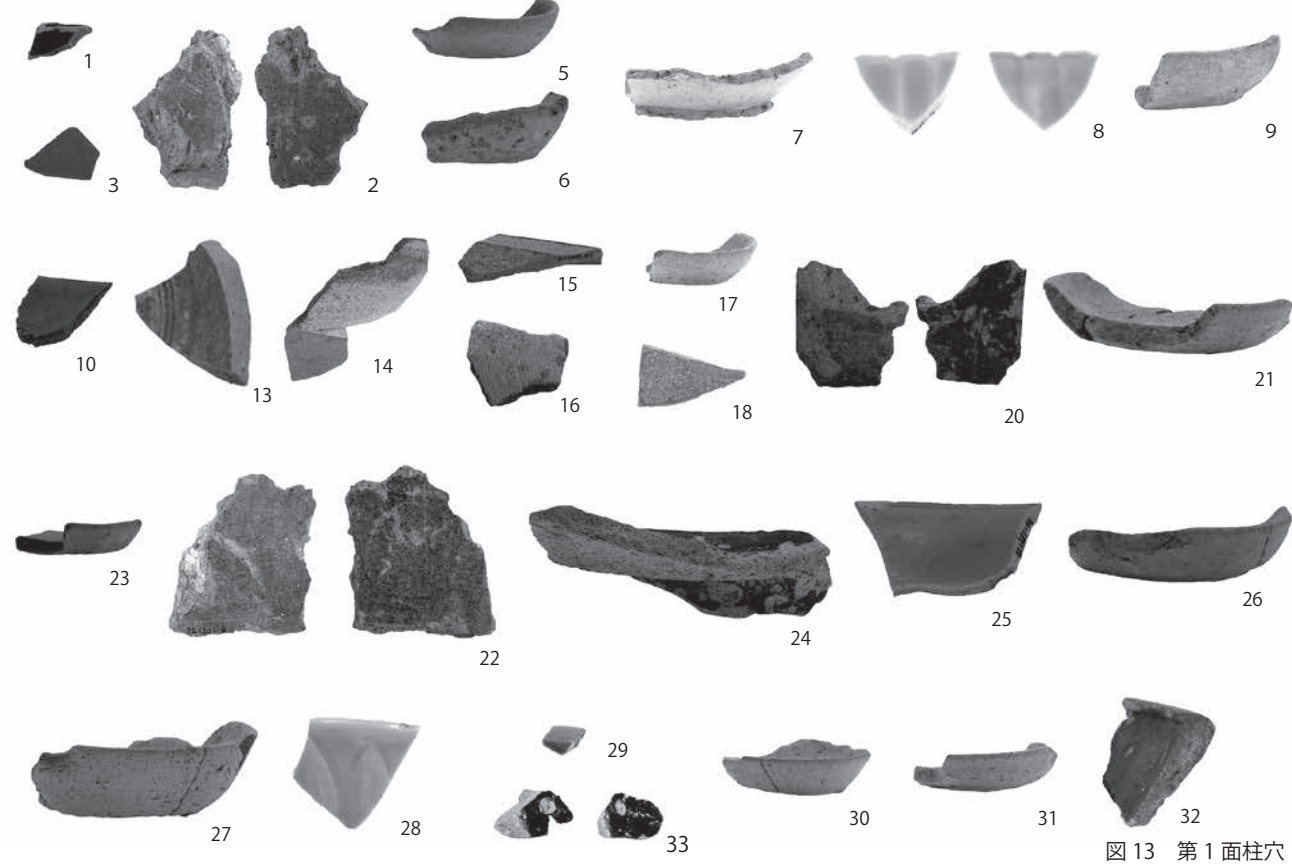


図13 第1面柱穴

图版 13

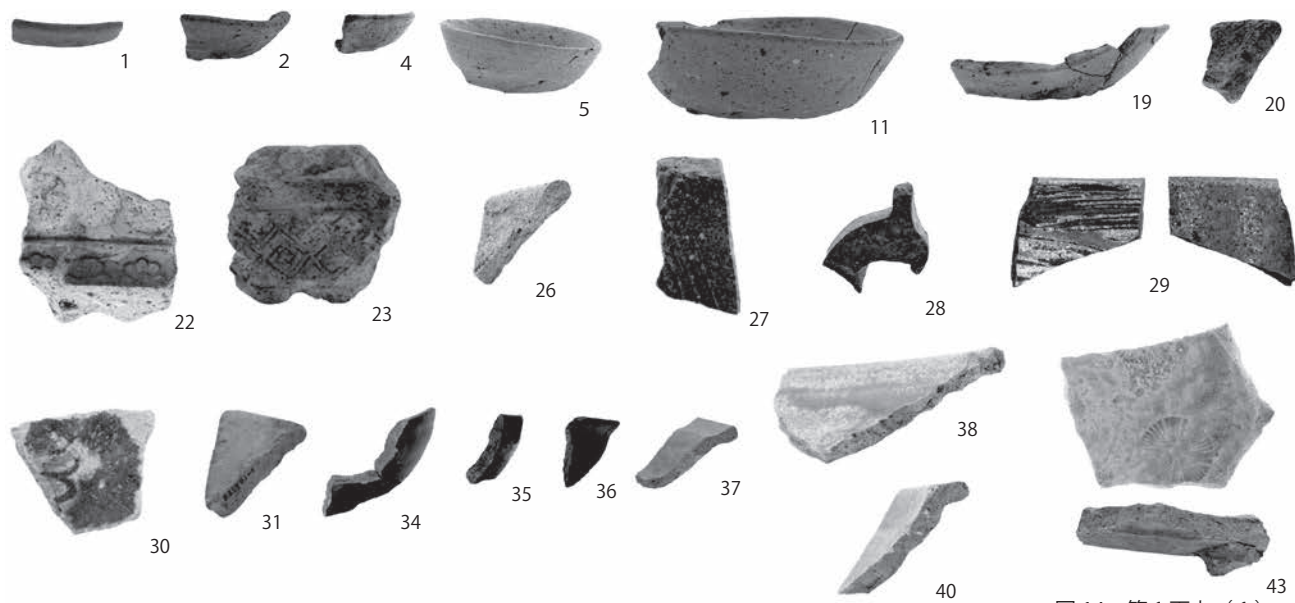


图 14 第 1 面上 (1)

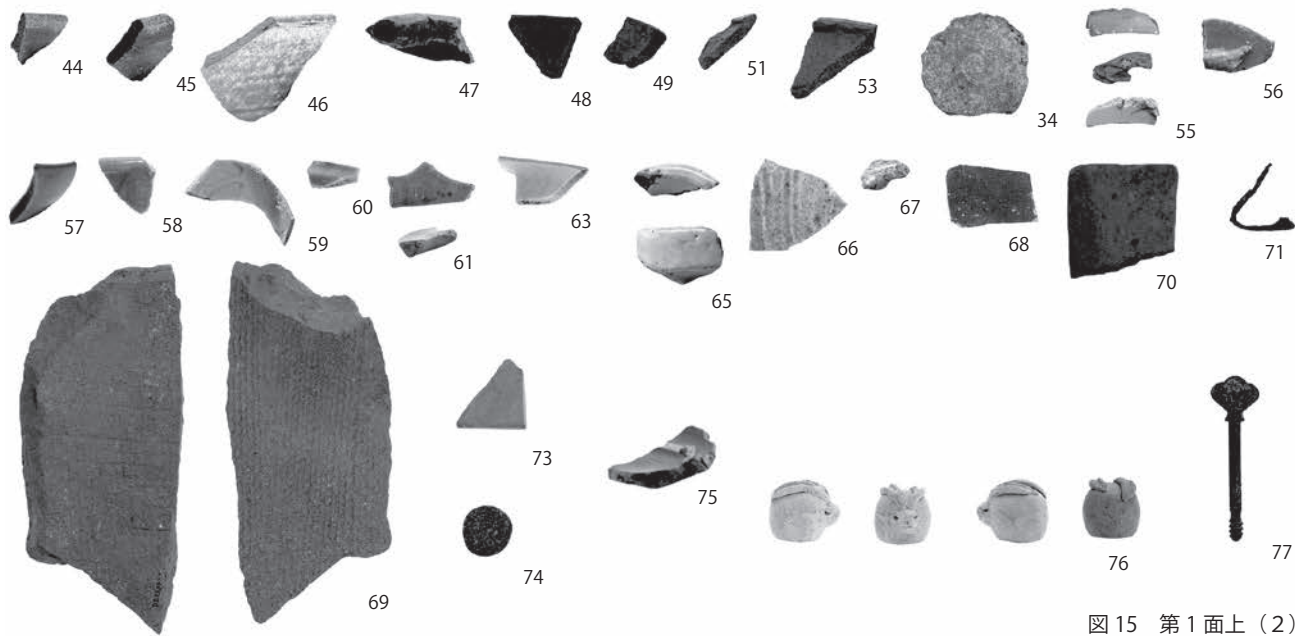


图 15 第 1 面上 (2)

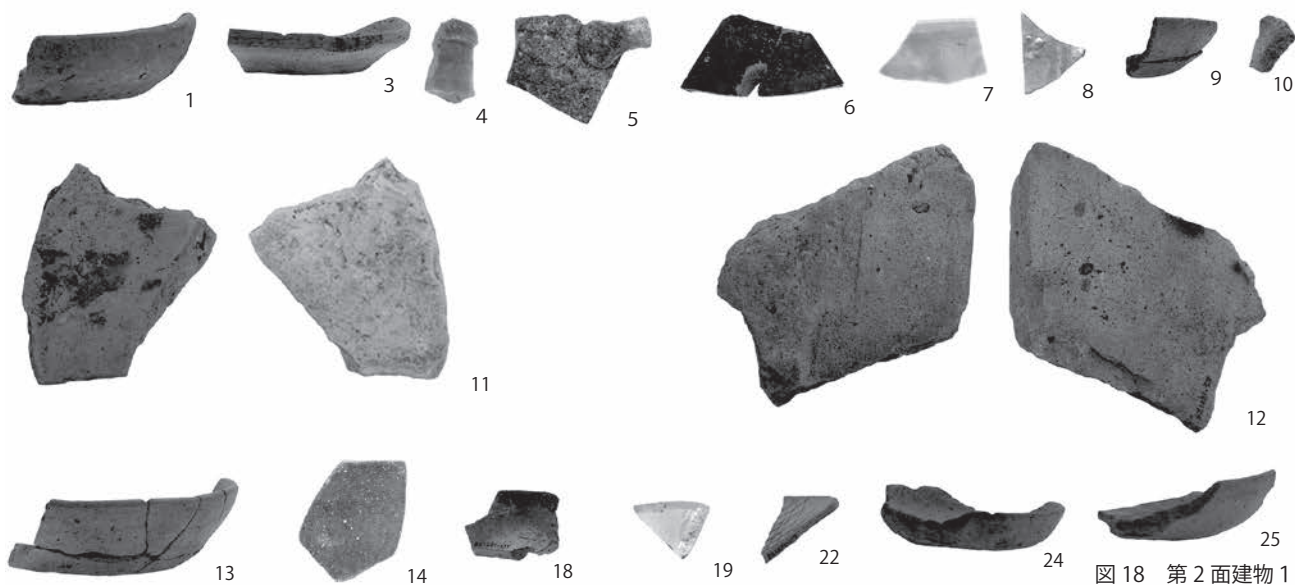


图 18 第 2 面建物 1



16・17 出土状況

図 18 第 2 面 建物 1



図 20 第 2 面 建物 2

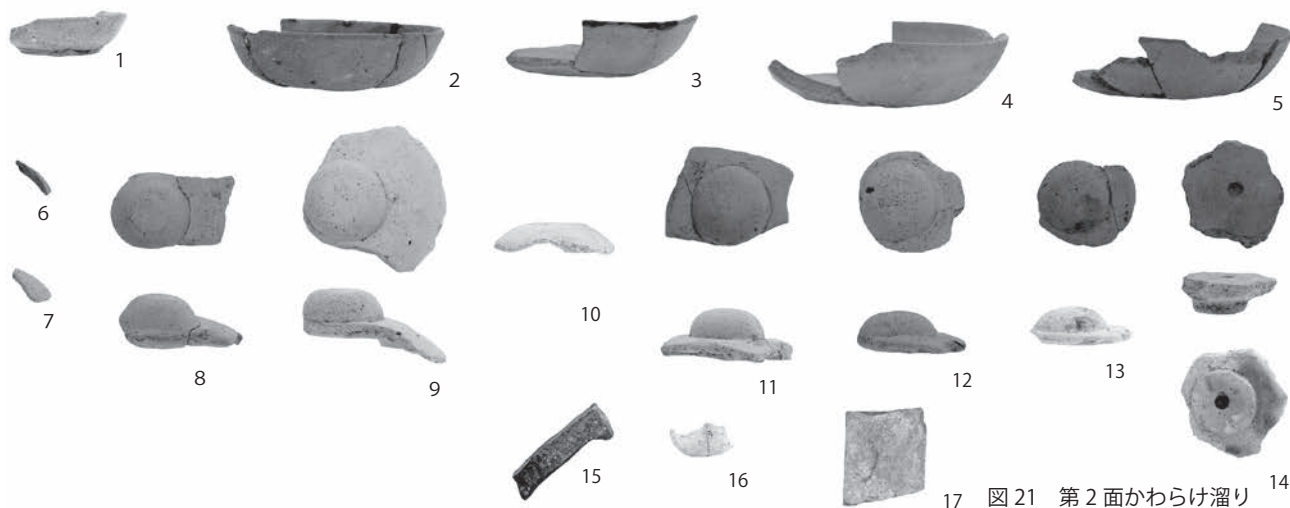


図 21 第 2 面かわらけ溜り 14

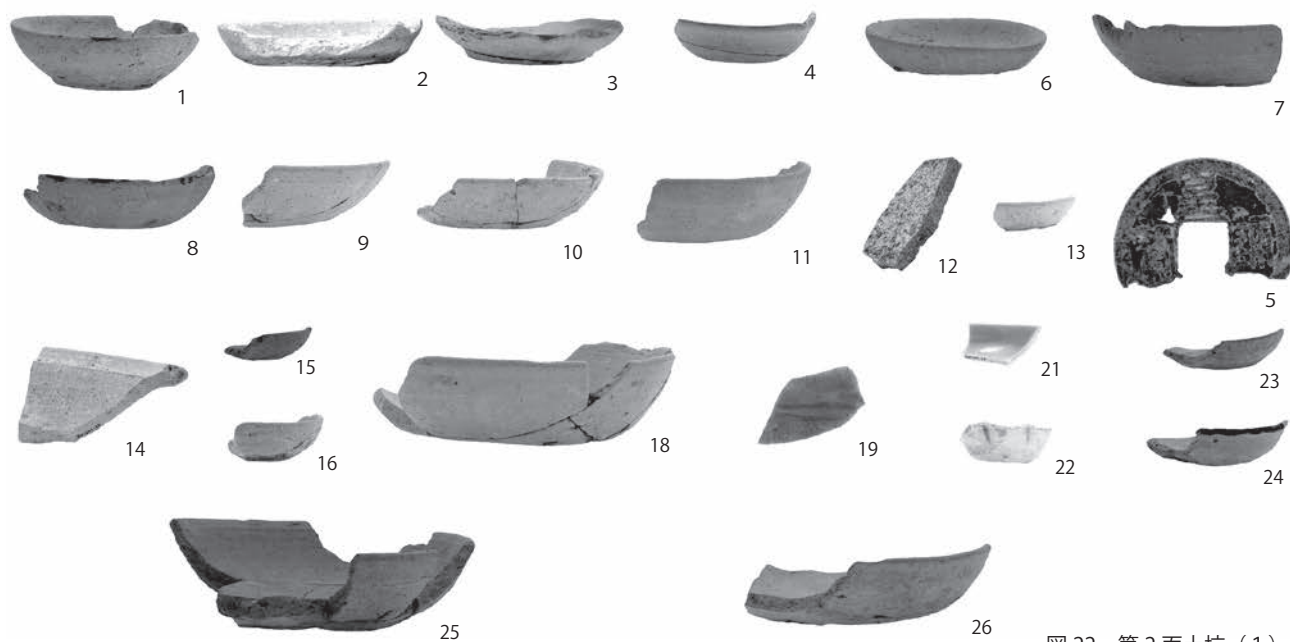


図 22 第 2 面土坑 (1)

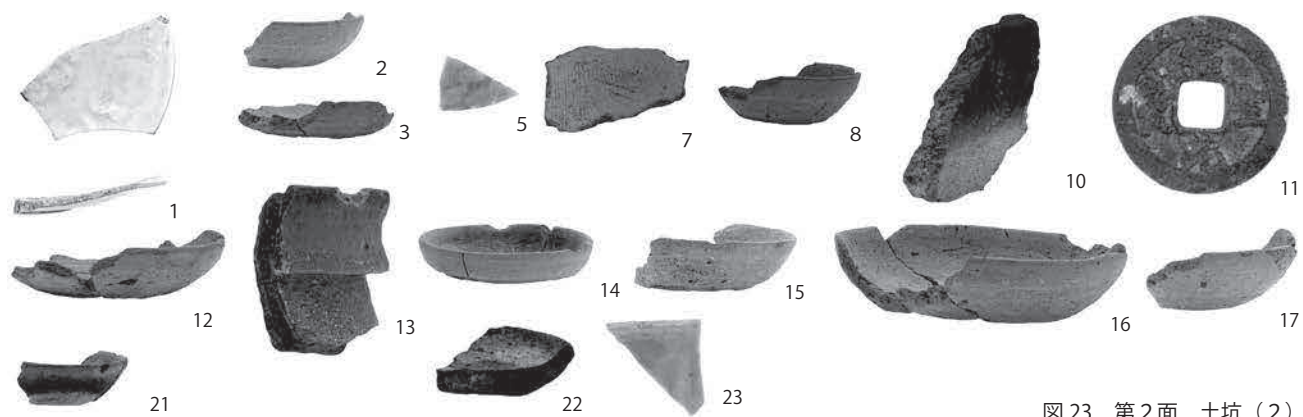


图 23 第 2 面 土坑 (2)

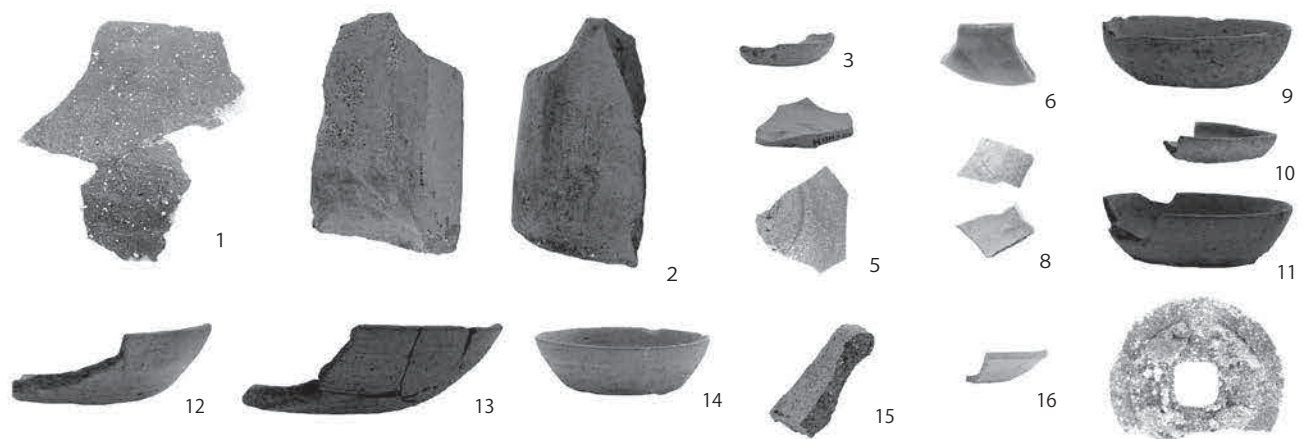


图 24 第 2 面土坑 (3) 18

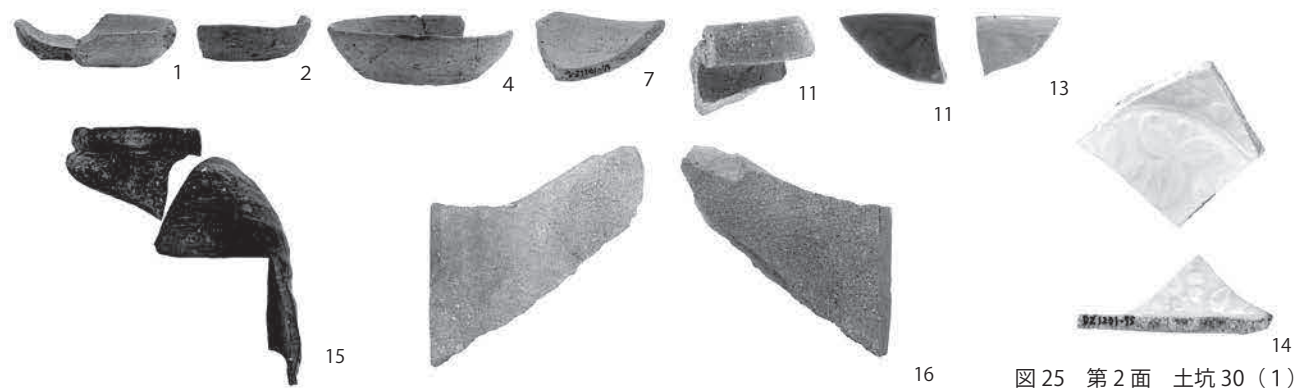


图 25 第 2 面 土坑 30 (1)

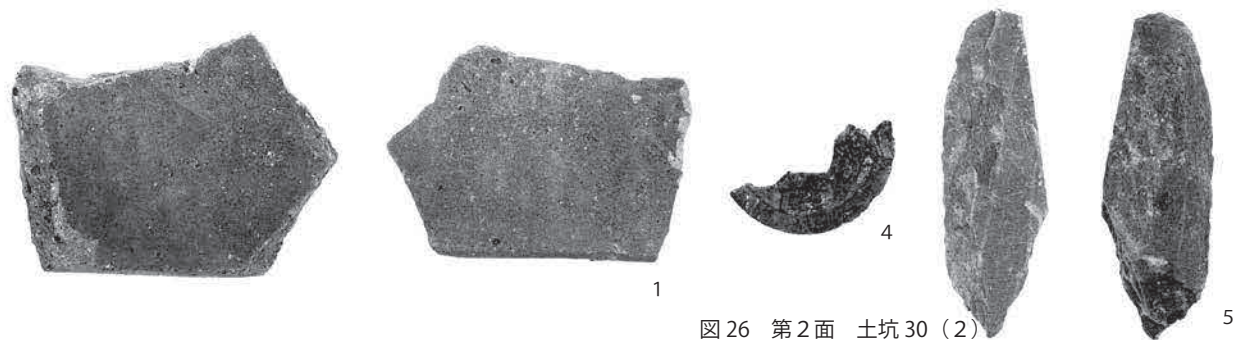


图 26 第 2 面 土坑 30 (2)

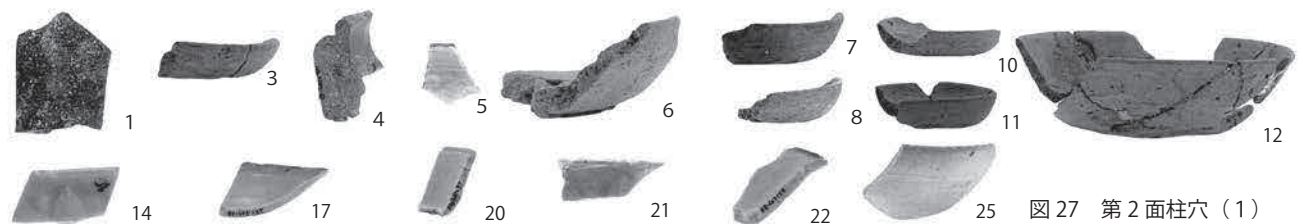


图 27 第 2 面柱穴 (1)

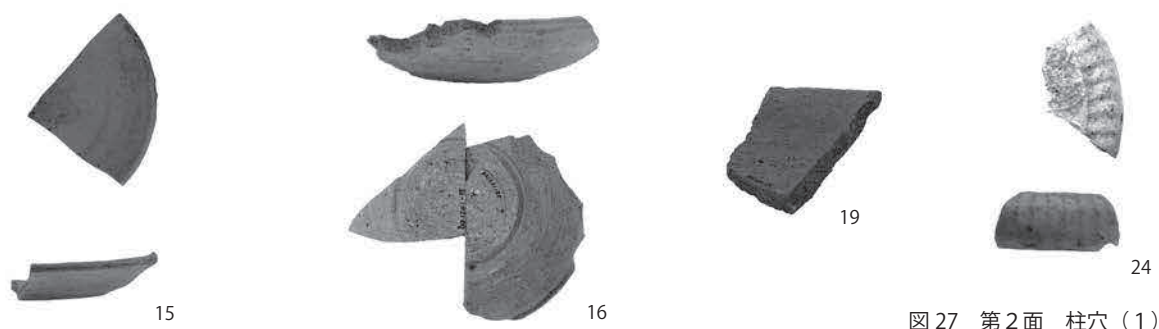


图 27 第 2 面 柱穴 (1)

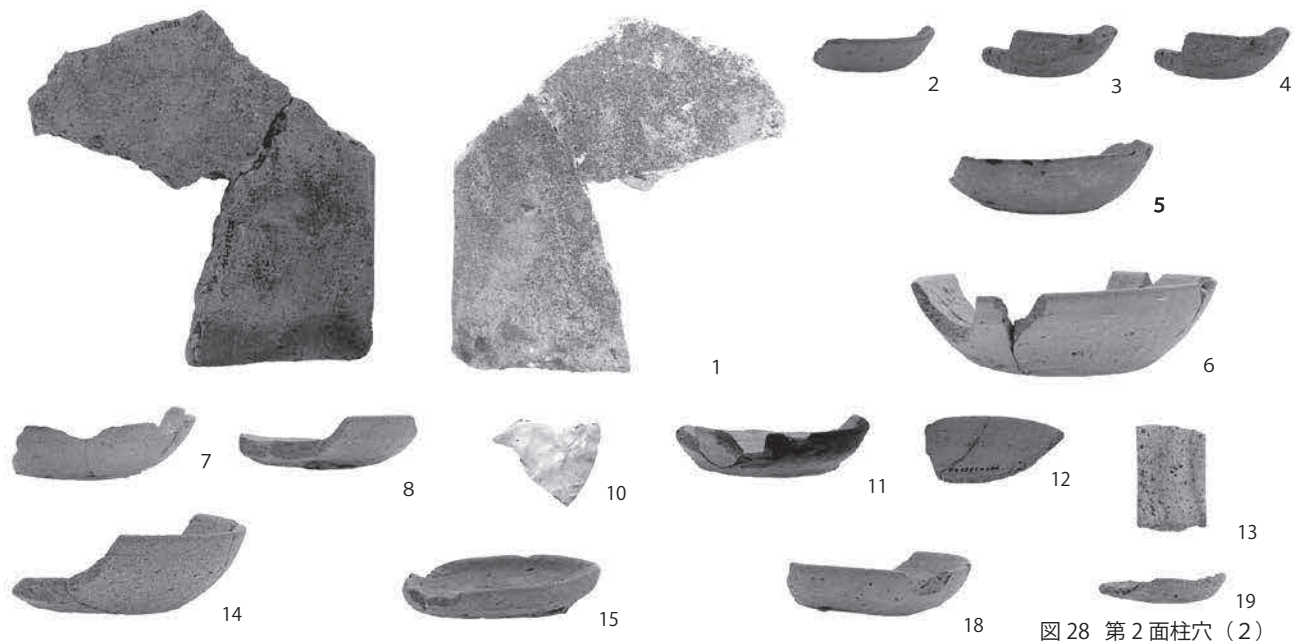


图 28 第 2 面柱穴 (2)

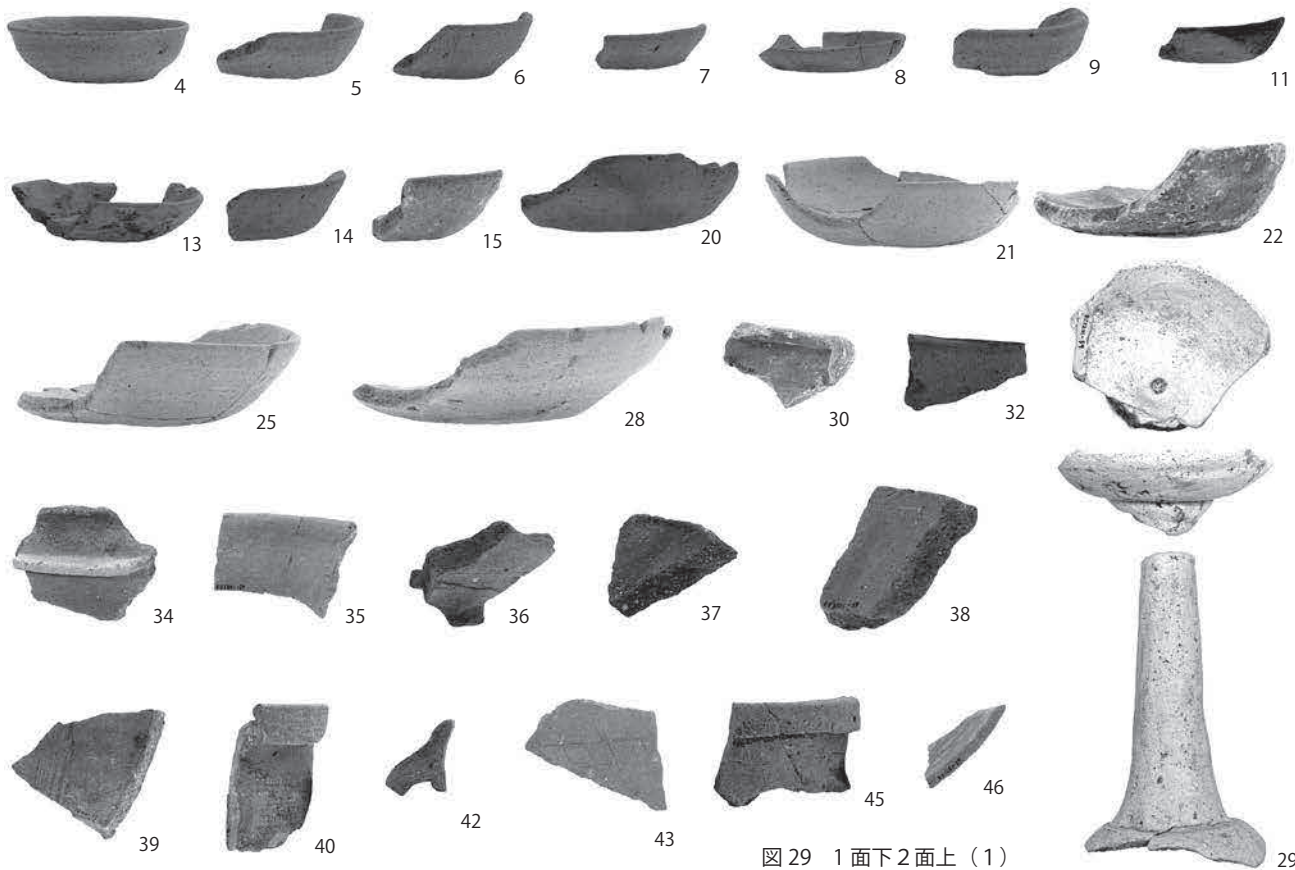


图 29 1 面下 2 面上 (1)

图版 17

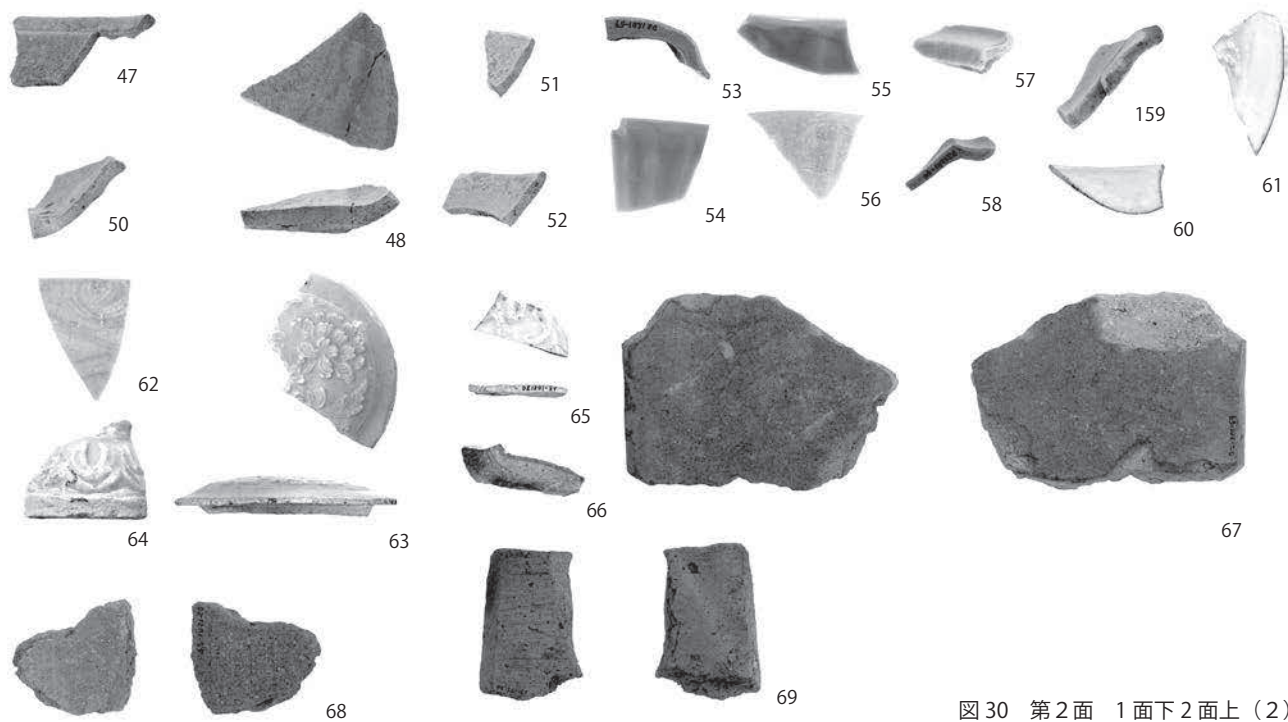


图 30 第 2 面 1 面下 2 面上 (2)

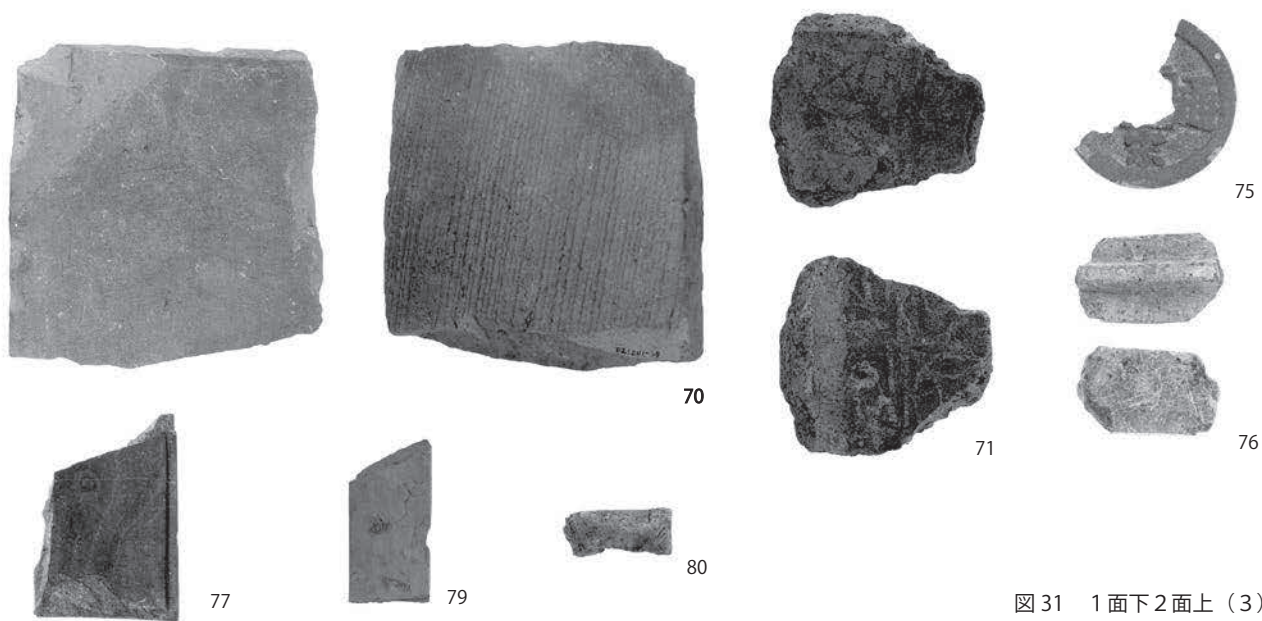


图 31 1 面下 2 面上 (3)

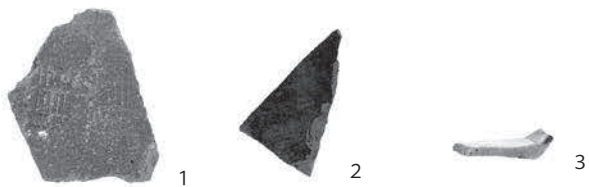


图 32 2 面下深堀坑



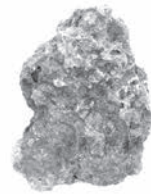
出土した釘



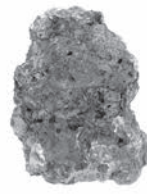
チャート



使用痕のある軽石



鉄滓



炭化物

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいぎんきゅうちようさほうこくしよ							
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書							
副書名	平成25年度調査報告							
巻次	30 (第2分冊)							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者	福田 誠/山口正紀/山口正紀/押木弘己/押木弘己/根本志保							
編集機関	鎌倉市教育委員会							
所在地	〒248-8686 鎌倉市御成町18番10号							
発行年月日	西暦2014年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
たまなわじょうあと 玉縄城跡	神奈川県鎌倉市 植木字植谷戸 207番1外	14204	63	35° 21' 07"	139° 31' 02"	20080414 ～ 20080516	76.00	個人専用 住宅 (地盤の柱状改良)
うえずぎさだましていあと 上杉定正邸跡	神奈川県鎌倉市 扇ガ谷二丁目 195番2	14204	188	35° 18' 23"	139° 33' 22"	20090213 ～ 20090410	25.00	店舗併用 住宅 (地盤の柱状改良)
しんぜんこうじあと 新善光寺跡	神奈川県鎌倉市 材木座四丁目 579番4	14204	279	35° 19' 28"	139° 33' 02"	20090413 ～ 20090605	50.00	個人専用 住宅 (地盤の柱状改良)
わかみやおおじしゅうへんいせきぐん 若宮大路周辺遺跡群	神奈川県鎌倉市 小町二丁目 364番17	14204	242	35° 19' 13"	139° 33' 19"	20090416 ～ 20090601	39.00	個人専用 住宅 (杭基礎構造)
こめまちいせき 米町遺跡	神奈川県鎌倉市 大町二丁目 2311番5	14204	245	35° 18' 52"	139° 33' 13"	20090623 ～ 20090831	53.60	個人専用 住宅 (深基礎)
でんがくずししゅうへんいせき 田楽辻子周辺遺跡	神奈川県鎌倉市 浄明寺二丁目 569番10	14204	33	35° 18' 10"	139° 33' 30"	20120614 ～ 20120726	60.00	個人専用 住宅 (地盤の表層改良)

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
たまなわじょうあと 玉縄城跡	城館跡	中世	溝、土坑、柱穴	かわらけ、国産陶磁器、 石製品、木製品	七曲坂に向かう谷戸 の入口部を塞ぐ形で 溝が掘られている。
うえずぎさだましていあと 上杉定正邸跡	城館跡	中世	道路状遺構、溝、 溝条遺構、囲炉裏、 土坑、柱穴	かわらけ、国産陶器、舶 載陶磁器、瓦、瓦質製品、 石製品、金属製品、木製 品、土師器等	
しんぜんこうじあと 新善光寺跡	都市	中世	土坑、柱穴	かわらけ、国産陶器、舶 載陶磁器、瓦、瓦質製品、 石製品、金属製品、木製 品	
わかみやおおじしゅうへんいせきぐん 若宮大路周辺遺跡群	都市	中世	井戸、溝、柱穴列、 土坑	かわらけ、国産陶器、舶 載陶磁器、木製品	13～15世紀代の南 北溝を検出。「小町 大路」前身の道路側 溝と考えられる。
こめまちいせき 米町遺跡	都市	中世	道路、溝、板壁建 物、土坑、柱穴	かわらけ、国産陶器、舶 載陶磁器、金属製品、石 製品、骨製品、木製品	簡素なつくりの板壁 建物を検出。中世町 屋地区の一端が垣間 見られた。
でんがくずししゅうへんいせき 田楽辻子周辺遺跡	屋敷跡	中世	掘立柱建物、井戸、 かわらけ溜まり、 土坑、柱穴	かわらけ、白かわらけ、 国産陶器、舶載陶磁器、 金属製品、石製品等	

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 30

平成 25 年度発掘調査報告

(第 2 分冊)

発行日 平成 26 年 3 月 31 日

編集・発行 鎌倉市教育委員会

印刷 芝浦エンジニアリング株式会社